THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第三十二年第一號　第三百卅九號

十年一月二十九日第三種郵便物認可
大正五年十二月廿五日印刷納本
大正六年一月一日發行（毎月一回一日發行）


理解力と記憶力
不幸なる腦神經病者は此二つを欠けり。
唯、『健腦丸』の常用者のみ理解力と記憶力を完全に増進せむ!!
島村醫學博士證明
島村博士證明
健腦丸
TRADE MARK
KENNOGWAN
腦神經病特効藥
特長
健腦丸を少量宛常に持薬とせば便通をよくし逆上を引下げ怖るべき中風卒中を豫防し記憶力を増進する効あり
主効
腦膜炎、搐搦、便秘
腦貧血、眩暈、頭痛
神經痛、卒中、健忘
腦充血、中風、耳鳴
藥價 四回分廿錢 半週四十錢 壹週七十錢 二週一圓卅錢 十週五圓
本舗 大阪 東京 丹平商會藥房
到る處の信用藥店にあり

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

トルストイ叢書

一冊の收むるところ、普通原稿紙にして四百五十枚前後となす。トルストイに關する書籍の刊行少なからざるも、内容の豐富にして定價の低廉なるは本叢書獨特なりと稱せらる。第一編より第三編に至るまで悉く初版賣切れ、增版出來せり。

■總洋布最上製美本
■紙數約三百二十頁
■定價一冊金七十錢
■送料一冊金八錢

第一編 **我が宗教** 生田長江譯

第二編 **イワン・イリイッチ死** (附)主人と下男□高架索の捕虜 福士幸二郎譯

第三編 **幼年少年** 江馬修譯

第四編

ハヂ・ムラート

相馬御風譯

□□□□□量に於て内容に於てトルストイ掉尾の大作と稱せらる丶本篇は譯出せられたり□□□□□…

「ハヂ・ムラート」はトルストイが遺稿の中に發見せられた小説で、其藝術的價値を以てすれば、遺稿中の随一と稱せられる。露西亞政府が高架索征服の事に從ひつゝありし當時に材を取り、トルストイ自身の高架索從軍時代の見聞に其の寫實的要素を得、回々教徒の一勇士ハヂ・ムラートを主人公として、戰爭の非理と亡状とを描き、戰爭によつて虐げらる丶人間の爲に哭泣の聲を擧げたるもの。妻と子とを救はんが爲に無殘の最後を遂げた主人公を通じて作者が視らせる戰爭觀は、何人をも強く〳〵うつものがあらう。露西亞の有力なる一批評家は曰く「ハヂ・ムラートが數多いトルストイの藝術的勞作の中でも、殊に傑ぐれたものゝ一である事は何等の誇張なしで言ふことが出來る……」と。蓋し本書こそはトルストイ掉尾の大作と言ふ可きであらう。譯は御風氏が嘗て例なき苦心の餘に成つたものである。

東京市牛込區矢來町中の丸 **新潮社** 電話番町二二二三番 振替東京一七二四二番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

最近文壇の二大名著

杉村楚人冠先生著 【大正名著文庫廿六編】

忽五版

弱者の為に

此書を小説といふもよし、事實譚といふもよし、論文といふも亦よし。小説と事實と論文と兼ね併せたる所に此書の特色と妙趣は存す。是れ高等新聞記事の特色と妙趣なり。著者文を屬すれども文士に非ず、論を行れども論客に非ず、只汲々として新聞記事の高上を思ふ一個の新聞記者としては慥に斯界に一頭地を抽くものあり。此の如き一種の『素人文藝』が廿世紀の文壇に必ず盛に流行し來るべきを思ひて恭しく此に大方文に志さすの士に此書を推薦す。

四六判特製美裝
紙數四百六十頁餘
定價壹圓卅錢
郵稅内地金八錢

大町桂月先生著 【大正名著文庫廿八編】

忽三版

杖の跡

出でたり〱桂月先生の杖の跡、尋常一樣の紀行文に非ず案内記に非ず架空の小説にもあらず。由來健筆と共に健脚を以て天下に鳴れる紀行文隨一の大家、二三年此方東京を中心として四方八方を踏破したる杖の跡は、やがて筆の跡、殊に一種天縱の奇傑、奇を衒はずして奇行に富み、滑稽百出して而かも卑俗ならず、遊記文壇に破天荒なるのみならず、先生の文章も亦新生面を開ける天下一品の珍作、一たび之を繙かば卷を措く能ざるべし。

四六判特製美裝
紙數四百頁全一冊
口繪挿畫百數十個
定價壹圓卅錢
郵稅内地金八錢

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局三六六六番 振替東京一七四四番

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京大學文科大學教授 文學博士 服部宇之吉
學習院教授 小柳司氣太
兩先生著

詳解漢和大字典

漢和辭書

體裁＝四六判形二千餘頁厚さ二寸四分秤量四百匁泰西辭典の新式に則り簡便にして最も實用に佳なり。

特色＝收むる所の漢字、熟語無慮七萬最新語は苟も漏さず、一切現代の需要を本位として選擇解釋す。

索引＝在來の部首索引の外訓引、五十音引及全畫引索引を附し、附錄の草書便覽と共に便利無比なり。

普及版壹萬部限り

▼特價金貳圓

（正價金貳圓五拾錢）

郵税 內地十六錢、臺樺卅五錢、鮮支四十五錢

既に或漢和字典を有する人も更に本書を備ふる必要あり

新たに漢和字典を求めんとする人は必ず本書に就かれよ

何よりも速に內容見本を請求して本書の眞價を檢し給へ

內容見本進呈

（往復葉書申込次第）（全國各書店に多數頒布しあり）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

界最後の勝者

漢字の廢止論や國字改良の呼聲はいかに盛でも今日は一場の夢想に止まる。現に國民が日用の文章から毎日の新聞紙を始め一切の現代國文は依然漢字漢語を基礎として居るのみか、新しい事物が社會に現はれる毎に漢語は愈々殖えて行くではないか。漢字を正しく讀み正しく記すことは國民が社會生活の第一要件であつて萬人の需要に適する常識的漢和辭典の何人にも必要なる事現時の如く急な場合はない。

本書は學識東西を兼ねた服部博士と篤學勵精、多年育英の經驗に富んだ小柳教授とが獨創の樣式の下に十數年前より稿を起し、爾來渾身の蘊蓄を傾け、常に社會の進歩と時勢の必要とに順應して絶えず推敲改作を怠らず、遂に此空前の包括的內容を有する新漢和字典を大成されたのである。隨つて最も早く着手して最も遲れて完成したゞけ、其間幾多工夫改善を行ふの餘裕なり、從來の辭書の長所を打つて一丸となし、別に飽く迄自家の創意を徹底する事が出來て茲に漢和字典革命時代の集大成ともいふべき模範的大字典を成就するのである。

要するに本書の如き完全具備せる漢和字典は獨り學者專門家のみに限らず日新の社會に處する人士の片時も缺くべからず、苟も日々の新聞紙の入る處にして本書の必要を感ぜぬ所はない。

速かに本書を利用する外困難なる漢字を征服する道なし

優先割引券壹萬枚發行

普及版壹萬部を限り壹部金壹圓九拾五錢の最低價にて購ひ得べき優先割引券を添附す——此の割引金額總計金五百圓也

但し本書發表以來好評湧くが如く、申込殺到して優先割引券附普及版忽にして盡きんとするの盛況也、諸君！躊躇して人後に落つる勿れ

發行所　東京神田　冨山房　振替五一〇　全國書店　賣捌

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新年光彩號六百頁

雄辯

地方の雄辯家

五十餘頁の大雄辯家月旦

▼光彩なき歐洲戰…長瀬鳳輔
▼諸家羅馬字觀…土岐哀果
▼鐵人と航海條令…松岡均平
▼日露獨同盟論…煙山學士

▼エルサスと獨乙…箕作博士
▼僕婢的精神…江原素六
▼建國精神淵源…加藤博士
▼悲慘の墺老帝…覆面俠劍

五分間演説募集

詳細本號

■雄辯と暗示力…加藤咄堂
■吾輩の雄辯經歷…松波博士
■雄辯家木下尚江…青木得三
■彌次團と戰つて…海老名彈正
■丙辰壇上活躍…谷本博士

▼白石の膽力…保科孝一
▼復活の春光…中村孝也
▼書生名物男…春秋樓
▼巖下水…笹川臨風
▼小栗上野…平井晩村
▼斷頭臺…兒玉花外
▼蛇の傳說…黑頭巾

此他數十篇龍躍り雲湧く!!

聖日蓮雄辯觀

五十餘頁の大論文

定價 本號限り 六十錢・郵稅三錢 東京本鄉 大日本雄辯會 振替東京三九三〇

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す


營業品概目
○懐中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帯品
○貴金属美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋 一一〇三 一一〇四
振替口座 七八〇七

中央公論第卅二年新年號目次

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學士 阿部次郎著

哲學叢書 第九編

美學

新刊

▲四六判四百頁
▲定價一圓廿錢送料八錢

近來哲學的諸學科に關する著述は甚だ多きを加へて來たが、獨り美學に關する著述は極めて尠く篤學者の不便實に甚しかつた。然るに本書は最新の學説に基いて、最も平明に最も根本的に而も亦極めて組織的に斯學の大觀を與へたもので、その心理的哲學的基礎の徹底せると、美術文藝の實際的理解に資する所多きとは、本書の特色とするところである、從來讀むべき美學に飢ゑて居た人達は本書によつて始めて其渴を癒されるであらう。

神學博士 トマス・リンゼー著
法學士 藤井武譯

▲四六版四百頁
▲定價一圓三十錢送料内地八錢

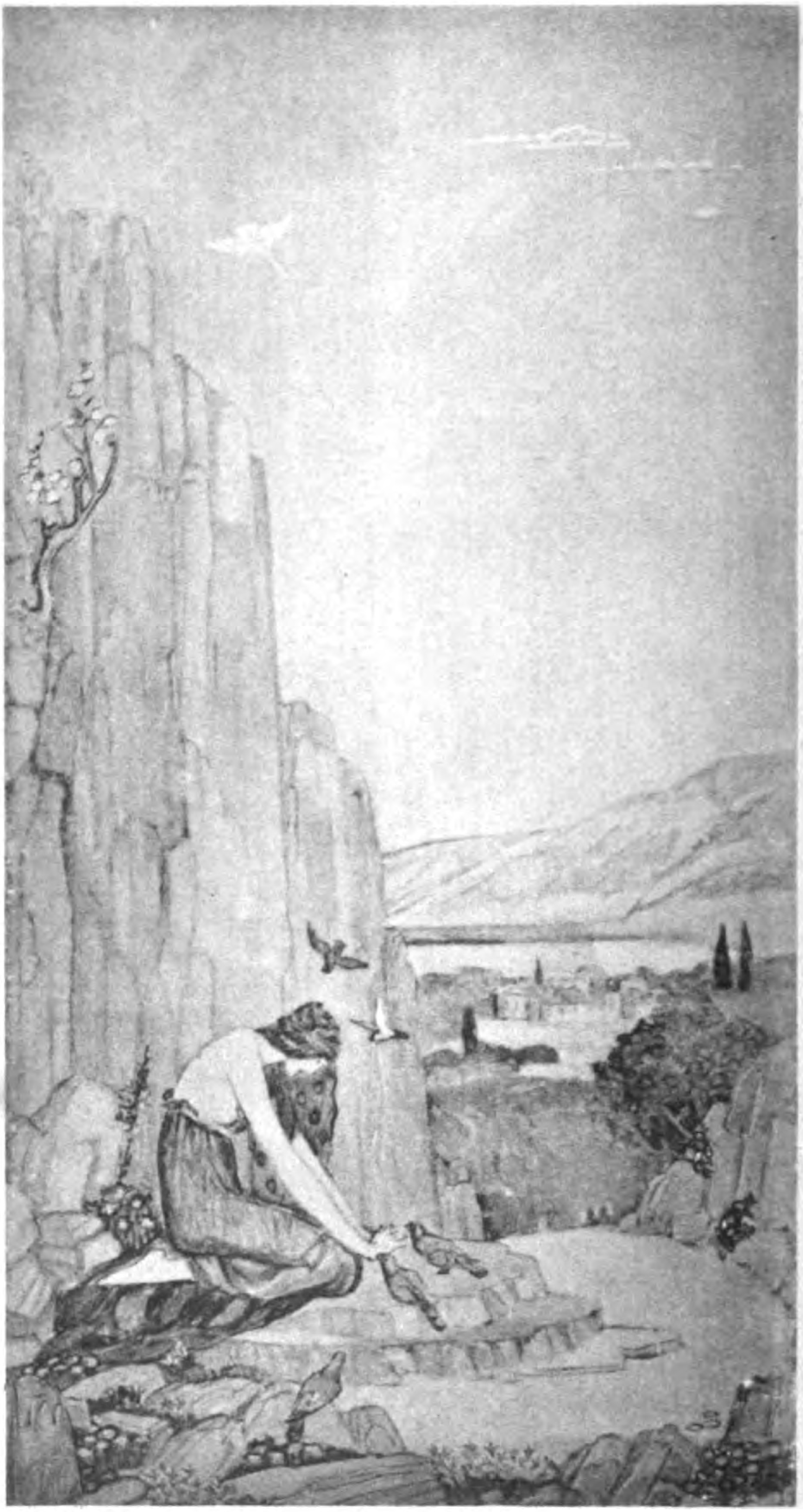
新刊

ルーテルの生涯及其事業

ルーテルは世界の産出したる最大偉人の一人なり。其生涯は波瀾萬疊獨逸の一寒村に鑛夫の息と生れてより宗教改革の大英雄として世を去る迄人をして應接に遑なからしむ。或は内的苦闘の末信仰の大歡喜を獲得する深刻なる經驗あり、或は單身法王及び皇帝と戰ふ壯烈なる活劇あり、或は妻子團欒且歌ひ且樂む優雅なる家庭生活あり、著者は有名なる宗教改革史の泰斗、本書は當時の社會生活の描寫と偉人の飾らざる眞面目の發露とを以て最も異彩を放つ。

發行所 東京神田南神保町 岩波書店 電話本局五四二〇番 振替東京二六二四〇番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



"CUPID AND PSYCHE"
WATER-COLOUR PAINTING ON
VELLUM BY JESSIE BAYES.

PRINTED BY YABUKI-KOSHODO.

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

日とのみ競ふ

マツダランプ



五拾燭光迄長型壹個金五拾錢

東京電氣株式會社

神奈川縣川崎

電話川崎五〇番一〇一番一〇二番一〇三番一〇四番

販賣部

東京出張所　東京市京橋區銀座尾張町一丁目　電話新橋一九三・三二一二　長一〇五九

橫濱出張所　橫濱市伊勢佐木町一丁目　電話長濱一七一一

大阪出張所　大阪市西[illegible]ノ筋通一丁目五番館　電話長西一〇九五

御照會の節は此點線を切取りお送り下されば綺麗な說明書を差上ます

御住所

御姓名

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論



新年號
第卅二年第一號
第三百三十九號

肉食人種と菜食人種の異同を論じて東西兩文明の調和を說く

永井柳太郎

一、肉食人種と菜食人種

社會學者ゴビノーは人種に先天的區別あるを認めたれども、過去數千年間に於ける雜居的生活の結果、遂に其先天的區別を發見する能はざる程に混成されたるを論じ、「我等は學說上に於て人類を種別し得ざるにあらずと雖も、事實上に於ては各民族の血液の混成したる唯一種類の人類あるを見るのみ」と

云つた。蓋し從來人種上の區別を試みたる學者は少くないが、之に成功した者は稀有である。アリストートルは分類の元祖とも云ふべき學者であるが、然かも彼は尙人類を男女の兩性に區別する事さへも學術的ではないと云つた。固より生理上に於ても、又心理上に於ても、性の特徴は認め得ざるにあらねども、尙且つ男性にして女性を兼ね、女性にして男性に類する者が少くないのみならず、如斯き區別は文明の系統の區別と沒交渉である。プットナム・ウイール氏の如きは全人類を四色に分類し、白色人種、黃色人種、褐色人種、黑色人種として居るが、斯かる分類も亦頗る淺薄にして、一皮剝げば何れも同じ血肉を有し、何れも同じ白骨となるのである。蓋し皮膚の色の相違は多く氣候と境遇とに依るのであつて、同じくアリアン人種と云ふも歐羅巴に移住した者は白色となり、印度に移住した者は黑色となつた。又同じ匈奴に就て見るも歐羅巴に入つて永住した者は白色の匈牙利人となり、支那に留まつて永住した者は黃色の支那人となつた。或學者は宗敎に依りて全人類を區別すと雖ども、宗敎を以て人類を區別することの難解なるは、皮膚の色を以て人類を區別するの難解なるに比して毫も讓らないと思ふ。宗敎の種類は千差萬別であるのみならず、各々其敎義の解釋に從つて無數の宗派を爲すが故に、單にキリスト敎徒とか、マホメット敎徒とか、ユダヤ敎徒とか又佛敎徒とか云ふ如き、簡單なる言葉を以て全人類を種別することは不可能である。又或學者は言語學上より人種の區別を試むと雖ども、之も甚だ不正確である。假へば支那人の如きは多數の異民族の混成した者であるが、其言語は悉く漢文字に同化せられたから之を言語學上の考證から見れば同一民族である。之に反し黑龍江流域に散在せるツングス族と南洋マレー族とは同一人種なりと信ずべき證據あるに拘らず、言語學上のみより推論すれば異人種のやうでもある。玆に於て獨逸のヒユッペ・シユライデンの如きは全人類を大別して"Naturvölker"即ち自然民族と"Kulturvölker"

即ち文化民族との二種とした。即ち一定の文明を有し、爲めに自然に制せられずして能く自然を制するの特性を有する者を文化民族と稱し、自然を制する能はずして常に自然に制せらるる者を自然民族と云ふと區別して居るが、然し如斯き區別も亦要するに程度の差にして種類の別でない。朦昧野蠻の人民が轟々たる雷鳴を聞きて神秘なる威力を感ずるは、是れ軈て宗教心の發端であり、山野に起臥して草木を食とするは、是れ軈て利用厚生の起原である。自然を制すと言ひ、自然に制せらるゝと云ふも、畢竟は氣候と境遇との刺激に應じて決するので、溫帶人と雖ども熱帶地方に生活すること久しければ自ら熱帶人の如く懶惰となり、熱帶人と雖ども永く溫帶地方に生活したる者は自ら溫帶人の如く勞作するの習慣を生ずる。如斯きが故に一定の標準を立てゝ全人類を區別し、狹隘なる方式の中に人種性若しくは民族性と云ふが如きものを限定せんとすることは容易でない。故にビスマークの如きは斯かる努力を冷笑し、「全世界は獨逸帝國の朋友と獨逸帝國の敵とに二分し得べきのみ。」と云つて居る。

然かし或人種に比較的共通し、他の人類に比較的存在せざる特性を發見することは、必らずしも不可能に非ずと思はれる。英國の遺傳學者ゴールタンは寫眞術を應用して種族の類型を發見せん事に努めた。彼は一種族の容貌の特徵を發見するに際しては、出來得るだけ多數の寫眞を撮る。假へば百枚の英人、百枚の佛人、又は百枚の獨逸人の寫眞をそれ〳〵並べて見れば、其國民に特有なる容貌が自から發見せらるゝと云ふのであるが、此等の國民は總て共通の祖先を有し、其血液を同うして居るのみならず、其後分離して別々の國民的生活を營むに至つた後と雖ども、互に交通し、互に雜婚し、其肉體的特徵に至つては、比較的共通して居るのであるから、果して如斯き方法に依つて此等の國民の容貌に於ける特徵を發見し得べきや否やを知らぬ。けれども人種性とか國民性とか云ふものに至つては、主として後天的

のものであるから、縦ひ共通の祖先を有し、其血液を同うするも、地理的境遇や歷史的變遷に應じて或程度の特徵を有することは疑ひないと思ふ。故ジョセフ・チエンバレンは曾てバーミンガム市に於ける演說中次の如き事を云つた。

「嘗て佛蘭西に凶作があつて人民が饑餓に悩み、當時の政治家フーロンに訴へて其救濟を求めた。所が彼れは平然として曰く「汝等食ふもの無ければ草を食へ」と。之を聽いた佛蘭西人は激昂する事甚しく、終にフーロンを捕へて樹に掛け、其口に草を食ましめて、とう／＼嬲殺しにして了つたと云ふ。然るに英國に於ても、千八百四十年の頃同じく饑饉のため英國民は非常な困窮に陷つた。是に於てか人民はノルフオーク公に訴へて救濟を求めた。さうすると彼も亦平然として「汝等食ふべき物無くんば水にカレー粉を投じて飲むべし」と惡罵したに拘らず、英國人はノルフオーク公を樹に掛けて、其口にカレー粉を投ずるが如き事は爲さなかつたのである。吾等は佛蘭人の如く極端なる感情家たることを欲せざるも、亦ノルフオーク公に惡罵せられて平然たりし英國人の如く極端なる遲鈍家たることは、決して進歩のため喜ぶべき事にあらずと信ずる。」

と。蓋し英國は氣候寒冷にして濕氣多く、從つて感覺の餘りに鋭敏なる者は、自然陶汰の結果として消滅し、自ら性質の堅固にして其氣候と能く調和し得べき粘液性の者が繁殖したのであるから、之を佛蘭西人の如く光線の充滿せる自然の中に生れ出で、敢て強烈ならざる印象に對しても直ちに反應するに慣れたる國民に比すれば、其感覺の遲鈍なるは當然である。如斯く人種性又は國民性なるものは、先天的と云ふよりは寧ろ後天的に、或は其氣候の刺激のため、或は其周圍の事情のため、獨特の傾向を生じ別異の色彩を放つのであるが、吾等は今之と同樣の理由に依り全羅巴人を通じて一大特性あることを發見

したのである。而して其特性たるや菜食人種たる日本人にして初めて發見し得べき特性であつて、自身歐羅巴に生まれ、歐羅巴に成長したる歐羅巴の學者の容易に氣付かざる歐羅巴人共通の特性である。然らば其特性とは如何なるものぞと云ふに、そは彼等が祖先以來繼續したる肉食的生活に基く一大特性なのである。

二、歐洲文明の搖籃

熟々歴史を大觀するに、世界に三個の文明の潮流がある樣である。第一は支那文明、第二は印度文明、第三は歐羅巴文明と云ひ得るのであるが、大體から見ると歐羅巴文明は其根本に於て、印度文明と同じくアリアン人種の文明である。固より其發達の途中或はセミチック人種の文明や或はハミチック人種の文明より多大の影響を蒙つたのみならず、其風土の全然相異りしため、印度文明とは全く異つた色彩を放つたのであるが、然かし其根本がアリアン人種の文明であることは疑ひなき事實である。印度文明はアリアン人種の文明が熱帶地方に於て獨特の發達を遂げたものであつて、佛教の傳播と共に支那に入つて其文明に多大の影響を與へて居るけれども、歐羅巴の文明とは却つて顯著なる關係を持たなかつたやうである。支那文明の起原に就いては、學者の間に種々の異説があるが、兎に角其起原はセミチック人種若しくはハミチック人種の文明と共通して居るものがあるらしい。又久しく印度文明にも接觸して居たが、然かし孰れの文明にも同化せられず、自ら獨特の文明を成して居る。從つてアリアン文明の中心は、即ち今日の歐羅巴文明に存するのであつて、希臘民族、ラテン民族、チユウトン民族、スラヴ民族及びケルト民族の文明がそれである。

アリアン人種の故郷に關しては學者の間に種々の議論があるけれども、中央アジアに於けるバクトリ

ア地方ならんとは多數の認むる所である。彼等は歷史以前の遙遠なる時代に於て、人口繁殖のためか、或は外敵の襲來に餘儀なくされた爲めか、大移動を始めたのであつた。而して其一部は西方裏海の南岸より、アルメニア及び小亞細亞の地を經て歐羅巴に入り、他の一部は南方ヒシズークーシユ山脈を越えてインダス河を渡り、パンジヤブより天竺半島に南下して印度の原始民族となり、更に他の一部はバクトリアの地からサリフイス山を越えて南に入り、ペルシア民族となつた。而して此等アリアン人種は遊牧の人民であつて、最初全く農業を知らなかつたらしい。何となれば初期のアリアン語の中に「耕」と云ふ字もなく、又「秋」と云ふ文字もない。彼等は其氣候を單に"Sama"即ち夏と"Hima"即ち冬とに大別して居た。凡そ農業に於ては春と秋とか云ふ時期が最も大切で、即ち種蒔きと刈入れの季節である。然るに其農業に取つて最も注意すべき時期を言表はすべき何等の言葉をも有つて居らなかつたのは、即ち彼等の土地が比較的熱帶に屬し、年中唯其家畜を放牧するを業としたるが故に、時季の區分に就いては殆んど考へなかつた事が知られる。然らば此の「秋」と云ふ言葉がアリアン人種に屬する民族間に何時から使用せられたかと云ふに、實に彼等が歐羅巴に移住して、初めて農業を營むに至つてからの事である。故にラテン語に於ては之を"Autumnus"と云ひ「實る」と云ふ意味を表し、獨逸語にては"Herbst"と云ひ、「收穫」と同意義である。或學者の中にはサンスクリット語に"ajras"と云ふ字あり、ギリシヤ語に"ἀγρός"と云ふ字あり、ラテン語には"ager"と云ふ字あり、ゴス語に"akrs"と云ふ字あり、又獨逸語に"acker"と云ふ字あり、此等は皆耕地を意味するのであるから古代からアリアン人種も農業を營んだに相違ないと云つて居るが、之等の語は最初何れも牧場を意味したのである事は、多くの言語學者の證明する所である。即ち"aj"（アヂ）と云ふ言葉はサンスクリットにて「追ふ」と云ふ事であつて、"ajras"（アヂラス）と云ふのは

「逐ひ廻す土地」と云ふことで牧場に當る。今日でも獨逸語で何をやつて居るかと云ふ時に"Was treibst du?"と云ひ、ラテン語では"Quid agis"と云ふ。即ち何れも「何を逐ふて、居るか。」と云ふ意味で、其祖先以來用ひ慣れた言葉であるに相違ない。且つ彼等は遊牧の生活を爲て居たが爲に、古代のアリアン人種に屬する民族間に於ては土地の私有と云ふ觀念が無かつた。即ち總べての土地は共有となつて居たのであるが、獨逸民族やスラヴ民族は農業を營むに至つた後も、尙久しく此制度を維持して居た、ローマ人は紀元前七百五十年代から土地の私有を認めた樣であるが、然も尙數世紀の間牧場は之を共有として、私有の土地を"ager privatus"と稱したるに對し、其共有の牧場は"ager publicus"と稱して居た。蓋し牧畜はなるべく大なる土地を必要とする。互に土地を狹隘なる私有地に區分して、各自の所有權を爭ふが如きは相互の利益にあらざるが故に、彼等が其土地を共有をしたのは誠に自然の勢であつた。而して彼等は其共有の土地に互に放牧するに際して、其混雜の餘り、互に自己又は自己の村落の家畜を紛失せんことを慮り、凡ての家畜に對し其脊に燒印を刻するか、或は文字を塗り附けたらしい。イエーリングは其著「アリアン人種進化史」に於て、アリアン人種が其遊牧時代に其家畜の毛皮に所有者の記號を書いたことが、アリアン人種の最初の文字であつたと云つて居る。サンスクリット語では色を塗ると云ふ語の語根は"Li"であるさうで、今日文學を"Literature"と云ふは其起原を玆に發すると云ふ。

斯く放牧の生活を營むに就いては、農業を營むよりも更に廣大なる土地を必要とするが故、人口の增加と共に土地を要すること頗る多く、到底一定の場所に全部落が永住すること不可能となり、彼等は萬難を排し新らしき土地を望んで移住し、それからそれへと歐羅巴の大陸を彷徨したらしく思はれる。諸家の說を綜合するに、アリアン人種が大移動を始めたる當時に於ては、已に其根本種族は數百萬を算し

たるべしと云ふ。以て彼等が如何に恐るべき勢を以て歐羅巴の天地に瀰漫したるかを想像する事が出來る。而して此の移動しつゝあるアリアン人は、或は海岸なる肥沃の平原に於て、或は奇嶇峻峭たる山間の森林に割據して、各々部落を建て、各々酋長を仰ぎ、以て已に政治的結合を初めたのであつた。

三、世界の「穢多」

如斯くにして次第に歐洲の天地に移動したるアリアン人種は、或は其氣候の影響に依り、或は其土地の形勢に依り、或は其境遇の差異に依りて、各々獨特の發達を遂げたのである。例へば大河の流域なる大平原に出でたる者は、牧畜に從事すると共に、又自ら農業を營むに至り、海岸に沿ふて移住したる者は、早く他人種の文明に接觸して獨特の發達を遂げ、森林の中に生活したる者は自ら其進步に於て他民族に後れ、他の蠻族に征服せられたる者は、新たに其蠻族の血液を加へ、如斯にして孰れも次第に獨特の文明を生ずるに至つた。かのギリシャ民族が他の民族に率先して早くより絢爛たる文明を生じたるは、偶然に狹隘なる半島に出で、人口の增力と共に次第に放牧の生活に困難を感じ、其地理上早くより往來したるセミチック人種及びハミチック人種の生活に倣ひ、放牧以外の種々なる產業を研究したが故であつた。之に反してチユートン民族やスラヴ民族は、北歐の森林に生活し、地中海を去ること甚だ遠きが故、地中海沿岸に發達したる古代文明に直接觸るゝ機會を得ず、ラテン民族やケルト民族を媒介者として僅かに其一端を吸收するに過ぎなかつたが故、其人文の發達の遲々たりしは寧ろ當然であると云はざるを得ない。以上の如く各民族は其境遇に依りて多少異つた發達を遂ぐるに至つたが、然かも其生活の根本とする所は同じく遊牧である。而して人口增加し生活困難となるか、又敵の襲擊を受くれば、其全部なり、又一部なりが遊牧しつゝ次第に他に移動したのであるから、その遊牧人種たる點に於いてはギリシ

ア民族も、イタリア民族も、ケルト民族も、チユートン民族も、又スラヴ民族も共通である。この結果としては彼等は自ら禽獸を利用し、主として禽獸に依て生活するの風習を有した。現に今日の歐羅巴人が肉食を以て常食となし、獸毛を織つて衣服となし、禽獸の羽毛を拔き取つて其帽を飾り、皮を剝ぎて其足に穿ち、又家屋の內部に於ても、恰かも我が臺灣の生蕃が人間の生首を以つて其家の裝飾となすが如く、鹿、牛、馬、犀等の如き獸類の首や、或は可憐なる禽獸の剝製を以て其室の內外を裝飾しつゝあるが如き、實に皆之れ遊牧時代の遺風である。彼等の身體が巨大にして、我等に比すれば非凡の精力を有し、幼時より狩獵を好み又旅行を樂しむが如きも、其原因は其祖先の遊牧時代に養成したる遺傳性に存するのである。彼等が如何なる他の人種よりも探險又は拓殖の業に長じ、殆んど天下を敵ふの慨あるも亦偶然でない。一寸考へれば人間の生活とは直接の關係なき南北極の如き地方に迄普ねく足跡を印して居る。故エルンスト・フオン・ハルレ博士が其著『植民史上の一大時機』に於て述べた所に依ると、一八五〇年より一八九〇年に至る約半世紀間に於て、歐羅巴人の歐羅巴以外に移住したる者合せて二千五百萬人を算すると云ふことであるが、之等の移民の大多數は米大陸及び濠洲へ移住し、而して其多數は今尙ほ牧畜を業として生活して居る。實にアリアン人種は歷史以前より初めたる遊牧的移動を今尙ほ繼續し、當に全地球の上に發展して全獸類の皮を剝ぎ其肉を食はずんば止まざらんとする勢である。試みに次の統計を見よ。アリアン人種の生活が今尙如何に動物に負ふ所多きかは明白である。

國名	調査年次	馬	驢馬	牛	豚	羊	山羊
獨逸	一九一二年	四、五二三、〇五九	一三、一四七	二〇、一八二、〇二一	二一、九二三、七〇七	五、八〇三、四四五	三、四一〇、三九六

佛蘭西	一九一二年	五、三三三、一四〇	五五五、〇七〇	一四、七〇五、九〇〇	六、九〇五、七五〇	一六、四六七、七〇〇	一、四〇八、五三〇
大不列顛	一九一三年	一、四〇二、一四六	—	五、七一六、九一四	二、一〇三、一〇三	一七、一三〇、二八六	—
愛蘭	一九一三年	六二四、四八三	二七三、六七七	四、九三三、六三五	一、〇六〇、三六〇	三、六二〇、七二四	二四六、三四八
伊太利	一九〇八年	九五五、八七八	一、三三八、〇六〇	六、一九八、九六一	二、五〇七、七九八	一一、一六二、九二六	二、七一四、八七八
墺地利	一九一〇年	一、八〇二、八四八	七三、四〇八	九、一六〇、〇〇九	六、四三二、〇八〇	二、四二八、一〇二	一、二五六、七七八
歐洲露西亞（北部高加索を含む）	一九一三年	二四、五二四、八三〇	—	三七、一六五、三五五	一三、四八六、七五五	四三、七八二、九五一	
西班牙	一九一一年	五四六、〇三五	一、七四一、四六六	—	二、四七二、四一六	一五、七三五、八八三	三、三六九、六三四
亞爾然丁	一九一一年	八、八九四、〇三二	八五四、一二八	二八、七八六、一六八	二、九〇〇、〇〇〇	八〇、四〇一、四八六	四、三〇一、九五五
智利	一九一二年	四三〇、七八六	七〇、三三六	—	一六五、六七三	四、一六八、五七三	二七五、二二八
加奈太	一九一三年	二、八六六、〇〇八	—	六、六五六、一三一	三、四四八、五三六	二、一二八、五三一	—
北米合衆國	一九一三年	二〇、五六七、〇〇〇	四、四九一、六九八	五六、五二七、〇〇〇	六一、一七八、〇〇〇	五七、四三三、〇〇〇	二、九一五、一二三
英領印度	一九一二―一三年	一、五三九、九四五	一、四四六、八三七	一二一、七一四、一九〇	—	二三、八四八、〇四二	二八、五五四、八五二
新西蘭	一九一〇―一二年	四〇四、二八四	四〇四	二、〇二〇、一七一	三四八、七五四	二四、一九一、八一〇	六、一一九
ニユウサウスウエールス	一九一二年	七一六、四五七	二〇一	三、〇四〇、八三四	二九五、六九三	三九、〇四四、五〇二	五一、六五三
クキンスランド	一九一二年	六七四、五七三	七四三	五、二一〇、八九一	一四五、六九五	二〇、三一〇、〇三六	一五五、〇一〇
南濠洲	一九一二年	二七六、五五九	二、五五三	三八五、四一八	六九、八三三	五、四八一、四八九	一五、七二八
ヴヰクトリア	一九一三年	五三〇、四九四	—	一、五〇八、〇八九	二四〇、〇七三	一一、八九二、三三四	六、二二七
アルジール	一九一一年	二三六、七六四	四七一、七九九	一、一二五、九五三	一一〇、〇一三	八、五三八、六一〇	五、八六一、八四七
南阿聯邦國	一九一一年	七一九、四二四	四三〇、六四一	五、七九六、九四九	一、〇八一、六〇〇	三〇、六五六、六五九	二、七六三、九七九

彼等は如斯く多數の獸類の肉を屠り、其皮を剝ぎて生活しつゝあるのであるが、若し獸類の皮を剝ぎ其肉を屠るのが穢多の業であるとすれば、彼等歐羅巴の諸民族の如きは常に世界の一大穢多族であると云はねばならぬ。

四、白皙の猛獸

唯物論者フォイエルバッハは人間の理性を否認し、"Der mensch ist was er isst" 即ち「人は其食物に外ならず。」と云ふた。吾等は如斯き極端なる言葉に與する者でないが、然かし食物が或程度迄之を食ふ者の精神に影響することは爭ふべからざる事實である。夫の馬とか牛とか鹿と云ふ如き菜食獸は其性質比較的溫順であるに反し、獅子とか虎とか狼と云ふ如き肉食獸は其性質猛烈にして容易に馴らし難きは、人の能く知る所であるが、人間も亦其如く、歷史なき時代より常に遊牧を業とし、肉食に依りて生活したる歐羅巴の諸民族が、野獸の如き猛烈なる感情を有し、彪虎の如き戰鬪性を有する事は、自然の數と云はねばならぬ。佛蘭西の哲學者アルフレッド・エミール・フィエは、其著「歐洲各國民の心性」に於て獨逸人の慓悍にして鬪爭を好むを批難し、「獨逸史中の英雄は勇氣を鼓舞するが爲めに人血を啜り、又同胞の心臟を皿に盛るを憚らざるなり。」と云ふて居るが、如斯きは啻に獨逸人のみの特性にあらずして、實は歐羅巴の諸民族に共通の特性である。現に佛蘭西人自身の歷史を見るも、其頁の多數は殘忍なる虐殺の鮮血に塗れて居る。ユーゲノッドに對する迫害は遂にセント・バーソロミューの夜の大虐殺となり、巴里の街路に横はる死屍のみを以ても一萬を算したと云ふではないか。佛蘭西革命に際してもギヨチンに命を殞した者はルイ十六世以下數萬の多數に及んだではないか。固より斯かる猛烈なる感情は數百年に亙るクリスト教の感化に依り、或程度まで變質し、平素は極めて靜肅なる狀態に在りと雖ども、何か外部より强烈なる刺戟を與へらるゝや、其野獸に似たる本性は忽ち猛然として發現するのである。社會學者ルボンが「人間は群集となれば其原始的精神に返るものなり。」と云へる如く、何等か激昂すべき事件に遭遇せば、其内心に於けるアリアン人種の原始的性質が直ちに反應し、驚くべき勢を以て發作するの

である。從て歐洲人は大體に於て、其敵に對して頗る殘酷であり、又直ちに革命的暴動に走り易き傾向を有する。故イー・ゼー・ペーン氏は其著「歐洲植民史（ユーロピアン・コロニース）」に於て西班牙人の土人虐待に就いて次の如き事實を語る。

「西班牙人は約九十年間全く亞米利加の土人を征服し、之を奴隷となしたるが、彼等の土人を使役するや、其肉體の强弱を問はずして一樣に之を强制し、若し少しにても抵抗し、又は不平を唱ふる者あらんか、直ちに之を殺戮したり。斯如くにして西班牙人の横暴に斃れたる者甚だ多く、或者は亞米利加の土人にして五十年間に殺戮せられたる者四千萬を下らずと云ひ、之を最初に見積りたる者も尚且つ一千萬を算す。雖然恐らくは前者の計算を以て事實に近しとせん。西印度諸島の如きは、曾て約六百萬の土人を有したること明白なり。雖然今や殆んど全滅したるが如く、之をハイチ島のみに就て見るも、土人の數は五十年間に約一百萬より僅々二百に減じたり。此の缺乏を補ふべく、西班牙人は周圍の諸島より盛んに土人を誘拐したるが、殊に著しかりしはバハマ諸島なりき。ジャメイカ島に至ては西班牙が一滴の流血を見ずして征服したる所なりと稱せらるゝに拘らず、英人が代つて之を占領したる頃既に土人の種族は根絶し居たり。僧正ラス・カサスの言に依れば、かのコルテスの墨耳其征服に於ても亦殆んど四百萬の土人を殺戮したるが如し。如斯き殘忍なる行爲は到る所に繰返されたるが、其他の歐洲植民國民に在ても、此種の經驗を有せざるは皆無なり。實に歐洲人の其植民地の土人に對する歷史は赤面せずして讀むこと能はず。」

と、以て其殘忍性の如何に强烈なるかを知るに足る。又英國の如きは政治思想の發達せる點に於て世界に冠絶し、憲政の運用は他に比儔を見ずと誇るに拘らず、總選擧に際しては動もすれば革命の如き騷動を見るのである。現に一九一〇年に於ける總選擧に於ても、ロイド・ジョオジ氏の選擧區なるウエールスのカーナボンに於ては、其土地の地主等が命令的に小作人をして保守黨の候補者に投票せしめんとしたるに激昂し、多數の自由黨員及び人民は殆んど革命に等しき暴動を起し、政府は非常鎭壓令を布きて、僅かに之を鎭壓するを得た。試みに當時のカーナボン新聞の記事を拔萃する。

子供は泣き叫びて逃げ迷ひ、老人は地上に投ち倒されぬ。猛り狂へる群集は今しも、其傍を通過せんとする小馬車を取圍み、車體を破壞すると共に車上の紳士を墜落したり。警察の巡査も暴徒の襲擊を被り、爲めに官帽は奪はれ官服は裂かれたり。暴徒は夜半過ぐる頃より保守黨の候補者なるヴンセント氏の親友なるロイド、カーター氏の邸宅に押寄せ、氏が永らく病褥に在りて目下危篤に迫れるにも拘らず、其門内に闖入して諸種の暴行を逞ふしぬ。それより彼等は更に轉じて保守黨の選擧事務所を襲ひ、其委員室を破壞し、警官の發砲に會ひて僅かに鎭靜したり。」

と。又以て其暴狀の如何を推察する事が出來やう。余が在英中にも此種の暴動は屢々あつた。一九〇九年四月グラスゴーに於てケルテック倶樂部と云ふフットボールの團體とランガース倶樂部と云ふフットボールの團體とが蘇格蘭の名譽賞杯を爭ふて競技したが、當時この有名なる二團體の競技を觀んとて集りし者無慮七萬と號せられた。然るに豫定の番組を終へても勝敗決せず、觀客は委員に番組を更めて勝敗を決せんことを請求したのであつた。然るに委員は之に同意せずして散會を宣告したので、茲に群衆の不平は一時に爆發し、激昂の餘り委員の本部に押寄せ、石を投じナイフを振りて亂暴し、然かも尙慊らずして建物に火を放ち之を燒き拂ふたのである。之がため多數の死傷者を出し、警官の死傷者のみにても約六十を算した。

加ふるに彼等の敵に對するや、唯に殘忍なるのみならず、又執拗にして、一度戰端を開けば容易に干戈を收めず、かの十字軍の戰爭の如きは實に前後八回、約百八十年の久しきに亙つたのである。其他或は百年戰爭と云ひ、或は三十年戰爭と云ひ、或は七年戰爭と云ふ如き、其强烈なる敵意と執拗なる復讐心とは輙すく妥協を許さぬのである。今度の歐洲戰爭の如きも、當初多數の日本人が想像したるとは大に異なり、互に殘忍なる殺戮を交換し、又其敵を滅亡に至る迄擊たずんば斷じて止まざらんとする勢である。如斯き猛烈なる野獸性の人種であるから、彼等が國際的生存競爭に臨めば、直ちに帝國主義者と

なり、階級的生存競爭に遭遇すれば、直ちにサンヂカリズムの如きを產する、又怪むを須ゐない。

五、一夫一婦の起原

歐羅巴の諸民族の感情の猛烈なる事は既述の如くであるが、之に準じて性慾も亦頗る强烈である。曾て日本に遊んだ英人が其旅行記に次のやうな事を書いた。曰く「日本の婦人は誠に不思議なる性質を有す。我國に於て浴室に男子一人在る時、過て下女が其戶を開き男子の裸體を見たる場合、下女の態度は恐らく二あるのみ。即ち驚き叫んで逃げ出すか、戶を閉じ背に媚を凝らして入り來るか、二者の中孰れかに出づべし。然るに日本の下女は平然として男子の浴室に入り來り、平然として其脊を洗ひ、又平然として出で去れり」と。凡そ物は問ひに落ちずして語るに落つ。斯かる記事は偶々彼等の性慾が如何に强烈なるかを自白するものである。彼等は單に浴室のみに止まらず、普通の室に於ても男女唯二人席を同うして、果して過なきを得るや否やは疑問である。故に彼等の間に於ては、若し婦人一人の室へ男子が入るか、又男子一人の室を婦人が訪ふ時は、必ず入口の戶を開放するを紳士淑女の風習となす。英國にては下女は主婦の使用するものなるが故に、苟くも紳士たる者は、縱し主人と雖ども、主婦を通ずるに非んば、下女に命令すべからずと云ふ風習があるが、如斯風習も亦主婦の嫉妬心より出でたる警戒に相違あるまい。一體日本人は此點に於て頗る淡白で、挨拶するにも三四尺を距て、互に頭を下げ、互に微笑むのみを以て滿足するのであるが、彼等は握手し、其肉に觸れなければ滿足が出來ない。日本に於ては男女が握手する時は、相思の情當に燃ゆる時であるが、如斯き場合に彼等は接吻しなければ已まんのである。如斯く性慾に於て甚だ强烈なるが故、其性慾に關する犯罪の如きも、實に我等の想像し能はざるが如きものがあるけれども、それは此處に詳述するを省く。

或者は彼等が古代より一夫一婦の美風を存したるを指摘し、其兩性間に於ける風紀の嚴肅を誇ると雖ども、それは事實でない。如何にも歐羅巴の諸民族は早くより一夫一婦の制度を採用した。然かし其一夫一婦の制度なるものは、一定の倫理觀より起りしに非ずして、全く移動に伴ふ生活上の必要から起つたのである。故に一夫一婦の制度なるものは、アリアン人種の最初からの制度ではなく、彼等が歐羅巴に向つて移動を始めた後に起つた制度である。彼等が移動を始めた當時に於ては尙未だ一夫多妻を不正とせざりしのみならず、移動後に於ても酋長其他の有力者は一夫多妻を實行して居たのである。然しながら移動を繼續すると共に食料の缺乏を告げ、一人の男子が數人の妻を伴ふと云ふが如き贅澤なる生活を維持することが出來なくなつた。殊に其移動に際して各部落は共產的生活を營んで居たのであるから一人でも人數を增加することは、其部落の養育費の增加を意味したのである。玆に於てか各部落は其生活の必要上より一人の男子が移動に際して携帶し得べき婦人を一人に制限した。之が一夫一婦制の起原である。故に歐羅巴の諸民族間に於ける一夫一婦の制度の起原は、道德的でなく、全く經濟的あつた。

更に離婚を批難する習慣も亦アリアン人種に負ふ所少くない。元來セミチック人種は離婚に就いては頗る寬大であつた。舊約書には男子が何時でも、其理由を說明せずして、其妻に離緣狀を與ふるの自由を認めて居る。マホメット教の經典にも亦之に類する男子の離婚權を認めて居る。然るにアリアン人種の歐羅巴に移住したる者は、孰れも離婚を批難して容易に之を許可せざる習慣を造つた。然かし此習慣も其起原は、一夫一婦の制度の起原と等しく、移動に伴ふ必要からであつた。蓋しアリアン人種が移動するに際して一夫一婦を强制するとしても、若し途中で男子が其妻を嫌ひて放棄するが如き事あらんか、其棄てられたる女子は途中にて保護者を失ひ、遂に餓死するの外なきに至るであらう。爰に於てか女子

は安心して男子に從ひ、長途の移動を共にせんが爲めに、先づ如何なる事情ありとも男子は其妻とした る女子を故なく移動の途中に於て放棄する事無き保證を得るの必要があつた。而して其保證を與へない部落の男子とは同行するを拒んだに相違ない。そこで各部落は各々女子自ら不正の行爲を犯すにあらずんば、決して故なく之を棄てざるべき約束を結んで、女子の不安を一掃し、以て必要とするだけ多數の女子を伴ふことゝしたらしい。現に彼等の間には男子が部落の約束に反き、姦淫の故ならずして恣に其妻を棄てたる時は、其男子は殺戮せられ、其財産の一部は其妻たりし女子の所有に歸し、殘部は之を部落に沒收する習慣があつた。斯くして時は移り、世は過ぎ、文明の進歩と共に、又道德上の理由に依りて離婚を批難するに至りたれども、其初めはかの一夫一婦の制度と等しく、生活上の必要によりて之を非難したのであつた。

掠奪結婚も亦自ら此間に行はれた。即ち一夫一婦が相携へて移動しつゝある間に、或は女子の死亡するあり、或は幼年の男子成長するあり、爲めに女子の缺乏を告げ、如何にかして之を得んとする餘り、遂に他部落又は他人種より婦人を掠奪するの風習を生じた。今日でも英國のウエールスの山中に於ては馬上に於て妻を授受する風習があるが、如斯きも亦古代のアリアン人種が其移動に際して掠奪結婚したる遺風であるに相違ない。又今日の歐米人が結婚式を終るや、直ちに新婚旅行の途に上る如きも、古代に於て其妻を掠奪して逃走したる形式の殘存せるものなりと云ふ。彼等が其妻を携へて出入するや、必ず其肘を組合せ、只管離れざらん事を努むるも、亦移動時代に於て其妻の他人に掠奪せらるゝを豫防するが爲め、常に親しく手を取りて之を携帶したる習慣の其儘傳はつたものである。

其初め結婚は男子の部落に對する義務であり、出産は女子の部落に對する義務となつて居た。蓋し移

動時代に於ては多數の强壯なる男子を必要とし、强壯なる男子の增加は、結婚に依る外ないからである。從て男子にして結婚せず、女子にして出産せざる者は、他の人々から輕蔑せられた。如斯き風習はローマ時代に於ても尙存し、獨身の男子は其義務に忠實ならざるの故を以て、政府より "aes uxorium" と云ふ特種の獨身税を賦課せられたのである。斯く結婚を奬勵して其子孫の繁殖を計ると共に、又病弱にして戰鬪力を失へる者は、其移動の途中に於て、或は之を殺戮し、或は之を火中に投じたと云ふ。グリムの「獨逸古代法律史」に依ればスラヴ民族やチユートン民族の間に於ては、古來斯かる慘事の行はれし事明白なるのみならず、ローマ人の間に於ても亦之に類似せる殘忍なる行爲の行はれたる形跡がある。彼等は如斯く老弱は之を顧みず、病者之を放棄し、唯强壯なる男女のみ互に手を携へて一の土地より他の土地へと移動し、曾て一族を擧げて一定の土地に永住して、家族的團欒を樂しむと云ふが如き事がなかつたのであるから、其社會の單位は自ら個人となり、其間に新夫婦別居の如き風習も生じたのである。之を要するに移動時代に於ける彼等の生活は頗る原始的であつて、唯其野獸の如き精神を以て激烈なる生存競爭をなしたに過ぎぬ。若し彼等をして他人種の文明に接觸せしむることなく、其野獸の如き生活を繼續せしめたならば、世界の歷史は如何に慘憺たる頁に滿ちたかも知れぬのであるが、天意か偶然か、爰にセミチック及びハミチック兩人種ありて、此野獸の如きアリアン人種に一道の光明を投じ、彼等の物質的及び精神的文明に新生の機會を與へたのである。

六、野獸より人間へ（其一）

セミチック人種の起原は明白でない。歷史上推定し得る時代に於ては、主としてユーフラテス、チーグリス兩河の流域に生活してゐた。かのバビロニア、アッシリア、フヰニシア、ユダヤ等の諸民族は

之に屬するのである。而してアリアン人種が中央亞細亞の山間より出でゝ、遊牧を業としたるに反し、彼等セミチック人種はユーフラテス、チーグリスの如き大河の流域に生活したるが爲め、自ら農業に從事するに至つた。凡そ農業を主とする人種は、單に放牧に依りて生活する人種よりも、文明の發達が迅速なるは自然である。何となれば牧者の生活は農民の生活に比して精神を用ゆる機會が比較的少い。彼は單に家畜を監督し、其乳を絞り、其毛を刈り、其肉を屠るを以て足れりとする。然るに農業に從事する者は自然を相手として植物を栽培するのであるから、先づ自然の裡に潜む諸種の秘密を發見せねばならぬ。即ち如何なる土壤を選び、如何なる種子を求め、如何なる時季に播種し、如何なる方法にて栽培し、如何なる時節に之を收穫すべきか、又其收穫したるものを如何に利用すべきか、之等の問題を研究せざるべからざるが故に、自然に精神を働かせ、種々の研究をするに至る。其結果として、或は鍬を發明し、或は鋤を案出し、或は打穀器を造り、或は肥料を發見し、或は家畜を利用する等、精神的にも、又物質的にも、次第に自然を征服するのである。アリアン人種が唯拱手して、其家畜を監督するの退屈に堪えずして、或は異性を求め、或は賭博を愛好すると正反對である。蓋しアリアン人種は、大體に於て、賭博打ちであるが、之の點に關しては支那人と類似する。惟ふに支那人も亦古代よりの遊牧的生活を營み、其境遇の類似する者あるがためにあらずやと思はるゝのであるが、之に反してセミチック人種は大體に於て、賭博趣味を持たぬ。イエーリングが其著「アリアン人種進化史」に於て云ふ所に依れば、歐羅巴に於ても百人の博徒が集合せば、其中の九十九人迄はアリアン人種に屬する者で、殘りの唯一人がセミチック人種に屬すると云ふ割合である由。加ふるにアリアン人種は浪費家である。之は古代より多く勞作せずして收入を得るに慣れた結果であると思ふ。現に彼等は遊牧の時代を過ぎて農業に從事するに

至ても、嘗て獸類に依りて必要品を獲得したる習慣があるので、更に奴隷を用ひて之を獲得せんとしたる如く、常に手を拱して生活するの惡癖がある。之が爲めアリアン人種の中には浪費家が多く、巨萬の富を擁して其威を振ふも、僅かに一代にして斷絕することが少くない。然るにセミチック人種に屬する者は頗る節儉を重じ、一錢を收むれば一錢を蓄へ、百金を得れば百金を積んで、容易に浪費せざるが故に倒產者を出すことが甚だ稀である。世界に於ける富豪の多數がセミチック人種に屬するは偶然でない。

又彼等は世界に於ける都市の創設者であつた。舊約書創世記第四章に

「アダム其妻エバを知る。彼孕みてカインを生みて言けるは、我エホバによりて一個の人を得たりと。彼また其弟アベルを生めり、アベルは羊を牧ふ者、カインは土を耕す者なりき。カイン亦其妻を知る。彼孕みてエノクを生めり。カイン邑を建て、其邑の名を其子の名に循ひてエノクと名けたり。」

と云ふことがあるが、如斯く初めて都市を建設した者は、農業を營める人種であつたのだ。凡そ農業を營む者は都會に生活する必要がない。然るに農業に從事する人種が都市の創設者なりと云ふことは、一見矛盾のやうであるが、然かし理由がある。元來セミチック人種は平原に生活し農業に從事して居るが故、外敵の襲來に遭遇する場合には、山谷の險無く、絕壁の奇なく殆んど自己を防衞すべき障碍物が無く、一望坦々の平野のみである。茲に於て彼等は一度敵の襲來を蒙りし際、退却して難を避くる地を必要とした。而して此の必要は彼等をして都會の建設を思付かしめたのであつた。從て古代の都會に於て主要なる部分は、無數に密集せる人家に非ずして、其外部を包圍せる城壁である。即ち敵の襲來と共に農民は其所有財產を携へて此の城壁內に避難したのである。故に最初の都市は出來得る限り其城壁を堅

牢にし、内部は極めて粗末なる野營準備を爲すのであつた。是れ歐羅巴及び亞細亞の諸國に於て、今尙ほ其都市の周圍に堅牢なる城壁を有する所以である。故に古代の羅馬の如きも、其城內に生活することを許されたるは、其城外に土地を所有する者か、然らずんば商業に從事する者に限られて居た。然かし土地を所有せずして城內に生活したる者は、土地を所有する者より常に輕蔑せられたのみならず、課税せられたのである。然るにアリアン人種に至りては僅かに村落の生活を營むに過ぎなかつた。ナンメル氏の「古代印度生活」を見ると彼等も亦敵の襲擊を避ける爲めに"Pur"と稱する避難所を造つた樣であるが、然かも此等の避難所は多く斷涯の上又は森林の間に設けられて、荊莢、樹枝、木柵、岩石、溝渠等を以て圍まれたる、粗末なる避難所に過ぎず、敵の退却後は放任して顧みなかつたのである。從て其組織はセミチック人種の建設したる都會の如く永久的若しくは半永久的の性質を有するものに非ず、全く假工的の木石の集團に過ぎなかつた。如斯く彼等は數千年の間唯一の都會をも有せずして生活し、常に平原に出でゝは敵を襲ひ、戰疲れては山間の避難所に逃歸り、禽獸と多く異ならざる生活をなしたので、之をセミチック人種の都會に比ぶれば其差霄壤も啻ならざる狀態であつた。

凡そ文明は都會に起るものである。卽ち農民中の比較的多くの財產を有する者は、其安全を期する爲め常に都會に生活し、平素は周圍の田圃に耕耘せる者も、賣買の爲め常に都會に往來し、爲めに都會に於ては自ら商工業勃興し精神的にも、又物質的にも、著しく文明は發達した。例へば家屋の如きもアリアン人種は永く木造の茅葺きの家屋に生活したるに反し、セミチック人種は早く石造の家屋に生活したのである。現にシベリア及バルカン半島の地方には、今尙ほ木造家屋の殘在せるを見る。一寸考ふれば主として山間に生活し岩石の間に避難所を有したるアリアン人種が永く木造の家屋に生活し、メソポタ

ミヤの茫々たる大平原に生活して、岩石を獲得する事容易ならざるセミチック人種が石造の家屋に生活したる如きは、不思議のやうでもあるが、能く考ふれば決して不思議でない。アリアン人種は常に崎嶇たる山間に生活し、奇岩怪石に接する事多しと雖も、之を切出して建築の用材となすが如き知識と能力とを有たなかつた。然るにセミチック人種はメソポタミヤの大平原に生活した爲め、ユーフラテス、チグリース兩河の沿岸に累積せる粘土を利用するを得たので、之を材料として、或は日光に曝し或は竈にて燒き堅固なる煉瓦を製造したのである。舊約書創世紀第拾壹章にも次の如き記事がある。

『玆に人々東に移りてシナルの地に平野を得て其處に居住せり。彼等互に言けるは去來瓦石を作り之を善く燒かんと。遂に石の代に瓦石を獲、灰沙の代に石漆を獲たり。又曰けるは去來邑と塔とを建て其塔の頂を天にいたらしめん。斯して我們名を揚て全地の表面に散ることを免れんと。』

玆に所謂シナルの地とは卽ちメソポタミヤの事である。之に依りて觀るも彼等は粘土を用ゐて煉瓦となし、之を固むべき一種のセメントを得て、之を以つて都會を建設し、又塔を建て、大に其建築の能力を天下に誇らんと欲した事が分かる。

今を去る約四十二年前卽ち千八百七十四年に、英人ジョージ・スミスなるものがニネベとバビロンの遺蹟を發掘して、多くの粘土版の記錄を發見し、楔形文字の研究に多大の貢獻を爲したるは、著聞の事實であるが、彼等は當時盛んに粘土を利用して、種々の技術に應用した事は爭ふことが出來ない。固よりセミチック人種が斯く粘土を利用して煉瓦を造る事を覺えたるは、其獨創であるか、他人種の模倣であるか、分明でない。舊約書出埃及記の第壹章に

「エジプト人イスラエルの子孫を嚴く動作かしめ辛き力役をもて彼等をして苦みて生を度らしむ。即ち和泥、作甎、および田疇の諸々の工にはたらかしめけるが、其動かしめし工作は皆嚴かりき。」

とあるが、埃及人は早くナイル河の流域なる粘土を利用して、煉瓦を造つたに相違ない。而してイスラエルの人々が埃及に捕虜となつて居る間に之を學び、歸りて他のセミチック人種に傳へたものではないかと云はれないことはない。現に埃及の漂渺たる平原に聳ゆるピラミッドの中で、最古のものと稱せられて居るサッカラのピラミットは、粘土質の煉瓦を以て造つてある。然し乍ら之を歷史上の年代から觀ると埃及は紀元前二千七百年以降の文明を記錄するに過ぎないが、バビロンに至つては紀元前三千八百年の頃已に高度の文明を有した事を想像し得らるゝのであるから、孰れが石造家屋の創設者であつたか分明せぬが、兎に角セミチック及びハミチックの兩人種がアリアン人種より數千年前に石造家屋に生活したるは明白である。

アリアン人種の中で最初に石造家屋を建築したのは、實にギリシヤ人である。是れギリシヤは地中海に面して交通の便良く、アリアン人種中の如何なる者よりも早くセミチック人種なるフイニシア人と接觸し、又ハミチック人種なる埃及人と交通し、比較的早く其文明を吸收せるが爲めである。其以前に於ける建築は、誠に粗末なるもので、かの有名なるデルヒの神殿の如きも、桂樹を以て建設せられたるに過ぎず、ローマに於けるヰスタの寺院と雖も、藁葺の小屋に過ぎなかつたらしい。彼のゴール人がローマに浸入して火を放つや、全市忽ち火の海と化し悉く灰燼に歸したのも、亦其家屋の木造であつた結果である。故に彼等は火を怖るゝこと最も甚だしく、獨逸語に於て今尚ほ放火と云ふ事と疫癘の傳染と云ふ事とを同一の文字即ち"ansteckung"で言表すが如きも、如何に彼等が火を怖れたるかを證明するも

のである。然るに之に反してセミチック人種の間に於ては、火を怖るゝの觀念殆んど無く、舊約書の中命記第貳拾八章に於て、神の命令を奉ぜざる者に天罰の來るべきを說き、或は疫病、或は飢饉、或は敵軍襲來、或は猛獸の災禍等、あらゆる災禍を列記したれども、終に一言の火災に說き及ぼしたるを見ない。加之、舊約全書を通じて之を見るも、遂に火災なる文字を發見する事が出來ないのである。是れ實に彼等が已に早く石造家屋の建築を發明したる結果であつて、斯くて彼等は建築に長じ技術を修め、アリアン人種に先んじて著しき文明を建設したのであつたが、之が又意外にも彼等の衰微の原因となつた。即ち彼等は如斯き大規模なる文明を起し、地上に種々の建築物を建立せる結果、終に移住と云ふ事が不可能となり、此所に固定的生活を營まざるを得ざるに至り、異なれる風土の刺戟を受け、異なれる文明の影響を蒙りて、其肉體及精神を鍛練するの機會を失つたのである。然るに此間に於てアリアン人種は其の生活の簡單にして、移動の容易なるに乘じ、人口の增加と共に次第に他に移動し、益々其心身を鍛練するの機會を得ると共に、着々セミチック人種の文明を採用し、或はハミチック人種の文明に模倣し、斯くして此の兩人種の長所はアリアン人種に醇化され、其組織する所となつて、初めて玆に新文明の光彩を放つに至つたのである。

七、野獸より人間へ（其二）

斯くの如くアリアン人種は其物質的生活に於て、セミチック人種及びハミチック人種より、多大の恩惠を蒙つたのであるが、然かも精神的生活に於ては更に大なる恩惠を受けた、セミチック人種の邦土は古來世界に於ける三大宗教の搖籃である。即ちモーゼもムハメットもキリストも共にセミチック民族に屬し、其唱導したるユダヤ敎、キリスト敎及び回々敎は何れもアリアン人種の文明に一大影響を及ぼし

たのである。蓋しアリアン人種は、前述の如く、古代遊牧を業とする蠻人の群に過ぎず、其宗教と云ふが如きものも幼稚なる多神教に過ぎなかつた。然かも其肉食の爲め感情は猛烈にして鬪爭を好み、各部落は互に土地と婦人との爭奪を事とする狀態であつたから、若しキリスト教にして之を統一し、其の信仰によりて精神を訓練せしむる事なかりせば、果して何れの日弱肉强食の野蠻を脫する事が出來たか分らない。然るに幸にもセミチック人種の間に三大宗教が起り、然かも其三大宗教は何れも一神教であり、特に三大宗教中の最も進歩せるキリスト教が、歐洲を風靡するに至つた事は、實にアリアン人種の一大幸福であり、又世界人類の一大幸福である。然かしセミチック人種は元來一神教徒であつたかと云ふに決してそうではなかつた。かのバビロニア人、アッシリア人、フエニシア人は最初より最後まで多神教を奉じて居たのみならず、ユダヤ教及びキリスト教を生めるイスラエル人も、亦回々教を生めるアラビア人も、最初は他のセミチック人種と同じく多神教徒であつた。故高山林次郎博士は其世界文明史に於て

『セミチック民族の宗教は一神教なり。之れ是民族の性情及び外圍の自ら然らしめし所とす。蓋し神なるものは自家理想の投影なり、純ら自我を主體とし、中心とするものは、其渴仰する所の神に於て自我唯一の理想を認めずんばあらず。是の如くにして初めて其心を安じ、其情を慰むるを得べし。故に約言する時は、心を虛ふして天然に接する所のアリアン民族は、多神教的にして、我を主として萬有を統一せんとする所のセミチック民族は一神教的なり。且夫れセミチック民族を圍繞する所の天然は、多く砂漠荒原なり。山河の奇なく、風雲の變なく、四時の代序、旦暮の風光、自ら單調に傾き易し。目を擧げて遠く望むも、茫漠遼天の平野は一律無限の感情を惹起するのみ。是の如き境遇に棲居するものが、群小靈鬼を畏怖せずして、唯一至大の神を崇拜するは最も自然の人情なりとす。是れセミチック民族の宗教が凡て一神教なる所以なり。』

と云ふて居るが、之は事實でない。バビロニア人も、アッシリア人も、又フヰニシア人も曾て一神教

を信じた事なく、又イスラエル人もアラビア人も中途より一神教に轉じたのである。然らば如何なる動機よりイスラエル人が一神教を奉ずるに至つたかと云ふに、之はかのモーゼの感化に依るのである。モーゼがイスラエル人を戒めたる書に於て『汝神の外何物をも神とすべからず。汝何の偶像をも刻むべからず。又上は天に在るもの、地は下に在るもの、並に地の下、水の中に在るものゝ何の形をも造るべからず。之を拜むべからず。之に事ふるべからず。』と云ふて居るを以て見ても、モーゼ以前には多神教を信じて居た事は疑ふ餘地がない。然らばモーゼは何所より一神教の思想を得たのであるかと云ふに、彼は之を埃及から得たらしい。彼は幼少の頃より埃及に在り、埃及貴族に養はれ、埃及の僧侶に就いて教育を受くるの機會を得たのであるが、當時の埃及は一神教を信じ、特に其神は太陽となりて現はれ全世界を支配し、如何なる神も其前には平伏し、人間の靈魂も死後は又其神に還るのもと信じて居た時代であつたから、此思想が必ずモーゼを動かしたに相違ない。而してモーゼが成長する中自ら一神教の蘊奥を體得し、之を其同胞に傳へたものであらう。之と同じくマホメットも亦其唯一の神即ちアラーに關する思想を、彼の交際したるユダヤ教徒及びキリスト教徒より得た事は疑ない所である。斯くして不完全なる多神教は完全なる一神教の爲めに亡ぼさるゝに至つたのであるが、然しユダヤ教に於ては神即ちエホバはユダヤ人を愛するに止まり、ユダヤ以外の者はエホバに愛せらるゝ事無しと信じ、他國民の神々は總べてエホバに依りて號令せられ、統一せらるゝものと信じて居た。故にイエーリングは當時のユダヤ教を評し『彼等の一神教は國民的一神教なりき。』と云へるは眞に至言である。然るに茲に耶蘇が現れて苟も人間たるものは、ユダヤ人たると他國人たるとを問はず、總べて上帝の赤子である。故に赤子天眞の心を以て其神を仰ぐ者は、如何なる人と雖も、必ずエホバの愛子たるを得べしと說くに至つて、始めて世界的一

神敎の面目躍如として現はれたのである。而して此の思想が先づギリシアに入りて其哲學に結合し、更にローマに傳はりて世界的帝國の思想に融合し、其政權の發達と共に全歐洲に漫延し、玆に始めて野蠻の狀態に彷徨せるアリアン人種に向上の大理想を喚起せしめ、以て世界の文明をして一廻轉を爲さしむるの一時機を劃した。斯くして一神敎はセミチック人種の間に於ては、尙未だ國民的であるに過ぎなかつたのが、アリアン人種の間に入つて始めて世界的の價値を發揮することが出來たのである。蓋しセミチック人種は多く一定の土地に土着し、固定的生活を爲したるが故に地方的感情を脫する能はず、反之してアリアン人種は常に移動したるが爲めに地方的感情なく、世界的精神を理解するに容易であつた。斯くしてセミチック人種を產出したる世界的一神敎はセミチック人種を救ふ能はずして、却てアリアン人種を新生せしむるに至り、爰に歐羅巴文明の精神的中心が確立した。如斯くアリアン人種は、精神的にも、又物質的にも、セミチック人種に學びて、セミチック人種を凌駕する文明を建設したが、然かし其內心に至ては、何としても、アリアン人種である。故に何等か强烈なる刺戟に逢ふや、其固有の野獸性は勃然として、恰かも密閉せる蒸氣汽罐の爆發する如く、其暴虐を逞ふせねば止まぬのである。

八、正反對

翻つて日本を觀るに其民族は全くアリアン人種と異る、從來の傳說に依れば日本は國土も亦人民も、共に伊弉諾、伊弉冊の二尊より生れ、其種族が繁殖したもの丶如くであるが、今日の歷史家の硏究する所に依ると日本民族の祖先は大陸及び南洋諸島より徙遷したるものなることは疑ない。即ち日本の原人は南種と北種とあつて、北種は千島樺太より侵入し、南種は筑紫中國より侵入したるものなるに相違ない。而して北方より來たれるものは、主として朝鮮、蒙古、滿洲等に屬し、其南方より來たれるものは、主とし

て臺灣及マレー等の土人であると思はれる。此等南種北種の兩原人は、日本に來るや互に競爭し優勝劣敗あり、幾多の年月を經て漸く統一の緒についたらしいが、然し其優勝したるものが南種なるや、又北種なるやに就ては未だ定論が無い。然し水田に稻を耕作して之を常食となすは、南方熱帶地方の習慣なるが故に、日本文明の中心となつたものは、南種人種に非ずやと思はるゝのである。兎もあれ日本民族が古代より農を重じ、農業を以て立國の大本としたるは疑なき事實である。我が歷史は天照大御神が初めて我國土を天孫瓊々杵尊に授け給ふや『豐葦原瑞穗國は是れ吾が子孫の王たるべき地なり、爾就きて之を治むべし、寶祚の隆なること當に天壤と共に窮なし』と仰せられ、稻穗を授與し給へりと傳ふ。其後烈聖相受け皆農業を奬め給はざるはなく、崇神天皇の御代に至り特に勅して『農は天下の大本なり、民の賴んで生くる所なり』と宣ひ、天下に令し農業を奬勵し給ふと共に、皇子を諸國に遣はして池溝開鑿の事を掌らしめしと聞く、又繼體天皇の勅に、

「歷世の天皇窮ら耕して農業を勵み、后妃窮ら蠶して桑織を掌らしめたり。」

とあるに見ても、歷代の天皇農業を重じ、之に依りて國民を養ふの方針を立てられたる事は明白である。加ふるに欽明天皇の御代に至り佛教の傳來するや、殺生を咎め、菜食を說き、玆に肉食の風益々廢れ、日本民族は數千年の間主として穀類に依りて生活するに至り、其結果としてアリアン人種に比して其性格及其文明は殆ど正反對の發達を遂げた。

蓋し我國民精神の根柢を爲せる忠孝の思想の發達の如きも、此の農業に依る所甚だ多しと云はざるを得ない。前述の如く常に牧畜を營み移動を是れ事とする人種の間に於ては、老人は幼者を顧み、幼者は老人を養ふ事は容易に非る結果、自ら社會の單位は個人となり、新夫婦の如きも結婚と共に其親と別居

するの習慣を生じ、剰へ放牧の爲めに必要とする廣大なる土地は、之を私有する能はずして勢ひ部落の共有として、共同的に使用することゝなるが爲め、土地の處分に關して部落の間に行はるべき法規を作るに際しても、自ら合議的となり自治的となるの傾向を生じたれども、農業を營む者の間にあつては、播種と刈入れとの間に一定の時日を要するが故に、自ら土着の必要を生じ、加ふるに播種、耕作、刈入に於ても多大の勞力を必要としたるが故、其血族を有する者は出來得る限り之を集めたれども、之を養ふ土地の不足を感ぜざる狀態に在りしを以て、其間之等の家族を統一し、之に向つて號令すべき家長を尊重するに至り、玆に自ら忠孝の思想が發達したのである。而して社會も自ら家族を以て單位となすに至り、新夫婦も亦其家に在りて老親に事へ、以て今日の如き國風を爲すを得たのである。而してアリアン人種は更にキリスト教の感化を受けて人間の平等及び生命の尊貴等に關する觀念が非常に發達した。而して歐羅巴の森林に割據して獸類を屠つて其肉を食ひ、土地と婦人とを奪掠するを以て主なる仕事として居た中世の野獸的人種をして、人間の尊貴なるを知らしめたのは、實に此のキリスト教の功德に外ならぬ、かのアイテルは「東方亞細亞の歷史は即ち佛教の歷史なり」と云つて居るが、吾等は或程度迄「西方歐羅巴の歷史は即ちキリスト教の歷史なり」と云ひ得ると思ふ程である。然るに我日本人の受けたる文明は主として支那の文明と印度の文明とであつた。殊に支那の孔孟の教の如きは、主として社會的のものにして、君臣の義を說き、父子の親を述ぶるに止まる。即ち家族制度に於ける家長と家族との關係を說明するを主とし、個人の靈性及び生命に對しては、多く注意を拂つて居ないのである。然らば佛教は如何と云ふに、其個人の解脫を說くや詳かに、靈性の覺醒に努力する所實に深奧であるけれども、其本來の傾向として、出世間的であり、厭世的であつて、個人の權利義務の自覺等に就ては何等影響す

る所がないのである。斯かる關係にてアリアン人種の間には自ら自治主義の道德發達し、日本人の間には自ら服從主義の道德を重んずるに至つたのである。

加ふるに感情の如きもアリアン人種の感情は肉食獸の如く猛烈なるに反し、日本人の感情は菜食獸の如く恬淡である。日本人は支那人より睚眦の怨必ず報ずとか、一飯の恩必ず報ゆとか云ふ事を習つて居るが、支那人は大古伏犧氏の時代に於て、已に禽獸を屠り之を庖厨にする事を知つた肉食人種であるから、日本人に比すれば比較的猛烈なる感情を有するであらうけれども、日本人には些程深刻なる復讐心はない。後三年の役に於て八幡太郎義家が衣川の關に河部貞任を追詰め、弓を滿月の如く引き絞りてフト貞任の鎧の糸の綻れたるに氣付き「衣のたては綻びにけり」と聲を掛くるや貞任直ちに振返りて「年を經し絲の亂れの苦しさに」と返した。義家も其心根の優雅なるに感じ、今迄引絞つて居た矢を外し貞任を逃したと云ふは、有名なる物語であるが、其義家に追詰められて、生死將に間髮を容れぬ時、悠然馬上に敵を顧みて歌を返す風流も、又其歌に感じ滅び行く敗者の哀れを憶ふて、之を逃す暖かき心根も野獸の如き猛烈なる復讐心を有する、アリアン人種の歷史に於ては到底見る能はざる美談である。又平治の亂に源氏の一族悉く滅亡せんとするや、平宗清が義朝の子賴朝の幼にして首斬らるゝを見るに忍びず、平清盛が繼母なる池の禪尼に就いて之を救ひ、蛭ケ小島へ流罪にしたるが如き、斯かる詩的な精神は到底アリアン人種の理解し得ざる所である。縱し理解するも、行ふを欲せざる所である。

日本にては市井の無賴漢である熊公八公が、血を流すが如き喧嘩をしても、一度仲裁が入つて和解するや、今迄の敵味方共に同じ料理屋に一杯飲むが如き態度は、恬澹無意恰かも驟雨一過して淸然たるの趣があるが、斯かる淡純なる態度は實にアリアン人種に於ては見るべからざる所である。其他繪畫に就

いて見るも、彼等は何所迄も現實的であり、濃厚であるに反し、日本人は飽く迄も冥想的であり、色彩も亦蒼枯にして恬澹、かの破墨一揮して忽ち遠山を生むの神境に至つては、アリアン人種の彩華丹碧炫耀映射する濃艶に比して、如何に洒脱飄逸の情趣に富んで居るか、而して之を音樂に就いて見るも、彼等は强烈にして深刻なるピアノ等を愛し、我は幽玄にして瀟洒たる横笛、尺八等の如きを好む。或は之を詩に於て見るも、彼等の敍情は其言はんと欲する所を歌ひ盡さすんば滿足せない。我等は其言はんと欲する所の一端を歌ひて他を聯想せしめるのである。故に餘韻を貴ぶ。惟ふに「古池や蛙飛込む水の音」と云ふが如き情趣はアリアン人種の到底想像し能はざる所であらう。又男女の關係の如きも、彼等は專ら主我的にして且つ肉慾的なるに反し、我等は沒我的にして精神的である。かの袈裟御前の如きは已に源渡に嫁して人妻となりしに拘らず、遠藤盛遠に戀せられ、盛遠が袈裟の母の衣川に袈裟を我に從はしめずば汝を殺すべしと迫るを聞きて心を決し、竊かに盛遠に云ふて、渡を斬らば御身に從はんと。盛遠即ち其言の如くすれば、何ぞ計らん斬られし者は袈裟其人であつた。是れ袈裟が一身を以て其母と夫とを救ひ、又盛遠の情に感じたる眞心に出でたものである。茲に至りて盛遠大に感じ、其夫渡と共に僧となり袈裟が菩提を弔ふことゝしたるが、當時袈裟は僅かに十六歲、渡は漸く十七歲、盛遠と雖も尙未だ十八歲に過ぎなかつたと云ふ。如斯き沒我的の戀は、實にアリアン人種の間に於ては想像し能はざる所である。

九、移動せよ！移動せよ！

之を要するに、アリアン人種は其根柢に於て肉食人種である。日本人種は其根柢に於て菜食人種である。從てアリアン人種の文明は動的文明であり、日本人種の文明は靜的文明である。即ちアリアン人種

は今も尙進軍の狀態にあり、常に征服を事とせる人民の集合より成つて居る。反之して日本人は常に守備の狀態にあり、自然を嘆美し、運命に安じ平和の生活を好む、從て其社會に停滯的氣分を帶ぶるは免るべからざる所である。

　惟ふに日本人種は其文明の傾向に於て、多少セミチック人種に類似して居る。宗敎の如きも兩者共に國民的宗敎を奉じ、其主權者を以て皇天の代表者と見做し、國民自身を皇天の選民なるが如く信ずる所に於て殆んど符節を合するものがある。若し日本人種にしてセミチック人種の如く、今後尙數千年間も引續きて其守備的、固定的生活を繼續するならば、其精神的向上に於ても、或は物質的發達に於ても、將た又政治的勢力に就いても、セミチック人種の轍を踏む危險無しと云ふことは出來ない。今よりアリアン人種の如く進軍的生活を始むる必要がある。之の見地より見たならば、彼の生活困難の爲めに人口の增加を恐れ、避姙によりて之を豫防するが如きは、甚だしき危險であると云はねばならぬ。寧ろ出來得る限り多數の日本人を海外に發展せしむる必要がある。即ち日本人がアリアン人種の如く全世界の上に瀰蔓し、其生活程度を向上せしむるのみならず、其肉體を異境の風土に鍛練し、其精神を未知の文明に接觸することに依り、直接若しくは間接に民族の世界的訓練をなすにあらずんば、數千年間各人種の文明を吸收し、之が世界的統一を理想とせるアリアン人種と生存競爭するは容易ではない。移動せよ。移動せよ。移動は文明を新たにし、民族的精力を振作する唯一の方法である。

　固より、我等は日本固有の文明を棄てゝアリアン文明に模倣する必要はない。肉食人種は益々肉食文明を發揮すべく、菜食人種は益々菜食文明を振起すべきである。千草亂れ百花爛漫として咲き匂ふ處、却つて自然美の調和を見、音の强、弱、高、低、錯綜する處自ら相和して微妙の天絃を奏するが如く、各

人種をして各々其特色ある文明を發揮するの自由を有せしむるは、軈がて世界的の一大文明が織出さる る前提であるに相違ないが、然しそれがためには各民族各々其生存を完ふし、苟くも一民族又は一人種をして恣に全世界を獨占せしむることなく、出來得る限り多數の民族又は人種が世界の上に共存し、互に其精神的文明を競ひ、物質的發達を爭ひ、全世界に亙つて文明的競爭を爲さねばならぬのである。それには菜食文明を代表する日本民族も亦、肉食文明を代表するアリアン人種と相並んで全世界に跋扈し、アリアン人種が其特色ある肉食文明を全世界に扶殖しつゝあるに劣らず、其獨特の菜食文明を全世界に傳播し、以て皇天が多數の特色ある民族及び人種を此世に生ぜしめたる意義を完ふしなければならぬ。如斯にして初めて世界は人類の世界となるのである。

一月一日發行

婦人公論

特價三十錢　郵税二錢

中央公論社發行

◁新粧せる初春の盛觀を見よ▷

◎奥樣連の お正月の思出

○寄合世帶の滑稽（山路愛山夫人）○忘られぬ寂しい春（小杉天外夫人）○和洋折衷の正月（ハリス夫人）○金策の主人を待明かした元日（獨歩未亡人）○子供の爲めの正月（高島平三郎夫人）○恐ろしかつたお正月（矢島楫子）○樂しかつたお正月（江木博士夫人）○旅中の新年（佐々木久二夫人）

○元旦の歌……與謝野晶子

○笑の話……高島平三郎

○家庭科學欄……近藤教授擔任

○餅の喰へぬお正月……萬年小學校々長

○男勝れるか女劣れるか……麻生學監

○新年の辭……三宅雪嶺

○福壽草……廣田花崖

○處女の肉的變化と其衞生……羽太鋭治

○盛裝の心得……遠藤波津

○初年初づくし……鈴木秋風

○歐洲戰後の婦人問題……內ケ崎教授

（小說）

小品 歌留多會の夜……長田幹彦

蹂躪されて（婦人雜誌界を驚倒せしむべき長篇小說）……正宗白鳥

對話 飛双六……巖谷小波

嫉妬……中村吉藏

拾兒……森田草平

○新年吉例もの語……さる人

○家庭の負擔を輕減せよ……新渡戶博士

○天下を取つた女……山路愛山

○結婚前後……富本一枝

○現代女風俗……石井柏亭畫

○近代劇に描かれた結婚問題……本間久雄

○琉球の女風俗……勿來關人

○隱れたる內助の賢夫人……吉野臥城

○眞に新らしい女出でよ……安部教授

○一夫多妻の餘弊……與謝野晶子

◎世界女氣質

○最も新しい米國婦人（中村吉藏）……○家庭的な英國婦人（坪內士行）

○秘密の支那婦人（有島生馬）……○無邪氣な露國婦人（小山內薫）

○英雄崇拜の獨逸婦人（生田葵）……○熱情的佛國婦人（山下新太郎）

（中付一の二）

圖書雜誌大賣捌

1917

謹賀新年

東洋の主權帝國に收め、爰には 東宮册立の盛儀あり 帝威の愈々盛なるを謳歌すべき大正六年を迎ふる其の劈頭に當り玆に謹んで各位の御隆昌を祝福すると共に多年の厚き御眷顧を奉感謝候　謹言

丁巳元旦

東京市京橋區元數寄屋町三丁目
合資會社 北隆館書店
電話新橋 一四三四番 一七八八番 一七八九番 一七九六番
振替東京 七五〇番

賀

地方同業者諸君の爲に

書籍、雜誌、を問はず確實を旨とし迅速に發送可仕候

取引規定　往復ハガキにて御申込次第進呈

舊年中は一方ならぬ御愛顧御引立を蒙り難有奉深謝候尚本年も弊店一同一層の奮勵努力を以て勉强可仕候間何卒倍舊の御引立偏に奉願上候

正

地方愛書家諸氏の爲に

御注文品は何れの發行を問はず郵送無料にて取次可仕候

月刊目錄　往復ハガキにて御申込次第無料進呈

東京市神田區裏神保町一番地

上田屋書店

振替東京三〇八六
電話本局三八二八

大陸美論

大谷光瑞

大陸に美なし。美なきに非ず、常人の美なきなり。中央公論記者諸君の予に乞ふに此の論を以てす。是難事なり。中央公論は本邦に於ては最多數の讀者を有する雜誌にして勢ひ常人を主とせざるべからず。之を主とせば既に美なし。世に花の美を云ふ。淡粧濃抹妖艶を鬪すと雖も綠葉の點綴するなくんば未至らず。世に畫の美を云ふ。直條曲線濃淡相雜るに非ずんば好畫に非らず。世に人の美を云ふ。容顏四股端正溫柔、豊瘠度に中るに非らざれば稱するに足らず。世に聲の美を云ふ。五音相雜て生ず。世に味の美を云ふ。五味聚て以て生ず。是を以て之を言ふに、複雜にして變化に富まざれば常人の美に非らざるなり。大陸は然らず。山の大を以てせば、葱嶺雪山、三旬を經て猶踰る能はず。水の大を以てせば長江千里、濁浪天を拍つのみ。澤の大を以てせば雲夢洞庭淺水靑艸遠く雲と連る。原の大を以てせばキルリキスノ艸原。野の大を以てせばパンヂャブ、恆河。漠の大を以てせば戈壁澣海。而して六尺の微軀を以て之に當る行潦と大海の如し。焉ぞ能く其美を知らんや。常人の以て美とするもの大陸の中に在り。曰くカシユミルの山水、曰く瑞西の山水、曰くノルウエイの峽谷、曰く某、曰く某、皆是れ大陸の眞美に非ず。唯其地位大陸中に存するを以て嶋岐と別つのみ。カシユミルの如きは美景なり。然れども其山を以てするにコラホイ、ハラムック、兩峰纔かに平原より一萬二三千尺を出づるに過ぎず。如此は駿河灣頭富士を望むと大差なし。水を以てせばジエルム水淸からずとせず。然れども河幅三百尺に滿たず。曲々蛇行以て變化に富むを稱す。我邦北海道石狩河と何ぞ異

ならん。故宮廢寺園囿池沼に至ては既に人工に須てり。豈大陸と島嶼の別あらんや。然れはカシユミルの美を以てするも是嶋嶼の美と何ぞ異ならん。瑞西の山水の如きに至ては百マイルの展望を有せず、唯山高水淸、白雪の藍水に映ずるを稱するのみ。ニユージーランドの中此と等しき形勝無きに非らず。ノルウヱイの峽谷の如き既に島嶼性を發揮せり。ニユージーランド、ミルフオドハーヴヱンと何ぞ撰ばん。スカンヂネビアは半島と云ふも殆全島に近し。故に世に大陸の勝景を說くや多く其島嶼に近きを喜ぶ。嶋嶼の美たるや、山川糾紛し、原野林樹、家屋池沼、相雜て景をなせり。即ち五音の聲、五味の食を喜ぶが如し。常人の美は即ち是なり。唐の李太白は不世出の詩人なり。加ふるに氣宇濶大大陸と終始せんとす。彼曰く、鏟却君山好、平鋪湘水流、巴陵無限酒、醉殺洞庭秋と。洞庭の大觀は巴陵の岳陽樓にあり。岳陽樓の好景は君山にあり。宛も畫龍の點睛に似たり。彼決して君山の美を知らざるに非ず。故に曰く淡掃明湖開玉鏡、丹靑畫出是君山と。一幅の畫としては君山存せざるべからず。大陸の美景としては君山鏟却せざるべからず。彼酒を藉り蓄ふる所の憤を發し、以て豪懷を寫せり。君山存せば其景嶋嶼に在り。君山存せざれば大陸に非らざれば見るべからず。君山は扁平なる嶋嶼にして而も小島に非らず。人家あり、廟宇あり、茶園あり、竹林あり、決して一殿魏に非らず。周廻せば我一里を出づべし。彼れは混漾洗汙大水の天と接するを喜び、湘水の横流するに君山を障碍となせり。是大陸美の眞を知るものなり。又曰く、洞庭西望楚江分、水盡南天不見雲、日落長沙秋色遠、不知何處吊湘君。是同じく岳陽樓より眺望せし句なり。洞庭長河滾船猶十餘時を要す。彼は是を一眸の中に收め、更に進で水盡南天不見雲と云ひ、萬里一碧の晴空を吞まんとす。大陸の美を十分に玩味せるものに非らざれば云ふ能はず。大陸は單調なり。是を地質に求むるも、山西、陝西、河南、直隷等に連亙せるロエスの厚層の如き、下揚子江の新層の如き、印度デツカンの玄武岩の如き、廣袤幾千里なるを知らず。地

質既に然り、地貌何ぞ此に從はざらんや。決して丹青黃紫、黑白相雜れる我邦地質圖の如きものに非らざるなり。故に千里一調人多く飽く。常人は器量局促、是を容るゝ能はず。故ら大陸中最も狹小紛雜島嶼に類するの地を喜で之を美景となせり。如此は何ぞ苦で大陸に求むるの要あらんや。人は大鵬に非らず。一搏南溟九萬里を踰る能はず。最新式の飛行機を以てするも每時二百英里を踰る能はず。最急行の汽車電車を以てするも每時一百英里に及ばず。然れば大陸を縮景して島嶼に等からしめんとするは現在科學の力にしては猶前途遼遠なり。然れば大陸を縮景せんと欲せば、宜く其心眼を洞豁し腦裡に一幅の地圖を收めずんば能はず。否らずんば終に大陸に飽かんのみ。何況や其美をや。李太白曰く、明月出天山、蒼茫雲海間、長風幾萬里、吹度玉門關と。彼身天山玉關を蹈まざるの故を以て一片の傲語と貶すべけんや。匡廬は名山なり。然れども山低く壑淺く、大陸の名山と云ふべからず。然れども其東南を俯觀するに至ては氣象豁大なり。彼曰く、翠影紅霞映朝日、鳥飛不到吳天長、登高壯觀天地間、大江茫々去不還と。大江茫々去不還の句は實に異景なり。峨眉山月の絕唱の如きは重慶に至るまで六百支那里は收めて掌中に在り。豈一幅の縮景に非ずや。彼曰く峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流、夜發清溪向三峽、思君不見下渝州。渝州は今の重慶なり。又曰く、朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還、兩岸猿聲啼不住、輕舟已過萬重山。輕舸湍を下る、方に奔流と急駛を爭はんとす。千里一日大陸に非らずんば有るべからず。之に反し三峽を溯航するや、彼曰く、三朝上黃牛、三暮行太遲、三朝又三暮、不覺鬢成絲と。數十の一輓夫百丈（竹纜なり）を牽て上る。遲々牛步より甚し。我邦天龍、富士、球磨、保津等、博士櫻沙の兒戲に同じきのみ。落花に斷腸し、秋聲に悲愁する如き弱小の詩想は、到底其境に達する能はず。況や又纖麗を喜び褻語を綴り。以て大陸の美に接せんとするは不可なり。夫氷炭は器を同ふして久からず。如此くして是を知らんとす、抑亦難哉。大元の耶律楚材は名賢なり。彼若きより

萬松老人に侍して第一義諦を竊へり。芥子既に蘇迷盧を容れ、毛孔正に四大海水を納る。大陸の縮景の如きは反掌の易にして又彈指の觀あり。彼成吉斯大汗可の幕に從ひ西征亞原泰山を超るや、曰く、八月陰山雪滿沙、淸光凝目眩生花、插天絕壁噴晴月、擎海層巒吸翠霞、松檜叢中疏畎畝、藤蘿深處有人家、橫空千里雄西域、江左名山不足誇。陰山千里縮めて八句の中に在り。天目、天臺、天姥、雁蕩皆土塊のみ。又曰く河源之邊鳥鼠西、陰山千里號千蹊、倚雲天險不易過、驂驔蹄躞追風蹄、箚記長安五陵子、馬似游龍車似水、天王赫怒山無神、一夜雄師飛過此、盤雲細路松成行、出天入井實異常、王尊疾驅九折坂、此來一顧應哀惶、崢嶸突出峯峭直、山頂連天幾咫尺、楓林霜葉聲蕭騷、一雁橫空秋色寂、西望月窟九澤金、嗟乎自古無英雄、出關未盈十萬里、荒陬不得車書通、天兵飲馬西河上、欲便西戎獻馴象、旌旗蔽空塵漲天、壯士如虹氣千丈、秦皇漢武稱無窮、拍手一笑兒戲同、塹山陵海匪難事、翦斯群醜何無功、騷人羞對陰山月、壯歲星々髮如雪、穹廬展轉情不眠、霜匣閑殺錕鋙鐵と。詩句素より李太白の蜀道難に及ばざる遠しと雖も、成吉斯大可汗の雄圖は以て陰山千里を縮め、陣營中に置くに至る。是に由て結構更に蜀道難より大なり。夫西歐淫靡の文學に醉ひ、逸樂を喜び、軍國主義を排する如きは、終生大陸美を知る能はず。濟世佐命の略を胸中に藏せる李太白の如きも、大可汗の帷幄に參せる耶律楚材に非らざれば、眞面目を歌ふ能はず。若夫れ雪山の大觀に至つては大陸に非らず、島嶼に非らず、常人と非常人を簡ばず、之を仰て險なし、王道蕩平智愚の別なし。常人にして大陸の美を知らんと欲せば、唯雪山を仰ぐのみ。是第一義諦の相なり。我唯李太白の印度に出て之を稱揚せざるを恨む。大無量壽經曰く、猶如雪山等一淨故。眞哉眞哉。

成金論

法學博士　堀江歸一

成金の今昔

將棊に用ひられたる成金なる言葉が一轉して、暴富者の代名詞と爲れるは日露戰爭後に於ける株式市場沸騰の時代にして、將來此言葉は我國の社會に於て一の熟語として認められ、啻に財界のみならず、其他の方面に於ても意外の成功を博し得たる者は之を呼ぶに成金を以つてするの風あり、然も成金には暴富を贏ち得たることを以て、其必要條件とするものゝ如し。日露戰後我國は一年半の戰爭に從ひて、十數億の國帑を費し、外に巨額の債務を負ひながら、之を決濟す可き、賠償金を敵國より獲得する能はず、講和條約に依つて滿洲に我利權を擴張し、朝鮮の保護權を確實にしたりと雖も、其經營を全うするには、將來益々多額の國資を費すの必要こそあれ、目前に經濟社會に有利なる影響を及ぼすものある可しと思はれず、世間多數の人士は戰後の經濟社會に沈衰の機運を免かれ難きことを覺悟したるが、政府が講和條約に對する民心の不滿を轉換する爲めに種々の政策を施して、人氣を刺戟せんとするや、局面忽にして一變し、諸株式の市價は著しく昂騰し、虛業家の輩相集まりて、新事業を發起し、會社設立の計畫を發表すれば、事業の實質將來に於ける成敗の如きは、何等考量せらるゝことなく、其發行する權利株に對しては大なるプレミヤムを生じ、株式投機に成功したる者は更に重ねて虛業の計畫に成功し、虛業全盛、株式投機萬能の狀を現出するに至れり。當時巧に此機運に乘じて、暴富を占めたる者少なからず。前の一貧生は今日數百萬の富を左右するの地位に立ち、恰も將棊道に於て、敵地を侵したる步卒が金と成り

て、四方を横行濶歩すると異ならざるを以て、世間誰れとなく、此流の成功者に冠するに成金なる名を以てし、成金なる名詞は自ら一代の暴富者を指すの慣を馴致したり。

然れども當時の所謂成金なるものにして、能く其産を維持し又之を增殖し、今日に至つて、其大を致したる者は果して幾人を數ふ可きか。彼等の少數者は聊か將來を洞察するの明を有し、波瀾重疊する投機界の危機を脫して、虛業家より實業家に轉籍し、確實なる事業を經營して、殖產の道に就くを得たりと雖も、其多數に至つては然る能はず、本來修養に缺くる所あり、又人格の高尙ならざる輩が大なる勞苦を致さずして、暴富を占めたることとなれば、其富を得るの容易なると共に之を散ずるの手段亦放縱を極め、或は當代の紀文大盡を氣取りて、花柳界に豪遊を試み、或は阿房宮に擬す可き第宅を築き、只管俗人の膽を奪ひて、得々たりしと雖も、勞せずして得たる富の浮雲に異ならざるは古今同樣にして、一度び經濟社會の面目一變するや、惶惑措く所を知らず、曩に得たる富を失ふ者相踵ぎ、啻に產を破れるのみならず、自己の生命すら全ふする能はざるの甚だしきに至れるものあり。玆に於てか成金なるものは、單に一二年間豪華なる生活を營みて、社會に珍說を供したるの外に、何ものをも寄與せず、寧ろ人生の浮沈を實現して、富の恃むに足らざる教訓を與へたるのみ。玆に於てか曩に成金を崇拜し、自ら其班に入らんとして、焦慮したる者も亦之を輕侮し、爾來成金なるもの多く一時の成功者を誹謗するの言葉と爲れるの觀あり。

日露戰後一二年間に於ける株式市場沸騰の餘波を承けて、爾後七八年間我國の經濟社會は常に沈衰を極め、隨て致富の計畫に全力を傾倒するも、人をして容易に成金たる能はざらしめたるが、歐洲戰爭は我國經濟社會に意外の變動を惹起し、再び全國到る所に成金者流の續出するを見るに至れり。然れども之を日露戰後に於ける成金に比較するに、今日の成金は聊か趣の異なるものあり。即ち一昨年來我國に成金の生ずるや、必ず

しも投機熱勃興、虛業流行の結果として、之を認むる能はず。歐洲開戰と共に、染料の如き、鐵類の如き、諸金屬の如き、船舶の如き、戰爭の爲めに或は供給減少し、或は需要增加して、代價の暴騰したる物資の數少なからず。是等の物資を所有し、又は供給する能力を備へたる者即ち開戰の當初より今日に至る二年數箇月を通じて、我國に於て成金者流を以て目せらるゝ、重なるものにして、彼等は日露戰後に於ける株式成金と異なり、其成金を以て世間の評判に上る以前に於て、既に一廉の事業家たり、一箇の資產家たりし者にして、敢て徒手萬金を獲得したるに非ず。多年間一の事業に從ひ、或は自家の資產を事業に注入し、或は事業の經營に肝膽を碎き、既に相當の利益を收めつゝある間に、偶々戰時の變動に伴ひ、平生の利益に增加を來して、意外の資產を積むを得たるのみ。三井、岩崎、古河、大倉、高田其他の諸氏が歐洲戰爭に依て巨利を占めたりとするも、必ずしも之を成金とする能はず、久原氏の如きは今日成金の筆頭として、世間の羨望を一身に集むるが如しと雖も、氏が鑛山業に從ひて、既に多年月を經過し、相當の富を成したるの事實に顧みるときは、日露戰後に簇生したる成金者流と自ら選を異にするものと云はざる可からず。固より近時に至りて株式熱の沸騰漸く甚だしきを加へ、虛業流行の兆亦歷然たるものあるを以て、日露戰後に於けると同じく、空拳能く鉅萬の產を成す者ある可しと雖も、今日の所謂成金なるもの、多くが既往に於て財產家たり事業家たりし者にして、偶々戰爭の餘波を承けて、事業に繁榮を告げ、財產を增殖したる以上は、其基礎も亦鞏固にして、經濟社會の機運の一轉したる後に於ても、遽に瓦解の悲運に接するが如きことの少なかる可きを想像せざるを得ず。

成金と富豪

世間の謂ふ所の成金には斯る種類ありて、同一樣に之を律する能はざるが如しと雖も、其株式投機に依れると、虛業の計畫に依れると、將た又事業に於ける偶然の繁昌に依れるとを問はず、偶然の機運に乘じて、

富を成したるの點に至れば即ち一にして、彼等は要するに自己の得るに値せざる富を收得しつゝあるものなり。假に我國に多數の成金の生じたるを以て、歐洲戰爭の餘響の然らしめたるものなりとせよ。若しも成金者流にして、自ら費用を投じて、歐洲の外交界を攪亂し、自己の力を以て、戰爭を作爲したること、恰も米國の兵器製造業者が議員を買收して、軍備擴張論を鼓吹し、或は墨西哥の叛亂軍に兵器を供給して、以て國內の動亂を惹起したるものゝ如くなりとせんか、事の善惡、手段の正邪は姑く之を措き、戰爭に依つて、彼等の富を得るは、即ち得るに値する富を得るものにして、生產費に對して、代價を回收するに異ならずと雖も、歐洲戰爭の起るや、別に由來する所あり、成金者流は偶然戰爭の行はれつゝあることに依つて、偶時的利得を收むるものにして、自家の勤勉努力若しくは才能の賜と見る可からず。其利得の性質に於ては裏店住ひの細君が勸業債券に當籤して、一千圓の割增金を得たると異なる所ある可からず。近代の經濟學說に於ては、學者多く偶時的利得を以て、人の勞力に基かざるものとし、之に課稅して、以て社會全體の利益に供用するの意見を懷くを常とし、此學說が實際の財政策に反應を及ぼしたる跡少なしとせず。所得稅法に於て、累進稅の適用せらるゝと共に、財產所得に對する稅率の次第に引上げらるゝが如き、相續稅の次第に加重せらるゝが如き、土地增價稅の實行せらるゝが如き、將た又今回の戰爭に於て、多くの國が戰時利益稅を創設し、戰前に於ける利益に對して、開戰後に於ける利益の超過額の幾分を國家に徵收するが如き、何れも偶時的利益を以て、之を得る人に取つて、得るに値せざることを承認し、國家の權力を以て、此種の利益を社會全般の用に供するの趣意を果さんとするものに外ならざるなり。

成金者流が一時の僥倖に依て、生來曾て手にしたることなき大金を得るや、忽にして意氣傲り途方もなき方面に富を消費して、世間羨望の標的と爲るは、兒戲に類するの所業にして、恰も貧家の細君が勸業債券の

當籤金を得て、三越白木に赴き、年來の渇を醫すると異ならざれども、本人に取っては、此事が至上の幸福と感ぜられ、又絶大の愉快と認めらるゝならん。然も容易く得たる富を無意義に散ずることが、果して其人の眞の幸福愉快とする所なる可きか。人が世に處して、衣食住其他の欲望を充たすに不自由を感ずるや、之を充たしたらんには、幾何の愉快なる可きやを想像し、貨殖の才能ある者は常に之を磨いて、適當の機會を捉へんとす可く、之を捉ふるや、先づ日頃の願望を達するに假借する所なかる可し。彼の成金者流が富を得るや、先づ邊幅を飾り、次いで邸宅に及び、朋友知己を招きて、饗宴を張り、自ら黄金の利益を享くると共に、廣く他人をして其餘光に浴せしめんとするは、人間の至情として、必ずしも深く咎むるに足らず。斯くて成金者流の中、沒落す可き者は沒落し、其存續す可き者の存續するは、常に繰返さるゝ事例なるが、其存續したる者が、次に考ふる所は如何にして其富を後世に傳ふ可きか、如何にして家門の繁昌を謀る可きか、如何にして世間より成金と呼ばれて、成上り者同様の取扱を受くることを免かれんか、如何にして貧者の嫉視を避けんとするかの諸點に外ならず。近來我國の富豪が頻に其關係する事業を法人組織に改め、或は家憲を制定して、自ら財産を處分する自由を制限し、或は名門華胄の子女と婚緣を結び、或は財産の一小部分を公共事業に投じて、世人の反感を和げんとするが如き、種種の手段を講ずるは、即ち如上の目的を達するが爲めにして、斯くては成金者流の境遇亦甚だ安樂なる能はず、恰も彼等は黄金の檻に身を置きて黄金の縄を以て、四肢を縛せられたると異ならざるなり。

吾輩の所見を以てすれば、成金者流の幸福とし、愉快とする所は其偶然の機會に乘じて、成金と爲りたる瞬間にして、此輩が更に虚業より實業に志を轉じ、成金より富豪の列に入らんとすれば、爲めに種々の辛勞を重ねざる可からざるのみならず、幸運に富豪と爲るを得たる曉には、富豪としての社會的束縛を免かるゝ能はざる可し。吾輩の如き三井一家に十餘名の主人あ

ることを記憶すれども、其主人の名を知らず、思ふに彼等は單に三井の主人として衣食の安全を貪るに止まり、社會に出でゝ自由に活動し、自由に談論する能はず。否自家の有する富すらも、自己一箇の裁量する所に據て處分する能はず、却て彼等に使傭せらるゝ番頭連が主人に代つて、一家の金權を支配するものならんか、斯の如くして富豪たるの價値果して何れに之を求む可き。岩崎一家にも又岩崎姓を稱する數名の主人あるが如しと雖も、彼等の爲す所果して如何。思ふに彼等は其使用人に財産の運用、事業の經營を一任し、事の大綱を統ぶると稱して、實は主人たるの虚位に居り、日々夜々自家の財産の增殖したることを知りて樂むの外、何事をも爲さゞるものならん。彼の如き富を擁する以上は、天下の事或る程度まで之を左右するに難からず。然も其主人は單に富豪として聊か餘裕ある生活を營むの外に、社會上に何等人目を惹くに足るの事を爲さず、或る事を爲せば政府の感情を害す可し、或る事を敢てすれば、民衆の反抗を買ふ可しとし、世間に氣兼して、只管一身一家の安全を謀るの狀あるが如き、窮屈千萬の話にして、斯くて彼等に何の幸福あるや、之を知る能はざるなり。成金者流が單に成金と爲れることを以て安んぜず、更に進んで富豪たらんとするが如き、社會が富豪なるものを尊敬するの事實に眩惑し、富豪と爲りて、國家の榮典勳爵を受け、益々一家の光榮を外に飾らんとするの私心に出づるものなる可しと雖も、實は一身に種々の束縛を施し、子孫をして桎梏の下に居らしむるのみ。富豪の子弟に愚鈍の輩多く、一個の金庫番に過ぎざるが如き、要するに祖先に不心得の者ありて、單に成金たるに止まらず、富豪と爲ることを心掛けて、之に成功したるに座するものと云ふ可し。一朝の機運に乘じて、成金と爲るを得んか、得るに隨つて、其富を散じ再度の機運を捉へて、更に成金と爲り一生涯に數回成金と步卒との生活を順環するも亦男子の快心事ならずや。

成金の爲す可き道

然れども從來の成金者流が其全盛時代に富を散じた

る方法も亦餘りに馬鹿らしきの感なきに非ず。其富を得るや、單に肉體上の慾望を充す爲めに、之を散じ、然も之を散じつゝある間に、富を失ひて、昔日の榮華の果敢無かりしを嘆ずるが如き、畢竟彼等の無見識に出づるものとは云へ、兒戯に類するの所業なるのみ。何故に彼等は成金と爲れる間に、其時代を記念するに足るの功業を社會に留むるの工風を爲さゞる。頃者世を辭したる岩本榮之助、鹽見政治の兩氏の如き、果して世間に謂ふ成金者流なるや否や之を知らずと雖も、兩者共に無意義に富を散ぜず、前者が公會堂の建設に、後者が理化學研究所の設立に、各々百萬圓の鉅資を投じたるは永く社會公衆をして利益を享けしむると共に、其全盛時代の記念を後世に傳うる所以にして、岩本氏は事業に失敗して自殺し、鹽見氏は事業の半途に夭折したりとするも、其社會に致したる功績に至つては、成金者流と選を異にするのみならず、財産に比較して物の數にも爲らざる富を公共事業に投じて、得々たる富豪の企て及ぶ所に非ず。成功の裏面に失敗あり、成敗の相順環するは人事の常にして、成功の喜ぶに値せざると共に失敗亦悲むに足らず。唯、成功の時代に富を社會の用に致して、以て記念を後世に留むるは、成金者流の思を致す可き所なり。

近來我國に於ては富豪に爵位勳章を授與すること一の流行を爲し、中には政府の御用商人を勤めて、暴利を貪り、又は政府の濫設したる保護會社の後始末に當りて、此榮典に浴したるものあり。斯の如きは大隈内閣が富豪の間に歡心を結ばんとする一の策略として行はれたるものにして、其選叙の誤まれるは、世間の定評動かす可からざるものあり。本來富豪が鉅額の富を積むや營利の結果にして、又彼等の富を運用するや、報酬に動かされざるはなし。斯る輩に對して、單に其富豪たるの故を以て、爵位勳章を授與するが如き無意義の沙汰にして、富者の尊ぶ可きは、其富者たるが爲めに非ず、富を散じて、社會に用を致すの故に在る以上は其傳來の富豪たると、一時の成金たるとを問はず、有用に富を散じたる者に恩賞を與ふるを至當の方法と

せざる可からず。成金なるが故に之を賤しみ、傳來の富豪なるが故に、之を貴しとするが如き、一種の區別を立つるは、世間に多く見る所の風なれども、既に富豪又は成金者流の社會に對する効用にして、其富を有用に散ずるの一事に在る以上は、斯る區別を爲すが如き、無意義の沙汰と云ふ可く、成金者流が或る動機に依つて百萬金を一擲するは、富豪の輩が國家の恩賞を狙ひつゝ、自家の財産の一小部分を寄付するものに比較して、心事高潔、所業豪快なりとせざる能はず。唯世間の成金者流多くは一朝の成功に眩惑して、卑賤なる慾望を充すに忙はしく、成金の社會的効用を示すもの少なきを遺憾とするのみ。

富豪贖罪の說

富豪成金の輩が富を公共事業に投じて、社會の用を致さんとする氣風の盛なること、米國を以て第一位に推さゞるを得ず。諸大學には必ず富豪の名を冠する大講堂大研究所の類あり、大都會には富豪の出資に成る**圖書館、體育場、音樂館、集會堂の類あるのみならず、**時の必要に應じて、緣故の有無に拘はらず、鉅額の資金の公共事業に投ぜらるゝもの少なからず。固より米國は國家として是等の篤行者を表彰するものに非ず。然らば社會公衆は大に是等寄付者に對して敬意を表するやと云ふに、必ずしも然らず。時に富豪が富を得たる方法を以て醜陋なるものとし、斯る汚れたる富を受くるは、事業其ものを汚すの恐ありとして、富豪の寄付金を謝絕するの團體あり。或は「目的は手段を神聖化する」ことに託言し、富豪が如何なる醜陋なる手段を以て、富を得たりとするも、之を高尙なる目的に用ゆるときは、其富を變じて、淨財とするを得べしとして、之を受くるの團體あり。此點に於て贊否の說、時に世論を賑はすことあるのみならず、社會の一面に於ては、富豪の公共事業に對する寄付金を以て、一種の贖罪金と認めて、之を冷眼視するものなきに非ず。蓋し富豪の富を得んとするや、其手段尋常にして止まらず。殊に多年經濟上に自由放任主義行はれ、一方に關稅政策上に保護主義の認められたる米國に於ては、富豪の爲

す所往々にして辛辣横暴を極め、資本の威力を發揮するや何ものも之を拘束せず、競爭者を壓迫し、消費者を强要し、斯くて一身一家に富を集積するの常なるが故に、彼等の富を得ることの大なるに隨つて、民衆の彼等を憎むの念盛ならざるを得ず。彼等にして壯年元氣の旺盛なる時には、民衆の怨嗟の如き、殆ど之を意に介せず、唯積財の初一念に向つて、猛進するを得たりと雖も、老來意氣肉體の衰ふや、往事を追想して、自家の不德を知り、罪業を悔ゆるの念なきを得ず。日日夜々思を此點に致して、安んずる能はざるや、即ち罪障消滅、後世安樂の爲めに、寄付金を思ひ立ち、惡辣なる富豪一變して、篤行なる慈善家と爲るものにして、彼等の寄付金は一種の贖罪法にして、又自己滿足の一方法たるものなり。何ぞ社會に於て、之に對して感謝するの理由あらんやと云ふは、富豪の寄付金を蔑視する者の間に懷かゝる一種の感想なるが如し。

固より米國に於ける總ての富豪に對して、斯る感想を懷き、彼等の公共事業に對する寄付金を以て、贖罪の意に出づるものとするの當らざるや、論を俟たずと雖も、尙ほ斯る感想に一面の眞理あることは、之を否む能はず。然らば我國の富豪成金者流に於ては、果して如何。我國の富豪にして、大を以て自ら誇るもの少なからずと雖も、彼等にして能く自家の勤勉努力に依て、今日の大を致したりと稱し得るものは、果して何人を數ふ可き。其多くは政府と結託して、官金を濫費し、政府より財產の拂下を受け、或は政府の機密を索りて之を利用したるが如き、公にす可からざる手段を弄したるものならざるはなく、醜狀の歷然たるもの數ふるに難からず。株式の投機又は虛業の計畫に依て、成金と爲れる者の間には、政府を利用し、又政府と結託したるの跡著しきものなきが如しと雖も、株式の投機に依て一部の成功者あれば、必ず他の一部に失敗者あるは、自然の理にして、成功者の贏ち得たる富は即ち失敗者の膏血と見る可く、虛業を計畫して、成功したる者あれば、一方に虛業を輕信して、資產を損失したる者ありて、虛業家の歡樂は即ち放資者の悲痛たら

ざるを得ず。大資本を擁する鑛山業者あり、近頃事業を擴張する爲めに、諸地方の鑛山を買收して、飽く所を知らず。地方小資本の鑛業者は多年資本を鑛山に投ずるも、未だ其成績を擧ぐる能はず、然も薄資の爲めに其經營を進むるに難くして、格外の廉價を以て、大資本家に鑛山を買潰され、一旦其大資本家の手に移るや、設備を改良したるの結果、面目一新して、有望の事業と爲り、爲めに曩に、之を賣却したる者をして悲憤措く能はざらしめたるの事實談は、現に吾輩の親しく聽取したる所なり。大資本家が小資本家を壓倒し、資本の威力を發揮するは、今日の經濟組織に於て巳むを得ざる所なりと雖も、一方に富豪成金者流が贖罪の意義を以て、富を散ずるの必要あるや、論を俟たざるなり。成金論の一編脱線して、富豪贖罪論に及びたるは、深く讀者に謝する所なり。

英國新首相ロイド・ジヨージ

(統一黨の首領として政界の中心となる)

慶大教授　田中萃一郎

パーマーストーン卿が自由黨を率ゐて居つた時代には隨分强硬な對外政策を執つたものであるが、グラッドストーンとベクンスフィールドとが相對立して自由保守兩黨が、ベージオットの學説通りに時計の振子の如くに更る〳〵要路に立つやうになつてから、自由黨は内治を主とし保守黨は外交に重を置くやうになつ

た。一八八六年以來約二十年間保守黨が政局を左右したのは勿論愛蘭自治問題の解決如何に對して輿論の後援を得て居つた爲であるが。一は自由黨の外交政策が民衆の信任を博し得なんだ爲であつた。かるが故にアスキス氏グレイ卿の如きも帝國主義自由黨の旗幟を標榜して自由主義の信用を回復しやうと努めたが、その思想の根柢は矢張自由主義であつて帝國主義は附け燒刄に過ぎなんだ。一九〇五年の自由黨內閣成立以來軍備縮少を斷行したのを見ても、その一班を窺ひ知ることが出來る。而して獨逸に向て軍備縮少の提議を爲すに至ては沙汰の限で、專らその交涉の衝に當つたホールデン卿がマクセー等から盛んに攻擊さるゝのは當然の次第である。然るにグレイ卿もホールデン卿と同意見であつた爲め、一昨年五月アスキス內閣改造の際は之と進退を共にして挂冠せんことを主張したとのことである。

であるから獨逸に最後通牒を送つた當時に、アスキス內閣は潔よく本城を統一黨に明け渡して誠意誠心後繼內閣を支持したならば、其態度は美事なことであつたらう。併し政黨政治の自然の歸結として黨派心が餘りに旺盛であつたから、かゝる英斷に出るとは出來なんだ。そこで一武辨のキチナー卿を陸相に擧げて兎も角も交戰の局に當つたが、兵器彈藥供給の問題を忽諸に附し、ダータネルス攻擊の暴擧に出でゝ挫敗し、巴爾幹方面の外交も常に敵に一籌を輸し、遂に一昨年五月の聯立內閣となつたのである。而もこの際統一黨が何等の條件をも附せずして大臣を出し、加之外相藏相等の要職を請求せずして、妥協したのは紳士的態度ではあるが、時局を拯ふ所以の途では無かつた。さりながら爾來統一黨側の主張は次第に行はれ、遂に昨年の五月になつて徵兵令さへ議會を通過するに至つた。そこで議會では統一黨系の議員は概して政府の態度緩漫なるを攻擊し、自由黨系の議員のうちには政府に向て徵兵令の實施を非難するものがあつた。此危怪な空氣を一掃した効績は確にロイド・ジョーヂ氏に歸せねばならぬ。

元來戰爭以前に於てはロイド・ジョージ氏は他日ア

スキス氏に代て自由黨を統率す可きものと十目之を視、十指之を指さして居つたのに、今や氏はアスキス氏に代つたには代つたが、寧ろ統一黨の首領として代つたのである。是は全くロイド・ジョージ氏が經世家たるの識見と手腕とを有するの致す所で、平時に於てこそ社會政策的立法に全力を傾倒したが、一旦强敵と干戈を交るに至るや、一意專心戰勝の効果を收めんとして努力したのである。實に自由黨出身の政治家中軍國の大臣に適するのは氏とチャーチル氏のみで、チャーチル氏は不幸にしてダーダネルス遠征失敗の犧牲に供せられ、内閣内に軍機處の設けらるゝに至つて憤然として辭職した。然るにロイド・ジョージ氏は大藏省に軍需省に陸軍省に往くとして可ならざるはなく、戰爭前に氏を蛇蝎視した保守黨は宿怨を忘れて深くその手腕に信頼するに至つた。下に揭ぐるは昨年の一月さる保守黨側の雜誌に見えた匿名の評論であるが、是を以て推すも統一黨側に於ける氏に對する信賴は決して昨今のことでは無い。

『ロイド・ジョージ氏は善い意味でも又あまり好ましからぬ意味でも煽民家である。氏は思想の釣合を失ひ抑制を缺き不正確に陷り行政上の材幹に於ても遺憾の點があるが、他面に於ては著るしく識見想像勇氣熱心を具へて居る。氏の戰前の法律には缺點もあるが、少くも思想に動かされ、眞に健全な思想に動されて立案されたものである。戰前には形勢の眞相を審にせずして軍備は愚なりと論じたこともあるが、一旦開戰となるや決勝を博せずんば止まざる國民的決意を明確に唱道して居る。以前には徒らに階級的軋轢を挑撥して得々として居つたが、今や當年の閣僚黨友と雖もその行動の國民の利害と相背馳すと認むる時は毅然として之に反抗して怖れぬのである。氏の敏捷な眼識と熱心とは產業動員を實施して戰爭の目的に向はしむるに於て偉功を奏した。今後もなほこの國事多難の秋に際し國民の勇氣と決意とを激勵し涌躍して大膽なる決斷を實行し多大の犧牲を敢てせしむる上に於て無限の報効を著はし得るであらう。』

但しこの評論ではまだ統一黨側にロイド・ジョージ氏を推すの決心も定まつて居ないが、併し統一黨側には實に適當な首領が無いのである。ボナー・ロー氏は下院の院內總理であつて聯立內閣には殖民大臣となり、アスキス首相缺席の際には代て內閣の政策を辯明して議場を心服せしめたこともあるが、何と無く物足らぬ心地がせらるゝ。內大臣カーゾン卿は熱心な徵兵制度實施論者で軍國政府の爲に隱然一大勢力となつて居るが、印度太守辭任以來復た前日の人望が無い。サー・エドワード・カーソンは聯立內閣入閣以來常に閣員を減少して事務の敏活を圖らんことを主張し、巴爾幹方面の方略甚だ無方針なるを怒て辭職した位であるから、統一黨員の間に重望を負ふて居る。辯護士として我黨の政策を辯護するの技倆に優れて居るのみで無く、剛膽にして眞摯、意志を集注するの力あり、政黨の首領として最も適任で、國事多端の際特にその特色を發揮じて居る。併し多年アルスターの統一黨員の牛耳を執て居つた關係上、愛蘭國民黨の反感を買ふの憂がある。

その他曾て南阿の總督たりしミルナー卿、募兵總監として寢食を忘れて王事に奔走せるダービー卿等何れも手腕ある政治家ではあるが、惜むらくは民衆を魅する力ある想像と思想とに缺けて居る。統一黨の諸氏がロイド・ジョージ氏に依て政權を回復せんことを思ふに至つたは自然の數である。

ロイド・ジョージ氏が今の佛國內閣議長ブリアン氏と會見した際に、相顧みて天下の經世家は唯君と僕とあるのみと云ふたか如何か知らぬが、ロイド・ジョージ氏の經歷を顧みる時は頗るブリアン氏と相似たるものがある。ブリアン氏はロイド・ジョージ氏より一歲の年長であつて議會に入つたのは十年も晩れて居るが、出身の初に過激な現狀打破論者であつたことは全く同一である。ロイド・ジョージ氏の現狀打破はウエールスの非國敎徒の反抗思想に由來し監督敎會反對に最も重きを置き、且ウエールス民族主義の主張から南阿戰爭當時の內閣に向て傍若無人の攻擊を加へた。其後閣員に擧げられてからは人民の味方と唱へて富豪を

攻撃し、社會政策的立法に於て英國の政治史上に新紀元を開いたのである。併し開戰以來その主張は漸次統一黨に接近して遂に舊臘の政變を見たのである。然るにブリアン氏の豹變は既に七八年前から世人に認められたのである。卽ち氏は當初過激な社會主義者として一般同盟罷工を唱へて儕輩の間に頭角を現はしたのであるが、議會に入るや恰かも當時の大問題であつた政敎分離問題の解決に全力を注ぎ、而も一九〇六年之が實施の局に當らんとして入閣するや合同社會黨より除名され、而して實施の困難なるを視るや一九〇九年內閣議長となり、責任の念加はると共に舊敎徒に對する慰撫緩和の政策を主張し、翌年大同盟罷工の起るに際して斷乎として之を壓迫し壯時の主張は全く之を拋つて仕舞つた。一九一四年の總選擧には事志と違ひ急進派の黨閥と戰て一籌を輸したが、一九一五年十月に至つて遂に內閣議長となつた。佛國にブリアン氏あり、英國るロイド・ジョージ氏あり、共に軍國の宰相として輿望を一身に收めて居るが、共に現狀打破論者として政界に入つたのである。ロイド・ジョージ氏と雖も早く一層責任ある位地に立て居つたなら、開戰前に既に極端な平和主義の主張を拋棄して居つたかも知れぬ。ブリアン氏が夙に一般同盟罷工の主張を棄てたのは全くその早く責任の地位に立つた結果である。而して之を過去の英國政治史上にロイド・ジョージ氏の匹儔を求むれば、バーミンガムの急進黨員として始めて政界に現はれたチエムバレン氏こそその經歷稍や似たりと云ふ可く、日本の政治史上では故陸奥伯杯が多少似通ふて居るであらう。

兎に角英國の統一黨が往時の政敵ロイド・ジョージ氏を戴いて政權を回復したのは頗る機宜に合ふた方略である。氏の人望が如何にも旺盛であるから、勞働黨は勿論自由黨も大多數は此の內閣の爲に聲援を與へることであらう。若し議會で反對を唱へるものありとせば、徵兵令に反對したサー・ジオン・サイモンの一派、戰爭その物に反對して勞働黨のマクドナルド氏と提携して民主監督同盟を起して居るトリヴエリアン氏の一

派等であらう。余輩の所見では舊臘の政變は一八四六年に保守黨のピール・グラッドストン等が自由貿易說に贊成して自由黨と行動を共にし、又一八八六年にハーチントン、チェムバレン等の自由黨員がグラッドストーンの愛蘭自治案に反對して保守黨と提携した以來の英國政治史上の一大變局であると思はるゝ。而してその結果統一黨が復び黨勢を回復することゝ思ふ、して見ると一昨年の五月に無條件でアスキス內閣と妥協したのは一の過渡的內閣を造つたもので聰明な行動であつたのである。

（十二月十日夕）

超然內閣の政治哲學

白眼臺主

政治は畢竟力の權衡の維持若くは改造の問題である。而して此事が最も明瞭に、赤裸々に發現せられるのは、國際政治の場合である。外交と謂ひ戰爭と謂ひ、其表面上の樣式にこそ差異があるが、常に力を中心として動いて居るのは一である。辭令の交換、親善の聲言の裏は裝甲せる拳（メイルド・フイスト）である。離合聚散、反間苦肉の隣は四十二珊砲、超弩級艦である。正義、人道、自由文化等の假面は、世界の公論と云ふ審判者の手前を繕ふ道具として用ゐられるが、其下には領土慾、支配慾、黃金慾等の諸相が隱されて居る。情感政治（ゲフェールスポリチー）の帽子の庇の下には、直ぐ現實政治（レアールポリチー）が常にその鋭い眼を光らせて居る。

原始種族の間には群と群との闘爭が常に行はれて、優者の群が劍の切尖で劣者の群を切り徇へ、之を殺戮して軍神を祭るなり、之を奴隷として勞働に服せしむるなり、其欲するが儘を行つて居た。斯の如き群と群と

の間の鬪爭は、現代に於ては國民と國民との間に持續せられて居る。ヘーグの平和會議は優勝劣敗の文字を將來の人類社會の記錄より削り去ると能はず、萬國仲裁裁判は國際紛議の最後の審判者たるを得ず、大國の驕慢と小國の愁訴とは間斷なく反覆せられてヤヌースの門は開閉に忙しく、獨立國、半獨立國、宗主國、保護國、屬領地の轉變は、常に世界の地圖を塗り更へて居る。

人道主義者は國家の道德が永久に個人の道德より低劣なることを慨嘆する。併し乍ら國家至上主義者は、トライチユケやベルンハーヂの口吻を學んで、國家道德と個人道德とは異つた標準に依つて批判しなければならぬことを主張する。彼等に依れば國家は地上に於ける至上物なるが故に、あらゆる手段を用ゐて自己保存の道を講ずることが即ち是れ國家の最大の道德である。彼等は國家に犧牲の德のあり得べからざる所以を敎へる。何となれば犧牲とは、或る者が更に大なる者のために身命を拋つことであるが、國家はそれ自身最大物であつて、其上に如何なるものをも戴かざるが故に、犧牲の行爲の目的物がないからである。故に國家の最大道德は自己保存の一點に在るので、このために權謀術數を用ゐても、暴力の干渉を用ゐても、敢て個人の場合に於けるが如く之を不道德であると謂ふことが出來ぬのであると。

社會心理學者は更に群衆心理の立場より、國家道德の當然個人道德より低級ならざるべからざることを主張する。彼等に依れば、群衆の理性感情は個人のそれよりは遙に低劣であり、粗硬であり、原始的（プリミチーヴ）である。蓋し個人は各自の最良の判斷によつて行動を決定するが、群衆が一體として行動する場合は、萬人共通の理性感情に依つて去就を決定するのである。然るに萬人共通の理性感情は特殊の優秀なる個人のそれよりは無論遙に低劣である筈であるからである。而して彼等の眼より見れば、國民も亦畢竟一個の群衆である。故に國家道德が個人道德よりも更に多くの原始的特徵を具有するは、是れ全く自然の數であると。

群衆が群衆として向上すべき可能性を有することは

立憲政治の信者の希望の因つて以て繫る所であつて、又歷史上原始部落の種族間の道德が、大體に於て現代世界の國際間の道德よりは遙に――殆んど測り知るべからざる程低級であつたことは、復爭ふべからざる事實である。然り、群衆は群衆として國家は國家として其理性感情に於て、從つて其道德に於て、向上進步すべきものであり、せしむることを得べきものであり、又せしめざるべからざるものである。

けれども、率直に事實を事實として述ぶる時は、過去及び現在の世の中に於ては、國際道德は矢張り個人道德より低級であり、外交及び戰爭は倫理關係でなくて力の關係である。

□

國內政治は國際政治とは之を均し並みに論ずることは出來ない。これは原始社會より今日に至るまでの通則であるが、殊に近代國家に於て政治と倫理とが相接近する樣になつた。從つて生物界に於ける自然淘汰、適者生存の理が、人類社會に於て大に其適用性を失ふに至つた。人爲の法律は劣者を優者と對等の地位に引上げ、習慣因襲は弱者を强者と同列に進ましめ、科學の應用は不平等を平等化せんとして居る。法廷、警察、工場法、勞働者保險及び年金制度、社會衞生の設備、選擧權の擴張、及び奴隸及び農奴の解放等の如きは、前代の不適者を變じて今代の適者となしたもの幾何なるかを知らぬ。殊に最近に於て發達せんとする優生學（ユージェニックス）の如きは、優者劣者の差別を撤去せんとするか、若くは少くとも劣者を將來の社會より根絕せんことを主張して居るものであるらしい。兎も角近代國家は此方面に於て其高尙なる使命を發見し、過去に於て弱者を壓制するために用ゐた主權の力を、將來に於ては不適者の適者化の事業に施し、斯くて全體の社會の結合力を鞏固にし、共通性を圓滑にし、人情味を濃厚にせんとして居るのである。――國家の道德生活の黎明期は玆に先づ內政の方面より開かれんとして居る。

此新時代の幕がデモクラシーの流行を合圖に切落されたのは、極めて意義のあることである。近代の社會

生活の複雜相は、最早高臺に炊烟を望んで民の貧富をトせられ、寒夜に御衣を脫して民の苦痛を察せられた如き時代の仁政を以て社會政策の總てゞあるとなすことを許さなくなつた。換言すれば國家の法律は國民の經濟生活、宗敎生活、文化生活等のあらゆる方面に觸れなければならなくなつた。此の時に當つて如何なる明君賢相が出でゝも、超人的識見と能力とを具有するに非れば、千態萬樣の社會關係に向つて公正なる解決を下すことは、到底之を期することが出來ないのである。されば民の疾苦は民自ら之を訴へ、民の要求は民自ら之を提出するの途は、自然的必要として開かるるに至つたのである。人民の參政權と議會政治とは政治の倫理化の必至的產物である。天賦人權說は自然法學者が勝手に編み出した理論であつて、實は歷史のロジックは之に頓着なく、社會生活の必要物として、若くは共同生活の必須なる機關としてデモクラシーを產み代議政治を導き出だしたのである。□

併し乍ら人生の各方面に附いて廻る矛盾の運命は、茲にも亦現はれた。即ち政治の倫理化の必至的產物として世に出でたる代議政治は、又もや力の關係(マハトフエアヘルトニス)を基礎とする現實政治(レアールポリチーク)に依つて運用せられざるべからざるに至つた。政黨の出現が即ち是である。

國內政治の領分で最も國際政治に酷似した體用を具備するものは政黨政治である。政黨も亦一個の群衆である。政黨と政黨との關係は群と群との鬪爭關係である。而して各政黨は群衆心理の法則に支配せられるが故に、政黨が政黨としての理性感情は、個人の理性感情よりは遙に粗硬低劣であつて、固より政黨の道德は個人の道德よりは原始的(プリミチーヴ)である。

政黨は鬪爭團體である。政黨は四十二珊砲と超弩級艦とで爭はないが、票數の多寡で戰つて居る。政黨の戰場はヴエルダンや北海ではないが、議會の議場である。政黨の外交は黨略であつて、權謀術數、反間苦肉の行はるゝことは、國際政治と敢て擇ぶ所がないのである。

超然內閣は政黨政治の弊害を匡救せんがために生れたものであると稱して居る。併し乍ら政黨政治を根本より轉覆しやうと云ふのではない。超然內閣は各政黨政派に對しては『公を秉り平を持す』と揚言して居る。故に彼等は政黨の存在を明に是認して居るものである。然らば超然內閣は如何なる使命を持つて生れ出でたものである乎。

□

超然內閣は政黨の弊害を除去するために產れ出でたものであると主張して居る。彼等が所謂政黨の弊害といふものは、政黨間の鬪爭である。是れ彼等が歐洲に於ける交戰國の聯立內閣の實例を楯に取つて、彼等の立憲的精神に背反する出現を極力辯護して居ることに徹しても明白である。併し乍ら此點に於て彼等は、超然內閣と聯立內閣との重要なる區別を忘れて居る過を犯して居ること以外に、尙ほ更に根本的の矛盾を忘れて居る。——と言ふのは彼等自身も亦一個の戰鬪團體であつて、而も彼等が彼等の出陣に因つて、政戰の局面を更に著しく複雜にしたことが、即ちそれである。

戰鬪團體としては、彼等は慥に現代日本が提供し得る最强政戰團體である。彼等は元帥の一人たる寺內伯を首相に戴いて居るよりして、軍隊と云ふ大なる物質力を後援として居る。無論普通の政戰に於ては、軍隊が出動することは決してないが、併し乍らそれが隱約の間に政敵及び國民に大恐怖心を與ふる示威的効果を有する一大潛勢力であることは、少しく政治心理に思を致せば直に分明することである。

次に彼等は現今の我國に於て超憲法的大威力を有する元老を後楯となし、又畏くも元首の恩遇を辱うして居る。——然り、彼等はどう見ても現代日本が提供し得る最强政戰團體である。

此最强政戰團體が好んで用うる武器は、いつも大臣任免に關する大權論である。彼等は彼等の出現に道德的意義を持たせることに腐心して居るが、問ふに落ちずして語るに落つ。彼等は大權論と謂ふ一言も批評を挾み得ざる言葉を國民の眞額に振り翳した。國民が政

治家に要求して居た所は單に合法的政治をなすことではなかつた。合法的であると同時に道德的政治をなすことであつた。然るに彼等は彼等の出現が合法的であることを說明するに、日も亦足らぬ有樣であつた。——丁度三百代言が法律を楯に取つて、法文に禁じてない惡事を辯護する樣に——

超然內閣が果して彼等が自稱する如く擧國一致內閣であるならば、何も三百代言的法律論を振廻して自家を辯護するにも當らないではないか。

事實を端的に說明すれば、超然內閣は力の內閣である。而も主として單なる物質力の內閣である。彼等の政治は力の政治である。時代が政治の倫理化を要求して居る時に、出端(でばな)を取り違へて迷ひ出た物の怪の樣な力の政治である。國民は之を特權階級の專擅として憤つて居る。けれども彼等は無力者の不平をせゝら笑つて聞き流して居る。政黨は之を『主義に於て反對なり』として罵つて居る。けれども彼等は失權者の抗議に一顧を與へないで濟まして居る。彼等はせゝら笑ひもし濟ましもして居る。

けれども、曾てアンリ三世の政府がボダンの主權說を要した如く、スチユアード朝の諸王がフーカーやフイルマーの王權擁護說を要した如く、ルイ十四世の專制がボスエーの神權說を要した如く、超然內閣も亦頻りに自家の存立を是認する政治哲學を要求して居る。是に於て乎、彼等は五六のドンキホーテ式の標語を案出した。曰く、擧國一致。曰く、賢者政治。曰く、秉公持平。曰く、善政主義。曰く、何。曰く、何。盡く皆批評解剖に堪へぬものゝみである。彼等は盍んぞ大膽に力の政治哲學を說かざる。

□

超然內閣の根本の過失は、國民意識に奥深く潛在して居る國內政治の倫理化の要求を無視し、一の力の關係に代ふるに他の力の關係を以てしたことである。而も此狀勢を作り出すに就ては、政黨の責任も亦決して輕少でない。

過去に於ける我國の政黨は決して國家政策に關する

主義や意見で爭つたことはなく、悉く屑々たる感情問題で爭ひ來つた。近くは二師團增設問題の論爭の如き、將又對支交涉に關する問責の如き、局外者より見れば、一黨は反對黨の支持する內閣に功を遂げさせないために、若くは反對黨の事業にケチを附ける特殊目的のために、反對若くは問責をするものとしか見えなかつた。若し夫れ議場に於ける冷嘲熱罵の交換の如きは、聞く者をして爲めに恥ぢて耳を掩はしむるものがあつた。又各政黨は自黨の利益のためには、國利民福の上から若くは憲政主義の上から見て、如何に批議すべきことをも平氣で行つて疚しとせざるが如き態度を示し來つた。例へば政友會が海軍瀆職事件が曝露後に於ても、尙ほ山本內閣を支持したことの如き、若くは憲政會の主なる前身たる同志會が大隈內閣が選擧干涉とか言論抑壓の如き非行を敢てした後に於ても、詰らぬ情實に囚はれていつまでも之に固着する氣勢を示したことの如きは、國民の愛想を盡かした所であつた。

又各政黨が常に輿論を尊重すると稱しながら、毫も之に順應しなかつたことも、國民の非常に反感を持つた所である。殊に選擧權擴張の如きは、明瞭に輿論の要求する所であるにも拘らず、第三十七議會に於ける政府黨なる同志會は素より、反對黨たる政友會に至るまで、黨としては寧しろ反對の意見を示した如きは、彼等が恬然として國民の利益を黨の利益に從屬せしめて居たことの最好適例である。

政黨は民意輿論を代表するのみならず、時としては時流に先んじて之を指導するに於て始めて政治倫理的意義があるのである。今日我國に於ては中流階級の生計問題の如きは租稅問題と關聯して重大なる意義があり、又歐洲戰亂終止後の勞働問題の如きも非常に緊要な社會政策上の案件であるに拘らず、政黨側よりは何等是に關する意見の發表あるを聞かぬ。彼等は黨利黨益を計るに明敏であり、農工商業者に媚びるに巧妙であるが、其他の階級に對しては極めて冷淡なる態度を採るは何故であるか。彼等は現行法制の下に於ける選擧有權者のみを國民と思惟して居るのであるか。それ

とも彼等は眼前に去來する小葛藤に應ずるに急にして、國家永遠の計を忘却して居るのであるか。

さうでもあらう。併し乍ら尙ほ一の重大なる根本的原因が、政黨の不見識以外に現行法制の下にある。それは衆議院議員選擧法上の選擧資格に對する財産上及び住居上の制限である。此制度の結果我國の內地人口五千五百萬許りの內に、選擧有權者は僅々百五十萬餘を算するに過ぎぬ。之を人口千に割當つれば二十九人足らずの率になる。是等の有權者以外の日本人は、選擧に際して政黨の上に何等の壓力を加ふることが出來ない政治的には奴隷と均しい境遇に在る人々である。政黨は僅少の有權者だけの意向を顧慮するが、それ以上のことは、自黨の生存上の必要條件ではない。然るに輿論は國民全般の信念より迸り出づる聲であつて、是等少數の特權所有者のみの聲ではない。政黨をして眞に民意輿論を代表せしめんと欲せば、宜しく先づ此點より改革することが絶對に必要である。

寺內々閣が世人の豫想に反して此改革を斷行すれば、國民は其功勞に愛でゝ、其一切の罪業を忘れもしやう。素より選擧權の擴張は、早晩その結果として超然內閣を葬るべきのみならず、その將來の再現を妨げ、之をして永久に過去のものとならしめるであらう。併し乍ら志士が爆烈彈を抱いて敵陣に躍り込む如く、高尙なる使命のために身命を賭して自滅の道に趨るのも亦丈夫の本懷であらねばならぬ。只超然內閣の閣僚の世界觀は、斯の如き改革を斷行することを許さぬことは言ふ迄もない。縱し又之を斷行する意思があつても、現內閣の如く貴族院樞密院の意向を顧慮するに專なる者に、之を試みることを望めば、望む方が間違つて居る。

餘す所は、我國の憲政の將來の希望は、一に之を國民の眞の自覺に繫ぐより外はない。否、是は如何なる場合に於ても、最後の希望の唯一の歸着點でなければならぬ。

眞理は竟に平凡である。

(五—一二—一五)

活動主義者も亦時に靜思瞑想せよ

新渡戸稲造

人の性質を評する時に、あの人は活動的人物である、あの人は寧ろ瞑想的性質を帶びて居るとか。彼れは事務に長けて居るが此人は思想家の風があるなどゝいふが、成程大體人を分つに此二つのカテゴリーの何れにか容れられぬことはない。然るに思想を養ふことなく活動にのみ日を送る人は果して大なる活動をし得るものか。之に反して活動の境遇を全く離れて所謂山中に庵を結んで瞑想に耽ける者が人生の眞味を知り得るものかは我輩には甚だ信じ難いところである。動もすれば此二つの性格を全然分つて、文字にも表はれて居る通り人扁に谷といふ字を書いて俗と讀み、俗といふのは重もに人事に忙殺されて其日を送つて暮らすことをいひ、人扁に山といふ字を書いて仙と呼び全く世を離れて居る人の如くにいふが、地理上の事實を察するに山あればこそ山に對して谷があり、谷あればこそ谷に對して山がある。山と谷とが獨立して存在する筈はない。必ず兩者の間に繋ぎ目がなくてはならぬ。此繋ぎ目を通つて初めて谷は谷の用をなし、山は山の本分を發揮する。

今まで大活動をした人の傳記を見るに、其の人は必ず事業に超絶した考を抱いて居る。恰度水が其源より上に上らぬといふ如く、人の活動も其人の思想以上に上るべきものではない。我輩常に今日の日本の人の言ふことを聞くに、或はして居ることを見るに、一方に於て思想に基かざる活動に奔走するものが少くない。又一方に於て働きに表はれない思想に耽つて居る者のあることを見る。若したま〳〵思想家であると信じらるゝ人が實際の事に當ると、「矢張り彼奴も俗物だ」な

ど丶卑下する風がある。何うやら考へる事と爲る事と分業的に思はれて居るやうだが、これ程禍をなす考はない。

我輩が常に公言をする如く、最も私淑するソクラテスと、基督と、リンコルンと此三人について見ても、行ふに苟も行はない。必ず高き思想より起りて深き思慮を廻らして後に實行するところが大いに學ぶべき所であると思ふ。又近頃恥しいながら初めてジャンダークの傳記なるものを繙いてつく〲此點に敬服したのである。或は人は迷信と稱するかは知らぬが、己れ以上に一種の信頼すべき力を認めて之を信ずることは恐らく此れ以上に心を强うする道はあるまい。

兒玉大將が奉天戰役の際每朝人目を忍びて木立の間に退いて太陽を拜した。或人が之を不思議に思ふて其理由を尋ね、其擧動の將軍の日頃磊落なのに似ぬのを責めたところが、今日の戰況を見るに勝敗何れに歸するか判斷に苦しむ狀況に至つて居る。到底も我軍のみに頼つて、或は自分の智慧を力にして許りでは心を安んじ難い。何か偉大なる力の本を求めねばならないが、不幸にして自分は神も知らず佛も知らぬ。先づ眼前にある太陽を拜して人間以上の力を求めんとするのであると話したといふが、普通に云ふ「苦しい時の神頼み」は、之は頗る輕い意味に取る諺であるし、且つ又自己の力に依つて判斷すべき事も、迫れば思案も出來ず、自力を以てなすべき事まで神頼みにする爲めに、此言は物笑ひとなるもの丶、死生の巷に出入したり、或は國家なり一身なりの重大な事件に當るものは、必ず自分以外の力に頼らざるを得ないものであると思ふ。

ビスマルクが曾て議場に於て誇つて言つた言に、「我我獨逸人は神の外世界に恐るゝものはない」との壯言を吐いた。其頃我輩恰かも獨逸に留學して居る頃であつたが、或夜大和會に於て留學生の一人がビスマルクの此言を引いて、「我々日本人は神をも怖れぬものである」と陳べたが、只言葉使から言へば面白味もあるが、實は意味をなさぬ事だ。果して此中に意味があるものとすれば、如何に彼の思想の貧弱にしてビスマルクの

神と稱したものは果して何物たるかは彼の腦裡には更に解し難い。即ち彼の頭には神なる思想は大き過ぎる問題であることを示し、換言すれば如何に彼の頭の小さく、彼の思想の低きかを證明するものである。

ソクラテスは何事をするにつけても一先び己に退いて我心の奥にまします鬼神(ダイモン)が何を告ぐるかを聞き其命令に從つて身を處することを努めた。他人の大いに急ぐ場合に於ても彼は屢々鬼神(ダイモン)に接することを怠らず、戰場に於ても折々立止つては鬼神(ダイモン)の意を質し、折には槍を杖にして起立したまゝ一夜を明かして瞑想に耽つたといふ。

耶蘇は屢々橄欖山に引籠り、或は時にはジョルダン河の彼岸に退いて寢食を忘れて瞑想に耽つたことは福音書にも記してある。リンコルンが四年續いた内國の戰亂の際に、此大責任を双肩に擔つて殆んど共に語る人もなき頃に、白堊館の寢室に獨り籠つて夜間當直の役人が廻る時に折々リンコルンの謂はゞ神と思想を交へる=普通にいふ所禱を捧ぐるの聲を屢々聞いたといふ。

又先に述べたジャンダークの如きも幼少の折より「わが聲」と稱して天使が少女に斯の如き事を物語つた、斯くの如き秘密を洩らしたといふて其聲の告ぐるがまゝ命ずるがまゝに行つたからして、恐らく古今の歴史に曾てなき働きをしたので、此等の人は何れも世を去り=勿論世を去ると稱して山間に退くの意ではないが、居ながらにして心に於て世を去つて、世事に人事に超然たる心を屢々養つたのである。或は斯う云ふかも知れぬ。斯くの如き事を屢々したならば益々仙人に化して世に疎くなりはせぬか。然るに事實は此の心配を無にする。先きに述べた四人の實例に鑑るに四人共何れも世態に通じた人である。何れも常識を外れない人である。我輩近頃實傳を讀むまではジャンダークの如きは常に神と交ると稱する位の神秘的女性であつたから神聖極る、如何にも世と絶縁でもした御子の如く想像したが、奚ぞ知らん、此十七歳の少女は殆んど喜怒哀樂を慾まにして、軍師の大權能を以て戰場に臨

んだに拘らず、怪我をすれば普通の少女の如き聲高らかに泣き出し、談話の間に可笑しい事あれば笑ひ、時々は人を揶揄し、我々今日東京市街を歩行する女學生に見ると其振舞が變らぬやうなところがある。ソクラテスに至つては恐らく今日東京に生れ變つて出たならば、誰か此人を大聖と思ふものがあらう。其風采といひ其用ゆる言語といひ、最も平凡にして寧ろ俗味紛紛たりなど丶人は稱するであらう。

又リンコルンの如きは學問的の修養もない人であり、風采の頗る揚らない人である。公けに演説をさせれば頗る簡單な言語を用ゆるし、私かに談話を試むれば更に威厳などは省る事なく、最も平民的な態度を保つた人であつて、俗人の標本の如くあつた。此等の人人は思想に於ては所謂俗人の思ひ及ばぬ高位に上つて、彼等の靈的食物は、到底吾人の想像にも餘るものがあつたと信ぜられる。

我輩の先代が曾て禪師を訪ねて禪の意義を訊した時に、禪師は「改めてお尋ねになることも御無用な事である。貴方がたお侍も苟も侍の本分を守らる丶方は、學ばずして禪を御承知なものである」と。先代は其意味の説明を求めた。所が禪師は、「あなた方戰場に臨んで敵と劍を交へる時に、唯向ふを斬る、突き、刺さんと進むのみで勝を得るものでない。一歩退いて初めて先方の間隙が見えるものだ。勝氣に逸やつて事をなす事に心を奪はれないで、瞬間退く餘裕のある處を禪といふんだ」といはれたと、我々にも折々話して呉れたが、世に事をする人は折々に瞑想又は思想界に退くといふ事が、此意に外ならぬのである。

先にも水は其源以上に上らぬといつた。人のする事なす事は何れも思想の結果である事を忘れてはならない。斯の如きは甚だ簡單明瞭で、三才の童子も心得て居る事ながら、實際事に當る者は此の原則を忘れ易い。成功を急ぐ爲めに、自分の企つる事の是非曲直、又其及ぼす範圍の廣狹等について考へる餘地がないらしい。殊に近來事業熱に襲はれて、唯目前の利益を目的として奔る輩には、殆ど思慮なく事業に着手するの風

がある。又政治に於ても然り、自信もなく、況んや自分以上の力を持むなどの考なくして政事に關係する。或は權力奪取の面白さに終日終夜を費やす様子も見える。又學問をするものにでも、稍同じ病の兆候があるかと思はれる。名譽心なり、或は研究の興味に心を奪はれて、心の眞底の休養を怠る傾は、所謂世の識者間にもありはせぬか。

近來或心理學者の公にした一書に、激烈なる感情が其身體の生理作用に如何なる影響を來すかを述べてあるのを見て、其所謂精神的作用と身體の行動との關係の密着なる事を深く感じた。聞く所に據れば、血球の如きは我々の心の鎮つた時には、其形狀まで變り、其効力も甚だ多いといふ。心に平かならざる所あれば直ちに形狀に變動を起して、又其効力も減退するといふ。又血液は活動せんとする時、若くは活動しつゝある時は、其分量に於ても其化學的成分に於ても大いに異る事は學術の證明する所である。恐らく世にあつて活動生活を營んで居るものが、折々退いて心を養ふと稱するのは、要するに生理狀態に變化を來たして、血液を新たにするの意に外なるまい。惜しい事にまだ心理學者がこゝまでの研究をして吳れない。然るに近來頻りに疲勞の研究が積んで、重もに之は勞働的の疲勞に關する事であつて、工場に於ける能率を增進する目的の爲めに研究されたのではあるが、此疲勞を來たす一原因として精神的原因が含まれてゐる事は明かである。故に此方面より一步若くは二步研究を進めたならば、如何に精神的休養乃至劇務より時に退いて思想界に心を轉ずる事の有益なる事が學術上に確まつて來るであらう。然し吾輩は此問題について心理學者、生理學者の研究を俟つまでの事はない。說明は彼等に求めるが、實行は已に先覺の士が屢々敎へた事があり、又狭い範圍に於て吾人も互に幾分かなした經驗によつても、其有利なる事は論を俟たぬ。役者が樂屋なしに芝居を打つ事が不可能であると同然だ。永い役を勤める者は、練習と休養の爲め準備も永く掛る如きものだ。世に事務が如何にも繁劇であるが爲に瞑想するの時なしなど

と云ふは論法の誤りといふべきものであると思ふ。自己の仕事が忙しければ忙しい程、退いて休養の時間も永きを要する筈である。

我輩は常に英國人の國民として優等なる處は此處にありはせぬかと信ずるものである。曾て巴里で有名なる歴史の大家ラビス先生に逢つだ時、佛蘭西人は英吉利人に比べて遙かに勉勵する、朝夙く起き夜は晩く退いて、終日齷齪して世を渡つて居る。英吉利人は日曜といへば教會に行き、土曜日と云へば郊外散歩に出懸けるといふ風で、一方から云へば懶惰の如く思はれるが、他方から云へば之が英吉利人をして偉大ならしむる所以であると述べたが、事業々々と稱するものは思想の表現であればこそ事業と稱する價値あるものゝ、思想なく生涯齷齪して世を終るのは、巾着切りの仕事と何を擇ばうか。事業の尊き所は、之に當る人格の表現であればこそ、又事業其物が人格に及ぼす力あればこそである。事業の爲めに人格を傷け、甚だしきに至つては之を殺す如きものであつたならば、事業として何が尊きや。人巨萬を致すと雖も魂を失はゞ何かせん。我輩は人以上に事業なしと信ずる。人を措いて事業なし、人の上にも事業がない。而して人は一事業を爲すの器械ではない。人は活動の爲めに生くるにあらず、活動は人を作る爲めである。人の人たる所以は、單に此世に存在らふにあらず、見えざる所聞えざる所に連絡があればこそ人こそ尊けれ。御製にもある通り『目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ』。見えざる聞えざる所に通ふ所あつて初めて大活動をなすと云ふのである。或は斯くいふたならば何の事業も専門で、唯空々寂々と神に心の通ふ丈けで喜んでゐる愚物も世にあるといはんが、斯の如き人が世にあるとすれば、その人格其物が已に大事業である。工業會社を起し大面積を開墾するよりも、誠の人間一人拵へる方が遙に難くないか。現に見よ、數多の會社を組織したり其頭取となつて居りながら自己の子供の教育も出來ず、自己の女房の心懸も制しかね自己の慾さへ制し能はぬを見れば、世の所謂事業は案外容易なる業なることが分

かる。人の心を變へる程難いものはない。それを思へば有形なる事業や外面的活動は何一つ遂げざるも、自分の内面的建設を謀る事は事業の中にも大事業である。即ち人格を築き上げる程に過ぎた事業はない。而して此事業は思想界に遊ぶにあらざれば到底成就すべきものでない。

漱石先生の人生觀

齋木仙醉

夏目先生は死なれた。今は氏の哲學を窺ふべき時である。人は死して哲學を殘す。況して夏目氏の如き人格に於てをや。

夏目氏は小說家と號した、然し只の小說家ではない。彼は哲學者たらんとし、詩人たらんとした人だ。彼の文學評論を讀んで見ると、彼が哲學と文學との交の深いことを確信して居つたことが分る。彼は十八世紀の文學を敍するに、ロック、バークレー、ヒユームの哲學を頗分丁寧に述べたのである。彼が詩人であることは草枕の一篇が優に證明する。げに草枕一篇は漱石の詩論であるといふことが云へる。

抑も夏目氏は如何なる哲學を懷抱されたか。是れ世人の知らんと欲する所であらう。予は氏の哲學をハルトマンの美學上の見解に近き哲學と名付けやう。又他見解からして氏の哲學を綜合的哲學と名付けやうと思ふ。何故に氏の哲學をハルトマンの美學上の見解に近き哲學といふやとなれば、氏の言葉に斯う云ふのがある。

（有體なる己れを忘れ盡して純客觀に眼をつくる時、始めてわれは畫中の人物として自然の景物と美しき調和を保つ。）

と。嗚呼此の語こそ漱石氏の極意を語つたものである。彼が物故する少し前に語つたといふ「則天去私」の語は玆に先生の善き藝術的の註釋を有するではあるまいか。尤も最近先生は道義的意味にて此の語を悟られたであらう。然し先生がトルストイやドストエフスキーであきたらぬとせられたのは何だ。それは純粋の――通常謂ふ所の――道義問題以上に、先生の天といふものは一種の意義を有して居つたのではあるまいか。例へば玆に謂ふ所の「純客觀」といふ如き語の如き。私は此の所に何うしても先生と故子規との關係を認めぬ譯にはいかぬ。先生の此の性格は先生を自然の愛好者にした。又先生を自己分析の達者にした。先生の謙遜な、そして愼重な性質は此處から來るのである。此の點に於て先生はスピノーザに似て居る。先生がヒュームを賞讃されたのは

(バークレーが出て物丈けは打崩したが、心と神丈けは依然として存在を認識せられて居た。然るにここに蘇格蘭土からデヴイッド、ヒユームなる豪傑が出て來て研究に一層歩を進めて遂に心も神も一棒に敲き壞はしたのは痛快の至りである。)

先生が如何にヒユームの哲學に共鳴して居られるかは是れで明らかである。一體先生のデカルト觀、ロック觀、バークレー觀、ヒユーム觀は面白いものであつて、先生は先生一流の解釋を以て此の四人を系統的に解釋はせられた。先生思へらく、デカルト

(オーソリチーを棄てゝ理性に從はねばならぬと唱へた人である。一般の人は他人が信ずるから信じても差支ないと考へて居る樣だが、是が間違の種である。決して人造(アービトラリー オーソリチー)の世間的通説に盲從すべき者ではないと云ふ事を主張した。)

と。畢竟先生はデカルトがインテリゼンスの斧を揮つて雜物を片附けた功を認められたのだ。前云ふ如く、先生は解脱哲學を信ぜられたので、私利私慾を去つて、純粋の相に於て宇宙を眺めんとされた方である。故に先づ數學的のデカルトに讚辭を呈せられたのだ。先生には「正確」といふことは非常に重んぜられた要素で

ある。先生がデカルトに共鳴せられるのは畢竟先生の此の素質による。

次に先生はロックに對しては期う云ふて居られる。

（ロックは先づ經驗で確かめ得ざる觀念、又は實際の事實と一致せぬ觀念を哲學界から驅逐して仕舞ふと云ふ點から出立した。）

斯く言つて、ロックが天賦觀念なるものに批評の斧を入れたことを賞讚して居られるのである。是れ又先生の解脫哲學の現れである。思ふに先生はベーコンの偶像破棄の說に大に同情を有して居られるやうである。先生の哲學的素質は又實に深しと謂はざるを得ぬ。高山樗牛を文明批評家と謂はねばならぬなら、先生は偶像破壞者、アイコノクラストの一人に數へねばならぬのである。之が恐らくは何よりも一番深い先生の趣味であつたに違ない。

さて其處で元へ戾つて言ふが、先生は斯く虛僞なる物を厭ふ性質、予の所謂解脫哲學の面目を持せられた御方である。それで自然ハルトマンの無關心の美學に共通する所を生ずるのである。「己れを忘れ盡して」の語の由來も、「去私」の語の由來も皆是れだ。先生は蛇が皮を脫ぐのを乾度愉快に思はれたらう。是れは批評家には大切な特性であ。自己吟味、自己批判も畢竟此の心と呼吸相通ずる者である。何故なれば自己吟味や自己批判は公平無私なる人にして始めて爲し得べき事であるからである。先生が

（詩人は自分の屍骸を自分で解剖して、其病狀を天下に發表する義務を有して居る。）

とは頗分奇警な語であるが、先生の死後遺骸を解剖に附せられた其の正直な研究心に富める、そして解脫した心が、玆に先生のペンに現れて居るのである。此の外先生の哲學が解脫哲學であることを證據立つる例は幾つもある。

（採菊東籬下、悠然見南山）

といふ淵明の詩に多大の尊重を拂はれた先生の淡き態度は實に先生の安住せらるゝ所の何たるやを語るものである。私は先生の死顏には接せなかつたけれども、

必ずや先生は心の奥に平和を持せられたらうと思ふ。

（深林人不知、明月來相照）

あゝ先生の好まれたる王維の詩句のみならんや。先生の靈は今眞如の光と冥合して居ることとならん。

然しながら先生の理想は決して空寂のみではなかつた。先生には前言つたやうに綜合的の方面があつたのである。

（强ひて說明せよと云はるゝならば、余が心は只春と共に動いて居ると云ひたい。）

是れ先生の心境を說明せられたものである。私は之を讀んで私の抱いて居つた感情と一致したので、眞に知己を得た感がした。

（あらゆる春の色、春の風、春の物、春の聲を打つて、固めて、仙丹に練り上げて……）

と。ボードレールは自ら悲哀の錬金道士と名乘つたが、是れは又悠々自適の居士である。予は此の點に於て先生が紅葉と一味通ふ所がありやせぬかと思ふ。固より根本性格は違つて居らうが。

（沖融とか澹蕩とか云ふ詩人の語は尤も此境を切實に言ひ了せたものだらう。）

と先生が言つたのは、予が先生の哲學を綜合主義と言つたのに當つて居る。そして先生には一種の樂天觀があつた——是れが先生が春を言ふ所以であつて——それは何かといふと、足地上を離れぬことである。解脫は求めた。然し先生の求むるものは空疎たる無一物ではない。無名ではあるかも知らぬ、ト・アバイロンではない。然し斷じて虛無ではない。先生は虛無に耐え得る人ではない。

（希臘の彫刻の理想は、端肅の二字に歸するさうである。端肅とは人間の活力の動かんとして、未だ動かざる姿と思ふ。動けばどう變化するか、風雲か、雷電か見わけのつかぬ所に餘韻が縹緲と存するから含蓄の趣を百世の後に傳ふるのであらう。）

是れだ先生の理想は。されば先生の涅槃は決して小乘の涅槃ではない。圓滿妙相の涅槃である。遮莫先生が脚地上を離れざりし著しき趣味は、

(人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向ふ三軒兩隣りにちら〳〵する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい、あれば人でなしの國へ行く許りだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。)

と、是れ先生が率直に現宇宙主義の人なることを聲明せられたものであつて、恐らくは紅葉其他日本の普通の作者の傳統を受けられた思想であると思ふ。先生が容易に死を肯ぜられなかつたと云ふ說は穴勝先生の所信と相反するものではない。先生は玆に藝術家の使命を發明せられたやうである。

(越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容て束の間の命を、束の間でも住よくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の、士は人の心を豐かにするが故に尊い。)

是れ先生の人道主義といつても善い。先生の藝術の覗ふ所は實に玆だ。先生が人として尊かつた所以も此處にあらうか。

(住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き拔いて、難有い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である。あるは音樂と彫刻である。こまかに云へば寫さないでもよい。只まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧き、着想を紙に落さぬとも璆鏘の音は胸裏に起る。丹靑は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自から心眼に映る。)

と。是れ疑もなく藝術家の如何にして自己の使命を果すべきやを歌つたものである。後半は自から東洋の唯心論になつて居る。然し先生の堂々たる詩歌上の一見識は次に引用するものによりて始めて明瞭なり。

(もし詩が一種のムードをあらはすに適して居るとすれば、此ムードは時間の制限を受けて、順次に進捗する出來事の助けを藉らずとも、單純に空間的たる繪畫の要件を充しさへすれば言語を以て描き得るものと思ふ。)

是れ先生がレッシングのラオコーン論中に吐きたる詩は、時間的なりとの議論に向つて、時間に代ふるにムードを以てし、詩が一のムードを現しなば、それにて詩なるにあらずや、必ずしも時間的繼續を要せずと述べられしものなり。予は先生の議論に多大の眞理を認む。予曾て句あり。

(青蛙白露の夢桔梗草)

是れ空間か、時間か。詩か繪畫か。詩にも亦繪畫的のものありといふことは許さゞるべからざる如し。兎も角も先生は玆に大なる討論題を後世に殘されしものといふことを得。

嗚呼先生は逝きぬ。解脱主義の哲學者は逝きぬ、綜合主義の哲學者は逝きぬ、精しく言へば、方法に於て解脱的にして、目的に於て綜合的たる哲學者は逝きぬ、哲學的藝術家は逝きぬ。げに先生は大西祝先生、上田敏先生と共に三副對となるべき人か。

我農村に向て畜産の趣味と實益とを説く

長崎發生

一 畜産の意義

太古朦昧なる時代に於ては、水草を逐ひて羊や牛などを牧ふた所から、當時の家畜の厩ひ方を牧畜と云つたものである。されば家畜とは何であらう。字義より解釋せば之は動物たるは云ふ迄もないが、之を殊更に家畜と名づくる所には、何等かの特別な意義がなくてはならぬ。即ち家畜とは普通の野生獸とは異り、人との關係が極めて親密なもので、(一)人によく馴れ親しみ、(二)人に養はれ、(三)人の手になれる住家に生活し、(四)報酬として人の生活上に必要なる、肉とか乳

とか毛とか或は動力と云つたやうに、經濟的生產物を人類に供し、(五)而かも人の世語にて子孫を繁殖させて行くやうな動物の事である。

元來支那に於ては獸とは四ッ足にして毛あるものゝ總稱とし、地にて產するものにて、之を養へば畜と謂ひ、馬、牛、雞、羊、犬、豚を六畜となしたのである。されど現今世界に存在するもの約四十五萬種、是等動物中に特に家畜とすべきものは僅に五十餘種位に過ぎないのである。今其主要なる家畜の名を擧げれば

（1）牛、羊、馬、驢、騾、山羊、豚、兎、
（2）雞、吐綬雞、鵞、鶩、珠雞、
（3）蜜蜂、

是等は世界各國に養はれてゐるが、其外

（4）印度の水牛、西藏の犛牛、暹羅の象、砂漠地方の駱駝、歐洲地方の馴鹿、

などが家畜として重要視されて居るが、其他犬猫は家畜の仲間ではあらうが、經濟的生產物を直接に提供するものとは云へない。けれども駱駝の毛の貴重なるより、熱帶地方の之を家畜として價値を認めるやうになつたやうに、何等かの意味を以て、モルモット、カナリヤ、キジ、ダチウなども家畜の中に數へやうとする人も少くない。

そして之等を飼養する唯一の目的は、前述の如く人の生活上必要なるものを得る所から、如何にせば飼養せられ得べきやと其生產的なる方法を講究するを畜產學と云ふのであるが、極めて古い時代には之を牧畜學と稱へ、中古は家畜繁殖管理學とし、近時は多く畜產學とするのである。今や科學の進步と共に外貌學、生理學、解剖學、發生學、生形學、病理學等に應じては、

（1）遺傳學と淘汰の原則とに順ひ、
（2）畜產の改良、繁殖等を圖る

のであるが、また家畜の諸病の未發に守るべき衞生と、病軀の醫療に俟たなければならぬ、從つて

（3）獸醫學

とも相離るべからざる關係がある譯で、要するに今日

畜產上心得べき主要なる條件としては

（１）飼養者の動物愛護心の大切なること

（２）病まぬやう飼育すること

（３）生產物を生產的に利用する所にあるべきを思はねばならぬ。

二　人類と家畜との關係

家畜の生產物は其家畜の種類によりて相違がある。牛の生產物を乳、肉、動力、皮、角、骨とし、馬は動力を主とし、肉、皮、骨、又は乳、羊は毛と肉を主とし、又は乳を產し、山羊は乳を生じ、又は毛、肉、豚は肉、脂肪、皮、毛、兎は肉、毛、毛皮を產するのである。雞其他の家畜は肉、卵を主とし、蜜蜂は蜂蜜を生產物として居る。此等動物の糞尿其他排泄物は肥料として農家の最も貴重とする所である。そして是等の生產物を生產的に利用して行く所に、得も云はれぬ趣味は涵養せられて行くのである。

斯樣な所から牧畜業は、多くの生產業中最も早くより成立したものである。人類が地球上に現はれた當時、自然の草木の果實を採食しては生活したものである。之が時を經るにつれて魚貝禽獸を漁獵するやうになつたのである。乍併人類の增加は食物の缺乏を感ぜしめ、生存競爭漸く行はるゝに至つたので、從て動物を馴化するに至り、水草を追ふては所謂遊牧を生活とするに至つた。之が牧畜の始めである。之から時代の變遷と共に植物の栽培は行はれ、農業の道は開拓せらるゝに至つた。此處に至つて農業と家畜とは大に離るべからざる關係を持續するに至り、終に農家は家畜を副業的に飼育するに至つたのである。斯くて家畜は社會一般に缺くべからざるに至つたのである。

今や工業の進步著しくなり、機械力の應用廣く行はるると共に、家畜力の需用もまた大ならざるを得ない。また農具の改良發達と共に畜力の利用決して少くない。土木事業の發達も亦畜力を俟たざるなく、斯の如くして社會の進步は一に畜力の利用に俟たざるを得ない。また良食料としての家畜生產物は貴く、其衞生的價値の大なるは、植物生產物よりも遙に大なるを見る

東洋大學學生募集

（規則入用の者は郵券二錢封入の上申込むべし）

●大學部第一科（哲學倫理科）第二科（國語漢文科）專門部第一科（倫理教育哲學科）第二科（國語漢文倫理科）各科學生募集●入學志願者は成るべく四月十日以內に願書を差出すべし九月十一日授業開始入學期限四月二十日●入學資格は中學校、師範學校、文部省指定の宗教學校を卒業したるもの又は文部省指定資格所有者に第一種生に無試驗入學を許し其他は第二種生に編入す、別に聽講生の規定あり在學中は徵兵猶豫、卒業者には中等教員無試驗檢定の特典あり外に夜學部佛教普通講座の設あり眞宗日蓮宗禪宗眞言宗の宗乘を教授し別に西藏語の講座あり本學生に限り無料聽講の特典を有す、

名譽會長　文學博士　井上圓了
前學長　文學博士　前田慧雲
學長　大內青巒

東洋大學（舊稱哲學館）
東京小石川原町
電話番町四四四番

横山健堂先生著

小杉未醒畫伯裝幀

快心録

好評再版

本書は著者得意の隨筆的述作にして、收むる所醉中語、勝負、天才奇說、雷神論、出たら芽の記、亂山の中より、吐月峯、目白の大御所、猿橋記等合せ十八篇何れも磨きにかけたる珠を繋ぎて成れる珠數の如き文字にして顆々皆光を放つ、讀者一度本書を繙かば無限の感興に恍惚たらむ。愛讀を賜へ。

四六判四百餘頁
寫眞版挿入
總洋布上製美本
定價壹圓廿錢
送料八錢

東京・本郷一ノ大通
電話下谷四三六二
振替東京一二五五八
日東堂

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

最新刊

黒頭巾 **横山健堂先生著**

小杉未醒畫伯裝幀・岡落葉畫伯挿繪

義民宗吾

四六版四百七十頁總布上製
口繪挿繪寫眞等十數葉挿入

定價壹圓參拾錢　送料八錢

暴君虐政の下に三百村民將に餓死に瀕す、宗吾敢然として挺身難に走る、事成らず一家を擧げて慘刑に斃る、恨事是に過ぐるものあらんや。然れども千載の下、義神として崇拜せらる。國民犧牲の念世界に卓越せるもの彼に負ふ處なくんばあらず。著者夙に宗吾の仁俠に感激し舊地を踏査し古老に探り群書に渉り、半歳の日時を費し、幾度か稿を改め遂に此書成る。從來坊間に行はれたる附會の説を排し、彼が生立より終焉に至る迄、其眞面目を捉へ全卷に躍如たらしむ。切に愛讀を乞ふ。

東京市本郷區本郷一ノ大通　**日東堂**　電話下谷四三六二　振替東京一二五五八

(中付二の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

のである。殊に牛乳、山羊乳、雞卵の如きは、極めて消化し易くて、貴重な滋養物であり、また肉類は營養分の豐富なるものである。そして羊毛は保溫力に富み、羅紗其他毛織物の材料とせられ、衞生的良衣服とせらるゝのである。斯くして社會は益々複雜となり、人類の精力は費消せられんとするに至りて、大に家畜生產物を利用せねばならず、また日常取るべき衣食も亦衞生的價値の大なるものを求めるやうにしなければならぬのである。

三　家畜と趣味

斯うして禽獸蟲魚と云ふだけでも、只何となく、何等かの先入主がありて、或る一種の印象に囚はれるやうな氣がする。元來動物は古來人類の生活上に非常に密接な關係のあつたもので、上古に於ても既に此等の動物の或物と生存上の競爭をもなしたのである、既に今日に於ても尙ほ或動物と一種の爭鬪は續けられてゐるのである。乍併之と正反對に人類が動物を手懷けるやうになつたのは、極めて古い時代からである。所謂家畜なるものは長い間人類と深い關係を保つた結果、終に人類に化せられた野生の動物である。斯くも人類の動物と戰つた結果、或は恐怖の念と尊敬の念と撫育の念とを懷くやうになつた。そして名立つたる神々とか菩薩とかに使はれてゐた動物もあれば、惡魔とか夜叉とかに使はれた動物もあると云ふ風に、神話的にも善惡兩側の動物に接する。或は又歷史上の事實に基くも、非常に野蠻な所には猛獸や毒蛇などが棲み、非常に開化した所には牛馬羊犬などが飼育使用せられて居る。斯樣な關係から、動物が人生に吉凶の觀念を聯想させた事は、世界各國の典籍に於いて十分に認め得る所である。

斯うした關係から人々の信念を支配せんとする宗敎及藝術とは非常な關係がある。殊に藝術上から見た畫題としても、此等の動物中には人類生活と交涉のある家畜を主とするものである、此點より見れば、矢張馬や羊、犬、野兎や狐狸、或は鳥類が主題のやうである。何故に馬が古くから最も多く畫題となつたであらう。

馬は昔から人類と密接な關係があり、殊に軍事上の目的に使用せられた所から、昔の繪畫には戰爭を主題とし、或は武勳赫々たる軍人の事蹟を題材としたものが多いだけに、自然馬が多く現はれたものである。また狩獵も古い時代の絶好の畫題であつた所から、此等に關係した鳥類、犬の如きものも見え、或は遊牧時代の印象は、更に牛の群れをも畫題とせらるゝのであつた。そして彼の伊太利の壁畫としては、フロレンスの澤山の騎馬は十五六世紀頃の絶品であつた。また獵を主題とした犬、鹿其他の動物の壁畫もあつたが、此等は寧ろ想像の加へられた空想的で、全く古い日本畫のやうな、半ば現實的で半ば空想的なものが多かつたのである。

四　繪畫に表はれたる家畜

斯くして和蘭の十七世紀頃には動物畫も殖え、馬や牛もあれば羊も見える。ウーゼルマンの繪は、主なる場所に白馬が描かれ、ボウルホッテールの畫は牧場を描いたもので、殊に「若い牡牛」と云ふのが有名である。彼の有名なるレンブラントの「解剖の圖」と相對して光彩を放ち得たもので、云はゞ和蘭の國寶とも云へやう。その大幅の畫は中央に大きな牡牛が居り、横には牝牛が臥せてゐる。之等は總て自然の光景を背景とせる所に、得も云はれぬ牧場の詩的さがある。また西班牙の畫には昔から「帝王騎馬の圖」とか、愛犬を伴ふ貴族とか、羊牧者と羊と一緒に犬の馴るゝに、羊と番犬との描かれたものも少くない。

そしてフランス邊の田園の光景を有の儘に現はす爲には、牛とか羊などは實に缺く事の出來ない題材で、露けき朝の草原、霧立ち迷ふ夕べの牧場の景色は、風景畫家には絶好の畫題として、夫れを捉へやうとした人々も決して少くはない。其中にも幽遠なる田園の風光を描いては、其名殘りなくその空氣を現はしたものは、フランソア、ミレであつたのである。また宗教畫中にも羊の繪が多く描かれて居たが、耶蘇の降誕の畫には牛と驢とが附き物となつて居る。乍併ミレ時代の羊は宗教的畫題の附屬物と云ふよりも、牧畜的趣向か

ら生ずる印象が主題となつて居るものが多いのであつた。斯うした所からさし登る淡い月影に照らされながら、夕暮の牧場に羊を集めるなどは、如何にも趣味深きものが多い。

斯樣に家畜と云ふものが、自然を描く田園や牧場に伴つて、此處に深い印象のある趣味に囚はれるのであつた。此處に生活する田園の人の、牧園の人の、平和な趣味の深さを味ふことが出來るのである。げに我が神造の田園に遊べ、我が牧場に行け、高く低く聖い自然の歌、牧場を流るゝ小川の水、山々を走る涼しき風、如何に吾を慰めつゝある、如何に吾を勵まする、見るもの聞くもの、總て我等が受くる福音である。之を讃美するものは田園文學となり、牧場の歌となり、化しては我等の生命とするに足るのである。誠に眞善美なる宗教とは則ち之である。誠に牧人園人は總て一種の平民的詩歌を有し、自然を友としては之に潔められ、ある希望と光とに接觸して美しき性格は涵養され、彼は自然の間に潜みつ、總ての潜勢力を盡しつ勵みつゝある間に、ゆかしき家畜の飼育の趣味と、之等に捧ぐる愛護心とは、永生の生活を形造るのである。茲に家畜の趣味は更に深遠なるものとして、我等の心底に何等かの意味の信仰的生涯を送らせるとは、彼の平民的詩人としてのホイトマンをして、此等の生活の眞義ある詩的生活を語らしめたもので、誠に趣きのある事ではあるまいか。

五　畜産上大なる愛護の觀念

斯樣に一つの事業をなすにも、專一に趣味と伴はねばならぬ。其趣味は軈て確信となり、其裡に「其氣になる」といふ土臺が出來、初めて着手と成就とを見る譯で、斯くして總ての苦難にも打勝つのである。されど我國人は昔は百姓とか牧畜とか云へば、下等で苦痛で無趣味な事のやうに思はれて居たのであるが、其實想像以外の趣味がある。殊に家畜を飼育するが如きは、他に比して遙かに趣味の豐富なものである。可愛い動物に接し、之を撫育する時の愉快さは、花見る夫れよりも、月を賞する時の夫れよりも優るのである。さりな

から敢て花を賞し、月を讃する人の多きは、未だ眞の牧畜の趣味を解せないからである。此の趣味を得、玆に其氣となり、確信を得ば、愛心は増大して行く所に、畜産の知識は増進して行くのである。さらば何故畜産は國家必要の事であらう。畜産と云ふ事が牛馬羊豚などを飼養して世の需要に應ずると云ふだけに、國家と利害關係の深い事業であつて見れば、國民としては是非その發達を圖らねばならぬ譯である。畜産經營法としては無論種々ある事であるが、大體から云へば家畜の食ふべき草や穀物にて家畜を養ひ、世の需要に應じては、經濟を立てる事が專一の主眼とも云へやうが、また家畜の厩肥によつて耕地を肥やし、夫れから家畜の食すべき穀菜を採り、其穀菜が再び家畜の腹に入りて成長の源ともなるのである。斯樣な穀菜の栽培と此等の厩肥の大切なる事を忘れてはならぬ。斯くして作物栽培上肥料問題は喧しくなつた結果は、西洋風の人造肥料を見るに至つた。けれども主たる肥料は矢張厩肥でなくてはならぬ。其地味の如何によりて人造肥料を施すにしても、之が濫施は大に愼まねばならぬ。換言すれば、石灰質の缺けた土質には石灰質に富んだ人造肥料を厩肥に交ぜて使用する上にも注意せねばならぬ。斯うした大切なる厩肥を造るには、牛馬羊豚などの飼養が最も經濟的な方法である。

　農家にして此等家畜を飼へば、肥料の得られる上に其他貴重なる生産物は得られる。馬なれば二歳にして五六十圓乃至數百圓の收入があり、牛は生後六ヶ月に親より離せば、五六十圓乃至數百圓となる。今假に家畜による農夫の收入が百圓とするも、日本の國情よりすれば農作物より百圓を擧げるは困難である。自身の勞力さへ計算に入れぬ今の農夫の有樣では、夫れで牛馬のために百圓も收得すれば幸福ではあるまいか。乍併生産と云ふ點から考へば、常には乳と肥糞を提供しながら、死しては皮、肉を提供する牛の飼育を奬めざるを得ないが、また常には貴重なる肥糞と毛とを提供し、死しては貴重なる毛皮と滋養の肉とを提供し、且つ毎年一度は必ずや可愛い仔羊の生産とを見るべ

き、緬羊の飼育も亦快ならずやと云はざるを得ない。固より農家の副産として牧畜を營むべきは云ふ迄もないが、殊に牛を飼育するものは、之が副業的にも緬羊飼育の大切なるを、特に記せざるを得ないのである。今や國事多端の時である。そして年々毛織物の需要隆んなるに伴ひ、之が原料たる羊毛の輸入は益々激増するに至り、年四千萬圓に及んでゐるが、また羊毛加工品其他羊肉羊皮の輸入は決して輕忽の問題ではあるまい。農家の棉花を得るに、如何に多くの日數と多くの勞力と地面とを費さゞるを得ないであらうか。況んや其糞尿の肥料等の魁とせらるゝに於ては、農家の人々の一考を煩はさゞるを得ないのである。誠に育羊の普及は實に我が軍需品獨立の上にも國防充實の上よりするも大切な事であるまいか。斯うして畜産と云ふ事が、夫々の關係からしても、其飼育の國家の爲めにも個人の爲めにも最も必要な事とするのである。

六　畜産改良の根源は人畜の和親に基く

斯樣にも家畜の飼育は國家上必要のものとせられて居る。其飼育の裡に籠て愛心は禽獸にまで及ぶで、韓退之の『叢生行』と云ふ歌は、董召南と云ふ高徳の人を主題としたもので、其中には狗が何うしたとか、鷄がどうしたとか、此等の動物を宛ながら家族のやうに、人間並に取扱つたものであるが、實際人が禽獸を愛すれば、禽獸も亦人に懷いて來るものである。所謂「以心傳心」と云ふやうな感應は、只人類間のみではない。佛典にも「我れ成佛すれば、虎も猫の如く、獅子も犬の如くなりぬべし」とあるは、全く宗教上の理想的光景であるにせよ、此等の意味はまた聖書にも現はれてゐる。そしてライトバーカの描ける「百獸その徳に懷く」と云ふ繪畫には、一人の幼き人の周圍には獅子、虎、犬を切め、羊其他の數多の動物の集合せる光景は、其愛全く禽獸に及べる平和な光景である。全く愛に優る寶はない、愛に優る武器はない。此聖愛は家畜を飼育するに唯一のものでなくてはならぬのである。之を要するに、文明が進めば進む程、人間と動物との間に、益々親和の狀態が現出せられて行くのである。併乍古

來我が國人には殆ど動物との親みがなかつたものと見える。夫れは我國の家畜にせよ、家禽にせよ、所謂「ねおけ根性」のものが多かつたからでもあらうが、主として日本人の愛心が、親み方が、西洋人の夫れよりも劣つてゐるやうである。けれども樺太などに住めるアイヌ人の如きは、雪と戰ふためには犬を必要として、之を愛せねばならぬものとしたので、其心底から犬を愛したものである。從て犬もよく馴れ、人の使用の儘に身を任せたものである。

是等の點から考へても、飼ひ方と云ふものは、實に人畜の和親に基くべきかを思はむるのである。斯くした關係から英米などの馬は極めて温順であるが、日本の馬は蹴るもの、噛み附くもの、跳ねるものとするのでもあらうが、之は全く之に接する人々に、愛畜心の缺如せるより來る現象たるは云ふ迄もない。從つて家畜を取扱ふ人々の愛畜心の大切なるは、自ら理解せらるる事でもあらう。之が牧畜の觀念を增大せしむる所以ではあるまいか。動物愛護心の乏しい國民としての日本人には、畜產の觀念に乏しいのも道理である。全く畜產の改良は此愛護心の涵養から起さねばならぬのである。諺に「家畜を牧はんとせば、先づ其人を養へ」とあるのも、詮ずる所は全く飼畜者の飼畜者らしき愛護心と、病まぬやう飼育する心得とが、なくてはならぬのである。

七　動物愛護會の由來と家畜の改良

此等の事情から考へれば、西洋諸國に於ては其敎育の結果と、其宗敎的信仰とが結び附いて、此處に動物愛護の觀念は發達し、動物愛護會の事業は發起し、愈盛んとなつた譯でもあらうが、その主義とする所は、動物に對し同情の念を持つ事は、人間倫理上から見て最も大切な事で、動物を虐待するやうでは聽て人類を虐待する性情を助長する事になり、動物を愛撫するやうになれば從て人々を親愛するの性情を發達せしむる、とするのである。之がためには西洋諸國に於ては、動物に關する特別の法律は出來、何人でも動物虐待するものは、法律に問はるゝ事になつてゐる。

斯うして十數年前より、我國に於ても此の主旨のものが出來るやうになり、一部の紳士淑女は之がために、熱心に動物愛護の觀念の普及に努めてゐるのであるが、また之が普及のためには、犬に關した物語や、馬に關した物語の本をも出版された事がある。此等は犬の境遇や、馬の境遇を描いたもので、牧畜に心する人人は必ず一讀する價値があると思ふ。

それ等の教訓は單に教育者のみには限らない。其外農人にしても、一般人に取つても、斯うした一つの教訓から、確に愛畜心は養はれ、自己の働きの上にも、偉大なる慰安と力とを受くるに足るのである。

斯うした動物愛護の精神を受けた西洋の家畜は、如何にも我國の夫れよりも、溫順な性格を保有してゐるのであらう。全く我が國に於ても、從來の觀念を一掃して、動物に對する同情の念と愛護の情とをもつて、家畜の飼育に心したきものである。そして飼育者には全く此心が大切である。誠に育養者の心得一つでは、動物の性狀を一變させる事にもなる。斯うした關係から、夫等の特長を何處までも發達助長せしめ、種々なる學理と種々なる事實とによりて、家畜の改良の成立を見るに至つたのである。斯うした助長は、終に乳牛のホルスタインの改良種となり、肉羊のシユロプシヤ種の改良を見、軍馬のハクニーの改良となり、豚のバークシヤ種、ヨークシヤ種の改良を見、鷄のレグホンや名古屋コーチンの改良種を見るに至つたのである。

要するに種類の何たるを問はず、家畜と云ふものを飼養せんとせば、在來の惡習慣は全然之を改めねばならぬ。從來の如き不良のものにて價値なき家畜は、澤山繁殖させた所で、國のためにもなつたものでない。夫れ相應な經費と相應な愛畜心とを以て飼養し、佳良なる食物をも與へねばならぬ。從て善良なる家畜を得るには、之に伴ふた飼養法が大切である。只に山野に放牧しては貧い野草を食はせただけで、何うして改良が出來やうか。今となつては既や農家の一大決心の要すべき時である、牧畜者に一大決心の要すべき時ではあるまいか。本氣仕事に取懸つて、根本的に國利民福

を計る覺悟が大切である、夫れは全く此等に對する趣味と共に、愛畜心より起らねばならぬ覺心である。

八　牧畜を除外視せる我國農家の經濟事情

本邦は古來農を以て國の基となしただけに、穀菜の豐凶は直ちに國家の盛衰に關係を來し、農家の饑餓に瀕するは云ふまでもなく、一般の經濟界に影響すること大なると見るのである。之を要するに農は國家の重鎭たる所以であつて政府が毎年米作の增減に對し詳細の報告をなすのも之が爲めである。乍併近年に至り交通機關の完備とともに商工業の發達を來し、地方的市價は世界的となり、有無相補ふの容易なるに至つた。從つて本邦に於ける農業は依然として舊慣を墨守することが能はないで、廣く範を歐米に需める事になり、彼我の長短を取捨しては、經濟的に穀菜の生產を期待せざるを得なくなつたのである。斯うして本邦の農業は主穀農產として、就中其の多數を占むるものは小作農業である。そして何れも掠奪的農業を行ふもの多く、偶々施肥するものありとするも、單に作物に對する速效肥料として、寧ろ土地をして劣等ならしむるのである。わけて作物を單純に、殊に水田地方にあつては米作の一方に偏するので、偶々凶作にでも逢へば、貧窮其極度に達し、饑餓に瀕するは、客年の東北並に北海道に於ける事情に徵して知り得るのである。して見れば農業は年中行事により一定の作業に從事するでなければ、其利益を得ること薄く、また東北地方の如き短期の農地にあつては、殆ど半歲を雪中に浪費せねばならぬので、之が爲めには勞働の平均を失し、一日の勞働は數日の生活を維持するの有様となり、殊に冬季閑散の時にあつては、徒に酒食に耽り又は賭博を行ふの惡弊のある所から、農村の衰退は甚だしきに至るのである。

今試に本邦に於ける一般農家の一ヶ年の收支を見るに、大略次の如くであるが、之に依て見れば農業の薄利にして、農家の困難なる程度を察知するに足るのである。但し田一町一反畑五反の外に山林若干を有するものにて、收支は米價十三圓五十錢として加算のこと。

一、自作者

收入	五六七、〇〇		
一田畑	四〇九、〇〇	一園藝飼養特有作物	七六、〇〇
一雜收入	三一、〇〇	一肥料	五一、〇〇
支出	五三八、〇〇		
一食料費	二〇四、〇〇	一肥料	八六、〇〇
一負擔	五六、〇〇	一衣類費	三六、〇〇
一住宅費	一三、〇〇	一教育費	一三、〇〇
一薪炭費	一一、〇〇	一臨時雇入	一〇、〇〇
一其他雜費	一〇九、〇〇	一其他雜費	四〇、〇〇

差引損金　壹圓

二、小作者

收入	三九四、〇〇		
一田畑	二八一、〇〇	一園藝飼養特有作物	二三、〇〇
一雜收入	四五、〇〇	出稼手傳其他に依る收入若干	
支出	三九五、〇〇		
一食料費	一四二、〇〇	一小作料	一一六、〇〇
一肥料	六七、〇〇	一負擔	四、〇〇
一衣類費	二一、〇〇	一薪炭費	五、〇〇

以上に依れば、收入不足なるも出稼、手傳其他により多少の收入はあるとの事である。

九　耕作を除外せる牧畜業の不利益

又翻つて畜產の狀況を見るに、牧場經營者は何れも廣漠たる山野を有して、多數の動物を飼養するのであるが、其土地は如何にも瘠薄で、野草の繁茂も劣惡で、且つ一步の穀菜畑だも有しないものがある。之れは本邦に於ける牧場經營者の根本的誤解であつて、牧場は農耕地に不適當な土地では到底合理的に經營せられやう筈がない。寧ろ農耕地を基礎として經營するでなければ、完全なるものを見る事は出來ない。

今北海道の實例を見るに、從來本道の牧畜は廣漠たる山野に年々放牧をするでなければ收利なしとし、漠大なる土地を獲得するに努めたものである、乍併今日に至つては不毛の地幾千町步を有するとも、優良なる牛馬を飼養するに足らぬと悟るやうになり、寧ろ肥沃

の小地積を得て合理的に經營せば、其利益の大なるべきを認むるやうになつたのである。又組織に至つても、徒に歐米の方法によりて規模を大にし、高價の器械を設備しては、畜產の改良に努めんとする人もあるやうであるが、彼我の關係は地形上よりも、農業の組織によりても、又農民の程度より考へても、其儘之を本邦に應用する譯には行かない。して見れば常に本邦農業の事情に鑑み、農家の實行し易い方法に依て奬勵すべきで、全く日本化した畜產の奬勵を以て緊要とするのである。

要するに農業の本來は、農牧の混同方法になるべきが當然で、相互に獨立すべきものではない。そして農業經營上最も注意の要すべきは、地方の減耗を防ぎ、貴重の勞力を省略して生產費を低減せしめ、地方を永遠に保持するの方法を講ずべきである。今や人造肥料の濫用の結果は地味劣惡に傾き、作物の收量は減退して行くのである。斯くして現今海外より輸入する人造肥料は約六千餘萬圓に上り、尙駸々として增加しつゝあるの狀態は、本邦農家が動物を飼養するものが少くして、主穀農業に傾き、厩肥の生產に努めないからの事である。若し農家も戶每に牛馬乃至羊豚の飼養をなし、混同農法にする時は一擧して此等の輸入を防止する事が出來るのみか、一朝凶作に際會するも收穫皆無と云ふことなく、畜產物の收入を得て生計を維持することが容易となり、又勞力均等に冬期永き寒地に於ても、最も有益なる方法と謂はざるを得ないのである。

歐米に於ける農業法は固より土地廣く畜產物の需用大であれば、必ずしも之を以て本邦に於ける適例とは云ひ難いが、只規模に大小あるのみで、其組織に於ては異る所なきより、玆には參考迄に米國の一農場の例を擧げて見たい。夫れは三十年前獨逸より米國ウヰスコンシン州に移住し、開墾に從事してから今日に至りたるもので、凡て百四十エーカーの土地を有する一農場の事である。

一土地百四十英町步（作物三十五英町牧草地六十英町放牧地四十五英町）

一牛　大畜　二十頭　小畜　二十頭

一耕　馬　四　頭　一豚　四　頭

一蜂　百二十群　一雞　三百羽

一家　族　主人一人長男及二女あり長男農業に二女は家事に從事す、

一勞働者　常傭人三人一ヶ月給料一人二十弗、外十五歲のもの一人、執業は朝五時より夕八時迄、朝夕搾乳、其他牛舍の仕事終れば、圃場に出で、勞働に從事す、一人平均乳牛八頭管理す、

一資本及收支の大要

土地の價格　一萬四千四百弗

家畜及器械の價格　一萬弗　計二萬四千四百弗

收　入(一ヶ年に)六〇二五、弗

一家畜の賣價　三、〇〇〇　一牛　酪　二、〇〇〇

一雞　卵　四〇〇　一蜂　蜜　三〇〇

一馬鈴薯　一二五　一林　檎　二〇〇

支　出(一ヶ年に)三六七五弗

一租稅及保險料　二、〇七五　一購買穀物(穀其他)一、八〇〇

一勞働賃　一、二〇〇　一建物修繕　四〇〇

差引殘金　二、三五〇

此計算中には家族の勞働並に生活費を見積らず

斯の如き農場を經營するに當ては、家畜は勿論作物果物其他のものより、凡ての收益を擧ぐるに努むべきであるが、此等の組織による時は常に勞働の均等を得、且つ廢物の利用は充分に行はれ、經營確實で利益大であり、且つ食物の如きも殆ど自家產のものを以て足るのである、此點は特に注意の要すべき點かと思はれる。

之を要するに本邦は土地狹隘で農業の規範も甚だ少い、集約の方法により農業を經營せらるものであれば、各自所有の地積により、可成く勞力を利用して、農作物は勿論、牛馬羊豚より養雞果樹に至る迄、相當の配合方法によりて計畫を立て、零碎の利益たりとも疎にせず收支を見るに於ては、必ずや其得る處大にして、將來畜產を加味せる農業によりて益々農村の繁榮を來すべきは期して俟つべきである。斯樣に合理的經營をなすにも、之等に伴ふべき趣味と知識とは勿論必要で

はあるが、茲に最も大切なる事は、家畜を愛護しながら生産的に飼育する事で、是非共農牧混法の有利なるべきを知得せられたいのである。

十　人文の進化に伴ふべき愛畜心

斯うして人文の進化に伴ふた愛畜心の大切なる事は、今更云ふ迄もないが、此に一考すべき事は、同情（愛畜心）と確信（病ませぬやう飼育する事）と牧者らしき牧者と云ふ事である。斯うした關係は教育上に宗教上に對照して見ても、餘程面白い關係があると思ふ。之を家庭の上に之を學校の上に考へても、進んでは一村に一郡に或は一縣に及ぼして、君臣の關係から官民の協力と云ふ上にも、餘程面白い味合があるやうに思はれる。彼の遊牧の民が常に數多の羊と生活した時にも、牧者と羊との間には一種の親和があつた、同情があり、信頼があり、確信があつた。此に協力一致といふ麗い精神は涵養されたのである。

時勢は國民の結束と國民の確信とを要求して居る、過去の戰勝を以て將來を律する譯には行かない、今や軍備擴張の秋である、軍備即ち國産の充實を企圖すべきである、農村振興を圖るべきである。國家經濟に心を置き、萬事之れ國産に奮勵すべきである、官民一致して此の軍備を充實すべきを思はねばならぬ。其の間には一定の服從がなくてはならぬ。萬世一系の皇室を奉戴して國民の使命は凡て一に歸着すべきである。吾人が趣味及び實益より見たる畜産を口にするも亦此理に外ならず、殊に吾人が緬羊飼養の事を口にするが、往昔牧羊者と羊群との間柄は如何に美しかりしを思はねばならぬ。緬羊は友情厚くして群性を有し、所謂協同生活に富んでゐる、一人の牧者に導かれて何處までも伴はれて行く數千頭の羊群は、只此の牧者を信頼するのみである、牧者に從ふのである。牧者の確信は羊群の信頼となり、羊群の一致協力となるのである。縱令猛獸の群中に闖入するとも只牧者の聲に勵まされては、可弱き羊群の勇み方は、終に猛獸を壓倒した實例は決して少くはない。由是觀之、只結束一致、皇室を信頼する國民こそ一に幸福たるべきを思はねばなら

ぬ。強者と雖も若し和合と疏通とがないならば決して弱者の前に誇る譯には行かない、緬羊の牧者に對する信頼は一に牧者の確信に同情に期待するのである。我が帝國國民は皆兵士である、上下一致して農村振興を圖り、産業に勵み、所謂軍備充實に應ずべきである。斯くして軍備は平和を持續せしめ、平和は必ずや軍備の荒廢に依つて破れるのである、同盟條約も協約も軍備の缺陷に依りて益々危からざるを得ないのである。

今や我が國情に徵するも、君臣の間にも、官民の間にも、主僕の間にも、斯うした徹底した協力心によりて、我等がなすべき使命を全ふせねばならぬのである。此に於て愛畜心愛國心愛村心の意義を明かにし、協力一致して、生産的事業に協力したきものである。さらば農者よ農者たる使命を完ふせよ、さらば牧者よ牧者を完ふせよ、常に農者は牧者の事に心し、牧者も亦農事に心したきものである。斯くして商工者は商工者たるの使命を完ふし、各自其天職に從ひ、各自の使命を完ふせしむる上にも、斯うした家畜の趣味と愛畜の意義とを明かにしては、何處迄も人の行くべき道を辿りたいものである。其處で都會と農村との間に需給圓滿の途は講ぜられ、常に充實した軍備は確立して、聖い平和の光が東天に輝きはすまいか、其處までも家畜を愛護するやうに心得たいものである。（大正五―八―五）

支那最近の政局の眞相を說いて特使派遣問題に及ぶ

法學博士　吉野作造

（一）

十二月初めの新聞に、初めて支那政府が曹汝霖君を

特使として我國に派遣するといふ報道が現はれてから、間もなく又之が北京の國會の方面の故障の爲めに取消しになつたと云ふ報道があつた。特使派遣と云ふ事は、袁世凱以來の懸案で、現に去年の正月にも問題に上つたが、其時は我國の方から拒絶したのであつた。今度のは我國で歡迎の準備全く整つたのに、向ふの方の都合で沙汰止みになりさうなのである。支那は表向き我國と所謂善隣の間柄たるに拘らず、我國に向つて未だ今上陛下御卽位の祝意を述べてゐない。何時か機會を見て特使を派遣すると云ふ事は、言はゞ兩國の間に之れ迄懸案になつてをつた譯である。然し單純に御大禮の祝賀を述べる丈けの事なら、何時でも差支ないのだが、之を機會に種々政治上の意見の交換も行はるべき次第なので、從つて適當な機會を捉ふると云ふ必要がある。今や我國は新内閣となつて頻りに日支親善を標榜して居る。支那に取つては正に特使を派遣して、從來の國交的債務を果たし、更に親しく政治上の意見を交換するに絶好の機會である。人或は今度の特使派遣は進んで日本側から之を慫慂したのだと云ふ。が然し慫慂がなくとも、今日は支那が進んで特使を派遣するに何の妨げのない時機に達して居るといふべきである。

然しながら之は單純に支那對日本の關係上からの話である。更に支那の内部の事情から云ふならば問題は自ら別になる。そは支那の中央政界は今や南北兩派の政爭闌にして、殆んど歸嚮する所を知ない。御大禮祝賀の特使派遣が同時に何等かの政治的使命を有するものとすれば、特使派遣の結果たる政治的成果の利害を何れの派が受くるかは、内政上重大の關係がある。是れ此の問題が支那に於て特に矢釜しく論ぜられる所以であらう。予輩は支那最近の政局の内面に流るゝ諸々の事情を傳聞して、段總理が大總統に謀る所なくして曹汝霖君を特使に任命した事に就て、多少の諒解を有する者である。國會議員の多數が曹汝霖君の派遣を以て自派の勢力に非常な動搖を來たすべき一大事なりとして、極力之を妨害する所以に就て多少其餘儀なき事

情を諒とする者である。以下最近に得たる各種の情報によつて、昨今の政界の眞相を説き、以て特使問題の將來をも揣摩して見やうと思ふ。尚支那政局の變轉に就いては、一昨年の暮の第三革命勃發以來、絶えず本誌に於てその報道評論を怠らなかつたが、其後に得たる材料によつて前説の謬れるを發見したこともあり、且つ當面の問題を明かにするには數ヶ月以前の形勢から溯つて之を説くの必要があるから、多少既掲の論評と重複するの恐あるけれども、袁世凱逝去當時の事から話を初めようと思ふ。

（二）

袁世凱の死んだのは、昨年の六月六日である。彼の死によつて空位となつた大總統の地位は黎元洪之を襲ひたるも、然し北京政界の實權は、國務總理たる段祺瑞にあつたことは言ふを俟たない。此際所謂南方革命派の勢力は如何なるものであつたかといふに、第一上海に集れる所謂文治派の連中は、唐紹儀を中心として大體相當に結果して居つた。唐紹儀が中心であつたことは、彼が帝政問題の起つて以來、熱心に其反對運動に盡力して居つた事實、並に其聲望經歴にもよるが、も一つには、彼が我青木中將に接近して居つたといふ事にもよるだらう。革命運動の先輩としては無論彼よりは年少ではあるが孫逸仙、黄興が居る。然し孫・黄は共に遊軍として其部下を率ゐ只管唐を應援して居つた。斯くて兎に角上海の一派は相當に堅く結束して居つたのである。更に飜つて革命派の實力的根據とも見るべき肇慶の軍務院は如何といふに、此方も岑春煊の下に着々固まりつゝあつた。當時彼の節度に服するものは、雲・貴、兩江、四川の外、浙江、湖南がある。只廣東の龍濟光丈けは、多少懸念すべき點ないではなかつた。そは帝政派の殘黨梁士詒が來つて彼を誘ふあり、又彼の兄の龍覲光に依つて遙に張勳と通ずる所あつたからである。蓋し龍覲光は曾つて廣西軍に苦しめられたるを恨みて忘れず、釋放後密に北上し、途次張勳を訪うて彼に一臂の助力を仰いだのである。之より龍は表面岑に附し乍ら、裏面張勳と交通する所があつ

たらしいのである。之に加ふるに、岑春煊の勢の加はるのは卽ち日本の勢力の加はるなりとして、絶えず岑と日本人との活動を妨げて居つた香港方面の英國政廳が、頻りに龍濟光に同情したといふ事實がある。此等の事實は自ら龍濟光の決心を動搖せしむるものであつて、假令獨立運動に加擔しても、彼は十分に安心を與ふることは出來なかつたのである。特に彼に對する疑ひは軍務院が彼に江西討伐の爲めに出征を命じた頃から強くなつた。なぜなれば彼は容易に此命令に從はうとしなかつたからである。然し當時は龍濟光の態度曖昧といふことが南方に取つての唯一の弱點で、他には大體南方各省の團結は相當に强かつたのである。

故に段祺瑞が北京政界の中心勢力となり、南方と妥協をしようといふ場合になつても、彼は袁世凱の如く全然南方を無視するといふ考は初めからなかつた。彼は相當に南方を容れなければ時事の收拾が六ヶしいといふことをよく知つて居る。されぱと言つて固より全然南方に屈することをも欲しない。故に例へば南方の人に若干の大臣席を讓るとしても、爲めに自分が南方の勢力の爲めに押し出されないやうにとの用心は十分にして居つたに相違ない。けれども全然初めから南方を敵としてかゝるといふ考はなかつたやうである。南方の人も亦或る點迄彼の意を諒とし、特に不黨主義なる標語をかゝげ、政黨分立の觀念をすてゝ彼と共に擧國一致の內閣を作るといふ態度に出でたのである。然るに段の此考は間もなく變つた。彼は久しからずして從來の態度を變じ、南方を壓して漸次自己の地步を固めんとする方針を取る樣になつた。

何が故に彼の考が斯く變つたかについては色々の說明が試みられて居る。が、其の中最も主なるものに少くとも三つある。一つは龍濟光の兄の龍覲光の運動の結果である。彼が先に途を徐州に取りて張勳と會見したことは既に述べた。其結果如何なる獲物があつたかは解らないけれども、十二分の意見の交換のあつたことは疑ない。更に彼は北京に入つて國務總理の秘書長徐樹錚を訪うた。一說によれば彼は此時徐に向つて三

十萬元を贈賄したとある。眞僞確かならざれども、然し此等の關係より龍濟光と段祺瑞との間に結托の成つたことは疑ないらしい。此種の結托は實は、龍濟光自身の特に最も希望する所であつた。なぜなれば彼は袁世凱の兒分として從來夥しき多數の革命黨員を殺戮して居るから、軍務院にくつついて居つても碌な待遇の得られないに決まつて居るからである。又北方の段祺瑞にしても此結托は頗る都合がよい。何となれば龍を樹てゝ行くことに依つて大に南方派を抑へることが出來るからである。斯くして兩者の間に忽ち默契が成つたのであらう。第二は梁啓超の運動に注目しなければならない。梁啓超は、思ふに袁世凱逝去以來支那に於ける最も縱橫の奇策に富む一人であらう。彼は自己の爲めに權勢の地步を占むるの目的に對しては、殆んど手段を選ばない。初めあれ程熱心に帝政反對運動を起しながら、南方革命派中の聲望が自然唐や岑に歸するのを見て、彼は卽ち南方派を捨てゝ款を段祺瑞に通じ段の下に新たなる地步を作らんとしたのである。一說によれば彼は元來籌安會の黑幕であると言ふ。果して然らば例の帝政問題の元兇は彼であるのであるが、後に帝政運動の中心が梁士詒に移るに及び、彼は卽ち一轉して帝政反對の急先鋒となり、此運動によつて他に新たなる自家の地步を作らうとしたといふものがある。然し之は餘りに穿ち過ぎた說明のやうに思ふ。然し疑ひない點は、彼が帝政反對運動の急先鋒であつたといふことである。彼は獨り其獨特の名文を以て帝政反對の聲を擧げたのみならず、彼は一面に於て蔡鍔を動かして雲南に送り、更に自ら南京及び杭州に赴いて馮國璋や朱瑞を說いた。馮國璋が革命動亂の起れる當初から南方に接近するに至つたのは、彼の運動が慥かに一つの理由である。馮國璋は當初雲南の起義に策應して南京で起つ積りであつたことは今日極めて明白である。彼は現に部下の陳之奇を日本に派し、神戸に於て蔡鍔と會見せしめて居る。蔡鍔の雲南に向ふや陳は香港まで同行した。斯の如きは皆馮の南方に心を寄せた事を證するもので、而して之實に一つは梁啓超の盡

力の結果である。こゝまでは梁も熱心な革命派の幹部であつた。然るに間もなく革命派中の多數の識者が、唐紹儀を以て其中心點とするに至るに及び、權勢に戀々たる梁は悶々として忍ぶ能はず、遂に唐紹儀の勢力を抑へんとの魂膽から、唐等に多少の異議あつたに拘らず自ら奔走盡力して南方肇慶に軍務院を立てたのである。唐繼堯を撫軍長とし、自らも岑春煊等と幷んで撫軍の一人となつて居る。而して彼は軍務院に於ける樞要の地位を占め、更に之を代表して日本に使し、其間に多大の事功を收めて南方革命派の中堅たらんとしたのである。上海派が反對した爲めに物にならなかつた。而して其後の形勢の發展も亦彼の豫期の如くならず、革命派の中堅といへば人多く岑と唐とを數へて梁に及ばない。於是彼はまた失意を感ずるに至つた。其中に父の喪に會して彼は一時政界を退いたが、然し其間彼は實際絶へずいろ／＼の小策に耽つて居つたことは公知の事實である。而して袁の死するや、即ち彼は直ちに段と結托して自家の地歩を更に新に開拓せやうとした。而して彼は次に示すやうな結構な土産を持參して段に來り投じたので、段も亦喜んで之を歡迎し、遂に彼の智謀を假りて南方を抑へようとしたのである。第三には即ち梁啓超の盡力による軍務院の撤廢である。軍務院の撤廢は、梁啓超が北上の途中浙江の呂公望の誘拐に成功して後出來たものである。浙江が四月の十二日獨立を宣言し、最初の都督屈映光が密かに款を北京に通ずるの故を以て五月五日迫られて其任を辭した事は今之を繰り返すの必要はあるまい。屈に代つたのは純民黨の呂公望であるが、袁世凱在世當時は民黨の彼を戴いて反袁的勢容を張つたのは何の不都合もなかつた。併し今や袁に代つて段祺瑞が北方の中心となつたとしては、呂公望は決して革命派の將軍として適任ではない。なぜなれば彼は段祺瑞の乾兒であるのみならず、段と其鄕を同じうし、又段祺瑞の曾て校長であつた保定陸軍學校の出身者であるからである。故に彼は元來段祺瑞の意志には反抗することの出來ない人物である。之を見て梁啓超は彼に誘拐の手を加へたのであ

る。尤も初の間は、革命派有志の監視嚴重にして呂は容易に軟化の色を見せなかつたが、其監視緩むや、即ち彼は梁と共に軍務院の撤廢を主張した。是七月初めの事である。之には梁啓超の門弟たる四川の蔡鍔も亦同意であつた。革命運動の元勳たる蔡鍔の四川と、富有天下に鳴る浙江省とが脱退しては、軍務院は其存在を續ける譯には行かない。斯くて岑春煊等も怨を呑んで同意したので、南方の實力的根據は、之が爲めに大いに攪亂せられたのである。右のやうな事情から、段は漸く南方派與し易しとなして、漸く其爪牙をあらはすやうになつたのである。

段祺瑞の態度の豹變は、自ら南方の勢力に動搖を來さゞるを得ない。中にも軍務院を中心とする所謂南方の實力的根據は、龍濟光が段祺瑞と通ぜる結果俄かに岑春煊に向て反噬の態度を採るによつて、形勢頗る困難になつた。斯くして所謂龍濟光退去問題が起つたのである。陸榮廷が新たに廣東の督軍に任ぜられたが、龍濟光の容易に退去するの色なきを見て、彼も亦病と稱して赴任を躊躇して居る。岑春煊の側は頻りに龍に退去を迫る。龍は觀音山の防備を嚴にして敢て反抗の態度を示す。李烈鈞が奮起して兵を以て廣東に迫り、將に開戰の慘禍を見んとした事は已に我々の知る所である。斯くて兎に角龍濟光は南方派に取つて隱然たる一大敵國の觀を呈し、岑等の勢力を有力に牽制するので、先づ第一に之を處分するにあらずんば、廣東省は雲貴諸省と共に十分に南方の實力的根據となるといふ譯には行かなくなつた。

然るに龍濟光は、前述の如く梁士詒、段祺瑞と脈絡を通じるのみならず、英國の勢力の亦暗に彼を助くるものがある。在香港交通銀行支配人の梁李典は梁士詒の弟で、頻りに龍の爲めに便宜を計つて居る。港商總會總理劉鑄伯は、果して噂の如く香港總督の旨を承けたものか否かは分らないが、頻りに新聞を操縦して岑春煊と李烈鈞とを攻撃して居る。支那の諸新聞の中にはは頻りに香港政廳は扶龍抑岑策を採つて居るとか、甚だしきは密かに龍濟光に武器を供給したとか、又は

觀音山の備砲の操縱の爲めに、米國艦隊より水兵の雇入れを周旋したとか云ひ觸して居るものもある。此等は固より一片の風說に過ぎざるべきも、然し香港の官憲が嚴重に岑春煊と外界との交通を妨げ、爲めに肇慶より發し又は肇慶に宛てたるあらゆる電報乃至信書は、決して安全でなかつたといふ事實がある。蓋し英國政廳は岑は全然日本人の援助の下にありと誤解し、岑の勢力の下に廣東省を置く事を絕對に妨害するの方針を採つたのであらう。而して此政策の結果として利益を受くるものは云ふ迄もなく龍濟光である。

斯う云ふ形勢であるから、岑春煊は廣東の始末には非常に苦心した。此始末の爲めに何を措いても必要なのは資金であるが、然し資金は岑春煊の最も缺乏する所であつた。而して此點に於て日本は大いに岑春煊を助けて居ると英國人側は想像したらしいが、事實日本は殆ど何等の助力をも與へて居ないのである。一體英人が香港あるが故に廣東の興廢に利害關係ありと主張するならば、日本も亦臺灣あるが故に對岸の福建廣東に重大の利害關係があるといへる。英人の廣東を見る恰かも米人の墨西哥を見るが如くなるは、日本人のオイそれと承認し得る所ではない。何故に日本は此際親日の岑春煊を保護して他日の計をなさなかつたかとは、當時此方面に在留する多數の日本人の慨嘆する所であつた。岑及び李は現に或筋に向つて借款の申込を爲したのであるが、結局其快諾を得なかつたやうである。日本としては惜しい事であつたともいへる。斯く岑は色々困難したのではあるけれども、それでも大勢に勝つて、遂に龍濟光を海南島に追ひやる事を得た。然し今日と雖も龍の勢力が全然廣東を去つたと觀るならば大なる謬であらう。軍資に乏しき南方派は、未だ決して十分に廣東に於て安心は出來ないのである。

尤も人によつては、新たに廣東督軍になつた陸榮廷は亦、必ずしも南方派として親任すべきものではないといふ。然し此見方は必ずしも正當ではないやうに思ふ。或人は、彼が雲南起義の當初馮國璋を通じて淸朝復辟を提案した事があるの事實を擧げて、宗社黨臭味

があると雖ずる。成程あの時はさう云ふ考を持つて居つたかも知れない。然し目下宗社黨の有力者は決して陸榮廷々以て其味方に數へてゐないのを以て見れば、彼が蔡鍔一派の勸說を受けて以來、今や熱心なる革命派の一人となつた事は、今日之を疑ふの餘地はないと思ふ。彼は今や陳炳焜を後任として廣西の督軍に擧げた。廣東に於ても亦遠からず紛亂の收まるを待つて譚浩明を後任に据ゑ、自分は岑春煊の後を追ふて政界から退引する積りであるとの事である。彼の人格の恬淡を想ふべきである。決して革命派を裏切るやうな人物ではない。

　廣東ばかりではない。四川も亦蔡鍔の退去以來紛擾が絶えない。湖南も亦同樣である。して見れば、稍確實に南方派の勢力の許に在りと見るべきものは、雲貴二省と廣西のみであつて、他は形勢混沌として居る有樣である。而して此形勢は北方派の勢力が強くなればなる程益々安定に遠かるの傾向がある。誠に心細い次第である。されば其頃上海で孫逸仙や、黃興などに逢つた人の直信に據ると、兩人共に南方の武力的基礎には殆んど絶望し、唯彼等は此際如何かして民心の之れ以上散裂するを妨がん事に汲々として居つたと云ふ事である。されば南方派は今や武力を以て北方に對抗する事は餘程覺束なくなつた。唯賴む所は北京に於ける國會議員のみである。幸に國會に於ける多數は革命派之を占めて居る。彼等は今や此多數を以て一歩々々北方派を壓倒するの外に仕方がない。けれども動もすれば段祺瑞の寛嚴兩樣の壓迫の爲めに、兎角足並みが亂れるので、そこで其統一結束の爲めに中心勢力を作るの必要に迫られた。之が唐紹儀の北上を見るに至つた所以である。

　更に此際南方派をして一層困難を感ぜしめたものに、張勳を中心として起つた七省同盟がある。七省同盟は徐州の張勳、蚌埠の倪嗣冲、武昌の王占元、開封の趙倜、濟南の張懷芝、吉林の孟恩遠、龍華の楊善德以上七將軍の、七月卅日より八月二日に亙りて北京に宛てたる李烈鈞討伐の電請から起るのである。表面は

個々獨立の行動であるけれども、固より通謀して此電請をなしたものなる事は明白である。而して其の根本の趣意は、李烈鈞討伐を名として、龍濟光を保護せんとするにあるや疑ない。當時北京政府では、段は着々南方派を壓倒しては居りながら、尚未だ小心なる彼の事とて最後の手段に出づるの勇なく、往々南方派の壓迫に屈して龍濟光を處分せんとする態度を示した。而して龍濟光の處分に成功するは、自ら革命派を促して更に一歩を進めて頑迷なる各省將軍連の處分に着手せしむるの端緒となるかも知れない。して見れば龍濟光の處分を黙視するは、やがて自家の地位の動搖を來たすの基になる。そこで彼等將軍連は、言はゞ自衞の爲めに龍濟光を擁護するの必要を認めたものであらう。加之當時革命派は、南北妥協以來、第一次には舊約法の復活を請求して之を得、第二次には舊國會の復活を請求して之を得、更に勝に乘じて帝制派の嚴罰を要求して居つた。實力不相應に遣り出した傾がないでもない。夫れ丈け將軍連は自ら不安を感じたのであらう。そこで彼等は一致して革命派に當る事に相談をきめ、先づ龍濟光を保護するの名の許に運動を始めたのである。而して龍を援くるは又同時に革命派の地盤を弱むる所以にもなるので言はゞ一擧兩得の策である。斯くして彼等の同盟は容易に成立を見た。後に福建の李厚基、江西の李純も加つて初めて七省になるのである。即ち七省同盟といふ所以である。

(三)

九月半ば唐紹儀は愈々北上に決した。彼は南北と共に段祺瑞の所謂不黨主義の擧國一致内閣に、外務總長に擬せられて居つたけれども、辭して久しく其任を受けなかつた。九月に入り同志の間からも、又段祺瑞の方からも、切に請はるゝので愈々北上に決したのである。同志のものが彼に北上を勸めたのは、北京に於ける南方派議員の足並みを結束するに必要と認めたからであらう。段祺瑞の彼に北上を迫つたのは、彼の聲望と手腕とを利用して對外交渉殊に借款問題の進捗に利用せんとしたものであらう。斯くて九月の上旬上海を

發し中旬を以て天津に着いた。然しながら最近彼に接見せる者の報ずる所に據れば、彼は初めより眞に就任するの考なくして北上したものらしい。彼は初めから段祺瑞の誠意を信じなかつた。彼は曾て袁世凱の下に中華民國第一次の內閣を組織した。袁は外國借款の出來るまでは隱忍して彼の力を利用したけれども、一度借款の成るや、即ち爪牙を露はして彼を斥けた。彼は段の下に再び此の不體裁なる役目を爲すを欲せず、篤と段と意見を交換し、政見の一致を見た上、尙ほ他日に處するの明確なる保障を得なければ、斷じて入閣しないといふ決心であつたさうだ。彼が天津より段祺瑞に呈したる所謂入閣條件は、即ち此趣意で書いたものである。此條件は唐としては必要なものであつたかも知れない。けれども段としては殆ど承引し得べからざる程苛酷なものであつた。從つて兩者は始めより到底一致する事は出來なかつた。是に於て唐は天津に來た儘北上就任を肯んぜず、段も亦到底彼を北京に迎へ得ざるに諦めを付け、反對に今度は彼を排斥するの態度に出でた。然るに北京に於ける南方派は、大擧天津に下つて一大示威運動を試み、且つ强ひて彼を北京に擁して、あはよくば段を押退けて唐內閣を組織せんとするの意氣込を示すや、段は愈々積極的に唐排斥の運動に着手した。一つには天津の軍官巡警を使嗾して、市民大會を開いて唐の十大罪惡を掲げしめ、他方には更に張勳を促して七省同盟を擴大し、唐紹儀排斥の大同盟を作らしめた。之より所謂十三省同盟の跋扈が初まる。十三省同盟とは前記の七省に加ふるに、山西の閻錫三、陝西の陳樹藩、奉天の張作霖、黑龍江の畢桂芳を加へたる十一省に、綏遠城の潘經楹、熱河城の姜桂題を加へたる連盟で、精確に言へば十一省二城だが、之を押並べて十三省同盟といふのである。之は固より南方派排斥の目的を以て段祺瑞の一派が計畫したるものに相違ないので、從つて其黑幕には梁啓超、梁士詒、阮忠樞陸建章、段芝貴の徒がある。殊に陸と段とは天津に在つて專ら連絡の本部を作つて居る。差當りの目的は、李烈鈞を廣東より追うて龍濟光を擁護する事、又は少

くとも龍濟光の面目を立てる事、今一つは唐內閣の成立を妨げる事である。然し彼等を聯合せしめた眞の共通の利害は、自家の地位と勢力との擁護に在るのだから、申合せの主たる箇條としては(一)同盟各省の督軍は一人も交易を容さゞる事、(二)現在各省の軍隊は一人も減ぜざる事、(三)同盟以外の各省に於ても督軍として舊國民黨員を任ずる事を許さゞる事といふやうなことを揭げてある。此十三省同盟の力で唐の北上を大に妨害したのである。遂に唐は九月廿五日猛烈なる辭表を北京に送り、蹶然として上海に歸つた。此辭表は滔滔數萬言に亙り、張勳の橫暴を罵り、龍濟光の罪惡を算へ、而して之を咎めざる段祺瑞の不都合を責めて言辭辛辣を極め、更に一轉して李烈鈞の勳功を擧げ、之を待つに道を以てせざるを責めたものであつた。兎に角折角之れまで表面を取り繕つて來た段と南方派との關係は茲に明白に斷絕することになつたのである。兩派は固より從來とても反目暗鬪はして居つたが、表面は所謂不黨主義を標榜し、彼此黨を樹て爭はず、一致提携して國事に當るといふ譯であつた。が、此關係も唐の辭去に依つて茲に形式上亦明白に斷絕した譯になる。以前は兎に角、今日では親日派の頭領たる唐の退いた事は、特に我々に取つては注目の價があるのである。

尙序に一言したきは唐紹儀の排斥に付ては在留外國人側の聲も亦存外高かつたといふ事である。唐紹儀は袁世凱の下に於ける第一次內閣の時、借款問題に就て外國に不信の罪を買つた事がある。然し今頃之を種に彼を排斥するの聲を擧げたのは、之れ恐らくは唐によつて日本の勢力の北京に瀰蔓するを猜疑した爲めではあるまいか。

唐紹儀辭去後の政界の形勢は、先づ十三省同盟の跋扈を以て終始して居る。彼等は張勳を代表して――或は張勳が十三省同盟の名に於て頻りに國民黨の非違を罵り、國民黨の多數を占むる國會を罵つてやまない。國會にして其非違を改めずんば兵を率ゐて北京の政界を淸掃せんなどゝ暴言を吐いて居る。そこで一方には軍

人の政治に干渉する弊を説いて之に對抗する者もある。餘りに此同盟が跋扈するので南方の雲、貴、兩廣並に四川方面の將軍連も亦反對同盟を作つて之に對抗したのであるけれども、然し氣勢頗る揚らない。蓋し中間の所謂觀望派は此頃多く北方に傾いたからである。支那では兩極端の主義を取つて飽くまで忠實なるものは案外に少い。中間の多數は所謂觀望派で、所謂大勢の動くがまゝに、朝に西し夕に東するといふ連中である。故に先に南方的であつた者も、近頃段々多くは北方的に變らんとするので、當時南方派の策士は二三の中間觀望派に向つて、何とかして其自ら一轉して段派と宣言することなからしむる爲めに苦心して居つた有樣である。斯んな愚にもつかぬ運動の爲めに、孫逸仙や黄興の如きまでが曾てわざ〳〵杭州に赴いたことすらある。

獨り此際斷平として南方派の爲めに氣を吐いて居つたのは、北京に於ける國會議員の連中である。南方派は國務院の中にも居つた。彼等は唐紹儀に連座して辭職することを避けた。第一革命後の唐内閣失敗の際は宋教仁を初め有力なる國民黨大臣は袖を列ねて辭職したのであるが、其結果却つて益々袁の跋扈を助けたので、今度は其經驗を繰返すまいといふのが一つの理由、又も一つの理由は、今度は袁世凱の如き恐るべき確實なる勢力がない、段祺瑞の如きは向ふに廻して之と爭ふに妨なきのみならず、肝腎の大總統が我黨の味方であるといふので、依然大臣の職に留つてゆつくり南方派の勢力恢復を計らうといふのであつた。それでも大臣の中谷鍾秀や張燿曾の如きは餘程段祺瑞に接近して來たと云はれて居る。厭くまで南方派の爲めに段に反抗して來たのは内務總長の孫洪伊丈けであらう。彼は初めから段祺瑞を馬鹿にしてかゝつた。段祺瑞を困らす各種の問題は多く彼の提出するところであつた。そこで段祺瑞も亦彼を荷厄介にし、平政院問題の際には大總統に迫つて極力彼の排斥に力めた。孫も亦厭くまで之に反抗して、段の頸にすがりつき、死なば諸共といふ決心を固めて毫も屈しない。之には流石の段も共

處置に困つたやうであつた。若し夫れ國會議員に至つては、買收脅迫の結果幾分足並の亂れたる者あれども、孫洪伊壓迫によつて段の態度の露骨なるを見るや却て議員は決心の緒を固め、一層結束を固うして段に對抗したやうである。段が唐紹儀の後任として十月三日には陸祥徵の承認を求め、十月十七日には更に汪大燮の承認を求めたるや、少數の差ではあるが、國會は二度共之を否決して段の面目を潰したのである。十月十九日には鄒魯の提出した張勳査辦案は大多數を以て衆議院を通過した。斯くて孫洪伊も議會と共に劍を揮りかざして段祺瑞に肉薄する。段にして彼等に屈することを欲せざる以上、彼には最早クーデターを遣るの外途がなかつた。張勳の如きは、固より心密かにクーデターの斷行を彼に期待して居つたのであらう。然しながら、段祺瑞は遂にクーデターを斷行するの決心をつけ得なかつた。蓋しクーデターを斷行するには、第一黎元洪の意志を無視してかゝらねばならない。第二にイザといふ場合に其の政策を遂行するに十分なる後援を得て置かなければならない。此の點に於て彼は袁世凱の如き勢力なかりしは勿論、彼が餘りに徐樹錚を重用したる結果曲同豐、靳雲鵬の如き直屬の部下まで彼に疎隔する樣になつたことに氣が附かなかつた。斯くして、クーデターも遣らない。兩者睨合ひの姿で續くことゝなつたので、南方派は暫く國會に於て段の跋扈を牽制するに止めた。それ以上事を急いでは反つて反對の勢を激成するの不得策なりとなして、こゝ暫くは隱忍以て徐々に勢力の回復を計ることにしたらしい。

（四）

此時に當つて我々の大いに注目すべきものは、張繼の活躍である。彼は今や北京に於ける南方派の一中心人物として萬般の畫策に與つて居る。而して此頃南風の甚だ競はざるに慨し、共頹勢を挽回せんとして一大活躍を初めた。而して其活動は先づ南京の馮國璋を羅致するとから初まつた。馮が革命の初め欵を南方に通じたとは先にも述べた。故に南方派が彼に說くに全然手がゝりのない譯ではない。のみならず張繼は同じく

直隷の出身なるの故を以て、馮と同郷の誼がある。加之彼の副總統たらんとするの豫ね〲の野心は、馮をして從來常に南方に秋波を寄せしめて居つた。故に彼は張勳の招きに應じて徐州會議に代表者は送つたが、李純と共に初めより之に冷淡であつた。のみならず、現に同盟には加はつて居ない。又彼が副總統たらんとすれば國會に多數を占むる南方派の同情を繋ぐの必要あるを知つて居るからである。故に副總統の好餌を以てすれば、或は彼を羅致し、又彼の勢力をかりて北方の壓抑を防禦することが出來るかも知れない。是れ即ち張繼をして馮を説くの一案を思ひつかしめた所以であらう。斯くて張繼は九月二十九日を以て北京を發し、彭允彝、李肇甫の二君を率ゐて南京を中心として長江沿岸の各地に遊説した。此遊説の結果計らずも彼の贏ち得たる獲物は、軍閥派の分立による段祺瑞の勢力の減退である馮國璋との提携による南方派の勢力の恢復である。

張繼は副總統の好餌を以てマンマと馮國璋を手に入れた。然るに副總統の地位は實は愚かにも段祺瑞も亦之を覗つて居つたので、副總統選擧を問題とすることになつた結果として、茲に段と馮との個人的競爭が初まつた。此兩人の競爭は、又支那に於ける普通の現象として、馮を戴く直隷派と段を戴く安徽派との反目を結果する。斯くして軍閥は何時の間にやら直隷派並に安徽派と對立して競爭することになる。安徽派の重なるものは浙江省の呂公望を初めとし、北京の憲兵隊を司る江朝宗、吳炳湘、及段が湖南の督軍たらしめんとして、岳州の司令官にあげた吳光新の如きが之に屬する。直隷派には是れ亦張繼などの遊説の結果であらうが、同じく直隷出身たる江西の李純及び直隷と同系統と見るべき山東出身の武昌の王占元がある。長江沿岸の三將軍が同一の目的に結束したといふことは之を輕輕に看過すべきことではない。其上之と附隨して見るべきことは北京に於て已に孫洪伊が之れ亦同鄕の關係を以て、從來北方派の急先鋒であつた曹錕と接近したといふことである。兩者共に直隷出身で、遙かに張繼と策應して馮國璋と共に一味の勢力をなすべきは言ふ

を俟たない。何れにもあれ、張繼は十月十一日を以て安心と成算を齎らして北京に歸つて來た。翌日直ちに同志の人に計つて近く兩院協議會を開き、副總統選擧問題を討議すべきことに決定した。其結果十六日を以て協議會が開かれた。十月三十日いよ〳〵副總統の選擧があつたのであるが、それまで段は或は黃金を振り撒き、或は巡警を使嗾して頻りに運動に努めたに拘らず、遂に馮國璋の當選を見た。是れ皆南方派の盡力によるので、從つて之と馮との結托は益々固くなつた。斯くて此頃より從來の不黨主義に代ふるに二大政黨主義を唱ふる者を生じ、馮、張、孫の三角同盟に加ふるに、南方派の元老孫逸仙、岑春煊、陸榮廷等を羅致して、玆に一大政黨を作り、以て反動政治家の一隊に當らんとする計畫がある。果して成功するや否やは別問題として、兎に角南方派が之に依りて著しく其の勢力をモり返したこと丈けは疑はない。尤も斯く言へばとて、今や南方派は其一手に天下の權を握らんとして居ると思ふならば、些か早計である。何んとなれば此南方派の勢力は自力ではない。主義に於てもと〳〵相容れざりし馮國璋一派の武力をかりての勢力である。假りに彼等が共同の力を以て段祺瑞の一派を壓倒しても、更に其後依然提携の實を持續するや否やは明でない。南方派が旨く馮國璋を利用するか又馮が南方派を利用することはあるまいか。之等は皆將來に徵すべき疑問である。加之南方派の結束其ものも、果して何れ丈け堅いか、之れも疑問である。岑春煊の勢力を代表する北京の張耀曾一派に軟化の色ある事は先にも述べた。張繼が十一月下旬急遽上海に赴いたのは、此點に就て岑と打合せする爲めであつたらうとの事である。其上段祺瑞はまた徐樹錚を南方に特派して梁啓超等に打合をなし、反對大政黨の創設に依つて着々對抗策を講ずるに怠らない。南方派が何れ丈け堅まるかは、段派の畫策が何れ丈け成功するかと重大の關係がある。

南方派の勢力に尙甚だ疑ふべきものありとするも、只右の如き政局進展の結果として、段祺瑞其人の地位に一大動搖を來たしたことはまた之を看過することは

出來ない。何故なれば、第一に軍閥の分立によつて彼の實力は著しく減退した。のみならず國會及び國民黨出身の大臣に對する彼の態度の軟弱に慨して、各種の守舊派は漸く彼を輕んぜんとするの色がある。宗社黨の初めから彼に重きを措かざりしは言ふを俟たない。張勳の如き亦、近頃の彼の爲すなきに慨して居る傾が見える。而して張勳の彼に對する態度の一變は、實に彼に取つて重大の關係がある。何となれば從來段祺瑞の重きを爲せしは、少くとも南方派に對して、一大反對勢力たるを得しは、十三省同盟の後援あるが故である。若し十三省同盟の後援を失はんか、既に一部の部下の心を失ひ、又已に直隷派の對抗の的となれる彼は其地位誠に危しと言はざるを得ぬ。張勳は昨今は果して彼に對して如何樣の態度を決めたかは、未だ明白ならざるも、最近に得たる情報によれば、彼は段を排して徐世昌を以て之に代へ、徐によつて一層有力なる内閣を作らんとするに意があるといふことである。最近徐世昌は段・孫の調停を名として北上し、自らは斷然内閣の組織に意なきを繰返して居るけれども、其眞意の必ずしも茲にあらざるは多少之を想像するに難くない。北京方面の觀測は、頻りに近き將來に於て徐世昌内閣の出現を見るべきを傳へて居るのである。

（五）

此際二三の情報によつて南方派の畫策を揣摩するに、今後の政局は略々次の如き順序を以て進むもの、否な進ましめばならぬものと見て居るらしい。第一に同鄉關係によつて馮國璋、孫洪伊、張繼、曹錕、李純の間に默契成り、之を中心として純革命派と一部の軍閥との連繫が出來上る。之に孫逸仙・岑春煊の元老を加へ、此等の諸勢力を合して一大政黨の組織を完成すれば、以て優に守舊的官僚軍閥に當ることが出來る。先づ此方面に大に努力するといふのである。第二に段祺瑞の生命は最早や決して永くはない。彼は遠からずして國務總理の任を徐世昌に讓るであらう。初め何處までも頑強に段を道連れにしやうとした孫洪伊が、徐世昌の北上後、不思議に大人しく大總統の命を奉じて

其職を退いためは、或は此建策の一つの現はれではあるまいか。蓋し一片の大總統令を以て國務大臣の地位を動かすの慣例を作るは、卽ち大總統と善からざる段祺瑞の頭に擬するに匕首を以てし、暗に其處決を迫る所以であるからである。第三に徐世昌內閣を組織すれば、恐らく梁啓超を筆頭として、熊希齡、湯化龍の徒が夫れ〳〵重要なる地位を占むるであらう。して見れば國會は自ら其政策に反對せざるを得ない。其結果徐は暫くにして其難局に倦み、其地位を退くに至るであらう。斯くして數ヶ月の後には、恐らく第三の內閣組織を見るに至るだらう。第四に徐に代るべき內閣組織者は恐らく現參謀長の王士珍であらう。彼を措いて軍閥官僚を制御し得る適任者はない。若し王士珍內閣が問題となれば茲に初めて南方派の改革的理想が實現せられ得るの端緒を見る。何故なれば王は孫洪伊と親しく孫に據つて南方派の說を聞くの機會あるべきを以てゞある。南方派は改革の理想を遂行する前提條件たる、各省督軍の處分といふ事を實は夫れ程困難と思つて居ない。南方派に反對する督軍の數は目下決して少くないけれども、多くは形勢觀望派にして、眞に最後まで頑强の反對をなすべき見込のあるものは龍濟光・張勳・倪嗣沖の三人位のものであると見て居る。十分の準備をなして此三人を處分するに成功すれば、他は唯々として命を奉ずべき輩（ともがら）のみである。斯くして漸次其歩を進むる中に、老成者の漸次凋落すると共に、自然天下は我々のものにならざるを得ないと考へて居るやうである。

以上は南方派の眞意の推定であつて、果して斯の如くなるや否や、又中途不意の出來事に由つて異常の發展を見ることなきや否やを保し難きも、少くとも段祺瑞の地位の風前の燈と等しき事丈けは今日疑を容れないやうである。少くとも彼は昨今辛うじて惰勢的に國務總理の地位にあるに止り、決して北京政界の中心勢力でない。彼の部下徐樹錚は昨今頻りに東西に奔走して段祺瑞擁護同盟を作るに苦心して居るけれども、果してどれ丈けの成果を擧げ得るや分らない。とにかく

今日彼を目して支那政界の代表者となし、其基礎の上に何等かの施設を試るならば、之れ或は大いなる誤りの種を作る事となるまいか。

たゞ段祺瑞一個としては、恐らく自家の地位に著るしき不安を感じて、如何にかして其勢力の恢復を圖らん事を苦心して居つたことであらう。恁かる處へ突如特使問題が起つて來た。予は特使問題が彼の發意に出づるや否やを斷言するの確證を持つてゐない。けれども、最近北京より得たる情報に據れば、段祺瑞は二三政界の重立つたる有志の質問に對して、日本政府側の誘あるに應じて特使派遣の事を斷じたと明言したさうである。そは何れにしても、兎に角彼が特使派遣の問題を以て、渡りに船と喜んだ事は疑ない。而して之を大總統に圖るに及ばずして、直に腹心の曹汝霖を特派することに獨斷專行した結果、矢釜しい物議を釀して遂に之を中止せねばならぬ事になつたのは吾人の已に知る所である。尤も南方派の騷いだのは、啻に彼の獨斷專行を責める意味ばかりではない。折角段を窮地に陷れて、之より愈々自派の志を伸べんとするに方つて段が再び勢力を恢復するの機會を捉むのは、固より彼等に取つて忍ぶべからざる苦痛であるからである。故に一方に於ては内部に於て極力特使派遣の妨害を試み、外に向つては萬一曹汝霖の日本に赴く事あつても日本當局の願くは彼に何等現實の助力を與へざらんことは、特使派遣問題發生當時よりの彼等の希望であつた。區々たる特使任命の手續や、又は曹汝霖の人物、經歷等についての問題ではないのである。從て其後新聞に傳へらるゝが如く、曹汝霖に代ふるに熊希齡を以てしても、將た現教育總長の范源濂を以てするも、苟くも段祺瑞一味のものである以上は、國會は斷乎として最後まで反對の聲を擧ぐるであらうと思ふ。(十二月十四日)

各政黨の智将の觀たる

政界低氣壓の豫測

▽定石で行けば無論解散

國民黨 古島一雄

解散の有無を問はれゝば、政黨員としては解散ありと答へるの外はない。曾て淸浦內閣の出來上らうとした時には、各政黨は一時に起つて之に反對した。然るに今回寺內と云ふ軍閥官僚、之を淸浦に比すれば一層色彩の鮮明な內閣が出來たのに對しては、世間は案外平氣に看て居るし、政黨も寧ろ皆冷靜に構へて居る。此現象は或る意味から云へば、政黨に對する一種の面當である。現に絕對多數を有する憲政會の總裁加藤君は、地方を遊說して相當に强硬な事を云つてゐる。憲政會の各地方支部も、現內閣の成立の根本義に對して反對の決議をして置きながら、世間からは果して憲政會が戰ふや否や私かに疑問を發せられてゐるのは、如何に政黨の信用が地に墮ちたかの證據である。之は獨り憲政會のみの恥辱ならず、實に政黨共通の不幸と云つて可いと考へてゐる。而して何故斯う云ふ傾向を齎らしたかと云へば、古い歷史は云ふに及ばぬが、最近二三年間憲政擁護が盛んに叫ばれ、其當時政友會が山本內閣と妥協した事は、政黨の信用の上に尠からぬ損害を與へた。それから板垣伯と共に政黨政治の開山と唱へられてゐた大隈侯らは一度政權を取るや其政權を維持する爲めには憲政の常道からは最も忌むべき選擧の干涉を敢てし、又は常々自分が攻擊してゐる聖旨に藉口して居据り留任を敢てせしが如き、實に國民の眼にも最も解り易い事を出鱈目にやつた事も、政黨と云

ふもの丶信用の上に絶大の損害を與へて居る。比較的新進の政治家としての加藤高明君は、大隈侯の居据り問題が起つた時辭職した。其事柄は一時世間をして君を立憲的政治家と思はしめたが、加藤高明君は直ぐに自分の地位を保つ爲めには、自分の率ゆる黨派の中から大臣を出したり、留任せしめたりして、終始內閣を擁護するなど、世間の眼から見易き矛盾の行動をなした事も、政黨の信用の墮ちた原因である。又近く行はれた三政黨首領の會同。之も世間に傳へられた如く、問題其物に就ては三政黨各首領同一意見であつて異見はない。而して之を遂行する上に外界一切の容喙を許さぬことも意見は一致してゐる。問題其物にも、之を遂行する手段の上にも、三首領の意見が一致して居りながら、いざと云ふ場合——之を實行する場合には實行しない。覺え書きは各首領に依つて天下に發表されたが、實行は見る事がない。之を國民の眼から觀れば如何であらう。彼等政黨の首領は國家の問題其物には異見がないが、只だ自分の立場から利害上から之を實行しないのだ。國事に不信切で、唯政權爭奪と云ふ私心の外には、政黨の首領は何物も有しないと云ふことを國民に知らしたのである。斯樣な事柄が寺內內閣などを出現させた原因で、又た世間に排閥の氣焔の昂らぬ所以であると自分は信ずる。實に斯樣な事は政黨自としては國民に對して寔に氣恥しい次第であると云はざるを得ない。現に目下政界不振の狀態を見ても皆是れ私心から割出された結果であることは明かである。先づ之を憲政會の態度に見るが可い。加藤君は演說の上では立派な事を云ふが、大隈內閣最後の時に方つては、閥族の一角と連絡をして政權にありつかん事を夢みて居つたではないか。其計畫が水泡に歸したから、仕方がなく反對してゐる反對に過ぎない。若し現內閣に反對と決めたなら、議會に於て解散を賭して戰ふ外はない。が解散すれば絕對多數の減る事は甚だ明白である。其處で憲政會の方から云へば、如何かして總ての政黨が一致して總掛りの行動をすれば、內閣は潰れて、政權が自分の掌へ再び舞戻ると、かう考へてゐる。現

に憲政會幹部の内では、今頃になつて三政黨首領の會同の復活を希望する連中が多く出て來た模樣がある。一方に於ては今にも衝突しさうな勢を示し、他方に於ては戰はずして甘い事をしやうと云ふやうな考を持てゐる。勢込んで刀を振上げたが、其刀は竹光だと云ふ有樣だ。之は畢竟政權が自分の手に歸すると云ふ考が着いたら、何方にでも轉ぶと云ふ態度で、根本的に閥族に當る考の定まつて居らぬ證據である。斯う云ふ内情がいかにも見へ透いて居る、そこで第三者から憲政會の討閥はカイゼルの人道唱道同然などゝ冷評せられるのである。

政友會の方を見ると、政友會の幹部は解散を希望すると云ふて居るさうである。然し如何にして解散を遂げる積りであるか。憲政會をして戰はしめて、「鷸蚌の爭は漁夫の利」と自分は横で見てゐる積りなら、夫は餘りに蟲が好すぎる。解散を然う云ふ態度で受けると云ふと、つまり現内閣の側に立つて解散を受けると同樣の結果で總選擧の場合に損な事は、政友會も覺悟せねばならぬ。だから不信任案でも提出された時には、之に反對する事も政友會には出來まい。原君が大隈内閣の惡口ばかり云つて、現内閣に向つて一言も挿まない、所謂白紙の態度で居るのも此呼吸があるからだ。即ち如何にすれば政權に最も早く近よれるかを攻究してゐるのである。然しながら政黨の態度が斯くの如くあるとして、若し實戰の場合不信任と云ふ決議が出たら、各政黨は何うするだらうか。竹光とは云へ、振り上げた刃だから下さぬ譯には行くまい。白紙白紙と云つても白か黑かの玉を投げねばならぬではないか。

然らば此際政黨は何うすれば可いか。政黨本義の上から普通の常道で行くより外はない譯である。即ち解散覺悟の衝突をする外はないのである。今日まで政黨は何を國民に教育して來たか？閥族打破元老退治と云ふの外國民に教育した事はないではないか。然るに唯此名分の戰に、其本義を忘れて抑も他に何を爲るのであるか？若し之が出來ぬならば、政黨が從來國民に教育して來た事を自ら取消すのである。而して政黨をし

て益々不信用に陷らしめるのである。多年國民に閥族元老を退治する事を教育して來た政黨は、今日此場合、飽くまで憲政の常道に勇往邁進するより外に途はあるべきではないと思ふ。元來立憲政體の下に政黨内閣のあるのは、恰度圍碁に定石あるが如しである。昔から種種研究してやつた結果、此外には方法がないと云ふ一定した形が出來たものが其所謂定石である。政黨内閣も此定石の一つで、立憲政體の下に政黨内閣のあるのは、古來種々研究の結果に外ならぬ。定石に依らなければ本筋の碁が打てぬと同じく政治界にも定石以外の方法では本筋に運ばれて行かぬ。唯日本には普通の定石にない事がある。それは元老と云ふ置石である。此置石あるが爲めに普通の定石の打てないのが、今日の日本に於ける實際の事實である。而してこれまで政黨員が多年叫んだ聲は、置石を局面から取除いて定石を打ちたいと云ふ叫である。處が置石が却々動かぬ。そこで政黨の方では其置石を利用する事を初めかけた。妥協と云ひ情意投合と云ふのも、置石を取除くよりは之を利用しやうと云ふ考から起つた現象である。處が之を利用しやうとした事は皆失敗で、却て利用されて了つた。最近に於ける政黨の歷史は置石を利用せんとして、却て置石に利用された歷史である。大隈の行動も極く善意に解釋すれば、矢張り置石の利用であつたらう。公が一度政權を掌握すれば厄介な置石を叩き潰すのは譯はないと思つて居つたかも知れぬ、併し夫はちと蟲が善すぎる、置石に布石までこしらへて貰つておいて夫れで其の根據を奪ふなどゝはいかに出鱈目の先生でも出來ることではない。果然とう〳〵置石にしてやられたではないか。侯も最早置石を動かす事の困難を悟つたであらう。憲政會の加藤君も置石に對しては恩もあらうが、怨みもある筈だ、加藤君の心中では置石は憲政上一日も存在の理由は無いが、自分が政權を掌握する便不便から云へば、此置石を避けて通る工夫が第一で置石を撤廢するのは最後の手段だと考へて居るのではないか。此點に於ては政友會の原君も恐く同一の考へであらう。玆が自分等の考と根本に違つてゐる所

である。我々はどうしても此置石を局面から取り去らなければ、到底憲政の定石は打てぬと思つてゐる。而して此根本義で大衝突を起すことは假令ひ一時は各政黨は不便であるかも知れぬが、結局政界大革新の捷徑であると信じて居る。從て此根本義に於て一致が出來ぬ以上は、假令議會內に於ける一時の連合動作が行はれ得るとしても、將來の一致は出來ないものではなからうかと憂へてゐるのである。講和の機は動いて來る、列國の實力競爭は益々眞面目になる、日本の政治を指導する政黨の首領たるものは、此根本義に一致することが出來ないとすればせめて今少し雄大なる規模の上に其經綸を示し、今少し公明なる見地の上に其黨員を訓練し、確き信條と新らしき生命を與へる工夫をせねば、政黨が國民から厭かれる時節が來るかも知れぬ。

▽憲政會の硬派軟派の勝敗に因て決す

政友會　岡崎邦輔

今度の議會は如何にも解らぬ議會である。政府當局者の方でも、何うしよう斯うしやうといふ意志をはつきりと發表して居ないし、議會の大多數を占めて居る最も責任の重い肝腎の憲政會の方でも、硬軟まち〳〵の議論があつて未だ之といふ明確に決定したところを表はさない。我々政友會は言ふまでなく厳正中立を保つて、只若し政策の上で爭ふ事があれば爭ふといふ態度を示し、國民黨は只「超然內閣」「官僚內閣」といふ題目で以て之に反對を示し、猶時としては政策の上で爭ふこともあると言ふても居るやうであるし、又さうしさうにも見える。斯樣な形勢であるから、實際に於て果して何う決定するか、其豫測はなか〳〵六ケしい。然しながら憲政會に於ては、加藤總理が各地に於て

爲したる演說及び各支部の決議を見、又重立つたる人の各選擧區に對して總選擧に關する準備と注意を與へたこと等を考へれば、此の樣な勢では其大會に於て必ずや寺内々閣反對の決議をなし、來るべき議會劈頭に於て不信任案を提出せざるべからざることのやうに見へる。されど深く憲政會の内情を察すれば、或は假令如何なる事を堪え忍んでも猶衝突解散を避けんとする有力なる或物がありはせぬか。それは近頃私が憲政會中の消息に極めて能く通じて居る同黨員の某から聞いたことであるが、其話によつて考へて見ると、詰り萬事を忍んでも衝突解散を避けんとする事に決定しはしまいかとも思はれる。そこで結局今度の議會は、憲政會中に於ける硬軟兩派何れが力あるかで決定するのであつて、之れは全く興味ある觀物である。

元來憲政會なるものは、大抵多くは大浦兼武氏の選擧干涉によつて所謂官選せられたる議員である。此大政黨を拵へる爲めに大浦氏は、あの樣な大なる犠牲を拂つた。それ故に氏は政界の大隱居となり澄して、もう世の中の事には少しも關係しないやうな風を裝ふて居るけれども、實際は同黨の有力なる幹部員たる某氏は常に鎌倉に通ふて其敎を乞ひつゝあるのである。實際大浦氏に取つては榮職の地を棄て、顯要の職を辭して而かも政界を隱居するといふことは、大いなる苦痛であらねばならぬ。然しながら今日政界に於て有力なる憲政會といふものを自分の力によつて作り爲したといふことが、僅かに氏の唯一の慰藉である。否、只に慰藉たるのみならず實際に於て大なる實力を有つて居るのである。然るに今や只一朝の勢に任せて議會の劈頭に於て、政府に向つて突擊し衝突し其結果として議會解散となつたならば、假令其總選擧の結果今日と同一の多數を選出し得るとするも、そは全く加藤總裁の政黨にして大隱居たる大浦氏の政黨にはあらざることゝならねばならぬ。況んや總選擧の後は恐らく其數を大いに減ずることは、何人も已に豫想し得る事實なるに於てをや。斯くの如き事情であるが故に、大浦氏としては此際如何なる一時の恥辱を堪え忍んでも、此勢力を

失はざることに努めなくてはならぬであらうと思ふ。殊に大浦氏は生來理性の人にあらずして全く實際の人である。特に此等の利害打算にかけては最も明かなる人であるが故に、十分に其目的を達せんことを努めることであらうと思ふ。又同黨幹部の有力なる安達氏の如きは、此旨を奉じて大いに働かるゝことゝ思ふ。斯樣に論じて來るといふと來るべき議會の狀態は、畢竟此連中の力が憲政會を何程までに支配するかといふことによつて、如何程にも之を變化し決定し得るものであるといふことになる。

加藤總理の各地に於ける演說と其幹部中の二三の人々の議論を聞けば、勢ひ議會の劈頭に於て政府不信任案を提出するが如く見ゆるけれども、此意見が黨員全體に及ぼすの力は何程の程度であるかは頗る疑問である。殊に怪しむべきは、斯樣な場合には何時でも其急先鋒となつて政府反對の氣勢を揭げる尾崎行雄氏が、過日九州に於て爲したる演說を聞くに、政府に對する議論は差控へられて、專らに元老にのみ其攻擊の矢を向けられたるは頗る可笑しいことである。さては尾崎氏も段々と年を取られて大いに老成せられたものであるか、其邊の消息が隨分と興味ある觀物である。然し又尾崎氏の直接率ゐて居るところの人々はなか／＼議論家が多く血氣の士に富んで居るのであるから、或は加藤氏等の議論とは一致の點があつて、大浦氏の老練なる利害論を打破して憲政會を提げて政府に突擊し遂に玉碎するの擧に出づるかも知れぬ。卽ち此點が來るべき議會を決定するところの緊要なる問題である、

然し之を要するに、大浦氏一派の利害論はさることながら、尾崎氏の今日までの歷史といひ、加藤總理の各地に於ける演說の主意等によれば、結局政府と衝突し議會解散となることは避くべきではなからうと思ふ。

▽不信任案と現內閣の運命

憲政會　濱口雄幸

第三十八議會に於ける形勢は、何うなるであらうか

と言ふことを考へて見るに、各政黨の議會に於ける行動は今日より之を豫想することを得ず。

憲政會の態度は、立黨の宣言綱領、各地の支部大會等に於ける加藤總裁の演說、各支部の決議等によつて明瞭なりと雖も、此態度を實現する時期並に其方法に至つては、事戰略に屬するが故に、今日より之を豫定すべからず。其時に臨んで初めて之を知ることを得べし。惟ふに國民黨と雖も同様ならん。政友會に至つては、仙臺並に靜岡に於ける原總裁の演說に徵すれば、寺內內閣成立の根本義に就ては之を爭ふの意志なく、主として政策によつて贊否を決せんとするものゝ如しと雖も、聞くところによれば、政友會內に於ても硬軟種々の議論あるが如きを以て、議會に臨んで果して今日の態度を維持することを得べきや否や、多少の疑ひなき能はず。

形勢斯くの如きを以て、議會の豫測は混沌として明かならず。されど議會に對する世間の注目の焦點は、何れの黨派が寺內々閣に向つて彈劾的の不信任案を提出すべきや否やにあり。而して其提出の時期は議會の劈頭たると、會期中執れの時期たるとを問はざるなり。假りに憲政會、政友、會國民黨の三黨聯合を以て或時期を以て不信案を提出することありとせば、其結果は當然寺內內閣の辭職となるべし。こは說明を要せずして明かなることなり。又若し假りに不信任案を三黨聯合を以て提出せずして、其中の一黨又は二黨によつて提出したる場合を想像して、其結果を考ふるに、世人は其結果必ず議會の解散となるべきを確信して疑はざるものゝ如しと雖も、予を以て之を見れば寺內々閣は此場合に於て、議會を解散し能はざるものと認む。何となれば、元老が大隈前首相の推薦にかゝる加藤子を排斥して、寺內伯を薦請したる理由なるものを聞くに、加藤子は政黨の首領なるが故に一方に於て反對黨を有するを以て、此場合內閣を組織するに適せず。然るに寺內伯は政黨に關係なく、政界に於て一黨一派の反對を有せざるが故に、超然內閣を組織し擧國一致の實を擧ぐるに最も適當なりといふにありしものゝ如し。果

して然らば、議會に於て一黨一派の爲めに彈劾案を提出されたる場合は、其瞬間に於て政敵を有することになり、擧國一致の實を擧ぐる能はざるに至るべきを以て、彈劾案の裁決を待たず直ちに辭職すべき筈なり。若し然らずんば、加藤子排斥の理由は徹底せざるべし。

要するに議會に於ける各政黨の態度は絕對に不明なりと雖も、假令憲政會のみが不信任案を提出したる場合と雖も、議會は決して解散されることなく、寺内々閣は直ちに辭職せざるべからざるなり。以上の結論は、獨り理論上然るのみならず、實際上に於ても寺内伯の性格といひ、又寺内伯の後見人たる山縣公の平素といひ、側面の目付役たる平田子の性質等よりするも、閣僚中の過激派たる某々二三大臣の解散論を抑へ、直ちに内閣を明け渡し、多數黨をして後繼内閣を組織せしめ、政局收拾の方針に出づべきを信ず。これ獨り政治家として山縣公、平田子、寺内伯等の德義を持し體面を全うする爲めに必要なるのみならず、政局の混亂を防ぐ上に於て國家の爲めに、當然にして且つ賢明なる態度なりと信ず。

假りに一歩を讓つて、議會を解散するの意志あるものとせんか、政黨に無關係なる超然内閣が、議會の反對に會ふて之を解散するは、全く不必要にして且つ無意義なり。近來に至るまで議會の解散は、政府反對に對する懲罰的の意味を以て行はれたるが如しと雖も、斯くの如きは全然誤れる見解にして取るに足らず。大隈内閣が大正三年末に增師問題並に財政改革問題について政友會の反對を受け、衆議院を解散するに及んで議會解散の眞意義なるもの初めて明白となれり。即ち議會の解散は懲罰の意味にあらずして、民意を問ふものに他ならずといふの理義明白となれり。若し民意を問ふの意味よりして議會を解散せんとせば、衆議院に何等の與黨を有せざる政府は、議會を解散するの資格を有せざるなり。一方に内閣に反對する政黨ありて他方に内閣を支持するの政黨ある場合に於て、反對黨が多數を占めたる時、議會を解散して信任を天下國民に問ひ、内閣を支持し黨派の多數を期待し行べき場合

に於てこそ、初めめて解散の意義は生ずべし。寺内々閣の如き、現狀を以てすれば衆議院に於て多數の反對をこそ有すれ、一人の與黨をも有せざるものが、信任を國民に問はんが爲めに解散を行はんとするは、全然議會制度の觀念に背叛するものなり。

又議會開會に至るまでの間に於て、政府が政友會と提携して内閣の與黨を作る場合を想像するに、若し内閣組織の當初に於て明瞭なる條件を以て公然の提携を試みたりしならんには、政友會は恐らく之に應じて政府の與黨たりしやも知るべからずと雖も、今日となりては最早や政府も政友會に向つて提携を申し込む能はざるべく、政友會も亦政府も提携すること能はざるべし。何故に政府が進んで政友會と提携し能はざるやといふに、地方官會議にかて寺内伯が内閣の執政方針を演説して天下に公言せられたる如く、政府と政黨との關係が所謂公を秉り平を持し一黨派に偏せざることを解明したるを以て、若し政友會と提携せんとせば直ちに此宣明に撞着すべければなり。次に政友會が何故に進んで政府と提携し能はざるやといふに、政府との提携條件としては少くとも内閣を改造して三四名の黨員を入閣せしめ、且つ政友會の主義政策を以て内閣の主義政策とすることを天下に宣明せしめざるべからざればなり。此條件は内閣成立の當初に於てこそ、實行可能なるべしと雖も、今日に於ては到底其實行不可能なるを免れざればなり。

要するに屢々繰返したるが如く、何れの政黨かと不信任案を提出するや否やは不明なりと雖も、若し提出せられたる場合に於ては、政府は卽ち擧國一致茲に破れたるを自覺し、自己存立の意義同時に消滅したるを反省して、議會の解散を行はず直ちに辭職すべきものなりと信ず。若し吾人の期待に反して議會解散の暴擧を敢てする如くんば、これ擧國一致の假面を脫し故らに政界の紛更を試むるものとして、國民擧つて其内閣の崩壞を努めざるべからず。而して政局混亂の責任は果して何人に歸せんとするや。

▽形勢未だ混沌

國民黨 鈴木梅四郎

來るべき議會が何うなるであらうかといふ問題は、頗る困難の問題である。國民黨は御承知の通り今更ら新たに其態度を極めなくても、從來より主義主張として超然內閣を認めず官僚內閣に反對して居ることは、已に天下國民のよく承知して居るところである。然らば國民黨は其立場から、來るべき議會に於て、寺內內閣に對して如何なる態度を取るかといふに、それはまだ未定であると言はねばならぬ。なんとなれば大體の主義は極つて居るも、代議士が集つて能く審議熟考の上何ういふ形式を以て、何ういふ實行をするといふことはまだ定まつて居らぬからである。それ等の詳細は來るべき國民黨代議士會で極まることになつて居る。御承知の通り國民黨は二十八名の少數であるから、假りにこれを結束して不信任案を提出するにしても、通過する事は六ケしいので「そんな出來ないといふ事が、知れ切つて居ることを遣るのは可笑しい」といふやうな事をいふ人もあるが、それも議論のあるところである。要する其主義方針は決まつて居るけれども、何ういふ實行方法を執るといふことは、今茲で斷言することは出來ないのである。

之れを政界の大勢の上から觀察すると、多數を占めて居る憲政會の態度一つで、此議會は何うにでも變化することが出來るといふことになる。然らば憲政會の態度は如何であるかといふに、今日のところ甚だ煮切らぬといふ有樣である。其一部分には隨分硬論の人もあつて、元老の攻擊などを極端にまで遣つて居るやうであるが、其又一部分には極めて軟論の人もあるやうである。これは尤もな事であつて、不信任案なり彈劾案なりを提出すれば、解散といふ恐しいものが來るからである。一度解散して總選擧となるといふと、今日の多數を占めることは極めて困難な事であると言はねばならぬ。大石氏などはさうなるといふと憲政會は今日

の半分に減じて了ふであらうと言ふて居るが、滿更ら さうまでにもならないにしても、今日より餘程少くな るといふことは明であるから、軟論の起るのも決して 偶然な事ではない。斯く考へて見るといふと、憲政會 の態度も何うやら甚だ疑はしくなつて來るのである。

次いで政友會は何うかといふに、これは此内閣に寧 ろ好意を有つて居つて、暗默の中にでも所謂妥協が出 來れば妥協しよう〳〵として居るやうであるから、不 信任案が提出されても到底も賛成しさうにない。然ら ば其他の派は何うであるかといふに、これは所謂日和 見黨であつて、猶更ら其態度は不明である。

實際今日の時代に於いて、寺内内閣の如き超然内閣 が良いとか、官僚内閣が惡いとかいふやうな古い議論 は、最早や問題にはならない。理論上は一擧に之を陷 落するのが正當ではあるけれども、事實はなか〳〵六 ケしくなりはせぬか。世間の批評を聞いても、極く無 事に濟むやうに云ふて居る人が多い。然し開會して見 ると、色々の問題が起つて來て、多數の人が集るとい ふと所謂群衆心理で以て、騎虎の勢に驅られて、平常 は考へて居らぬ事までも遣り出すかも知れない。

之を要するに、議會の豫測は實際に於ては能く解ら ぬが、我が國民黨の從來の主義方針より考へて見る時 は、解散があるべきものと信じて居る。

▽解散の外途なし

憲政會　某　氏

來るべき議會が何うなるであらうかといふことは、 頗る簡單明瞭である。曰く衝突！曰く解散！それであ る。今まで遣つて來た軌道を眞直に進んで來れば、斯 うなるより他に行く道はないではないか。

憲政會に於て寺内内閣反對といふ決議を、各地方の 支部で決したことはもう二三十以上もあらうと思ふ。 而して又其大會が、東北に於ては仙臺、關西に於ては 福岡と二度も開かれて、總裁總務が總出をなして決議 をして居るのであるから、今更ら何うの斯うのといふ

ことはないではないか。それはもう解散に極まつて居る。又さうなければならぬと思ふ。

▽開會にならねば分らぬ

政友會 床次竹次郎

來るべき議會が若し解散にでもなるとすれば、それは開會の初に於て行はれる事であらう。が、然し最初に於てそれが行はれないとするならば、後になつて豫算其他個々の問題に就いては、多分左樣な事はなからうと思ふ。

我々政友會の立場から見るとすれば、即ち昨年の選擧干渉の行き掛り上、一旦解散になつて新たに總選擧を遣り直すのが、至當な事であると言はねばならぬ。今日の政治狀態で、解散を行ひ、總選擧を遣り直すといふことは、實際國家國民の幸福といふ問題については、左程大なる形響を及ぼすものではあるまい。然し若し解散が行はれて總選擧にでもなるといふと、我輩

の如きは閑暇の時間がなくなつて、頗る困るといふ譯になるよ。アハヽヽヽヽ。今のところ政友會は御承知の通りの態度を取つて居り、憲政會も何處まで遣る積りかまだはつきりとせず、國民黨が獨立獨歩、政友會にも憲政會にも當り散らして、不信任案を出すといふやうな噂をするものもあるが、あの少數では何うすることも出來ないではないか。

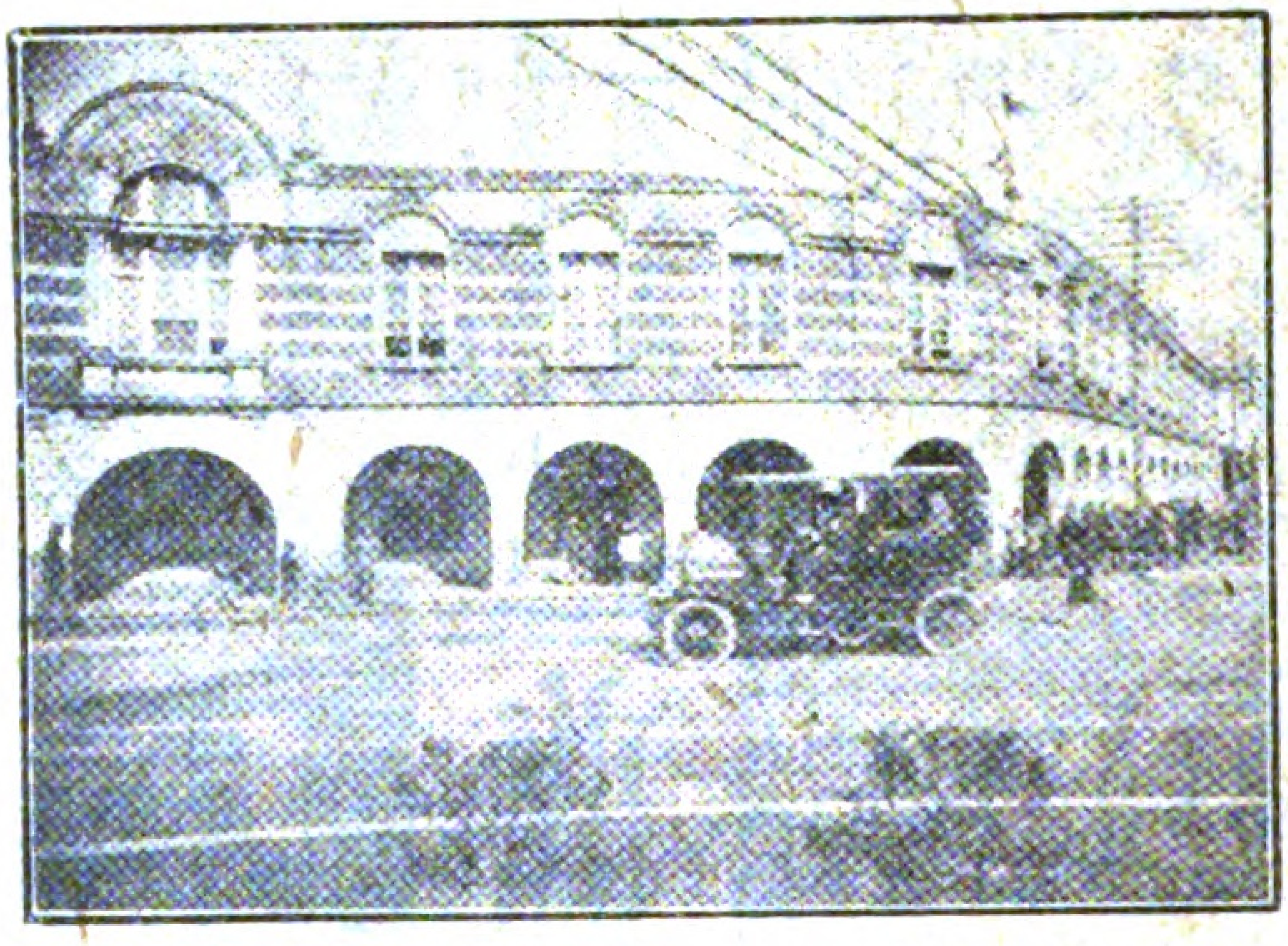
之れを要するに、今日のところでは、我輩に取つては何等の豫測は出來ないといふ他はない。恐らく各黨の所謂智將謀將の先生方に於ても、來春にでもなつて開會が差迫つて來るまでは、實際解るものではなからうと思ふ。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

臺灣日日新報

◎臺灣總督府公布式として每號府報を添ふ

◎無休刊 新式輪轉機二臺使用、每號八頁二版刷



臺灣日日新報社

臺灣城內西門街四十七番戶
株式會社 臺灣日日新報社
電話 編輯用 五三番、九八九番 營業用 一二五番、一二六番
電報略號タヒ振替貯金臺灣一〇番

同 臺南支局
臺南市做蔑街丙四三三番地
電報略號ヒナ振替貯金臺灣二〇番

同 東京支局
電話長新橋三八四番
電報略號トシ振替貯金東京二六〇二番

同 大阪支局
大阪市西區薩摩堀北ノ町三十三番屋敷
電話長西一六五番
電報略號オテ振替貯金大阪四三三五番

◎南支及南洋に通信機關を有し報道迅速

◎新聞發行の外各種印刷業紙類販賣業を營む

(中付三の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

蘇峰 德富猪一郎新著

大正の青年と帝國の前途

新春第一に青年の讀起す可き大快書

上製 總クロース上製天金 函入菊版七百五十頁 定價二圓八十錢 郵税十二錢

並製 四六版 七三〇頁 定價金八拾錢 郵税八錢

本書刊行以來、僅々二十日間に五萬餘部を發賣す。其の滿天下に絕大の歡迎を受けたる、未だ曾て此書の如きを見ず。本社は此の豫期以上の大盛況に對して、殆と感謝の辭を知らざる也。江湖各階級の識者は、本書を以て帝國興隆の精神氣魄と、時弊匡救の經綸方策の結晶せる無前の好著と爲し、爭て多數の本書を購求し、世上に頒布して本書の趣旨貫徹に盡力せられ。全國各種の學校、或は在鄕軍人團、青年團體、各種の實業團體より、一括して多數購讀を申込まるゝあり。天下新聞雜誌の一齊に推奬するあり。而して一たび閱讀せられたる諸君の、著者に對して同感欽仰の書を寄せらるゝ者、實に几上に堆を爲す。其の反響の甚大なる、著者に在りても深く欣幸とする所也。然も著者蘊蓄の抱負、立言の精神、豈に片言隻辭の能く盡す所ならんや。希くは速に本書に就て、之を知られんとを。

大正六年 國民年鑑

定價金五十錢 郵税金八錢

日本に於ける唯一の年鑑にして、殊に大正六年版は、各種の材料を精選し、編輯方法を改良し、頁に面目を一新せり。至廉至便の國民的寶典也。

大正六年 國民日記

定價金四十五錢 郵税金八錢

內容の豐富にして實用的なる、意匠の斬新、印刷の鮮明にして記入に至便なる、製本の堅牢、紙質の精良と相俟て、日記中の随一、日記界の霸王也。

發行所 東京市京橋區日吉町 振替口座一三一〇〇 民友社

(中付三の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

年禮

黒頭巾



其一

◉年々、年末に到れば、則ち年禮を憶ふ。今春の年禮は、吾輩に取りて記念す可き事少からざりき。過去の年禮を回憶するも亦た興味淺からず。來る可き新春の年禮は如何。

◉年末の一日、筆を執つて年禮を草せん事を思ふ。年禮を憶へば新春の氣分、磅礴し來る。又た忽然として書齋を整理し、舊年の光景を一掃して、新春の氣象を以て、筆を奔らさん事を憶ふ。

◉此の日雨餘、太だ暖なり。吾輩は、朝より書齋の整理に従事し、書箱を按排し、布置、整頓、僅に一室の中と雖、頗る經營を費す。其の間、午餐を終り、遂に晩餐に至つて僅に、終局するを得たり。庭上、寒菊、まさに盛開し、少女、巧みに泥濘を避けて追羽子を試みつゝあり。

◉吾輩は書齋の整理を終るの後、入浴し、吾が頭髪の甚だ長きを思ふ。卓前、二三杯を傾け微醺を帶びて兒女と共に、新春の樂事を談ず。食後、町に出で、「海老床」に到る。

◉吾輩、頃來、太だ多忙、殆んど理髪の閑を得ず。宛然、一個の蓬頭子となり了る。年禮は宜しく蓬頭なる

可らず。今夜、則ち力めて、「海老床」に到り、久濶にして理髪の快味を樂しむ事を得たり。歸り來れば則ち既に十一時。今日、吾が書齋、既に整理せられ、吾が頭も亦た舊態を一新す。舊年未だ改まらざるに、斯の身、早く、新春に入るの感無くんばあらず。

●吾輩、近年來、深夜、文章に從事するを好まず。讀書は深夜と雖、快心事たるを失はず。執筆は、朝を尤も愉快なりとす。此の夜、「海老床」より歸來の後、三馬の浮世床を抽出して讀む。孔糞先生の一齣、尤も抱腹に堪へず。枕讀して尅の移るを知らず、頻りに涙を流しつゝ、獨り、大に笑ふ。

其二

●吾輩は、覺えず趣味の「浮世床」に釣られて、執筆の機を逸せり。夜、五更を過ぐ。乃ち筆を收め、翌朝黎明を期して寢に就く。寢に就くの時、專ら年禮と「浮世床」とを憶ふ。枕上案思、未だ十數分に充たざるに陶然として睡鄕に入る。覺むれば早朝なり。

●吾輩、早起、欣然として年禮を草す。年禮の興味、心上に漲り來る。「海老床」といふは、吾輩と同じく富士神社の森かげに在り。吾輩は森の東に、彼は西に在り。江戸の昔より七世聯綿として、髮結床より理髮店となりて今日に到る。蓋し、東京の理髮界に於ける屈指の老舖にして、今に於て、江戸の浮世床の面影を留むるもの、一たらずんばあらざるべし。

●吾輩は、「海老床」の老主人の舊話を聞くを樂む。一幅、浮世床の活圖、彼の話頭に躍如たるを覺ゆ。彼は年々、夜を徹して、大晦日の客を送り、黎明、暫らく假睡するの後、起きて元旦の雜煮餅を味ひ、箸を投じて、直ちに新年の客を迎へて、黽勉、以て、元日を送り、夜、三更に到るを常とせしといへり。

●昔の浮世床と雖、必らず元旦を休業するを常例とし、此の海老床ばかりは休業せず、此の老主人、今年六十五。六十歳に到るの新春、始めて元旦を休業して、年禮を事とせり。則ち此の老主人や、還曆に達するの前未だ嘗て、年禮を經驗したる事無きものにして、年禮の上に於ては、老來始めて客觀より主觀に移れるものなり。又以て社會研究より見たる一箇稀有の材料といふべし。

●吾輩は、獨立生活を營む者にして、還曆に到るまで未だ嘗て、年々の元日に、年禮を爲さずして、生を送るを得たる者を想像したる事あらざるなり。今日以後

の紳士には、或は稀に之有らん。今日までの老人の中には極めて得難かるべし。

●舊日本の年禮といふは、主觀的には責任にして、客觀的には趣味なりし。或は、主觀的にも趣味たりし事あり。今日に於ては、年禮は多くは虛禮となり、趣味漸く少し。願くは新日本の年禮をして、趣味の上に復活せしめよ。

其三

●民族的慣習は必らず深き趣味を伴はずんばあらず。年禮と、雛と端午との節句の三者は則ち是なり。一時歐化の風潮に壓せられ、此の三者ともに勢力を失ひしも、近年、此の二の節句は、ます／＼復興の運に向ひつゝあり。ひとり年禮のみは、依然として、未だ沒趣味の境を脫せず。

●昔の年禮は、日本の民族性を表現したり。若し今の年禮が、新日本の新趣味を表現するものとせば、新日本人の爲に太だ惜むべし。

●舊日本の年禮は、日本民族性の美處を現示し、新日本の年禮は日本人の短處を暴露せずんばあらず。前者は、寬厚、悠揚、優雅あり。後者は、冷淡、慧敏、現金的にして、前者に情味あり、後者に唯だ形式的あるのみ。

其四

●「趣味の年禮」は、今、田舍にのみ存して、大都會には無し。年禮は、都鄙の人情、趣味を表現するのバロメートルとして見る可し。

●年禮を、一の事務として見れば、今の年禮は著るしく進步したるものなるべし。然れども、情味、或は趣味の上より見れば、今の年禮は墮落したるならずんばあらざるべし。

●文明の東漸は、日本人の趣味を墮落せしめたることも少しとなさず。年禮は則ち其の一たるを失はず。新文明と年禮とは、光と影との如く、光多き處には影少く、光少き處には影多し。

●「趣味の年禮」の厚薄如何は、或は、文明東漸の一里塚として見るも可なり。新文明は先づ大都會を席捲し、年禮は大都會より崩れ始めたるなり。

其五

●今日に於ては、元日に生酔の禮者を見る事稀なり。

生醉の禮者の多少は則ち年禮の變遷を語るものなり。若し、何人か、東京の市中に、非常の好事者ありて、元日に、店前を經過せる生醉の禮者の數を、年々、精確に觀察し、表記したる者ありしとせば、其は則ち年禮の變遷を統計的に表示するものならずんばあらざるなり。

◉吾輩は、此の如き「趣味の統計」の出現せん事を冀ふ。而して此の統計たるや、啻に、漫然として生醉の數を記するに止めず、併せて其の內容を精記するを要す。則ち此の統計は、種々の意味に於て、參考の價値あるものたるべし。

◉近年に於ては、東京の廣衢に於てすとも、此の如き統計者は、或は其の閑に堪へざる可し。若し、此の種の「趣味の統計」未だ無かりしとせば、今年以後年々、試みに此の統計を作るも亦た惡しからず。

◉舊日本の年禮には、青天白日、十字街頭に、生醉の禮者が、斷續、出沒せざる無く、時には絡繹として相望む事もありし。畢竟、「生醉の春」なりし。當時、三馬にせよ。京傳にせよ。或は馬琴にせよ。若し聊たりとも、統計の知識を有せしとせば、必らずや彼等は、藥化粧品を賣るの傍、「年禮に關する趣味の統計」を留與せしなるべく、生醉の禮者の數の莫大なると、其の人物、階級の種類の豐富なるとは、又た今世人を驚倒せずんばあらざりしなる可し。

其六

◉舊日本の文學に於て、年禮に關し、尤も多くの詩歌を留めたるは蜀山人なり。彼が狂詩、元日篇に、君不見元日御江戶、大名小路御門前、春風吹送素袍袖、若水汲入雜煮膳といふは、劈頭、起し得て雄麗の氣象あり。然れども此の篇には、萬歲樂歌、餠貨引等を記すれども、生醉の禮者に說き及ぼさゞるは、蜀山人の作としては、殊に慊らず。

◉蜀山人、三十餘歲の時の狂詩集を杭那山人[illegible]舍集といふ。其の五言絶句の中に、畫題の一首あり、何處御年玉　新開扇子箱。下敷ニ長熨斗一。上放ニ寶珠光一。定めて町の年禮の光景を畫けるものなるべし。

◉蜀山人の「めでた百首夷歌」の第一、立春の題にて、「改年の御慶めでたく天の戶をあけまして、よい春は來にけり」には、年禮の語氣あり。瑞氣、洋々として新年の顏を浮べ出すの思あり。萬紫千紅の中の、「萬歲の、鼓につれて、鶯も、ほうと初音や打ち出すらん」

は、年禮の背景を描き得て、畫の如し。

●彼が自筆百首狂歌の中に、「まな板の、こぐちに張れる青紙の、いろも若菜に、及ぶものかは」は唯だまな板の青紙と若菜とを對照したるのみにて、新春の氣分磅礴す。傑作といふべし。此の青紙は、新春、新に張りしものにして、靑色の生新なるを想像すべし。此の青紙と雖、若菜に及ばずといふに在り。

●同上、百首狂歌の中に、梅花の一首あり、磊落の氣象尤も喜ぶべし。「おれを見て、また歌を詠みちらすかと、梅の思はん事も耻かし。」蓋し罵倒文學の妙諦は江戸兒の舌に在り。就中、蜀山人と三馬とは、其の巨擘たる者なり。此の一首、殊に、彼の口調を見る。併せて、月並、機軸の缺乏とを罵倒せるものなり。

●吾輩は想ふに、蜀山人、三馬の如きは、元旦、年禮の途すがら人に逢ふて、或は、屠蘇三杯、また三杯、豪氣漸く發して、生醉と罵倒とを併發せしならずんばあらざるべし。

●此の二人者の如きは、則ち年禮と共に、罵倒を始めたるものなり。「夢想兵衛」の書中に、新年の噓附會を記せども、未だ年禮の罵倒會を記せず。馬琴は眞面目なりし故に、痛快なる酒間の罵倒會を經驗したること無かりしやも知れず。

●京傳は畫と文と兼ね到る。彼は、或は、年禮の途次屠蘇一杯、興來りて、畫才煥發、抑止す可らずして、匆々筆を奔らして、一二枚を畫き去りし事もあるやらん。

●年禮に關する蜀山人の詩歌の中にては、兎も角も、「生醉の禮者を見れば、大道を、橫すじかひに、春は來にけり」の一首を推して完璧となさずんばあらず。吾日本趣味の年禮は、總括して此の一首の中に在り。吾が文學、年禮に關するもの、此を以て、第一傑作となすべし。

其七

●「大道を橫すじかひに春は來にけり」の一句、日本の年禮を表現し、併せて日本の文明の進路を表現す。「春」は、「生醉の禮者」と共に、橫すじかひに進み來れるのみならず、日本の文明は折線的に、蹣跚として進み來れるならずんばあらず。

●「時」は、文明の水路なり。文明の本流が恰も江水の如くに流れ行くものなりとせば、文明の川は即ち「時」なるべし。日本の春が橫すじかひに來れるは、則ち日

本の文明の川が横すじかひに流れ行けるなり。

●「横すじかひ」の一語は、意有つて語足らず。横すじかひと云へば、斜線的と見ゆ。生醉の禮者は、横すじかひに行くものに非ず。其の蹌踉、蹣跚として、往きて又た還るは、折線的ならずんばあらず。

●折線的は稻妻的なり。電光と生醉と、唯だ其の速力を異にするのみ。若し高處より大觀せば、生醉の禮者も電光と同じく、其の進行の逕路、Z字形を爲しつゝあるを見るべし。

●稻妻はZ字形に、繰返し屈折しつゝ、一氣に放射す。生醉の禮者は、則ち無限に、Z字形を繰返しつゝあり。

●横すじかいの一語は、Z字を説明するに足らず。舊日本にZ字無かりしなればなり。Z字無しと雖、Z字形の運動あり、文明ありし。

其八

●昔の年禮は、Z字形にして、今のは、單に、直線なり。電車、自轉車、俥、自働車、及び汽車を利用する年禮は一直線にして、何等の趣味無し。單純の一直線は唯だ定規と鉛筆とを以て描くを得べし。一直線は藝術に非るなり。

●生醉の禮者の進路は、Z字形といふ丈けにては尙ほ足らず。其の電光と異なるは、Z字形の直線に非ずして、曲線なるに在り。Z字形の曲線的に、春と共に大道を進み來る生醉の禮者に畫趣あり。

●今の文明は直線的、「川の字的」なり。すべて並行線的なり。直線の並行的にして、直線の交錯を許さず。川の字形に並行し、Z字形の存立を許さゞるものあり。生醉の禮者の進行するZ字線は、新文明の並行線を蹂躙するものならずんばあらざるべし。

●步道、車道に並行し、電車の線路、車道を貫ぬき、すべての文明は、此の並行線に由つて進みつゝあり。吾曹は、新年の一日、此の直線の文明に交錯するに、横すじかいの文明を以てし、一年一回、文明の進路に藝術的に、破調を賦與し、以て物質的に猪突しつゝある新文明に趣味と藝術美とを點綴せしめん事を望む。

其九

●春は明らかにして、榮え／＼しくあり度し。近年の新春の町は、或は歲晚よりも遙に寂寞たり。或は、平日よりも更に寂寥を見する事無きに非ず。新年は專ら

直線的の年禮のみを以て織成さるゝが故に、直線の文明は、特地に暴露さるゝならずんばあらず。

●吾輩、去年、新春、朝、俥を驅つて、駒籠より丸ノ内に到るに、一人の生醉に逢はず、俥に逢ひし事も少かりし。但し、電車及び徒歩の禮者の多數を見たるも、それとても、濠端に沿ひて、人行、平日よりも少かりし。

●是等の禮者は、蒼顏に、寒光を漂はせつゝ、半ば上半身を前に屈して、忙はしく急行しつゝあり。彼等は其の家を出るの前、先づ數杯を傾けて以て、聖壽を奉祝し、親を祝し、天下國家を祝し、自から祝し、併せて陽氣を煥發せしむる事を爲さゞりしや。

●新春の世をして、すべて年禮に捧げしめよ。此の樂しむ可き日を以て、禮者の有たらしめよ。すべての拘束を以て、年禮と禮者との爲に解放せしめよ。

●一年間、三百六十五日の重力を加へて壓縮したるものは大晦日ならずや。大晦日は「一年のドン底」ならずんばあらず。現在に於ける。あらゆる文明の力は凝結して、此の一日に現はるべし。すべて凝結、拘束、壓縮の氣分は此の一日を占領すべし。何人も、皆、海底に於ける潜水夫の如くに、あらゆる方面より壓迫を受けつゝあるに非るは無し。

●大晦日に於ける壓迫は、有形、無形、すべての方面より來る。若し壓迫を感ぜずといふ者あらば、其の人の剛健なるに非ず、無神經なるにも非ず。貝殼の如く海底に横はれるものにして、自ら人世に浮揚し來る可き望無きものなり。

●新春をして解放的ならしめよ。大に解放せしめよ。解放は新春の生命ならずんばあらず。蓋し元旦は氣圏氣の高層の如し。些の壓迫無くして、解放的なり。

●新春をして解放的ならしむるは、須らく其の並行線を、併せて解放せずんばある可らず。解放の結果は混沌を將來す。直線の並行線を以て組織するは解放に非ず。解放の内容は、直線の並行を廢して、すべての線をして自由ならしむるに在り。

其十

●俳趣に見たる年禮は、多く佳句を見ず。子規に、年禮の句、少し有り。「病床を圍む禮者や五六人」は、彼が鶯横町の子規庵に、俳人の朝宗するの光景、恍惚として眼中に在り。

●子規は病牀に天下を取りし者なり。俳壇に於ける彼

の覇業は病牀に成りしを以て、彼は學生たりし時、年禮を爲し、子規庵に一臥するの後、恐らくは年禮を受けしのみにて其生を終りしならん。

◉「年玉を並べて置くや枕元」は、子規菴の新春なりし「年玉や、何とも知れぬ紙包み」或は『年玉や長崎するめ、蝦夷昆布』、實に、海内の俳人、遍ねく病牀の覇者に朝貢せしは、此の如し。

◉彼の病牀には、つねに、壁上に、四方の土産を懸け並べ、彼は臥して、天下を夢游しつゝありし。新年には、則ち更に土産の年玉を、或は持贈し、或は郵寄せるを、枕頭に雜陳し、門人知友の禮者に圍繞され、笑顔流石に鮮やかに、句を語り、句を作り、年玉を批評などしつゝ、或は、各人、年禮の實況、佳話などを聞きつゝ、臥して年禮の氣分を樂みしならずんばあらず。

◉「元日の人通りとはなりにけり」禮者のボツ〳〵往來するを見よ。「元日も暮れて上野の嵐かな」禮者、悉く跡り去つて、元日の夜は、特地に寂味あり。大晦日の夜は、宵を徹して忙はしく、「寢んとすれば、鷄鳴いて、年新なり」新春の夜の町ほど、寂しさは無く、上野の森の嵐に、「早仕舞」の氣分を映出す。而して森のかげを年禮の落伍者、往々フラリ、フラーリとして、自得しつゝさまよひ歸り行くあらん。

◉「口紅や、四十の顏も松の内」、「袴著た町人見ゆる松の内。」年禮の途上の囑目。殊に、銀座あたりなるべし。子規は新聞記者たりし。元日より筆とりてと題する句あり。筆を投じて、年禮に行きしか。「新年の柩に逢ひぬ、夜中頃」は彼の想像か、或は彼の實歷か。

◉子規の自題小照の句に、「大三十日、愚なり、元日なほ愚なり」といへり。彼は、年禮の途上、此の感想を發したる乎。

◉彼が遼東の句に、「雪さら〳〵初日のぼりぬ、馬の耳」は、邊塞の氣象、覩るが如し。遼東の初日に、故國の新春を憶ひ、併せて年禮の光景に想到せずんばあらざるべし。

◉「裏門や、小さき輪飾、齒朶勝に」此の種の句、何となく愛す可し。譬へば山茶花の可憐なるが如し。根岸の子規菴に近くして、此の實景少からず。

◉『醉盤や、新年會の殘り酒』此の一句、子規が「趣味の人」としての風神を描き出して、彼の自像に換ふ可し。

◉「痩馬を飾り立てたる初荷かな」『萬歲や、黑き手を出し、足を出し』年禮の途上、吾輩も屢、此の景象を

印象す。此の句に對して、可笑味に堪へず。

●「友につれて知らぬ禮者の來りけり」這般の興趣。野人の專有に屬すべし。「梅をさげて來る禮者や、七日過」、綏々と語らんとてなるべし。

其十一

●各地の舊藩主は、東京の居邸に於て、概ね新春第二日を選び、舊藩臣の年禮を受るを例とす。而して其の議會の儀例に至つては、各邸、各樣にして、其の間、自から地方色を發揮するもの無くんばあらず。

●舊藩主の新年は、依然として、維新前の舊儀を保存しつゝあるものを奧床しく思ふ。必ずしも下物の美なるを求めず、情の篤く、力めて地方色を現はせるものを可とす。座禮を執るもあれど、便宜は立禮に在り、隨つて立食を可とするに似たり。然れども、立禮、立食を採用すとも、下物は、舊に依つて、紋切型の正月肴ならん事を理想的とすべし。

●舊藩邸の年禮會は、併せて同鄉者の新年會と爲す可し、鄉味、鄉音、座ながら鄉國の氣象を出現せしむべし、鄉音を以て、管を捲くも、太平の祥事の一たらずんばあらず。

●舊藩の年禮會は、其の勢力如何に依り、光景一ならず。舊藩出身者の人物が、自から年禮會の色彩を爲す或は劍珮鏘々、頗る壯麗の觀を爲すもあらん。或は、多くの出身人物を有せず、蕭然たるもあらん。就中舊藩の薩長は、一は、全然、舊風を守り、一は新樣を折衷し、二者好箇の對照を爲す。

●若し地方在住の舊領主に到つては、居然として、維新前の舊館に座し、舊禮を以て、舊臣を引見する者、無きに非ず。吾輩、嘗て、周南の海北に往き、舊領主天野氏の年禮の態度を聞き、感興を催うせし事あり。

●年禮會は、舊藩の舊樣に依るものは、昔ながらの大座敷に、結髮、帶刀せざるばかりの舊藩士、居流れて舊藩主に向つて、一齊に叩頭、年賀を述ぶるの時、三百年來、舊君臣の景情一堂に磅礴するもの あるを覺ゆ。

●秋田の舊藩邸の如きは、薩長土肥以外に、一種の新光景を現出す。力士、大蛇潟と兩國とが年禮會に來るは其の一なり。此の二人者は、種々の意味に於て好箇の對照を爲す。此の二力士。同鄉に出るも奇なり。

●大蛇潟と兩國との對場に就いて、尤も熱烈なる感興を有する者は、秋田人なりといふ。或はいふ、秋田に

於ては、此の二人者の勝敗は、政友、憲政の對抗よりも以上の大問題なりと。則ち此の二人者が交る〳〵其の魁偉を齎らして年禮に來る時、舊藩人の興味、悉く此に集注せずんばあらざるべし。

其十二

●俳優は知らず、力士の年禮は頗る畫趣あり、詩趣あり、江東の天地の春は、禮者の力士と共に來るものならずんばあらず。

●禮者の力士は俥に乘りたるよりも、徒歩したるが極めて可し。力士の性命は其の魁偉に在り。隨つて畫趣は徒歩に有り。結髪の雲鬢、嶄然として、街頭の群集に頭角を拔き、膺眼、以て虎歩し來る時、江東の春色一段の光彩を添ふべし。

●彼等の殊に、風采秀美なる者が、若し一刀を帶し、稍、反橋の兩國橋を渡り來るを冥想すれば、禮者の力士は、昔を畫趣多かりしとすべし。

●堂々たる大力士が春風に押出し來るは、固より言ふに及ばず。小力士の軍鷄の頭を爲せるが、紛々として群集に伍して往來しつゝあるも、太だ興趣を添ふ。譬へば、無名の野花、開いて自から畫趣を涵養しつゝあるが如きなり。

其十三

●僅に、新春の少閑を得て、旅趣に憧憬しつゝあるは可なり。實は、年頭、年末は、旅情、殊に閑ならず。旅館も亦た多忙の空氣充つ。或は、近縣旅行と稱して一室に閑居し、厚地、高天、踞蹐として土鼠の如くに潜在する者もあり。

●或は、近縣旅行と稱せずと雖、一切の年禮を全廢し、すべて葉書を撒布する者もあり。其の町内にすら、葉書を送り來るを以て、却つて近縣旅行に非ずやと思はる。其の實、敵を擇んで、小盃細談、優に、別天地を管領して、元日を飲過する者もあり。此の如きは、年禮の持久戰を爲す者たるを失はず。

●人さま〴〵の年禮哉。年禮は、其の人物、趣味、境遇を象徴す。藥を呑む如くに、苦き顏して、「新春」を呑む者少からず。此の如き者は、概ね年禮を以て、一の苦役と思ひ、春風に壓迫せられて廻禮を事とするに似たり。彼等の顏に、愉快も見えず、趣味も見えず。

●宮中の拜賀を終つて、直ちに旅途に向ふ者少からず。拜賀せずと雖、元旦を待つて近縣旅行を爲す者多し。

元日、東京、新橋、品川、及び上野、兩國等の諸驛を發するの旅客、旁午たるを見るべし。彼等は畢竟、「年禮の帝都」を離れて年禮無き近縣の避寒地に向ふ者なり。乘客は東京驛尤も多く、上野驛尤も少かる可し。而して淺草驛は、是等の脱出港の中に加へられざるべし。

●昔話にも、年末を避難する者は珍らしからず。今は則ち併せて年頭を避難す。或は、年末を避けずと雖も、好んで年頭を避難す。年頭を避難するは、則ち年禮を避難するなり。

●戀川小町の楠無益委記は、恰も、今世の爲に豫言するものに似たり。「坊主、天下晴れて女郎を買ふ」「猫も杓子も藝者となる」或は「江戸節も未だ〳〵ひくしと高くとまつて、神樂催馬樂を諷ふ」といふ如き、百年前の名言とすべく、殊に感興多し。然れども未だ毫も年禮の回避を豫想したるを見ず。

●蓋し年禮の回避は、明治以來の社會的新現象といふ可く、新文明、新社會の反映たらずんばあらず。國粹を云爲する慨慷の士は、何故に、年禮に就いて深く考へざるや。

其十四

●吾輩、三馬の筆を以て、今の年禮を畫かしめばと想ふ。明敏にして奇警なる觀察、紙上に磅礴し、其の筆其の舌よりも皮肉ならん。三馬の皮肉は滑稽あり、愛嬌あり。滿幅の罵倒は有り。陰險は絶えて無し。

●三馬の如くに罵倒せば、罵倒する者、罪無く、罵倒せらるゝ者、亦た必ずしも怒らず。蜀山人は三馬よりも稍毒多し。

●若し、近縣旅行と稱し、或は稱せざるも、炬燵を擁して、年禮に出でざる者、蜀山人の筆に上らば、諷刺巧妙にして却つて辛辣に、三馬ならば、大に讀者を笑はしめん。

●新春を描く者多し。未だ年禮を主題として、描寫の靈筆を揮ふ者少し。巳の春は、近年、未曾有の好景氣を稱す。年禮の景象、或は、面目を一新す可きやもしらず。少くとも活氣の横溢と、生酔の禮者の絡繹たる可きを豫期するを得ん事を冀ふ。

其十五

●前人は飛行機を夢想せず。故に、靈腕を以て年禮を描きし者と雖、側面觀に止まる。未だ文學にも、繪畫にも年禮の鳥瞰圖を描きし者無かりし。巳の年の新年

繪葉書の中にては、飛行機より見たる正月の一種を尤も興味ありとすべし。

●アート、スミスの夜間飛行に於ける、空中亂舞の壯觀。尙ほ吾輩の眼中に在り。若し新年に、彼を拉し來つて、帝都の空に舞はしめば、極めて快心の題目たらずんばあらざる可し。

●從來、新春の俗畫、概ね宮城の空に飛鶴を描く。今年以後の書題、須らく空に飛行機、地上に生醉の禮者を併せ描く可きなり。

●スミスをして、新年に低空飛行を試み、年禮の帝都を鳥瞰せしめば如何。盛裝したる街頭と、男女とは定めて彼の注意を惹かん。就中、門松の練瓦町、及び門松の間を出沒する美しき男女は、彼の感興を動かさずんばあらざる可し。

●鳥瞰すれば、絕世の佳人と雖、唯だ其の雲鬢の頂を見るに止まる。漆黑、一點、鮮やかに春光に映發するは、新たらしきシルク、ハットならずんばあらざるべし。飾提灯に輝ける初荷の車と、消防夫の出初とは、年禮の街上の一異彩を爲すなるべし。

●昔て、萬歲も、獅子舞をも見たる事無き外國の舞行家が若し低空飛行して、初めて萬歲と獅子舞とを俯瞰したりせば、果して奈何の感想を爲す可き。奇異にして古風なる萬歲の帽子、紅にして大なる獸王の假面とは恐らくは海外の冒險家を驚倒せずんばあらざるべし。

●然りと雖、半空の鳥瞰に映出し來る、尤も難解にして興味を惹くものは、生醉の禮者たらずんばあらず。大風に漂ひつゝある鴉の如く、フラ〳〵として、辿り行く禮者は、飛行機上の觀察者を魅するに足るべし。

其十六

●吾輩は嘗て漢學塾に學びし事無きを以て、漢學先生の年禮を識らず。然れども二十年前、元旦の稱好塾に於ける天台道士を見し事あり。從來、吾輩の年禮に於ける、尤も深く印象したるものゝ一なり。

●天台道士の杉浦重剛たるは世人皆知る。稱好塾は礫川の久堅町に在りし、門廡、蕭然。如何にも漢學先生の書屋なりし。元旦に、玄關を押開き、次の六疊ばかりの座敷なりしか。玄關に正面して、床ノ間あり。疊も既に新らしからず。道士、此の室に座して、年禮受るの景象、座するといふよりも、陣するといふの當れりし。

●此の室の、床の間に、灘の酒なるべし。菰冠の大樽を置き、赤毛布を敷き、道士、前に座す。塾生、二三人、左右に侍座す。別に三四人、酒間に斡旋す。客來れば、延いて赤毛布の上に座せしむ。座蒲團を供せず下物を皿に盛り來ると雖、膳を出さず。卓も無し。皿は悉く赤毛布の上に置く。故に、此の赤毛布は舊疊の座敷を元旦化するの華氈たるに留らず。兼ねて座蒲團にも、膳にも、卓にも利用したるものならずんばあらず。

●此の赤毛布に於ける年酒の盃の大なると、奇なるとは、併せて吾輩を驚かせり。陶盃は太だ大。別に漏斗形の奇盃を出す。盃に尾あり。乾盃し畢るに非れば、之を下に置くを得ず。而して天台道士は且つ飲み且つ語る。蒼顏にして長髯、此の如き背景に調和して、彼の風神の太だ高きものあるを見たり。

●吾輩は、年禮に印象して忘れざるは、天台道士と、公桂太郎と浩々歌客となり。時に、公桂は陸軍大臣たり。雄心勃々、己を虚しくして士に下るの風あり。吾輩、元日に、俥を驅つて到るに、年酒の筵を設けて、客を待つ。平生、客、其の門に満るに、此の時、偶、一客あるのみ。颶風圏内に無風帶を發見し得たるが如し。先客は少將原田一郎、須臾にして辭し去る。暫時、屠蘇を酌んで彼が氣焔を聞く。今にして追憶すれば、恍として夢中の光景の如し。

●吾輩、此の元旦、早起、俥を驅つて年禮に往く。浩々歌客を訪ふに、晏起の彼、尚ほ寢衣を著く。强ひて吾輩を擁して、共に數杯を傾けて去る。去年、彼と年酒を酌みし夜、吾輩辭し去るの後、彼、假睡して五更に至りて覺め、籠鷄の私語するを聞き、恍然として神來を感ぜしと語りし。今年則ち彼の健康漸く衰へ、强健、吾輩の如き者、年禮客の先驅第一たるを喜び、酔を盡さずと雖、歡を盡して別る。春風未だ盡きず、彼忽ち白玉樓中の人となりぬ。年禮を語れば、彼を回憶せずんばあらざるなり。

其十七

●帝都の生活の、觀察の興味を誘ふものは、水上生活なるべし。月島より中洲方面に渉り、船を以て家と爲し、船に生れて船に老うる者少しとなさず。春夏秋冬悉く舟中に來り、炊煙つねに篷窓を漏る。春風に、紙鳶を飛ばかし、追羽子を試むるも亦た舟中に於てす。此の水上生活に於ける年禮は、陸上より見れば、感興

涯り、畫趣、一々、描くに足らずんばあらず。

◉水郷は水上生活に非ず。然れども水上生活の趣味あるものは水郷なり。「日本の和蘭」といふ可きは、利根川の新島なるべし。所謂新島一名十六島。佐原と潮來との間の江中に在り。新島の景物、水と、水の趣味とに非るは無く、水を以て道となし、舟を以て履と爲す。無數の水、無數の小橋あり。又た以て海内稀有の趣味郷たるを失はず。

◉水郷の逕、細く、橋といふは、概ね僅に、一枚の板を置き、橋の袂には階段あり、大小の溝渠、肺臓の血管の如く島の圖面を織り成せり。然れども未だ醉人が橋より落ちしといふを聞かず。提灯無しと雖、島の人は道を誤る事無し。若し、生醉の禮者が、板橋を渡ること、綱渡りが綱を渡るが如くなるを見る事あらば、又た水郷の詩趣の一に加ふ可きものなるべし。

其十八

◉田舍、殊に、農村の年禮こそ、情趣、掬す可きものあるべし。門、必ずしも設けず。衣裝を改め、三々五五、庭上に來つて、笑つて年詞を述ぶ。眞に、太古の氣象、此の光景の中に存す。東京を離るゝこと僅に數里にして、早く既に、此の太古村を發見するを得るならん。

◉東京の近在、村落。陰暦にも非ず、陽暦にも非ず。陽暦を一箇月宛、後れて用ふ。二月則ち其の正月に當る。彼等の新年。年禮の客は、爛熳たる梅花のかげを往來しつゝあるなり。

◉吾輩、農村の年禮を語れば、少年時、吾が故郷に於ける年禮を回憶するに堪へず。田舍には必ずしも生醉と言はず。酒氣を帶びずして往來するの禮者を見ること稀なり。或は發見すること難きやも知れず。蓋し田舍には、村路は庭園の如し、新春の時、一村を擧げて、一箇の大なる新年園遊會を現出せずんばあらず。而して禮者は賓客にして、戸々、家族、悉く此の大園遊會の接待員なり。禮者が村落を往來するは、譬へば園遊會員が會場を逍遙するが如く爲らずんばあらず。

◉吾輩は、新春の帝都をして、一大園遊會と化せしめ禮者をして、會場を往來するの氣分を以て、帝都を往來するに至らしめん事を望む。

其十九

◉吾輩、年禮を語りて、計らず九十九里濱の新春に想

倒す。蒼茫たる大海、殘夜に曙光、早く東方に來り、傘大の紅旭、堂々、波濤を開いて上る。何等、雄大の景象ぞや。蓋し、初日出の雄偉なるもの、此の時に過ぐるは無し。

◎此の初日出は此の海岸の索漠として、萬物、すべて野趣に活くるが故に、尤も可し。仁王の如き漁夫、其の子等も同じく、「萬祝ひ」の晴衣を著け、先づ海上の初日出を拜し、波濤に沿ひて、漁家互に、年禮を交換しつゝあり。

●「萬祝ひ」しといふは大漁祝の晴衣なり。網元より船頭、水夫及び其の子等に齊しく染めて贈る仕著なり。鰹、或は鰯、漁種に依り、其の模樣を異にし、意匠、一回ごとに改まる。近來、往々、ハイカラにして歐字を挿むものもあり。「萬祝ひ」の特色は、圖樣の壯大、單純にして、華やかなるに在り。一色、紅を用ひて、鯛鰹等を描く。

●「大漁衣」は、所謂上張りなれども、女ならばうちかけなるべし。兒童は、之を著て登校するもあり。大東洋の紅旭を溶かせる波濤に映じて輝きつゝある、九十九里の漁村の沙丘に立てる、「大漁衣」を著けたる禮者の漁夫を冥想しつゝあれば、九十九里濱の濤の跳るが歷然と見ゆ。

惜陰、再號を勸めて年禮を記せしむるは、近來、年禮、單に形式の末にのみ馳せて、漸く天眞の情味を失ふを慨すればなるべし。今日近隣の畫伯高村眞夫、上總の御宿の逗留より、油繪と大漁衣とを携へ歸る。大漁衣に對して、舊游を回憶し、神魂、大東洋の春風に馳す。

大正五年十二月五日

黒頭巾再記

今の若い女の心もち

青柳有美

[illegible]夢は美味か不味か

私に――これで私も今年は四十五歳の老人に相成るので、既う僕なんかといふ若々しい言葉が使へなくな

つた。依て敢て「私に」といふが——私に、二人の弟がある。そのうちの末弟は漸く一昨年東京外國語學校の支那語科を卒業したばかりで、年齢も二十四歳に過ぎぬが、卒業した年の夏頃だつたらうと思ふ、切りに、私が東京の蕎麥も昨今は到る處機械蕎麥ばかりで手打のものが稀れになり、爲に何んとなく昔の如く美味く食へぬやうになつてしまつたと嘆じて居るのを傍で聞いて、斯んな事を言ふた。

「イヤ！　それは違ふ。僕なんかは東京の蕎麥の美味いのは器械だからだと思ふ。あの細いスル／＼したところに何んとも謂へない美味さがある。故郷では器械を使はずに總て手打にするものだから、蕎麥がバサバサボロ／＼して不味いのだ。」

これを聞いて又私は、さて／＼時勢も變つたものだなと思つた。私のやうに三十五年も前から東京の蕎麥を食ひ慣けて來た者には、その頃の手打の味が忘れられず、蕎麥の蕎麥たる味は、素麵の如く圓るくスルスルせず角立つたところがあつて、その角が舌に觸るからだなぞと思ひもするだらうが、私の末弟の如く、東京に出て來て一度も手打蕎麥を味はつた經驗なく器械蕎麥ばかり美味いダシの加減で食はされて來たものには、遂に那個が舌に慣れてしまつて、手打蕎麥を却て不味く思ふのも當然の事だ。私の末弟のみならず今時の二十歳前後の青年諸君は皆な、蕎麥か素麵かけぢめのつかぬやうなスル／＼した東京の器械蕎麥を、田舍のボロ／＼バサ／＼したダシの惡るい手打蕎麥に比べて試、さて／＼器械蕎麥は美味いものだと決めて居るらしい。

私は當年取つて四十五歳、末弟は二十四歳、その間の差は僅に二十一歳に過ぎぬが、兩者の思想の間には少なくとも、東京の器械蕎麥を不味いと思ふと美味いと思ふと丈けの差がある。今時の二十歳前後の若者の心もちは、既う四十歳前後にもなつた者の心もちと餘程異つたところのあるものだ。一事が萬事、私と私の末弟との間に起つた器械蕎麥の優劣論によつても、之を窺ひ知り得られる。

四十歳前後の親は古るい

それも其の答だ。

これは私が猶ほ名古屋に記者生活を營んでた三四年前の事であるが、私の下宿して居つた旅館の私の隣室に新に引つ越して來た一人の青年があつた。金縁眼鏡を懸けた立派な風裝の貴公子然たる男である。何處へ出る人かと、女中に訊ねて試ると、高等學校へだといふ。そのうち其の青年が私の部屋へ挨拶に來た。私に對しては頗る非常に敬意を表したもので、キチンと禮儀正しく、御膝の上へ兩手を置かんばかりにして坐つて居る。言葉使ひなぞも總て恭々しいもので「御尊名は幼少の頃から能く存じて居ります」なぞと飽くまで下手に出る。私は「何處へ御出でになるのですか」と問へば、曩に女中より聞いたのと同じやうに「毎日高等學校へ參つて居ります」と答へた。その時に私は思つた――ははア！ この奴さん、田舍の富豪か何かの息子で、月々の仕送り金が馬鹿に多いところより、高等學校生徒の分際をしながら學生として分不相應な旅館なんかへ贅澤にも下宿するのだな、と。然し、對話の進むにつれ、この青年は第八高等學校の測量科へ教授として新に赴任して來た工學士である事が知れた。そんなら、私以上の高給取りだ。旅館へ下宿したのに何の不思議も無い。

これを知つた時に私は重ねて驚いた――苟も高等學校の教授ともあらう者から、待つに先輩の禮を以てせられ、「御尊名は幼少の頃から能く存じて居ります」と言ひかけられるやうでは、さて我れも亦老ひたる哉だな、と。然り、四十の阪に足をかけた者は、もう〳〵業に已に老人の部で、高等學校の教授からさへ、薄給無位の身でありながら、先輩扱ひを受けねばならぬほどのものだ。

近頃の流行語を假つて曰へば、既に四十歲前後になつてる人は遠うの〳〵昔に古るくなつてしまつてるのである。如何に自分ばかりが若くつて新しい積でも、二十歲前後の若者の心もちは一寸理會りにくいやうに

なつて居る。殊に、人の子の親になつて、或る責任を負はせられ、親であるからとの自覺を懐いて二十歲前後の子女を見下ろすやうになつてしまへば、層一層、今時の者者の若やいだ新らしい心もちが解らなくなるものである。況んや、隠くし詐ることに妙を得るを天賦の性能とする女性の子即ち娘の若い心もちをやだ。

今時既に六十歲近くにもなつてる親々は、他人よりの御說法を待つまでもなく、自分ながら老人である、舊弊の古るい人間であると自ら充分覺つて居るので、二十歲前後の今時の若い子女の心もちはテンで理會らぬものと、頭から諦めもして居るが、まだ四十歲前後の親々は自分でも餘り、老人になつた積になれぬのみか、依然として二十年前と等しく若く新しい積になつてるので、今や東京の書生間に手打蕎麥よりも器械蕎麥の賞美せられて居る事にすら氣の付く由も無く、自分等とて新時代の新空氣を吸つた人物で未だ〱若く新しいのであるから、今時の子女の心もちも、自分等の二十歲前後の頃の心もちと大した差の無かるべき筈のもの〻やうに心得、その頃の心もちを以て、現に二十歲前後にある子女の心もちを律しやうとする。殊に、如何に親でも理會りにくい窺ひにくい知りにくい若い娘たちの心もちをも猶ほ、之で律しやうとする。然し、何時の世にも生兵法は大傷の因で、今時の二十歲前後の若い娘たちのグレだすのは、多く其心もちが親たちによつて半知半解にせられ、全く知られ、全く解せられて居らぬのに其端を發する。今の若い女の心もちは二十年前の娘たちの心もちと全く違つてるのだ。

私も、四十五歲の今日では、世間の親々たちと等しく、遠うの昔に古るい人間になつてしまつた老人である。が、商賣は其道によつて賢く、若い女を取扱ふのが私の商賣であるだけに、私は今の二十歲前後の若い女に接したり、その手紙を受けたりする場合も多い。隨つて、四十の阪に足をかけた世間の親々の容易に窺ひ得ざる今の若い女の心もちを窺ひ得る機會も多いやうに思はれる。されば「中央公論」より私に向つて「今の若い女の心もち」を書いて試よと命ぜられた所以だ

らう。

有名になりたいのが第一

若い二十歳前後の娘にも、種類が二つある。即ち、向上心の盛なものと、向上心の殆んど皆無なものとが其れだ。同じく今の若い女でも向上心の殆んど皆無に庶幾いものは、自意識が無いと謂つても可いほどで、何うなりたいとか、期うなつてみたいとかいふ如き自分の意志らしいものは殆んど無く、親が、右を向けと命ずれば右に向き、高等女學校なんかに入學る必要は無いと親から聲明せらるれば別に高等女學校へ入いらうとする氣も起さず、嫁に行けと命ぜらるれば嫁に行き、その嫁入先に就てさへ擇み好みをするでも無いが、向上心の盛んな娘になれば、自意識が頗る明確で、何事につけ自分の意見なるものがある。一々親の命唯是れ從はず、親が右を向けと命じても左に向かうとしたり、高等女學校なんか無用のものだと親から謂はれても、女子大學まで進みたいと言ひ募つたり、嫁に行けと命ぜられても獨身生活がして試たいと主張したり、同じく嫁に行くにしても、那的處は厭やだ、這的男を良人に持ちたいなぞと擇り好みをする。何時でも問題を惹き起し、親々に於て其の心もちを充分に酌み取つてやらぬと意外の方向へグレ出して行くものは、斯る向上心の盛んな自意識の强い二十歳前後の若い女である。

二十年前頃までの二十歳前後の若い女で向上心の盛んなものは何よりも實力のある女になるのを望んだものだ。換言すれば、事業を爲る女にならうとするのが其の最大の希望であつたのだ。その頃の若い娘たちの獨身主義は、總て斯の事業熱に浮かされた結果で、假令事業を爲遂げた豪い女に成り得ぬまでも、自分で自分一人の活計を立てゝ行けるだけの女になりたいものだといふのが、その頃の若い女の希望であつた。この希望を達するために、何か一藝一能のある女にならうと心懸け、裁縫とか速記とか刺繍とか造花とか、或は又、看護術、醫學などを修めたり、女子師範學校に入

つて小學教師となつたり、女子高等師範學校に入學して中等教員にならうとしたりしたものだ。その頃とても音樂學校に入學したり、繪を習つたり、或は又文筆に親んだりする若い女が無いでも無かつたが、それは皆な是等の仕事を修得して、實力に富み一藝一能を具へた女となり、これを職業として自立せんとするの意に外ならなかつたのである。共立女子職業學校が創立せられ、續て渡邊裁縫女學校以下の各種女子技藝學校の多く起つたのも、全く斯の時代に於ける向上心ある若い女の需むる處に應ぜんが爲めであつたのだ。

されば、斯の時代に於て、若い娘たちに渇仰崇拜せられたものは、女の事業家であつた。即ち下田歌子の如き女が斯の時代に於ける若い女によつて渇仰崇拜の目的物とせられたものである。嘉悦孝子の如き女も亦斯の時代の產物として現れたのだ。鳩山春子に人氣のあつたのも、仕事をしたいといふのが其の頃の若い向上心に富んだ女たちの唯一の野心であつたからだ。

然し、今の二十歳前後の若い娘たちの心もちは、如何に野心の滿々たるものでも、二十年前の若い女の其れと全く異つてしまつて居る。一ト角の事業を成し遂げて生涯を終りたいとか、或は又、特種の技能を修得して實力ある女となり自立して試たいとかいふやうな野心も無ければ、希望も無い。唯、一心に願ふところは、世間に名を知られるやうになりたい即ち有名な女になりたいといふ事ばかりである。實力の如何、技能の有無の如きは、之を第二段に置いて餘り多く問はず何が何んでも有名になりさへすれば、それで我が事足れりとするのが、今の少しでも向上心ある若い女たちの一般に懷く唯一の野心でもあり希望でもあり、又た心もちである。

是に於てか、女事業家の下田歌子は忘れられてしまひ、嘉悦孝子にも昔ほどの評判なく、鳩山春子の人氣が衰へ、ナイチンゲールやウヰラド、ヂヤン・ダークやヂヨールヂ・エリオット、乃至は又ビーチヤー・スタウ夫人などの名は、今の若い女たちの口の端にも筆の端にものぼらぬやうになつてしまつたのである。

第一に目指すものは女優

下田歌子の如き女事業家に代つて、今の二十歳前後の若い女に渇仰せらるゝやうになつたものは、女優の森律子や松井須磨子、それから、女流文士の平塚明子や與謝野晶子乃至は又田村俊子などである。何故、女優や女文士が斯く今の若い娘たちに渇仰せられるかと云へば、須磨子が僅かな短歳月の間に一萬圓以上の資産を作り得たとか、律子の月給は二百圓以上であるとか傳へられるからでも無ければ、須磨子や律子には、他の女の及び得ぬ非凡の技能があるからだといふわけでも無い。又必ずしも女優の生活を華やかだと思つて之に憧憬するのに因るものでも無い。唯、律子や須磨子の如き女優は、何んでも無い低い處から身を起して一躍其名を天下に知らるゝに至つた有名な女であるからだ。明子、晶子、俊子などの女流文士に憧憬するのも、その思想や技能の非凡なるを認めた結果でも無ければ、その作物よりの收入で、夫までも養つてゆけるのに感歎措く能はざるの致す處でも無い。唯、天下に其名を謳るはゝ有名な女であるからだ。

有名な女になつて天下の評判にのぼり、我が名が少しでも人口に膾炙せらるゝやうにならん事をのみ唯一の希望とし、唯一の野心とする今の若い女は、如何にすれば、勞少なくして最も早く有名に成り得られるだらうかと、唯そればかり考へて居る。それに就ては、女優になるのが一番の捷徑だといふのが、今の稍々向上心ある若い女の僞らざる心もちである。女文士となるのも、女として有名になる一方法だとは考へるが、これには相當の素養を要しもすれば、又學才をも要するものだと思ふので、一寸踏み出しに躊躇する。然し女優となるには、格段の學問も要らず、格別の素養をも要せず、相當の容貌があつて、踊の一ト手も覺え長唄か常磐津の一トくさりも唸れさへすれば、直ぐ舞臺に立つて女優らしい顏が能き、女優になりさへすれば、その名が忽ち都鄙に喧傳されて、律子、須磨子の如く有名になれるものと思ふので、今の若い女たちは「女

優へ、女優へ」と聲を揃へて之を志願するのだ。

私は職業上の關係で、昨今毎日平均二通ぐらゐづゝ見ず知らずの若い女からの手紙を受取るが、其うち一ヶ月平均少なくとも二通は、女優希望者から送らるゝものだ。帝劇に女優の馘斬り騒動があつた當座三ヶ月間ばかりは、一寸女優の希望申込も杜絶へてあつたが、昨今は又舊に復つて「何うしたら女優になれるか」とか「女優の見習に世話してくれ」とかいふやうな意味の手紙が頻々として私の手許に舞ひ込んで來る。私の手許にさへ、一ヶ月少なくとも二通は舞ひ込んで來るのだから、律子や須磨子の許へ來る斯の種の希望者の手紙は大變な多數にのぼるものだらうと思はれる。宜なる哉律子が、弟子入謝絶狀を印刷にして置かうかと思ひもしました、との意を「婦人公論」の「女ぞろひ」誌上に漏したることや。今、左に女優志願の若い女から私に送られた手紙のうちで手近にあるものゝ一端を三種ばかり御披露する。

……奉公は駄目ですし、モデルも厭やですわ。それに事務員も駄目。私ネ齒は別に無いのですが何んなつらい思ひでもしますから、女優には成れ無いでせうか。……女優の門下生か見習生にしてくれる人は無いでせうか。……(小石川清子)

……二三年前より不圖女優になつて一生を送りたいと思ひまして、唯一人ある姉に御願ひ致し置きましたら……早や今年は十六にもなりましたので、姉も許されました。……先生に御願して御世話さまになりたいと……亂筆をかへりみず御頼み申上げます。……(大阪梅子)

……私、日頃から芝居が大好きな處から、女優になり度くて、ほんとにさうなりたくて、たまらないのですけれど、女優になるには、何ういふ事が必要でせう。どういふ手續でなれるんでせう……。からだは中位ですけれど、顏も目も大きい、役者のやうな顏立だと人から言はれるんですけれど、こんな身體ぢや駄目でせうか。……(靜岡露子)

容易らしく見へる女文士

女優に成りたいといふのは、決して今の若い女の或る一部にのみ限られた心もちでは無い。殆んど總てに共通した心もちである事は、女優齣が若い女の間に流行するのによつても知り得られるが、今若し玆に篤志家があつて「貴得を女優にしてやるぞ」と謂へば、容貌やら事情やらに妨げられざる限り、今の若い女で

之に「否やだ」と答へる者は、恐らく一人も無く、孰れも二つ返事の「エース・サンキユウ」を以て對へるだらう。これは單に日本に於てのみならず、世界を通じての傾向らしく、オクターブ・ユウザンヌの如き、西紀一千九百十二年出版の「近代巴里の女」のうちに「女にも、いろ／＼と職業の好き嫌ひはあるが、女優の候補者たらん事を厭やがる女は一人も無い」とさへ、書いてるほどのものだ。而も、斯く女優たるに至らん事を望む所以のものは、一に斯の職業が天下に我が名を弘め、勞少なくして有名な女となるのに、最も便利な職業であると稽へてるからだ。今の青年は名よりも利を求め、花より團子を重んずるが、曾つては、青年が利よりも名を追ふた時代がある。何事にも男より數歩遲くるゝを以て法とする女は、名利に對する心的狀態に於ても又男より數歩遲くれ、今の若い女は三四十年前の青年の如く、何ものよりも先づ名を追ひ求むるに汲々し、その心もちは、團子よりも花の時代にありといふべしだ。

有名な女にならん事を、唯一の希望とし又野心とする今の向上心ある若い女は、女文士になるのも亦、その目的を達するに便利な手段で、小説の一つも書けばそれが新聞或は雜誌に掲載されて全國に配布せられ、忽ち天下に其名を知らるゝ有名な女と成り得られる。好例遠からず中條百合子にあり矣と、餘り御面相が上等で無かつたり、鬘を被り白粉を塗り舞臺に立つて衆人に顏を曝らすほどの勇氣の無かつたりする娘たちは、少しばかり日記を旨く書けでもすれば、直ぐ女文士を志願する。今の若い女で多少の向上心あるものゝ心もちを、偽なく告白せしめたら、女優たる能はずんば女文士たらむ、といふのが、正味懸引の無いところだらう。晶子、明子、野枝、俊子、八千代、時雨、彌生子、さては中平文子などの名が都鄙に喧傳せらるゝのを耳にし目にしては、羨ましくつて／＼たまらず、有名な女となるには、女優で無ければ女文士に限るものと思つてるらしく、私などに向つてさへ、女文士になれるやう取立てゝ呉れと申込んで來る若い女からの

手紙が、毎月平均一通づゝぐらゐは舞ひ込んで來る。いま手近にある一二の手紙の端を左に御披露して置く。

…私は小説家になりたくつて成りませんので御座いますが、まことに厚皮しらは御座いますけれど、只今から努力致しましたら如何なものでせう。…何卒以後文章など書きました折りは御添刪下さるわけに參りますまいかしら？…（牛込かよ子）

…私事何不自由無き身なるも、近頃は父母も全く氣力衰へ、最愛の妹には死に別れ、日々寂しく家は陰氣となり…せめて心の慰めと文章俳句などを唯一の樂みと致し候…家にありて拙き物をいたしたく思ひ候へば何卒御教導願はしく此儀如何に候や…（大阪百合子）

私の許へすら、こんな手紙が頻々と舞ひ込むほど故、名ある女流作家の許などへは、定めし毎日のやうに、文士志願の申込が多い事だらうと思はれる。併も、趣味や天性の上から斯る希望を起したかの如くに謂ふのは僞りで、實は女文士になりさへすれば、容易に有名な女になり得られるものと誓へてるからだ。

此頃或る歌劇のコーラス女優の一人で、私を訪ねて來たものがあつた。「何うして、そんな處へ首を突つ込んだのか」と問ふと「賣名の爲めなんです。歌劇女優になつて少しチヤホヤせらるれば、世間に名が直ぐ賣れますから、そこで詩集の自費出版をやりたいと思つてます」と答へた。歌劇の下廻り女優になるのも、有名な女になりたい爲め、詩集を出版するのも有名な女になりたい爲め、――有名な女に成りたい〳〵の外には、殆んど何物も無いといふのが、多少向上心ある今の若い女の心もちである。有名な女になつて、それから何うするか――そんな事は全く考へぬのだ。之を利用して三國一の婿を引き當てやうとするのでも無ければ、又黄金の蔓にたぐりつかうとするのでも無い。

女繪師やら目につく衣裳

…どこか閨秀畫家の家へ住み込みたいと思つてますが、よほどお金が入りませうか。…名古屋には浮世繪畫家といつてありません。…。少しは畫の才と趣味も持つてゐます。別に、それで自活してゆかうといふのではなく、唯すきな事ですから、努力すれば、或る程度までは進歩しない事も無いだらうと思ひます。…（名古屋或る女）

斯んな手紙も亦、時折、私の手許へ舞ひ込んで來る

が、これも、近年文部省の美術展覧會が開かれるやうになつて以來、一度之に出品して入選さへすれば、忽ち女流畫家乃至は閨秀畫家として、其名が都鄙に響き渡り、恰も彼の大阪の島成園の如く、一躍有名な女に成り得らるゝところより、女繪師に成るのは、よし女優や女文士になるほど容易く無いものであるにしても、兎に角早く我が名を天下に知らるゝやうになる一の便法であると稽へるからの事だ。

造次にも顚沛にも、有名な女に成りたいが痼疾になつてしまつてる、今の若い女は、結婚問題にまでも、斯の「有名な女に成りたい」を持つて廻はるのである。二萬や三萬の身代の男では、假令、生活に追はるゝ苦勞が無いにしても、何處に住んでるのか當人の外には餘り世間に知る人も無く、爾んな男の妻になつて試たところで、甚だ生き甲斐が無いといふので、一錢の蓄え無くとも、年々「文章世界」の春期擴大號に掲載せられる「文士錄」へなりと其の名を列ねられる文士の妻にでも成つて置けば、夫の名が天下に知らるゝ御相伴で自分までも「あれはタレソレさんの細君だ」と世間の評判に上り得らるゝものと思ふところより、今の若い女たちは、三文文士でも木つ葉文士でも爾んな事を論ずる遑無く、何んでも文士の名は早く天下に知られるやうになるものと心得て、矢鱈に文士の細君になりたがる傾向がある。夫が容易に有名になれるから、その餘澤で自分も亦、容易く有名に成れるものゝ如く稽へるからだ。文士と結婚せぬまでも、實よりも名ある男を夫に持ち、自分も其御相伴に浴する光榮を荷ひたいといふのが、良人選擇の問題に會した時の今の若い女の心もちである。左んな手紙が或る若い女から私の手許へ舞ひ込んで來た事のあるのによつても、この消息は窺ひ得られる。

……私は婿取娘と生れたのですが、婿の候補者には

一、今年帝大工科(土木科)卒業の眞面目なる人

一、昨年早大理工科(電氣科)卒業の才子にて海軍造兵廠勤務

一、東洋音樂學校卒業にて樂師として汽船乘組み中

何れに致したら宜しからんや。……私は着實なる學士や俸給の僅かな早大卒業生よりも華やかで氣樂な藝術家を夫にした方がよいと思つて

居ります：：。（富山或る女）

この文言中にある「華やかな」とは「世人の目につき口に上る」といふ意味で、「世間に名の知られ易い男」を夫に持つのが自分の希望であるとの意は、この背信の断片中にアリ〳〵と之を讀み得られるのだ。つまり夫として華かなる男を持ち、これによつて我が身を飾り、世人をして自分を背顧つて見るやうにさしてやりたいといふのが今の若い女の心もちで、何故世人を反顧つて見させたいのかと云へば、これによつて、少しでも自分に注意する者を生じ、随つて少しでも有名な女になりたいと思ふからの事だ。この「有名な女に成りたい」の心もちは、結婚問題のみならず、今の若い女の服裝やら結髪式の上にも顯はれて居る。

今の若い女は、衣裳を新調するにしても、又た髪を結ふにしても、如何にせば美しく見へるかとか、或は如何にせば観る者に愉快を與え得るかとかいふ如きことに苦慮せず、如何にせば人目を惹き得るかの一點にのみ意を注ぎ、成るべく多く人の目を惹き得るやうな色模様の衣裳を選むことに骨折る。女優髷が流行するやうになつたのは「何よりも女優に成りたい」が今の若い女の心もちであるにも因るが、又女優髷は、人の目を峙せ得るからの事だ。人の目を惹き峙せる目的は他無し、少しにても、假令小範圍の人の間になりとも、有名な女になつてみたい爲めである。

男を苦ませるのが樂み

三越や伊東屋などを覗けば、洋紙の封筒や便箋の小形のもので、青いのや、赤いのや、紫なのや、綠なのや、五色七色いろさま〳〵なのがある。中には花の模様なんかを美しく彩つて印刷したのさへあるが、一體全體お雛様の玩具にでもなりさうな這んな封筒便箋が何の役に立つのだらう？ 勿論、女用として賣られて居るには相違ないが、若い男も亦之を買つて盛に使用するのである。女が斯る封筒便箋を用ひると謂つても、それは、二十歳前後の若い女が、若い男の許へ手紙を送る時に主として用ひらるゝに限つたもので、若い男

は又之を若い女の許へ手紙を送るに際して用ひるのだ。あの華やかな薄色を漉き込んだ小形の洋紙の便箋封筒が、三越の文房具部や伊東屋の店頭を飾つてるのを見ただけでも、如何に今の若い男女の間に、手紙の交換が親兄弟の眼の届かぬところで行はれて居るかを知り得られるだらう。今の若い男女の間には、斯くして異性と取り交はす手紙を「レター」と稱する。「フミ」なんかといふ言葉は現代語で無い。彼等の間で「レター」と謂へば、それは必ず戀ひ文のこと——懸想文の事である。

ニーツェは、女の眼は何時見ても男の接吻を欲する如き相を浮かべて居るものだと曰つてるが、今の若い女は、如何に表面堅さうな教育を受けて堅さうに見せかけて居つても、若い男の手によつて書かれたレターを受けたいものだとの心もちになつてるものだ。若い男からレターを送られたといふのが、今の若い女の誇りである。流石に女だけあつて、自分から初めて若い男の許へレターを送りつけるほどの大膽になり得るものは餘り多く見當らぬが、一度、若い男からのレターに接すれば飛び立つばかりに嬉しがり、廢せば善いのに、直ぐ例の五色洋紙の小形な封筒便箋を用ひて返書を認め、一度は二度三度と度重なるやうになれば、そのうちには女の方から却て頻々と男をレター責めにし、それが遂に若い男との關係を生ずる緣となり、爲に苦んでる若い女が當今決して尠なく無い。この邊の消息は私の手許に送られた左に拔萃して揭ぐる若い女の手紙の一端を讀んだのみでも容易に窺ひ得られる。

(便箋小形黄地罫用紙)……私は半年以前男の方から手紙で交際を申込まれました。……先生！　女といふものは弱いもので、遂ひ其の方に同情して交際をはじめ今日に至りました……手紙は三日にあげず參ります。私も其度に返事を出して居りました。……(岡山春子)

(便箋普通の卷紙)……私は大膽にも娘の時分から或る男を戀したのです。……たゞ思ひ合つて居るといふばかりで……誠に淸らかなものでしたが、手紙の交換だけはして居りました。……(京都きち子)

今の若い女も、二三十年前の若い女の如く、男から手紙でも送らるれば「これは又困つたものが來た」などと胸を痛めて心配するものだらうと思つたら大きな見

當違ひで、若い男からの手紙が今日來るか明日來るかと待つてるほどなのが今の若い女の心もちで、來さへすれば、直ぐに返事を出すのみか、若い男から一本の手紙さへ貰はぬやうでは、若い女として幅が利かぬかのやうにさへ稽へ、實際は端書一枚すら送られて居らぬのに「何々さんからレターが來てよ」なんかんと、朋輩たちの間に評判される若い男の名を擧げて、來もせぬ手紙を來たと稱して、詐り誇るほどのものだ。

何んでも、一人でも多くの男からチヤホヤされたいといふのが、今の若い女の野心で、甚しい質の女にあると、周圍にある男のうちで、少しでも自分に近づいて來たさうな顏をして居るものがあると看て取るや、自分の方から進んで其男に近づいてゆき、精々甘つたるく見せかけたりなぞして、思はせ振りを示し、而も萬遍無く多くの男を斯の傳にかけて軒並に迷はせ、若い男たちが數限り無く、自分の爲に輾轉反側苦悶するのを見て、心私かに「快哉」を絶呼し、自ら勝利者を以て誇りとして居るのさへある。これでは、女にニーロー辛に及ばぬほどの殘忍性があると謂はれても、辯ずべき言葉の無いほどだが、一人でも多く自分の故を以て苦む男を殖し、その苦むところを酒の肴にしてやりたいといふのが、今の若い女のうちでも、殊に際立つて向上心の盛んな女の心もちである。

自分の爲に、斯くまで多くの男を苦ましめ、その苦む樣を見るのを何よりの愉快として居る一方には又、自分は飽くまでの享樂主義で、少しでも苦まうとせず快樂をのみ追ふて走り、二三十年前の若い女の如く、着實な男を夫に持たうとか、或は又、健實に自分の立脚地を堅めやうとかの考を毛頭起さず、樂しさうな男を夫に持ち、樂しさうな境遇に立たうとのみし、その結果却て樂しからぬ夫と同棲し、樂しからぬ境遇に沈まねばならぬやうになつてるのが、今の若い女である。

* * * *

今の若い女の親々、今の若い女を教育する女學校の先生たちに、今の若い娘たちが斯んな心もちになつて

る事を、覺へて置いてもらひたい。今の若い女の心もちが何んなものであるかも知らずに、既に四十の阪を越して居りながら、自分ばかり若いつもりで、何んの彼のと八釜しくばかり小言を並べて聞かせたところで、今の若い娘たちからは、たゞ一言「うるくつて困るのよ。わから無いのねー」で一笑に附されてしまうのみだ。（了）

醉さめの悲哀

——男が四十になる時の心持——

松崎天民

いろんな男や女に宛て、この數通の手紙を書いた。既に郵便で送つたのもあるし、まだ其の儘になつて居るのもある。長いのや、短いのや、文體も異つて居るし、內容も別々である。たゞ最近に於ける私の生活狀態を、有の儘に告白したゞけで他に意味があつての事ではない。

○

渡邊利喜松兄——

俺も明けて四十になる。……

自分では、まだ、三十前後の氣持で居るけれど、何と云つても爭れない。前額部が次第に脫けよつて來た。四十だ、四十だ、もう愚圖〳〵しては居られない。何だか急に、重い物を背負はされた樣な、そして後から追立てられる樣な、胸苦しい氣持がして困る。

俺もいよ〳〵、これからが本舞臺だとは思つて居る。十歲までは何も知らなかつた。二十歲までは夢中

であつた。三十歳までは現であつた。四十になるまでも、要するに駄目であつた。自分でいろんな理窟を附けて、やれ修養時代であつたの、經驗時代であつたのと云つても、要するに無我夢中であつた。自覺だとか、内省だとか、煩悶だとか、懊惱だとか云つても、これを要するに、要するに……。

　これからは、身體が衰へ行く一方だなと思ふ、心細くなる。これからは、女にチヤホヤ云はれなくなると思ふ、變な氣になる。これからは、眞の中年者になるんだなと思ふ、淋しくなる。これからは、これからは、これからは……苦しくなる、悲しくなる、痛ましくなる、泣きたくなる。これからが、ほんとに仕事をする時代だ、男として完成された勇氣を以て、惑はず……にして起つ、と思つて見ても、四十と云ふ、その四十を音で聽いても、字に書いて見ても、厭になつてしまう。何だか、若い元氣のある群から、葬り去られる様な、心細い氣持がして堪らない。

　實を云ふと、俺は近頃、神經衰弱に罹つて居るのかも知れない。新聞社の勤務が夜になつて、六時頃から十二時、一時頃まで、赤いインキと親しむで居る。内幸町から青山まで赤電車で歸ることもあるし、人力車で歸ることもある。寢るのが午前二時頃で、眼が覺めるのが十時か十一時。何だか自分の周圍の世界が、急轉した様に眺められる。他の社に居た時にも、夜の編輯に從事したことはあつたが、そんなに草びれなかつた。それに近頃は、何だか疲勞の度が烈しくなつた様に思へる。やはり、「それだけ齡をとつたのだ」と云はれると、「馬鹿を云へ」と元氣を出すものゝ、全く俺は近頃どうかして居る。考へが消極的に落ちたり、馬鹿に世帶染みて來たり、ほんとに齡を取つたのか知らんと思ふ。——そこで、「明けて四十になるぞ」と、タイムと云ふ思ひ遣りの無い魔の様な潮が、一層この俺を脅しつける。

　身體の全體の調子が、無恰好に出來て居るのに、モーニングコートの三ツ揃と洒落れたり、キツトの赤靴の尖の細いのを註文したり、いろんなネクタイを用ひて見たり、さうした青年の俺は、二年の昔に、何處か

へ行つてしまつた。裏の破れた三年前の古外套や、尻に穴の明いたメルトンの背廣を着て、平然として歩く樣になつかと思ふと、俺は何だか、自分と云ふものが不憫になつた。たつた四五年前までの俺は、斯うではなかつたにと、机の上で頰杖ついた手に、髥の髭などが、ムジヤ〳〵と貧乏らしいではないか。俺の心の一隅には、「まだ若いぞ、若いぞ」と云ふ聲も聞える。「これからが、本眞劍の勝負だぞ」と云ふ、威勢の好い聲も聞える。それだのに、俺の他の心は、悄氣返つて居る。神經衰弱の所爲であらうか、四十と云ふ、憎い齡の所爲であらうか。それとも又、遊ぶべき夜の世界から、異端者視せられて居るためであらうか。

「松崎が、夜の世界を封じられた、宜い氣味だなア」と、友達の一部では拍手喝采したさうな。けれども此の頃の俺は、モウ昔の俺ではない。カフエーやバーや小料理屋や待合や、そんな方面の趣味は、次第に無くなつて來た。宴會になど行つても、心から醉ふて唄ふと云ふ樣な事は無くなつた。二三年前までは、酒に醉ふて、美しい若い妓でも見ると、直ぐ心を動かして居た俺も、近頃では冷たい(第三者)になり得る樣になつた。第一この一二年と云ふもの、心の底から愉快に、醉ふたと云ふことがない。夜の世界、燈火の巷、歡樂の家、そんな文字は、淺間しい過去の夢になつた。さうした俺は、夜遊びの世界から除け者になつても、少しも淋しいと思はない。反つて醉ざめの淡い哀しい氣持で、遊逸の空氣の中に浸つて居た昔の俺を、淺間しいことに眺めたり、怪からんことに想ひ現したりして居る。

考へて見ると、俺はこの一二年間に、絶えず樣々の苦勞をした。平凡な男の平凡な苦勞が、遂には俺の心の巣にまで食入つたに違ひない。その苦勞は、四十になると云ふことが、醉ざめに似た佗しい氣持となつてこの心を滅入らすのである。それに違ひない、何うもさうだと考へるより他に仕方が無い。

兎にも角にも、俺は明けて四十になる。男としても、人間としても、肉體的にも、精神的にも、完成される

齡になつた。眞に充實した氣持で、今までに覺えなかつた切實な自覺を以て、働き得る齡になつた。それだのに、俺の別の心持は、寂しく、心細く、哀しい。

今日も、床屋へ行つて、大きな鏡を見たら、別な「松崎市郎」が泣いて居た。——

あゝ、俺も、明けて四十になる。

何とか云つてくれ、云つてくれ。

○

熊本の女よ——、今の私は、あなたを呼ぶのに、斯う云ふより他に、仕方がありません。夫婦となるべかりし女、第二の妻となるべかりし女、そのあなたとは、遂に逢ふことなくして、今日に及びました。思ふに一生涯、逢ふことなくして、お互に死ぬのでせう。

あなたから來た數十通のお手紙を、去年の十一月に悉く燒いしまひました。「そんな手紙な、私に隱して藏つてあるのは、まだ××子さんに、心が殘つて居る證據です」と、妻が云つたとは申しません。然し、私は一切を燒いてしまひました。そして手紙の往復を、斷然斷つてしまひました、あなたの爲めの幸福と云ふやうな、世間體の好い理由ではない、實は私一家の幸福のために、平和のために、私は私の心を欺いて、すべてを灰にしてしまひました。

あなたはそれから後、好い緣を求めて、結婚しましたか。それともまだ獨身で、國家のために働いて居ますか。私は何れにせよ、たゞあなたの生活——心の生活——の幸福を祈ると云ふより他には、適當な言葉がありません。そしてあなたに對する文通上の內約を破棄して、私が別の女を妻に娶つた事は、あなたにとつて、決して不幸な事でなかつたと云ふ一事を、こゝに改めで申し上げます。そして彼の當時、あなたの感情を弄んだ樣な結果になつた事を、私自身でも苦痛に感じました事を、今日では反つて、お互の幸福であつたと申し上げます。

私の家庭は、哀れな人間の合宿所であります。私も妻も、三人の子もみな運命に呪れた、孤兒同樣の寂しい氣持を抱いて、その日〳〵を送つて居ます。そして

皆でお目出度さうな顔をして、大正六年を迎へやうとして居ます。四十になる私と、二十九になる妻と、十六になる長男と、十二になる二男と、八歳になる三男と、みんな別々の寂しい心持を抱いて、「お目出度う」と云ふのです。

熊本の女よ、あなたは私の妻にならなかつて宜かつた。妻と子供との淡い葛藤の中に立つ私や、妻と私との複雑した交渉を、日夜に經驗して居る私は、あなたに對する過去の私の不信の行爲を、あなたの幸福のために敢てしたとも、强辯し得るだけの苦しい經驗を辿つて來ました。

あなたは幸福である。——願くは未見の妻を不憫に思つてやつて下さい。

私も、いよ〳〵四十になります。

○

楚大人足下、あの晩は、ほんとに面喰つた。

「松崎さん、電話です、松本さんから」

と、給仕が取次いだ。恰も十時の三版を締切つて、大組を終へ、編輯局に入つて來た時であつた。

「松本、誰だらう、知らん人だが……」

「女の聲ですよ、若い女らしいですね」

僕は電話口へ行つて、受話機を耳にした。

「あなた松崎さん、私判つて、松本よ、あらまアいけすかない、松本だつてばさア」

「誰、松本、一體、君は誰だい」

可愛い女の聲は、笑ひこけて居る様子であつた。市内版の十二時までには、まだ一時間位もあつたが、あの晩は忙しくて、一人でテンテコ舞を遣つて居る處へあゝした電話をかけるなどは、全く以て人を馬鹿にして居る。

「おいこら、貴様は馬鹿だなア」

それは楚大人足下の聲であつた。今度は又、別な癇高聲が饒舌りつゞけた。

「あなたが天民さん、私は新橋の藝妓よ、毎度あなたの新聞の御厄介になります藝妓よ、斯う見えても、……あら電話だもの、見えないわねえ」

人が忙しく働いて居るのに、何と云ふ無禮な、思ひ遣りの無い電話の主であらう。

「や、失敬〳〵、僕は大凹變人であります、こゝに改めて感謝の意を表明いたします、終り、失敬」

今度は「第三の男」が、例の軍隊式の口調で、バサバサと味も身もない譯の判らぬ事を云つた。次に又藝妓が出て、最後に例の與次郎が出て、皆でワー〳〵と笑ひ興じた。そして最初より茲處まで、僕には一語も吐かせないと云ふ、憎むべき計略にまんまとかゝつた。僕は重ね〳〵口惜しくて〳〵仕様がない。

その晩、市内版の編輯を終へて、青山の宅へ歸るまで、僕はいろんな事を考へた。そして木挽町のみどり家あたりで、思ひ〳〵の安價な戀の相手を擁して、酒肉の香に陶然として居る、足下等の夜の生活を考へた。これが一二年前の僕であつたなら、羨ましくて堪らなかつたかも知れないが、この頃の僕はモウ覺め切つて居る。何んな藝妓の顏を見ても、何んな美しい女を見ても、更に浮かれ心をそゝられぬやうになつた。—然るに足下達は、今も尚依然として、燈火の巷にさんざめいて、浮れ且つ興じて居る。花やかな夜の生活にさうして歡樂を盡して居る足下達が幸福か。人の遊ぶ夜の世界を、仕事に汗し勞れて居る僕が不幸なのか。あの電話のいたづらは、何時になく、僕にいろんな事を考へさせた。

思へば僕も、足下達と共に、みどり家あたりで興じ合つた事もあつた。それから一年、二年、三年、無爲にして遊びに費した「月日」と「金」の上に、淡い悔恨の情が萠す様になつては、足下達に云はせると僕も大に老いたのかも知れない。けれども近頃の僕は、

「今まで遊んだ金があつたら、住宅の一軒ぐらゐは、自分の物になつて居たのに……」

などゝ思ふ様になつた。更に又、

「結婚と云ふ大詰には、絕體に辿り着かれぬ様な女を相手にして、いろんな悲喜劇を演じて居るのは、徒らに戀を弄ぶに過ぎない」

とも考へる様になつた。そして僕が、何うしたはづみ

から、斯うした心持になつかは、問題にして貰ひたくない。僕はたゞ、酒や女に對する興味が、日一日と薄らぎ行く僕の傾向を見て、一段の哀愁を感じながらも、今までに經驗したことのない、「生活の舞臺」の中に、僕の姿を見得るやうになつた。

楚大人足下、足下が曾て、多少の煩悶を抱いて通過した「男四十」の關門を、僕も亦た樣々に思ひ惱みながら、今、辿らうとして居る。此の遣る瀬ない淋しい心持は、たゞ僕と同年輩の人にのみ、泣いて語ることが出來やう。

「第三の男」や與次郎は、まだ／＼若い。

謹で彼の夜の電話を感謝す。

○

佐藤密仁兄、毎々御心にかけられ、今度は又好物のかまぼこ、栗おこしなど、澤山御送り被下、御厚志深く御禮申上候。當方よりも、何か名物を送呈せんと、心がけ居り申候へども、何時もの海苔だけにては、餘りに興薄しと存じ、差ひかえ居り候始末、惡しからず御容赦被下度候。

大阪には昨年の二月、一寸參り候のみにて、長いこと入阪の機會なく、殘念この事に存じ居申候。酒や女の方は、近來興薄く相成候へども、第二の故郷とも申すべき大阪に參らば、若き日の思ひ出淺からず。或は仁兄の誘ふにまかせて、北新地に一夕の情話を拜承したしなど、申出づるやも知れず候。仁兄を小生に介したる瀧田樗蔭兄とは、近來疎縁に打過ぎ居り候へども同兄の酒は依然として其の量の深さを誇り居る樣子に候。但し近來は、書畫骨董の方に沒頭し、小生どもには判らず候へども、時折、大變な掘出し物をして、舌鼓を打ち居る樣子に候。

仁兄も小生と同じく、先夫人に死別いたされ、愛孃を抱いて悲嘆に暮れ居られ候ひしも、近く第二の內君を得られ候こと、慶賀申上候。お互に同じ樣な悲しき經驗を嘗め、同じ樣なる人生の痛苦を味ひ候こと、何事も運命づけられたる不幸として、あきらめ候より致し方なく、この上は唯々行く末の幸福のみを念とする

のみに候。妻に先立たれ候お互も不幸なれば、また子供達も不憫に有之、更に第二の妻として、生さぬ仲の情義に泣く女は、憐れにも氣の毒至極なりと存じ候。この點の事に就いては、仁兄にも一家見あるべく小生も昨年來いろ／＼經驗いたし、今更の如くに、人情の眞諦に觸れ申候。お互の苦しく悲しき內面生活の實見は、一萬金を以てするも購ひ難き一種の至寶として、珍重いたすべき價値あり。左樣にでも思ふことは自ら慰むべき方便にして、また人知れぬ淋しき誇と存じ申候。

新夫人に見參かた／＼、この秋には是非とも下阪いたしたく存じ居りながら、身世不如意の事のみ多く、今年も早や暮れ申候。小生もいよ／＼明けて四十の聲がかゝるかと思へば、何時までも舊態のみを固守しては居られ不申、仕事の上にも何か新生面を開拓いたしたく、それのみ焦慮いたし居申候。仁兄の如く大學を出しに非ず、御承知の無學を以てして、優勝劣敗の激しき騷擾に、名實ともに併せ得んこと、なか／＼の難事には候へども、これからが本舞臺かと思へば、骨鳴り肉動くの感無きに非ず。この上とも御聲援のほど、切望に堪えず候。

新春、若し小閑を得候はゞ、一二泊の積にて、仁兄が天王寺畔の閑居を驚かし可申候。未見の令夫人に宜しく、愚妻よりも宜しく申出候。尙ほ本年も例の鹽餡少々御無心申上たく、鹽餡がないと雜煮の餅が食べられぬとは、困つた者に候。匆々不一。

○

今日は、お前が居ないので淋しい。

昨夜は深川の瓦斯タンク爆發事件で、市內版の編輯が十二時過ぎになり、人力車で宅へ歸つたら、午前一時半になつて居た。能く寢て居たお俊を起すのも可愛相だつたから、自分で湯を沸かして、茶漬を五杯食べたが、牛肉の惣菜と新澤庵で、麥飯の味が殊に美味かつた。それから二階へ上つて、六疊の方で寢たが、何だか神經が昂奮して容易に寢付かれなかつた。

子供達が起きて、御飯を食べたり、學校へ行つたり

する氣配を夢か現の間に覺えて居たが、七時半頃から又寢入つて、眼が覺めたのは十一時過ぎであつた。それから御飯を食べて居た處へ、博文館の金子紫草さんが來られ、間もなく十九二君が來たりした。お客さん達が歸つてから、風呂に入つて、ヤッと今、眼の覺めた氣持になつて、この机に向つた。何時もならお前が上つて來て火鉢の吹殼の掃除をしてくれる時分だが、今日は何だか淋しい。又俄に獨身者になつた樣な氣持がして、例のマドロスパイプを咬へながら、いろんな事を考へて居る。何うせ今日は歸るまいから、この機會に、この手紙を書いて送る。

夫婦になつてから、恰度一年半になるが、子供の事やら、何や彼やで、お前と私とは能く言ひ爭ひをした。癇癪持の私、思ふ事を云はずには居られぬ私、不徹底なお茶濁しは嫌な私と。更に少しもお上手と云ふものがなく、感情の向ふ儘に、振る舞ふお前、輕いヒステリックなお前、それで居て案外、平然たるお前と。二人の間には、夫婦喧嘩を遣りだす天性が、自然に培はれて居るのだもの、この一年半の間にも、隨分いろんな喧嘩をした。果は私が撲る、撲られると云ふ樣な、二輪加の幕も度々演じて、後で思へば可笑しい樣な、いろんな悲喜劇を演じたりした。それで喧嘩の度毎に、お前は口癖の樣に「歸る」と云つたり、私は又「歸れ」と云つたり、お互の感情の激した時には、口汚く罵つたり撲つたりし合つた。犬も食はぬ喧嘩と云ふのは、こんなものだなと、お前を罵つて居る間に、つと可笑しくなつて、吹き出す樣な笑を忍んだことも、何回であつたか知れなかつた。

お前も考へたであらうが、私も時には眞面目になつて、二人の夫婦としての行末を、考へたこともあつた。別れてしまうなら今の間だと云ふ、當面の解決は直ぐ着いても、さて「別れて後の生活」と云ふことを考へると、私の心は何時も暗く鈍るのが常であつた。お前にしても、遮二無二別れてしまうと云ふ決心は、何でも無く着いても、「別れて後の身の上」を思ふと、その心が鈍つたに違ひない。けれども斯う云つたとて、お前

と私とは、別れた後の淋しさ、つまらなさを考へて、それでお互に辛抱して、夫婦としての形態を造つて居る様な、そんな消極的のその日／＼の夫婦仲ではない。義理とか人情とか云ふ、かなり複雜した關係の他に、お前と私とは、容易に別れ難い思ひ出と、その思ひ出に關聯しての執着を植ゑ付けられて居る。「歸る」と云つたお前が、遂に歸りもせず、「歸れ」と云つた私が、遂に歸しもせずに、今日までも斯うして、夫として妻として暮して居るのは、お互にモウ忘れ難い「過去」を所有し合つたからである。二人の「別れる日」は、斯うして何時の間にか、過ぎ去つてしまつて、今では二人を日一日と、深い／＼思ひ出の谷底へ導き入れて居る。

　私はお前に向つて、斷じて虛僞の感情を强ひたり、虛僞の見え坊を强ひやうとはしない。生さぬ仲の子供に對するお前の心持は、母と云ふ「美しい虛僞」に囚はれたり、煩はされてはならない。お前はたゞ何處までも、親切な同情者として、實の子を親しく養ひ得ぬ母としての愛情の貯へを、私の子達に注いでくれさへすれば宜い。そこにお前の淋しい慰安があり、悲しいあきらめがあり、苦しい義理のひらめきがある。お前は唯、私と云ふ一人の愛情と、子供達が齡長じて後の深い感激とに、その立つ瀬を求めて、その日／＼を微笑まなくてはいけない。お前に似た境涯の婦人も亦た、「美しき虛僞」の下に隱れて、その本來の感情を害んではならない。――

　出社の時刻になつたから、モウ筆を擱く。皆さんに御無沙汰して居るが宜しく云つておくれ。お前の留守中に、深川の德壽君から、美事な鹽鮭を五本持て來てくれた。講習所で德壽君などが造つた漁船が、露領で獲つたのださうで、如何にも美味さうな色をして居る。明日は歸つて來るだらうね。

○

　桐生悠々詞兄、大兄が斷然、酒を禁められし意味を、近頃に至りて了解せり。小生は今、大兄が通られし道の一角に立ちて、様々に思ひ悩みつゝあり。

名古屋に赴かれて以來、大兄の充實せる徹底的の活動、眞に眼覺しきものあり。老來、中央の新聞界に獅子吼せる德富蘇峰先生の雄姿を仰望する每に、覺醒して地方新聞界に雄飛せる大兄の活躍を想望して、衷心より欣快の情に堪えず。遙に此の寸音を送りて、大兄の健康を祝福す。

小生は今、一代の危機に立てり。醉ざめの悲哀に、淋しき醒覺を感じて、生涯の一轉機に、新なる生面を開かんとす。

あゝ人生四十の春。——

○

與次郎君、須田町の乘換場で、彼の女に逢つた。大きな丸髷に結つて、下町の女房風に見えたが、やはり誰かの圍ひ者にでもなつて居るのであらう。

「××さんに、お逢になりますか」

女は斯う云つて、例の金歯を光らせて、肉感をそゝる樣な、卑しい嬌態を見せた。

「近頃は少しも逢はないよ。相變らず、遊んで居るさうなが、…若いからね」

「やはり、彼の方、瀧山町ですか」

「さうさ」

「あなたは……」

「內幸町……」

「へえ、ちつとも知らなかつたわ」

「君は今、どこに、例の人とかい」

「えゝ、相變らず平々凡々なんですわ」

「結構、結構、御飯さへ頂ければ、不平を云つたり、浮氣をしたりしては、罰が當るからね。神妙にして居なくちやいけないよ」

「御飯さへ……はしどいわねえ。浮氣なんかしないけど、それでも不平は大ありよ」

「それがいけないんだよ」

「だつて仕方がないわ、人間だもの……」

「何時まで經つても、同じだね、君は」

「あなたも同じね、肥るばかり……」

「二年ぶりだね、足かけ三年……」

「モウ、そんなになつて、……ちよいと、奥様を貰つたつてね、どんな方……」

「若くて美人で、ハイカラで……」

「よう、よう、何かおごつて頂戴よ」

「馬鹿を云へ、君と一所に飯でも食はうものなら、レコが火の様に怒るだらう」

「あなたのレコが……」

「君のレコがさ……」

「お互様だわ、ねえ」

「青山行だ、ぢや失敬……」

「左様なら、××さんに宜しく……」

新橋に出て居た時よりも、肉つきや顔色が好くなつて反つて若返つた様に見えた。

昔馴染の藝妓と、三年振りに逢つても、僕の心臓はピクともしなかつた。女の平氣な態度を、物足りなく思ふよりも、僕は自分と云ふものが、何だか齢老つた氣持になつて、淋しい氣持がした。

彼の女も、もう二十六になつた。

○

瀧田樗蔭兄、先夜、麻田氏に電話で、この稿が何うしても書けませんから、折角、豫告などなさつたのに申譯がありませんけれど、今度だけ延ばして下さいと申しました。全く近頃の私は、何う云ふ譯ですか、何を書いても更に氣に入つたものが出來ません。

それに今まで書いたものを、ソッと取出して讀で見ますと、碌なものは一つも有りません。雜文の上に、多少の新意を試みたのも、今は多くの踏襲者が出來て、何時までも同じ處に、彷徨しては居られなくなりました。私は私としての別な新しい道を拓いて、進むべき世界を創らねばなりません。さうした氣持が、この頃の私を絶えず焦躁させて、何んな物を書いても、「これではいけない、これではいけない」と、私を急き立てます。

私は何處までも、自分と云ふものを描かなくてはなりません。然し、多くの小説家が、責任を回避する樣な態度で、事實の敍述を小説體にしたり、紀行文や感

想錄風のものを、小說として發表する樣な、あんな形式は執りたくありません。私は何處までも、自分の人生と生活とを、實感の記錄として發表したいと思ひます。それが非藝術であらうが、ヂャーナリズムであらうが、そんな一小局面の技巧上の問題として、彼れ是れ云つて貰ひたくありません。所謂批評家連中の箸にも棒にもかゝらない雜文と蔑まれやうが、雜文家として笑はれやうが、そんな事は問題になりません。私には藝術よりも、モッと生々しい實感と云ふ、眞實の生命があります。

けれども、私の斯うした窮極は、やはり小說家の小說と、同じ樣な結果を見るだらうと思ひます。今まで書いた樣な、荒けずりの、月並の詠嘆に囚はれた樣なものでは、ほんとの實感を云ひ現はす事は出來ません。自分の思つて居ることゝ、文章上の表現とが、離れ離れになつて居ては、今までの述作と少しも違ひません。今までは、浮かれ心と興味とで、悲しいとか憐れとか云つてしまつて、それですまし返つて居ました。事相を觀照する態度なども、おつちよこちよい至極でありました。そんな事ではいけない、そんな若いことではいけない、モ少し落着いて、靜に觀たり眺めたりして、それを考へ究めた後でないと、ほんとのものは書けません。明けて四十になる私は、これを機會に、すべての過去を葬つてしまはなくてはなりません。そして新しい自分と云ふものを、新しい態度と新しい樣式に依つて、表現しなくてはなりません。

四十になると云ふ今、私は切實に、自分の生活を反省しました。そして今日までの私は、ウソばかりを書いて居た事に、ヤッと氣が付きました。いろんな文字を弄しても、ウソを書いて何にする。私は四十の春から、更に小學生となつて、人生觀照上の新舞臺に立ちます。願くは、過去を葬らしめよ。新しい私は、放たれた自由の身になつて、すべての傳習と因襲から脫けなくてはいけません。斯う思ひますと、私は當分の間何も書けないやうな、重苦しい氣持を感じます。誰の上にもある一代の危機と、轉換機とが、私の上にも痛

切に迫り近づいて來たのです。

もう文章など、上手に書かうとは思ひません。たゞ如何にして、眞實を描き得るかと云ふ事が、私の當面の問題であります。生命に、生活に、人生に、今日までの私は、自分で自分を欺むいて、いろんな空虚な文字を弄んで居ました。そんな事はいけません、そんな事では、ほんとにいけません。

要するに私の仕事は、新しい自分を創造する他には何ものも有りません。すべての古きものを壞たしめよ、斯くてそこに、新しい私の芽生えに培ふことが出來ませう。

瀧田樗陰兄、文章を書くと云ふことの眞意義を、私は今日、初めて自得しました。

喜んで下さい、喜んで下さい。

（大正五、十二、九夜）

蛇の話

東京理科大學動物學教室　波江元吉

本年は巳歳であるから蛇類に關する談をせよと主幹の依頼がありましたから、左の事項に就て其概略を陳べることに致しました。第一蛇の體制、第二蛇の脫皮、第三蛇の運動、第四蛇の食物、第五蛇の生殖、第六蛇の敵、第七本邦に果して大蛇棲息するか　第八有毒蛇と無毒蛇の別等にして、敢て新しき面白い實のある話題も之れなく、所謂故を溫ね而て新しきを知ることを得れば幸甚の至です。

▲蛇の體制

蛇は爬蟲類の一にして人の知る如く其の體細長なれ

ば、體中の器官は吾人の臟器の如く左右相對する者は其位置雁行し、或は一方發達して他方縮小する者あり。肺臟の如き然りとす。普通右肺は發達して左肺は縮小す。然るに海蛇の肺臟の如きは右肺のみ發達して咽喉部より肛門近くまで延長し、一管嚢狀をなし、溜汽室の用をなす者あり。陸上に棲む者は概ね鼻孔側面に在りて、尾は圓錐形をなし、或は長く鞭狀をなす。海中に棲む者は鼻孔喙上に在り、且尾の形ち扁平となりて游泳に便す。

▲皮膚の鱗片

は屋瓦狀に排列し、其形ち概ね楕圓をなせども、種類に因り、或は細長となり、或は幅廣となる。背鱗は小にして、其數多く。腹鱗は所謂蛇腹とて、幅廣く、丈け短き鱗片一列をなすを常とす。併し海蛇中には背腹同一なる六角形をなし、魚鱗の如く重り合はず、石垣狀をなすもの多し。臺灣及沖繩等に產する盲蛇は背腹一樣に二拾個の圓鱗に被包せらる。又頭上其他に大形の鱗甲板あり。其形狀大小各差等ありて種類を判別する特徵の一となす。故に便宜上各其部分に依り、名稱を附し識別を容易ならしむ。例へば顱頂板、額板、前額板、鼻間板、眼上板等の如し。唇板も概一定の數ありて、少きは四、五個より多きは十餘個あり。普通は七、八個を具ふるを多數とす。其他鼻板、頰板、眼前板、眼後板、是れは細板にて眼の前後にあり、一個より三個まで屬に因て異同あり。顳顬板は唇板と顱頂板との間に在りて前後二列をなす。頤下板は下唇板の間に在りて細長形のもの一、二對或は稀れに三對あり。肛板は肛門上に在る板狀の鱗にして、腹板より較々大なり、一枚若くは二枚より成る尾下板は普通二列をなす、稀れに一列をなすものあり。

▲蛇の脫皮

蛇の鱗は表皮の變形にして、魚鱗の眞皮より生ずるものと異なり、營養充實して生長盛んなれば、表皮は年々一回乃至二回脫落するものなれども、蛇類の鱗片は相ひ連絡して脫離するを以て世人の熟知する所なり。其狀恰も蜘蛛蝦蟹類の脫皮と相ひ同じ。蛇の脫皮せん

とするや、一週間程盲目の狀態となる。之れは眼を被包する表皮弛離して不透明となるためなり。先づ唇鱗の內側より剝離し初め、裡反りて頭部より漸次脫皮す。脫皮したる當初は、鱗皮薄く透明なれば色澤鮮麗となり、全然他種の如き觀を呈し、日を經るに從ひ厚く暗色を帶ぶるを以て常體に復す。沖繩地方に產するはぶに銀はぶ金はぶの稱あるは種類の差違にあらずして、卽ち其脫皮前のものを金はぶと云ひ脫皮後のものを銀はぶと稱する如し。

蛇類の色彩は脫皮の爲めに一時的に變ずる他(ほか)に、初年のものと老成のものと異なるもの多し。あをだいしやう、しまへび、ぢむぐりの如き其色彩に著しき變更あり。前二種の背部に在る縱斑の如きは、幼兒のものには現はれず。後種の老成のものは背部小豆色に黑色の細點あれども、幼兒は灰白色に黑色の橫斑あり。尤もやまかゞし、ひばかりの如く、幼老の色彩に著しき變化なきものもあり。又烏蛇白蛇と云ふものも往々見せ物等にて觀るが多くは變色したるものなり。先年伊豆の大島にてしまへびが全體に黑色に變じ居るを視察したり。亦あをだいしやうの白色に變じたるを淺草の見せ物にて觀たことあり。

▲蛇の運動

蛇は手足を具へず、亦翅鰭(はねひれ)等の外部器官を具備せず。其運動は專ら軀幹の働に依る。從て脊椎の數も非常に多く、各椎骨は稍長くして前端は顆狀をなし、後端は盃狀をなし、其顆狀部は盃狀部に挿入し、之を連接する筋肉能く發達するを以て、如何に他物に纒絡するも、脫臼することなく、其運動の自在なる實に驚くべきなり。且蛇類の肋骨は頸椎より臀部まで、各椎骨に一對宛を有し、一端は脊椎に關接し、他端は胸骨を缺く。故に直に腹鱗の內面に附着す。蛇の進行するは體の一部に對し支點となるべき突起を地上に見出せしとき、肋骨が互に密接する爲に、體は其部分に屈曲を起す。是れが體の兩側に相互に行はるゝと同時に、體の後部に於ても、其支點を粗地に見出したるとき、前部の屈曲部は之を支點として、前方に眞直に伸長するを

以て、體を前方に推進することを得。其格段なる運動の際、腹面の數多の鱗板は、其遊離緣に因て地上の些細なる隆起物を食み、支點となす。故に進行する上に大なる裨益あり。蛇は斯の如き方法に因て運行する故に、平滑なる表面上には一定の方向に突進する能はず。試に蛇を硝子板上に置くときは唯蠢動するのみにて進行すること困難なり。蛇の草深き場所を通過する際は水中に於けると同一に、體を左右に屈曲し、草の抵抗に依て前進す。恰も水の抵抗に因て游泳するに異ならずと云ふ。又ある蛇は樹上に在りて體の後部を以て樹枝に纏絡し、前部を中空に浮游せしむることあり。沖繩大島等に於て、はぶの斯の如き姿勢をなして往々路傍の樹枝に懸垂し居り、爲めに通行人の打擊せらるゝことありと云ふ。又南洋にはトリー、スネーク(Tree Snake)とて常に樹上に棲む蛇あり、其の腹鱗の兩側には折目ありて腹鱗の中央を凹狀になすことを得て、枝上の丸みある凸面と密接し、樹上の運動に便するものあり。

▲蛇の食物

蛇類の食餌(えじき)は、專ら活動せる動物にして、植物質は取らざるが如し。動物中にても、哺乳類、及其卵を嗜むものあり。蛙類を好むものあり。或は昆蟲、蜘蛛類等を捕食し、海蛇は魚族を食餌となす。吾人、蛇と云へば直に蛙をば相ひ聯想し、蛙は蛇の唯一の食餌の如く考ふれども、種類に因て其嗜好自から一樣ならず。例へばあをだいしやうは鼠類、小鳥、卵等を嗜み、やまかゞしは蛙類を好み、蝮蛇は野鼠、あかかへる、ばつた等を食餌となす如し。

却說、蛇類の下顎は、方骨に因て上顎に結接するを以て、一層廣く口を開くことを得るのみならず、左右の下顎骨は、前端に於て吾人の如く癒著せず、靱帶に因て連接せらるゝを以て、左右の下顎を交互に動かし得らるゝなり。蛇の齒は上下兩顎、口蓋骨、及翼狀骨等に、圓錐形の細齒(さいし)數多あり、皆咽喉に向つて生ずる故に、吾人の如く食餌を嚙み切り、咀嚼する能はず。唯捕獲の用に供するのみ。毒牙の如く、特異の構造を

具ふるものも亦内方に鉤曲して生ず。併し蛇類の毒牙齒は、顏面骨の可動的なるを以て、口を開張すると同時に上顎の毒牙は、恰も鐵槌を振り揚げし如く隆起する故に、獲物を打つに敢て支障なきが如し。

蛇類の獲物を捕殺するに二樣あり。無毒蛇は其獲物自身より大なるときは、之を捲縮して、四肢、肋骨等を挫折して棒の如くになし、死するを見て、其一端より之を銜へて、徐々に左右の下顎を交互に運びて嚥下す。毒蛇は鼠の如き獸なれば、先づ之を一擊し、死せざれば尙一擊を試み、斃るゝを視て、徐かに口を開張して、毒牙を收めて後ち、之を銜へ、徐々に嚥下す。小鳥を擊し場合には、之を銜へて放なたず、直に嚥下し始むるを通例とす。是れ其飛翔して逃れ去るを怖るればなるべし。如何に巨口にても、獲物偉大にして、嚥下し能はざるものは、唯之を擊殺するのみにて之を食せず。

▲蛇の生殖

蛇類には卵生と胎生とあり。放卵場所は龜類とは反對にて日光の直射せざる朽洞中か、地中の巢穴中に產卵す。にしきへびを除く外、鳥の如く之を翼伏せざるを普通とすれども、之を保護する爲か、あをだいしやうの卵塊を纏繞するを見しことあり。

蛇の卵殼は、柔皮質の柔軟なる膜にして、概ね長楕圓形をなすと雖も、卵膜の柔軟なる爲め產卵の際、其形の或は長く、或は圓く、或は相接觸して、歪形をなすものなきにあらず。其大さは、種類に因り一樣ならず。卵膜の色は皆な白色を呈す。酒精等に保存せるものは黃色を帶ぶ。又胎生するものゝ卵は薄膜に被包せらるるなり。蛇類の胎生は哺乳類の如く親の血液を得て成育するにあらず。卵黃に因て發育し、親の體中に於て成熟するものなれば之を熟卵生と云ひ眞の胎生と區別す。サルフヘス敎授は毒蛇は胎生にして無毒蛇は卵生の如く記述せらる。米國に於ては「ラットル・スネーク」も「コッパーヘット」も胎生なれば可ならんなれども、東洋に於ては毒蛇必ずしも胎生ならず。臺灣等に產するこぶらも、沖繩群島に栖むはぶも卵生にて蝮蛇は

所謂熟卵生なり。且海蛇も亦皆胎生なりとす。世間には蝮蛇の如く胎生するものは口より産るゝ如く考ふる人あり。蝮蛇の他の小蛇を銜へし場合にても誤認せしもの歟。鰻を料理するもの往々鰻の胃中に小鰻あるを見て鰻は胎生なりと云ふ人あり。是れ鰻が幼鰻を捕食せるものにして、胎生するに非ず。と云ふて、蝮蛇が他の小蛇を食餌となすや否や、余が從來剖檢せる胃中には未だ蛇を視しことなし。元來蛇の如き高等なる動物の體制に於ては、消化器と生殖器と全然其系統を異にし、唯排泄腔の共同なるのみ、故に胎兒が蝮蛇の口より産るゝ筈なきなり。右の如き傳説の起原は、蓋し寺島良安氏の「倭漢三才圖繪」是れが因をなせしに非ざるなきや。該書蝮蛇の條に左の一節あり。

「諸蛇卵生獨此胎生吐二子於口一然有二利牙一不レ易レ産七八月將レ産時自欲レ脱レ牙好嚙レ樹咬レ人草行不レ可レ不レ愼」云々。

夏時麥圃間に在るは、野鼠、山蛤、蝗等の餌料を獲ん爲めにして牙を脱んためにあらざるべし。

「子生於口時尾先出纏二竹木一互如レ引出生直紆行復如レ此凡六七子」云々

是れは前にも述べた如く誤認歟然らざれば全く虚妄の談にして爲に後進者を誤る尠なからずと信ず。

▲蛇の敵

人類以外、蛇を捕殺し、或は之れを食餌となすものは、印度地方のマングウス類、亞弗利加のイクノイモン(マングウスと同屬)第一とす。野猪及豚は蛇を屠殺するのみならず、之を食すと云ふ。頃日知人タヌキに三尺餘りの蛇を與へしに。忽ち之れを咬み殺して頭部より食ひ始めしも殘さゞりしと云ふ。鼬鼠類は蛇を食餌となすや否や未だ實驗せず。併し蛇が鼬鼠の如き食肉類を捕食することは蓋し不可能ならんとす。ドクトル・レンツ氏の實驗に因ると鼬鼠の蛇を屠殺することは事實の如し。本邦産の貉も蛇を食す、鳥類中、印度亞非利加等に産する禿鷲は能く大蛇を襲撃す。又濠洲に於て飼養せらるゝ翡翠族の「ラフヒンク・ジヤカッス」(Laughing jackass)は大嘴を以て蛇を屠殺すること、巧者なれば、

該地住民は之を保護愛養して放し飼となし、毒蛇の家屋内に進入せるもの丶驅除に利用し居りて好結果ありと云ふ。沖繩大島臺灣等に之を移殖せば蓋し有益ならんとす。古來本邦に於て雉子の蛇を食餌となすことは人口に膾炙すれども、果して然るや否や。余は未だ之を實驗せしことなし。本土九州及四國等には臺灣の如くニシキ蛇屬の大蛇栖息せざるを以て、雉子を捕食する如き丈餘の大蛇の居らざるは明なり。

▲本邦に果して大蛇栖息するか

古來傳記小說等に大蛇の記事尠なからざれども、今日まで確實の證跡に接せず。蓋し臺灣馬來諸島及其以南か印度等に到らざれば、兎鹿を逐ふ如き大蛇は棲息せざるが如し。從來地中より發掘せる龍骨蛇骨と稱するものも概ね鯨、象等の化石に外ならず。某博士曰く、或る寺院の寶物に龍骨として尊重せらる丶ものは猪頭の化石なりしと云ふ。余嘗て京都に於て見世物小屋に大蛇の看板を揭ぐるを見て、小屋に入り見物せしに、鮫の兩顎を板に附し、側に蛇皮の腹面より切り開きたるを板に粘附しありし。其蛇皮は印度邊より樂器用として輸入せらる丶ものならむとす。現今は野師の手に活物のにしきへび等輸入せらる丶を以て夫等の稀れに遁逃することなきを保せずと雖も、是迄新聞紙上に大蛇の記事あれども、概ね驚怖の目を以て視たる誇大の言に誤まらるるものにして、決して事實にあらず。今最近の一例を左に記載せんとす。

▲大蛇と猫の格鬪（明治四十一年十月十二日時事新報甲府十二日電話）

十月十日山梨縣中巨摩郡松島村貢川に架せる貢川橋の邊りにて、長さ一丈ばかり周圍一尺もあらむ（誇大）かと思はる丶靑大將と、一疋の三毛猫（猫の大きさを記せず）と格鬪し居れるを、折柄通りかゝりたる倉田作造と云へるが發見し、猫を助けんが爲め二貫目餘の石を靑大將に打付けたるに、流石に避易すると思ひの外、忽ち鎌首を擡げ炎の如き舌（蛇の舌は一種の觸覺器なり）を閃めかして、作造目懸けて進み來りしかば、這は敵はじと大聲を揚げて救ひを求めたるに、數名の農夫何事ならんと馳付け、此有樣に打驚きて共に力を協はせつ丶、小石を投付け棍棒に

で打据えて撲殺して其腹を裂き見れば白米五合餘（果して米粒を食するか）鷄卵十二個其他雜物を多量に嚥下し居れるを發見したり、猫は格鬪中恰も板の如くに身體を絞め付けられたる爲め介抱の甲斐なく遂に落命したりとあり。

又大正二年八月九日東京朝日新聞に榛名山の大蛇退治火を放ちて燒殺すてふ題にて左の記事あり。

群馬縣碓氷郡里見村字上里見、材木商岡田平吉は、此程榛名山榑の澤山林の立樹拂下げを請け、木挽人夫數人を隨へて、山中に入り込み、小屋掛して、伐採製材に從業中、去る八月六日午後二時頃、嵐の如き音を爲しつゝ、生ひ繁れる叢中より、大蛇現れたれば、一同驚きて逃げ廻る中、大蛇は悠々叢中へ姿を隱したり。平吉等は再び襲はれんことを恐怖し、大擧して退治を企て、先づ枯草を掻き集め、遠巻に之を積み重ね、四方より一時に火を放ちて燒立てたるに、果して大蛇は炎々立昇る火煙中に現れ、狂ひ廻りして、漸くにして燒殺したるが、其太さ、腹部にて直徑六寸餘、長さ一丈五尺餘あり、腹を割き見たるに一頭の山兎を呑み居たりと。尙平吉は同所に大蛇の死骸を埋め、石標を建て蛇塚と命名したりと（前橋電話）

余は右の記事を見て又例の虛説ならんと推察せしも、腹に山兎を呑み居たりと云ふ如何にも實驗談の如くにも思はれたれば、早速往復葉書を以て、岡田氏へ問合せ、若し蛇の頭部なり、腹部の一部にても殘り居らば、參考の爲寄贈あらんことを申入れたるに、同氏は折り返し、左の返信を致され、該記事の多少誇大なりしに係はらず、事實の眞相を確實に知ることを得て、大ひに裨益する所尠なからざりし。

「大蛇云々の件、當店にても新聞紙上にて承知致し候樣の次第に付、取調の爲め、拙店山林榑の澤に出張木挽小屋に就き事實調査致し候處、木挽人夫共蕎麥蒔の爲、杉葉の枯枝に放火致し、四方より燒立候時、中に子兎を呑み蟠り居候一疋の蛇躍り出候爲め、杉角にて打殺し、其儘燒殺し候を、誰かの惡戲にて、誇張的に新聞紙に通信致し候次第と相分り、一笑致

し候儀に候。尤も兒兎とは云へ夫れを呑み込む程故普通の蛇より少しく大きく候が、長さは五六尺位の青大將と申す蛇に候。兒兎は半焼の蛇腹より引出し實驗致候譯に候」

▲有毒蛇と無毒蛇の別

蛇の有毒なると無毒なることを識別する要點は、毒牙の有無を檢するに如かずと雖、一見して之を判別する方法あらば、頗る便利なり。普通には、頭部の廣狹を以て之を識別し得れども、有毒蛇にして頭部と頸部と其太さに著しき差違なきものあり。例へば沖繩に產する Hemibungavis(ハアイ)屬の如き、或は臺灣に產する Bunzarus(雨傘節)屬の如き、其色彩には特異の點あれども、頭頸部の太さには著しき相違を呈せず。又有毒蛇には目と鼻孔の間に頰孔と稱する窪みあり。無毒蛇には此孔を見ず。故に此孔は毒の有無を鑑別する標徵となる。併し樺太に產する毒蛇には、此孔を具へず。假令是等の特徵ありとも、突然遭遇せる場合には恐怖せる爲めに常識を失ふを以て、之を認定するは蓋し容易の業にあらざるべし。又た頭部の幅廣き毒蛇は、概ね背部に圓形の斑紋を具ふるを以て、多少識別の目標となる。尤も臺灣の青竹絲の如く全體に綠色なるものあり。本邦內地に於ては幸ひに毒蛇の種類少なく唯一種の蝮蛇あるのみにして、他は皆な無毒蛇なり。世人往々ヒバカリに咬まるゝときは、其日の中に斃るゝ等の迷信あり。或はヂムグリは尾端に劒ありて之に螫さるゝときは、劇痛を發する如く說くものあり。然れども尾端の棘狀するものは、蓋し進行を助くる運動器にして、獲物を擊ち敵を防ぐの利器はあらざるべし。人若し蛇に咬るゝときは、無毒蛇にても毒あるものとの迷信より喪心して死に瀕することありと云ふ。故に蛇に咬まれし場合には、其蛇を識別する猶豫なければ、其傷を檢するときは、其蛇の特性を證明することを得べし。例へば或る距離を以て二個の瘡口を認むるときは、其蛇は概して毒蛇なり。六個乃至八個以上の瘡口竝列するときは其蛇は無毒蛇なり。併し海岸の岩礁等を跋獵し海蛇に咬れし場合には瘡口多くして

且毒あることを忘るべからず。

▲應急の治療法

蝮蛇、はぶ、錦殺花、及青竹絲等に若し咬れし、否齧れし場合、應急の施術を豫め心得置くこと必要ならむと思ふ。醫師の治療を受るに容易なる都市に於ては、其必要を認めざれども、採集探見等の旅行の際、人跡稀れなる深山幽谷を跋渉するときは、往々其の準備の緊要なるを感ずるなり、前に陳べし如く咬みし所の蛇を鑑別する歟、或は瘡口を検して毒蛇なることを知らば、速かに瘡口と心臟との間を途絶して毒液の血液に混合し、循環に因て心臟に入らざる様手配せざるべからず。

第一着に腕脚等の場所ならば、細紐なり手拭又は鼻拭なりを細く裂きて、瘡口の上部を緊縛して、充分に血液の循環を抑壓せざるべからず。故に斯の如く緊縛したる後、細き杖なり棒なり手近にある木片なりを以て緊縛せる紐の下に貫き、之を回轉するときは、一層強く締結することを得るなり。而して棒の一端は撚(より)の戻らざる様細絲を以て之を體に結び附くべし。第二着は毒を成るべく殘さゞる様吸出する歟、搾出する歟の方法を取るなり。瘡口は極めて小なれば、鋭利の小刀又は剃刀等を用ゐて、瘡口部を切り取るか、或は切開することは必要である。第三着は瘡口に過マンガン酸加里(Permanganate of potash)を塗擦すること。此薬は毒蛇に咬れし治療には特効ありと云ふ(近年注射液發見せられしを以て新鮮なるものを容易に得るなら幸甚)且旅行の際携帯に便なるのみならず、假令多量に之を用うるも害なく又不慣の人が施薬して敢て妨げなきと其價も廉なり。第四着終りにストリキニー、○・○五瓦を注射すること。心臟の刺戟劑として最良とす。人に由てウヰスキーを用うるを可なりと云へども、其結果良好ならずと云ふ。其他種々の療法あれども概して不結果を來たするもの多しとなり。

終りに一言したきは、蛇は愛すべき動物にあらざるべきも、敢て惡むべきものにあらず。吾人の爲めに間接には、野鼠、家鼠の如き害獸を驅除し、盲蛇の白蟻をとる等の効能なきにあらず。又毒蛇と雖吾人を攻撃

するものにあらず。彼れは利器を具ふる爲に他の無毒蛇の如く優勢なる敵に對し其足音位にて遁逃せず。故に吾人は偶然に之れを挑發する爲めに反抗するものなり。又迷信より蛇を畏怖するものは多く或は形態動作に就て理由なく忌み嫌ふものあり。斯の如き人に對し、若し蛇を以て脅すときは、少年婦女をして癡疾の人たらしむことあり。殊に少女に對しては愼しまざるべからず。

明治大正 五大盡情史

大進逸人

▽幻の世のまぼろし△

世のなかに、「あそび」は、さま〲あるうちに、倉廩幾十財寶を充たす、家にありとしある巨財を、露も惜しまず「あそび」にかけつくして、晨の驕兒が、夕に流落の身をかこつ、轉變無常のことわりを、あそびに表はす豪華限りなき「あそび」の果こそ、まぼろしの世に、まぼろしを映す、わけて果敢ないものであらう。

今その跡を觀ずれば、闇々たる大空にたゞ一つの流星が、光芒まさに三千里、すさまじく横に飛ぶよと驚き嘆じて仰ぐまに、既に果敢なく消えて夜の色のみがさながら沈々たるを知るごとく、一瞬の華やかさと、哀しさとを、その「あそび」の跡に貽してゐる。

―光村大盡浪華の幻―

▽近代の名三味線△

華やかな浪華花街に、二十年來の口傳へ――

――紅木紫檀を磨きにかけて、薫るばかりの絲棹に

金無垢の工みを華奢に鏤めて、彈かずにゐても冴えた本調子を、自然に奏でゝゐるかのやうな、一代の奢侈と數奇をつくした三味線の、それも揃ひの五棹を、浪華南地の桂家の、高麗縁の澤々しい疊のうへに、靜かに列べさせた豪華なあそび——

——その一棹づゝに、初めての撥をとつたのが、伊丹幸の吉勇を始めとし、桂家の小仙、伊丹幸の初代のお千代、同じ屋形のお國及び富田屋のお雄であつた。その五名妓が、絲のうへに、自らの榮華の盛りを讃へるごとくに彈きあはせた、稀代のひゞきを我が有にして、聽きつゝ擧げた盃の、灘の甘さに豪懷の氣を吐いた人。それは凡そ二十年前の浪華花街に、其の道の一世の大通と謳はれた平瀬露香翁その人であつた——

——後の世にも殘るべき、その三味線を收める箱は、名工、飛來の一閑に張りつゝむで、咲くや此の花冬ごもり、梅の蕾や花瓣を螺鈿の埋繪にあしらはせ、そこに『浪華』を利かせた澁い粹三昧、さすがに杵屋六左衞門も、その棹と箱との道に應ふた榮々しさを、否應の二言といはずに讃めたといふ——

謂はゞ先づ近代の名三味線、これが一棹を、今の富田屋八千代が、姉の妓の伊丹幸の豆千代から傳へられて、今も疎かならず珍藏してゐる。そうして、その豆千代は、養母にあたる初代お千代から其れを讓られて、妹の妓の八千代に繼いだのであつた。

▽豆千代の振袖△

恰も二十年まへ。浪華南地に名にし負ふ伊丹幸の、家娘豆千代が、十六の春、舞妓になつて現はれる初披露目の、宴の折の衣裳は、露香翁の意匠で出來た。黑の鹽瀬に、扇の地紙を白で拔き、その地紙の一つ〳〵には、露香翁が肉筆に謠の文句を片々に謳はせた兩褄模樣を現はして、猶ほ然うした扇の扇眼ごとに、金絲の房を結ばせ垂らした數奇きわまる意匠にかけた三千圓は、その時節傳へ聞く人ごとに、物の冥加を深く思はせたといふ。

何はあれ、時流を離れた偉い粹人として、浪華の人に遍く識られてゐた、露香翁の名を、後光のやうに背

に負ふて、華やかに現はれてきた舞妓の豆千代は、さらぬだに新奇を好む人の氣を、南地一帶に輙く聚めてしまひ、その差す手引く手の銀扇に、他の及ばぬ得ならぬ光が、自然に添てゐるやうに、雛妓豆千代の名は忽ち仰ぎ謳はれ始めた。

その豆千代の振袖の薫りのうちに、優しう萠えてゐた初穗の戀の柔い芽は、角座や中座の長い廂を掩ふばかりの林のやうな幟のおもてに夥しく藝名を録るされて、伎の細かく隙まのないのを賣りだしてゐた若手役者の市川右之助——今の右團治のうへに、未だ新緑の春のこゝろを何とはなしに、しのばせてゐた。

麗水暖かにして春漸く闌に豆千代と右之助との、夢の文は豆千代が十七の年に始めて織られて、その夢を綾どる梭の行きかひは繁く濃まかに、彼女の振袖を綴つてゐた。

それかとて、その道の昔ながらの常律には、豆千代も遂に逭れやうはなかつた。されば船場の御堂前に一構への丸持長者對島覺次郎、次には炭善と通り名に呼ばれてゐた白山善五郎、この二人のまへに、豆千代の養母であつた伊丹幸の初代お千代は、養女豆千代の振袖を、猶ほ幾つかの仇し色に染めかへさせた。そうして、その次に、豆千代の振袖の前に更めて立つた男、それは神戸大盡の名と共に、關西の驕兒と謳はれた光村利藻その人であつた。

▽遺產と遺傳△

伊藤春畝公爵が、二千石に甘んじて、當時未だ兵庫縣令でゐた時に、その門を磊落の餘りに叩いた同鄉の若い男があつた。姓を聞けば光村、名はと更に訊られて、彌兵衛とのみ應へた其の男は、さながらに氣象の毅さうな、一概に只だ無口の男であつた。といふほかに、春畝公の感興を牽かなかつたといふ。それも同鄉の誼とあれば、春畝公は徒らに否みかねて、その默りがちな光村彌兵衛を、瀨戶內海がよひの船員になるやうに、縣令の斡旋の口を添えた。

彌兵衛は其のまゝ默々と、船員の勤めに就いてゐるうちに、神戸の町の片端れに、小低い庇の店を纔かに

設らへた。そうして、彌兵衛は、船室に拋り棄てられある麥酒の空瓶を拾ひ集めて、店前に、携へてきては一つ〳〵に立てならべて賣物にし、固より窮した貧の前途に、尙ほ一道の明かりを、想ひはじめた。

斯くてその後幾星霜、人の飮み乾し棄てた麥酒の空瓶から、光村彌兵衛の富は始まつて、財界に、神戸第一の覇を唱ふるまでに、遂に時價三百萬圓の、長者主に成りあがつた。その利殖の道には海軍の御用達を主にして勤めてゐたのであつた。

淸風に梳りて明月と眠る、瀨戸内海を走る甲板の上に、假寢の夢の冷たさを、往事の夢の一つに算へながら、彌兵衛は其の一子利藻に代を嗣がせ、且つ其れに子爵松平家の妹姬、藤子の方を迎へ娶はして、名門の血を孫に承くべき後の計ごとさへ樹てたのであつた。そうして、既に白頭に面皺む老いの欣びを更に繰りかへして抃んでゐるうちに、曩の日の貧の憊れに蝕はれてゐた心臟の宿痾に襲はれた爲に、三百萬圓の富を貽して光村彌兵衛は一夜果敢なく此の世を辭した。

亡父の遺した三百萬圓の富を、全く我が者にした子の利藻は、父の死後浪華に遊んで初めて味つた南地廓の酒席の間に、遍く聞こえてゐる粹人露香翁の名を耳にした。猶ほ雛妓豆千代の名妓なるらし他の及ばぬ名聲をも、聞き知つたとき、利藻の溌々たる心は、「我第一」の望みに強く顫へた。

苟くも「あそび」に耽らんほどには、聞く露香翁の名を蔑しろに視て、猶ほ聞く豆千代を獨り我れのみの一手に占めつゞけて、南地廓は事も愚かや、北の新地や新町、堀江、浪華四廓に我隨一の覇を唱へ、そこに光村の名を立て貫かう、——親の彌兵衛が讓りの負けじ魂が、露香翁と豆千代との噂を聞かされた只だ個々の機會を動機にとつて、利藻の胸を燒くばかりに忽ち烈しく競ひたつた。そうして、麥酒の空瓶に創まつた彌兵衛が遺產の一角も、それから忽ち崩れ始めた。

▽矜りと悅び△

自身の矜りに自身が乘つて、その矜りに心を充たさうとする、光村利藻の「あそび」の望みは、先づ南地

に第一流の榮樂の樓上を本陣にして、忽ち眩るしいばかりの光彩を添えて現はれ始めた。

榮華の象徴として考へられてゐる夜光珠の光に、豆千代の肉を鏤めて、そこに利藻自身が貴翫のこゝろをやるべく、珠數のごとくに繋ぎ合はせた夜光珠の鎖をつくらせて、その珠の鎖を織い腕環に更に工ませた末に、其を利藻は豆千代の白い手頸に穿めさせた。その繊く麗はしい光環に、十七歳の豆千代は、利藻と共に絶大の矜りを覺えながら、他にすぐれて輝やかしき我身の榮を、女ごゝろに強く矜り且つ悦んだ。

其豆千代の矜り悦びを、利藻は猶ほ大きく矜り悦びつゝ、斯くて二人の矜りと悦びは、輙く一つになると共に、二人は更に大きな新しい矜りと新しい悦びとの輪を、限りなく擴げて行つた。

昨日の悦びは、既に今日の心に滿たず、朝の矜りに忽ち飽きれば、夕べの矜りを新しきに求め、利藻は更に豆千代のために、五つの腕環を、一つ〱に新しくつくらせて、その當時、その華やかな巷一帶に、流行り始めてゐた腕環の魁を、豆千代の雙の手頸に、先づ占めさせた。

夜光珠鎖りの腕環を、利藻が贅の始めにして、更に豆千代の帶留めにも、小豆粒ほどの大きさの夜光珠を中央にして、その外環を圍む十六個の小粒夜光珠に、綠、紅、黃――七彩の世を絶する燦たる光を、映しださせて、立てば輝き、坐れば輝く、そこに豆千代の烈しい矜りと悦びに、利藻も滿悦の饒かな興に、二人が傲る心を各自に充たしてゐた。その腕環に八千圓、帶留に六千圓、時の價にくらべて、女が無爲の飾りとしては、まさに無上の贅を盡したものであつたといふ。

彼と彼女の矜りと悦びとは、素とより其れだけに盡くされるのではなかつた。豆千代は小型の試驗管のやうな白水晶の瓶を有つてゐた。その瓶のうちには、大小幾顆の夜光珠を、埋もるばかり盛り入れて、古代錦の鏡袋の裡に忍ばせながら、肌身に離さず、座敷に出て、折に觸れては取りだすと、瓶を振りつゝ四邊を眩ずる、妙な光の珊々として交叉する趣を、豆千代は、

うつとりと眸を凝めて眺めながら、その一時の矜りと悦びに耽つたりした。

▽二人の眞實△

利藻と豆千代との名は、一つになつて、枯野を炎が奔つて行くやうに、浪華花街の巷を全く掩ひつくした。

露香翁に屬いてゐた伊丹幸の吉勇。今は鴻池新十郎の寵妾として落着いて暮してゐる富田屋の秀光。箕面がよひの電鐵會社の專務小林一三の夫人とたてられてゐる紀之庄のお玉。などを始めとして、曩に露香翁から賦たられた紅木紫檀の棹をとる名妓たち、さては、桂家の小梅、富田家の小三など、いづれは其の名をほしいまゝにしてゐた南地の大妓雛妓も、豆千代が利藻の富を傾けさせて、忽ち隆々と昇るがごとく現はれてきた前には、齊しく從來の名が一段墜ちて響くやうに萬人に聞きなされてきた。

北の新地には、大西の呂之助が、群を絶する第一人と、その妍かさを謳はれてゐて、南の豆千代、北の呂之助と暫く並んで稱へられてゐた。人は豆千代を略して呼んで呂之助と共に「お千代呂之助」とばかり、共の双つの麗はしさを、共に並べて讃へてゐた。それも利藻が豪奢を盡くす、殆ど限りのないまでの華やかさに、人は悉く驚かされて、光村大盡の名と共に、豆千代は更に呂之助の名を拔いて、浪華花街の四つの廓に愈々唯一人との流行名を、誰爭はず、且に獨りで贏つようになつた。その曉に十八歳の春末つかた、豆千代は遂に利藻に落籍された。落籍の代が、一萬三千五百圓、その時の前後始めての大額であつたといふ。

彼の豪奢と、彼女の矜りと、そこに二人は最後の凱歌を華やかにあげて、南地廓を後にしたものゝ、二人の仲の心の絆は、眞實に糾はれた一つ條に、全く結ばれてゐたといふのでもなかつた。

盡くる果なき榮華の矜りに、男の自分を乘せて、更に矜りの對象たる豆千代を乘せ、斯くして遂に飽くところを知らざる光村利藻も、豆千代に心の扉を開かして、その奧を知りつくすことは能きなかつた。豆千代

にしても、女一代の榮華を身にしめて、外の心に絶大の悦びを、思ふがまゝに攫へはしても、男の利藻にはこぶ自身の眞ごゝろには、尙ほ足らぬ空洞のやうな隙のあるのを覺えてゐた。猶ほ二人は然うした互ひのこころを、素とより其れと互ひに知つてゐた。

其れを互ひに知つてゐるほどに、彼は益々奢りに飢ゑて侈りに飽かず、彼女は愈々外の矜りに自ら耽つて限りを知らず、その爲に二人のあそびは、豆千代が落籍の後にこそ、却つて互ひの心を更に烈しく唆り唆られて、そこに利藻と豆千代は復た更に「あそび」の頂きに立ち始めた。

▽利藻と明智光秀△

萬衆の群がりゐるまへに、自身を擢んでゝ現はすことの、天性好きな光村利藻は、芝居やさては相撲興行の高い棧敷に臨むでみることが、只だ一途におもしろかつた。

觀劇の夜には、彼は必ず五桝の棧敷をとらせた。その眞中の一桝に、自身と豆千代とを位させて、兩隣りに男女末社の輩を侍らし、外の左右の棧敷は、常に空しく抛つて置かせた。そうして、他人と自身との間に及び難い界を措いて、こゝろしづかに豆千代と舞臺のうへを眺めやる、自身のこゝろと然うした崇ましい姿とを、我と快く猶ほ他の瞳に映させる、内外の奢りを利藻は常に娛しむでゐた。

そのうちに、利藻は觀劇の娛しみに蝕はれて、奢りに爛れたころには、其の娛しみを、自身の庭に移すことを、一朝にして企て始めた。

木曾の檜を運ばせて、本舞臺を自宅の中庭に設はせ、番附さへも劇道の正しい筋に習はせて、取り卷く輩に配らせて、果は豆千代を其の座の女優の一人に仕立てさせた。豆千代は幼い時から得意にしてきた、娘道成寺の所作事を、光村邸の新しい舞臺のうへに、利藻の前に舞ふてみせて、柔く踏む舞臺の板の響きに、おろそかならぬ藝の深さを、更めて利藻に味はせた。

その舞臺のうへの振附は、中村芝雀、中村政治郎（今の福助）などに、專ら試みさせて、利藻は我が庭の劇

場に矜りを加へ、また一切の衣裳には、苟且にも借衣裳を退けて、自身が思ふがまゝの好みに調へさせた。遂には自身の興に魅せられて、舞臺に我身をも上らせてみたくなり、明智光秀の大役に自ら扮して、臺詞の節まわしに浮身を窶したりした。

驕兒利藻が、明智光秀を好むだことの、こゝに謀叛に肖た性が、彼の天性の衷に少からず含まれてゐたことを、自から表して、凡常ならぬ彼が生涯と明智光秀の性情と、一味相肖かよふ對照を、利藻自身が演ずる舞臺の上に映しだしてゐたといふ。

その舞臺を設らへた庭は、神戸に北長狹通五丁目に最も壯麗な光村家本宅の中庭であつた。

▽元祿花見踊△

史上豪華な時代記錄は、先づ「元祿」に第一の指を折る。

明智光秀の役割を悦んだ利藻は、更に溯つて元祿時代の美しい華より華に流れてゆくやうな、そのかみの都雅なこゝろを、眼前の花街に、活きた姿に眺めてみたい望みに、強く襲はれた。元祿花見踊。その嫋々しい彩りが、劇の上に仕組まれてあつたのを、利藻は浪華の廓のなかに始めて移し換えた。

媚めしかくて妍やかな元祿振りの風尚に、わけて艶麗な元祿髷、そこに玳瑁の櫛、瓔珞、飾りの結びやうを、むかしの型のとほりに習はすために、利藻は髮結ひ道の老巧な多田お辰に旨を含めて、お辰が苦心のはてに元祿の髮風俗を其の手のものにさせ、こゝに始めて地の髮で其のまゝ元祿髷を結ひあげることを考案させた。

斯くて髮衣裳の一切を、利藻ごのみの元祿風に調へさせて、彼は浪華花街にその花見踊を始めて復活させた。その時の踊り妓には、四遊廓に名あるほどのものならば、利藻が一手に悉く集はせて、南地からは三美妓との八千代、お染、政彌の類は素とより、秀勇、豆鶴、春蝶などの粒を選ばせ、北の新地からは呂之助を始めとして、力榮、小金のあたり、新町からは千榮菊

堀江からは繁雄、選びぬいた美しさを總て一つに集めて、こゝに利藻は元祿の面影を、爭はれず活かし得た。そうして、その望みを遂げた强い悦びに溺れてゐた。

形影相添ふ豆千代は、利藻と共の悦びを共にして、踊る幾人の足なみに、拍子を揃へて、心を躍らしてゐた。さうした悦びをも共にしながら、然し二人の胸の裏は、未だ眞實の心の甘露を汲みあふまでに融けてはゐずに、互ひに照應する相思の眞味を、彼も彼女も嘗て知らずに過ぎてゐた。

▽弱き騎兒の面影△

豆千代が夜ごとの夢を托する妾宅は、溶々たる淀河の眺め爽やかな流に沿ふて、晨に河霧の立ち罩むれば、水を下る小舟の櫓の聲が、枕にちかく響いてくる、外北濱の通りを、東に突きあたつた所に、瀟洒な高殿のやうな綠りの甍を、寧ろ小さく聳えさせた一構へであつた。

その妾宅は最初のうちは借家であつた。月毎の家賃は、定め二十四圓であつたのを、家主の某しは、新しい借手の人の姓を、光村と一言聞いたときに、

「あの大盡の光村はんでおますかいな」

と、訊ねかへして、その次ぎの語には、

「光村はんのことでおますなら、さあ何ぼ頂戴できますやろか」と、ひとまづ考へて、「四十圓でも宜しうおまつしやろ。へい」と、答へて頷いたといふ。そうして、利藻は其の家賃の一つにさへ、輕い矜りを萠しては、そのまゝ家主の望みどほりで、その家を豆千代の卽座の住家にあてゝ、仲居でゐたお兼といふのを豆千代に屬けさせた。

豆千代の本名は、粂と「おしよう」といふのであつたけれども、伊丹幸の屋形に貰はれてきた幼い時から、勝れぬ氣色に掩はれてゐて、何の彼のと藥ばかりに親しむでゐた爲に、養母のお千代が大事の雛の健康を深く氣づかふあまりに、伊丹幸の屋形の紋は光琳蔦を着けてゐるのから思ひついて、生れ名のおしようを「お蔦」に改めさせた。

自分の屋形の紋どころにちなむで、豆千代の本名としたほどに、お千代は養女お蔦の行末に、果報の彌が上にも饒かなるしい望みをかけてゐた。そのお千代の眼識は、さすがに其の道の思ひどほりに好く應ふて、豆千代が利藻に落籍されたときの引祝料としては、三千五百圓が利藻の手からお千代の懐ろに移り、そうして其のうちから、方々の屋形々々に蒔き散らされた。

光村家の紋どころも、蔦は同じ鬼蔦であつた。そこに利藻と豆千代と伊丹幸と、三つの蔦が絡みあふて、解けぬ執拗い柔かな柵みを、深い縁に結びつけられてゐるやうな、鈍ましい迷信も、利藻が弱い別のこゝろに宿つてゐた。

一夕の心ゆく興會には、千金を拋つて一時すらも顧みぬ、あそびに飽くまで勁さうな利藻にも、別のこゝろには、猶ほ弱い一節が爭はれず匿されてゐた。他に頭を下げられつゝ、其の誰人かゞ豫め認めてきた借證文を差しだされてみれば、いつも無下には斷り得ずに、欲するまゝの金額を、利藻は輙くその場で貸し與へ、しかも其の後に其の人が證文の上に自ら定めた契約期限に返濟の責を盡し得ずに、利藻に詫を入れて訪ねてきたときには、その都度利藻は、其の人に會ふのを避けた。そうして、その折ごとに、「斷りを聞くのがつらい」と、呟くやうに言つてゐた。

斯うした弱い利藻は、外北濱の妾宅の夜に、素人すがたのお蔦の手に必ず掻餅を燒かせて、銀盤に堆たかく盛りあげた其の香ばしさを、嚙み碎く弱い味を悦んでゐた。

利藻が箸を執る三度々々の料理の仰せを承はるのは、灘萬ばかりに限られてゐて、その他の割烹店からは、嘗て一品も利藻が命じて取り寄せたことがなかつた。

浪華の夜ごとに掻餅を嚙み、日に灘萬の板に舌皷をうつ利藻は、神戸に豆千代と共に行つては、中庭の舞臺に明智光秀を自ら演じ、翻つて南地廓に馬車を奔らせれば、元祿踊りの趣向をたてゝみるなどの、斯ばかりの豪奢に耽りながら、其の寵をそゝぐ對象は、やは

りお蔦一人に限られてゐて、利藻はお蔦に背いて他し一夜の夢を結ぶことをも成し得なかつた。そこにも利藻の弱い別のこゝろが含まれてゐた。

光村利藻の弱いなさけは、更に浄瑠璃の、うら哀しさにも牽かれて行つて、そのために越路太夫が、外北濱の妾宅に屢々聘ばれて、名人ぶりの喉に操つる幾多の義理柵らみや委曲を盡す浮世人情の物語りに、利藻の心を牽きつけてゐた。試みに歡樂きわまりて哀情多きの語に照らせば、一代の驕兒と謳はれはしても、その光村利藻は歡樂を強くよろこぶよりも、その後の哀情のうらに浸される弱いよろこびに傾くたちの人であつた。限りなき贅奢の矜りと悦びも、弱いこゝろを、「あそび」に焦がして、自ら制さへ得ずに、その果は燥がしく狂はんばかりの自身に掩はれたからの、一時の衝動にすぎなかつた。

さうして、豆千代のこゝろの綱をも攬り得ずに、弱い彼は戀の道程に最後までも弱者にをはり、そこに光村大盡は、あそびの眞諦のうへからは、まさしく、不幸の人であつた。

不幸な榮華を、其れとは知らずに、利藻の奢りの炎は、弱いこゝろを我から猶ほ煽らせて、彼は外面に益益奢り長じた。蔦の紋が世に擴がるのを悦ぶあまりには、出入りの輩が追從のうちにも、蔦の形の印象を彌がうへにも深くさせるやうに、誰に差別もあらせず男に投げる羽織、女に挿させる簪ごとに、必ず蔦の紋どころをつけさせたなど、世の遊蕩兒と同じやうな戲れをも、利藻と豆千代とが改めて敢てした。大阪相撲の今の横綱の大木戸が、始めて幕の内に昇り入つて、外北濱の妾宅に參候した時に、

「お前の家の紋どころは何紋やい」と、利藻が訊ねた。

「さあ、ねつから、へい」と、大木戸は膝を搖かして考へてゐた。漁夫の育ちの大木戸は、自分の紋どころを嘗て知らずにゐたのだつた。

「覺えてへんのやな。そんなら鬼蔦にしたろ」利藻は忽ち斯う言つて、その紋どころの羽織を、大木戸に調へてやつた。

横綱大木戸は、今も鬼蔦の紋を着けてゐる。そこに利藻が多年の豪奢の名殘を唯だ一つ、大木戸が大きな羽織に留めてゐる。

▽神田の利藻、新橋の桃吉△

曠古の大戰日露の役に、海軍御用達を勤めてゐた光村家の財産は、亡父彌兵衛の遺志をつぐ番頭たちの采配により一度びは三百萬圓の額を越えたものを、利藻は戰後八年に亙る豪遊の爲に、豆千代――お蔦を中心にして、遂に悉く崩してしまつた。

　あながちに「あそび」ばかりに限らずに、利藻の榮華はその他の一切に現はれてゐた。明治四十一年に、神戸の港に大觀艦式が擧行された折には、利藻は海軍に由緒のある高位の人たちを、一夜本宅に招待した。

　その招待には光村本家の洋館をあてる爲に、利藻は先づ窓掛けを新調させた。京都に高島屋呉服商の本店から、最上の品々を取寄せて、利藻自身が選擇してみたもの丶、その悉くが更に利藻の心に應はなかつた。そうして、思案の末に、利藻は綴錦の窓掛けをと言ひだして、洋館の窓々に燦爛たる錦綉の光を映させた。その價格が四萬圓に上つたのを、利藻は少しも嫌はずに、そこに佳賓接待の眞ごゝろを盡し得たやうに思つてゐた。

　そうした内外の亂脈な裏に、利藻の夫人藤子が常に默つて隱れてゐた。子爵松平家に當主武修氏の妹姫と生れて人となり、光村家に嫁いできた藤子は利藻が浪華花街に假初ならぬ大盡と謳はれて、日夜の遊讌に溺れはてゝゐるのを、靜かに眺めながら、神戸の本宅に女三從の律を固く守つてゐた。そうして、利藻の胤を身にうけて、長男利之が斯の世に健かに生れてきた。

　弱いこゝろを疾く「あそび」に蝕はれてゐた利藻その人には、利之が新しくできてから、父のこゝろも輙く萠して、夫人藤子と利之にも、やはり愛の絆を牽かれて行つた。彼は浪華に光村大盡、神戸大盡、さては今紀文大盡の名と共に囃されながら、神戸の本宅には藤子を愛し利之をいつくしむで、そこに藤子と豆千代とにそゝぐ彼一人の愛に、毫しの矛盾も感じることはな

かつた。そうして、藤子は更に男つゞきの三子を、利之につゞいて芽でたく擧げた。

その夫人藤子と、利之以下の四男子は、今は里方の舊藩地島根の濱田町に引きとられて、五人の母子は、父の利藻が八年間の榮華な夢を見つくしたあとに、父と離れて山陰のほとりに今は佗しく暮してゐる。

落魄した利藻と二十五の秋に緣を切つた豆千代は、再び南地に舊のとほりに、棲をとらうとしたけれども花街の人の心にも、さすがに其れを許さなかつた。さればとて豆千代自身にしてみれば、利藻の寵に長く且つ限りなく裕かに潤つてゐたものゝ、それは遂に利藻の「あそび」といふのに盡きてゐて、素とより眞實の割ない仲ではなかつた。斯くて豆千代は、浪華の人を後にして、東京に始めて流れてきた。そうして、葭町の小園治の家から、新しく小清と名のつて、土地の換つた水に、紅皿を夕べ〳〵に溶かなければならなかつた。今は更に新橋に、本花家といふ家を自前にして、三十七の老いた額に、桃吉と名を換へて、當年の浪華四郎に魁けの夢の跡をば、踊りの裾さばきに偲ばてゐるといふ。その裾さばき、嘗て露香翁が、金絲の總を扇眼に結ばせ垂らした肉筆白扇の兩褄模樣の數奇を弄び、さては利藻が有の新しい舞臺に、娘道成寺を舞ひおさめた、舊の華やかさと今の哀しさとを一つにしめつゝ、老妓桃吉の踊りには寂しい光が添ふてゐるといふ。

光村利藻その人は、これも浪華で凝つてゐた一つの藝の寫眞術に身を扶けられつゝ、今は神田の裏神保町三丁目の小路の內に、小狹い二階建てに身を入れて、それでも光村合資會社出版部との標札を表に、繪葉書などの印刷業に世を渡る四十一歲の分別盛り、その「あそび」に盛りの二十九から三十七歲までの一期の幻を、只だ標札の光村の二字に淡く漾はしてゐる。

利藻と豆千代との二人の末路に、更に情義の見れぬ現在を、鹿島清兵衛とぽんたとが零落の末の末まで添ひとげてゐる美しさにくらべて、新橋の桃吉のこゝろを、冷たく蔑視む人も少くはないといふ。さはれ豆千代と利藻とに、元とより戀はなかつたものを、寧ろ利

藻が弱いこゝろをあはれみ、豆千代が女の淺いこゝろをおもひやれば、西の遊蕩詩人の語『一度奢侈に耽れば永へに潰された』二人の今は共に哀しむべき儚なさを語り得て餘りあるものであらう。さうして、神田の利藻と新橋の桃吉とは、今も互に往來してゐる。

——鹿島清兵衛連理の枝——

▽牡丹、芍藥、藤の花△

歌舞の道にも、統をたゞせば、一列一體に「踊り」とおしなべていふうちに、藤間、花柳、西川の三統は、芝居の振附に源を發し、水木、坂東の二派などは、舊と「御座敷の狂言師」と稱へられて、自から別の流れを汲むでゐる。されば藤間や花柳の振りには、舞臺の上の鷹揚な大きさが、謂はゞ荒削りの自然のまゝなる生地を現はしてゐる。それにひきかへて、水木の振りといへば、たゞ纎かい伎を巧みにたくむで、柔らかに滑らかにと練りあげてきた心の精しさを含むでゐる。

その水木流派の創めは、水木辰之助といふ人であり、芝居の隈取に名人と呼ばれて、生れは山中平九郎の倅であつた。その水木の流れを、今は歌若と歌橘との二人が正しく汲むで、今の都の花街のうちに藤間、花柳と並んで歌舞の道の權威に立てられてゐる。

明治の御代は二十六年の秋、藤間の大淀ひが、新富座の舞臺を華でつゞむだときに、水木の流れの方からも、新橋に無くて叶はぬ玉の家のぽん太が特に選ばれて、「墨染」を演じた。その對手に「關兵衛」を踊つたのは、辰中村のお染であり、そのぽん太とお染、これに小松家のおゑんを加へて、新橋三美人の名が、當時の華の社會に流れてゐた。猶ほそれに洗髪で名を知られた吾妻家お妻と、近江家の二代とん子とを添へて、都に五名妓の動かぬ名も亦通つてゐた。

その時節の遊蕩兒の群は、露に浥ふて新粧の瞼漸く開き初めた未だ半玉時分のぽん太を牡丹の花の王に、また、香清うして粉淡く空しく驕らざるおゑんを芍藥の葩に、さては白と紫との濡れて色のよいお染を藤の花に、それ〳〵擬らへて、新橋の三名花と讃へてゐ

たといふ。

わけて玉の家ぽん太が半玉姿に、京友禪の袂を翻へし、花車の金線銀線に彩られた色衣の嫋々しい粧ひに、時の詩人成島柳北翁は韻を賦して、ぽん太が無比の美しさを嘆賞した。ぽん太は歌橋の門に通つてゐた。姉弟子の歌桑と共に、奥の手を允された纖かい踊りの呼吸を自然に身に添へて、天の成せる麗質に映し、一夜柳北翁の詩魂を攫つたのだといふ。

ぽん太といへば、鹿島清兵衛の名も一つになつて華やかに猶ほ哀しく響く。その「ぽん太清兵衛の物語」は、疾く世に布かれて、さまでに新奇な感興を惹かないけれども、明治の情史に爭びがたき一記錄、こゝには二人が綴つた幾つかの挿話を輯めて、猶ほ二人が哀れ濃かに、美しい涙を共にし笑を共にしてゐる現在の、夫は唱へて婦は從ふ、千歳變らぬ燕婉の好みを語らう。

▽蒔繪細工と笛の聲△

帝國大學の赤門まへの街りに添ふて、その近くに、蛇の目の看板を廂に掲げた一軒の鮓屋がある。その裏に、狹い三尺ほどの路次を、下水の溝板の上を傳はつて曲つて入れば、左側の掃除口に面して格子の隙から障子の破れをとほして、木枯の忍び吹く隙ま風の、壁にも肌の寒さうな侘住居があり、その玄關の壞ぼれ落ちさうな門口には、三つの標札が二年まへまで並べて掛けてあつた。何をか憚かるやうに小さな標札には、水木歌橋、杵屋巳太郎との名に挾まれて、鹿島清兵衛の五字が、落魄の夢の疾く覺めはてた今の清兵衛その人の面影を偲ばせて、そこに當年のぽん太今のお悅もともに棲むでゐる。今年清兵衛五十一、ぽん太三十八。

小低い格子戸を漸く開けて中に入れば、栗の木の低い長火鉢、竹の茶棚の上には、謠ひの稽古本が二三冊、たゞ其れだけが清兵衛一家の家具といふほかに、疊のうへも常に溢けてゐる。

眉毛の濃く面長な、不遇のうちにも氣品を含むで、溢けた疊の上にも寛濶と座つてゐる清兵衛が自身の現在を語るやう、

『お悦と夫婦となつてから二十一年、十人の子をお悦は生みました。只いま宅にゐます兒供は二人だけでして、他の子は皆他家へ遣はしました。親子四人、とにもかくにも斯うして暮してゐます。お辱かしいことですが、上の男の子の清一は、できが惡くて家出をしました。長女のお鶴は私やお悦の親の諭しも聽きませずに、我から望むで左り棲を、新橋にとつてをります。次女のお國は坪内逍遙博士の養女に貰はれまして、不自由のない月日を送つてをります。次女も十九になりました

『私は十五歳に養家を相續しましたもの丶、もとより部屋住の身分でしたから、「あそび」の事などに毫しも知らずにゐましたが、忘れもせぬ明治二十五年の秋ごろから、初めて「あそび」の味に取り憑かれました。あそび盛りは翌年の二十六年から三十年まで、私が二十八歳から三十二歳までの、たゞの五年の間でした。斯う申すも面目ないのですが、今の方のあそび振りは、一座のものたちを遊ばせてやるといふよりも、まづ自分を主にあそぶことばかりを心がけてゐるといふ風でせう。昔の人のは他のものたちにあそばせて、其興を自分が眺めてあそぶといふのが主でした。今の「あそび」には、少しも餘裕が見えません。昔の大盡「あそび」には寛濶と、藝を第一としてあそびました

『本郷座のそばから此の家に移つてきまして、相かはらずの不如意がちではありますが、今では貧乏も苦にならずに、結局世間を他にして暮してをります』

語る清兵衞のそばに、末の女の子の京子がもう十一になつてゐて、母のお悦の手助けや、父の清兵衞が身の廻りをも扶けてゐる。そうして、清兵衞は妻と娘に扶けられて、心は寧ろ悠々と舒びやかに、流轉の餘生を送つてゐる。貧の裡にもそうした心の舒びを、清兵衞その人に有たせつゞけてきた妻女お悦が、貞順の道すぢは、嘗つてぽん太の藝の一つに覺えてゐた蒔繪細工に始まつて、昔の藝が今は口を濡らす爲の、その賃仕事に夫清兵衞を扶け始めた。

それは清兵衞が、本郷四丁目の七番地の、棟割長屋

の一つに、演藝共樂會事務所と記して小やかな木看板を門内の釘に垂らしてゐたもの丶、内のいぶせい疊のうへには、斑爛と散らかした刷毛小皿に、ぽん太が昔可憐しい京臙脂を溶いて、一管の筆の穗の端に描く、蒔繪の一抹づ丶に、淸兵衞親子の命を繫けてゐたのであつた。

　淸兵衞は、演藝共樂會の名を只だ看板に纔かに留めて、嘗ては金に飽かした諸藝事を、天性器用な質に身につけてゐた、踊り、常磐津、笛、長唄、謠曲などの嗜みを、活計のための資に代へやうと試みた。そうして、時々に所々の劇場を借りては、淸兵衞自らが、高座のうへに立つてみたけれども、その度ごとに豫算は常に蹉づいて、窮迫の果ては、遂に門の釘の看板を下してしまひ、更に觀世法の謠指南曉鐘事三木如月の名で世間に對した。

　そうして淸兵衞は、妻のお悅の備さな辛苦に我と勵まされて、謠曲と笛との師匠をし始めた。淸兵衞の謠曲は、觀世流の木下敬賢の門に學んで、その堂に入つたものであり、また笛方は、明治の名手森田操翁を京都に訪ねて、三年の間の苦心を刻み、森田翁から皆傳を受けて、東京に歸つてきたほどの堪能なものであつた。

　能樂笛の森田流の皆傳は、穴土伯耆守から大阪の森田庄兵衞に傳はつて、其の家元としては、東京に森田初太郎がゐたけれども、今は故人になつて其の子女も多くは夭く逝き、遺された四男の靜郎は神田の明神坂で、ペンキ塗りばかりに世を渡つてゐるために、森田流の正しい系統は、一時中絶してゐたのだつた。斯道の斷絶を師匠の森田操と寶生九郎の兩翁が憾むあまりに、皆傳を受けた淸兵衞に將來は靜郎の子に其の皆傳を讓るやうに賴みいれた。その爲に、淸兵衞は一時森田流の後見の位置に立ち、寶生九郎の後援のもとに、笛方專門として舞臺に上ることが能きた。そこに能樂囃子の笛方として、お悅のために幾分の愁を活計の上に除かせた。

　その笛の淸兵衞にも、哀れな挿話が一つ殘されてゐ

る。演藝兵樂會を始めるまへに、淸兵衞は本鄕座の前に、いづれ小さやかな寫眞業を營むで、自活の途をもとめてゐたことがあつた。その一夜のことであつた。夜間撮影に使用するマグネシユームの白い粉末に、燐寸の炎が迴まり移つて、淸兵衞の左の掌の裡で、忽ち激しく爆發した。その全く不意の災に左の拇指を一時に失ふた淸兵衞は、折角に森田流の正統を承け繼いだ笛もつ道も一朝にして斷念しなければならなかつた。そこに淸兵衞の去りがたき新しい哀しみがあつた。

お悦は淸兵衞の哀しみを、自分にひきとつて、夫が再び笛をもつ術に、さま〳〵の工夫を考へ凝らした末を、肩の力に笛を押さへて、試みに吹奏してみることを淸兵衞に說き勸めた。そのお悦が考へついた工夫の試みに慣れてくるうちに、淸兵衞は再び喨喨の樂を奏し得るやうになり、笛の師匠として立つほかに、猶ほ今昔の欝をやる一管の命を思ひがけなく復活することが能きた。

▽忍苦二十一年△

夫淸兵衞が笛のすさびに、今昔の命をかけゐるうちに、妻のお悦は、これも曩昔の華やかさを冴えた撥に偲ばする三つの絃に、鹿島一家の糊口を托して、本鄕界隈の大娘小娘たちに、一人二人と稽古をつけて、猶ほ慣らはぬ水仕事賃仕事に、棲とつた左手、扇とつた右手を、慘めな皸に荒ませてゐた。絃の弟子も次第に漸く殖えてきたと思ふうちに、他の師匠たちはお悦の決して豊かではなかつた收入のうへを猜むあまりに、お悦が免許のない潛り師匠といふところから、その許に通つてゐる弟子をも、潛り弟子だと言ひ觸らして、お悦の家業に汚れた噂をたて始めた。それらの噂に克つために、お悦は杵屋巳太郞に賴みいれて、巳太郞が代稽古の看板を讓つてもらひ、更に水木歌橘の許をも訪ねて、歌橘の溫習看板をも分けてもらつた。尙ほ素とより消えぬ天成の麗質には、斯くある零落のお悦の瞼に頰に、未だ照り映ゆる匂ひを洩してゐて、再度の褄をとるように、新しいこゝろですゝめにくる人も、少くはなかつた。けれども鹿島大盡とぽん太との緣の

情義に省み、まして、今は鹿島悦としての操をおもひしめては、棲とる手ごゝろを思ひだすのも、お悦は嫌はしかつた。紺の質味な薄物と白地の帯を堅く締めて、つゝましい銀杏がへしの鬢の毛の一筋さへも亂さずに、お悦は鹿島姓を冒して後の二十一年間の世路難に、半生の忍苦をたてとほしてゐる。

それかとて、歌舞の道には、生れながらに水際だつて絶群の、お悦が才の蘊蓄は、折に觸れては時々に、天性の嗜を爭はれず閃めき動かして、舞臺の板を踏むでみるときの心の調べにあこがれる折々もないではなかつた。それ故に、お悦は歌舞の嗜しみが自身の裏に、ちようど、眼を覺ましてゐるときに、興行主から囑まれてみれば、舞踊の催しに、自分の姿を現はしたこともあつた。大正の御代になつて、三年の三月十二日に、南明倶樂部に催された清興會には、お悦は絶えて久しい「北洲」を踊つた。それも三つ紋つきの黑の重衣に、翠の髮を毛卷のおばこに結むだ、﨟たけた素踊り姿で、舞臺いつぱいに他の及ぶを許さぬ偉きさを含ませて弛みなく舞ひおさめたときには、流石に爭ひがたき斯道の眞髓を優に現はして餘りあつたといふ。

「毎日午前中は、二三軒へ出稽古をいたしまして、午後は三時から、夜分の十時ごろまで、宅で稽古いたしてをります。良人が藤間さんとは別懇の間柄でございますから、元來は藤間の方を致すのですが、只いまでは私の方の緣故からいたしまして、皆樣へのお稽古も水木の流儀でいたしてゐるのでございます」すつきりとした纖面に濃い眉が未だ匂つてゐるお悦は、斯う言つて寂しい頰に笑ひながら、藝は身をたすける今の自分の生活を話した。

▽一つ炎の初戀△

鹿島大盡がぽん太に寵をかけたのは、ぽん太が尙ほ幼い半玉の、女の蹟も未だ踏むではゐずに、唐人髷に紅丹冊の着いてゐる大きな華簪を、いたいけさうに、搖々と差してゐた時分であつた。そうして鹿島若大盡の手によつて、女のおもはゆい嗜なみを、ぽん太は始めて知つて、直ぐに間もなく落籍された。落籍されて

築地一丁目の、今の六方館のあるところに暖かく圍はれたのであつた。

されば清兵衛ぽん太の二人は、若大盡の初戀と、半玉の初戀とが、一つ炎に燃えてしまつた仲であつた。後お悦が人倫の道を全うし、二人が同じ夢から萌えいでた芙蓉のやうな美しさを咲かせて、そこに滴るなさけの露を、嘗て涸らず二十餘年も汲みつゞけてゐるといふのも、謂はゞ一つ炎の初戀のそのまゝを、佗しくはあれ二人が遂に貫きとほしてゐる爲であらう。そこにぽん太と清兵衛がなさけの道すぢは、世に浮かれ男女の類には似ず、寂しうても美しい琴のこゝろに應ふてゐて、前のぽん太と後のお悦と、其の心にも身にも二つながらの清節を持し、婦道のうへの瑕を嘗て帶びてはゐないのを、お悦は強い誇りにしてゐる。

斯かるお悦を、落魄の牲にした鹿島若大盡が一つ炎の初戀に溺れた遊蕩振りの例しの一つ、それは當時上方見物の全盛あそびにも現はれてゐた。

その頃には、未だ寢臺列車の設備が無かつた。鹿島大盡は、ぽん太と共に上方見物を思ひたつと、一等列車を買ひきらせて、末社幇間を引き具して、東海道の五十三次を、列車の中にさんざめく歌舞管絃のうちに過ぎて行つた。長唄の取卷には、伊十郎も六左衛門も其の列車に乘り組ませ、落語には三遊亭圓左を供させた。列車の中の三食は、花月の板前に庖丁をとらせ、酒精ランプに燗をさせながら、その一行は列車が驛を離れると、忽ち一時に撥や太鼓の響きを競ひたゝせた。驛に着けば、更に靜まりかへつて道中双六などに停車の間の短い興をやり、やがて汽笛が鳴るのと共に列車は復た更に遊蕩歡樂の巷に忽ち化した。さうして車中に溢れるばかりの藝妓たちの、脂粉の烈しい香のうちに清兵衛は、ぽん太の悦びを眺めて悦んでゐた。富士の裾野にかゝつたときには、醉つた圓左がステテコを踊つたりしたといふ。

▽笑はぬぽん太△

斯かる驕奢の歡樂にも、ぽん太は嘗つて笑つたことはなかつた。麗はしいぽん太の笑顔を見た人は、當時

に鹿島大蠹を除いては、誰もゐなかつた。それにも一つの挿話が含まれてゐた。

　ぽん太が半玉としての初めてのお披露目も未だ濟ましてゐずに、玉の家の内に只だ養はれて遊むでゐた時分に、姐の妓の一人から、ある日に、

『悦ちやん。お前さんが笑ふと、却つて穢く見えて、笑ひがほが好くないから、澄ましておゐでよ』と、窘められたことがあつたのを、ぽん太は常に覺えてゐた。笑つても瑶のやうな顏の麗はしさが損なはれるといふのではなかつたけれども、笑ふよりも唇を噤むでゐるはうが、猶ほ麗はしい自分の眉目のたゝずまいを、ぽん太は自分でも前から熟く知つてゐた。それを姐の一人に指すやうに言はれたのが、ぽん太の笑顏を遂に我から封じてしまつたのであつた。

　それほどに我慢づよい氣象のぽん太が、斯の人にこそと、鹿島大蠹に身の一切を許して心をも捧げたうへの勁い戀なればこそ、一つの戀を守りとほして、遂に今のお悦に至つたのであらう。

　ぽん太が落籍されるのと共に、淸兵衛は養家の鹿島家から離緣をうけて、ぽん太との同じ棲まひを、歌舞伎座の前に新しく建てた「玄鹿館」と名をつけた寫眞館の奧座敷にもとめた。そうして、藝の道樂の一つに歌舞伎新報社を其處に創めて、同じ名の雜誌を發行したりしてゐた。

　兩國の川開きの夕べには、歌舞伎新報社が主催して、宵のうちは、幾艘の猪牙船に、會の來客を分ち乘せて隅田川を漕ぎ上らせ、空に流れる五彩の光を仰ぎつゝ、夜更けて白鬚から陂に上り、京橋出雲町の北川が有つてゐた向島の寺島村の別莊の二階に、夜を徹しての歡樂を擅いまゝにした。その來客の一人には森林太郎さんも招かれてゐて、その夜の物語を皮肉に銹びた筆の短かいものに綴つたこともあつた。

　玄鹿館の寫眞業も、斯うした生來あそび好きの淸兵衛には、養家から送られた離緣の折の渣を月ごとに傾け崩して、本鄕座の前に流れ移つて行き、そうして其前後からお悦の毅い氣象は漸く外に現はれてきたので

あつた。

夫の清兵衛に連れ添ふて、貧しき家に良妻として現はれた、お悦の毅い氣象は、親としての辛苦にも身を削られるやうな思ひをしてゐる。

長男の清一は、不良少年の群と交つて、その群の連會の領袖などゝ氣負つてゐた。そうして、母がぽん太でゐた時分の、知人の家に訪ねまわつて、伊井、河合、堀越などの俳優からも强請の金子を集めた末に、赤坂の花月に上つて、春本から時の名妓萬龍を呼びよせて、ぽん太の子と名乘りながら、金子借用を萬龍に囑むだりした。

その清一は今年は二十歳になつてゐるけれども、三年前に出奔して、今も行方知れずに、母のお悦のこゝろを惱ましてゐる。

『清一を産みましたのは、私が十八の時でございました。學校は明治三十九年に早稻田小學に通はせましたが、其の頃から惡いお友達から唆のかされまして、買物にやりますと、上前をとつて買食をしたりいたしますし、學校からも注意されましたので、尋常二年を終りますと退學させました。成長するにつけましても、惡い癖がつのるばかりでございますので、懲らしめの爲に二階の二疊の間に押込めて置きましたが、何時の間にか飛出しますと十日も二十日も歸つて來ないことがございました。皆樣に御迷惑ばかりをかけまして』

斯く話すお悦は子の清一の爲にも、人知れぬ母の涙を深くかくしてゐる。

それに加へて、長女のお鶴についても、母のお悦は『私は始めからお鶴が藝者になりますのに悉く反對でございました。娘は子供の時分から、私とは了簡がちがひまして、親子の緣を切つて、あれは新橋にまゐつたのでございます。あれの出てをりまする玉の家は、實は私の姉の宅でございますが、あすこで私に會ひましても、娘は私を伯母さんと申してをります。娘も私を親とも思はないで藝者になど成つたのでございませう。清兵衛も私も二人が今まで隨分と貧乏はいたしましたが、後指はさゝれずにまゐつた積りでございま

す。私も昔は藝者もいたしましたが、十七から今まで操をたてとほしてまゐつたのでございますから、娘は堅氣なものにして、相當な夫をもたせたいと思つてをりました。しかし娘は自分で藝者を好みまして、進むで到頭玉の家にまゐつてしまひました。家出同様の始末でございまして、清兵衛は一生親子の縁を切るといふ書附を、娘に持たせてやりました。私も最う自分の子とは思ひませず、先日も玉の家へ用達にまゐりましたらば、その日が、ちようどお披露目の日だと申しまして、姉は一寸御覧と申しましたが、私は側を向いて見ませんでした。汚れた了簡で美しい着物をきた娘は見たくございません。世間でよくある娘を食ひものにする鬼親と、いつしよに見られるのが眞に口惜しうございます。娘は藝者になりませうとも、私たちは縁を切りましたうへは、今のまゝ操正しく、貧乏いたしましても清く暮してまゐります」と、毅いことばで言ひ切つた。

そのお鶴の藝名は、然し小ぽん太と呼ばれて、そこに母のぽん太の面影を、名と姿とに留めてゐるのが、猶ほお悦のこゝろを傷ましてゐる。

大正五年の一月の十日に、本郷區の眞砂町廿七番地の街の上に、行路亡者が一人倒れてゐた。本富士町警察署から、臨檢に行つたときに、人夫の一人が、

「こりや鹿島さんの家の清一坊つちやんだぜ」と、傍の巡査に言つた。

そのために、その死骸は、恰も稽古中の清兵衛の家に搬ばれて行つた。

清兵衛とお悦とは其の知らせをうけて、共に限りなき恩愛の涙をこぼした。やがて搬ばれきた死骸を視れば、清一に肖かよつてはゐるものゝ、全くの別人と判つて清兵衛とお悦とは漸く眉をひらいた。そうして、死骸は區役所へ搬ばれて去つた。

長男といひ長女といひ、お悦は其の爲に母のなさけをも心にしめて苦しむでゐる。親のこゝろに背いたお鶴の仕義について、お悦が前の語を味へば、愛して其の情に迷はず、憎みて其の常を失はざる賢母のこゝろにお悦

は蓋し遁いものであらう。

——岩倉具張桃下の夢——

▽薫子内親王の御殿△

源を探ぐれば遠き村上源氏の流の末は、今に迨ぶも連綿として、今年十四歳の公爵岩倉具榮の幼い血管の中に含まれてゐる。

明治維新の中興に、世は刈菰の亂れを薙いで、三條實美、大久保利通と並べられ、維新の三傑に算へらるる岩倉具視卿は、今の具榮小公爵の曾祖父にあたつてゐる。その岩倉具視右府の後を、宮內大臣具定卿が繼ぎ、更に其れを繼ぐものに、皇后宮主事兼宮內書記官具張公爵その人があつた。

具張が祖父具視右府の偉績は、素とより言はずもがな、先代の具定卿は、明治元年に、東山道鎮撫使に擧げられ、猶ほ奥羽征討の白川口總督ともなりて、袞業を扶けまゐらせし功淺からず、明治三年には、米國に留學して五年に歸朝し、越えて明治十七年、制度取調局御用掛より宮內大臣に親任せられ、畏くも明治大帝の御信任さへ淺からざりし、譽れの高い人であつた。一家に二大臣を出したのは、是が岩倉公爵家と、他には國武と千秋とを出した渡邊子爵家が有るのに過ぎない。

岩倉宮內大臣具定卿は、明治四十三年四月に世を去つて、其の子具張が襲爵仰付けられた。霞が關に、高臺芳樹輪奐の氣崇さを聳えさせてゐる、二年前までの岩倉公爵邸は、明治天皇が第二の皇女、梅の宮薫子內親王殿下が降誕ましまし〻砌に、明治元年內親王御殿にと建てさせられた、由緒の畏い建築に成る。廻廊の勾欄高く嚴しく、其れより內に、板縁疊縁を幾步か過ぎて、初めて座敷に入るべく、御居間の板戸は悉く六尺幅の、桐の絲柾が、行くに隨つて鮮かな木理を現はしてゐるといふ、一入寂びた泉石の、苔あつき苑をすぎて幽かな奥に、南天樹を軒に編むだ茶室は、伊豆韮山の名匠が意匠になり、幽雅きわまりない風致を今も備へてゐる。

その茶室は、元來岩倉家の有であつて、先々代の具視卿が氣に召して、邸の移るごとに、必ず共に搬ばせて、常に自邸の有にし續けてゐた。明治元年前後には維新の元勳たちが、此の茶室に膝を聚めて、皇國興亡の大事を屢々密議した、明治史上往事追懷の因縁深いものであるといふ。

梅の宮薫子内親王殿下には、御養育係堀河侍從（今の堀河護磨子の父）夫妻の手に、御降誕後少時く生立ちましゝを、御幼きうちに蚤く御他界あそばされて、その御殿は、先帝より、堀河家に、其のまゝ御下賜あらせられた。年すぎて明治十七年、當時馬場先に在つた岩倉公爵邸が、御料地のうちに編入せられた爲に、先代岩倉具定内府が、堀河家の好意によつて、霞が關の其の邸を讓りうけたのであつた。

畏い由緒の邸のうちに、岩倉具張公爵は、法科大學に修學中、三百の華冑界に隨一の名花と讃られてゐた、西郷從德侯爵の妹君櫻子の方を迎へて、具榮、具實、具方の三子、雅子、靖子の二孃を擧げて、斯の世の果報を長く一身に蒐めてゐた。

さはあれ戀は、茅屋にも宿れば宮殿にも住む習ひの、具張公は柳暗花明の巷の味を、帝國大學に同期生であつた小村欣一侯爵などの公達と共に、ゆくりなく覺え始めてから、そこに村上源氏が末裔の名門崩落の暗い兆を發し、霞が關の畏い歷史の御殿をも、僅かに一萬九千五百圓に、競買の手に落とす、美はしくない末路を、世の語り草にのぼせた。

大正の御代に岩倉公爵大盡が新しい夢の跡、その夢の裡には機略縱横の小美しい纖手に、岩倉の一名門をいしくも能く覆へし得た、怜悧な女が潜むでゐた。謂はゞ現代のお家騷動の中心に、具張公爵は其の牲にあげられて、今は其の怜悧な女と共に、京橋區南紺屋町のセセッション式の三層樓カフエ「さゝ屋」の裡に隱れてゐるといふ。

▽

國は、先帝の喪を畢へて、大正三年の初春には、普天の下卒土の濱、瑞氣太虚に偏しゝといふ千門萬戸の

軒廂に、ひらめく國旗の竿には喪章の跡がとられて、御代萬歳を壽がん五日めの新年宴會の夕であつた。新橋遊蕩鄉の木挽町の田川といふ家に、いつもとは少し變つた電話が掛かつてきた。

その電話の掛け主は、自身の名もなのらずに、只だ「お前は田川かい」と、一言たゞねて、その旨を應へると、「新橋の一流どころを必ず三十人、お前のところに集めて置いてくれ」と、さも造作なげに言ひつけて、此方からは何と返辭をする間も措かせずに、その人は電話を直ぐに切つてしまつた。只だ其の聲と口調の節には覺えがあつた。

眩るしいほど忙がしいお正月の夕がたに、不意に電話を掛けられて、一流どころの藝妓たちを、それも三十人も、集はせておくことは、素よりそうした道の稼業にしても難題の限りであつた。と、田川の女將は一旦さうは思ひながら、また自分の家の估券にかけて思ひなほせば、若しか其の客が見えたときに、電話が掛かつた時に、名前を聞きわすれてしまつたところから、つい三十人を揃えて呼んで置かなかつたと、斷りを言ふつもりの度胸をすゑて、そのまゝ安閑と濟ませしてゐるわけにもゆかなかつた。

さては、とつおいつ、電話を掛けてきた人を、その聲音と口調で考へめぐらし吟味してみたものゝ、女將は其まゝ判らずじまひに焦れながら、それでも果ては覺悟をきめてとにもかくにも三十人といふものを、手際よく自分の家に集めさせた。それは年中に最も忙しい新玉の、座敷のそれ／＼約束をしてあるなかを縫ふて、たとひ僅かの時間にしても、不意に三十人を一時に並べさせた、田川の女將や女中たちの苦心は、決して小さいものではなかつた。

やがて、麗かな濃い小豆色の彩りに照り映ゆる箱自働車が、田川の家の門松のそばに、貴とさうに軋しり止まると、岩倉御前の具張公が羽織袴の懷手に、巨きな瞳を鋭く視すえながら、そうして、その後に添ふて、高貴御召しの紋つきに、瑞々しい丸髷のゆたかな髮を俯つむけた中年增の女が一人、運轉手の恭しい辭

儀を見すてゝ入つてきた。

女將や女中たちは、電話の人をさてはと始めて安堵しながら、新玉に無上の賓客を思ひがけなく迎へ得た年の緣起を悦びあはせて、仰せどほりの三十人が一列に音なしく並んで待つてゐる奥の大廣間に、欵待の至らぬ隙を細かに氣づかひながら、御前と丸髷の女とを先導の女將が案內した。

「御前、御前」の湧く聲々に、齊しく囃したてるやうな三十人の、花は花と相隣りして、撩亂と咲きみだれた溫室のやうな中に、具張公と丸髷の女とは、白桐の火鉢に隻手を支へて、新年の御慶の宴を、あつさりと、吉例による膳の上に箸を執り、先づ暖かな一献に三十人は御前が壽ぎをことほいで、一人づゝ御慶びを柔かく愼みふかく言上した。

微醺を呼んで具張御前は、やがて、すらりと唇を噤むで立ちあがると、丸髷の女も直ぐに立ちあがつた。そのまゝ二人は、華やかな聲々を後に流して、自働車は軋しり悠るやかに、田川の家を戶外に滑つて行つた。

具張公の自働車は、今度は更に田中家の門口に、徐かに止まれば、こゝにも御前が不意の入來に女將の唇を、

「まあ、御前」の一聲に慴き悅ばさせながら、土地の一流どころを必ず三十人、たゞし今しがた田川で見てきた女の他にとの御意であつた。

田中家の家の電話は、交換手を忙殺させた。電話では牴牾しいと、帳場の俥夫を一時に悉く寄せて、金春通りや仲通り、銀座の裏の藝妓街の四方八方に散らすやうに奔らせた。そうして漸く御意のとほりの三十人を、御前の座敷に揃え得て、女將は年の始めの手柄をたてた。

三十人の白襟の列が、造つたやうに斜めに並ぶと、こゝでは一齊に聲を揃えて、春の御慶を申上げた。御前は巨きな瞳を一入のこと輝かし、丸髷の女は、一方に女將と何かな話しを會はしたり會はせたりしてゐた。

御歌始めの御題に因むだ、彈き初めの夥しい絃の響きが、田中家の奥の一つ座敷から、其の界隈を浪のやうに搖かした。少時くすると、御前は更に丸髷の女を引きつれて、再び自働車の中に、漸く陶然として入つた。

自働車の輪は、庶民が新裝のあひだを縫ふて、具張公と丸髷の女とは、洗髮のお妻が出してゐる寒菊の家を更に愕かした。利かぬ氣象のお妻も其れには胸を撲たれながら、御前を座敷の茵に扶け招じて、そつと曲彔を奉れば、復た更に必ず一流どこを三十人今から直ぐに聘け集めて、是も今さきに田川と田中家とに、御慶の疾く濟むできたものは要らぬとの仰せであつた。女將のお妻は稼業冥利のほかの意地からしても仰せを畏こむで、早速に御意を滿たして御覽に入れようと、上下の女中たちに精いつぱいに盡さしてみたもの丶、その時漸く過ぎて、恰ど夕と夜との界にちかく、あらゆる藝者が各自に家を出てゐる汐どきのために、然るべき妓の二十九人は其れも辛うじて寄せ得たもの丶、纔か一人の足らぬところが、いかにしても首尾が能きなかつた。そうしてお妻の口惜しさを眺めて、御前の傍の丸髷の女は、私かに冷たく嗤つてゐた。

足らぬ一人の隙を埋めてやらうと、御前はお妻の爲に、忽ち碎けた取りなし顏になつた。そうして、その一人分の費用と稱へて、現に居ならぶ二十九人には素とより、寒菊の家ぢうにも、空籤なしの福引を引かせて使はさうとの趣向をたてた。その御趣向に二十九人は夫々の帶揚げの奥、懷ろの中から、競ふやうにして取り出した櫻紙を割いて、纖いのや、太いのや、心でころに硬し柔かし、棒のごとき、弓のごとき、蛇のごとき、いろ〳〵の觀世撚りを、總がゝりで撚始めた。

出來あがつた小撚りの籤を、丸髷の女が受け集めた。そうして、忽ち依違く燥ぎ始めた大妓小妓や下地つ子の間に、一々其の籤を引かした。お妻も、その娘も、女中たちも、下番の男も、思ひ〳〵に籤を執つた。

第一等の籤が、八つになつてゐたお妻の娘の手に握

られてゐた。御前が哈々と笑つた。さうして、更に御意があつて、猶ほ一度の籤びきが始まつた。生涯の縁起吉凶が、そこに含まれてゞもゐるかのやうに、一座は更に浮きたつた。さうして、第一等の籤は再びお妻の娘の小さき指に入つてゐた。その小さな指に、丸髷の女は、弾きかへるやうな新しい十圓紙幣を五枚載せた。第一等より以下に、籤の差別に從つて、一同が若干づゝのお祝儀を、丸髷の女から頂いた。

再度の籤の二つの番號を、各自が一人〳〵に引いてゐた。それらの總てに、手際よく各人の等差を、一つ一つに鮮かに差別して、即座に祝儀の額を定めてゆく丸髷の女の能らきが、如何にも小黠しく見えてゐた。その小黠しく才はぢけてゐる閃めきを、御前は傍から悦んで眺めてゐた。籤が濟むと二人は直ぐに立ちあがつた。

小豆いろの自働車は、新橋から虎之門の方に路の上を揺れて疾驅して行つた。赤坂の田町五丁目の三加月の前に、輪をとめると、具張公と丸髷の女とは、前後に引き添ふて、隙の細かい格戸を開けて入つてしまつた。運轉手も直ぐに勝手口に廻つて行つた。

主のない自働車が、長く三加月の前に、その小豆いろを輝かしてゐた。

▽陷穽深さ幾尺△

初代のぽん太が、鹿島若大盡に落籍される前までにその座敷の玉數は、一月ならしに少なうても千本あまりと算へられて、それも三年の間に亙つて、それだけの玉數を常に賣りつゞけてゐた素晴らしさを、聞く同じ稼業の妓たちは、到底も及ばぬことゝ知りながら、猶ほぽん太のさうした果報を、強く羨むだ。そこに、ぽん太の名聲が「あそび」の道のうへに爭ひがたく現はれてゐた。

その初代ぽん太が貽して去つた、一月千本三年つゞきとの嘗てなかつた玉の數を、更に五年つゞきに一月千本の新しい玉高に、美事にぽん太の上を越した女、それが明治四十二年の秋に、岩倉具張公爵に新橋から落籍された梅中村の桃吉であつた。

桃吉が夥しい玉數の記録を新橋の巷に新しく貽して、具張御前の有になり、褄を上げてしまつたのは、ちやうど十年まへの二十歳の秋であつた。それと同時に、具張公爵は、東京市收入役の楳川忠兵衛さんから麹町土手三番町に、宏きな邸を買ひとつて、和洋折衷の何處の隅にも、新しい時代の影を現はしてゐるやうに、桃吉が嗜好の思ふがまゝに改築させて、そこに、「齋藤よし」との本名に歸つてゐる婀娜な素人姿の桃吉を移らせた。口のさがない京童は、是が具張卿の新しい別邸を、『桃吉御殿』と、華やかに呼び始めて、昔も今も、三界に家なき女が、一朝にして玉の輿に乘る、數奇僥倖な運命に、皮肉な興を覺えて、猶ほ華冑の風流兒具張公爵が贅奢を巷々に囃した。

斯の具張公爵が、然し帝國大學の法科に學んでゐた時は、その天禀の俊才を教授連に遍く識られてゐた。時の土方學長は、具張公が卒業の口頭試驗に毅みを含むでゐる應答ぶりを聞いて、『流石に氏は爭はれないものだ。岩倉が一旦斯うと答へた事は、斷じて枉げたことがない』と、自信を帶びて鷹揚な公の資性を感賞して、後日に話し傳へたといふ。

明治三十八年七月に大學の課程を卒へた後に、公は自ら進むで一年志願の兵役に服した。近衛步兵第一聯隊に入營して、嚴しい軍紀に克く遵ひ、精勵恪勤の良成績に聯隊の將校達をも感歎させた。徴兵令が發布されてから、公爵家の嗣子が一年志願兵になつたのは、具張公が始めてゞあつた。

兵役を濟ましてから、公が最初の官途に着いたのは、内務省に低い一屬官の、僅かな位地を得たのに過ぎなかつた。公は之に甘んじて、その時の地方局長の床次竹次郎さんの膝下に、日ごと鞅掌の吏務にいそしむでゐた。さうして、内務省の官吏連が、官廳での濫費を防ぐために、食堂整理問題を具申したりして、猶ほ公自身も節儉の徳を如實に示して、電車ばかりで通勤してゐた。

されば公の人となりは、華冑凡庸の徒と伍して、祖父具視大公、乃父具定卿の光ある名を徒らに辱しめ、

ましで家門を汚さんほどの、痴呆な質では決してなかつた。然も斯うした具張公を心自由に操つて、十萬圓藝者の綽名を唱はれながら、今は各所に自分の家作を有つて、その一つの南紺屋町の「さゝ屋」も、舊は六代目音羽屋の住宅であつた土藏づくりの一棟を、八年前に買ひとつて、化粧煉瓦に築て直したもの、その店に傭ひ入れた男六人、女九人の采配を振つてゐる、桃吉が才氣の穽の深さを想ふべく、その穽に具張公が割なく陷ちてしまつたのであつた。

大正三年の新年宴會の夕べに、田川、田中家、寒菊と、廻る自働車の具張公に形影相添ふて、果は赤阪の三加月の一夜におちついた、丸髷の中年增も、他ならぬこの桃吉であつた。

▽桃花亂落如紅雨△

若公爵具張卿は、内務省の屬官から宮内省書記官に榮轉した祝宴の一夜に、新橋の田中家でおぞましくも桃吉と相會ふた。それが二人の初對面であつた。

その初對面の夜に、公は恰も中年の才氣迸つて、然も前途の榮達は且に坦々たる大路を延べつゝ、自身が昇り至るを待つてゐる、得意無上の頂きに立つて、滿悦な盃を潔く乾した。その酒量もまた由來却々に强かつた。

また桃吉は、新橋に二とは下らぬ流行妓の一人に算へられてゐて、いかに上つ方の御前にも、臆氣の眉一つ動かさぬ、江戸の育ちの勝つた氣象に、自分の才と姸かさとの矜りを添へて、氣隨いつぱいに振まつてゐる時分であつた。そうして、豁達な若い公爵御前が、巨きな瞳に英でた氣象の光を含ませて、晰々とした姿態のうちに、また言ひ知れぬ鷹揚な氣崇い味の、爭はれず具はつてゐる殿御振に、桃吉は生來の烈しい戀ひを一時によせた。それは華胄に最上の爵位ある、やんごとなき賓客にもせよ、斯うした水稼業の桃吉自身が、女の戀ひをかけるのに、心の會釋は何處の誰にも要らなかつた。

具張卿には然し其の當時に、別に一人の寵嬖が、赤阪の方に、凉しい瞳をして、公に身を任してゐた。世

に稀に見る凉しい瞳の、あどけなく美しい其の人は、當時の林家林子がそれであつた。林子は分けても瞳の凉しいので、名妓初代林子、二代林子の跡を繼いで、萬龍が恒川家に嫁いで行つた後の、赤阪の美を身一つに具えてゐた。それに春本の菊龍と、二人が赤阪の双美として、時の華胄界の遊兒たちの間にも、若殿ばらがあそびの中心に成つてゐた。

そうした林子の凉しい瞳を、具張公は自分一人に有つてはゐたものゝ、夜は必ず霞が關の邸に歸つてしまへば、西鄕從道侯が長女として乃父の血を稟けついでゐる夫人櫻子が邸の大奥に貞淑の正しい愛にも、公は常に善く報ゐてゐた。

赤阪に、林家の林子が屬いてゐて、猶ほ、お邸には高貴の出の美しい奥樣が、御前の傍にかしづいてゐると、初めて聞き知つたときこそは、桃吉もさすがに一時は胸を撲たれたものゝ、索と〳〵弱いこゝろで斯の戀ひが他から見られても誰憚らぬまでに滿たされようとは、最初から想つてゐなかつた。まして新橋の桃吉ともあらうものが、一旦それと戀ひそめたうへからには、林子がいかに御前の寵を専らにして、赤阪に其の身一つの果報に矜つてゐようとも、さてはお邸に丸髷お櫛のあでやかな奥樣が、日夜離れず御前の御用に嘸かし何くれと、淺からぬお物語があらうとも、其れをさうと聞かされて其まゝに、折角の戀ひを我と秘めおいて、まして諦めてしまふなどゝは、我からの意地にかけても、桃吉には忌やであつた。

また一つには、公爵家は名門の、まして嫡子に生ひ立つて、然も萬事に潔い傑れた氣象を具えてゐる男の胸と、どうせ此方も生粹の江戸育ち、水際だつて冴えた桃吉の才氣とは、そこに自からなる照應をなして、その桃吉の戀ひは、强ちに浮いた稼業の萍が、朝に東夕に西するやうな、其の日〳〵の出來ごゝろではなかつた。猶ほそこに利かぬ氣の一本調子の桃吉自身が烈しい戀ひの對象として、具張公その人は、まさしく他に二人とはない男のやうな、情のうへの自信をも桃吉は深く抱きしめてゐた。

具張卿は、林子があどけない少女のやうな、心も身も嫋々しいうちに、溢るゝばかりの媚かしさを自から含むでゐて、そこに心往く林子の甘い滴りを、疾く十分に味ひ啜りつくしてゐた。

されぱとて、いかに太牢珍味の鶴の羹も、欲するまゝに日夜の箸を執りつゞけては、舌に飽滿の時は聽て來るためしに、林子の只だ甘いばかりの露の味は、まして才氣煥發の且つは氣むづかしい具張卿に、それとはなく倦いてきたやうな望蜀の嘆きを漸く萌させて、それと共に、公があそびのうへの嗜味も、次第に灰汁が取れてきて、漸く深い淵の岸邊に分け入つてゐた。そうした公の情の知らぬまに移りゆくさきに、桃吉が戀ふて生地のまゝなる心意氣ばかりを、公にさゝげて、ゆくりなく現はれてきたのであつた。

男の澁い氣ごゝろに、他事ならぬ床しい心の諧調を覺えてゐた桃吉が、しつくりと調子をあはせて、座敷づとめのほかの、すつきりとした肌あひに、奥ゆきの深い女の眞味を、具張公は始めて知つた。そこに雲上名門の嗣子と市井の一歌妓と、二人は交も〱我を忘れて搖曳する相思の霞にかくれてしまつた。そうして具張卿の聰明も割なく掩はれ始めた。

そこに岩倉家の礎は、微かに搖ぎ始めた。

▽美しの白蟻△

大正二年の十一月に、横濱の山下町一八七番館のジルベル獨逸商會に、金剛石を鏤める頸飾を、婦人の名で註文してきたものがあつた。その婦人の名は世に有り觸れた、齋藤よしと、いふのであつた。

その頸飾りには、白耳義の首都アントワープ産の金剛石を鏤め用うべく、且つ伯林の工場で加工して、翌年の大正三年六月までに、現品の引渡しをするようにとの註文であつた。その爲め價格八萬五千圓、手附の壹萬五千圓を、ジルベル商會は受領して、その註文どほりに契約した。

西暦一千九百十四年八月の夏、雄叫び狂ふ日耳曼帝國を中心にして、古を曠しうする大戰が、西の强い國國の間に齊しく起つた。その戰亂のために、伯林の工

場は破産して、齋藤よしの頸飾りは、ジルベル商會との契約どほりに出來なかつた。そうして、手附の壹萬五千圓の返還を、齋藤よしは嚴しくジルベル商會に催促してみたけれども、商會は其れに應じなかつた。

斯うした理由の手附金返還請求の訴訟が、齋藤よしから東京地方裁判所に提起された。その訴訟の裁判が大正三年の十月廿三日に民事第二部で開かれて、口頭辯論による對決のときに、被告ジルベル商會の代理人として出浦辯護士は左の意味のことを申立てた。

訴訟の原因を成してゐる頸飾りの註文は、抑々原告齋藤よしなる婦人から發せられたものではない。原告の主人たる通稱謂はゆる旦那なるものに相當する岩倉具張から、ジルベル商會は該註文を受けたのであつた。註文人の名義こそは、契約書に齋藤よしと明記されてゐるけれども、今回の問題となれる手附金壹萬五千圓は、實に麹町區土手三番町廿七番地の桃吉御殿と稱せらるゝ岩倉家別邸に於て、岩倉具張當人から受領したものであつた。以上の理由によれば、齋藤よしを原告とせる本訴訟の手附金返還請求は明かに棄却せらるべき性質のものでなければならぬ。

出浦辯護士の申立は、更に左の事實を續いて提供した。

原告齋藤よしは、本年八月二十七日に横濱加賀町警察署に告訴して、ジルベル商會の爲に手附金壹萬五千圓を詐取せられたりとの陳述を敢てしたことがあつた。其の告訴は當然に不起訴の宣告を受けた。但し之が爲に名譽を毀損せられたる被告ジルベル商會は、慰藉金として金貳千五百圓請求の反訴を申立てなければならぬ。

而して猶ほ飾頸註文の契約成立當時に際して、原告齋藤よしより送附し來れる頸飾りの圖案には、和英兩國の國字によつて、齋藤よしと記名し且つ捺印してある。然も之が記名は岩倉具張の自筆に成つたものである。即ち契約の名義のみは原告齋藤よしの名に因れりとするも、事實の根柢に照らせば原告齋藤よし當人と、被告ジルベル商會とが契約を成立したりと斷定する

ことは許されない。故に本訴訟に於ける原告と被告との契約は、當然否認し去るべき性質のものである。之を畢竟するに無契約と稱すべきが至當である。從つて手附金返還請求は直ちに棄却せらるべきが勿論である。

斯の意味の辯論を試みて、出浦辯護士はその訴訟提起の非なる所以を說いた。

その訴訟の判決は遂に延期せられた。

八萬五千圓の頸飾を舊の桃吉の齋藤よしが、ジルベル商會に圖案と共に註文した時の大正二年の十一月に、具張公爵は二萬圓の手形を引き出して、日頃邸に出入りの宇野某に、金子調達の策を圖るようにと密かに命じた。宇野は更に公爵邸に出入をしてゐた朋輩の武內作平と石井宇平との二人に、公爵御前の御意を傳へて、二萬圓手形の金策の道を共に諮つた。

武內と石井の二人は打ちつれて、直ぐに郊外の中野町に赴いた。中野町には土地の周旋と金貸とに富を吸ふて、裕かに暮してゐた六十二歲の川本正五郎が棲むでゐた。その川本を二人は訪ねて往つて、公爵御前が金策の一儀を賴みいれた。川本の老いた瞳は、そこに白く輝いた。そうして、金子は熱海の自分の別莊で手渡しすることゝの約束を結むで、其の日は二人を還した。

川本正五郎は其の日直ぐに熱海に急行した。宇野と武內と石川と、その三人を其の翌日に呼びよせて、さて自身の別莊の敷地が七千坪餘りの廣さに及んでゐることを說き、時價一坪八十圓前後に上つてゐることをも聞かせて、其の地所を他ならぬ岩倉公爵に融通するにつき、公爵御前は公自身の名のもとに、其の地所による金策を、他の富豪に圖るべきが宜しかるべき旨を三人に諮つた。宇野と武內と石井との三人は更に打ちつれて、公爵の御前に歸つてきた。最後に、具張公は川本正五郎が其の別莊の地所融通の意見のほどを承引した。

具張公の御前に罷り出た川本正五郎は、熱海の自分の別莊を、四十二萬二千圓に代へるべき、公との賣買

契約を結んだ。その契約條件には、內金の四萬二千圓は手形支拂ひに川本に拂渡すべく、殘額の三十八萬圓は月賦返濟にすべき筈になつてゐた。若し其の殘額が具張公から不支拂ひの節には、公が母堂久子の方の名義になつてゐる第十五銀行の株券七百枚を代用して、川本に支拂ふべき旨をも、その契約の證書面に記るされてゐた。そうして、宮川公證役場で、其の契約の公正證書を登記した。

斯くて具張公爵は、件の地所を他家に賣り、四十萬圓以上の金額に代へて、川本に第一回の拂込みを了るべく、一方には其の內から桃吉の悅びをも購ふべき胸算を樹てゝゐた。然し、其の胸算どほりには、果して行かなかつた。

川本正五郎は、契約どほりの四萬二千圓の手形支拂ひを直ちに請求してきた。公は未だ地所を他家に賣買の方法さへも考へてゐなかつた。そうして情義を沒する川本の處置を憤りつゝ、一切の解約を申し込ませた。川本は嗤つた。果して先の日の公正證書を翻へして、四萬二千圓の第一回拂込の不拂を理由にとり、彼は忽ち四十二萬二千圓請求の公爵家に對する訴訟を提起した。且つ同時に公爵家の動産差押へにかゝつてきた。

公爵家の老家令三好長康は玆に仰天した。何はあれ、差押へ執行の異議を先づ申立てゝ、猶ほ川本正五郎なる者が熱海に所有の別莊といふものを檢分させてみれば、それは實價凡そ二十萬圓にも上らないものであつたのを發見した。三好長康は再び仰天した。さうして川本正五郎が敢てした不法價格の賣買契約に對して、公爵家からも告訴した。

岩倉公爵家の礎が、斯くて漸く崩れ始めた。然も桃吉は桃吉御殿の裡に、醉魂搖曳して晨尙ほ覺めざる具張公の心の文を、いろ〳〵に編むだり解いたりしてゐた。

▽妖魔が焔、蜘蛛の絲△

凉しい瞳のあどけなかつた林子は素とより、邸に閨門の守りを常に忘れぬ夫人櫻子の肅しさも、桃吉が心

をきめてかゝつた、烈しい戀ひのうちに娯しく包まれた具張卿にしてみれば、赤阪に林子は景麗かなるも風の遅うて未だ春の始めの、只だ微温いばかりに終つてしまひ、邸に夫人櫻子を見れば嫋々しい蘆の花が秋風に、さながら寂しさうに戰いでゐる、それも只だ一場の淡々しい趣を具張御前の胸に薄く映すのに過ぎなかつた。

それよりも桃吉が、春としいへば留めても駐まらぬ晩春の氣氛に咽ぶばかりの香を込めて、惱殺せざれば止まぬ闌はな、懷ろふかく、我を忘れて溶けこむで往くやうな、秋としいへば爛秋の、滋き冷霧の爽かさに盛りの蘭が薫も吐いて、手折るに心の顫へるやうな、その春秋の何れにもせよ、掬ぶにつれて滾々と湧いて盡きざる桃吉の眞味に、具張卿は、既に幾度か高い舌皷を鳴らしてゐた。斯くて川本正五郎が地所の融通の奸策を切に憤りながら又別に、猶ほ大きな金策を、桃吉の眞味に捧げるために、心あたりに廻らし始めた。さうして、大垣の大橋銀行から三十五萬圓、麹町區永田町の柳瀬萬吉からの信用貸借五萬圓、などを先づ調達の手始めにして、同族の間より、高利貸の類にいたるまでの具張卿の負債は、概ね百二十萬圓に上つてきて、そこに公爵家の礎は、まさに累卵の危うさを、まのあたりに示してゐた。當主具張が三弟の、具孝、具美、具高が、家令三好長康と、善後談合の膝を幾度か鳩めても、聳ゆるごとき負債の額を、素よりいかにせんやうな手術はなかつた。

まして具張公の母堂久子刀自は、五十四歳の中老の身に、長子具張が有るまじい振舞ひを、誰に分けても嘆きつくした。津々浦々にわたる八十萬の婦人が、報國の誠をつくすべき愛國婦人會の會長と仰がれて、温淑な日本婦人の典型とまでに博い信頼を措かれてゐた刀自のこゝろには、具張卿が家門を汚す不行跡が烈しい悲憤を沸きたゝせはしたものゝ、生れて愚昧の質ではなかつた長子具張を憎まうよりも、麹町の別邸に妖魔のごとき爪を鋭ぎ牙を磨いて、具張のこゝろの奥ふかくに蝕ひ入つてゐる賤しい女の、斯の聖代の御世に

生きてゐるのが咒はしかつた。

　惡魔天魔邪魔心魔、破戒無慚の焔を噴いて、具張が心も身も爛らしつくして跪く上に、異形の蜘蛛のすがたを現はして、千縷の絲を吐きだしつゝ繰りかけ〳〵てゐるかのやうに、久子刀自から憎しみ思はれてゐた桃吉は、「桃吉御殿」の窓帷の奥に春秋三年患ひもせず、榮華の華を高く捧げて翳してゐた。されぱとて、榮華の夢の跡は常に慘しい世の習ひを、わすれて其の夢を永く喜びつゞけてゐるやうな、愚かな女で桃吉はなかつた。寢覺の床の冷い水に、喉を濕しながら具張御前が、癇癖つよい蒼白い顏に、何をか惱ましい影を、まざまざと刻ませて、時に煩ひ呻くやうな苦しい氣色にも掩はれ始めてゐることを、桃吉は疾く知つてゐた。そうして、そこに桃吉の思案があつた。

　御前のこゝろはわたしのこゝろ、私のこゝろのいとほしや、御前とわたし、わたしと御前、いとほしきは戀なれや、戀なれやいとほしけれ、と、我と現になりきつて、爪弾きに御前のこゝろを唆つてゐた、また我からも唆られてゐた、この道には身分を隔てぬ嬉しい夜な〳〵に、いしくも林子に捷ちおふせて、奧樣には是れも此方の腕の冴えと、鼠啼きしてゐた時分こそは、御前が餘りにあそび嵩じた折々に、心から意見の諫めを時代で行つたりして、また、そうした意見を優しう言ふ自分を我ながら沁々と嬉しく思つたりしてゐたこともあつた。けれども、その戀たやすく成つて扨ては飽くまでに御前の烈しい寵愛を思ふがまゝに身にしめてみれば、高嶺の花も手にうけては、香ひの淺かつたのに愛想をつかすためし、具張御前を自分の掌にとつて左に右に限りなく戲れて狎れてゐるうちに、桃吉のさしも一時は炎のやうに燃えさかつてゐた戀ひも、さまで長くはつゞかぬうちに、飽きて術なく渴いてきた。

　ひとたび渴いた戀の殼に、虛のなさけを強ひて盛り、御前の口もとに面を俯つむけて、捧げてゆくのは一本調子の桃吉に苦しかつた。されぱとて、女のさかり短い浮き稼業に、現在の果報を若しや取りはづしでもした曉は、また何時の日に、斯うした榮りに逢ふこと

か、それを思へば桃吉は流石に傷い思ひに撲たれた。これが身の行末を、こゝろしづかに案じてみれば、戀ひざめのいかにも術ない殼のおもひをかくして、胸は佗しう疼かうとも、具張御前を自分の掌の裡から、さらりと未練なく拋げだしてみる、すつぱりとした心意氣に我から乘つてみることは、確かに一時の若い無分別が爲せることのやうにも思はれた。されば是れからは覺悟を冷く定めて、身一つの長い行末を兩親と共に成らば贅をつくして保たせるほどの、黄金白銀何なりとも、自身に着けてをかねばならぬ、さうした黠しい思案に桃吉は長く耽つた。猶ほそれも忽ち深く裏に藏して、先づ何はあれ現在の『桃吉御殿』を、自分の名義に書き換えてもらふことを、一夜濃かい睦言の綾なす果ては縺れ〳〵た餘りの末に、桃吉は御前のこゝろふかく食ひいるやうな囑むでみた。

その前後、概ね百二十萬圓の負債の垣に、身うごきも能きねばかりに圍まれてゐた公爵は、桃吉が頼みのすじを直ぐに受納した。家の毀れを泥に墜して、母堂の嘆き、夫人の涙、同族の忌み譏り、さては畏くも、聖上への聽こへにさへこゝろ私かに憚かりながらも、今は萬策既に盡きて、やがて來らん淪びの末に、自身を措くべき近い前途が公自身にも良く曉られてゐた。そこに猶ほ蝕ひ宿る桃吉が、利爪長牙の賴みの一つを退けもせず、公自身は聽て淪びに沈まうとも、心を捉られ心を懸けて此處に至つた此のことも、女には、我が淪びの跡にも、尙ほ其の別邸だけは遺し與へて置きたかつた。それほどに桃吉を寵する具張公の痴情の力は常に强かつた。さうして、霞が關の本邸も葉山三色の別邸も、やがて競賣に附せられた後に、『桃吉御殿』ばかりは、債鬼の爪に敢てかゝらずに、桃吉の手に今も殘されてゐる。

桃吉の思案は未だ光彩を添えて現はれてきた。十萬圓藝妓の綽名を善惡なく唱はれてゐた所から、御前が父祖傳來の富を拋つて、貢いだ額が桃吉の父に忽ち轉じて、桃吉が齋藤の家の家作とも化り公債とも化つたりした。素よりさうした額も決して小さな富ではなか

つた。

麹町の別邸が、妾の手にまさしく移つたことを、三好家令から注進された久子刀自は、霜の交つてゐる切髪の根を憤りに顫はせた。果は斯かる憂きことを、日ごとに聞き知る本邸の住まひを忌むあまりに、俄かに別居を申出でゝ、芝の白金三光町に移つて行つた。然も長子具張が家門を遂に傾けた深い憂ひと惧れに冒されて、刀自は騒心症に悩み始めた。三好家令から屢々する歸邸の勸めも、終に一徹に肯んぜずに、里方の水野忠美子爵家に身を寄せて、未だ老いさき長きを祀るべき身に刀自は尙ほ藥に親しみつゞけてゐる。

▽笹の下露、崩落の影△

崩落の時が臨た。

大正三年七月二十日に、皇太后宮主宰兼宮内書記官正四位公爵岩倉具張の、兼官辭表の呈出に對して、大正三年七月二十日に、御聽許の御沙汰が下された。更に、本官をも免官の辭表捧呈に對しても、越えて二十九日に御允許あらせられた。次いで、九月三日に、岩倉具張が隱居の旨を、宮內省宗秩寮に屆出て、是れも畏きあたりの御允裁を受けた。從つて貴族院議員の資格も、そこに自然に消滅した。同時に正四位の位記返上にも御允しがあつた。市井に一平民の岩倉具張がそこに有つた。

十八棟の高殿、霞が關の岩倉公爵家本邸が、翌年の春を迎へて、大正四年一月十二日、競賣の手に移された。その入札者は六人あつた。開札の最高額が同族の岩倉道倶男爵家の手に落ちた。一萬九千五百五十圓が其の最高額であつた。高利貸の上野德藏が一萬八千圓の次點に、同じ家業の柳瀨萬吉が一萬七千圓に入札してゐた。最低額が之も高利貸の淺海甫藏の筆に、一千百五十圓と記るされてゐた。

猶ほまた、葉山一色の別邸は、二月六日に公賣入札を執行されて、三萬五千百圓を最高額に公爵家の舊臣山本道良の手に落ちた。

先帝第二皇女梅宮薫子内親王殿下が御殿たりし本邸は同族の手に、また明治二十五年に先代具定卿が新た

に建て、今上陛下未だ東宮におはしまし、時、嘗て鶴駕を枉げさせられ、英照、照憲兩皇太后を始めまつり、各宮殿下の行啓ありし葉山別邸は舊臣が手に移つて、それ〴〵閭巷の有にならずに濟むだのも、三好老家令が主家の末路の清濁を憂ひつくした、斡旋盡瘁の結果であつた。それでも債務の整理は、未だ却々殘されてゐた。

同じ年の四月の春なかばに、兩國の美術倶樂部で、公爵家所藏の書畫の競賣が行はれ、五月の一日と二日には本邸の家具什器が正札即賣によつて、悉く世に散つて行つた。冠、裝束、木履などには、金泥に岩倉家の紋どころ笹龍膽が、心なく輝いてゐた。明治十六年の山田成章の油繪や、三條、伊藤、山縣などの公爵たち、勝安房、伊東祐亨、さては野津元帥などの揮毫の數々が、近代の縮圖を作してゐた。有栖川宮殿下の御親蹟が、賣價三十圓の札と共に並べてあつたりした。

薄命の前公爵夫人櫻子は、襲爵仰附けられた具榮小公爵と、具實、具方、都子、雅子、靖子の公達や姫君と共に、里方の西郷侯爵邸に、ひとまづ引きとられた。目黒にある侯爵邸の庭さきに、櫻子夫人が逍遙の夕べ〳〵に、今年尙ほ三十二の春を迎へた夫人の感慨は、常にいたましいものであらう。後に具榮小公爵は下澁谷に小やかな借家ずまひを佗しいとも思はずに、まさに十五歳の少年の春を、學習院の小學部に通學してゐる。

平民岩倉具張は、家門崩落の跡を後にして、岩代の飯坂溫泉に、暫く隱れた。そこに桃吉も伴はれてゐた。その後を、或は九州の西邊に、或は山陰道の彼方に、空殼のやうなこゝろの二人が、旅に旅を重ねて住つた。そうして、桃吉は其の年の十月になつて、東京に歸つてきた。

それから間もなくカフエ「笹屋」が有樂橋のほとりに新しく改築された、化粧煉瓦の艶々しい建物に開業した。その「笹」の家號も、さては一切の器物につけた、「笹」の葉模樣も、他ならぬ公爵家の紋どころ笹龍膽に

ちなむだものであつた。そこに桃吉が公爵家崩落の跡を傷く偲んで、さすがに女の胸に一掬の涙を灑いだところが含まれてゐる。それとも前の公爵具張が、今も猶ほ桃吉の身を擁へつゞけてゐる現在を語るがごとき笹の葉模様が、その珈琲碗を手にとれば、薫りのたかい湯氣のうちに、人は華胄名門があそびの戀に崩れた榮華の果てを偲ぶであらう。

――鈴木臼井、槿花の夢――

時ある時に時を得て、時に先だちて動く者は、必ず人を制すといふ。

明治三十七年一月に、慶應義塾の業を卒へて、更に洋行の途にのぼつた青年が、故國の土を踏み離れて、纔かに二日、先づ上海に上陸して、始めての異國の語に、自身の周圍をつゝまれながら、その一夜の客窓に、青年は、日露の國交が疾く避けがたき斷絶の、一髮の末にかゝつて危うき機運に迫つてゐることを、直ぐに覺つて會得した。そうして、そこに青年は洋行航海の前途を上海に抛つて、忽ち故國に引きかへしてきた。

故國を芽でたく出たかと思へば、中途から倏忽として歸國してきた青年は、息をもつかず箭のやうに、驛また驛、村また村、列車の窓に掠め視て、山動き河走るうちに、郷里の埼玉に歸り着いて、提げて行つたばかりの鞄を、復た卸した。

埼玉の素封家鈴木兵右衛門は、自分一人の鈴木銀行を經營してゐた。その弟が遥かに上海から引きかへしてきた青年、その名を久五郎といふのであつた。久五郎は兵右衛門に、漠々たる戰雲が滿洲の野に、近く湧きいでゝ潔い連捷の風と共に卷舒すべき旨を說き始めて、そうした國家興隆の二つとはない機運に一代の富を旦に成すべき策を密かに建てた。同じやうな氣質の兄は其の弟の建策を漸く容した。そうして、久五郎は未だ多く剩してゐた洋行費に、兄から讓られた補助の金額を加へて、兜町界隈の九天九地に上下すると云ふ株式界に、身を挺して進むできた。

斯くて、久五郎は先づ東京株式取引所の株を、全力

を擧げて買ひたてた。

仁川沖の海戰と共に、日露の釁は開かれた。株は暴騰、更に暴騰し、限りなき底力の小搖るぎもさせずに只だ向上の一路を、果てしも知らず、騰りに騰つて行つた。久五郎は其の勢ひを買ひ更に買ひ、限りなき自信に他を顧みもせず、只だ驀進の一方を、果てしも知らぬごとに、ひたすら買ひに買ひつゞけて進むだ。そうして、三十七、三十八年、更に戰後未曾有の大相場のうちに、三十九年は暮れて、四十年の一月までに、久五郎は一千萬圓の富を遂に贏ち得た。そこに「鈴久」の名は、東鄉大山の名と共に、都に鄙に唄はれて、久五郎の才氣と膽略とは、恰も非凡な英雄性を具へてゞもゐるかのやうに、人のこゝろに空しい羨望の罪をつくらせた。

東京市中に、久五郎の邸宅は、宏壯に或は華麗に、欲するまゝの結構に從つて、各々新しい七軒を築き建てた。猶ほ別に花月花壇も、久五郎の手に購はれた。更に片瀨には見る眼杳かに買ひ占めた所有地に、鈴木久五郎地面との巨大なる木標が、土地の人々を一齊に愕かせた。そうした一方に久五郎は亡命客の孫逸仙に三萬圓を贐にしたりした。成金が即ち鈴久か、鈴久が即ち成金か、時ある時に時を得て、時機に先だち得た一青年の、上海の客窓に腕を拱いた決心は、確かに人を制して餘りあつた。そうして、人は久五郎を、「旭將軍」を以て呼び始めた。

素より泡沫夢幻の富ながら、千萬圓は、まさしく千萬圓のそのとほりの富に相違なかつた。そうして、久五郎は先づ日本橋の梅の家を賑はした。久五郎に聘ばれた妓たちは、悉く笹龍膽の久五郎の紋どころをつけた座敷着を、久五郎その人から仕着せられた。若し笹龍膽の定紋を着けてゐない妓があれば、それは一時の後れを我と忍んで甘んじなければならないほどに、久五郎は、柳橋から新橋にかけて、遊里の巷を富の力に靡かせてゐた。

雪の箱根を觀るために、久五郎が乘用の俥は前に藝妓が曳いて、後を藝妓が押して道中をした。雪中に藝

妓、俥の上に、久五郎は株の思惑をたてたりしてゐた。

　座敷のうへの、久五郎のあそびは、常に晴々しく輝いてゐて、彼は日の光のやうに、侍る誰をも私なく照らしてゐた。そこに誰と限られた戀は、久五郎になかつた。その日〳〵に新陳し代謝して、彼のこゝろには常に新しい妓が、かはる〳〵出入してゐた。そうして、そのうちに限られた誰かゞ久五郎の胸に苟くも停滯することは、嘗てなく、そこに株の價の激しい變化を生命にしてゐる常將軍久五郎の異つた一面が自然に現はれてゐた。華と露とを、とり〳〵に眺めたり味つたりしてゐるうちには、久五郎にも情があれば、是れかとぞ心に留めて、眺めかへして復た味ひかへす折々もないではなかつた。それも然し三度とは續かなかつた。興に乘つては、東株の一枚づゝを、大きな雪のやうに座敷いつぱいに酬へして、拾ふにまかせて分ち與へたりしてゐた豪奢な遊びを、屢々するだけに過ぎなかつた。その一枚は時價にして七百圓の相場の上に値をもつてゐた。

　斯うした久五郎には、汲むべきなさけも我から知らねば、知らうともせず、只だ結ばぬ情を誰にも一樣にかけ、この類のあそびを、久五郎は五年つゞけた。そうして、明治四十一年の春さきの胃落つゞけに、掌を反へすよりも速かな興亡の波に一朝にして淩はれた。旭の昇りくるよりも、夕日の傾き且つ沈む方が、一層迅かつた。そこに泡潰え幻消えて、五年間の富豪鈴久は、一介の鈴木久五郎に化りきつてしまひ、沒落の影のうすさに、我と心を駭かしながら、久五郎は賴む自身の才氣を、幾度か鞭うつた。

　東京銀行に嘗て預けて置いた、日本及び正金銀行の株券が騰貴したときに、我ながらをぞましくも僅かに五萬圓を贏ち得たものゝ、それも最後の一戰に、直ぐに淩はれてしまつた。その贏ち得た一部の金額で漸く普請を加へた三年町の邸も、東京信託株式會社に抵當として、其も後には其のまゝ流してしまはねばならなかつた。海軍に重油を賣りこむための、鑛區買占めなども企てゝ、東北地方に一時奔走しつくしてみたことも

あつた。それも泡と潰えて、果ては嘗て餞けした孫逸仙にたより、中華信託株式會社の創立などをも計つてみた。それも幻と消えて、久五郎は遂に自身の才氣の强弱を我と疑ひ始めるまでに、愈々不遇の嘆きに捉はれて行つた。そのうちに世は大正の御代になつた。

大正二年の七月に、鈴木久五郎は懲役六ヶ月の宣告を受けて、その執行を二年間猶豫された。その犯罪の經過は、指環賣買の周旋に自ら入つて、委託された指環を質に入れ其の千圓を着服したのであつた。千萬圓の曩の長者が、今は千圓の額に窮して、法廷の止木に兩手を支へつゝ、有罪判決の宣告を聞かされたときに、久五郎は人の世の流轉しゆく因果の恠しさを、身にしめて更に怪しむだ。

斯うした久五郎の胸に、戀ひはなかつた。

鈴木旭將軍の流轉の態に、肖かよふて、更に哀れをとゞめたものに、臼井浦賀御前があつたといふ。

浦賀御前は浦賀に生れ、米相場に一代の富を成した、明治中年時代の大盡として、曩昔の天下の糸平と並び稱せられてゐた。

寬濶ぶりのゆつたりとした浦賀御前が天性の氣象に、新橋の遊里にあそびの眞髓を捉へて、そこに寺島家の梅太郎が浦賀御前の寵をうけつゝ、大きな蝶と小さな蝶とが、同じ花粉に濡れてゐる夢を、互ひに少時く見てゐた。

然し、浦賀御前の氣象には、一度濡れても其の度は淺く直ぐに渴いてその後は、只さつぱりと袂をはたきながら大聲に笑つてゐるやうな、即かず離れずのあそびぶりを、常に好むでゐた。その爲に梅太郎は今は自前になつて、新寺島といふ看板を出してゐるけれども、そうした淡白な浦賀御前の面影は、梅太郎の胸に深くは貽されてはゐないといふ。猶ほ別に、大正五年の九月に、歌舞伎座で催した新橋演藝大會に、「光圀」を踊りこなして、藝のひかりを現はした、中年藝妓の瓢たんも、嘗ては一時浦賀御前の有になつてゐた。それとても軈ては、氣さくな其の人の、逢ふて喜ばず、別れても悲しまぬ、暖かいのか冷たいのか判らぬ氣質

を、却つて自身の矜りにしてゐるやうな浦賀御前にしてみれば、あそび枯れた一枝に、瓢たんが只だ氣まぐれの風流に結び掛けたといふのに過ぎなかつた。そうした浦賀御前は沒落するのと同時に、その姿を全く隱してしまひ、旭將軍が今に尙ほ流轉の末に悶え踠いてゐるのに比べて、浦賀御前は行雲流水、今に行方も分らずに、あそびの枯れてゐたやうに、その最後も清かつた。

豪きなあそびのおもてには、嘗て一度も現はれずに、遊里の巷に人知れず、そつと靜かに入つてきて、そうして、靜かなあそびにかけた費への額は、むしろ旭將軍の衒ひがましい其れよりも、遙か餘計に傾けつくし、それも姿をかくす最後まで、そのまゝ靜かに默つてゐた浦賀御前ばかりが、今も老妓たちの間に、大盡の冠稱を、唇のうへばかりでなく許されてゐるといふ。

▽幻の世のまぼろし△

五大盡が五つのあそび、今その跡を再び觀ずれば、五つの性のそれ〴〵に、趣くところにしたがふて、またさま〴〵の風情を貽してゐる。さればとて、春をただうかるゝ時とおもひしは、花ちらぬまのこゝろぞといふ、あそびごゝろに差別はなく、春逝いて花ちれば、さけば散り滿つればかくる春秋の花と月とぞ人の世の、幻の世のまぼろしに、耽る蕩兒の末は哀しい。

――(をはり)――

政黨心理。黨人根性

洗足老人

△ナニ、政黨の內幕話をしろッて云ふのか、成る程夫れも面白からう。が併し我輩はモウ政黨員ではない

ゾ、君も知つて居る通り、今は之れでも實業家の末班を汚して居るからネ。何だと、現在關係して居ないから公平な眞の事が云へると云ふのか、君は却々人が惡るいネ。併し夫れ程見込んでの賴みなら仕方がない、一夕お話することにしやうか、之れは足を洗つた後の懺悔話、君も其積りで聽いて貰はんと困るネ。

△世間一般に政黨心理、黨人根性と云つて、政黨の總てが殆んど一種の共通點を有し、同じ鑄型に作られた物の樣に思ひ、夫れが只因襲的感情的に、敵味方に分れて爭ふて居る樣に見て居るが、是れは餘程世間の見方が實際と違ふ處だヨ。成る程夫れは或る一種の共通點もあるに相違ない、否な同じく政黨である以上は、無論共通的の處がなければならぬのだが、是等の諸點は多く表面的に屬することで、眞の內幕話になると、第一創立の歷史が違ふ、從つて人間の種類も系統的に異つて居る、自然に中心人物の性癖思想乃至遣方が全く違ふので、之れが世間の所謂憲政會的臭味とか、政友會的色彩とか、又國民黨氣質とか云ふことになるのだ。

△斯樣な序論は先づ大概にして、我輩は第一に政黨の墮落史を云ふて見やう。ナゼ政黨が社會から斯程迄に信用を失したのか、現に政黨員とし云へば、一般に惡德漢、我利々々亡者の如く嫌忌され、政黨の內情とし云へば、宛然不良老年の集團の如く想像されて居るが、抑々誰れが其源を濁らしたのか、又如何なる原因で斯樣に不信用な物となつて了つたのか、是れは政黨の實際を知る上に於て、最も必要な問題であるのだ。是れを深く究めずして、一概に政黨は漁利獵官を目的とする集團なりと罵倒し、政黨員は多く羽織破落戶の同類なりと嫌忌するのは、少しく政黨及び政黨員に對する酷評だ、否な餘りに氣の毒な漫罵だ。夫れで自然と政黨墮落史を云ふ必要があるのだヨ。

（一）

政黨墮落の經路

△昔の政黨員は皆眞面目であつたヨ、眞劍に主義主張の爲めに戰ふ勇氣、信念、少なくとも氣慨は確かに持

つて居たヨ。其代り頭は大概カラであつたネ。ギゾーの文明史を讀んだものは新知識で、何で自由民權が夫れ程尊いか、又自由民權の爲めに血を見るのも厭はぬか、之れを眞實徹底的に理解し又答辯し得るものは、全く寥々として曉天の辰星といふ狀態であつたネ。併し彼等には事實ソンナ理解力の必要を感じなかつたヨ、自由民權の蓆旗を押し立てゝ戰へば、末には政權の分配を得らるゝものと確信して居たからネ。政權の分配！彼等には夫れ以上に大した高遠の理想もなく、又國民的慾望も何もなかつたのだ。一言にして云へば、無意味の政權爭奪が目的の全部であつたヨ。板垣伯の『自由』を叫んで、全國之れに響應したのは、急に地位も職業も失つた各藩の不平士族、夫れに客氣に逸る青年壯士等が、我先きにと其旗下に走せ集つたからだヨ。要するに彼等の思想慾望は、實に單純直截的なものサ。

△斯くして全國の血氣に逸り野心滿々たる壯者は、悉く自由黨に集まつた後で、辛つと改進黨が組織された。其標榜する處も知識階級とか恒産あるものとか、イヤに歐羅巴カブれのしたハイカラ流であつた爲め、勇氣あるもの、血の氣のあるもの、即ち氣を以て一世に負ふといふ樣な、戰鬪力あり猛進力あるものは、殆んど大隈伯の傘下に集まらなかつたのだ。其代り個人としては品格もあり學識もあり、又財力も相當にあつたが、何と云ふても勇氣がない。成る程文章も相當に書ける、演說も飜譯其儘だが、皆可なりに筋の立つたことは云へる。が併し肝腎の政治運動、即ち實戰になると改進黨側は何時も散々の大敗北、怪我人を出す、演說會は滅茶々々に打ち壞される、迚も相撲にも戰爭にもなつたものでないのサ。

△改進黨側は、亂暴狼藉者、無智蒙昧漢の徒黨と自由黨側を罵つて居たが、如何に惡罵冷嘲しても、扨て實戰場に臨むと叶はんのだから仕方がない。僞黨の無氣力者奴、夫れが無念なら何時でも尋常に勝負するから出て來いと、自由黨側は大威張で大道を横行濶步するが、偶々癪に觸つて出て行くと、必ず改進黨側が大損

害を被つて退却といふ始末。夫れで自由黨の氣勢大に天下に昂つたが、改進黨の人氣坊間に餘りに受けなかつたのだ。併し新聞紙の大半は、正反對に改進黨の掌握に歸して居たので、中産以上の階級、新知識階級には、案外改進黨の潜勢力を有して居たのだ。夫れに自由黨の亂暴に慊らず思ふ連中は、窃かに心を改進黨側に寄せたのもあつたヨ。

（二）

△話は少し横道に外れたが、兎も角昔の政黨は、斯樣に眞面目で又眞劍であつたのだ。其内に政黨員も段々生活に困る樣になつたのサ、イクラ眞面目でも眞劍でも、食はず飲まずに戰爭は出來んからネ。藩閥の暴力は遠慮會釋なく政黨撲滅に向つて來る、最初の間は不屈不撓、今に彼等を討滅して見せるとの確信で戰つて居たが、敵は益々兵備を整へて逆襲して來る、味方は次第に兵糧攻めに惱まさるゝ情ない内情。搗てゝ加へて何時の間にか正面の敵を離れた自由、改進の兩黨は眼前の感情問題でお互に烈しい大戰爭、夫れを藩閥は巧みに利用して、兩黨諸共に疲弊衰微せしむる老猾手段に出て來るから堪らぬ。到頭藩閥の計略圖に中りて兩黨共に年を逐ふて内部の疲弊困憊狀態を暴露する樣になつたのだ。

△板垣伯が長閥に降參し、大隈伯が薩閥と苟合したのは、共に軍資缺乏し戰鬪力鈍り、最早政黨としては獨力天下を取れぬことを自覺した結果だヨ。併し共に失敗に終りて始めて政黨本來の立場に反省自覺し、モウ此上は致方なしと、從來の歷史感情を一擲して、自由進步兩黨の合同となり、憲政黨を組織して、一時は政黨の實力能く天下を取つて見せたが、夫れこそ全く槿花一朝の夢で、忽ち所謂黨人根性を遺憾なく發揮し、半年も經たぬにアノ分裂騷ぎ、局外者から見たら定めし醜態百出、如何にも黨人根性が卑しいものだと思つたに相違ない。

△今にして當時を思へば、實は我輩でも冷汗背を濕ほすヨ。全く慚愧に堪えんのはアノ時の内情サ。若しアノ時兩黨の首領連中が、モウ少し眞面目に藩閥と戰ふ

誠意熱心があり、眼前の利害問題に囚はれず、權力勢力の爭奪戰に沒頭することなく、お互に謙讓の美徳を有して居たなら、疾くの昔に完全な憲法政治が出來上つて居たヨ。今時分に超然主義の寺內內閣を見る抔は、夢にさへ思はぬ事であつたのだ。何と云つても憲政の腐敗逆轉は、アノ時の分裂醜態が抑〻の原因だヨ。今政黨をやめたから云ふンではないが、大正六年になつても政黨の實力が認められぬと云ふのは、畢竟するに政黨其物の罪サ、大體領袖連中の心得方が違つて居るからだヨ。如何に陣笠連中が八釜敷云つた處で、領袖連中さへ確かりして居て、指導統率其宜しきを得れば、今の政黨の樣には腐敗墮落せんで濟んだヨ。我輩から云はせると、國民の政治思想が低級だといふ、政黨員の攻擊振りが可笑しくてならんのだ、アペコペに少し自家頭上の蠅でも拂へと云つてやり度いヨ。

(三)

△分裂後の憲政黨を、十萬圓で山縣內閣に賣つた故星君の遣方は、當面の敵たる憲政本黨を倒す爲めの、止むなき權道であつたに相違ないが、何と云つても政黨其物を腐敗墮落せしめた罪人の元祖だヨ。夫れ迄の政黨にも隨分劣等な分子が多かつた、が併し公然政黨を賣買物件として取扱つたものはない、又賣物にして利益を得やうと企てたものも殆んどなかつた、少なくとも政黨魂なるものはまだ幾分か存在して居たのだ。無論獵官運動は猛烈であつた、實に腐肉を爭ふ餓狼の譬を其儘に演じたのだが、流石にまだ漁利には手を出すものがなかつた、偶々之れあると政黨自然の制裁で、何時の間にか圈外に放逐されたものだ。然るに星君は個人の漁利問題を一足飛びにして、直ちに政黨其物を賣買物件に提供して了つた。夫れが爾も獵官熱を冷却する呑服藥に用ひたのだから凄じい。直ちに門戶閉鎖の文官任用令が出る、政黨員として最早獵官の前程城壁鐵門で一歩も進み入ることが出來なくなつて了つた。

△政治家の利權運動、政黨の漁利問題に關係し始めた

のは、多く之れからの事だ。猟官に希望を繋ぐことが出來なくなつた以來の政黨は、其實質に於て俄かに低下し出した、殊に政黨員の品性學識、殊に政治家としての平生の修養など最早ソンナ物は時代後れの思想だといふ風になつて了つた。政黨としては公然黨費を政府又は保護會社より收受し、黨員としては白晝威張つて、利を漁り賄賂を强要する樣に墮落したのだ、之れは僅かの間の急激な變化で、全く恐るべき勢で墮落したのだ。其後は政治家でなくして政治屋、政黨でなくして政店、政黨員でなくして政黨屋になつたのだ。詰まり腐つても國士の俤があつた政治家は、忽ちにして純然たる商賈人に成り下つて了つたのだ。

△何黨幹事の肩書で、某會社の權利株獲得を强要するかと思へば、代議士の資格を濫用して山林拂下をやる、果ては地方から利權問題を持ち込んで來る、到頭待つて居られずに、此方から進んで漁りに出かけるといふ風になつて了つた。偶々運が惡るく、日糖事件で囹圄の辱しめを受けた連中もあつたが、先づ大體代議士とか院外者の重立つ者とか、少し變な方面に出入する連中は、大概日糖事件連累者と、甲乙ないものと思へば大した間違ないヨ。此惡風が次第に地方にも及んで、縣會議員、郡會議員、市町村會議員、皆夫れ相當に惡事を働く樣になつたぢやないか、實に恐ろしい害毒を流したのは、故星君の憲政黨賣渡し問題だヨ。

△近頃能く聞く話だが、選擧民は一般に惡くなつた、運動費が嵩んで來てやり切れないと云ふ。そして世間一般に此不平怨言を何とも思はん樣だが、我輩に云はせると夫れは怪しからんことだと思ふ。元々選擧民を惡るくしたのは何人の責任だ、少し考へて見るが好い。政治家が政治屋になり下り、肩書を利用して漁利之れ日も足らざる今日に於て、誰れが眞面目に國家の選良として、彼等に尊敬を拂ふものがあるか。中には全く立派な國士もある、又國事を托するに足る人物もある、が併し一般多數の代議士はどうであるか、共に之れ潰々者流、國士處か風上にも居らるゝさへ迷惑至極な代物許りぢやないか。夫れが一國の選良、國民の代

表者として國政に參與する名譽を有するのだから、身分不相應な役を勤むる罰金か科料の積りで、セメては運動費でも澤山出すのが當然だョ。能く世間にある習慣だが、素人藝を見せ聞かせする時には、立派な料理を出して御馳走するぢやないか、今の代議士杯は多く其格か、夫れ以下の代物許りだョ。

△單に夫れ許りでなく、元々運動費を多くかけることを敎えたのは、政治家連中彼等自身の責任問題だョ。自身其肩書を得て、名譽と利益の兩手に花を得んと焦り、少し位多く運動費を出しても、代議士にさへなれば、幾層倍かの利益を摑むことが出來るものと思ひ込み、所謂一種の資本的に考へて、借金を質に置いても投票を買收したのは、抑々今日選擧界腐敗の最大原因ぢやないか。夫れを種子蒔いた政黨員連中が、今更らの樣に攻擊非難するのは、全く我手で我身を打つと同じことだよ。嘘と思ふなら聞いて見ろ、『元々敎はった習慣を其儘續けて居る丈けですサ、夫れが惡事ならナゼ最初敎えて下したのだ』と、百姓共はアベコベに政治家連中を笑つて居るんだョ。

△選擧其物の本來の性質から云へば、投票賣買、寄附約束、饗應政略、戸別訪問、一として無論善い事は毫厘もない、一日も早く此弊害腐敗を刷新肅清せねばならぬが、只元々腐敗墮落の種子を蒔いた彼等が、人間並に其弊害を攻擊し、選擧界を肅清せんなど叫ぶに至つては、實に片腹痛い次第なのだ。彼等としては自身從前の責任問題に顧みて、少しは今後殊勝らしい態度を採るが好い、彼等が叫べは叫ぶ程、選擧民が一種の反感を持たずには居らぬのだ。詰まる處彼等自身としては、先づ前世の罪業を亡ぼす積りで少し菩提心を起し、乞ふ隗より始めよで、理想選擧をやつて見るが好い、夫れで落ちても怨はないぢやないか。自ら播ける種子は自分で苅り取る義務がある、若し政黨の領袖等にして、眞實選擧界廓清に志あらば、先づ候補者自ら改めてかゝる樣に、之れを指導し統率して行く義務があると思ふ。

（四）

△夫れからモウ一層政黨を腐敗墮落の淵に導いたのは、誰あらう原敬君である。原君の内務大臣時代に、其統率する政友會は、地方問題を提げて政黨勢力の擴張に惡用した。港灣修築、道路開鑿、鐵道敷設等、有らゆる地方問題を提げて、地方人を誘拐したのは誰れも知つて居るが、此爲め地方の政治界は極端に惡るくなつた。府縣會で橋一本、道路一筋作つてやるにも、必ず相當の報酬を取らねば承知しない、其上に其府縣で有力な政黨に加入しないと、當然作るべきもの迄も否決して了ふ。止むなく泣く兒に地頭の譬を其儘、町村長以下政黨に入つた外に、更らに運動費迄捲き上げられることになるのだが、若し頑として此要求に應ぜぬ地方に向つては、例令縣當局者が發案しても、縣會は遠慮會釋なく否決して了ふのだ。少し地方を巡つた人は能く見るとだが、丁度郡界又は町村境で、急に道路が惡るくなつたり、又腐朽しかゝつた橋が、依然として縣道の中央に殘されて居ることも、決して珍らしい現象ではないのだ。是等は最も露骨に政黨の横暴を物語り、地方政治家の腐敗墮落を立證して居るのだ。

△毎會期衆議院に出る建議案なるものを見るが好い、何々鐵道速成又は建設に關する件、何々港灣又は河川修築に關する件、夫れが悉く一瀉千里の勢で鵜呑みされて行くから恐ろしい。若し當局者が一々建議の趣旨を容れ、之を翌年又は翌々年の豫算に計上することになると、會計一年度の豫算額は、忽ち十億位に上つて了ふのは明かぢやないか。彼等平生口を開けば負擔輕減民力休養といふが、一方に所謂お土産案なるものを提出して、暗に負擔增加を强要し、國帑濫費を請求するとは何事ぢや。こんな嘘吐きの大箆棒を選擧して置いて、何某議員は土地の事に熱心だとか、何黨派に賴んであるから鐵道が速成するとか、丸で空を眺めて流星を拾ふ様な事を考へて居る選擧民こそ、大馬鹿の慾張り揃とはいへ、思ふて見ると實に氣の毒な愍むべきものだョ。

△斯く地方問題を提げて、宛も喰はしむるに利を以てするが如き態度を示し、其實何時其利益があるか、或

ひは永久來ぬのかも知れぬ利益問題を提供するのだが。比較的正直な選擧民は、今にも之れが實現するかの如く思ふ、又そう思はしめ信ぜしむる樣に說き立てるので、元々何黨派でも頓着ない地方人は、終ひに利益に走るは人情の當然。之れが抑々政友會の大勢力を作り得た根本であるのだ。世間から利權黨、我利黨と云はるゝのも、此實際を見れば止むなき次第で、吉植庄一郞、武藤金吉、更らに上つては奧繁三郞、伊藤大八、最上級では有名な大岡育造など、成る程腕も達者智慧もあり、計略もある人傑揃だョ。是れが曾て伊藤公を總裁とし、又西園寺侯を總裁とした政黨の內情かと思へば寧ろ淚が零れる樣なものサ。

政黨の短所缺點

（一）

△斯樣な經路からして、政友會は全然墮落して了つた、が併し高利貸か女郎屋しても、身代の大きくなる點に於ては、正業者と別に變りがない、否な正業者よりも却つて早く財產が出來ると同じで、政友會は非常な大勢力大分限者となつて了つた。最初の內は國民黨系、在野黨の情なさにも瘠我慢をして居たが、到頭世帶が張り切れずして桂公に降參すると云ふ始末。而も貧乏に夫婦喧嘩が附物の世の譬を其儘、旋毛曲りの犬養君は、どうしても貧乏世帶を張り通そうと欲張る、擦つた揉んだの末はアノ大騷動。結局世間の攻擊が恐ろしさに、身動きさへ出來ぬ臆病者共をお伴として、犬養君丈けは貧乏世帶の主人公で寡婦暮らし、他の五領袖は一族郞黨を率ゐて、桂公の軍門に白旗を立てゝ了つたのだ。

△例令名儀は何と云つても、國民黨の母屋は實際官僚系に併呑されたのだ。換言すれば政友會同樣に腐敗墮落せねば迚も前途がないと覺悟したのだ。十有七年間政府黨たり又政府與黨たりで、其權勢利益を獨占したる政友會の得意さ加減は、日に月に頹勢に傾く國民黨としては、見るさへ全く堪え忍ぶ能はざる處であつたに相違ない。自然に從來の瘠我慢の看板を卸して、翻然官僚系の軍門に降つたのも、其心中を察すれば無理

のない話だが、併し一方から見ると、幾分か政黨魂あり、尙ほ正義呼ばゝりする資格あつた國民黨が、終ひに降參旗を立てゝ墮落邪道に走せ向つたとは、實に惜しみても尙ほ餘りある問題である。

△其内に大隈内閣は出來た、日頃の欝憤晴らすは今と許りに、所謂與黨三派は政友會の地盤を荒らし廻つたが、元々政權利益で固め來た政友會であるから、政府反對黨となつては水を離れた魚も同然、案外脆く滅茶滅茶に顚覆されて了つた。俄かに貧乏世帶となつた政友會は、今度頻りに怨言を並べて步るいたが、自己年來の慣用手段を其儘敵に應用されての敗軍、世間は寧ろ之を笑柄に使つたのも無理がないのさ。とは云ふものゝ、與黨三派が政友會を眞似て、地方の地盤を荒らしたことが、決して當然の事業、正當な黨勢擴張とは云へんのだ、矢張り惡事は惡事に相違ないのだ。

△即ち政權に接近すれば、何が何でも敵黨を苦しめる、又無理無法に自黨の地盤擴張をやる、其間是非の鑑別、當否の條理などは、テンで眼中にないのだから恐ろしい。只黨同伐異の外には、黨人の腦裏に何事も浮んで來ないのだから危ぶないのだ。是れが所謂政黨心理、黨人根性として、各黨共通の短所、殊に最も百弊百害を產み出す根源なのだ。政黨が世間一般に不信用、政黨員が蛇蝎の樣に思はるゝのも、主として各黨共に此共通の弊風を增長せしむるからの事だ。

（二）

△又政治家の位地肩書を利用して、大小多寡を論ぜず利權問題とさへ云へば必ず漁ることも、各黨共通の醜態である。平素主義政見が違ふと稱し、お互に其人身攻擊迄して居る手合が、何か利益問題で共通點を發見すると、一見舊知の如く忽ちにして親密な交際振り、そして政治問題を離れたる事業には、一切政黨政派の境界がないなど、最もらしい辯疏をして步るく。無論個人交際に主義政見の相違反對など、誰れも問題にせぬのだが、夫れ程ならナゼ平素無茶々々に蔭口を叩き合ふのか、先づ此點から辯解を聞いて見たいョ。政黨は黨勢擴張以外に重大黨務なく、政黨員は利權以外に

重大用務なしとせば、如何に政黨は憲法治下に必要缺くべからざる機關だと云つても、誰れも信用せず嫌忌するのは、蓋し當然の結果ぢやないか。

△之れに就て面白い話があるョ。大隈内閣で辛つと蘇生の思ひした、非政友側の陣笠連、何か好き利權問題もがなと、鵜の目鷹の目で物色して見たが、生憎然るべき好餌を見出し兼ねた。止むなく某高官を訪問して何か相當の利權の分與に浴したいとの注文、問題は何かと質されて、實は自分共には見當がつかんのだが、官廳に在れば夫々穴が判つて居るに相違ない、何でも好いから敎えて貰ひたいと、問題其物の發見迄も注文するといふ始末。某高官も之れには少なからず面喰つたものと見え、問題其物の詮索迄は却々手が廻り兼ねると、體能く謝絕したといふ事實もあつたそうだョ。

△何でも非政友系の政治家は、俄身代であつた爲め、大概の連中は平素の用意がなく、政友會の樣に永年甘い汁を吸つた經驗がなかつたので、氣許り焦つた割合に、案外實際問題は摑み得ずに了つたらしい話だョ。現に政友會の利權屋連中は『まだ素人だから駄目だョ、我々から見れば澤山あるのだが、彼等には見えんのだから情ない』と笑つて居たからネ。夫れはそうだらうョ、政友會は十七年間も經驗を積んだ其道の玄人揃ひ、非政友側は今度が初めての順境黨、そう急に玄人になれる譯がないぢやないか。此道許りは素人と冷笑される間はまだ花だョ、玄人になつて了つては人間の終末期だからネ。併しモウ一二度天下を取れば、憲政會側も好い加減に玄人に成り澄して了ふョ。

△元來政黨員といふ者は、一種の吝な名譽狂許りだョ、無論大なる名譽など云ふことは考へる暇もあるまいがネ。最も一寸した事でも選擧に障るから、ツイ其氣になるのも察してやらねばならぬが、物事には大概程度といふものがある。然るに政黨員の大多數は、悉く此程度を通り越して居るから恐れ入るョ。何事につけても自家廣告許り考へて居て、之れが爲めには友人も先輩も、果ては義理も人情も一向に無頓着な奴許りだからネ。無暗矢鱈に自家の豪いことを吹聽し廻る、

又新聞雜誌に自分の事を書いて貰ひたい、其癖少し惡口雜言でも云はれると、夫れは〳〵神經過敏に辯解を試みる可笑しさ、然らば武士は相見互ひといふ諺もあるから、他人の事も遠慮するかと思へば、此點は人一倍に深刻な爾も捏造說迄流布して步るく。要するに他人を蹴落して己れ之れに代はらんと焦る、最も吝な卑劣な奴等の集團と思へば間違ひないのサ。

△本部に於ける役員爭ひ、重要議案に對する演說の希望など、內部では隨分醜態百出なものだが、是等はまだ幾分諒察すべき問題だヨ。本務に於ける政務調査會の委員とか、議會に於けるお土產議案の委員とか、其他苟くも委員又は役員と名のつくものには、全く蟻の甘きに集るが如く希望者續出し、果ては他の見る目も可笑しい程獰爭戰を始める、其度每に幹部連中の困まらせられることは、丸で年中行事になつて居るヨ。相當に名の賣れた議員でも、何問題で演說をさせぬなら脫黨すると脅迫し、何案の委員にしないなら缺席すると駄々を捏ねる、其他お土產案の說明拔きに議事を進行させたとて、院內役員に喰つてかゝる者、一度も委員長を割り當てぬとて、夫れとなしに幹部の面當行爲に出るもの、數へて來ると殆んど果てしもない程五月蠅いものだよ。

△殊に大隈內閣時代の議會は、政友會の一黨で統べて居た時代と異り、何事も與黨三派を中心にして演說者委員等を割り當てねばならぬ爲め、其均衡問題で人の知れない大苦勞が、院內役員共の間にあつたものだヨ。議員としては有らゆる場合に、自家廣告の餘地もがなと鵜の目鷹の目で狂奔する、他面個人としては、何か利權がないかと、早朝から飛び出して步るいて、高等千三ッ屋の營業に議員の肩書を惡用すると云ふ體裁。之れが堂々たる一國の選良かと思へば、只呆れて物が云へないとは此事である。何の事はない、政黨の內情政治家の內幕を覗けば先づ百鬼夜行の圖だネ。

(三)

△第一期、二期議會頃は、各地共皆相當の名望家、傑物、新知識等を選出した爲め、一寸見ても人材揃ひ、

國政を議するにも何となく頼母しい人々の様に思はれた。又出て來る人も、皆一廉の見識あり抱負あり人格ある人々で、少なくも眞面目に國政に參與する意氣込み丈けは確かに持つて居たヨ。然るに今日の政黨の内容を見るが好い、昔からの人材は依然たる人材で、如何に門戸開放しても、後繼人材は却々入つて來ないぢやないか。犬養、尾崎、武富、島田、元田、大岡、是等の先輩を除いて、各黨共如何なる人材があるか、殊に政友會に於ては松田、長谷場の死後、之れに代るべき人物なく、統率の將帥としては、今に適任者を見出し兼ねて居る有様。勿論加藤子も、原君も元は官僚出身の政治家である、其他若槻、高橋、山本、濱口、床次、江木、下岡、是等新進又は中途加入した顔觸もあるが果して腹からの政黨員の如く、能く政黨を操縱して過誤なきを得るか、どうか、又逆境に堪忍して能く政黨の發展を期し、基礎の動揺を防ぎ行き得るかどうか、我輩の目から見ては、まだ／＼決して安心は出來ない。

△其他多少前途に希望あり、實力も備はつた少壯有爲の後繼者も弗々見へるが、大多數は無論意見もなく主張もなく、學問もなければ智慧もない連中である。要するに無學で悧巧氣がなく、神經過敏で出娑婆り屋。小膽者の癖に押しが強く、若しや僥倖にも位置を得る機會があるか、又利益に與る場合もあらうと、全然好機心で入つて居るものも少なくないのだ。恐らくは何社會よりも一番時代に遲れて居て、爾も無學無經驗、何社會よりも神經過敏、嫉妬排擠が盛に行はれ、其上に鴉天狗、木の葉天狗が蠢々して居て、何かと云へば二言目にも鼻の突き合せ、實に驚き入つた手合の棲息して居る階級だヨ。但し此一點になると、敎育界、文學者、其他一般藝術界の方が、今一層激烈且つ劣等だと其道の人が云つて居たから驚いたネ。

△政黨と云へば多く貧乏者の集團、政治家と云へば大抵文無しの連中であるから、中に少しでも金氣のあるものは、大概の場合に威張つて居れるネ。目腐れ金でも撒き散らせば、其力のある間丈けは、五人や十人の

味方を率ゐる小頭領が出來るョ、從つて名聲も高くなれば幹部にも押しが利く、終ひには役員の末班を汚すことが出來ると云ふ次第サ。併し金の切れ目が緣の切れ目で、一度其資力のなくなつた後は見ぢめなものョ、以前の乾分連、後には公然と輕侮の行動を採るから現金だらう。一時犬養を向ふに廻して改革派非改革派の大騒動を起した木下謙次郎を見ろ、あの僅かに遞信省參政官をお情けに頂戴した限りで、今は何處に何をして居るか、其名さへ新聞に出ないぢやないか。こんな實例は各黨共に算し切れぬ程澤山あるんだョ。

△又自ら先棒振つて利權を摑む者、賄賂を取つて來るものにも、お餘り頂戴の我利々々議員か、其周圍を繞つて居るョ。一例を擧げると臼井哲夫、吉植庄一郎、伊藤大八、彼等の名聲を博し勢力を得たのは何の爲めか、少し考へたら直ぐ判る事ぢやないか。所謂政黨界の親分乾兒又は兄弟分關係には、かうした醜關係が其大部分を占めて居るんだョ。夫れだから政黨の内部では、下等な奴が案外に潜勢力を貯へて居るのだ、金力か又は利權を漁る辣腕があると、極く詰らん男でも、相當に名聲を博し顏を出すことが出來るのだ。但し最高幹部からは勿論、心ある連中からは常に爪彈きされて居ること勿論だョ。只普通世間から見ると、如何にも黨內に於ける勢力、領袖連に拮抗し、人格ある者、知識ある者よりも、一段偉らさうに見えるから可笑しいのサ。

△政黨內に金力の旺盛なことは、犬養君が曾て根津嘉一郎を擔ぎ廻り、今又藤井善助を推稱して居る事實でも明かぢやないか。政友會で山本達雄、高橋是清が威張れるのも、人材缺乏の場合、殊に位置人物が相當に出來て居る爲めでもあるが、元を質せば金力が第一だのサ。現に中橋德五郎の威望と來たら、今將さに原君以上の全盛ぢやないか。其代り金力があつて出し澁るもの、不人氣と來たら、夫れは又無一文で無勢力なものよりも一層烈しいョ。片岡直溫の不人氣は何の爲めと思ふか、彼が傲岸の態度は確かに敵を作る、曾つて見て癪に觸ることも十人が九人迄であるが、相當の技

俩あり識見あり手腕ある彼が、名を憲政會總務に列して居るに拘らず、一名「總スカン」の綽名を貰つて、誰れ一人彼を好く云ふものはない、無論乾兒抔只の一人もあるものかネ。詮ずる處、彼の不人氣は金が祟るのだヨ、其癖何とか彼とか云はれて、末には到頭出さゝれるのだが、持つたが性分の吝嗇心で、何時でも快く出すことが出來ない男、洵に損な性分もあつたものサネ。

（一）

△元來政黨は世間人氣の上に立つ團體、如何に其政策が國家百年の大計を立つるに於ては大過なく、其主張が永遠の國利民福を主とした堂々たるものであつても、世論の氣受け甚だ面白からず。又俗論攻擊の中心點に立つことになると、黨勢は忽ちにして萎微不振の悲境に陷る。政黨としては丁度銀行が取付けに逢つたと同然の事だから、勢ひ周章狼狽に傾くのは當然、ツイ心にもない人氣轉換策を案出せねばならぬことになる。詰らんことだが幹部としては外に止むを得ない。加之一旦不人氣攻擊の的に立つてからの事だから、少し許りの匙加減では何の功力もない、結局途方もない無責任の事と知りつゝも、强い藥の盛り方を考へることになるのだ。

△そんな應急の場合でなくとも、兎角反對黨を困らせ度さが黨派心で、何か口實を設けては出來ない相談を持ちかける。位置を代へて自黨が政府を持つて居る場合を想像すると、無責任の言論と一言の下に拒絕すべき政策案を提げて戰ふ、而して世俗の歡迎を自黨一手に受けることにのみ腐心する。要するに只管人氣取り一方で進んで行く爲め、政黨其物の本來の趣旨目的をさへ沒却する場合がある、夫れでも夥しい俗受けがして黨勢さへ張れば、幹部連中は內心大に喜んで居るのだから堪らない。平生偉らさうな事を云つて居るが、畢竟するに弱い一種の客商賣、人氣の如何に對しては其臆病さ加減、見るからに片腹痛くなる場合が往々にしてあるヨ。

△斯く年中黨勢擴張、世俗の人氣如何、選擧區の意向

をのみ考へて戰つて居るから、扨愈々政府を取つた場合には、二寸も三寸も動きが取れぬ。そこで色々の不渡手形も出て來る、又食言問題も攻擊されることになるのだが、前云ふ時から既に承知の上の問題だから、時代が違ふと逃げる、果ては彼も一時是れも一時抔と圖々しくも世話に碎けて、餘り野暮は云ふものでないと居直る。反對黨は如何に變說改論を攻擊痛罵しても一旦政權を把握した以上は此方の物と云はぬ許り、平氣の平左で變說改論はお互樣とアベコベに逆襲する、其態度全く市井の無賴漢同樣だから呆れざるを得ないのだ。攻擊する方も實は御同樣といふ連中だから、詰る處は在野黨時代の言論主張に信賴した、一般國民のみ馬鹿を見る譯で、政黨員の目から見れば、政府黨たり反對黨たるに拘らず、內心に於ては政黨として普通の習慣、夫れ程政治道德に背いた大罪とも何とも思つて居ないのだ。

△何れの社會にもある通り、政黨の內部にも色々の分派がある。併し之を大別すると幹部派に非幹部派、實際派に理想派、是等の各系統の暗鬪は何時でも絕えることがない。が併し得意時代には、大したこともなく納つて居るもので、政權に接近して居る爲め、各自の小不平は自然と抑へられて居るのだ。處が愈々逆境黨になると、此小不平は各人各所に勃發することになる、終ひには役員爭ひ、組織變更抔、屁の如き問題さへ黨內を騷がすから可笑しい。詰まる處、貧乏世帶に夫婦喧嘩が始まり易いと同樣、世間に出ても幅が利かないから、ツイ內輪揉めに其鬱憤を晴らす樣になるのだ。進步黨系がお家騷動の本家本元、丸で一手專賣の樣に云はれて居たのも、要するに十七年間逆境黨の貧乏世帶が大原因だヨ。其證據には大隈內閣時代に、同志會は靜かに納まつて居たぢやないか、而して反對に政友會方面には、幹部攻擊、總裁鞭撻抔の聲が屢々起つた一事でも判るだらう。

（五）

△夫れから政黨は、策士の手玉に使用されることが多いのだ。野心家の踏臺に利用される場合が隨分ある。

元々人氣の上に立つ團體であるから、野心家策士は先づ世論を巧妙に煽る、何時の間にか政黨に火の手が擴がつて來る、此機會を利用して、盛んに賣名狂を煽動する、次いで臆病者を脅迫する、斯くて何時の間にか大勢は作られて了ふのだ。幹部連中最初の間は太平樂何出來るものかと輕侮して居る内に、モウ火の手が母家にも延燒して來る始末、漸やく氣が付いて本氣に鎭火に取りかゝる頃は、水の力も風力火力に刄向ふ能はざる猛威を逞うして居る時代、結局は幹部諸共燒き殺されて了つた實例も決して珍稀でないヨ。近い實例が憲政擁護騷ぎから起つた西園寺侯の違勅問題、更らに又火の手が逆戻りして來て、煽動者の一人、尾崎君がアペコベに燒き殺されたぢやないか。此火事場に巧みに飛び出して來て、マンマと火事泥を極めつけた山本伯、之れも政黨員ではないが、野心家策士の上前を取る奴としては、洵に冴えた手腕であつたヨ。

△群集心理問題の、政治家として一日も度外視し能はざる事は、今や世界の定論となつて居るのだが、アノ憲政擁護騷ぎ抔は、如何にも巧妙に之を利用した政治運動の大成功であつたヨ。近頃の討閥運動抔は、アレに比べると餘り遣り方が下手で、迚も比較にも何もなつたものでない、所謂「なつて居らん」と云ふのは、彼等討閥團の運動仕方だらうテ。彼の憲政擁護騷ぎと、最も面白い對照を爲したのは、山本内閣の斷末期だらうヨ、所謂シーメンス事件で煽動政治家が飛び出す、群集心理を利用して、一夜の間に桂公から取り上げた政權、爾も又此群衆心理利用の運動で、到頭大隈伯に取られて了ふ抔は、天の惡戯か知れぬが、如何にも因果應報の實例を國民の眼前に展開して見せたものだッたネ。

△兎に角政黨は可燃性の集團、政黨員は風になり油にもなる頗る危險性の動物、自然幹部の責任者は、時々水をかけて置かねば、何時延燒の災厄を受けるかも知れぬ。又た内部には放火狂も隨分棲息して居るのだから、自分から火を出さぬとも限らぬ。斯樣な危險性を帶んだ、爾も可燃性の集團を監理の役に任じて居る幹部

連中は、常に細心留意、萬一を警戒して過失なきを期すべきのに、其大役を怠るはまだしも、時々アベコベに自ら放火狂になることがある、否な多くは幹部の一部に、火元の犯罪人を出すことを例とするから堪らない。ソして口を拭ふて、モップ政治は憲政の賊であるとか、愚民を煽動するのは政治的大罪惡だとか、煽動政治家は國家の害蟲だとか、色々勝手な熱を吐いて歩るき廻る。實に呆れたとも何とも云へんのは、彼等の無責任横暴の言動だヨ。政黨の改造には、先づ彼等から門出の血祭りにせなければ駄目だ、夫れにしては今時の若い者に、血の氣があり骨力のあるものは、ないのだからお話にならんのだヨ、先づ此分で行けば、政黨の改善杯は百年清河を待つに等しいのサ。

政黨の長所强所

（一）

△我輩は元と政黨に愛憎をつかして飛び出した男だ、夫れに現在の政黨は、根本的に改造せねば駄目だと確信して居る。從つて其の長所强所は餘り云ひ度くないが、併し隨分手嚴しく短所缺點を並べた後だから、少し許りは其長所も話して置こう。政黨其物の組織存在は、云ふ迄もなく立憲治下に緊要缺くべからざる問題で、之れなければ憲法政治の運用は殆んど出來んのであるから、政黨其物に對しては、飽迄尊敬を拂ひたい。又現在の政黨首領は、加藤子、原君、犬養君、下りて尾崎、武富、高田、山本、床次、濱口、人物は共に其型小さく、勿論宰相大臣として申分ない男共とは云へぬが、兎に角現代政治家としては、皆相當の人傑たるを失はぬのだ。實は國家は之れ以上に大人物を要求するのであるが、差當り見當らぬから致方ない。官僚系にも多少相當の人傑は居るが、如何に頭腦あり手腕あり力量あつても、時代遲れの守舊思想では、迚も今後の宰相大臣として許すことが出來ぬのだ。其内に政黨主義者に進化すれば好いが、飽迄其考へを改めぬと、最早是等舊思想の人物に、一國の政治は任せる譯には行かぬ。

△然らば、今の政黨政治家を主として立論せねばな

らぬが、少なくとも首領連中の考へは、頗る眞面目なものである。中には一二怪しい人物も見へぬではないが、大體に於て國家を念とする丈けは保證して好いヨ。イクラ政友會は我利々々亡者の集團と云はれても總裁の原君迄そうと見るのは全く酷だ。如何に國民黨は無責任の人氣取り專門の駄々ッ子揃ひだからとて、總務の犬養君はそうでない、色々經綸もあれば抱負もある。各黨各派共其首領連中は皆相當に公人たる心懸けは持つて居るヨ。無論今後の修養に待ち、反省を促すべき短所缺點は各人各種に多々益々あるが、少なくとも其人物には信用を措つて差支ない人々だヨ。今後の國家を双肩に荷ふて起つべき自負もあり、確信も有して居るのだから、其優劣賢愚の別は第二として、元老連中や官僚政治家の心配する樣に、夫れ程國政を玩弄視し、國家國民を黨派の犧牲に供する樣なことはあるまいと斷言するネ。

△政黨は惡るい、政黨員は不良老年許り多い、自然に政黨の不信用、政黨員が世の嫉忌を受ける樣になつて居るが、眞逆に其首領迄も不良老年にはなつて居ないヨ。只自ら統率の大責任を有しながら、其改善肅清も出來ず、又感化誘掖も出來ずに居る怠慢無力の責は、明かに之を甘受せねばならぬが、其責任を完うする能はずとて、首領其人等迄も不良老年扱ひにするのは、少しも推諒のない餘りに慘酷な話だネ。第一如何に不良老年の集團でも、其頭に立つて居られるからには、多少は德望、人格、伎倆、手腕を備へて居なければならぬのだ、此點丈は各黨の首領連中を信じて間違ないヨ。

△夫れから永年苦勞忍耐して居る丈けに、又常に親しく民間に接近して居る丈けに、確に國情民心には接觸通達して居る長所があるヨ。自然に民本主義の政治振りにもなるだから、官僚政治家の机上論よりは、實際民情に當てはまつて行くことは間違ない。第一政黨政治家の生命が其處にあるのだから、少なくとも着眼點は何時も其處を離るゝことがないのだ、之れ丈けでも遙かに官僚政治家に增して居るぢやないか。官僚政治

家の思想は、何時も官尊民卑、政治は知らしむべからず倚らしむべしで行くことを原則とするが、政黨政治家は少なくも國民本位で政治を行はんと心懸ける。嘘だら見ろ、愈々政黨政治が行はれることになると、或ひは秘密が保てない缺點もあらうが、一方には乾度政府國民間に、餘程親し味が出來ることになるヨ。我輩は此點丈けでも官僚政治よりは勝つて居ると思ふ。

（二）

△政黨員といふ奴は、鼻張りの强い我儘者許りだが、一面から云ふと又猫の如き從順な美點もあるヨ。愛黨心とか敵愾心とか又犧牲心とか、一寸侠氣もあり同時に瘠我慢も相當に强いから、幹部が眞實腰を据えてかかると、隨分困難な問題でも、案外容易に遂行出來た例がイクラもある。其處が即ち政黨としての訓練なるもので、流石に政友會は此點に於て他黨に數等擢んでた長所强所を持つて居るヨ。實に之れは感心すべき處で、血を啜つて誓ひ氣を持つて集つた舊自由黨の空氣が依然として政友會を支配して行く賴母しい處が是れだ。其處になると、理屈で集つた舊改進黨系を引く他の兩黨は、迚も政友會の脚下にも寄りつけんのだから情ない。

△併し何れにしても、黨派に一旦加入した以上は、餘程黨派的氣分になるもので、大概の不平我儘は自然とお互に我慢し合つて行く。即ち黨人氣質なるものは斯くして出來るのだが、眞實何等かの抱負經綸を行はんとするには、此黨人氣質を巧みに利用しさへすれば、之れが遂行も夫れ程に面倒なものでない。他人の事にも枉げて從ふと共に、自分の考へにも亦讓歩して貰ふ便利があるのだ。何だか黨人とし云へば、一も二もなく幹部の命令に服從し、全く其頤使に甘んぜねばならぬ樣に考へる者も多いが、夫れは只一面丈けを見た話で、眞に其內部に立ち入ると、詰らん陣笠でも自分の意見を、幹部の名に於て行はせ得る場合が却々あるものだ。只夫れは誰れの意見であるか、世上には明瞭にならず、從つて自己を發揮して、之れが名譽と利益を專有せんとするものには、少なからず不便不利かも知れ

ぬが、單に國家國民に對する熱誠抱負の遂行と云ふ一段から云へば、確かに十分の効果を奏し得るのである。夫れだから眞面目に仕事しやうと思ふ政治家が、政黨に加入して初めて其素志を達した實例は、從來イクラもあるのだヨ。其處になると餓鬼も人數で、政黨の實力といふものは却々馬鹿にならんものサ。

△最も飽迄自己發揮以外に目的なく、出娑張り專門、賣名專門の駄々ッ兒、我儘者は、一日も政黨内に入つて居ることが出來ぬのだ、若しこんな奴に來られることになると、政黨は丸で會社荒しに出られた總會と同じく、年中紛擾で納まり樣がない。近い實例は花井卓藏を見ろ、アレ程名が賣れて居ても、何處の政黨でも皆敬遠主義を取つて居るぢやないか。彼れが自ら政黨に入らずと傲語して居るが、焉んぞ知らん何處でも歡迎しないからの事で、若し何黨かで總務の末班に加へるとか、一段下つて幹事長格でも與へると云へば、彼れは大滿足で參加するに極つて居るヨ。一人一黨主義抔偉らそうな事を云つて居るが、實は何黨でも歡迎して呉れず、又歡迎せぬ處に參加して、自己發揮の唯一目的を剝奪されるのが惜しく、結局自分でも亦各黨派からも、同じく孤獨的位置を心ならずも與へられて居るのサ。一寸見れば各黨派共機嫌をとつて居る樣で、外觀は大持てらしく思はれるが、內實を洗へば先づザッとこんなものだヨ。まだ斯樣に外觀と內容と正反對な實例は各方面にイクラもあるから面白いぢやないか。

△之れも賣名、自己發揮であるが、彼の何問題があつても、必ず眞先に飛び出して强硬論を吐く奴がある。世間では如何にも硬派の急先鋒の如く思ふが、多くの場合に於て、彼等の大多數は軟派だから可笑しいぢやないか。無論中には眞に硬派の急先鋒もあるが、最も過激な演説を好んでやる連中は、十中九分迄軟派と思へば間違ないのだ。早い話が臆病犬は眞先に一番高く吠えると同じで、心中ピク／＼者程、口に稅が掛らぬと思つて過激な言論をして歩るくものだ。現に討閥演說會で大にメートルを上げて歩るく代議士連は、其二

三を除くと、黨の方針愈々不信任案提出と決定した場合は先づ大概腰を拔して了ふ手合許りだネ。

（三）

△之れと反對に、平素默して居る連中に却々確りした者が多い。世間には名も知れず、甚しきは其存在さへ認められぬ人々だが、實は何黨でも是等の人々が其中堅を爲して居るから不思議だらう。政友會の半數黨時代でも、亦今の憲政會でも、實際は是等の人物を中堅として居るから、幹部は夫れ相當の戰爭も出來るのだ、飛び上り者のオッチョコチョイを目當てにして、眞の戰爭は危險で出來るものか、何時大將を置き去りにして、逃げて了ふか險呑で油斷も隙もあつたものでない。政黨の眞の强味は是等無名の確實なる人物にあるのだ、宛も藪が水上に浮んで居る樣に、其全部が社會に露出して居る陣笠連は、黨派としては樂隊か廣告係りで、重大問題に際しては、何時も問題外に置かれて居る。平素演說は勿論、下らぬ役員や委員は全部辭退して居る連中こそ、お家の大事の場合に眞の働きする人々で、事實勢力あり價値ある政黨員と目さるゝのは、多く此階級に屬する連中だョ。陣笠の癖に始終新聞に名の出る樣な手合には、大體碌なものが居ないと思へば、大した見當違ひはあるまい。是等の連中は賣名專門のオッチョコチョイか、さなくば利權を漁る醜議員が多いのだからネ。

△斯樣な次第であるから、幹部の威令は事實行はれる組織內容に自然なつて居るのだが、其處になると幹部の腰が常に浮いて居るから駄目だ。思ひ切つて此賣名專門屋、利權屋を抑へつければ、何の譯もなく凹垂れて了ふのだが、若し荒れ廻られると持て餘す者といふので、餘程大事の場合でないと高壓手段を取らない。自然に彼等も好い氣になつて、政黨を腐敗墮落せしめ、果ては世上不信用團體の標準にして居るのだ。今にして幹部連中の猛省なくば、末には迚も手がつけられぬ者になつて了ふ許りだョ。內には眞實堅固な中心團體を控へ、外には輿論の政黨改造論八釜敷折柄、何を苦しんで、彼等潰々者流の放埒不法に遠慮する必要があ

らうか、斷じて行へば彼等臆病者の卑劣漢共、皆一様に戰慄して了ふに極つて居るョ。

△此外に憲政會、政友會、國民黨、各黨夫々固有の特色がある、同時に之に伴ふ長所缺點も色々ありで、其比較論評は隨分面白いが、餘り長くもなるし、又微細に渉つて煩雜にも堪へぬから、今度は之れで御免を蒙むることにしやうぢやないか。但し官僚系から新たに參加した人々の新傾向に就て、最後に一言是非述べて置きたいことがある、是れは政黨として今後大に注目すべき問題なのだ。

官僚出身の政黨員

△官僚出身の政黨員と云つても、極めて少數の人物に過ぎぬ、憲政會では總裁の加藤子を始め、若槻、濱口江木、政友會では床次、犬塚、橋本、大島、其他に知事の古手が四五名居るやうだが、是れ等のコンマ以下は無論問題でないのだ。處が以上擧げた七八人の人々は、何れも皆眞面目な政黨主義者だから不思議ぢやないか。是も官僚畑から態々政黨に參加する以上は、其に相當堅い信念と決心とあつての結果に相違ないから、眞劍眞面目なのも無理がない樣なもの、、一方政黨で永年錬り上げて來た連中の腰具合はどうだ、外で見るさへ如何にもフラ〱の體態、其見苦しさ加減、只呆れるの外ない狀態ぢやないか。

△從來の實例から云へば、官僚出身の政黨員は辛抱氣なく、何時の間にか逃げ去つたものだ。從つて官僚出身者といへば、政黨員として甚だ幅が利かなかつたものである。又本人自身も、機會だにあれば逃げ出す工夫許りして居たものである。然るに今度の連中は、逃げ出す處か、眞面目に政黨主義で發進せんと努力して居る。政友會内で眞面目に寺内内閣に降參を非とする重立者は、床次、犬塚を急先鋒に擔いで居るぢやないか。又憲政會にした處が、總裁の加藤子は到る處に元老攻擊をやつて步るく、若槻、濱口も飽迄超然内閣反對で押し通す覺悟堅く、殊に江木の如きは、自ら長州出身の後藤を以てして、故鄕に政黨主義宣傳の大役を承る勇氣と熱心、確かに見上げた骨力血氣のある遣方だ

ョ。少なくとも是等官僚出身の連中は、モウ一歩も退かぬ確信と決心を以て、政黨主義を實現せんことに專念努力して居るのだ。

△飜りて腹からの政黨員はどうか、口に硬論を吐けども腹は軟說、若し解散を避け得べくんば、多少の無理は敢て厭はぬとの念願、或ひは面目を保全して妥協の餘地もがなと、頻りに妙法案出に骨折つて居る。是れは憲政會の方だが、政友會は今一層甚しい、モウ寺內伯からの交渉が來さうなものだ、まだか／＼と既に焦り切つて居る體裁、其見苦しさ加減と來たら、全く棒にも箸にも掛からぬ醜態ぢやないか。一方官僚出身者の飽迄主義の爲めに戰ふ決心堅きに引き代へ、本家本元の政黨員が政黨主義杯どうでも好い、妥協も可なり買收も亦不可ならずと云ふに至つては、彼等四十年の辛苦艱難、何の爲めに嘗め盡して來たのか、我輩は只其情なき腐り切つた根性に涙が零れる丈けの事だ。

△官僚出身者は、政黨員としてまだ處女だから節操も堅固だが、腹からの政黨員は、丸で宿場稼ぎの女郎同樣、今や全然節操觀念杯消失して了つたのかも知れぬ。若し果してさうとすると、今後の政黨改善の原動力は、總て是等官僚出身者に發することになるのだ。さりとは意氣地のないにも程があるぢやないか、否な生命を失ひ家產を破つて、今や亡き數に入れる地下の諸先輩に對し、何の辭を以て答へんとするのか。如何に貧すれば鈍する世の習ひとはいへ、餘りと云へば氣が亡せて了つたのか。アヽ云ふまい／＼、斯く云ふ我輩も實は敗軍して退却した一人だからネ。

家庭醫學叢書

書名	著者
お産の話	吾妻醫學博士述
小兒病の話	唐澤醫學博士述
耳鼻咽喉病の話	千葉醫學博士述
神經衰弱の話	川田醫學博士述
肺結核の話	額田醫學博士述
皮膚病の話	岡醫學博士述
婦人病の話	佐[illegible]醫學士述
淋病の話	廣川醫學博士述
黴毒の話	佐藤病院長述
肛門病の話	森肛門病院長述
ヒステリーの話	杉江醫學士述
胃腸病の話	[illegible]醫學博士述
外科療法の話	中原醫學博士述
呼吸器病の話	森醫學士述
性慾教育の話	竹中ドクトル述
病人看護の話	森醫學士述
精神病の話	中村醫學士述
脚氣とリウマチの話	菊地醫學士述
寄生蟲病の話	齋藤ドクトル述
小兒傳染病の話上卷	豐福醫學博士述
小兒傳染病の話下卷	豐[illegible]醫學博士述
感冒と肋膜炎の話	竹中ドクトル述
有益な食物と危險な食物の話附食合せの話	岡崎醫院長述
男子生殖器病の話	阿久津博士述
良藥と毒藥の話	森醫學士述
妊娠と避妊の話	高橋醫學士述
便秘と下痢の話	杉本醫學博士述
注射の話	森醫學士述
眼病の話	井上醫學士著
科學的美容法	洛谷ドクトル述

近刊前掲三十冊以下順次刊行　定價各一册拾五錢　郵稅各一册二錢

發行所　東京市銀座通新橋際振替東京二〇〇〇番（電話新橋一九九一）　新橋堂

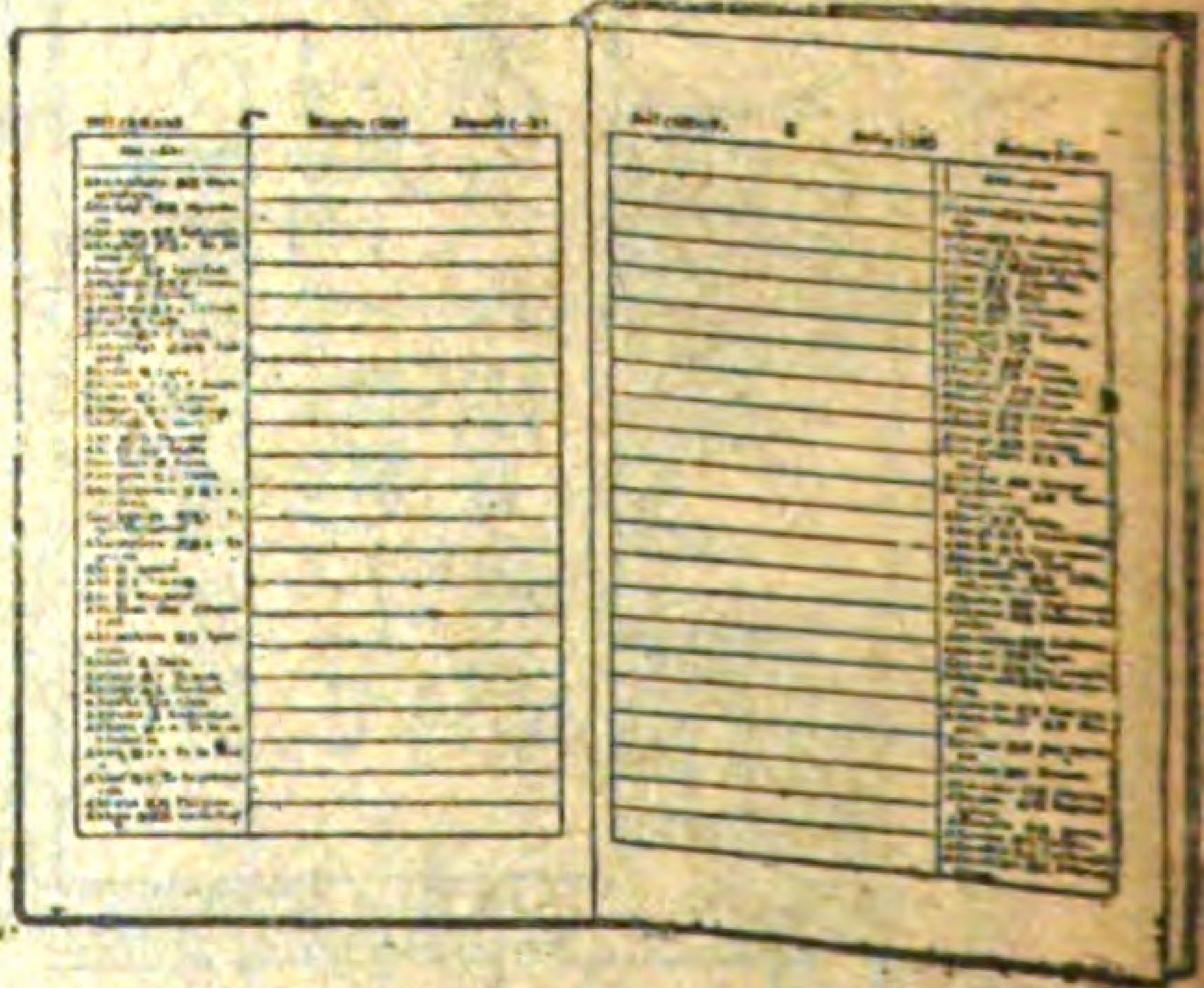
(中付四の一)

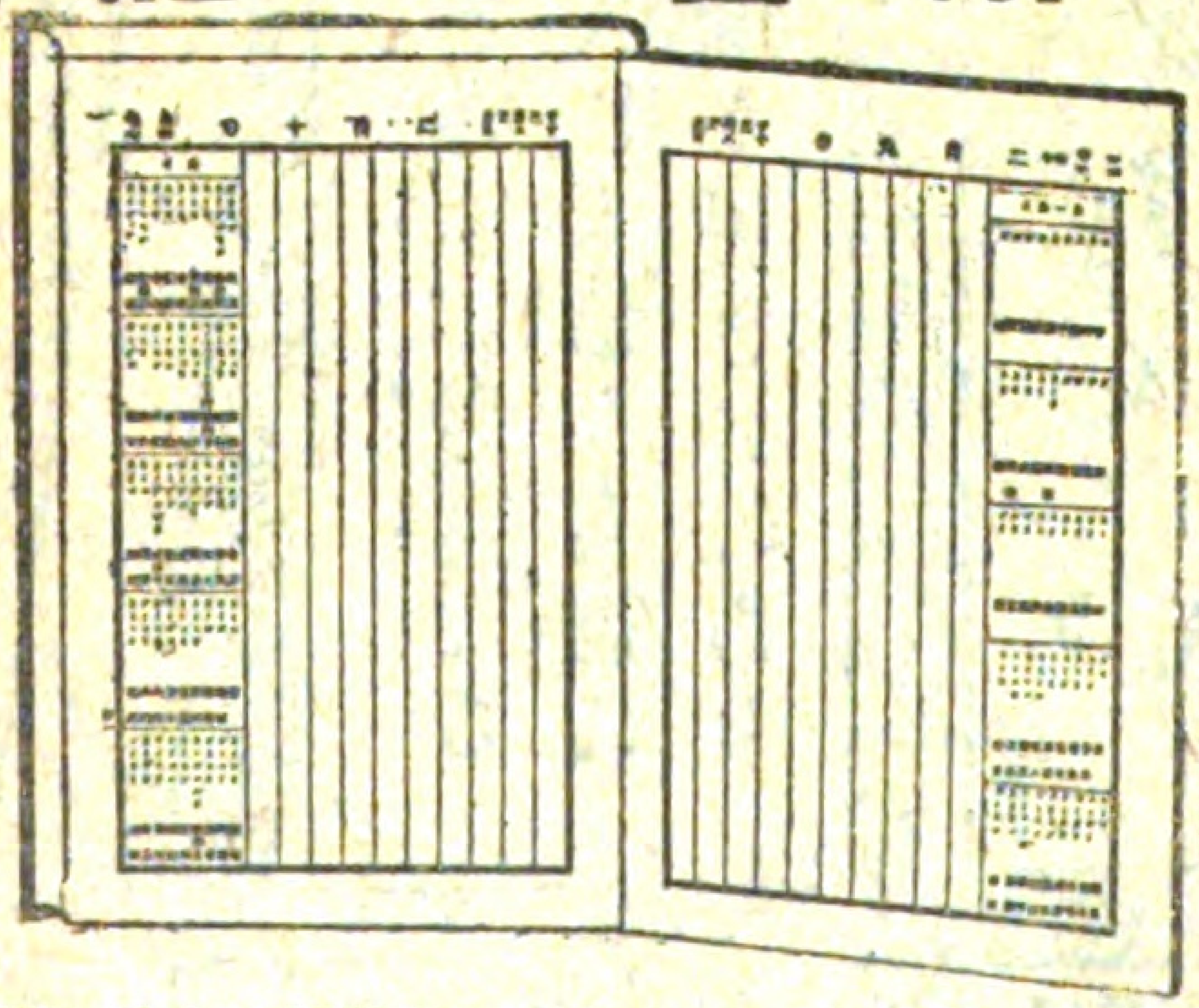
日記を書く時に分らないな文字がスグ分る

字引入當用日記

ローマ字引 辭書日記

五十音引 辭書日記





定價八十錢　郵稅六錢

色は簡單なるローマ字引普通語辭書錄和英辭書を巧に各頁の間に配置し之れに依つて日記執筆中隨所に容易く必要の漢字と英語を檢出し得るにあり。第二特色は横書の組織に在り從つて英文日記に代用し得るにあり。ペンを使用する場合日本文も横書を便とするは學生諸子がノートブツクを横書となす事に依つて明なり、横書なるに依り自然日記中に英文を挿入し或は又全然英文を以て日記を記すに都合よし。

本日記の特色は五十音引普通語辭書を巧みに各頁の間に配置し之れに依つて日記執筆中忘れたる文字、思出し得ざる文字、知らざる文字を容易に檢出し得るにあり。第二の特色は製本特に綴方の堅牢なるにあり開閉の烈きし『日記と辭書』衆に用さるゝものなるを以て特に此點に注意せり

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

時事新報

純潔なる歴史、公正なる議論、精確なる報道、豊富なる趣味を以て一貫せる本紙は男子にも婦人にも倍々有益に且面白く近時讀者の激増せること眞に驚く可きものあり

此の新聞をお讀みなさい

新年大繪附録「二八の春」は池田蕉園女史の靈筆に成り新聞界空前の意匠たる床掛小畫幅用（竪二尺五寸五分横八寸五分オフセツト版十八度刷）にて乙女の姿高尚美麗を極む本紙二ケ月以上讀者に限り進呈

東京 時事新報社 ● 各地に取次店あり

（中付四の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◀◀◀吾等の誇と長所▶▶▶

▽報道迅速と記事正確とは
▽吾等の誇稱する處に非ず
▽これ新聞として至當の任務なればなり

東京朝日新聞

▽趣味と實益の源泉は朝日
▽新聞が以て任ずるの長所
▽曰ずや朝日は新聞中の新聞也と

本紙定價

一ケ月	金三十七錢
三ケ月	金一圓十六錢
六ケ月	金二圓七錢

地方郵送定價（郵税共）

一ケ月	金四十七錢
三ケ月	金一圓三十六錢
六ケ月	金二圓六十七錢

海外郵送定價（郵税共）

一ケ月	金九十七錢
三ケ月	金二圓八十六錢
六ケ月	金五圓六十七錢

廣告料

五號活字十七字詰（一回）
一行　金六十五錢

發行所 東京京橋區瀧山町四番地
振替口座東京一七三〇番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

天下獨歩の自習書

芳賀文學博士・杉谷代水氏共著

縮刷大成功——最大歡迎・賣行底を知らず。

作文講話及文範

(忽六版)

文學界教育界及一般社會の要求を合一して生きたる實用文と強く美しき文章を作る腹を養ひ、立案結構の呼吸より死活細大の技術を説くに常識的斬新の方法を以てし、今文古文の大寶庫を開いて有ゆる代表的模範文を敷陳評釋す——講話の首尾貫徹して天然に文範の面白く選ばれたりとは萬朝子の讃評

箱入極美本全一册 千三百頁

▼特價金壹圓四拾錢(正價金壹圓六拾錢)

郵税十二錢 臺樺鮮支十二錢

正しき文章を書かんとする人の爲に、氣の利きたる手紙を認めんとする人の爲に、天下無二の二大名著、縮刷増補して原本五分一の袖珍形となり、携帶至便定價半減せり。萬人必備の寶典として本書の効用は今後無盡藏なり

書翰文講話及文範

(忽八版)

社交用業務用文學的書翰の三類を眼中に置き一方實用に密接なる手紙文に習熟せしむると同時に含蓄あり餘情あり上乘の文章に導き、講話には其用意を説き文範には其實例を示し實用を趣味とを兼ぬ——共書翰文獨習書として此位完備し此位組織的なるはなしとは大阪朝日子の適評

箱入極美本全一册 千六十頁

▼特價金壹圓參拾錢(正價金壹圓五拾錢)

郵税八錢 臺樺鮮支十二錢

芳賀博士校閲 富山房編纂 箱入極美本一册六百四十頁

書翰文講話及文範別編

現代名家書簡集

特價八拾錢 正價金壹圓 郵税金八錢

作家の各方面に部門の各樣式に亙つて興味饒かに應用自在、書翰文講話及文範の別編として萬人必携の名著

(中付四の四)

見本進呈(往復葉書申込)

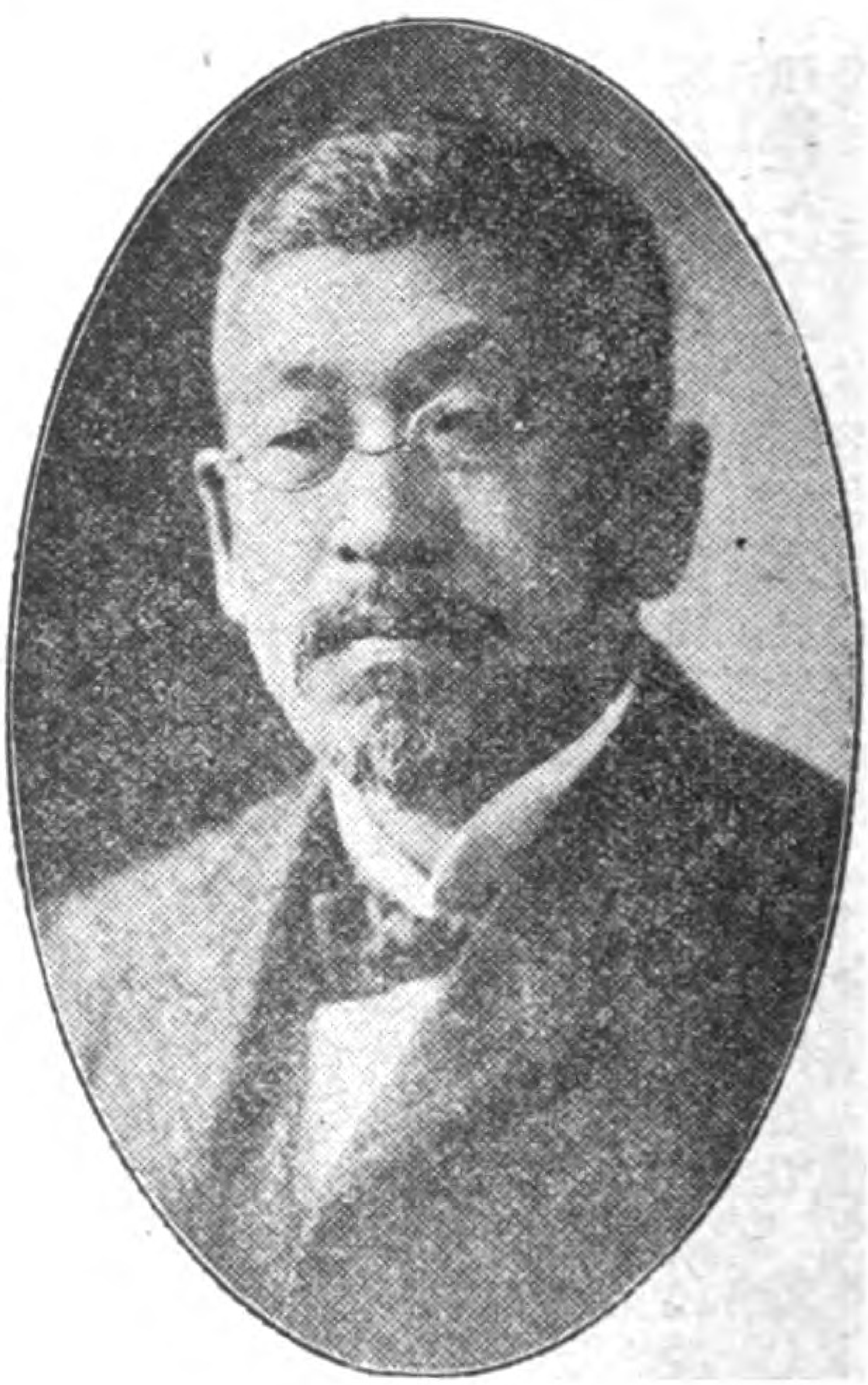
東京神田 富山房 振替一〇五 賣捌全國書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

人物評論（八十）

愈々政治の本舞臺に乗り出したる

中橋德五郎論



▽最も準備ある政治家

若宮卯之助

一

虚名を博して、後に實力を養うたで無かつたならば、單に流水に任せて棹したもの。一種の系統に夤緣して、鰻上りに其の地位を占めたで無かつたならば、黨派の波瀾に漂はされて、其の着くべき、或は着くべからざる處に、着いただ

けのもの。官界より出立した者は、何程か、社會の實際に疎く、社會の實際に疎からざるも、何程か、形式に泥むの弱點を免れ難く。民間に野立つた人物は、其の意氣に於て勝り、其の態度に於て稱すべきも、概ね、官界の情僞に通曉せず。其の情僞に通曉せざるにあらざるまでも、少くとも人をして通曉せざるかに疑はしむるの憾みがある。而も是等の一切に於て、圓滿具足、何の缺くる所無きを期し得たとするも、尙ほ荊棘多く、嶮隘多く、難關多きものは、則ち政治家の征途である。此の荊棘を拓き、此の嶮隘を通じ、此の難關を透過するに必要なる政治家の旅道具。人格然り、德望然り、財力然り、識見然り、而して經綸然り。辨慶の七ッ道具は昔の事。今日、少くとも此の五ッ道具を不足して、政治の長途を行かんと欲する者は、西比利亞平原に向つて無錢旅行の足を進むるが如く、其の大膽には驚くべく、其の向ふ見ずには呆れざるを得ない。我等は旣に我が政界に於ける多くの無錢旅行者の旅行を見た。而して其の中道にして神斂し氣喪する多くの見るに忍びざる、聞くに堪へ難き實例を見た。準備は一切の物の必要である。殊に政治に於ては絕對の必要である。然も、滔々たる天下の政治家、其の政治的行旅の首途に於て、能く其の必要なる一切の準備を整へらつた人は幾何なる乎。準備は固より一事であり、準備の目的は自ら他の一事である。姑く問題を此の準備の一點に限定せよ。其の準備の萬全を以て、新に政界に乘り込めること、中橋德五郎氏の如きは、明に我が政界の新記錄と謂はざるを得ない。然り、彼は政治家として最も準備ある一人である。

二

世の中橋氏を論ずる者は、概ね、後藤男を以て、其の對照とする。其の年配に於て、其の豪懷に於て、其の力量才幹に於て、其の談論の風發に於て、其の等しく兒玉將軍に知己を得たるに於て、若くは他の多くの點に於て、即ち其の等しく樂天的なるに於て、積極的なるに於て、實務的なるに於て、外疎放の如くして實は極めて細心なるに於て、更に後藤男の臺灣に於ける

成功を以て、中橋氏の大阪商船に於ける成功に對するときは、此の二人者の類比は、極めて興味ある一個の主題と爲るのである。然も類比は終に類比であり、個人性は全く個人性である。一個の後藤新平的本質、一個の中橋徳五郎的眞骨頭。彼は必ず彼であらねばならず、我は飽くまで我で無くてはならぬ。後藤男が實驗科學の醫術の教育を受けたのは、其の政治的生涯に對する無價の寶を得たのであつた。後藤男が一個の特色ある政治家として、常に形式よりも實質に重きを措き、制度よりも人間を先きとするの信條を得て居るのは、恐くは其の青年時に於ける實驗科學の教育に負ふ所少からずであらうと思ふ。別して用意周到なる獨逸の研究法は、後藤流の調査癖を成立させるに、與つて力があつたであらう。辯護士出身の政治家に、包容力の秀でたる人物を見ざるが如く、若し後藤男にして、其の大部分は、全く雕蟲的なる法制の末技に神勞しつゝ其性格を築き上げて居つたならば、彼も亦臺灣六三問題の否定論者となるが如き偏僻の虜となつて居たかも知れぬ。後藤男の一面は、誤り無く、科學的であり、實質的であり、周到的である。然も之を以て直に後藤新平的本質と稱するを得ない。何となれば、中橋氏の一面も亦後藤男と同様に、科學的であり、實質的であり、周到的であるのだから。

三

人性は一の複體である。我等は後藤男に於て科學的の一面を見ると共に、非科學的の他の一面を見る。其の事業の跡より觀れば、而して其の計畫の陣立を見れば、此の人の科學的一面は、容易に之を認取するを得るも、其の聯想作用の餘りに敏活に作用する結果として、往々にして其の思想の散漫を導き出すの虞れがある。而して其の思想の散漫は、其の儘に非科學的であると謂はねばならぬ。此の點に於て後藤男は、明に中橋氏と異つて居る。

其の聯想作用の敏活に於て、中橋氏は恐くは後藤男に一歩も讓るもので無い。其の明快迅速の判斷力は、眞に其の證左である。而も中橋氏には些の散漫が無い。

中橋氏の本色は必ず單刀直入的、必ず徹底的。

關西實業界の一覇王として、其の門下に無數の人才を網羅するを見れば、其の眼識と包容力とは、何人も之を許さゞるを得ない。然しながら其の清濁併呑、其の薫蕕同器は、寧ろ之を後藤男の特色とも做すべきであらう乎。或は其の特色は其の思想の散漫に對して、多少の類縁を有するであらう乎。

其の稚氣は之を否定して、其の眩氣は之を無視するにせよ。其の煥發の才氣は、之を無條件に推奬して、其の縱横の奇思は之を最上限に重んずるにせよ。尙ほ人をして何と無く多少の不安を抱かしむるものは、後藤男の性格である。短く言へば後藤男には、何程か傳奇的の氣分がある。

然しながら中橋氏の性格には全く傳奇的の氣分が無い。其の氣象は進取的であるが、如何なる場合にも其の釣り合を失はざるものは實に此の人の性格である。而して其の性格には、人をして不安を抱かしむるが如き成分は微塵も無い。後藤男と中橋氏との此の性格上の相異は、之を天分に歸すべきであらう乎。或は之を境遇に歸すべきであらう乎。後藤男は、今日まで、常に首領を戴いて活動した政治家である。而して中橋氏は自ら首領として經營した事業家である。中橋氏の場合に於て、中橋氏の如き釣り合ある性格は、其の事業の必然の要求であつたと謂はねばならぬ。然しながら政治家としては、後藤男は、既に多少の事功を樹てた人であるに拘らず、中橋氏は鬢髮漸く霜を加へた政治の今道心として、僅に其の前程賒かなる政治的征途に上つた斗りの人、今に於て特に此の人の爲に稱すべきは、其の政治家として萬全なる準備である。其の前途の多幸を祈る。

▽天下の中橋德五郎

鵜崎鷺城

石川縣の選擧仕直しは實に容易ならぬ出來事で、斯

くの如き騒ぎは議會開設以來今度が初めてであるが、一昨年の選擧にアレ丈けの大競爭をしたし、又た其大競爭が延ひて再選擧の元になつたのであるから、今度の金澤市の横山章對中橋德五郎の戰爭が一番興味ありとせられた。然るに横山は憲政會のお歷々が手を換へ品を代へて、說いたけれども、再起を肯んじなかつた爲めに中橋の獨舞臺となり、本人も第三者も聊か拍手拔けの形になつた。

此前の時は單に一横山一中橋のチツパリとのみ見るべきで無く、內部にいろ／＼事情があつた。普通ならば中橋の落つべき筋合でなく、最初本人は固より世間も彼の必選を期して居た。横山も初め中橋の向ふを張らうといふ意志はなかつたけれども、時の首相大隈は尋常一樣のものを以て中橋を倒すの不可能なるを思ひ、横山が門地と財力とを有するを幸ひ、彼を說得して立たせたのである。そこで双方心ならずも意地張りになつて鎬を削るに至つたが、前內閣が極力横山を支持したのは、中橋其人を目標にしたといふよりも、政友會の勢力を削弱するの意味に於てしたのである。更に裏面の事情としては、郵船會社對商船會社の暗鬪とも解せられたが、少くも前內閣派政友會の抗爭が根本の原因を爲して居た。議員としては中橋が二枚も三枚も役者が上であることは敵も味方も共に一致する處、現に金澤市民も十人が九人まで其事を知り、中には中橋の顏を蹂躪したことを私に悔ゐて居たものもあつた。それ故に再選擧と定まれば、中橋は意地としても雪辱戰をしなければならぬし、憲政派の方でも面目上是非横山を立たせなければならぬ譯であるが、若し再び兩人が盾を突くことになれば市民の同情は必ず中橋に歸するに相違なく、特に大隈內閣も倒れた後であるから、中橋は前回の如き不利の位置に立つ心配はない。横山もそれを知つて居るし、特に今日は最早大隈の義理を立てる必要がなくなつたから、寧ろ中橋の顏を立てる爲めに引込んだのである。されば横山の出ると出ないとに拘らず、中橋の當選は初めから確實にされて居たのである。

中橋が帝大專科を卒業したのは明治十九年頃であつたと思ふ。最初横濱邊で司法官を勤め、それから農商務省參事官になつて、間もなく議會制度取調べの爲めに西洋へ行き、其關係から初期議會の頃、衆議院書記官に任ぜられた。彼は西洋から歸れば當然衆議院書記官長になれる心算であつた處が、一書記官として林田龜太郎や大島久滿次の下役に廻されたので、内心不平に堪へず、一年許りで遞信省に河岸を換へ、書記官參事官を經て管船局長に進み、明治三十年大阪商船會社に入る爲めに官を罷めた時は監査官長であつたと思ふ。日清戰爭後三四年間の大阪は、新發展の機運に促されて各方面に人物輸入を行はれた。其輸入された人物中には當時の新人材もあつたけれども、多くは役人の古手かさもなければ東京財界の落武者である。總裁山本達雄と衝突して日本銀行を飛出した鶴原定吉の市長を筆頭として、原敬の大阪毎日新聞社長、田健二郎の關西鐵道會社長、町田忠治の山口銀行理事、中川小十郎の加島銀行理事、此外に島村久、河上謹一、植村俊平、志上鐵太郎等の顏觸れが住友鴻池に高い給金で抱へられ、そこにもこゝにも天降り連がウヨ〳〵と大阪の事業界に幅を利して居た。中橋も人材として天降つて來た一人である。

彼が大阪商船に入つたのは故田中市兵衞が見立てに依つたのである。田中は大阪財界の豪族で、其長女即ち當主市太郎の妹は藤田傳三郎の養女となつて中橋に嫁した。田中は大阪商船會社長であつたが、日清戰爭後の事業熱勃興に際し、無暗に擴張々々と手を擴げた結果、やがて押寄せた反動の大波に卷込まれ、一時商船會社の運命は危機に瀕して重役の頭痛鉢卷となつたので、田中は社長を罷めて女婿の中橋に善後の重任を託したのである。今まで役人として餘り知られなかつた中橋は、商船會社長となるに及んで忽ち其名を世間に認められ、而して彼の入社後一時悲觀された社運も漸次順調に向ひ、郵船會社に對して日本の海運界に有力なる地歩を占むるに至つたので、彼は關西事業界の大立物になつた。或は商船會社内に中橋閥なるものを

造り、或は市政の方面にも手を伸して市會議長となり、或は大阪市より代議士に擧げられ、彼に慊焉たるものもあつたけれども、一時の中橋は大阪の一勢力であつた。勿論婦家の田中及び藤田家の後援もあつたけれども、兎に角商船會社を今日の盛運に導き、是丈け好い顏になつたのは大部分自己の力に歸して好い。

石川出身の人物を概括していへば、一風變つた性格を有するものと、圓滿和平にして理性と常識の發達したものとに分れて居るやうである。丁度金澤の市街を貫流する犀川と淺野川が、一は水勢急にして變化に富み、一は平流にして他奇なきが如く、人物も自然も不思議に一つのコントラストを爲して居る。故櫻井一久、遠藤秀景、三宅雪嶺、故竹島慶四郎、戸水寛人等は前者の型を代表し、本多政爲、横山章、早川千吉郎、倉知鐵吉、北條時敬等は後者の色彩を帶び、軍人にも故松村務本の如き豪傑肌に對して、瓜生大將の如き人がある。中橋も犀川方面に生れて自然の感化を受けたと見えて、淺野川型とは人間の調子が變つて居る。彼は常に天下の中橋德五郎を以て任じ、一金澤、一大阪の名士と呼ばるゝを快しとしない。隨つて其言ふ處も國家の大經綸に觸れ、若し彼に地方問題や一團體のことを尋ねると知らん顏をして居るが、談一たび天下の問題になると滔々と氣焰を吐いて對手を煙に卷く。其態度口吻から邊幅を飾らぬ處は一寸豪傑らしく見え、特に初對面のものには大きく出るので、エラさうな人といふ印象を與へる。それ故に或者は彼を豪傑病患者なりとし、中には僞豪傑などゝケナすものもないではない。さういへば若干豪傑振る時代もないではなかつたが、今日は大分頭に白髮が生へたから、以前の如くエラク見せんとするやうな稚氣虛榮心も自然少くなつたし、幾分それが殘つて居るにしても、人間は案外フランクで妙な臭味はなく、容量も小さくない方である。

彼は官吏としてよりも實業家として名と金を得、若し今まで役人生活を續けて居たならば、少くも遞信次官位にはなつたであらうが、大臣になるを得たか疑問である。然るに彼の位置も貫目も民間に下つてから出

來、今日の中橋は大臣級の一人に數へられ、彼が實業界より政界に轉じたのは、單に議會の一席を占めんが爲めにあらずして、それ以上のポリチカル・アスピレーションがあるに相違ない。近年の大臣相場からいへば、彼は遞信大臣にしても農商務大臣としても立派なもので、天下の中橋を以て任じ、又た臺閣を夢想して居るからとて、必ずしも人間不相應な野心でない。蓋し彼は實業家として成功したけれども、其天分趣味からいへば、實業家よりも政治家たるに適し、實業家としては餘りに政治的肌合があり過ぎる。彼は性來の讀書好きで、今でも暇があれば書籍に親んで新知識の修養を怠らない。總じて實業家といふものは年百年中算盤勘定に沒頭し、少し金が出來ると妾道樂をしたり、或は書畫骨董、茶會、義太夫などに金と時間を費すのが殆んど通有の慣習になつて居るが、中橋は最も忙しい商船會社長時代にも月々丸善に拂ふ書籍代が百金以上もあつたさうである。此點に於ても普通の實業家と肌合を異にし、一般に無學なる贅六の間に一頭地を拔いた道理である。

明治四十五年大阪市の一部人士が彼を代議士候補に推したのは、市の候補者の餘りに一山百文的なるに慊らなかつた反動的現象と見るべきであるが、彼は表面代議士たるの意なきを裝ふて選擧前滿洲に旅行し、其實配下の一人に旨を含めて竊かに運動させた形跡がある。斯ういふ點は自分を大きく見せようとする中橋式の發揮かも知れぬ。而して彼は首尾よく當選し、議會の召集に應じた丈けで、一度も議場に顏を出さずして辭職した。是れは裏面に如何なる事情あつたか知らぬが、中橋としては無意味なる進退であつた。然るに一昨年の選擧には此前と違つて華々しく出馬し、而も大阪よりせずして金澤を選んだ。彼が自發的に立候補の決心をしたに就ては、自己の政治趣味を滿足させる爲め、商船會社長といふ立派な位置を抛つたのであるか、當時の彼は早晩商船會社を去る餘儀なき立場にあつたから、自己の活路を開く爲め此擧に出でたのであるか、見樣に依つては兩方の意味に取れるが、實際の理由は

前者にあつたのかも知れぬ。一身上の事情は兎に角として、若し彼が政友會より公認されずして、金澤より立てば、或は彼が如き騒ぎを見ずに擧げられたかも知れぬ。たとひ政友會を名乘るにしても、大阪市若くは郡部から立つたならば、幾分政府の壓迫を免れぬにせよ、候補者の多い丈けに切込む餘地もあつたし、特にアレ丈けの顔であつて見れば、必ず當選したに相違ないけれども中橋としては大阪よりも郷里の金澤を便利なりとしたであらうし、又た意外な邪魔者が飛出してアレ程面倒なイキサツにならうとは豫期しなかつたであらう。それ故に結果からいへば、中橋の金澤より立つたのは易きを棄てゝ難きを選んだことになり、而して政府に呪はれたのは主として政友會の名が祟つたのである。偉く見せたがる彼としては内心敗北を口惜しく思ふたに相違なく、又た大きく見せたがるだけに一言も愚痴を滾さなかつた。然し同じく敗れたといつても、初より勁敵を向ふに廻し、萬天下の視目と同情の的となつて負けたのであるから、大岡育造や奥繁三郎が負恥を掻いたのと違ひ、立派に負花を咲したのである。彼にして天下の中橋たる以上、さる事情の下に代議士に成損ねたからとて、また今度獨舞臺で當選したからとて、天下の中橋たることに變りはあるまい。唯だ選擧の經驗が彼に如何なる精神的影響を與へたかと云へば、ます／＼意地といふものが加はつた結果、一層深く政界に踏込んでやるといふ頭になつて居りはせぬか。

　彼が果して天下の大人物であるかは疑問であるが、少くも議員としてアッパー・クラスに屬し、彼が如き人物の議會に入つたのは何よりである。彼は意見に富み、其意見には多少大雜把な點もあるけれども、兎に角常に國策問題に注意し、支那問題に就ても一通り考へを有し、近頃設立された日支協會の如きも發起者の一人である。彼の辯力は未だ誇るに足らざるも、其學問の力といひ、立論の才といひ、加ふるに彼の金力を以てすれば、獨り一政黨ならず、今日の政界に重きを爲すに堪ふ。

▽中橋さんに感服してゐる點

田中隆三

中橋さんに就て私の一番感心して居ることは、あの様に澤山の事業に關係して交際も廣く非常に多忙な身でありながら、其間に内外の書籍を讀んで勉强することを暫らくも止めない、新らしい目ぼしい本が出れば必ず求めて讀むといふことである。其精力の强いことは全く感服の他はない。

今日の所謂紳士と云はれる人の中に、私共の先輩には隨分エライ方もあるが、學校を卒業して了ふと勉强はもうツッチのけといふやうな人が多い。然るに中橋さんは平素から始終其勉强を怠らない。殊に政治に關する事――國家の經綸といふ方面に就ては少しも其注意を怠らず研究して居られるやうである。その事は交際上の座談の中にもよく窺はれる。

次ぎに私の感心して居ることは、あの様に忙しい身でありながら交際を大いに努められるといふことである。世間の所謂政治家だとか新聞雜誌の記者だとかには、努めて大抵應接せられる。世の中の所謂名士などは、初めて政治舞臺へ打つて出るといふと、今までの無愛想な態度に引換へて急に交際家になり、來る人毎に愛嬌をふりまくものであるが、中橋さんのは決してさうではない。前から其注意を怠らずちやんと其資格が出來て居るのであるから、夫の所謂名士達のやうな急拵への交際家や、俄仕立ての研究家とは、大いに其趣が違ふのである。

斯様な譯け故、中橋さんは本當に實質のある人である。關係して居られる澤山の會社などに就いても、世間に往々あるやうな白痴威しのお飾りの役人でなく、實力のある重役であり、實際の支配人である。されば實業界の方面に於ては勿論の事、政界に於ても而かも何の方面へ持つて行つても、十分に役に立つ人であると思ふ。

以上は約り極く上品な高尚な方面であるが、所謂俗

の趣味の方面で言へば、中橋さんの最も好んで遣られるものは先づ碁位のものであらう。其碁も決して上手でもなんでもなく、所謂へボ碁である。これは餘程お好きと見えて、一晝夜ぶつ通しで遣られることもある。然し其爲めに肝腎の職務を怠られるやうなことは決してない。約り餘暇ある時の趣味である。又宴會の席などでは、世間の名士がよく誇りにして居るやうな歌を唱ふたり踊つたりするそんは藝當は少しもない。只愉快な話をして居られるのみである。實に頗る簡單明瞭なものである。

次ぎに中橋さんの御家庭のことを申して見ると、それは非常な圓滿であつて、何時でも春のやうな和氣藹藹たるものがある。又奧樣が非常に利口な賢いお方で、主人に讓らぬ交際好きである。その交際といつても世間にありふれた形式丈けの交際でなく、主人が親しくして居られるものは、皆それと同じ程度で親しく交際せられるといふ有樣である。客人などが立て込んで待つて居る場合などには、夫人が自ら出て來て何んでも引受けて話されるといふ具合である。今日所謂名士の家庭などでは、主人とは數十年來親しく交際して來て居つても、其夫人には一度も會つたことがないといふやうなのが澤山あるやうであるが、中橋さんの家庭にはそんな事は少しもない。中橋さんと懇意にして居る人は、皆それと同じ程度に夫人と懇意にして居るといふ有樣である。されば奧樣も確かに立派な賢夫人であつて、政治家の妻として充分其資格を有つて居られるお方である。約り中橋さんは御夫婦揃ひも揃つて、立派な親切な眞心のあるお方である。友人を助け、後進を引立てるに就いても非常な注意を以て努められる。左樣な譯であるから鄕里(石川縣)の後進であつて、中橋さんから直接間接其引立てを蒙つて居るものは非常に多いことゝ思ふ。

元來政治家には貧乏人が多いやうであるが、中橋さんは非常に御運のよい方で、十分な財產を有つて居られる。近來中橋さんの有つて居られる株は皆非常な有利な狀態になつて居る。其處へ以つて行つて、石川縣の

選擧があの様な有樣になつて、いよ〳〵堂々と政治舞臺に打つて出られるといふ隆々たる勢は、全く一鬼に金棒』で、殆んど缺ぐるところなしといふ有樣である。

實際中橋さんの遣方は、總て確かりとはつきりとして居つて、何處にも危いことがなく、何等の暗いところがない。されば斯樣な約り進み過ぎた政治家が、今日のやうな俗臭紛々たる政治界に這入つて行つて仕事をするといふことは、非常な困難なことであらうと思ふ。然し本當の實力はあり非常に賢い中橋さんのことであるから、十分其功果を收められることゝ信ずる。否、斯ういふ人物が、政治舞臺に立つてこそ、本當に意義ある政治が出來るのである。されば中橋さんの今度の出陣には、敵味方に係はらず大いに歡迎せねばならぬことゝ思ふ。

▽前途多望なる政治家

早川鐵治

今回横山章君が悧巧に競爭を避けられたので、失望したのは憲政會の連中であらうと思はれる。横山君が棄權された以上は、中橋君が石川縣から選出されるのは既定の事實である。政界に人物拂底の今日、中橋君の如き有數の人物が、議會に議席を有するに至つた事は、獨り政友會の爲めに賀すべきであるのみならず、國家の爲めにも亦慶ぶべき次第である。同君と吾輩とは多年の交友で、氣風に於ても相似た處もあつて極めて親善である。

中橋君は大學は別科を出たと思ふが、正科を出た連中よりも出世が早く、官界でも樞要な地位を占めて居た。早く議院制度取調べの爲め、金子堅太郎子に隨行して歐米各國を歩いて來た。我國今日の議院制度には、同君の力與つて大なるものがある。明治三十年、吾輩

が官界を退いたに少し遅れて、中橋君も鐵道局長を辭して了つた。憲政黨が内閣を組織した時で、其黨員を入れる爲めに從來の役人を大變減つた時である。君の後釜に据つたものは慥か例の大八車の伊藤君であつたと覺えてゐる。若し同君が引續いて官界に居つたなら、立派に遞信大臣にでもなつて臺閣に列し得たであらうと思ふ。然し同君は其後官界に遠ざかつて、昨年の春まで大阪商船會社の社長となつてゐた。そして當時は株なども拂込の半分にもなつてゐた微々たる商船會社を、今日の盛大に致し、航路なども內海にのみ止まつて、それも百噸がせいぜい五百噸位の船舶で往來してゐたものを、一千噸五千噸の船を以つて、臺灣航路を初めに、漸次南洋航路から亞米利加航路に及び、濠洲にも航路を開拓しようとしてゐる等は、一般に航運事業が發達して來た所爲もあろが、又中橋君の力に待つ處が非常に多かつたにも由る。同君の事だからとしどし社內の宿弊を矯正して行つたものであらう。一體大阪と云ふ土地は、中橋君の如き東洋流の豪傑肌には向かない處である。東京にゐても成功しない、オトナシイ人間、御無理御尤な、それこそ定められた俸給よりも少ない金を貰つても、「好うおます」と云つて敢て異議を唱へないやうな、自分の主張を立て通す元氣のない人間の成功する處である。辯護士でも役人でも、今日大阪で成功してゐるものは、東京にゐては失敗した、若くは失敗せぬ迄も大した事を仕出來さなかつた人間許りである。東京で成功した人物で、大阪へ行つて成功したものはまあ殆どない位である。然るにひとり東京で成功した中橋君が、關西で又華々しい成功を贏ち得たのは、不思議と云へば不思議であるが、矢張り之れは中橋君だからこそ成功したのであらう。尤も中橋君の背後には、藤田や田中市兵衞の如き財界の後見人がある事はあつたが、然し中橋君自身に偉い處があればこそ今日の成功を見たのであらう。若し同君が金を拵へる事許りを主眼としたら、引續いて大阪商船に留まり、關西實業界の重要なる地位を持續して雄飛してゐた方が得策である。が、吾輩は同君が關西で大成し

て數千萬の資財を蓄へるよりも、再び政治界に立戻つて貰ひたいと常々希望して居つた。處が其樞要な位置を後進に讓つて、いよ〳〵昨年から政界に打て出る事になつたのは喜ばしい。今日同君は資産も相應にあるし、手腕もあるのだから鬼に金棒である。

斯く中橋君は十數年間官界の雰圍氣の中に生活し、更に二十年近く民間に在つて實業に從事し、多く民間の人々に接してゐるから、官民兩境の事情に能く通じてゐる。此事は氏が政治界に入り、他日國務大臣として廟堂に立つ場合には、多大の好參考になるだらう。元來社會の實狀や、實業界の裏面や、政治上の實際などは、室咲きの官僚系の人には分らない。又政黨者流が國務大臣になつても、政黨の事情は成程知つてゐやうが、行政の實務を知らない。況んや實業界の實狀をやである。殷鑑遠からず、憲政內閣と云はれた、と云ふより寧ろ標榜した大隈內閣の如きは、侯以下の諸大臣多くは皆事務を知らないもの許りではなかつたか。是等の人々によつては迚も實業の發達や行政の進展は期せられないのである。さうかと云つて又實業家が、政治の事を皆目知らずして國務大臣となるのも感服しない。政友會內閣の時には、實業家を一二名拔擢して登用したが、彼等の輩は政務の實際を知らずして殆んど何の事績も擧げ得なかつた。一體何時何處の國でも同樣であるが、商業工業に從事してゐる者には國家觀念がない。之れは士階級――一種の知識階級にのみ存在する觀念で、所謂實業家の階級には此念が薄い。だから實業家を政務に當らしめても駄目である。然るに中橋君は學校を出てから十有餘年官海に游泳し、後二十年間も實業界に立つて居たのであるから、官民兩境の心裡實狀に通曉してゐる。斯う云ふ完全なる政治家は甚だ尠い。吾輩も若い時分には役人になつて農商務省などにも居た事があつた。當時は民間の事情を知らず、唯屁理屈許りでやつてゐたが、今にして思へば定めて農工商の妨げとなつた事も尠くなかつたらうと、聊か忸怩たらざるを得ないものがある。が然し中橋君は、前にも陳べた通り、いろ〳〵の處を經て來て酸いも甘

いも嚙み分けてゐる人であるから、國家の政務を取らせても、必らず善處して過たぬであらうと信ずる。今や同君は代議士となつて議會に議席を有し、又政友會にも有要な地位を占めてゐる。萬一政友會が内閣でも組織するやうにでもなれば、同君も必ず有要な國務大臣となつて國政を調理する光榮を擔ふに至るであらうと信ずる。方今、政界の人物悉く凋落し竭くして、存在する者は唯政權に汲々とし、只管自黨に同して他黨を罵倒するを惟れ事とする我利々々亡者許りである。眞に衷心から外交の刷新を圖り、國運の發展を念とする人物が地を拂つて去つた今日に、官界民間の消息に通ぜる中橋君の如き人物を斯界に見出し得たのは、蓋し早川一人の喜びとする處ではあるまいと思ふ。

▽其本領に立ち歸れる中橋君

岡崎邦輔

中橋氏は商賣人より政事家と早變りしたるが如く世上兎角の評判するものあれども、小生等の見るところにては、氏は元來豪傑風にして讀書を好み、官吏より身を起したる人にて、其儘にして一本調子に進みたらんには、今頃は政事家として可也に成功せるや無疑事なるべし。

氏は中頃局長時代突然田中氏の女婿として大坂に迎られてより實業界に投じ、各種の事業に從事せるものなるが、氏の才學を以て其頃の大坂商人に伍したることゝて、氏の働振りは一層目立ち乍ちにして成功し、今日の如く富豪の一人となりたり。

政事家なるものは貧乏が本來の面目かの如く心得居るは大なる間違にして、政事家は金を作る所以にあらず、却而金錢を使用せねばならぬものなれば、今後大政事家たらんものは第一金錢に不自由せぬといふ事が最も必要なることとなり。

されば氏の如きは已に夫れ等の用意も出來、今度政事舞臺に立ち戻り、豪其傑的氣象の上に其蘊蓄する財

力と才力とを以て働くべきにより、氏が曾て大坂財界に於て成効せる如く恐くは又乍ちにして政界の成金となり、天晴大政事家となるは必然の勢なりと思ひ、一は氏の爲に祝福し、一は我黨の爲めによろこぶものなり。

▽加賀人中橋の兩面

一 鐵拳禪

加賀醫者と云へば、寶藥行商の事だが、それでも其の寶藥の庇蔭で、暑氣當りや腹痛が癒るので、寒村僻陬では斯う重寶がつて居たものだ。それに彼等は一年に一度か二度位巡回して、嚢に置いて行つた大きな藥嚢を檢べて見て、服用した分を補充し、そして服用した分だけの代價を貰ふと云ふ風で、押し賣ではあるが、併し鷹揚な遣り口なので、越後の毒消賣や、山口の千金丹賣のやうに侮蔑されず、多少の信用を繫いで居た。尤も加賀醫者と云つても、越中富山の者が大部を占めて居たが、加賀醫者の總稱の中に包括された所を見ると、如何に加賀藩の勢力があり、加賀人の信用があつたかゞ分る。北國の暗い空氣の中にあつて、加賀人の比較的明るい快感を以て迎へられるのは、百萬石の背景ばかりでなく、何程か越後人などよりは快活で、怜悧で、如才無い點があるのであらう。

越後人には毒消賣のやうな執固さと、米舂や三助のやうな辛抱を持つて居る。力一杯に働いて、儲けて溜め込んで行くと云ふ風がある。加賀人は加賀醫者の方と、百萬石の威勢で押して行かうとするから、隨分機略もあれば、掛引も上手である。同じ金を溜め込むにしても、穢い所を見せずに溜め込まうとする。他に取り入るにしても、餘り頭を下げずに、其處に利害關係を結んで取り入らうとする。目先が見え過ぎる爲めに、人を馬鹿にし切つて掛かる者もあれば、それと反對に權勢に動かされ易い者もある。第十二回衆議院議員總選擧の際の如きは、此の人情の弱點に官僚の辣手

が乘じて行つたのである。選擧干渉は素より蠻行であるが、其の權勢に動かされて、加賀賢者的打算に走つたのは、又選擧人自身の恥辱である。

兎に角、全縣下の投票が無効に歸し、選擧を行り直すと云ふ事は、我が憲政史有つて以來、石川縣が始めてゞある。投票用紙の薄かつたと云ふ事は、選擧を無効とするの爭點であつたが、人情の紙よりも薄かつたと云ふ事も亦爭はれない事實である。彼等が若し神聖に眞面目に、自分の信ずる所に依つて選擧權を行使するならば、用紙の厚薄に由つて被選擧人の名を二三にする事は無い筈である。權勢の眼が如何に光つて居ても、物質に囚はれて居なければ、それに怖れて自分の信ずる人に投票し得ない事はない筈である。處が選擧人の或者に斯う云ふ良心が無かつた爲めに、官僚の辣手に引掻き廻れて了つた。さうして、全縣下の選擧無効――再選擧と云ふ新事例を作つた。之も加賀賢者並に名物と云へば名物の一つにも數へ得ようが、決して加賀人の名譽を代表するもので無い。此際、選擧界に新事例を作つた石川縣の人々は、政界刷新の爲めに反省を要する。

二

政友會の中橋徳五郎は、此の再選擧に勝を得ようとして、金澤市から打つて出た人物である。昨年の薄紙投票の時は、政府黨の金力候補者横山章と戰つて敗れた。彼れ自身とて金力を擁して居ない譯では無いから、反對黨の金力候補者と云へば、云ひ得ない事は無かつた。現に今回でも、金力候補者と云へば、矢張其の部類に這入るのである。けれども、横山が莫大な金力と、其の背景たる門閥と、それを色彩する財界の勢力とを利用されて、政府黨より蹶起を促され、自身も亦御大禮議員の積りで候補を爭つたのと、中橋の夫れとは大に趣を異にする。中橋には金力もあるが、抱負もある。單に金が有るから代議士にでも成つて、石碑に肩書を遺さうとする者とは非常な徑庭がある。彼れは夙に政界に活動しようとの野心を有つて居た。人物も亦然う云ふ風に出來て居る。久しく實業界に立ち働

いて居たので、彼れに幾許の政治家的素質のあるかを疑ふ者があるけれども、彼れは寧ろ實業家よりも政治家風な才幹を備へて居る。算勘の厘毫に齷齪するには、餘りに無頓着な茫漠さを持つて居る。その茫漠さの見える表面が、彼れを大きく見せ、且彼れは尋常實業家と選を異にするやうに思はせる所だが、彼れが茫漠の中には、矢張加賀人の怜悧な血が流れて、如才ない、そして打算に疎略のない所がある。彼れが胸中に算勘が立つて居なければ、財政紊亂裡にあつた大阪商船を、あれ程立派な物にする事は出來なかつたであらう。

政治家には隨分ずぼらな人間が多い。自分の家政は棚に上げて、國家の財政を料理しようとするが、其の性來のずぼらが附き纏うて、何うも甘く行かないと云ふ者がある。甚しきに至つては、代議士にはなつたが、さて何んな事を行つたら可いかと間誤ついてる者もある。唯間誤ついてるなら別に危險もないが、其の間誤ついてるうちに、勝手元が苦しくなつて、變説改論料に衣食しようと云ふ惡い了簡を出し、瀆職罪に泣面を曝すやうな手合もある。が、中橋は然う云ふ風なずぼらな、所謂政治家とは譯が違ふ。又勳四等を貰つて隱退するやうな實業議員とも譯が違ふやうである。横山は政治に一隻眼を有するが爲めに、而して其の政策を實行せんが爲めに、進んで代議士になつたのでは無い。謂はゞ政府黨の有志家に煽て揚げられて、打つて出たと云ふ有樣である。今回親の喪に服するを理由として、候補を斷念したのは當然である。金力に由つて勢力を植ゑた者が、金力を失へば衰へて來るのは自然の數だから、彼れ横山が有象無象に圍繞されて、無意味な浪費を敢てせねばならぬ事に氣が付いて、之では不可いと、財布の口を締めたのである。中橋の政界に馳騁しようとは、年來の希望であるから、豫め準備もして居れば、將來に處するの覺悟もある。政友會に勢力を得て、領袖となつて、然る後に仕事をしようとの腹もあらう。或度まで金力を以て、黨人の窮乏を救ふの考慮もあらうから、横山のやうに風向に由つて、進

退を決するやうな事は先づ無からうと思ふ。擅に彼れを忖度するならば、或は彼れの心理を解剖するならば、未來の内閣の閣僚位になるの自信を持つて居るに相違ない。彼れが選擧場裡に起つたのは、決して戰敗を雪ぐ爲めのみならず、政界の將來に大なる希望を有つてる爲めだと思ふ。

金澤市は彼れの獨舞臺であつたが、憲政會の横井伊佐美が名乘を揚げた。伊佐美は辯護士で、市會議長である。市政界には一種の勢力者であらうが、其の人物の日本的と、地方的との標準上から觀れば、玆に更めて比較するが程の者もなからう。中橋の經歷が横井に優つてるからでは無い、德五郎の人物が伊佐美の上にあるのだ。勝敗の數は素より其の人物手腕に因らず、地方的の勢力及び當時の事情に關係する事もあるから、今日早計に推斷する事を難しとするが、恐らく其の勝利は中橋の上にあるだらうと信ずる。

三

然らば中橋は如何なる經歷を有し、如何なる手腕を揮ふ人物であらうか。

彼れは舊金澤藩士齋藤宗一の五男で、德五郎と命名された。明治十七年に中橋の養嗣子となつて、其の四年後には家督を相續して居た。養嗣子となる前に、金澤專門學校文學部を卒業し、次で法科大學に入つて商法を研究したのが抑も身を立てる基となつた。

彼れが官場の初舞臺は、判事試補であつた。爾來、特許局審判官、農商務省參事官、法制局參事官、參議院書記官、遞信省參事官、同書記官に歷任するまで、十二三年の間巧に游いで居た。明治三十年始めて管船局長に任ぜられて、局長級の人物となり、翌年鐵道局長に轉じたが、それが官場最後の舞臺で、同年七月に鈍帳が降りて了つた。

官場を去つた彼れは、大阪商船の社長となつて、更に新なる舞臺に立つた。當時、大阪商船は隨分亂脈を極めて居た。日清開戰の十月に、景氣を見込んで一千萬圓に增資したが、何うも思ふやうに發展が出來なかつた。三十一年二月には、止むなく五百五十萬圓に減

資せざるべからざるに至つた。彼れは役人上りで、帳簿上の檢査眼にそつの有らう筈はないが、實際の手腕は何うだらうと危ぶまれて居た。然るに彼れは、會社内部の改革、社政の整理を遂行して、綽々餘裕あるを示した。尤も其の手腕を裏付けるものは、彼れの經驗と、彼れの熱心とであつた。彼れは曾て管船局長として海運界に携はつて居たから、單に机上の知識のみで無く、其の實際をも知悉して居た。之が大阪商船の整理に對して働いた、好個の經驗であつた。整理の結果は頗る良好で、瀕死の社運を挽回することが出來た。而して再び增資計畫を立て、三十九年には一千六百五十萬圓の會社となし、遂に今日の隆盛を見るに至つた。勿論それが彼れ一人の功勞では無いが、少くとも彼の頭腦と手腕とが、昨年社長を辭するまで二十年の間、誠實に働いた結果であらねばならぬ。

「流石に中橋は豪い!」斯う云ふ聲を聞くに至つたのも、鐵道局長の官歷では無く、大阪商船の社長となつて衰運を挽回し、社運を發展させ、而して自分自身が財界に重きを成すに至つたからである。勿論彼れが官場生活を持續けて居れば、最う疾うに鐵道院總裁か、泡よくば遞相位の所まで漕ぎ付けて居たかも知れぬ。それは彼れが赤門を何年に出たとか、其の後輩が大臣になつたとか云ふのでなく、彼れ程の人物力量であれば、其處まで進んだに相違ない。又進んでも、何か行り得る人物である。伴食だけの事なら、誰でもなれるのだから、敢て誰彼と云ふの要は無い。中橋も伴食位にはなれるだらうと云へば、皮肉に聞えやうが、何か行り得る人物であると烙印を押して置けば、お世辭にも愛嬌があらうと云ふものだ。彼れは『大臣はそんに豪い者では無い』と云ふかも知れんが、實業界を去つて政界に投ずる以上、內閣を乘つ取る考へで居なくちや駄目ぢやないか。

四

彼れが代議士に成らうとした動機の如何は暫く措き、彼れが逐鹿場裡に名乗を揚げた最初は、第十一回の總選擧であつた。彼れの信望と勢力とは、首尾よく

桂冠を戴かしめたが、未だ議會開かれぬ以前に辭職した。何故辭職したかと云ふに彼れは政府保護の下にある大阪商船の社長で、其の當選資格に疑問を生じたからである。彼れは其の資格に關して議會の問題を惹き起し、彼れ是れ面倒が起つてはとの懸念もあり、且信望に禍するを怖れて、自ら潔く去つたのである。其の愚圖つかない、進退の間にも、彼れが人格の閃きを見ることが出來る。蓋し彼れは捲土重來の曉には、乾度勝利を得るとの確信が有つたからである。處が官憲の激しい選擧干渉の爲めに、落選の不幸を見た。彼れが一たび辭して、二たび候補を爭ひ、落選して三たび競爭するは、唯浮氣で代議士にならうとするのでは無さ相である。

彼れが關西の財界に重んぜられたのは、彼れ獨自の力でもあるが、又藤田傳三郎の女婿と云ふやうな關係が無いでも無い。傳三郎が死んで、今は平太郎の代になつたが、矢張大阪財界の大立物となつて居る。その財力の有るせいでも有らうが、市政界にも一種の勢力を持つてるやうだ。何かいさこさのある時は、顔役氣取で調停の勞を取る。いつそ市長にしては何うだらうなどゝ、二代目を擔ぎ出さうと目論んだ人すらあつた。中橋もそんな關係で市政に容喙するのでも無からうが、一時盛んに刷新の火の手をあげて居た。或度までは其の目的を遂したが、事業界で手腕を揮ふやうな譯には行かなかつた。事業界と云つても、彼れは然う手を伸さないが、夫れでも宇治川電氣外數會社の重役となつて居る。

財界では重役格でも、黨界に入ると陣笠扱にされる者が多い。彼れは政友會に在つても、まだ代議士で無いから、表面に立ち働いては居ないが、一種の財嚢以外に、有爲な人物を以て目されて居る。先づ當選すれば、總務格の待遇を受けるだらう。男高橋是清が餘りに出し澁る所から、中橋を其の後繼者に擬してるやうである。之までも隨分中橋から搾つた黨人もあるさうだが、彼れは男高橋のやうに出し惜みをしないと云ふ事だ。其の點で黨内に人望があるのか何うかは知らぬ

が、評判は然う惡くない。年齡もまだ五十三で、之からが働き盛りである。役人上りの床次竹二郎よりは、三つの年長ではあり、金力はあり、手腕はあるのだから、彼れの下に屈すべしとは思はれない。床次が長谷場の地盤を讓り受けたやうに、誰の地盤を貰ひ受けたのでも無いから、地方的結束力の上に立つ勢力は無いが、行く行くは北國勢力の代表者となるであらう。

中橋は重厚で、妾などは持ちさうでないが、二男四女の外に庶子女が一人ある。寢言にまで細君を呼んで、侯大隈にからかはれたと云ふ犬養でさへ、庶子男が二人、それと同腹の養女が一人もあるのだから、之を以て政治家の節操を測る標準とはならない。犬養も一時は憲政擁護の神に祭り上げられ、木堂會など云ふ崇拜者の結社すらある。中橋の大阪に居て駄々羅遊びもせず、岩下大盡のやうに銀行に穴も明けず、海運界乃至事業界に貢獻し來つた所を見ると、却々確かりして居る。役人上りの横柄な所は、多年財界に棲息してる間に全く取れて了ひ、何程か謙遜で、そして樸訥の裡に如才ない應對振を見せる。熱せず、騷がず、常識的に事を運んで、實力だけの働きは行るが、自分を大きく見せやうとか、柄に無い突飛な事をやらうとか、そんな廣告的の偉大と、聲價とを欲しないやうである。其の名を引繰り返せば五德で、椽の下の力持をしても、表面に立たしても、隨分働きの出來る人物であらう。黨人として、代議士としての中橋は未知數で、之から何んな花が咲いて、何んな實が結ぶだらうかに興味がある。(大正五・一二・一六)

▽議院制度取調時代の中橋君

子爵 金子堅太郎

明治二十二年議院制度取調べの命を承けて歐米諸國を漫遊する事となつた時、私は四人の隨行員を連れ行きたいと内閣に提議した。貴族院・衆議院の書記官候補者として若い大學出身の官吏又は學生を連れて行きた

いのが私の願ひであつた。それが內閣で議決になり、四人の隨行員を物色して、法制局から太田峰三郞、神戶の稅關長をしてゐた水上浩躬、それから當時法科大學を出て大學院にゐた木內重四郞の三人を得たが一人足りない。で、も一人捜がしてゐる時、農商務省の書記官をしてゐた中橋德五郞君がやつて來て、いろ〳〵自分の意見を陳べて、是非連れて行つて吳れと云ふ。自分も中橋は大學に居る時から知つて居たので、好からうと云ふ事になり、農商務省の書記官では不可ぬから、內閣の參事官に轉任させて同行する事になつた。そして彼れ此れ一年歐米各國を漫遊して議院制度の事を調べた。中橋と木內とは英學をやつてゐたから英・米の制度を調べ、太田と水上とは佛蘭西語が出來ので佛蘭西・白耳義などの方面を研究すると云ふやうに、皆分擔してやつた。一行の中でも中橋は年長でもあるし、官等も一番高かつたから、同時に一行の會計と庶務とを賴んだが、實に才幹のある人で、事務の處理には最も伎倆ある事を認めた。

私が選拔した四人の隨行員太田、木內、中橋、水上は其後各方面に働いて――尤も太田は不幸にして死んで了つたが――ゐて、今だに親友として交際してゐる。歸朝後は中橋と水上とが衆議院の書記官として曾根の下に働き、太田と木內が私の下に働いてゐた。さうして今まで日本に無かつた事を、我々一行が歐米で觀察研究して來て、滯りなく濟ました。其後議會は二回三回と進行して今日に至つたのである。かくて衆議院の書記官も仕事の基礎が定まつて、三ヶ月は忙しいが殘り九ヶ月は閑なので、中橋は行政官の職について實務の見習をし、將來衆議院議員になりたいと云ふので遞信省へ轉じて、其書記官に暫くなつてゐた。其後官を辭して大阪商船會社の社長となり、盛大な事績を擧げ、圓滿に功成り名遂げて職を辭し衆議院議員に打つて出るのを聞いて、中橋が昔私に語つた通りが實現されたので、さぞ滿足であらうと思はれる。初め石川縣から出ると聞き、必ず當選されるであらうと思つてゐたが、橫山と云ふ門閥が出たので、奮鬪したが敗けた。けれども中橋は

少しも悲觀しないでまたやつて見ると意氣込んでゐた。處が今度横山君が競爭をやめたので、中橋の獨り舞臺となつた。勿論此冬の議會には衆議院に出て、政友會の有力なる議員として奮戰することであらう。何にしろ以前は衆議院の書記官をしてゐた事もあるのだから、演壇で演説したり又黨員を統轄して働かせる力量は充分であると信ずる。中橋の如き領袖を得た事は、時節柄政友會の爲めに大に祝すべき事である。中橋の政界に於ける前途は、蛟龍が雲を得た如く發展するであらうと思ふ。二十六年前一緒に歐米を漫遊した事を追憶して、私は大に氏の前途に屬望してゐる。

中橋の逸話も澤山あるが、其中でも今だに笑の種となつてゐるのは、やはり二十六年前の洋行中に起つた出來事である。巴里から伯林に行くには、途中ストラスバークで伯林へ直通の汽車に乘換へる必要がある。其時中橋と木内と、も一人獨逸語の通辯に賴んであつた金井延とが、三十分の乘換時間を利用して馬車でストラスバーグの街頭を見物したいと云ふから、それは可いが必らず三十分以内に歸つて來るやうにと命じて、私は手荷物と一緒に汽車に殘つてゐた。處が三十分を一分か二分しか剩さぬと云ふのに未だ三人は戻つて來ない。馴れぬ田舍者が洋行したので、道でも間違つて了つたものだらうと、そろ／＼心配になつて窓から首を出して見たりしたが一向影も見えない。其中汽笛が鳴る、列車は搖ぎ出す。處へ三人は周章狼狽て駈け込んで來たのであるが、汽車は到頭三人の悲しげな顏をプラットホームへ殘したまゝ出てしまつた。困つたのは私で、會計主任が中橋なので、一切私は金を持つてゐないし伯林へ着くのは夜の九時であるから、車内で夕飯を取らねばならぬ。飯は一度位食なくても我慢すれば可いが、給仕に心付けも遣らねばならず、停車場へ着いても馬車を傭ふ金が無い、困つた事になつたと思つてゐた。すると同じ列車に乘合せた立派な風采の外國人が、先刻からの私の樣子を見てゐて流暢な英語で——彼は英國人ではないのに、英國人のやうに巧みに英語で話した——私の困つて居るのに同情を

表し、行先を訊ねる。私が一伍十什を話すと自分も伯林に行く者だが心配しなくてもよい。私が何なりと御用を承りませうと云つて名刺を吳れたりした。此人は伯林駐在の露西亞大使館の書記官であつた。私は此人に夕飯も御馳走になり、馬車の世話や宿屋の案内までして貰つた。それから次の列車の着く十二時に、私は三人を停車場へ迎ひに行つたら、中橋は「自分が會計主任でありながら、貴下(あなた)にひもじい思ひをさせて申譯がありません、實は夕飯を如何したらうとそれ計り案じてゐました」と云ふから、捨てる神あれば、拾ふ神もあるさと大笑ひした事があつた。此話は別段中橋の人物を知る上に參考となるとか、或は資料になるとか云ふものではないが、偶々中橋の事を訊ねられて、二十六年前の外遊を追想し、不圖この喜劇を思ひ出したので話して見たまでゞある。

▽政友會に於ける將來

川尻東馬

一

▲中橋君の評判は却々豪らいものだ、政友會内閣が出來たら、乾度大臣の椅子に就く人と、世間では相場を極めて居るやうだ、さなきだに自尊心の高い、豪傑氣取りの御本人は、定めし大藏大臣にでもなつた氣持で居るに相違ない、併し政治家としての君に、果して如何なる抱負あり手腕あるか、未だ世間に對して、夫れ程認めさせる何物をも提供して居ない、從つて吾人は、世間で評判する程豪らい政治家であるか、又虛評判許りで、實は左程の人物でないのか、一向に試驗されて居ないから見當がつき兼ねる。

▲成る程實業家としては、確かに一廉の人物であつた、官吏としての伎倆も、相當認めさせる材料がある、併し官吏として又實業家として、優秀の人物であるか

ら、政治家としても乾度傑出した人物であるとは保障出來ぬ、人間行く處として可ならざるない傑物もあるが、夫れは極めて少數者で、多くは其人物に適する場所があるものだ、所謂適材を適所に置くとは此事で、君は適所に置いて初めて適材たる人物か、又行くとして、可ならざるなき傑人か、其邊の區別はまだ判然して居ない。

▲或ひは政友會に於ける現在の人氣を見て、之を唯一の計量器にする人もあるが、夫れは甚しき皮相の觀察だ、高橋是清君も財布の口を締める、山本達雄君もそう無制限には出せない、現在の政友會は殆んど金蔓に離れた黨派だ、其處に君は例の負けん氣で、爾も可なりの風呂敷屋と來て居るから、自然に賄方を勤める、何の事はない丁度貧民窟に行つて慈善事業をやる様なものだ、是れで評判が惡るければ、餘程どうかして居なければならぬ、殊に政黨の陣笠抔と來ては、金氣のある者は着いて離れぬのは常習だ、君の人氣がどうして惡るからう筈がないでないか。

▲一寸見た處では、性格が後藤内相に似て居る様だ、成る程何事も華々しくやる、豪傑氣取で世間を胡魔化す、青い思慮の淺い連中は、宛も一世の快男子の様に烟に捲かれて終ふ、此邊迄は後藤男に好く似て居るが、男の様に滑稽味がない、換言すれば無邪氣な處がない、腹の中では少しも油斷をして居ない、其代り男の様に尻を結ばぬ仕事はしないが、同時に却々喰えない處がある、煽動には乘るが、實は好く承知して乘つて居る、詰まり自己に都合の好い間は飽迄も乘つて居る、併し夫れが一度損と見切れば何時でも逃げ出す、男の様に損得判らずに驀進したり、煽動に乘つたりする様な、下手な活動家ではない、少なくともお先が見える方の悧巧者だ。

▲傲慢不遜で可なり敵を作つた人だ、其代り乾兒や家來になれば、其後却々物の判つた人になる、兎角豪傑になりたがつたり、威張りたがつたりする人には、斯様な癖は共通なものと見える、一昨年の選擧で、八百票の大懸隔を以て、横山君に土俵外に投げ出されたの

は要するに此傲岸の態度が齎らした應報だ、世間へのテレ隠しに、選擧干渉などゝ八釜敷觸廻つたが、夫れは郡部の事だ、金澤市のことではない、嘘と思はゞ政黨政派に無關係な、同地の選擧人に聞いて見るが好い、今度でも若し横山君に出られると、迚も勝目がなかつたのだ。

▲此選擧以來、人間は全く別人の様になつた、例の豪傑笑ひはするが、お世辭の好くなつた事は、寧ろ薄氣味の惡るい程だ、夫れに無暗に謙遜になつたので、口善惡なき某實業家は、矢張人間には苦勞させるものだと、ツクヾヽ感心して居た、併し何と云つても附燒刃は爭はれぬもの、時々地金が出るので笑ひ話が殘る、現に昨年末横山君と仲直りの筵に並んだ時、横山君は例の謹直な態度で神妙に控へて居る、一方君は持前の豪傑笑ひを連發したので、忽ち一座の反感を買ふ、果ては不誠意不謹愼だと、憤然座を起つた人も四五あつたといふ、君が近頃無暗に謙遜する様の、寧ろ態とらしくて可笑しいのは有名な話だが、或る人の皮肉評に曰く、「中橋は近頃法螺貝を逆さに吹くことを知つたヨ」少し酷評だが、成る程甘く云つたものだ。

二

▲一躍政友會總務の位置になれるかどうか、夫れは疑問だが、兎に角事實總務同様の勢力を有して居ることは確だ、殊に其人氣と來ては、將さに原總裁を凌駕するものがある、總裁の如何にも老人染みた態度、不徹底な言動、之れに對して平素不快でならんのは、舊自由黨張りの威勢好き連中、元氣滿々たる少壯議員だ、其處になると君は俗に齒切れが好い、夫れに街氣滿々だが元氣は確かにある、加ふるに滿身之れ野心と來て居るので、何事も俗受け專門に努力する、而して前記の如く札ビラを切ることも却々華美だ、俗に男が好い上に金持ちと來て居る、村の女小娘にヤンヤ云はれるのは當然の事だ。

▲之れは只ホンの人氣問題だが、吾人は更らに進んで、眞實政友會内に有力な勢力の中心人物になるべき未來あると思ふ、床次君は政友會に於て比較的眞面目

な考を持つた政治家である、處が原總裁の御都合主義全盛を極めて居る現在に於ては、同君頗る不遇の位置にあるのだ、君は近頃緣戚續きになつた關係もあり、旁々床次君と結ぶに違ひない、比較的世間の受け好き同君の人格、意見、加ふるに少壯有爲の政治家連は、必ず此派に同ずべき傾向を有して居る折柄、君は床次君を助けて、所謂政友會の肅淸を策するに相違ない、眞面目な意見を助けるに、相當の金力を持つてする床次、中橋兩君の結合は、近き將來に於て、必ず政友會に於ける有力强固な一派を作るであらう。

▲夫れに元田、大岡君等の先輩連も、決して原總裁には心から推服して居る譯でない、岡崎君抔は策の爲めに策を弄する人で、最早大正の御代の政治家でない、仕事さへ出來て巧く行く見込あれば、何處の誰れとでも聯合するが持ち前、屹度兩君と同一行動に出でるに間違ない、高橋君は冷熱度なく、三百六十五日同一溫度でやる人でない、山本君は却々思慮分別のある人物、何派に屬するとか、又急に突飛な行動に出る樣なことは斷じてないが、何れかと云へば理義に明るい、成るべく常道を踏み度い人だ、從つて心中は政友會の絕對的御都合主義に、聊か物足らぬ感あるに相違ない。

▲斯く觀じ來ると、原總裁の絕對的御都合主義に不滿足なるもの、又は不滿足ならぬ迄も、進んで此主義を擁護する熱心家は甚だ少ない、其他或ひは個人的關係の良好ならぬもの、總裁の周圍は、多く政界の札附者を以て作られ居るを苦々しく思ふもの、外に色々の行掛りから、此兩君を中心とした一派は、却々侮るべからざる勢力を作るに至るべきこと、蓋し間違なき政友會の未來記と云つて差支ない、無論其內に野田君の如き、絕對的御都合主義の有力者も出て來るだらうが、何を云ふにも少壯者の勢力漸次加はり來れる今日、此趨勢は必然起るべき潮の流に掉して居るも同然だ。

▲茲迄詮じ詰めて來ると、君は如何にも立派な見識あり確信あり又主義ある政治家の樣に聞えるが、吾人の云ふ處は左樣ではない、君は先づ政友會の中心人物たるべく床次君と結び、斯くて牢乎拔くべからざる一勢

力を作るといふ丈けのことで、床次君の様に飽迄眞面目に行き度い執着心乃至理想抔のある人とは思へない、相當堅い根據が出來、自然と勢力の中心人物となれば夫れで滿足、其後は云ふ迄もなく御都合主義結構政黨主義又不可なしで、結局は彼も一時是れも一時の圓轉滑脫、果ては床次君の眞面目な考も、何時の間にか不知不識角を磨られて、末には丸くなつて終ふに相違ない。

▲要するに君の政友會に於ける未來は、必ず强き一派の勢力を代表する中心人物になれる、或ひは中途金力缺乏して、夫れ迄に漕ぎつけ得ずに失脚するかも知れぬが、恐らくは左樣な後藤男流はやるまい、其點になると却々用意周到な人だから、定めし十分の見末をつけてやつて居ることゝ思ふ、其代り個人としての政治的力量、手腕、識見は、迚も山本君に及ぶまいと推測される、昨今政治界の人氣男たる君に對して、甚だ失禮な申分だが、人物は夫程大した物でないと思ふ、必ずや風袋で驚かす、鋸屑詰めの林檎箱然たる人物に相違なからう。



夏目漱石先生を弔す

夏目漱石先生は其宿痾たりし胃潰瘍の再發の爲めに、大正五年十二月九日を以て長逝せらる。先生は我國の英文學の泰斗として久しく學界に重きを爲せしが、一度「吾輩は猫である」の創作を公けにせられてより頓に文壇の視聽を聳かし、其後一作又一作、先生の創造力と、其開拓する特絕の詩境とは、作毎に其大と新とを加へ、人をして殆んど其限局を知るに苦ましめたり。假令其作風を好まざるものと雖も、推して以て現文壇の一大權威とするを否む能はざりしならん。況んや其崇拜者は、先生を以て文壇の第一人者となし、其作物の博大淸高にして他の多くの低卑猥小なる作物と其種類を異にすとなしたるが如き、又社會の上流階級の人士にして、先生の小說にあらざれば讀むべき小說無しと云ふ人の尠からざりしが如き、毫も怪むに足らざる也。

惟ふに先生の如きは將來永きに亙つて幾多の讚美と、幾多の評論と、又或は時として幾多の批難をも受けらるべき不朽の作家たるは論なし。然れども彼のメレヂコウスキイが、イブセンの批難者を冷笑して「如何にイブセンを惡口するも、イブセンの作品が、其等の惡口よりも永く讀まるべきは確かなり」といひしが如く、今後若し先生の作品を如何に低下して見んと欲するものあるも、先生の作品の不朽に傳はるを妨ぐるに於て何等の力なかるべきは之を斷言するに躊躇せざる也。今より約十年前本誌が諸家の「夏目漱石論」を蒐めたることあり。當時先生予に書を寄せて曰く、「漱石論も大分出でたり、もう澤山に候、願はくば百年の後に第二の漱石が出でゝ、第一の漱石を評して吳れゝばよいと思ふのみに候」と。以て先生の抱負の如何に大なりしかを見るべく、又先生が現代の紛々たる毀譽褒貶を度外視せられたるとを知るべき也。

先生はまた近來深く思を書と畫と詩の道に效され、其進歩の目覺ましかりしこと殆んど驚歎に値したり。天若し年を假さば恐らくは現代に於ける詩・書・畫三絕の域に達せらるゝこと遠きにあらざりしなるべし。先生も亦暗に之を以て更に一新藝術境を拓かるゝに意あるが如くなりしが、其實現を見ずして長逝せられたり。而かも尙其の詩・書・畫の脫俗にして、高雅なる、尋常の詩家及び臨池丹靑者流をして瞠目赧顏せしむるに足るものあり。以て先生の藝術的天分の益々饒かなりしを見るべき也。而かも先生や今や長逝して亡し。悲しい哉。玆にこの餘白を藉りて謹んで哀悼の意を表す。

瀧田哲太郎

評論

内外時論

獨帝の和議提案を批判す

法學博士 古川學人

舊臘十一日の號外は突如アムステルダム來電として、獨逸皇帝の講和提議を報道した。次いで到れる合同通信社發伯林無線電信に據る報道として傳ふる所によれば、講和の提議者は獨逸のみならず、共同盟國も亦之に參加して居るとの事だ。之に續いて來る處の十二月十三日頃の電報は、獨逸帝國の宰相が伯林駐在の中立國大公使を引見し、講和提議の覺書を附書して之を敵國諸政府に致さん事を依賴したとか、又久しく召集しなかつた帝國議會に不意の臨時召集を命じて、講和提議の報告をなし、特殊細目の條項に入らずして休會となつたとか報ぜられてゐる。

十六日の新聞には獨逸帝國宰相の各中立大使に交附した覺書、並に法王廳駐劄の公使をして羅馬法王に奉らしめた覺書なるものゝ大要を載せて居るのみならず、獨逸側の條件の大體をも載せて居る。此條件は何處まで信用すべきものか、今日の處容易に斷ずる事は出來ないが、確報の至るまで暫く之に依つて獨逸側の要求の範圍を調べて見ると、先づ第一西方戰場に於ては、佛蘭西占領地及び白耳義を全然還附するといふ。別報には白耳義に於てはアントワープを占領し、佛國に於ては北部に於て多少の經濟的利權を獲得する共いふ。第二には東方戰場に於ては露領占領地に於て波蘭及びルスアニア二王國を新設する。此波蘭國には墺領獨領の波蘭は加はらない。第三に巴爾幹方面に於ては

アドリアチック海に於ける伊太利の占領せる諸島は墺洪國に還附せしめ、ブルガリアには第二次巴爾幹戰爭に於て失へる地面を全部回復せしめ、セルビアは其ブルガリアに割くものを除き他は墺洪國に合併するといふ。モンテネグロについては何等言及されてゐないけれども、恐らくセルビアと運命を共にするものであらう。ルーマニアについても亦略ぼ同樣に考へてよからう。第四に土耳其については戰前の通りである。第五獨領の諸殖民地は之れ亦戰前の原狀に回復する。第六土耳其對岸の亞細亞地方に於ては、獨逸がメソポタミアの占領を要求するといふ。其外にも細かい事はあらうが大體此六ヶ條が示されて居る。然し斯の如き條件では到底講和談判の開始せらるべき見込はない事は云ふ迄もない。同じく十六日の新聞には、聯合國の對案なるものが、報道せられてゐるが、之に據れば佛蘭西、白耳義の原狀回復は固よりアルサス・ローレンの割讓を受け、東方戰場に於ては全部獨墺軍の撤退を求め、土耳其に於てはコンスタンチノープルとダーダネルス海峽とを露西亞に割讓せしめると云ふ。以上は初めより討論の問題たるべからざる既定の條件で、講和會議に於ては獨逸殖民地をどれ丈け聯合國に引渡すか、又獨逸の武力をどの點まで制限すべきかの二點を主として論ずるといふ。巴爾幹其他の方面について何等言明してゐないのは、無論戰前の狀態に引戻さうと云ふのであらう。聯合國が未だ獨逸に對する對案について相談を畢つたと見るべき時機に達してゐないから、之を以て正式なる聯合國の對案なるものは未だ出來てゐないだらう。新聞の傳ふる所は此點に於て甚だ不正確であるけれども、然し之に據つて世人が聯合國の意志をどの邊に見當をつけて居るかゞ略ぼ察せられる。

講和提議の形式、提案の條件內容等の詳報に接せざる今日に於て、之に關して輕々に揣摩臆測をなすは甚だ危險なる事業である。何れ詳報の接到を俟つて他日尙精確なる評論を試みるとして、今日は此問題に關する各種の問題並に各種の觀察を彙類して、本問題を考ふる上の參考に供するに止めよう。

獨逸が何故に今日急に講和を提議したかの原因についてはいろ〳〵の說がある。然し大體見方が二つに分れるやうだ。一つは大いに苦痛を感ずるの結果、和議を提案したと見るもので、他は寧ろ戰勝に得意の結果此說に出でたと見るものである。開戰以來獨逸は兎も角も大體に於て戰爭には勝つて居る。殊に最近のブカレストを占領する事によつて獨逸は益々其强さを示した。敵を投げつけて置いてサア和睦しようといふ態度に出づるのは必ずしも不合理ではない。然し此種の態度は投げつけられた敵が全く閉口して了つた時であれば極めて有効であるけれども、若し聯合國が今日決してこれ程困つて居ないものとすれば、獨逸の態度は敵方から見て少くとも生意氣に感ぜられる。けれども得意になつた結果和議を提出したと見られぬでもない。而して同じく得意の結果に出でたものとしても、それがブカレストの戰勝の結果突發的に考へついたと見るべきか、或は豫て和議を提出するの好機を覗つて居たのを、偶々ブカレストの戰勝によつて宿志を實行したと見るべきかの兩樣の見方がある。一體獨逸は今日まで講和に志のあつた事は屢々傳へられた事であつた。それとなく米國に賴んで居り、又は露西亞を誘うて單獨講和をなさうとしたるも一度や二度ではない。之れまでに終に成功しなかつたので其後更に機會を覗つて居つたのが、今度巴爾幹の戰勝の結果、好機到れりと見たものかも知れない。或は又豫て屢々計畫した露獨單獨の講和の見込が大いについたので、其爲めに急に講和する氣になつたとも考へられぬではない。此觀察は餘り新聞等に現はれないけれども、露西亞の上流社會に親獨派の少からざる事、露西亞がルーマニアを援助するに十分なる力を注がなかつた事、又最近露西亞の海外に對する軍需品の註文が著るしく減じて居る事等の事實によつて、獨逸は遂に露西亞と單獨講和するの策に成功したと想像せられぬでもない。尤も露が單獨講和するの意ありと見れば英が之を默つて居る譯はない。英吉利が此事を重大視すれば必ず日本をして露の背後を衝いて之を牽制せしむべきが故に、露・獨講和說

の影響は何を措いても最先に日本に來る。故に此單獨講和の說は十四五日頃の新聞に、在外某支那公使の報告として載つて居たけれども恐らく事實を得て居るものではあるまい。次に獨逸の講和提案が、段々苦痛を感じて來た結果だとしても、苦痛ながらも戰勝の機會を捉へて講和を提案したのやら、苦痛の結果早く講和の機會を作る爲め、急いでルーマニアを强襲したのか分らない。何にしても獨逸は昨今人員に不足し食料物資に不足してゐる事は疑ない。一說に據れば獨逸は最早や財政の遣り繰がつかなくなつたとも云ふ。最近の公債募集が殆んど全然失敗に歸したのを見ても、此說或は本當かも知れない。去年八九月頃の外國新聞に據れば、獨逸の有名なる財政家は揃つて獨逸皇帝に向ひ此戰爭が此冬を超すやうでは到底財政の遣り繰りが着かないと訴へた、此際帝は十月頃までは何とかするといつたさうで、此報が圖らずそれとなく他國に傳つた結果、一部の人は十月十一月の交を以て何等か重大の變動の起るべきを期待して居つたらしい。此等の說を眞なりとせば、獨逸をして此際講和を提議せねばならぬ程窮境に陷れたのは、或は財政家連の訴へであるかも分らぬ。

次に獨逸が講和の提案をなした魂膽に立ち入つて、又種々の說明を試むるものがある。獨逸が今或人のいふが如く得意の狀態にあつても、又他の人のいふが如く內々苦痛の狀態にあつても、兎に角前記の如きそれ相應の理由あつて和議を提案したといふならば、兎に角眞面目に講和するといふ考に出でたもので、他に特別の魂膽があると見るべきものでなからう。然しながら獨逸に眞面目に講和すると云ふ考があつても、相手の聯合國が又之を眞面目に受ける丈けに機運が熟してゐなければ、之を以て眞面目なる提案といふ事は出來ない。而して今日聯合國の狀態から云へば獨逸が勝利者として臨む以上到底和議の成立つべき見込はない。獨逸自ら大いに讓步するの考なき以上、今日聯合國を相手に光榮ある和議の成立を見得ると考ふる筈はない。然らば獨逸は眞面目に和議を提出したものでない

と見るべきものなりやといふ問題が起る。斯くして所謂獨逸の魂膽を說くの說あるが、第一に之を內政上の理由に出づるといふ說がある。即ち獨逸の內部に於ては少くとも下層社會には戰爭に倦んで密かに和を欲するの考がある。下層社會でなくても、經濟界には和を欲するの念盛んなる事、先にも說いた通りである。而して中にはかく戰爭を繼續するのは皇帝の殊に戰亂繼續を欲するが故なりといふ風に考へて居るものもあらう。そこで苛酷なる條件を以て一度和議を提案すれば、聯合國の之を容れざるや戰爭の繼續は寧ろ敵方の決心の堅きにありと說いて敵愾心を鼓舞し、且つ國民をして明白に今日尙未だ講和の時機にあらざるを示して民心の統一を計る事が出來る。巴爾幹に勝ち、次いで轉じて伊太利を一蹴し、更に奮躍一番して東西兩本戰場に大々的勝利を占むる爲めには、此際尙一層國民の奮發に俟たねばならぬ。人員物質共に缺乏に近きつつある此際、此奮發を國民に求むるは容易の事ではない。爲めに此和議提出といふ苦肉の計に出でたと見るのである。之も一つの見方であるが、然し若し人民の戰爭に倦むの精神が案外に強ければ、和議の提案の爲めに人心俄かに弛廢し、却て意外の結果を生じないにも限らない。此說と關聯して獨逸は之より更に殘酷辛辣なる手段に出でゝ、最後の勝利を得るに驀進し、甚だしきは爲めに中立國の利害を傷くるも更に省みざらんとするのであるが、それには戰爭繼續を相手方に轉嫁して置くのが必要である。之が爲めに出來ない相談を持掛けて、所謂和議の提案をしたといふ說がある。之は少し穿ち過ぎて居るやうだ。終りに之は敵國の眞意を探る爲めの偵察行爲であるといふ見方もある。之に對する相手方政府の返事如何によつて敵方は果して何處まで我と戰ふ積であるかゞ解り、又此提案に對する敵國民間の輿論の傾向によつて敵國臣民はどれ丈け戰に倦んで居るや、どれ丈け和を欲して居るやの見當もつく。今日の策戰計畫を定むる上に大いに必要であるといふところから此說は出でたと見るのである。之も一說であるが、然し此說にしても前の內政上の理由

に出づるといふ說にしても、今頃斯んな說に出づる所以のものは、要するに獨逸自身が其疲弊を自覺した結果であると云はなくてはなるまい。獨逸自身が何等の疲弊を感じて居ないものなら、何を苦んでわざ〳〵斯くの如き處置に出ずる必要があらうか。

第三に和議の提案によつて獨逸自身に、又聯合國に及ぼす實際の結果如何といふ問題もある。獨逸が此處置に出でた魂膽は何れであれ、其實際に生ずる結果は必ずしも其魂膽と一致するを要しない。そこで果して如何なる結果を實際に生ずるかといふ問題は特別に之を考ふることを必要とするのである。先づ聯合國に及ぼす結果如何の問題については全く正反對の二つの見方がある。一つは聯合國間の足並を紊し爲めに單獨講和を爲すものを生ずるの虞があると見る說と、獨逸國の疲弊を看破して益々戰意を强めるだらうと見る說と此二つである。前者は聯合國側の人民も亦大いに戰爭に倦み、若し獨逸に相當の條件を以て和を講ずるの意があるならば、何時でも同盟關係を脫して單獨講和說に馳せ參ずるとの見解に立つものである。英・佛・露の人心は果して此種の論者の考ふるが如きものであらうか否やは今日確かに一大疑問である。露國の人心今度の戰爭ほど對獨敵愾心に一致したことはないとか、佛國の人心も上下悉く今度の戰爭に熱心して居るとか、英國でも此春以來漸く勞働者が戰爭に自覺して來たとかいふ事實を幾分眞理ありとすれば、何うしても前記の第二の見方に從つて聯合國は益々戰意を熾ならしむるものと言はなければならない。次に獨逸自國に及ぼす結果如何といふに、之にも反對の見方が二つある。一つは之によつて人心を結束し得べしといふ考と、一つは倦怠せる人心に更に冷水を注ぐだらうといふ說と之れである。此兩見解は果して何れが眞理を含むだらうか。獨逸政府が獨逸に都合のいゝ報道のみを公布して民間を釣つて居つたから、今日まで勝つたものと安心して居つたのに突然講和提案の報に接して人心非常に激動し、十一日の臨時議會の際は議場の內外に於ける一般人心は大いに動搖したとあるから、恐らく之によつて

生ずる最も著しき結果は人心の動搖といふことゝであるまいかと思はるゝ。何れにしても餘りいゝ結果を生じないと見るのが正當だらうと考へられるのである。

第四に此提案に對して聯合國は果して如何なる態度を取るだらうか。之についても亦いろ／＼の説がある。或人は絶對に拒絶するだらうといふ。又或人は對案の提出を見るだらうといふ。何れの形式を取るか解らないが、兎に角其儘獨逸の要求を容れず、結局再び元の通りに歸るであらうかと考へらるゝ。從つて此儘では講和談判開始の運びには至らないだらう。

予の考ふるところによれば、今度の戰爭の講和談判は一方が他の一方を相當に屈服した曉でなければ、直接當事者間に解決のつぐべき道はない。若し兩方十分に取り疲れて勝敗の數未だ何れとも極らざるに和を講ずるとありとすれば、必ず羅馬法王と米國大統領の出馬を必要とすると考ふる。之れ予輩の從來いろ／＼の機會に於て說いたところである。それは自ら戰爭に參加して多少の物質的利益の分配に與るよりも、此大亂の終焉を告げしめたといふ平和的大事業を成就するといふことは獨りウイルソン大統領の理想たるのみならず又米國識者階級の建國以來の志望であり、又野心である。新たに擧げられて今後四年の施政を司るウイルソンは、必ずや此理想に向つて最善の努力を爲すであらう。若し夫れ羅馬法王に至つては前法王の餘りに宗敎的にして外交上絶えず名聲を失墜した後に出で、歐洲外交界に羅馬法王の名譽を恢復するといふ希望に乘じて擧げられた法王である。現法王の選ばれたのは一昨年の九月初旬で、彼は必ずや自分の手で此戰局を收拾して遣らうといふ希望は十分にある。故に羅馬法王と米國大統領とは本來其地位に於て、今次戰爭の調停者として最も適任の人であるけれども、輕卒に手を出しては味噌をつける怖あるが故に容易に手を出すものではない。一歩を讓つて今度講和會議が開かれても、會議の席上彼我の見解は餘りに隔絶して容易に一致點を發見し得ずして、講和會議が永く其問題の討論に日を暮らして居ることが、又果して何方の爲めになるかと言へ

ば、之れ恐らく獨逸の有利には發展し兼ねるだらう。予の觀るところによれば和議の提案によつて之れまで張りつめた氣力の俄に減退するのは寧ろ獨逸である。而かも講和會議に於て最も重きをなすべき外國の同情は、從來獨逸の横暴の結果、恐らく大部分聯合國側に向くべきを以てゞある。之を要するに今度の和議の提案は如何なる原因、如何なる魂膽でなされたるにせよ、何れかと言へば獨逸側の有利に發展しさうにない。

蘇峯先生の「大正の青年と帝國の前途」を讀む

所謂文壇に復活したる蘇峯先生は「時務一家言」に引續いて「世界の變局」及び「大正政局史論」を出し、更に去年の夏より筆硯を新たにして「大正の青年と帝國の前途」なる一篇を公にした。始め新聞に掲載されて居つた節には、どれ丈け世間の耳目を惹いたか知らないが、十一月の初め一部の纒まつた著書として公にさるゝや、非常の評判を以て全國の讀書界に迎へられ、瞬く間に數十萬部を賣り盡したと「國民新聞」は云つて居る。蘇峯先生の盛名と「國民新聞」の廣告とを以て、驚くべき多數の讀者を得たといふ事は固より怪しむに足らぬけれども、而かも旬日ならずして賣行萬を數ふるといふのは、兎にも角にも近來稀なるレコードである。是れ丈け澤山の人に讀まれたといふ事、其事自身が既に吾人をして之を問題たらしめる値打がある。況んや蘇峯先生の名は反動思想の些か頭を擡げんとしつゝある今日に於て又少からず社會の注目を惹くべきに於てをや。

斯くの如くして予も亦直ちに一本を求めて、閑を偸んで之を熟讀せんとした。恰もよし「中央公論」社に於ても亦本事件を以て最近の思想界に於ける重大問題となし、本書を詳評せんとするの擧あるを聞き、乃ち敢て自ら其任に當るべきを求めたのであつた。然し此約束をした時にはまだ緒言を讀んだ位で内容の調査に

はかゝつてゐなかつた。而して緒言に於て述ぶる所の堂々たる宣言は、著者自ら本書を以て一生の大傑作否な大正年間に於ける不朽の名著と自認するの抱負ありありと見ゆるが故に、予も亦就いて學ぶべきもの頗る多かるべきを期待してをつた。而していよ／＼閑を得て内容を讀み進むに從つて、予は自ら豫期の如き共鳴を感ぜず、豫期の如き興味をすら感ぜざるに驚いた。固より必ずしも學ぶ所少しといふのではない。著者一流の名文には何時もながら敬服する許りである。内容にそれ程に興味を感ぜざる我輩をして、兎も角も一氣に讀了。半ばにして卷を措かしめなかつたのは、第一には著者の文章の力である。議論の筋にも大體に於て同感である。殊に其今日の青年の遠大の志望なく、意氣の振はざるを慨するの誠意に向つては、全然同感の意を表せざるを得ない。けれども全體を讀んでどれ丈けの共鳴を感じたかを省る時に。予は不幸にして「國民新聞」の廣告が期待して居るが如き感動を與へられない事を自白せざるを得ない。本書を讀んで得たる予の感情を卒直に云ふ事を許すならば、面白いには面白いが、反對する程の事もなし、贊成する程の事もなし、殆んど我々の現在の思想には關係のない、丸で違つた社會の產物に接するが如き感がある。よかれあしかれ、折角批評しようとしても興が湧かないので、自ら讀者に背いて當初の約束を撤回するの外はない。

尤も此書を明治の初年より大正の初めに至る青年の思想の變遷史として見れば非常に面白い。第二章以下第八章に至る約四百頁、即ち本書の三分の二は、此史的記述に捧げられたものであつて、中に固より著者の考も多く說かれてあるけれども、大體に於て事實の記述である。第九章の英・獨・米・露の說明も亦有益なる記述である。第一章と第十章とは相照應するもので、大正時代の記述であるが、著者の大正の青年に關する觀察も大正時代に關する觀察も大體に於て我々に教ゆる所少くない。斯う云つて見れば全部悉く我々の讀んで益を得るもの多い譯であるが、然し著者の期するが如き、今日の青年を啓導して新日本の眞個忠良なる臣

民たらしむるの經典たるを得るや否やは大に疑なきを得ない。何故かの説明は予輩にも十分に分らない。唯何となく斯く感ずる。何故かく感ずるかを實はいろいろ自分で考へて見た。十分なる答案はまだ得てゐないが、事によつたら老年の人に多く見る、所謂現代の社會並びに現代の青年に關する適當なる理解の缺如といふ事が其主なる原因をなして居るのではあるまいか。

蘇峯先生に限つた事ではない、明治以前の教育に育つた多くの尊敬すべき我々の先輩は、動もすれば今日の青年に忠君愛國の念が薄らぎつゝあると云ふ。又國家について遠大なる志望が缺けて居ると云ふ。又は國家の强盛に直接の關係ある問題――例へば軍備問題の如き――に興味を感ずる事極めて薄いと云ふ。之は如何にも其通りで、此等の批難は今日の多數の青年に當篏る。故に我々は今日の青年に忠君愛國の念を皷吹し、其志望を遠大ならしむべきを勸め、殊に軍備上の義務の如きは之を光榮ある義務として尊重し、且つ進んで之に當らしめんとする先輩の苦衷を諒とする。此等の點を盛んに皷吹し主張し論明するのは、今日の青年を啓導する一つの手段には相違ない。然しながら問題は然う云ふ事を説いて果して啓導の目的が達せらるゝか否かといふにある。少くとも彌次馬が運動會でチャンピオンを後援するが如く、無責任にヤレ〳〵と騷ぐといふ事が適當な方法かどうか。少くとも最良の方法かどうかと云ふ事は問題である。今日の時代は明治初年の時代ではない。況んや明治以前の時代では斷じてない。遠大の志望を持ての、國家的理想を體認して志を立てろのと抽象的の議論を吹かけてそれで青年が振ひ起つた時代もあれば、そんな事を聞いて之を鼻であしらう時代もある。斯う云ふ重大な問題を鼻であしらふのが即ち今日の青年の墮落であるといへばそれ迄であるけれども、兎に角時代の相違は之を認めなければならない。此時代の相違を認識することなくして、昔流の皷しかけ方針では今日の青年は恐らく斷じて動くまい。

今日の警察の規則では道路に放尿すべからずと戒め

て居る。而して此廣い東京の市中に便所らしい辻便所は殆んどないといつてもよい。而かも日進月歩の教育は、吾人に教ゆるに極端に我慢をすると膀胱が破裂する危險があることを以てする。而して先輩は偶々此警察禁令を犯すもののあるを見て、今日の青年には忍耐力がない。我々の若い時は三日も四日も小便を堪へたやうな事を云ふ。彼等の青年時代には路傍の放尿は法の禁ずる所ではなかつた。今日衛生上の考から之を以て法禁とする以上、彼等先輩は先づ澤山の辻便所を作る事に骨を折らねばならない。時代の變遷に應ずる各般の施設を怠つて普通りの激勵鞭撻を加ふるのみでは、更に最新の教育によつて自我の意識の段々に發達して居る今日の青年は承知しない。先輩諸君の常に敬服して居る獨逸などでは二三丁置きに、中で辨當を開いて喰べてもよい程の立派の辻便所を拵へ、而かも尙特に夜間に限り、車道に向つて放尿するものは之を大目に見るといふ習慣がある。之れ丈けの念の入つた手續を盡した上で、初めて放尿の禁を說くべきである。斯くても其禁を犯すものあれば、其自制力の乏しきを罵るべきである。我國に果して之れ丈けの設備があるか。設備なくして法の勵行の苛察に亙るの甚だしきは、夜場末の暗がりで止むを得ず放尿しても嚴しく法に問はるゝもの少からざるを見ても分る。

遠大の志望を抱けとか、國家的奉公の念を熾んにせよとかいふ議論の一面は、兎も角も國民に向つて多大の犧牲を要求するの聲である。今日の教育は殊に實用的科學を重んじて、先輩初め宗教道德を蔑視する今日の教育は、常に其子弟をして個人的ならしめざるを得ざるが故に、先輩の要求と彼等青年に與ふる教育とは確かに其効果に於て一致しない。教育の結果東の方に奔らしめて置きながら、西の方に行かないのが悪いと力瘤を入れて說いても、それがどれ丈けの藥になるか、且又社會の制度の立て方によつては、人々をして甘んじて犧牲を拂はしめ得る場合と、容易に犧牲を拂はしめ得ざる場合とある。此二つの場合の分るゝ最も主要なるものは國民銘々の生活の保障の有無であら

う。例へば明治以前の封建時代に於ては、家に定れる封祿あり、自分一身を犧牲に供する事は概して妻子眷族の生活の道を絶つ所以にあらざるのみならず、場合によつては家門の譽、子孫繁榮の基となることもある。固より此考を意識して國家の爲めに命を捨てるといふのではない、時代の背景が自ら當時の役者をして、一死を鴻毛の輕きに比せしめ得たのである。斯う云ふ時代には遠大の志望を持ての、國家の爲めに奉公しろのと云へば、國民が直ぐ共鳴に感應して何等之を妨ぐる個人的社會的の煩累を感じない。我國の忠君愛國の念の强かつたのは單に之のみによるのではないけれども、確かに數年來封建的太平の時代を經過したといふ事が時勢の一變した今日まで其餘德を流して、我々に犧牲奉公の念を傳へて居るのである。然しながら今日は時代が全く一變して居る。見よ我々に何の生活上の保障があるか。今日の時代は貧富の懸隔を甚しからしめて、中等階級の立脚地を段々に攪亂して居る。大多數の人は一定の家產をすら持つて居ない。妻子眷族の生活は繫つて家長一人の生命にある。それも昔のやうに數十百年來住み馴れた故鄕に定住して居るのなら親族故舊の厄介になるといふ見込もあるけれども、北海道のものが九州のものを娶つて滿洲で奉職をして居るといふやうな今日の時代では、親族といふも名ばかりで何等精神的の親みがないから、亭主が死んだからとて、妻君が其子供を引連れて亭主の親族故舊に賴りやうがない、斯う云ふ時代には如何に犧牲奉公の德を高唱しても、顧みて妻子眷族の窮を思ふ時に、果して其決心が鈍る所なきを得やうか。否な今日の世の中は妻子眷族は扨ておき、自分一人の生活にすら追はれて居るものが多い。斯くて今日の青年が生命も惜しい、金も欲しいと云ふのを、無理と見る事が出來やうか。

勿論時勢が時勢だから放任して可いと云ふのではない。一方に於て犧牲奉公の精神の我々の國家的生活の發展に缺くべからざる所以を力說すると共に、他方時代の變に應ずる獨特の施設を講ずるの必要があらう。之れ西洋の先進國に社會政策的施設の最も盛んなる所

以である。而して我國の先輩は或は國家的設備の形式的整頓完成に誇るものはあらう。然しながら社會政策的施設によつて國民の生活を幸福にならしめた點に誇り得るものは果して幾人あるか。滔々たる政治家皆之れ便所を造らずして西洋の眞似をして放尿すべからずと云ふ衞生警察の規則を拵へたもの許りではないか。

さればと言つて予輩は憂國の先輩が、今日の青年の志氣の頽廢を慨嘆するのを不快に思ふといふのではない。只今日の青年は之れでは動かない。中には或點まで事實の眞相を徹底的に見て居る者もあるから、もつと立入つた説明でなければ滿足しないものもある。故に從來の先輩の慷慨論は同じ時代の教育を受けた老人達や、又は新らしい教育の風に觸るゝことの少き地方農家の若い衆には、多少の同感を得るかも知れないけれども、國家の最も有力なる多少の見識を有する青年には何等の反應を見ないのである。地方の青年でも此頃は段々に開けて居つて、よし彼等に獨立の批評眼がないにしても彼等の境遇――時代の壓迫に苦んで居る――は自ら彼等をして物を正視するの傾向を持たしめねば已まない。一應先輩の説に感憤しても後から誰かが行つて事物の眞に徹する説明をすれば、彼等の頭は直ぐ變化するに極つて居る。之れ我々が時々地方に遊説して著しく感ずるところの現象である。

先輩の所説が只現代青年の警告鞭撻に止つて居る間はまだいゝ。然しながら彼等は原因を究めずして青年の思想を變轉するに焦るの餘り、彼等の思想の宣傳に不便なる總てのものを排斥せんとするに至つては、却つて青年の反抗を挑發して意外の結果を生ずるに至るやうである。例へば今日の青年の志氣の振はざるは、西洋思想若くは西洋文學の結果なりとして、はては西洋の文物に眼を蔽はんことを要求するが如き態度に出づる。西洋の文學の中には餘りに個人的な、餘りに非國家的な分子もあらう。然し適當に之れを理解して居るものから見れば、此等は恐らく大して青年を誤る種にはならぬだらう。若し斯くの如き文學の流行するが故に青年の志氣頽廢するといふならば、火元の西洋で

は夙うの昔に亡國となつて居なければならぬ筈だ。青年の志氣頽廢の原因は必ずや外にある。其本當の源を正さゞるが故に、此等の文學が特に青年を累するのであらう。若し源をさへ正せば思想の上に多少危險なものでも尚又文學として之を鑑賞するに何んの妨を見ないのである。然るに肝腎の源を抛擲して罪を文學に歸するが故に、文學の士などは却つて餘計に反抗して益益非國家的態度に出づるの現象を呈する。又も一つ押し詰めて云へば、今日の青年は成程先輩の眼から見れば犧牲的奉公の念が薄らいで居るかも知れない。少くとも彼等と同じやうな意味、同じやうな形式に於て忠君愛國を唱へないかも知れない。然しながら眞に國家社會の文運の進歩の爲めに盡して居る努力其物の總量は、果して先輩諸公の青年たりし時に比して遜色あるか何うか。先輩諸公の青年たりし時が獨り志氣旺盛にして、今日の青年が全然言ふに足らざる頽廢の淵に沈んで居るものであるなら、日本が今の如き地位を維持して居らるゝ筈がない。我々は固より現狀に滿足するものではない。西洋諸國の進歩發展の莫大なるに比較し、我國の前途は尚容易に樂觀すべからざるものあるを思ふけれども、又明治年間の發達の跡を見て、少くとも抽象的に現代の青年に失望悲觀しない。時代の變に應じて各種の改良施設を社會的背景に加へ、其上に現代の青年を活動せしむるならば、必ずや先輩諸公の憂ふるところは大いに減ずるだらうと思ふ。現代の青年を鞭韃警告するは固より必要である。けれどもそれよりも必要なるは現代青年の活動を妨ぐる總ての社會的原因を除くことである。而して之れ實に先輩諸公の責任である。而して先輩は常に青年を責むるに酷にして、自家の保守的思想の滿足の爲めに社會的改革の斷行を欲しない。少くとも之れを第二次に置くが故に、折角の親切な先輩の忠告にも、青年は動もすれば反感を感ずる。例へば學制問題に見よ。猫も杓子も帝國大學の門に集つて高等遊民が出て困ると言ふ。然しながら社會の制度並びに慣行は帝大出身者に多大の特權を與へ、私學を壓迫して殆んど之れに帝大と同等の機會

を與へず、帝大出身者にあらざれば青年の志を滿足する地位にありつけないやうにして居るではないか。更に之を軍制に見よ。兵隊の義務は國民として苟も光榮ある義務なりと稱へながら、上流社會は公然兵役を免れ(上流社會が兵役を免れ得るやうに制度が出來て居る)偶々止むを得ずして兵役につけらるれば爲めに著しく學業が妨げられ、甚しければ職ある者も之を失ふといふことになつて居る。此等は先輩が二三決心をすれば一擧にして除去し得る事柄である。之を除去し各般の社會的制度慣行が、青年の活動を少くとも之に伴ふやうにすれば、初めて以て青年に犧牲奉公を説くことが出來るのである。今日の青年は今や正に時代の變と社會の缺陷を意識し、之を先輩に訴へ、或は自ら之が爲めに努力し以て青年全體の活動を滑かならしめんと志しつゝある。斯くせざれば國家の前途亦甚だ危いと憂ひて居る。徒らに青年の志氣の頹廢を説くの説に對しては、時代を解せざる老翁の繰言の如く、其誠意を諒として密かに其老を笑ふといふやうな風になつて居る。現代の青年は蘇峰先生の警告に接し或は此風の説明に多少の不足を感ずるのではあるまいか。

時事小言三則

◎議會の開會目睫の間に迫る　兩黨の首領未だ地方の政戰より歸らずして、中央の政界甚だ寂寞として居る。政界に於て世間の注目を惹いて居るのは、石川縣の改選位のものであらうが、之とても大勢は已に定まつて居るやうだ。兩黨の勢力相半ばして居るといふのなら、其勝敗はやがて來るべき政戰に於ける兩派の消長に關するから、餘程興味を以て見るべきものであらうけれども、然し石川縣の改選は之れ丈けの意味もない。政府も超然内閣として主義の上に盛んな攻擊を諸方から受けて居りながら、未だ大して攻擊の種も造つて居ないやうだ。中について稍々問題を出して居るのと例によつて後藤内相位に止るが、機を見るに敏なる

男は、自治團問題を仕舞込み、選擧法改正の委員連を丸め、僅かに支那問題について物議を釀さんとして尚未だ問題になつて居ない。內政上の波瀾は議會開會を見るまでは恐らく此儘平凡なる狀態を續くるのであらう。イザ開會となつた曉に憲政會が何處まで反對の鋒先をとぐか、政府が何處まで之を反擊するか、其間に於ける政友會の態度は大抵見當がつくとして、國民黨は果して如何なる態度に出づるか、政爭の極遂に議會の解散を見るか、是等の重大問題を判斷すべく中央今日の政界は餘りに沈靜である。

●張繼君來る　彼が北京に於て南方派の結束を堅くする爲めに、更に上海に奔つて岑春煊を說き、岑によつて北京にある其部下の浮足を落附かせる爲めに一刻も支那を離るべからざる重大の身を以て突如日本に來たについては、名は病氣靜養と稱すと雖も、何等か重大の政治的使命を齎らすものなることは言ふを俟たない。果して然らば彼は恰かも佛蘭西に赴いたフランクリンの如く、堂々名乘りを揚げて日本國民に其衷情を開くべきである。對支外交の運用について、今や日本國民は大いに覺醒して居る。今後の方針は政府獨り之を決するのではない。民間の輿論大いに動いて居る以上政府は自ら之を聽かざるを得ずして、對支外交は之よりいよ／＼國民外交たらんとして居る。而かも我國民の多數は張繼君の代表する南方革命派に向つて最も大いなる同情を傾けて居るものである。然るに何事ぞ、彼は來朝以來名を秘し、居處を秘し、恰かも清朝時代の亡命客の如く其跡を國民の前に韜晦して、密かに二三者によつて其志望を遂げんとして居る。何ぞ其大局を動かすの策に拙なるや。彼程の人物に日本今日の輿論の解らぬ筈はない。彼の周圍にあるもの彼を誤るか。抑々亦彼に何の見るところあるか。予輩は彼が聲なくして來り、又音なくして去るのでは啻に我國民の上に何等の印象を殘さざるのみならず、彼の來朝の目的をも全うし得ずして歸ることになるまいか。兎に角支那特使派遣の風說あるに際して、彼の突如飄然として來朝せるは事の結果如何に拘らず、吾人の注目を

要するところである。

◎排日問題再燃の報又米國より來る。桑港博覽會の騷ぎによつて一時中絶した此問題はお祭騷ぎのホトボリの冷むると共に再燃するのは止むを得ないと言へば言へる。思ふに亞米利加に於ける排日問題は根柢頗る深きものあり、決して一朝一夕の談ではない。國民の從來之に對する餘りに一時的にして又餘りに姑息的にして未だ曾て毫も其眞底に觸れて居ない。米國近來の移民論を見るに、彼の外國移民に對する態度の變化は必ずしも日本人に對してのみ變つて居るのではない。然しながら特に日本の移民を虐待する點に於て、我々は固より其區別的待遇の不都合を詰るべきであるけれども而かも亦彼が特に日本人を排斥せんとするの根本動機につき精密なる講究を遂げ、其道理あるは之を容れ、其理に悖るものは之を責め、以て公平なる解決を彼に迫るにあらずんば、單純な人道論や若くは戰爭論の威嚇位では到底解決のつくべき問題ではない。我國の此問題を論ずるもの動もすれば空論に奔つて精密なる根本的研究の基礎を缺く。今や排日問題の再燃せんとするに際して、我々は玆に特に國民の反省を求め置くの必要を認める。

新刊批評と紹介

▽放浪漫記　大谷光瑞著　民友社發行

其天下を小とするの英雄的經綸と、其專門文士をして顏色無からしむる底の瀟洒たる詩情と、其科學者を驚かす程の精細なる研究と、此三者を併せ得て、初めて此不朽の名著出づ。一代の人傑たる著者が一個の自由なる大谷光瑞として數十年蘊蓄せる學・才・識の自然に迸出するに任かせたる壯觀偉觀、讀者をして漫ろに魂飛び跳躍るの快感に堪へざらしむ。天下稀有の名著として切に江湖に推薦す。（定價金三圓）

▽訂正増補政治汎論（上下）　高田早苗譯　早大出版部發行

過般の選擧に再び大統領の榮冠を贏ち得たるウイルソン氏の名著を飜譯せるもの。精確なる記實を根抵とし之に周匝なる省察と明快なる論斷を加へ政治學の全般に亙つて學理及び實際を說けるもの。新たに大山郁夫氏が訂正増補の任に膺れるだけ在りて舊譯とは殆んど其面目を異にせる觀あり。江湖に三讀を勸む。（定價各册二圓三十錢）

▽人間的な餘りに人間的な（上）　生田長江譯　新潮社發行

有名なるニイチエの作を彼の熱心なる研究者として　評ある生田氏がニイチエ全集の第一編として譯出せるもの。思想界讀書界の風潮漸くかゝる眞面目なる讀物を歡迎せんとする今日、本書の出版は實に時機に應ぜるものと云ふべし。此上は全集の圓滿なる譯了に益々努力せん事を譯者に切望す。（定價一圓六十錢）

▽新獨逸　　尾原亮太郎著　同文館發行

歐洲の動亂の突發以來獨逸に關する書籍の市に出ずること汗牛充棟も啻ならずと雖も、本書の如く所謂新獨逸を組織的包括的にして而かも根本的に究明せしものなし。獨逸を研究せんとするものは必讀せざるべからず。（定價貳圓）

▽豪傑快傑　　田中貢太郎著　日東堂發行

田中氏の文章は未だ大いに世に認められざれども、其の華を去つて實につき、誇張を避けて堅實を撰び、絢爛を捨てゝ平淡を採る所、又仲々得易すからざる文壇・珍品と謂ふべし。（定價壹圓二十錢）

▽先驅者　　谷崎精二譯　早大出版部發行

有名なるメレヂコウスキイの三部作の一なり。近代文明の先覺レオナルド、ダ、ヴインチの生涯を緯とし、文藝復興期の伊太利人の社會的宗教的生活を描いて、人間生活の永遠の疑問たる希臘的思想と基督教的思想即ち肉と靈との對立、爭鬪を描いて彼一流の解釋を下せるもの。譯文又流麗にして些の澁滯を見ず。（定價壹圓四十錢）

▽快心錄　　横山健堂著　日東堂發行

奇警の觀察をやるに流暢運筆なる筆致を以て、人物を評し情景を描き花を語り月を談ず。諧謔あり、諷刺あり、春永の一日、炬燵の中にて讀むには最も應はしき書也。（定價壹圓貳拾錢）

▽帝國南進策　　副島八十六著　民友社發行

我日本の天職は東洋の盟主たるにありとし、其理想を實現するには、十分なる兵力を支持する十分なる富源を得ざるべからずと說き、其富源を印度南洋の貿易に求め、之に關する我商工業の根本政策に就て頗る周到に論述せるもの。（定價壹圓）

▽作文講話及文範　▽書翰文講話及文範　　芳賀、杉谷合編　富山房發行

兩書共に編を分つて講話、文範、便覽の三とし、單に純文學界を目的として美文のみを說かず、廣く敎育界及び一般社會に實用なる各種の普通文書翰文を詳說して其文範を掲げたり。（定價前者壹圓六拾錢　後者壹圓九拾錢）

▽現代の歷史を造る人々　　鵜崎鷺城著　實業の日本社發行

何時もながら時局の人問題の人を躱し來つて、之を縱橫無盡、肉を截ち骨を削つて料理し去る氏の庖丁の利れ味には敬服せざるを得ず。俎上に躍る巨口細鱗にはウイルソンありロイド、ジヨルヂあり段祺瑞あれば觀樹將軍ありて只管世人の賞玩を待ちつゝあり。（定價九拾錢）

△貯金の秘訣　（定價五拾錢）　安田操一著　東亞堂發行

△日米問題・　（定價七拾錢）　栗原基次譯　警醒社發行

△三坪の養雞（定價六拾錢）今村猛雄著 東京堂發行

△ロスメルスホルム（定價壹圓）士行、民藏共譯 早大出版部發行

△禪學入門（定價七拾錢）秋野孝道著 東亞堂發行

△ショウペンハウエルの哲學（定價壹圓八拾錢）任矢野晃雄著 東亞堂發行

△ドコまでも（定價壹圓）野依秀一著 實業の世界社發行

△奈良と京都（定價六拾錢）黒田鵬心著 趣味之友社發行

△人及女として（定價壹圓）與謝野晶子著 天弦堂發行

△趣味の日本史（上）（定價貳圓八拾錢）新保磐次著 金港堂發行

△宗教教育原論（定價貳圓參拾錢）谷本富著 國書株式會社發行

△湷湫論集（定價貳圓八拾錢）鵜澤聰明著 春秋社發行

△舞扇（定價九拾錢）長田幹彥著 春陽堂發行

△合歡の花（定價九拾五錢）田山花袋著 春陽堂發行

△地上聖語（定價九拾錢）吉田常夏著 四方堂發行

△名家傑作集（各冊五拾錢）春陽堂發行
照葉狂言（泉鏡花）。水彩畫家（島崎藤村）。紅露白露（幸田露伴）

△現代萬葉集（定價四拾五錢）小林愛雄著 愛音會發行

△半生の懺悔（定價七拾錢）茅原華山著 實業之日本社發行

△作文五十講（定價壹圓）大町桂月著 中外社發行

△評釋徒然草（定價壹圓參拾錢）飯田季治著 金港堂發行

△國民作法要義（定價壹圓五拾錢）青守薗香著 金港堂發行

△日本アルプス（定價八拾五錢）窪田空穗著 天弦堂發行

△孔雀草（定價五拾錢）長田幹彥著 新潮社發行

△批評解說禪學新論（定價九拾錢）忽滑谷快天著 東亞堂發行

△靜御前（定價壹圓參拾錢）香束浪人著 雄辯會發行

△來るべき時代の爲めに（定價壹圓貳拾錢）本間久雄著 北文館發行

△歐洲現代政治及學說論集（定價壹圓八拾錢）小野塚喜平次著 博文館發行

△源氏物語評解 池田龜鑑、鎌田正憲編 博文館發行

△小さき泉（定價八拾五錢）武者小路實篤著 天弦堂發行

△獨逸富强論（定價九十錢）永井柳太郎著 公民同盟會發行

△縮刷想痕（定價壹圓六拾錢）三宅雪嶺著 至誠堂發行

△清教徒神風連（定價壹圓貳拾錢）福本日南著 實業之日本社發行

△社會力（定價壹圓八拾錢）遠藤隆吉著 日本學術協會發行

△香亭遺文（定價參圓五拾錢）新保磐次編 金港堂發行
△自由思想史（定價壹圓貳拾錢）大住嘯風著 天弦堂發行
△英國功利說の研究（定價壹圓八拾錢）中島力造著 日本學術協會發行
△鬼の面（定價八拾五錢）谷崎潤一郎著 啓興社發行
△八犬傳物語（定價九拾五錢）大町桂月編 新潮社發行
△新文章講話（定價壹圓貳拾錢）五十嵐力著 早大出版部發行
△星の歌舞伎（定價九拾五錢）泉鏡花著 平和出版社發行
△南進策と小笠原群島（定價壹圓貳拾錢）山田毅一著 放天義塾發行
△樗牛全集（日記及消息）（定價壹圓五拾錢）博文館發行
△人性論（定價貳圓參拾錢）永井潜著 實業之日本社發行
△東西文學比較論（定價金參圓）高安月郊著 同發行
△シエイクスピア（定價壹圓五拾錢）齋藤勇著 丁未出版社發行
△漂泊の男流轉の女（定價壹圓）松崎天民著 弘學館發行
△新英雄主義（定價壹圓）茅原華山著 新潮社發行
△東京の郊外（定價壹圓五拾錢）田山花袋著 實業之日本社發行
△自傷錄（定價九拾錢）湯淺元一著 實業之日本社發行

△修道講話（定價壹圓）加藤咄堂著 東亞堂發行
△劍客禪話（定價八拾錢）加藤咄堂著 丙午出版社發行
△尼になる迄（定價貳拾八錢）小林愛子著 啓興社發行
△向上論（定價六拾錢）尾崎行雄著 國民書院發行
△無一物處（定價壹圓）日置默仙著 東亞堂發行
△雄辯二千五百年史（定價八拾錢）福田吉藏著 雄辯會發行
△孫子講話（定價八拾五錢）塚原澁柿園著 東亞堂發行
△佛教國民の理想（定價一圓二十錢）高楠順次郎著 丙午出版社發行
△我觀南國（定價壹圓九拾錢）山本實彥著 東亞堂發行
△飜譯の仕方と名家の飜譯振（定價八拾五錢）東草水著 實業之日本社發行
△カイゼル外妾の告白（定價七拾五錢）若林欽著 實業之日本社發行
△陷穽（定價壹圓參拾錢）前田晁譯 博文館發行
△演劇論集（定價壹圓拾錢）小山內薰著 日東堂發行
△日本一周（定價壹圓貳拾錢）田山花袋著 博文館發行
△面白き手紙の書き方（定價壹圓）桑田春風著 富山房發行
△ユーモア十編（定價八拾錢）佐々木邦

△最近犯罪の研究 (定價壹圓參拾錢) 澤田順二郎著 天弦堂發行

△獨逸の經濟的勢力 (定價壹圓九拾錢) 伊藤文吉著 民友社發行

△飢渴 (定價四拾錢) 長田秀雄著 日東堂發行

△最新健康法全書 (定價壹圓) 西川光次郎著 丙午出版社發行

△マクベス (定價壹圓參拾錢) 坪內雄藏譯 富山房發行

△西洋芝居土產 (定價壹圓四拾錢) 坪內士行著 富山房發行

△獨逸戰前の眞相 (定價八拾五錢) 町田桂棲譯 早大出版部發行

△縮刷修省論 (定價壹圓) 幸田露伴著 東亞堂發行

△默阿彌物語 (定價八拾五錢) 河竹繁敏著 春陽堂發行

△徹底論 (定價一圓) 加藤咄堂著 實業之日本社發行

△健康長壽法 (定價四十五錢) 湯川玄洋著 實業之日本社發行

△歐米の諺と格言 (定價不詳) 大澤定吉譯 竹帛社發行

△トルストイ 我が宗教 (定價七十錢) 生田長江譯 新潮社發行

△英語原書の讀み方 (定價四十錢) 榎本恒太郎著 元文社發行

△個人主義思潮 (定價五拾錢) 相馬昌治著 天弦堂發行

△英語正解法 (定價一圓) 佐川春水等著 建文館發行

△北濱と兜町 (定價一圓四十錢) 島本湯一著 文雅堂發行

△平凡道德 (定價二十五錢) 棟居喜九馬著 丁未出版社發行

△實益の經濟的及び社會政策的利用論 (定價六十錢) 依田弘治著 東京堂發行

△句評及俳話 (定價七拾五錢) 鳴雪、碧塘著 雲泉堂發行

△マドロスの悲哀 (定價一圓二十錢) 太刀雄著 中興館發行

△情話新集江島生島 (定價四十五錢) 小山內薰著 新潮社發行

△人の兄 (定價九十錢) 堀內新泉著 日東堂發行

△能狂言之研究 (定價六十五錢) 野村八良著 光風館發行

△雲上秘錄 (定價一圓八十錢) 田中萬逸著 大倉書店發行

△湖畔の落人 (定價六十五錢) 太田正孝著 修成社發行

△敎育道話 (定價四十錢) 安藤愛山著 雄辯會發行

△微明 (定價七十錢) 新井洸著 竹柏會發行

△聲 (定價一圓三十錢) 村井至知著 至誠堂發行

△花枕 (定價三十五錢) 正岡子規遺著 新潮社發行

△名犬物語 (定價九十五錢) 加藤朝鳥譯 天弦堂發行

△オイケンと時代思想 (定價三十錢) 三並良著 通俗大學會發行

△重要日記 (定價四十五錢) 實業之日本社發行

△懷中日記 (定價二十二錢) 同上

△學生論 (定價八十五錢) 奧田義人著 實業之日本社發行

△大日本雄辯史 (定價七十錢) 三生坊道人著 實業之日本社發行

△人及國家論 (定價一圓) 矢野政二著 時事新報社發行

中央公論記者に

長いことと船旅で揺られつゞけて來たものは上陸の後までその動揺を感ずる如くに、丁度それに似た心持が歸國後の私の上に續いた。のみならず三年も國を留守にした後のことで、自分の心に休息を與へないやうなことが引き繼ぎ引き繼ぎ私の身邊に蝟集した。

私は相當な準備の時を與へられながら種々な故障のために君への約束をも果し得ないのを殘念に思ひ、ある日は假令徹宵してもと机に對つて見たが、心身の動揺には打勝ちがたく、到頭筆を擲つて了つた。私が君に書きにくい手紙を殘して家を出たのは先月の二十九日であつた。その日の夕刻に家兄の許を訪れて、君に書いたと同じやうな手紙を「文章世界」の記者へも書いた。編輯者としての君等の當惑を想像すると、私は殆んど君等に合せる顏がなかつた。有體に言へば、苦しさのあまりに東京から逃出した。かねて心掛けて居た靜養が——國へ歸つたら、どこぞの温泉へでも行つて三年間の旅の疲れを養ひたいと願つて居たことが、其時漸く自分の身に許された心地もした。同時に、こんな思をしなければ休息の時も與へられないやうな自分如きの筆執るもの〻生涯もツライと思つた。

私は上州地方へ小さな旅を試みた。久しぶりで、秩父、榛名、赤城、妙義の山々を望んで來た。なつかしい信濃の山の上までとは思つたが、今度は身を養ふためであつたから、最早眞白に雪の來て居た淺間の山巓と冬らしい空になびく遠い煙とを望むにとゞめて來た。本月の九日に家へ戻つて見ると、君の殘して置いて行つた手紙が机上に私を待つて居る。それを讀んで何程君が私のために迷惑したかを一層よく知つた。まことに止むを得なかつたのだ。許して呉れたまへ。私は自分の身體が十分に回復する日を待つて、あの稿を繼ぐことを君に約して置かう。あるひは來春四月の誌上のはじなりとも貸し與へて貰はう。この春は久しぶりで東京に冬籠しつ〻面目ない年越をすることにする。十二月十三日。

島崎藤村

新年特別倍大號

早稻田文學

長流（小說）…田山花袋

惡戲（小說）…小川未明

天上の結婚（戲曲）…秋田雨雀

自由戀愛（喜劇一幕）…坪内士行

土堤店の息子（小說）…吉田絃二郎

櫻咲く頃（小說）…中村星湖

有難き老醫（隨筆）…五十嵐力

僕のページ（感想）…島村抱月

附錄

後半生の「トルストイ」

パウル・ビルコフ著
相馬御風譯

文壇十名家論

坪内逍遙論…楠山正雄

森鷗外論…島村民藏

夏目漱石論…加藤朝鳥

田山花袋論…秦豐吉

德富蘆花論…佐野袈裟美

泉鏡花論…西宮藤朝

正宗白鳥論…村山勇三

德田秋聲論…田中純

島崎藤村論…森口多里

永井荷風論…本間久雄

本號に限り 五十六錢 郵税三錢

發行所 東京神田表神保町 合資會社 東京堂 振替東京二七〇番

（中付五の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

見よ・讀め

(年中無休刊)

東京日日新聞

◇清新溌溂、恒久不斷の努力と熱心とを以て社會教導の炬火を翳し躍進の意氣を斷たざるは我紙なり◇不偏不黨、權勢に阿らず、威武に屈せず、常に公正の見地に據りて堂々の陣を布き天賦の使命を完うしつゝあるは我紙なり◇內外通信欄の完備せるは多く比を見ず、就中海外電報に於ては其の正確敏速にして廣汎なる他の企及を許さず、全く我紙獨歩の壇場となす◇緊張せる紙面は趣味豐饒、滋味溢れ、中にも小說界の明星德田秋聲氏の『第三の母』は元日紙上より掲載されて、鷗外博士の作品と共に紙上の双美たり◇更に新年附錄として頒つべき『雲上のまとゐ』は中澤弘光畫伯苦心の作にして最新の印刷術を應用したる精美を極めたるもの近年稀に見るの異彩たり

(三ヶ月分前金郵稅共一圓二十錢)

東京日日新聞社

東京市丸の內(振替口座二八〇〇番)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(中ノ五の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

人間の聖書！

森林太郎氏○上田敏氏○島崎藤村氏序跋

石川戯庵譯

增訂縮刷 ルソオ懺悔録

地圖梗概補遺挿畫註解總索引附

四六版總クロース本綴美本
全一冊ポイント印刷十五行
四十五字詰紙數一一五〇頁
定價金貳圓
郵稅金拾貳錢

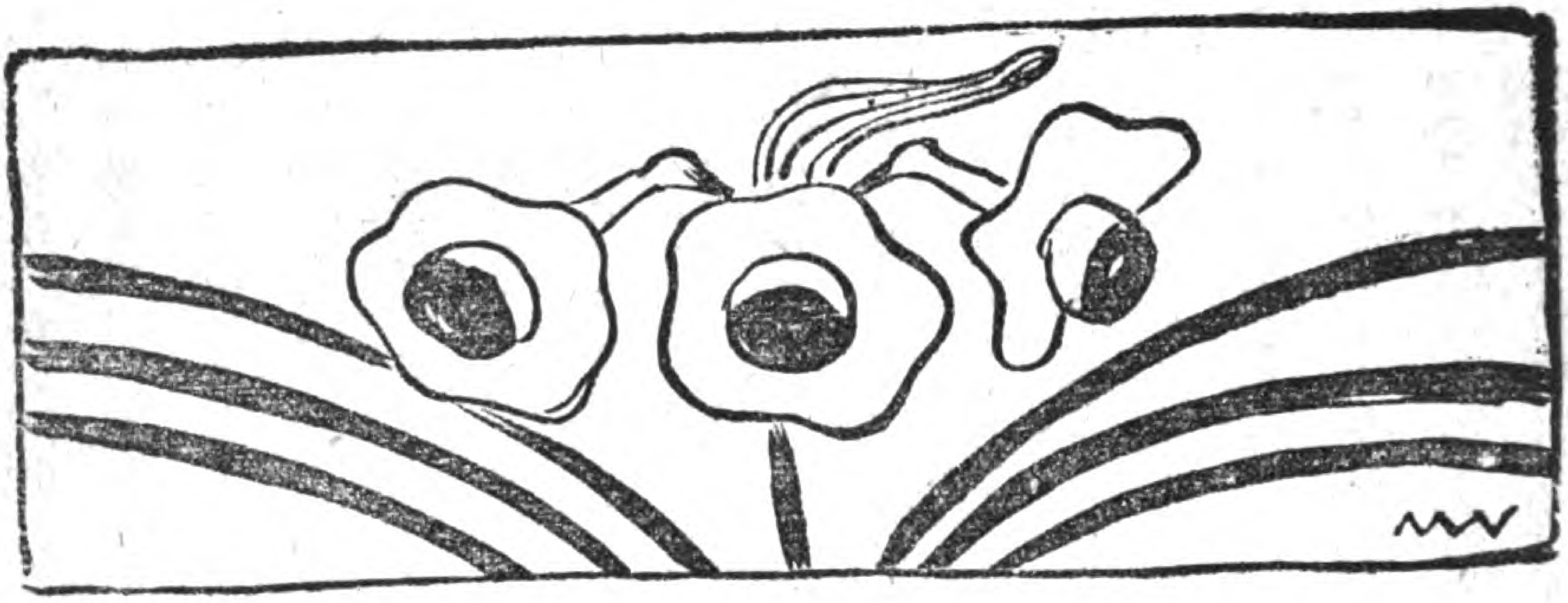
大正の劈頭に於て出版界を獨歩せし戯庵氏の**懺悔録**は需要今尚盡くる所を知らず。人間の存在する限常に**最強なる存在の理由**を有す此書は一永遠の書に依て人は**自我の眞**を當面に知覺して**新に拓く可き自己の道程を知**り得るを以てなり。今や譯者十年に亘る苦勞の結果として茲に完備せる**安價改版**を發行し原文完譯に加ふるにあらゆる必須材料の增補を以てするに至れり。未讀の人は勿論既に舊版を手にしたる人と雖願はくは再讀して**全然一新せる内容**に接し給はんことを。

改版安價本！

東京 京橋 銀座壹丁目
大日本圖書株式會社
振替口座 東京二一九番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論新年號創作



日は輝けり

中條百合子

（一）

K商店の若い者達の部屋は、今夜も相變らず賑やかである。眩しい程明るい電燈の下に、輝やいた幾つもの顔が、彼等同志の符牒のやうになつて居る綽名や略語を使つて、しきりに噂の花を咲かせて居る。

けれども、變幅對（へんぷくつい）と呼ばれて居る二人の若者は、平常の通り、隅の方へ机を引き寄せて、一人は手紙を書き一人は擴げた紙一杯に、三角や圓を描き散らして居た。「三角形BCEト、三角形DCFトノ外切圓ノ交點ヲGトシ……。

崩れるやうな笑聲が、廣い部屋中の空氣を震動させて、彼のまとまりかけた考へと共に、狹い窓から、廣い外へ飛び出して仕舞つた。若者は苦々しさうに舌打（したうち）をして、上氣せた耳を押へながら鉛筆を投げ出すと、立つて向うの隅に居るもう一人の處へ行つた。

彼は杵築庸之助と云ふ本名で、木綿さんと云ふ綽名を持つて居る。人間は黒木綿の着物と、白木綿の兵兒帶で、どんな時でも充分だと云ふ主義を持つて居て、夏冬共その通り實行して居たからなのである。時には滑稽だとほか云ひやうのない程、馬鹿正直な、生一本な彼は、他の若い者の仲間から脱れた擧動ばかりして居る。戲談も云はず、ろくに笑ひもしない。徹頭徹尾謹嚴だと云はれたがつて居るやうに見られた庸之助は、或る意味の嫉視と侮蔑から變物扱ひにされて居たのである。武士道の遵奉者であつた。

「浩さん! 手紙か?」彼は仲間の上に身をかゞめた。

「うん。もう君はお止めなのかい? まだいつもより早いんぢやあないか!

「駄目だよ。奴等の騷で考へも何も滅茶々々だ。何があんなに可笑しいんだ。娘つ子のやうに暇さへあれば、ゲラ〳〵、ゲラ〳〵笑つてばかり居やがる。

庸之助は、浩に對してよりも、もつと當つけらしい口調で云つた。一つ二つの顏が振向いた。そしてもう一層の大笑ひが、壁を搖るやうにして起つた。彼の口小言を嘲笑したのは云ふまでもない。

「あれだ! 見ろ!!

「まあ君、そんなに怒つたつて駄目だよ。宿直へでも行つたら好いぢやあないか、あすこならお爺さん一人で靜かなものだよ。

「なに好いよ。今夜は……誰れ?、お父さんかい?

「あ! 手門ばつかりかゝつてね。

「姉さんの事でも云つて遣るのかい。同胞があると、お互に三人分も四人分も心配しなけりやあならな

いねえ。結句僕のやうに獨りつきりだと、そんな心配は要らないで、さつぱりはして居る。まあ書き給へ、僕は湯にでも行つて來ようや！

浩は、片手で耳を掩ふやうにしながら、小學の子供の書く通りに、一字一字粒のそろつた、劃の正しい字を書き出した。のろ〳〵と筆を動かして行くうちに、彼の心持は次第に陰鬱になつて來た。不幸な運命の、第一の遭遇者である彼の父、孝之進の、黑い眼鏡を懸けた窶れた姿。優しい老母。氣の毒な姉。

家柄から云へば、孝之進は名門の出である。けれども、若い時から、生活の苦味ばかりを味はつて來た。丁度彼が出世の第一歩を踏み出さうとした時に起つた、政治上、社會上の大津浪が、家老と云ふ地位をも、先祖傳來の家祿をも、攫つて行つて仕舞つたので、彼の一生はもう其の時から、總て番狂はせに成つた。文部省の屬吏を罷められてから、村長を勸めた事があると云ふ丈の履歴は、內障眼で社會的の仕事から退かなければならなくなつてからの、彼等一家の生活を保障するには、何の役にも立たなかつた。

世間並みの立身を望んで焦るには、孝之進は年を取り過ぎたし、又不治の眼疾を如何うする事も出來なかつた。で、求めて得られなかつたあらゆる榮譽、名望、目の醒めるやうな出世を、只管息子の浩にのみ期待した。けれども、完全に順序だつた教育をするほどの資力がないので、思ひあまつた孝之進は、或る知己に賴んで、浩を、ガラスや鐵材の輸入を專らにして居るK商店に入れて貰つた。五年前、まだ十四だつた浩は、獨りで上京し、自分で自分を處理して行かなければならない生活に入つた。學費から食料までK商店で持つて、或る職業教育を授ける學校に通はせて呉れる代り、卒業すれば幾年か、忠實

な事務員として報恩的に働くべき條件が、附隨して居たのである。

三年四年。少さい時から、種々な事に接して來た浩の心の裡には、樣々な變化があつた。善い事も、惡い事も、ごたまぜに、只彼が選ぶにまかされたやうな狀態の裡にあつて、彼の先天的の自重心、年の割には鋭かつた內省が、多少の動搖は勿論あつたが、彼を希望して居た道に進ませて行つた。そして、自分から云へば餘り喜ばれない心持の多かつた時でも、周圍の者、時に澤山の上役からは、いつでも正直な善い子供、若い者として認められて居た。比較的、無口で落付いて居ることや、總ての服裝が商店に育つ若い者にありがちな、一種の型から脫して居たことなどが、彼をどこか他の者とは違つた頭を持つて居るらしく思はせたと云ふこともある。もう五十を越して居る取締りなどは、「お前は、偉くなららと思へば、きつとなれる質だ。ちんと勉强をし。吉村さんのやうに主人が洋行させてくれるかもしれない。」と激勵するほどまでに、彼を可愛つて居た。從つて、一日に一度、山の手の住宅から出かけて來る丈の主人も、浩は店の若い者の中では、一番有望な者だと思つて居た。それに特別な關係――自分等で育てゝ一人前に仕て遣らうとするものが、可成見どころ有る人間になつて來るのを見る、先輩達の心持――が、浩に對する信用とも、好意ともなつて、表はれて來たのである。

が、青年となつた浩には、只K商店の忠實な一使用人と云ふだけでは、滿足出來ない何か或るものが其の衷心に起つた。每日をさしたる苦勞もないかはり、又跳り上る程大きな歡びもなく、馴れた事務を無感激にとつて居るだけで、自分の生活を全部とするには、不安な賴りない心持があつた。彼の生れつき强い讀書欲は、心に不滿のあつた彼を文學で醫すやうに導いた。浩は十七になつた年から、盛に讀み出

した。僅かな時間を割いて圖書館に通つた。そして、眞個に自分を育てゝ行く力と云ふものを、自分自身の裡に發見すると同時に、總てに於て「自分」の自由でない毎日の生活が、益々滿足出來なかつた。彼は決して贅澤なことはのぞまないが、もう少し靜寂な時間と、自分獨りの時間が欲しかつた。けれども浩はよく働いた。眞面目に上役の命令に服した。彼は、若し考へることを望むなら、それより先に食べる方を安全にして置く必要がある。其れ故、目下生活狀態を變へることは、不可能であつた。まだ十九の、此の春學校を出た許りの者に、十五圓づゝ支給して呉れる位置は、さうどこにでも轉がつて居ないことは解つて居たのだ。種々先の事、又現在のことを考へると、浩は、繪葉書の集めつくらをしたり、氣取つた——浩には少しもよいとは思へない——先のムツクリ圓々しく持ち上つた靴などを鳴らして居られなかつた。店でくれる黑い事務服の古くなつたのを、彼は外出しない時は着ることにして居た。僅かの時間を出來る丈、利用しやうと努めた。それが、變り者と呼ばれる原因である。が、彼はそんな事に頓着するほどの餘裕がなかつた。制せられない知識欲——押へられる場合が多いにつれて、反動的に強くなりまさつて來る——は、時々彼に苦しい思ひさへさせたのである。

　浩が、暇を惜しんで勉强するとか、月給の中から、ほんの僅かづゝでも、國許の兩親へ送つて居ると云ふことなどは、彼が擽つたいやうに感じる賞め言葉を、益々増させる材料になつた。何ぞと云ふと、引き合ひに出される。それも、他の多くの若い者の勵ましのためだと餘りはつきり解つて居る時などは、彼は嬉しいどころか、却つて不愉快になり〳〵した。が、兎も角一族の中では、どの位幸運な部に屬する自分か分らないと思つて、彼は一生懸命に自分の眞個の道を拓くべき努力をつゞけた。けれども、

時には彼の心も情けないと感じる事がある位、好意の枷が體中に、ドッシリと重く〳〵懸つて居たのである。

浩の一族は、實際幸福に見離されたやうに見えた。多勢生れた同胞も、皆早く死んで、自分と遺つた只一人の姉のお咲も決して樂な生活はして居ない。嫁入先は、相當に名譽のあつた佛師だつたのださうだが、當主――お咲の良人――恭二は見るから生存に堪へられなささうな人であつた。却つて隱居の仁三郎の方が、若々しく見える位衰へて居る。元より貧乏なのだが、お咲が十六の時、娘の婚期ばかり氣にやんで居た母親が、自分の身分と引きくらべて何の苦情なく、嫁入らせて仕舞つたのである。取り逃したらもう二度とは無い好機らしく思はれたのであつた。翌年咲二が生れて此方、お咲の全生命は子供に向つて傾注され、生活のあらゆる惱ましい思ひは、子供に對する愛情でそのとき〳〵に燒却せられながら、どうやら今日まで過ぎて來たのである。はでな、明るい世間から見れば、ざらにある、否それより慘めな家に、相當に調つた容貌を持ち、心も優しい姉が、埋もれきつた生活をして居るのを見るのは、浩にとつて辛かつた。情ない心持がした。が、或る尊さも感じて居た。體の隅から隅まで、惻らしさで一杯になつて居るやうに見える彼女の、只さへよくは無かつた健康狀態が、此頃はかなり惡い。どうしても只ごとでないらしいのは、彼女を知る者總てにとつて憂ふべきことである。病氣になれるには全く貧乏すぎる。

「姉さんにも、自分等にとつても苦すぎる。可哀さうすぎる……。」

浩は「案じられ申候。」と云ふ字を見詰めながら心の中につぶやいたのである。

何物かに引きずられるやうに、思ひ續けて居た彼の心は、突然起つた幾つもの叫び聲に、元へ引き戻された。

「うまい〳〵！　なか〳〵上手だよ。

「ネ、これなら……ホラそつくりそのまゝだよ！

「歸つて來ると、又火の玉のやうになつて怒るぜ！

「かまうもんかい！　さうすると、見ろそつくりそのまゝの面になるからハヽヽヽ。

「フヽヽヽヽヽ。

振向くと、笑ひながらかたまつて居る顏が、石鹼のあぶくを掻き廻したやうに見える間から、つい今の間に作られたと見える一つの滑稽な人形が覗いて居る。

括り枕へ半紙を巻きつけた所には、擬ふかたもない庸之助の似顏が、半面は、彼が平常怒つたときにする通り、眉の元に一本太い盛り上りが出來、目が釣り上り、意氣張つて睨まへて居る。半面は、メソメソと涙や鼻汁をたらして泣いて、其の眞中には、どつちつかずの低い鼻が、痙攣を起したやうな形で付いて居た。庸之助の帽子をかぶり、黒い風呂敷の着物を着せられた其の奇妙な顏は、浩を見ながら、「どうしたら好からうなあ……。

と歎息して居るやうに見える。浩は苦笑した。可笑しかつた。が、心の何處かゞ淋しかつた。賑やかな裡に妙に自分が、「獨りだ」とはつきり感じられたのであつた。

（二）

お咲の體工合の惡いのは、昨日今日の事ではない。直き體が疲れるとか、根氣が無くなつたとか云ふことは、今更驚くほどでもないけれども、何時からとなくついた腰の疼みが、此頃激しくなるばかりであつた。上氣せのやうな熱が出たりするやうになると、お咲は起きて居るさへ漸々なのが、浩にもよく分つた。心を引き緊めて、自分を疲らせたり、苦しませたりするものに、對抗して行く丈の氣力が、姉の體からは拔けて仕舞つたらしい。丁度龜裂だらけになつて、今にも壞れさうな石地藏が、外側に絡みついた蔦の力で許り、やつと保つて居るのを、見るやうな心持がした。實際お咲にとつては、小さいなりに一家の主婦と云ふ位置が、負ひ切れない重荷となつて來たのである。

人の居ない二階の隅で、部屋中に輝やいて居る夕陽の光りと、チラ、チラと波のやうに動いて居る黑い葉影などを眺めながら、お咲は悲しい思ひに耽つた。若し自分が死ぬとなれば、否でも應でも遺して行かなければならない息子の咲二のことを思ふと、胸が一杯になつた。漸々今年の春から小學に通ふやうに成りは成つても、何だか他人に可愛がられない子を、獨り置いて逝かなければならないのかと思ふと、死ぬにも死なれない氣がした。一足、一足何か深い底の知れないところへ、ずり落ちかゝつて居るやうで、お咲は氣が氣でなかつた。

「咲ちやん、母さんが死んぢやつたらどう？」

譯の分らない顏つきをして居る息子を、傍に引きよせながら、お咲は淋しく訊ねた。そして、私かに期待

して居た通りに、

「死んぢやあいや!!

と、はつきり一口に云はれると、滅入つて居た心も引き立つて、「ほんとうにねえ。今死んぢやあ居られないわ。」と思ひなほすのが常であつた。小さい手鏡の中に荒れた生え際などを寫しながら、

「まあ隨分眼が窪みましたねえ。こんなになつちやつた……。死病つて云ふものは、傍から見ると、一目で分るもんですつてねえ。眞個にさうなんでせうか? 貴方どうお思ひなすつて?

と云つたりした。

「私なんかもう生きるのも死ぬのも子のためばかりなんですものねえ、咲ちやんのことを思ふと、一寸でも、もう死んだ方がましだと思つたりしたことが、こわくなる位ゐよ。

浩が買つて來た人參を飲んだり、評判の名灸に通つたりしても、ジリ〳〵と病氣は惡い方へ進んで行つた。普通なら大病人扱ひにされさうに窶れたお咲が、せく〳〵しながら働いて居るのを見ると、浩は僅か許りの雪を掌にのせて、輝く日光の下で解かすまい〳〵としながら立たせられて居るやうな心持になつた。目に見えて姉の體は、細く〳〵なつて行く。けれども自分の力ではどうも成らない。大きな力が、勝手氣まゝに姉の體を動かして行くのを、止めたとても〳〵力が足りない。只涙をこぼしたり思ひ惱んだりするほか仕やうのない自分等が、浩には辛かつた。激しい波浪と鬪ひながら、辛うじて掴まり合つて居るやうな自分達の裡から、又一人攫はれて行くと云ふことを、考へてさへゾッとしずには居られなかつた。自分と年の餘り違はない只一人の姉、女性と云ふ、同情の上に憧憬的な敬慕を加へて感じ

て居る者の上に、死を豫想するのは堪らない。彼は死なせたくなかつた。ほんたうに生きて居て欲しかつた。出來る丈姉に力をつけながら、浩はつくづく自分が不甲斐ないと云ふやうに感じたりしたのである。

家の中を歩くのさへ大儀になつてからはお咲も、もう死ぬ時が來たと感じた。

「死なゝけりやあならないんだらうか？

お咲は、誰にともなく訊ねた。

「私が死ぬ？　今？

動けなくなる前に、せめて咲二の平常着だけでも、まとめたいと、お咲は妙にがらん洞になつたやうな心持を感じながら、鍵裂きを繕つたり、腰上げをなほしたりした。學校へも一度は是非行つて、よくお願ひもして置きたいと思つて居ると、或る日、先生の方から咲二に、呼び出しの手紙を持たせてよこした。一月に一度か二度は、きつと學校に呼ばれて、お咲は、人並みでない咲二に就いて、親の身になれば情ない、種々の小言を聞かなければならなかつたのである。

四月の第一日。R小學校の運動場には、新入學の兒童が多勢、立つたり歩いたりして居た。最後に教室から出されて、小砂利を敷きつめた廣場の一隅に並ばされた一群の中には、紺がすりの着物を着た咲二が混つて居た。付き添つて來た母親達の傍に二列に立ちどまらせると、「皆さん！　右と左を知つて居ますか？　お箸を持つのは何處つちでせう？」と先生が笑ひながら訊ねた。

「先生僕知つてます！

「僕も！」

「僕も知つてます!!」

元氣な聲が、蜂の巣を掻き立てられたやうに叫んだ。咲二も何時の間にか知つて居た。お咲は有難かつた。

「それぢやあ、今先生が右向けえ右！と云ひますから、さうしたら皆さん右を向いて御覧なさい。さあよしか、右向けえ、右！

子供達は機械のやうに、體中で右向けをした、深山の足の下で、崩れる小石のザク〳〵と云ふ音、樂しげな笑聲が、明るい四月の太陽の下で躍つた。

けれども！　咲二だけは動かない。

お咲は目の前で、青い空と光る地面とが、ごちや混ぜになつたやうな氣がした。頭が自然(ひとりで)に下つた。

振返つて、この様子を見た先生は、意外な顔をして訊ねた。

「何故右を向かないの？

「僕右向きたくない！」

母親達の中から、囁きが小波のやうに起つた。「面白いお子さんですこと。」と云ふ一つの聲が、咎めるやうにお咲の耳を擊つた。

先生は體をこゞめて何か云つた。そして、「好い子だからね」と云ひながら、頭を撫でゝ、兩手で右を向かせた。先生の顔には、終始微笑が漂つて居た。手やわらかであつた。が、屈んで居た體を持ちあげ

て居る者の上に、死を豫想するのは堪らない。彼は死なせたくなかつた。ほんたうに生きて居て欲しかつた。出來る丈姉に力をつけながら、浩はつく〴〵自分が不甲斐ないと云ふやうに感じたりしたのである。

家の中を歩くのさへ大儀になつてからはお咲も、もう死ぬ時が來たと感じた。

「死なゝけりやあならないんだらうか？

お咲は、誰にともなく訊ねた。

「私が死ぬ？　今？

動けなくなる前に、せめて咲二の平常着だけでも、まとめたいと、お咲は妙にがらん洞になつたやうな心持を感じながら、鍵裂きを繕つたり、腰上げをなほしたりした。學校へも一度は是非行つて、よくお願ひもして置きたいと思つて居ると、或る日、先生の方から咲二に、呼び出しの手紙を持たせてよこした。一月に一度か二度は、きつと學校に呼ばれて、お咲は、人並みでない咲二に就いて、親の身になれば情ない、種々の小言を聞かなければならなかつたのである。

四月の第一日。R小學校の運動場には、新入學の兒童が多勢、立つたり歩いたりして居た。最後に教室から出されて、小砂利を敷きつめた廣場の一隅に並ばされた一群の中には、紺がすりの着物を着た咲二が混つて居た。付き添つて來た母親達の傍に二列に立ちどまらせると、「皆さん！　右と左を知つて居ますか？　お箸を持つのは何處つちでせう？」と先生が笑ひながら訊ねた。

「先生僕知つてます！

「僕も！

「僕も知つてます!!」

元氣な聲が、蜂の巣を掻き立てられたやうに叫んだ。咲二も何時の間にか知つて居た。お咲は有難かつた。

「それぢやあ、今先生が右向けえ右！ と云ひますから、さうしたら皆さん右を向いて御覧なさい。さあよしか、右向けえ、右！

子供達は機械のやうに、體中で右向けをした、澤山の足の下で、崩れる小石のザク〱と云ふ音、樂しげな笑聲が、明るい四月の太陽の下で躍つた。

けれども！ 咲二だけは動かない。

お咲は目の前で、青い空と光る地面とが、ごちや混ぜになつたやうな氣がした。頭が自然に下つた。

振返つて、この様子を見た先生は、意外な顔をして訊ねた。

「何故右を向かないの？

「僕右向きたくない」

母親達の中から、囁きが小波のやうに起つた。「面白いお子さんですこと。」と云ふ一つの聲が、咎めるやうにお咲の耳を擊つた。

先生は體をこゞめて何か云つた。そして、「好い子だからね」と云ひながら、頭を撫でゝ、兩手で右を向かせた。先生の顔には、終始微笑が漂つて居た。手やわらかであつた。が、屈んで居た體を持ちあげ

た彼の眼――詰問するやうに母親達が群れて居る方へ投げた眼差し――を見た瞬間、お咲は直覺的に或ることを感じた。

「もう憎まれて仕舞つた！

「あれが始まりだつたのだ。」とお咲は思ひ廻らした。

「何もお前ばかり惡いんぢやあないわねえ。」居ない咲二を慰めるやうにつぶやいた彼女は涙を拭いた。

翌日は大變暑かつた。が押してお咲は出かけた。每度の苦情――注意が散漫だとか、從順でないとか云ふこと――が並べられた。そして注意しろと幾度も〳〵繰返された。

妙に念を入れて、複雜な表情をして云つた氣をつけろ、注意をしろと云ふ言葉の中から、彼女は何か心に點頭いた。歸途に買つた一打の靴下を持つて、明る日遠いところを先生の家まで行つて、とつくりと咲二の事を賴んで來たのである。何故早く氣が付かなかつたらうと云ふやうな輕い悔みをさへ感じた。

二日つゞけて、暑い中を歩いたことは、お咲の體に惡かつた。歸宅するとまもなく、彼女は激しい惡寒に襲はれ、次で高い熱が出た。開けて居る下瞼の方から、大波のやうに眞黒いものが押しよせて來て暫くの間は、何も見えも、聞えもしないやうになつた。押へられ〳〵して居た病魔が、一どきに彼女を虐なみにかゝつた。

浩が驚いて馳け付けたときには、お咲は熱と疲勞のために、病的な眠りに落ちて居た。

熱の火照りで珍らしく冴えた頰をして、髮を引きつめのまゝ仰向きに寢て居るお咲の顏は、急に子供

に戻つたやうに見える。荒れた肌、調子を取つて居る鼻翼の顫動。夢に誘はれるやうに、微かな微笑が乾いた唇の隅に現はれたり、消えたりした。浩は、陰氣な火かげで、嘗て見た事のなかつた程活動して居る彼女の表情を見守つた。彼女の持つて居る、總ての美くしい魂が、此の貧しく穢い部屋の中で、燃え輝やいて居るやうに彼は感じた。紫色の陰を持つて、丸く小さく盛り上つて居る瞼のかげで、いとしい、しほらしい姉の心はさゝやいて居るやうであつた。

「ほんたうに、可哀さうな私共！　私達の氣の毒な一族……。けれども、今私が死なゝけりやあならないと云ふことを、誰が知つて居るの？

あやしむやうな、魅惑的な微笑が、彼女の唇に浮んで、又消えた。

（三）

お咲の病氣は、皆が豫期して居たより大病であつた。手後れと、無理な働きをしたのが、一層重くさせて居た。骨盤結核と云ふ病名で、お咲は神田のS病院に入院して手術を受けたのである。

此の事を知らされた國許の親達は、非常に驚いた。眞逆これほどまでに成らうとは、誰も思つて居なかつたので、暫くは何をどうして好いやら、途方に暮れたやうな樣子であつた。

孝之進は、娘の病氣などには、少しも亂されないやうに、强ひて心を勵ました。死ぬのではあるまいかと云ふ不安。どうかしてなほしてやりたいものだと云ふ心持なとが、追ひ拂つても、追ひ拂つても執念くつきまとつて心から離れなかつた。八人も生れた子はありながら、其の中の六人まで連れて行つて

仕舞つた死神が、今又大切な一人をねらつて居ると思ふと、年を取り、心の弱くなつた孝之進は堪らなかつた。種々な心痛で、兎角心が打ちまかされさうになつても、彼は老妻のおらくなどには、一言も洩さなかつた。人間一人二人の死は、さほど悲しむべきものと考へないやうに教育された若い時の記憶習慣が、孝之進の心に、何かにつけて堪へ難い矛盾を感じさせた。佛壇の前に端座して、祈念を凝して居る妻の姿などを、まじ〳〵と眺めながら、彼は「女子は樂なものぢや。」と思つた。女は泣くもの歎くものと昔から許されて居ることも、口先では侮どつて居るものゝ、衷心では眞個に羨しいこともある。涙を浮べながらでも笑はずにすまない男の意地――假令それは孝之進が自分定めの考へではあつたにしろ――は隨分と辛いものであつた。娘が病氣になつてから、おらくは、以前よりはつきりと、地獄、極樂の夢を見るやうに成つた。

或時は一家睦まじく一つの蓮の上に安座して居ることもあり、又或時は、お咲だけが、蓮から辷り落ちて、這ひ上らうとしながら、到頭、下の何處か暗い方へ落ちて行つて仕舞つたところなどを見た。生きるのも死ぬのも因緣ごと、如來樣ばかりが御承知で被居つしやると觀じて居る彼女は、怨むべき何物も持たない。精進を益々固く守り、彼女にとつては唯一の財寶である菩提樹の實の珠數が、終日その手からはなれなかつた。

「南無阿彌陀佛、阿彌陀樣!

おらくの瞼は自づと合つた。

「若し生きますものなら、何とぞお助け下さいませ。又若し御迎へ下さいますものならば、何とぞ極樂

往生の出來さすやうに……。

サラ〳〵、サラ〳〵と好い音をたてゝ珠數を爪繰りながら、おらくは涙をこぼした。

「私のこの婆の力で何ごとが出來ませう……？

其の間にも、お咲の弱り切つた體の直ぐ上のところまで、屢々死が迫つて來た。今か、今かとまで思はれたことも一度や、二度ではなかつた。けれども、いつも、もう一息と云ふところで、彼女の若さが踏み止まつた。一週間も危篤な狀態を持ちつゞけると、もうほんの〳〵少しづゝ生きる望みが湧いて來た。そして、急にどうと云ふことはないと云はれるまで、皆は自分等まで一緒に死に掛つて居るやうな心持で居たのである。風にあほられて、今にも消えさうに、大きく小さく搖らめいたり、瞬いたりして居た蠟燭の焔が、危くも持ちなほした通りに、快方に向くと彼女の周圍はにわかにパッと明るくなつた。安心と歡喜と、愛情の强いほどばしりが、お咲の病床に向つて、樂しげに突進して行くやうに浩は感じた。當面の死から逃れ得たことは、彼女の生命が永久的に保證されたかのやうな安心をさへ與へたのであつた。運がよかつたと云ふことが口々に繰返され、醫者まで、「全く好い鹽梅でしたなあ！」と、自分等の技術に對してよりも、寧ろ何か無形な力に對して感歎して居るらしいのを見ると、浩も、「ほんとに危ういことだつた。」としみ〳〵感じない譯には行かなかつた。そして、あれほど生かさうとする力と死なさうとする力が、互に接近し、優劣なく見えて居たときに、ほんの機勢と云ひ度い程の力が加はつたゝめに、彼女が今日斯うやつて居られるのだと思ふと、何だか畏ろしかつた。自分が一生送る間に――勿論一生と云つたところで、その長さを豫定することは出來ないが――今度のやうな、微妙な力の

働きを感じて、心を動かされることがどの位多いのだらうかと思ふと、もつとせつせと、根柢のある心の修練を積んで置かなければ、不安な心持もしたのである。姉の發病以來、浩は自分の心が餘り思ひがけない作用を起すことに我ながら驚ろかされて居る。

或事に對して、平常は斯う自分はするだらうと思つた居たことゝはまるで反對に、或は同じ種類ではあつても、考へなかつた強度で、いざと云ふとき心が動いて行く。平常思つて居ることは、勿論單に豫想にすぎないのだから、絕對にさうなければならぬものではないが、餘り動じ過ぎたと思ふことは屢々感じられた。無闇に喫驚し、感歎し、悲しみ、歡び、假令僅かの間ではあつても、殆ど其の感情に自分全體を委せて仕舞ふやうなことのあるのは、嬉しいことではなかつた。如何にも輕浮な若者らしいことも苦々しかつたのである。

單に浩にとつてばかりでなく、お咲の病氣は家中の者の心に、大變有難い目醒めを與へた。散り〳〵バラ〳〵になつて居た幾人もが、彼女のために一かたまりになつて働くと云ふのは、今まで感じられなかつた互の位置とか力量とかを認め合ふ機會ともなり、かなり純な同情をお咲に持つことも出來させて來た。種々な苦勞はあつても、皆の心は割合に穩やかに保たれて居たのである。

其の晩は大變蒸暑かつた。星一つない空から地面の隅々まで、重苦しく水氣を含んだ空氣が一杯に澱んで、街路樹の葉が、物懶さうに默して居る。

かなり長い路を、病院から歸つて來た浩は、もう好い加減疲れて居た。小道を曲つて、K商店の通用門を押した。厚い板戸がバネをきしませながら開くと、賑やかな笑聲が、ドーッと一時に耳を撲つた。

明るい中で立つたり居たりする澤山の人かげが、硝子越しに見える。外界からの刺戟にも、内面からの動揺にも、絶えず緊張し通して一日を送つた彼は、せめて寢る前僅かでも、靜寂な、落付きのある居場所を見出したかつた。

陽氣過ぎる中に入れ切れずに暫く立つて居た浩は、やがて思ひ直して、一歩入り口に足を踏み込まうとした瞬間、隅の暗がりから、不意に彼の袴を引いたものがある。

「浩君！　一寸……。」

彼を元の往來に誘ひ出したのは、庸之助であつた。街燈の下まで來ると、彼は立ち止まつた。憚かるやうにキヨロ〳〵と周圍を見廻してから、一枚の地方新聞を浩の前に突出すと、行き來するものが、浩の傍へよらないやうに、彼の體の近くを行きつ戻りつ仕始めた。

何から何まで餘り不意だつたので、譯の分らなかつた浩は、云はれるまゝに新聞を見ると、庸之助のつけたらしい、爪や涙の跡のある部分には、讀者の興味を、さほど期待しないやうな活字と標題で、――郡役所の官金費消事件が載せられて居た。

「――郡！……？」

浩の腦裡を電のやうに一條のものが走つた。皆解つた。庸之助の父親は此處の郡書記をして居るのであつた。果して、拘引された者の一人として、杵築好親と云ふ名が、並べてある。浩は何だか變な心持になつた。其は悲しいのでも、恐ろしいのでもない。苦甘いやうな感情が一杯になつて、庸之助に何と云つたら好いのか、解らなかつた。彼は新聞を元のやうに疊みながら、だまつて居た。

「見たか？」
「うん！」
「どうしたら好からう……」
二人はそろ〳〵と歩き出した。
正直さうな、四角い――目や鼻が几帳面に、餘りキッチリ定木で引いたやうについて居て、何處にも表情のない――庸之助の顏は、青ざめて引き歪んで居る。例の紺木綿の着物の衿に頸を入れて、體中で苦しんで居るらしい姿を見ると、大きな聲で唄ふやうに字をよみながら字を植ゑて行く、植字小僧の事を、浩は思ひ浮べた。
「杵築、杵築……好、好親！」と平氣に、何事もなく植ゑられたのだ。變な感じは、一層強く彼の心に擴がつたのである。
「親父は何にしろ、餘り敵を作るからね……」
庸之助は、僅かづゝ前へ動いて行く足の先を見ながら、獨言するやうに云つた。
「あゝ云ふ役所に居て、頭の下らない者は損だよ。今度の事も、いづれ平常から親父を憎んで居る奴が此の時こそと思つて、企らみやがつたんだと思ふがなあ……。皆世の中が腐敗したからなんだ。親父のやうに硬骨な者は、出來る丈すつこませやうとばつかりしやがる！」
常から、現代の種々な思想、事物に反感を持つて、攻撃ばかりして居る庸之助は、今度のことに持論を一層かたくしたらしく見えた。彼が「今」に生きて居る人間であるのを忘れたやうに、此の事件のかげ

に潜んで居ることを罵倒した。

「君は僕の親がそんな破廉恥な所業をすると思ふかい？　え？

庸之助は、浩が當の相手のやうに、意氣まいて、つめよりながら鋭く訊ねた。

「僕の親父はそんな人間だと思ふかよ！

「そんなことはあるまいとは思ふが、僕には分らない。

「何故分らないんだ？」憤りで聲が太くなつた。

「何故分らないんだ？　君には、惡いことを仕さうな人間と、善いことを仕さうな人間とが分らないのか？　假りにも僕の親が、僅かな金、いゝか金のためにだよ、祖先の名を恥かしめるやうな行爲をするかと云ふんだ！　貧乏したつて武士は武士だ、さうぢやあないかい、馬鹿な！

興奮して來た庸之助の眼からは、大きな涙がこぼれた。啜泣きを押へやうと努める喰ひしばつた口元、蹙めた額、強張つた頬などが、動く灯かげをうけて、痛ましくも醜く見えた。彼の胸は、八裂きにされさうに辛かつた。

世の中の「惡」と云はれるやうな誘惑や機會は、假令其が如何程巧妙に裝ひ、組み立てられて來やうとも、信頼すべき父親と自分の、士の血の流れて居る心は、僅かでも惑はせないものだと云ふ、平常の信念に對して、此の様に恥辱な事件に父の名が並べられると云ふのは！　餘りひどすぎる。彼は大地が、其の足の下で揺ぐやうに感じた。口惜しい、恥かしい、名狀仕難い激情が、正直な彼の心を力まかせに掻き毮つた。あてどのない憎しみで燃え立つて庸之助は、

「うせやがれ！　畜生!!

と叫んだ。往來の者が皆此の奇怪な若者に注意した。そして或者は嘲笑ひ、或る者は同情し、恐れた若い女達は、私かに彼の方を偸み見ながら、小走りにかけぬけて行つた。

隨分長い間歩いていつもの部屋に歸るまで、浩は殆ど一言も口を利かなかつた。どうしても口を開かせない重いものが、彼の心ぢゆうを壓しつけて居たのである。

其晩彼は、種々な事を考へ耽つた。

「或る方へ〳〵と向つて押して行く力に抵抗して、體をそらせ、足を力一杯踏張つて負けまい〳〵としながらいざと云ふ時に、殆ど不可抗的な力で、最後の際まで突飛ばされる心持を、或る時日と順序を持つて、斯う云ふ事件を起す人々は感じないだらうか？　惡そのものに、興味を持つて居るのでない者は、踏み堪へよろ〳〵とする膝節が、ガックリ力拔けするまでに、どの位體中の力を振り搾るか分らない。けれども現はれた結果は、なるやうにしかならなかつたのである。」

浩は、自分の內心に起る、實に屢々起る、强みと弱みの爭鬪――自分と云ふ人間が、其の長所に對して持つて居る自信と、其の弱點に關する自意識との爭――が齎らす大きな〳〵苦痛を思ふと、又、自分が或時は非常に善い人間であるが、或時はもう〳〵實に卑小な人間にもなると云ふことを思ふと、とかく踏みとゞまりきれずに、どうにもならない際まで行つて仕舞ふ世間多數の人間を、「彼奴は馬鹿だ！」とか、「思慮が淺いから、さうなるに定まつて居るのさ！」などゝ、一口には云ひ切れなかつた。お互の長所を認めて、尊重し合つて行くことは立派だ。けれども又、互に許し合ひ助け合つて行きたい弱點も

各自が持つて居るのだと思ふと、浩は涙がこぼれた。

庸之助が仲間の目を盜んで、あの記事の出て居る新聞を隱さうとして、疊んで懷に入れて見たり、机の中に押し込んだり、それでも氣がすまぬらしく、鞄まで持ち出して、部屋の隅でゴト／＼やつて居るのを見ると、浩はオイ／＼泣きたいやうな心持になつた。

「君はきつと、出來るんなら、日本中の新聞を燒き盡してゝも仕舞ひたいんだらう？　なあ庸さん！

庸之助の父のやうな位置にあり、境遇にある人が、今度のやうな事件に、全く無關係であり得ようと、浩には思へなかつた。

（四）

薄紙を剝ぐやうにと云ふのは、お咲の恢復に、よく適した形容であつた。全く氣の付かないほど少しづゝ彼女はなほつて來た。血色も段々よくなり、腕に力もついて來ると、彼女の全身には、恢復期の何とも云へず活氣のある生の力が充滿し始めた。そして、哀れな程、若い母親として送つた廿前（はたち）の潤んで仕舞つた感情が、又其の胸に蘇つたのである。

寢臺の上に座つて居るお咲の目には、開け放した窓を通して、はてもない青空が見渡せた。かすかな風につれて窮まりもなく變つて行く雲の形、あかあるい日の光を全身にあびて、あんなにも嬉しさうに笑ひさゞめいて居る木々の葉、其の下にずらりと頭をそろへて居る瓦屋根。

「ア！　鳥が飛んで來た！　猫が居眠りをして居る…。まあ彼處に生えて居るのは、何と云ふ草なん

だらう？　可笑しいこと、あんな高い屋根の上に――、隨分呑氣さうだわねえ……

子供のやうに、微笑みながら、先の屋根に、キラ〱しながら、そよいで居るペンペン草を眺めて居ると、夏の眠い微風が、靜かに彼女の顏を撫て通つた。彼女の耳は、風に運ばれて來た種々な音響――かすかな樂隊、電車のベル、荷車のカタ、カタ云ふ音、足音、笑聲――をはつきり聞きとつた。と、同時に

「あ……私は助かつた、ほんとに助かつた!!

と云ふ感じが、氣の遠くなるやうな薫香を持つて、痛い程強く彼女の心を摸つた。

「眞個に私は助かつた。斯うやつて生きて居られる！　思はず嬉し涙がこぼれた。魂の隅から隅まで、美くしい愛情で輝き渡つた。誰にでもよくしてあげなければすまない心持になり、彼女は歡喜の頂點で、啜泣いたのである。

此の不意な、彼女自身も思ひがけないとき、目の眩む程の勢で起つて來る感激は、珍らしいことではなかつた。食事の箸を取らうとした瞬間に、二本の箸を持つて居る手の力が拔けるほど、心を動かされた事もある。軟かい飯粒を、一粒一粒つまみあげて、靜かに味はつて喜ぶほど、彼女の裡にはこまやかな、芳醇な情緒が漲つて居たのである。

「私ほんたうに今まで浩さんに、濟まない事ばつかりして來たわねえ。どうぞ惡く思はないで頂戴。

二人は向ひ合つて居た。

「何故です？　そんな事は何でもないぢやありませんか、お互つこだもの……。

「そりやあ貴方はさう思つて居てくれるけれど…… でも何だわね、貴方が親切にしてくれるほど、私は親切ぢやあなかつたのは、ほんたうよ。

口を開かうとする浩を遮つて、お咲はつゞけた。

「姉なんだから、其位仕て貰ふのは當り前だと思つて居たんだけれど、此頃は何だか今まで、皆にすまない事許り仕て居たやうな氣がしてたまらないのよ。隨分怨んだり――そりやあ眞逆口には出さなくつてもね――したことだつてあるのを、皆が斯うやつて私一人のために盡してくれるのを思ふと……（涙が止度なく落ちて、言葉を押し殺して仕舞つた。）眞個に有難いの。私が惡かつたことを勘辨して欲しいのよ浩さん。私も出來る丈親切にするわこれから……。貧乏すると心が惡い方へ許り行くわねえ。

浩は大變嬉しかつた。姉と一緒に涙をこぼしながら、一言、一言を心の底から聞きしめた。獨りで堪へなければならない苦痛で、かたくなつたやうな胸を、やさしく慰撫されるのを感じた。彼が折々夢想する通り、身も心も捧げ盡して仕舞ひ度い程、偉い立派な心を所有する女性のやうにも思はれる。彼の年が持つて居る種々な感情が燃え立つて、どんな苦勞も厭はないと云ふ程の感激が、努力するに一層勇ましく彼を勵ましたのであつた。

お咲の此の涙のこぼれるやさしい心持は、彼女の周圍のすべての心を和らげた。私立の、兎角三等の患者などに對して、一種の態度を持つ癖のついて居る病院内の者まで、お咲に對して壓迫するやうな口は利けなかつた。皆が彼女に好意を持ち、「五號の患者さんは、何て心がやさしいんでせうねえ。」など と看護婦が噂する程であつた。が、一日一日とかさんで行く費用が、家族の頭を苦しめる問題である。

金策のため、孝之進の出京は益々必要になつて來たのである。

手紙ばかり、いくら度々遣されても、孝之進は上京する決心が着かなかつた。金の出來るあてもない。それを只體ばかり運んで行つても仕方がないと思つて居たのである。――藩の近習として、家老の父を持ち、あゝ云ふ生活をして居た此の自分が、今、娘の療治に使ふ金さへ持たないと云ふことを考へると、憤りもされない心持がした。どうにもならない時世が、彼の時と此の時との間に、手を擴げて居ることを孝之進は感じた。が、事態は終に彼を動かして仕舞つた。有るだけの金を掻き集めて、孝之進は上京したのである。

東京に行つたところで、何一つ自分を喜ばせるものはないのだと、思ひきめて來て見ると、先づ第一停車場に出迎に來て居た浩を見た時から、それはまるで反對になつて仕舞つた。

あんなに小ぼけな、瘠せた小倅であつた浩が、自分より大きな、ガツシリと頼もしげな若者になつて居るのを、ひさぼるやうに見ると、

「オー」

と云ふ唸り聲が口を突いて出た。

「生意氣さうな若者になり居つたなあ。」

肩を叩きながら、彼は泣き笑ひした。

彼の一擧一動はひどく浩の心を刺戟した。身のこなしに老年の衰へが明かになつて來た彼、少くとも浩の記憶に遺つて居た面影よりは、五年の月日が餘り年をよらせ過ぎたやうに見える彼に對して、浩は

痛ましい感にうたれた。そして、浩がさとつた通り、孝之進は、健康な息子に會ふことも、生きられた——ほんたうに、もうすんでのところで、してやられるところだつた危い命を取り止めた——娘に話すとがどの位嬉しかつたか分らないのである。けれども、金のことになると——。孝之進の頭は滅茶々々になつた。堪らなかつた。そして歯と歯の間で、彼はいまいましげに唸るのであつた。

電車が！　自働車が吠えて行く。走る車、敷石道を行く人の足音。犬がじやれ、子供が泣き、屋根樋に雀が騒ぐ……。自轉車が蹴立てゝ通る塵埃を透して、都會の太陽が、赤味を帶びて照つて居る。

正午少し過ぎの、まぼしい町を、孝之進は臆病に歩いて行つた。何も彼も賑やかすぎ、激しすぎた。目が不自由なため、絶えず危險の豫感に襲はれて居る彼は、往來を何かと唸つてかけ拔けると、どんなに隅の方へよつて居ても、のめつて轢かれさうな不安を感じた。縋る者もない彼は、脇に抱へた縞木綿の風呂敷包みをしつかりと持つて、探り足で歩いた。國から持つて來た、「狙仙」の軸を金に代へようとして行くのである。鈍い足取りで動く彼の姿は、トツトツ、トツトツと流れて行く水の中に、只一つ漂つて居る空俵のやうに見えた。

「これはどんなものだらうな？」

孝之進は、自分で包から出した「狙仙」を、番頭と並んで座つて居る主人に見せた。

「さあ、どれ一寸拜見を……。」

利にさとい主人は、軸を見る振りをして、孝之進の服裝其の他に、鋭い目を投げた。そして何の興味

も引かれないらしい、冷かな表情を浮べながら、
「眞物ぢやあございませんねえ‥‥。
と云つた。列べてある僅かの骨董などを、ぼんやり見て居た孝之進は、さほど失望も感じなかつた。
「さうかな？　賴んだ人は（彼は一寸躊躇つた。）眞物に違ひないと云つて居つたんだが‥‥。
「へ、、、。そりやあどうも‥‥。かう申しちや何でございますが、贋物にしても隨分ひどい方で。へ、、、。

それから主人は、孝之進がうんざりする程、贋だと云ふ證據を並べたてた。
「が、切角でございますから、十圓で宜しきや頂いときませう。それもまあ、狙仙だからのことで‥‥‥‥

孝之進は、主人が列擧したやうな缺點――例へば、子猿の爪の先を狙仙は斯う書かなかつたとか、眼玉がどつちによりすぎて居るとか云ふ――を、一つ〱眞擬の區別をつける程、鑑賞眼は發達して居ない。（若し主人の云ふことが事實としたら。）それに、又持つて歩いて、どうすると云ふ氣になれないほど、體も疲れて居る。「一層賣‥‥」けれども、考へて見れば假にも家老の家柄で、代々遺して來たものに、僞物のあることは、まあ無い方が確かだらうとも思はれる。うつかり口車になど乘せられて堪るものかと感じた。で、彼は賣るのをやめて、歸らうとまで思つたが、差し迫つては十圓あつても餘程助かる。彼は到頭決心をした。そして、皺だらけな札と引きかへに、家代々傳はつて來た「子猿之圖」を永久に手離して仕舞つたのである。

(五)

「ホーラ見ろ!!

庸之助は飛び上つた。

若し萬一、彼の記事通りの恥づべき行爲があつたなら、親子諸共、枕を並べて切腹するほかないとまで思ひつめて、事實を訊ねて遣つた返事として、父自身で書いた此の、此の手紙を貰つたのだと思ふと、五日の間あれほどまでに苦しんだ煩悶が、驚歎せずには居られない速さで、彼の心から消えて仕舞つた。激しい嬉しさで、彼は如何して好いか解らなかつた。自然に大きな聲が、

「ホーラ見ろ! 僕の思つた通り、きつかりその通りぢやあないか! 見ろやい!!

と叫んで、じつとして居られない二つの手が、無意識に持つた手紙を苦茶々々にまるめさせた。書面の彼方此方に散在して居る「公明正大」と云ふ四字が、天から地まで一杯に擴がつて、仁丹の廣告のやうに、パッと現はれたり消えたりして居るのを彼は感じた。

「流石は父さんだ。偉い! 見上げたものだ。なにね、そりや始めつからキット斯うなんだとは思つて居たんだが、ちつとばかり心配だつたんでね、父さん! ハヽヽヽヽ。

満足するほど、獨りで泣いたり笑つたりした揚句、融けさうな微笑を浮べながら、庸之助は部屋に戻つて來て、何か書きものをして居る浩のところへ、眞直に進んで行つて、肩に手をかけた。

「オイ! よかつたよ!

彈んだ聲が唇を離れると同時に、肩に乘せて居た彼の手の先には、無意識に力が入つて、握つて居たペンから、しぶきになつてインクが飛び散るほど、浩の體をゆりこくつた。

「う？　」

「よかつたよ君！　もうすつかり解つた。何でもなかつたんだよ!!

笑み崩れた庸之助の顏が、「あの事だよ〱」と囁やいた。

「え？　ほんとうかい？　ほんとうに何でもなかつたんかい？　そーうかい！　そりやあほんとによかつたねえ君！　ほんとうによかつた！

極度の喜びで興奮して、殆ど狂暴に近い表情をして居る庸之助の顏を、一目見た浩の顏にも又それに近い程の嬉しさが表はれた。

「よかつたねえ。お目出たかつたねえ……。

浩は、庸之助の肩を優しく叩きながら、感動した聲でいつたのである。

「情けないが事實に違ひないと思つたのに……。さうだつたのか！　ほんとうに何よりだ。嬉しいだらう？　君！　結構な事だつたなあ！

庸之助は、翌日から浩の目には、いぢらしく見えるほど、元氣よく、一生懸命にすべての事につとめた。店の仕事は勿論、自習して居る數學や英語にでも、今までの倍程の努力を惜しまない。そして、わざわざ浩を捕へては、「あの時、君は分らないつて云つたねえ。」と、そのつどに新らしい喜びに打たれるらしい聲で繰返しては、愉快げに笑つた。

けれども、事件はまるで反對の方に進行して居たのであつた。有力な辯護があつたりして、一旦歸宅を許されて居た好親は、丁度好い工合に其の時、息子からの手紙を受取り、返事を遣つた。が、それが東京へ着いたか着かぬに、彼の最も信用して居た男が、豫審でうつかり一言、口を滑らしたがために、好親の運命は、最も惡い方に定まつて仕舞つた。豫審、公判、宣告、總ては順序よくサッサと運ばれ、彼は二年の苦役を課されたのである。

庸之助の「信頼すべき父親」の一生に、最後の打撃が與へられた日の翌日は、祭日であつた。

浩は朝早く店を出て、十時過になつて歸つて來た。一歩、部屋の中に踏み込んだ時、浩は自分を迎えた數多の顔に、一種の動搖が表はれて居るのを直覺した。ざわめいた、落着きのない空氣が彼の周圍を取り圍んだ。浩は、何か求めるやうに部屋中を見廻して、「どうかしたのかい？」と云はうとした刹那、その機先を制して、興奮した聲で奥の方から

「庸さんが歸つちやつたよ。親父が、牢屋へぶちこまれたんだとさ」

と叫んだ者がある。譯の分からない笑聲が起つた。そして誰も〳〵が、變幅對の相棒を失つた彼――何ぞと云つては庸之助の味方に成つて居た彼――が、どんなに喫驚もし、失望もすることかと云ふやうな、好奇心に滿ちた目をそばだてた。けれども、皆は少しがつかりした。彼等の期待して居た通りに場面は展開されなかつたのである。浩は庸之助のことなどに無關心であるかと思ふ程、平然として居た。「そんな事が、なんだい？」と云つて居るやうに見える。少なくとも、若い者達の豫期を全然裏切つた態度に見えた。が、彼の衷心はまるで反對であつた。複雜な感動で極度に緊張した彼の頭は、悲哀とか、驚愕

とか、箇々別々に感情を切り離して意識する餘裕を持たなかつた。心の何處かに、大穴がポッカリ明いたやうでもある。體中に強い壓を加へられて居るやうで、息苦しかつた。目の奥で天井と床が一かたまりに見える程混亂しながら、傍で見れば、茫然と無感動らしい擧動で、浩は今まで庸之助の使つて居た机上に、並べられてある遺留品を眺めて居た。使ひかけの赤、黒のインク壺、硯、其の他塵がみや古雜誌のゴタ〳〵して居る眞中に、黒く足跡のついた上草履が、誰かの惡戯で、きつちり並べられてある。指紋まで見えさうに寫つて居る足跡を見ると、浩は急に、年中しめつてつめたかつた、膏性の庸之助の手の感觸を思ひ出した。その思ひ出が、急に燒けつくほどの愛情を燃え立たせた。彼の心に、はつきりと淋しさが辷り込んで來た。涙が自づと湧いた。

「到頭斯うなつたなあ……。彼の人も好い人だつたのに!

自分の机に座つて、あて途もなくあるものに、手を觸れて心をまぎらさうとして居た彼は、鐵の文鎭の下に、一本の封書を發見した。ハッと思つて、一度目は殆ど意味も分らずに讀んだ。二度三度、浩は一行ほか書いてない庸之助の置手紙を離さうともしなかつた。其は端々の震へた字——讀み難いほど劃の亂れたよろけた字——で「もう二度とは會はない。親切を謝す。Y生。」と、弓なりに曲つて只一行ほか書かれては居なかつたが、浩にとつては、それ等の言葉から三行も四行もの意味がよみとれたのである。

「木綿さん」と云ふかはり、もう庸之助には、「火の子」と云ふ綽名が付いて居た。赤い着物の子で、それ自身も何時、火事を起すか解らない危險性を帶びて居るからと云ふのであつた。

平常から隨分反感は持ちながら、さほどの腹癒せも出來ずに居た者達は、庸之助の不幸を眞個に小氣味よくほか思つて居ないことは、浩に不快な、やがては恐ろしいと云ふ感じを起させた。抵抗力のないものに對して、何處までも、自分等の力を振り廻し、威張り、ちゞみ上らせたがつて居るらしいのが、厭であつた。雇人が勤勉である事を希望しながら、一種の雇人根性を當然なものとして扱ひつけて居る、店の先輩達は、庸之助が去る時まで持續した、忠實な態度を、その儘無邪氣に受け入れられないらしかつた。斯うなると、彼が正直で、よく働く若い者であつたと云ふ、普通ならば、賞めらるべき經歷まで、惡罵の種にほか、ならうともしなかつた。甲が三つ丈彼を惡く云ふと、乙は五つまで、丙は十までと、どんづまりまで、惡いだらけにしなければ、氣が濟まないらしく見える。そして、今まで店内で起つた種々の不祥事件——假令へば、一寸した金錢の行違ひや、顧客先の失敗とか云ふこと——は皆、庸之助の故にされた。何の罪もない彼を、寄つてたかつて罵倒するのを、幾分か肯定し、援助するやうな表情をして默つて聞きすてゝ置く者などを見ると、浩は擲りつけたい程、腹が立つた。ひどいと思つた。けれども、口で云ふ程内心では、庸之助に對して、好意も惡意も、さほど強くは感じて居ないことが次第に解つて來た。

「あん畜生が、どう斯うしやがつた。

などゝ、平常は愼しまなければならない言葉も、或程度までは思ふ存分ぶちまけられ、庸之助と云ふ主題に關してだけは、下等な戯言も批評も、かなり默許されて居るやうな、店中の空氣が、平坦な生活に倦怠して居る若い彼等を、充分興奮させて居るのが、浩には分り出した。總てが興味中心で動いて行

く。面白半分である。そして或る者は、幾分庸之助に同情を持ちながら、大勢に反した行爲をする丈の勇氣を持たないで、濟まないやうに思ひながら、皆の中に混つて心ならずも、嘲笑したり、罵つたりして居るのも見られた。浩は庸之助に強い〳〵同情を燃やしながら、又一方には、仲間の者達にも、哀憐の勝つた好意を持つて居たのである。

（六）

庸之助が去つて、三日になり四日に成つた。あゝして行きはしたものゝ、會はないで別れた事でもあり、葉書位は寄こすだらうと、心待ちに待つて居た浩は、其の望みもそろ〳〵斷念しなければならなくなつた。興奮し通して居た心持が、次第に落着くに從がつて、彼は、ほんとうの衷心から涙の滲み出るやうな思ひ出や、考へに耽り始めた。

それは、丁度其の月の決算に程近い日であつた。或一人が不意に、庸之助の扱つて居た帳簿を、一應檢べる必要を云ひ出した。庸之助の居た時分は、かなり彼を信用して居た筈の者まで、今までそのことに不念だつたのを、取りかへしのならぬことをしたやうな表情を浮べて、晝の休みを潰して、數字、一字一字から、說明書まで檢べて行つた。何か面白い發見でもするやうに、大聲で庸之助の書いた金額を代帳に引きくらべて讀み上げるのを聞きながら浩は、妙な心持がした。辱かしめを受けて居るやうな、又安心と不安の入混つた心持になつて居た。

「庸さんには、絶對にそんな心配は無用だ！

浩はそれ丈で滿足して居たかつた。けれども、其れを許さない、自分自身の心の經驗を持つて居たのである。

限られた僅か許りの金で、自分が望んで〳〵居た本を買ふ。これと、此れとを買ひたいのに、持つて居る金では一錢足りないと云ふ時――ほんとに持つて居る人から見れば、金錢と云ふ感じを起させられない程僅かな一錢――、自分の心の裡には、實に言葉で表はせない程の心持が起る。「文字」を尊重して居る彼は、著者がそれを完成するまでに注いだ心血を思ふと、餘程法外だとでも思つた時のほか、價切ると云ふことが出來なかつた。古本屋――彼は新本を買ふ丈の餘力を持たない。――に對しては、或點から云へば馬鹿正直だとも云へるけれども、彼の心は、或人の本を見ると、眞直ぐにそれを書いた人自身に對する尊敬となり同情となつたのであつた。で、彼は、そのどうしても手離さなければならない一冊の本を持つて、一面理智の監視する前で、漠然とその足りない一錢の湧いて來ることや、主人がまけませうと云ふのを期待して見たりする。

たつた一錢、何處かの家の、火鉢の引き出しにさへころがつて居さうな一錢が足りないばかりに、こんなにも欲しいものを見捨てゝ行かなければならないのか？「下らないなあ、定まつて居ることを、何故さうまご〳〵して居るのか？」冷たい笑ひが、自分自身の裡から發せられるのを感じながらも、彼は欲しいと云ふ心持を押へられない。

「本の萬引をする積りかい？」

浩は、思はず赤面して、不思議相な顏をして居る小僧にそれを返し、一冊だけを買つて歸つて來る。

そんな事は、餘裕のある生活をして居る人には、恐らく只馬鹿な、意志の弱い事としてほか思へないだらうと云ふことは、浩自身も知つて居る。けれども屢々こう云ふ心の經驗をして居る彼は、ほんの出來心で、反物などの萬引をする女の心持がよく解つた。幸自分は、思ひ切れるし、又對照となつて居るものが、それ丈ほか求めても得られないものではないから、自分自身ほか感じられない、内心の苦痛だけですむが……庸之助が、此店としては咎めずには濟まされない事をして居るとは、思ふ丈でも浩は辛かつた。が、嬉しいことに、彼の不安は單に杞憂に過ぎなかつた。帳簿には、一厘一毛、疑問な點さへもなかつたのである。

けれども、頭を集めて調べて居た連中の中からは、

「なあんだ！　何でもなかつたぢやあないかい！

と云ふ不滿さうな、つぶやきが起つた。上役の者までが、意外さうな――少くも只安心したと云ふ丈ではない――表情を浮べて、「偉い時間潰しをやつたなあ。」と云ひながら、帳簿を伏せるのを見た浩は、思はず愕然とした。ほんとうにゾッとした。

「彼が正直であつたのが、皆は不平なのだ！　若し、一ヶ處でも掛け先を、胡麻化してゞも居たら、どんなに噪しやぐ積りだつたのだ？　え？

憤り――友愛に强められ、燃え立つた憤り――が、彼の胸一杯になつた。何か云はずには居られない感情が、喉元に込み上げた。けれども言葉が見つからなかつた。何と云つて好いか分らなくなつて、彼はフイと、部屋を出て仕舞つた。

それからやゝ暫く、仲間の一人が彼を搜しに來るまで、浩は彼の「隱れ家」と呼んで居る石段で、種々な考へに沈んで居た。（K商店の二棟の建物を、接續して居る廊下の外に、六段ほど苔に包まれた石段がついて居た。日光が、建物に遮られて、直射したことがないので、石段から擴がつて居る二坪ほどの地面には、一杯苔がついて、陰氣ではあつたが、外の何處よりも落付いて居た。浩は其處に腰をかけては、考へるべき事を考へた。隱れ家と云ふのが、自づと其處を呼ぶ名になつて居たのである。）彼は、どんな人に對してゞも、善人だとか惡人だとか云ふ斷定は下されないものだと思つた。「まして、或人のすることは、惡いに定まつて居るなどゝ思つてはすまない。互に許し合つて行かなければいけない……けれども。」彼は、憤りとか、憎みとか、抵抗とか云ふことを、全然、自分の心から除去してしまふことは到底不可能であつた。「何か一つ過失をした者の前に、我々は決して、尊大に完全さうにかまへてはいけない。自分でもいつ、するか分らないぢやあないか？」浩は「お互に人間なのだから、出來る丈愛しあつて、仲よくして行かなければいけない」と思つて居る。そして、弱い者の前に、强がつて居る者を見ると腹が立つ。特殊な自分の權利を勢一杯利用してさう云ふ特典を持たない者に誇らうとする者に對して憤りを感じる。

けれども、もつと〳〵自分が努めて、心を練り、善くし、賢くしたら、腹を立てることも、憎むこともなくなる――例へば、Aと云ふ金持の男と、Gと云ふ貧乏のどん底に居る男がある。Aが、何の働きもせずに、それで居て立派な生活をして居るのを、いくら働いても食ふ丈のことも出來ないGが、「あゝ羨しいなあ。」と思ひ、やがては、狂的な嫉妬で、Aを殺して仕舞ふ。金を欲しいのでもない。Gには只

Aの面を見ると癪に觸ると云ふ心丈が强かつたのである。Aの家族は悲しむ。Gを憎む。出來る丈酷刑に處して貰ひたいと思ふ。Gが死刑にされても、まだ足らなく思ふ。こう云ふときに、Gの心持も、Aの家族の心持も、何處らも肯定され、理智的ばかりでなく、ほんとうの心から、兩方ながら憎む念などはない――と云ふやうになる筈なのかもしれないとも思つた。がそれは大變むづかしい事だ。

「總て好い……」と云ふ言葉を思ひ浮べて、彼は涙をこぼした。

（七）

丁度此時、東京驛には、下關發の急行列車が到着した。彼の頭を押しつぶされさうに、重苦しく陰氣な通路から、吐き出された澤山の旅客の中に混つて、庸之助の姿が見えた。小さい鞄を一つ下げ、落着かない目で周圍を見廻して居た彼は、やがて飛び出すやうに雜沓する裡を、かき分けて何處かへ行つて仕舞つた、都會の中央の、此の忙がしい裡で、何の奇もない、田舍者丸出しの一靑年の彼に、注意を引かれた者は、只の一人も無かつた。

庸之助は、彼の日に東京を立つと、殆ど夢中で故鄕の小さい町まで運ばれて行つた。そして、停車場へつくと直ぐ其の足で、かねて見知り越しであり、今度の父親の事件に關係した某辯護士を訪ねた。職業から來る、重々しい又、幾分傲慢のやうにも思はれる辯護士の前に、息をつめて立つて居る庸之助の、煤煙や塵に穢れ、不眠で疲れ切り、靑黑く膏の浮いた顏は、非常に憔悴して見えた。

辯護士は、一通り形式的な同情を表してから、事件の說明にかゝつた。彼の言に依れば、今度の事件

の陰には、もつと澤山の小事件が伏在して居て、三年前に、郡役所の増築のあつた頃から胚胎して居たものであつたさうだ。町長、町會議員の選擧の時々に、行はれて居た種々な術策なども、法律上から云へば、立派に一つ一つの罪狀となつて居たのである。父親の行爲から云へば、二年の刑期は寧ろ輕いと云はねばならぬ。

「それが私の腕一杯でもあつたし、又法律の許す範圍では恐らくこれが限度だつたでせう。

最後に辯護士が、落付いた口吻で、云ひ了つた時、庸之助は、大きな力でぶちのめされたような氣がした。土氣色な顏をし、手足を氷のようにして、項垂れて居る彼の唇は、ピリ〳〵と痙攣して居た。

「分りました。有難う。實に……

强張つた舌で、辛うじてこれ丈云ふと、彼は早速暇をつげた。

何處をどう歩いて居るのか解らずに、只矢鱈に足を動かして居た彼は、屢々「冤罪だ！　實に恐ろしい冤罪だ！」とつぶやいた。けれども、何か心の中で、ヒソ〳〵と、其れを否定して居る聲があつた。

「冤罪だ？　お前の親父が？

通る者の誰も〳〵が、自分の顏を見ては、微かながら、侮蔑的な注目を與へて行き過ぎるのを彼は感じた。

「お前かい？　息子と云ふのは……。

どの目も〳〵咎める。身の置場の無いと云ふやうな不安が、始めて庸之助の心に强く〳〵湧いたのである。永住の地と思ひ定めて歸つた故郷も、矢張り今の自分を安らかに、落付かせてはくれぬ。狹量な、

無智な批評の焦點とならうよりは――。どんな人間でも匿ふ洞や、小道の多い東京へ又戻る決心をした。

もう再び踏まぬかもしれぬ土地と、離れるときに、せめて父親にでも會つて行きたかつた。監獄の門まで行つたことさへあつた。が、考へて見れば、「公明正大」とあんなに書いてよこした彼が、赤衣を着、鎖につながれた姿を見ることは、又見せることは互に、何と云ふ辛いことか、假令冤罪にしろ（庸之助は冤罪と云ふ字を見ると、心がグーッと壓しつぶされた。）餘り苦しすぎる。恐ろしい。到頭面會を斷念した彼は、僅かでも二人の間に、「何がほんとだか解らないもの」を置き度かつたのである。

東京へ一足踏み込むと同時に、總てを諦らめて何處かの職工にでもならうと思つて來た、彼の心は動かされた。名譽心、功名心を刺衝するあらゆる事物が、年若い彼を苦しめ、虐なんだ。自分よりもつともつと學問のない、力の無い者まで、社會の表面で相當に活動して居るのを見ると、今更自分をさほどまでに見下げることも、躊躇された。假令のろ／＼とではあつても、周圍の若い者達が出世の道をはかどらせて居る裡に、自分一人故意と取り殘される必要もなく思へた。

木賃宿に近い程、下等な旅籠の中二階で、晝飯がはりの燒藷を、ボツ／＼食べながら、庸之助は身の振り方に迷つて居たのである。

けれども父親の上京などで、せわしい日を送つて居る浩は、庸之助が淺草の一隅で、そんな風にして居やうとは、勿論知らう筈もなかつたし、考へられもしないことであつた。彼は、病院と父親の居る小石川の家との間を、種々な用件で往復して居たのである。

此頃になつては、旣お咲も、良好くなる丈よくなりきつて仕舞つたやうな容態であつた。重く考へて居る浩にも、彼女の顏色や髮の艶などは、以前よりも健康らしくなつた事は否めない事實である。斯うなつてからまで病院の世話になつて居るのは、金持のする事だと云ふ皆の思ひが、やがてお咲自身にも退院を思ひ立たせた。醫者も止めはしなかつた。これから先の治療は、彼等が工面し、掻き集めて出す費用に匹敵するほど、現はれた効果がないので、丁度孝之進の目が、どうせは盲目に成ると定まつてからは、無理でない讀み書きを許された通りの心持なり事の成り行きなりが、お咲の上にも繰返されたのである。退院したとは云つても、一月に一週間づゝ入院して注射を受けなければならない條件つきであつた。其故、その每月に一回づゝの入院費の支出に就ても、彼等は又工夫しなければならない。自分の爲にせずとも好い借金をさせたり、相談をさせたりすることに、すつかり氣がひけて、家中の者に氣がねして居るお咲を見るのが浩には辛かつた。此の金目のかゝる病人一人を抱へて、家の者は一人として、其のやうな言葉を口にこそ出さなかつたけれども、互の顏が合ふ度びに、目と目が言葉にしない斯う云ふ心持をつぶやき合つた。——家中がどんなに、しめつぽく暗くなつて居るか解らない、これといふのも皆あれのおかげだ。浩は金が欲しいと思つた。二十圓でもまとまつた金があれば、今の皆の心がどんなに引き立てられるかしれないし、又姉にしろ、身を削るやうな涙をこぼさずとも濟む。金があつたらなあと、はつきりつぶやきさうにまで、ほんとうに強く彼は思つた。けれども十五圓ほか月に貰はない——それも漸々今年の四月から——で、貯蓄などは出來ないのに、二十圓はおろか五圓だつて三圓だつて、右から左へ動く金は持つて居ない。今までだとて浩は勿論、決して豐かな若者ではなかつた。け

れども金には——只本を買ふ場合を除いて——すべての時かなり、さつぱりして居た。が、年を取り、衰え切つたやうな父親が、苦しさうな思案に暮れて居るのを見ると、又、姉が啜泣きながら、「こんなに辛い思ひをかけたり、自分でもする位なら、私一寸も癒りたくなんぞなかつたわ。」と云つて居るのを見ると、浩の心は亂された。どうにかしたいと思つた。店で、帳簿に何萬何千と云ふ金額を幾通りも〳〵記入して居ると、浩には餘り多過ぎて、平常あゝやつて通用して居る金なのだとは思へないやうな氣がした。

苦しい思ひで埋まつたやうな毎日を送りながら、浩はフト思ひ付いて、萬朝に短篇の小説を投書した。腕試しと云ふこともあるが、賞金を一層彼は望んで居たのである。けれども、結果は反對になつて仕舞つた。掲載され、金を送られて見ると、彼にとつては、待ちに待つて居た十圓よりも、掲載されたと云ふ事の方が倍も〳〵嬉しかつた。彼は興奮した。以前から、單に趣味と云ふよりは、もつと喰差さつた愛情、畏敬を持つて文學に接して居た彼は、この事で彼の境遇としてはかなり大きな勵ましを得たのであつた。

十圓。持つた瞬間彼の頭の裡には、買ひ度い本がずらりと並んでおいで〳〵をした。けれどもすぐその晩、浩は、お咲の手にそつくり渡して來て仕舞つた。

其の次にお咲や孝之進などに會つたとき、浩は足の裏がムズ〳〵するやうな氣がした。「彼の自分にとつては、忘れ難い十圓を皆のために手離したのだ。よかつた。けれども……？」彼は誰か何かそれに就いて云ひ出しはすまいかと思つた。そして、心の何處かで待つて居た。が、歸るまで終に一言も、それ

が云ひ出されなかつたときには、安心したやうな物足りないやうな心持が、一杯になつて居たのであつた。

浩の十圓は、役には立つたに違ひないが、孝之進の苦勞を輕める事は勿論出來ない。彼は窮した。そして終に高瀨と云ふ、先代からの知己で、浩の身の上も心配して居てくれる家に、月十圓づゝの出費を賴みに出かけた。

主人夫婦は非常に同情した。丁寧に相談に乘つて、「どうにかしてはあげたいが、何にしろ月十圓づゝ、限りなくと云ふことは、なか〳〵難かしい事だから。」と云ふ言が繰返された結果、或一つの案が出された。それは、孝之進の居る村の、Mと云ふ物持ちの先代が、企業の資本として幾何かの金を、高瀨から借用したまゝになつて居るから、それを返濟させるやうに骨を折つてくれゝば、互に借りるとか貸すとか云ふ心持なしで、相當な費用を出してあげられると云ふのであつた。其の金額は大きかつたが、現在のM家の經濟狀態では何でもない事であつた。成功する望みが、孝之進の目にさへ、明かなものであつた。

（八）

其れから間のない或日の事である。

商品の新荷が到着した許りのK商店は大混雜をして居た。裏の空地で多勢の人足が荷を動かす掛聲、地響、荷車の軋り。倉庫へ運び込む一騷動、帳簿との引合せなどで、店員は大抵表や裏に出拂つて居た。

好奇心に馳られて、太い長いボールトで押しつぶされさうになるのも知らないで、覗いて居る澤山の子供や子守を追ひ拂ふ丈でさへ一役であつたのだ。

浩は平常の通り自分の机の前に腰かけて、帳簿を整理して居た。外界から來る雜駁な刺戟と、內心のかなりにまとまつて居る落着きが、皮膚の表面で混亂して居るやうな心持になりながら、彼は指の先を汚して——浩はペン軸の極くの下部を握るので人指し指の先と中指の第一の關節を滅茶々々に汚す癖を持つて居る——せつせと數字を書き込んで居ると、突然大きな音を立てゝ電話が鳴つた。彼は頭を上げた。

「誰か居ないかな?」目で搜ねたけれど、自分を措いて誰も見えないので、浩はいつもの癖通り左の耳に受話機を取りあげた。

「モシ、モシ、貴方はK商店ですか?」

太い聲が、最初のモシ、モシと云ふのに、非常に抑揚をつけ、區切りを切つて呼びかけた。Sと云ふ大きな會社の庶務から、取締りに出て欲しいと云ふのであつた。Sと云ふのは、平常店とは殆ど關係のない會社なので、解せない顏をして出て行つた取締りは、かなり長く何か話して居たが、やがて歸りしなに浩の傍を通りながら、「杵築の事を訊いて來たよ。」と一口云つて、其のまゝ行つて仕舞つた。

「杵築の事?」餘りいきなりだつたので譯の分らなかつた浩は、暫く考へて居るうちに、就職の事について問ひ合はせがあつたのだと云ふことが解つた。

「就職? それぢやあ東京に出て來たと見えるなあ。Sの事務に入らうとして居るのだ!」

さう思ふと同時に、彼は取締りが何と云つたかと云ふ事が非常に不安になつて來た。庸之助が自分の一生に見切りをつけて仕舞ひ得なかつたと云ふことが、一面非常に嬉しかつたと共に、何だか痛ましいやうな氣もした。

自分で自分を如何う所置して好いか解らない程、强い激しい、内心の動搖や爭鬪に苦しみぬく時、浩は餘り辛いと、たゞの一秒でも好いから、何も思ひも感じもしなくなつて見たいと、戯談でなく思ふ。何一つ音のしない、物のない處に、目を瞑つて座つて居たくなる。けれどもそれならばと云つて、種々起つて來る疑問や感激や思想の變化に伴つて來る一種の不安定さなどを、回避しやうかと云へば、さうではない。彼の衷心では努力、只努力と絕叫して居る。「どんなに辛くても辛棒しろ。じッと踏みこたへて前へ進め。努力、お前を改善するのは努力丈だぞ！　確かりしろ我若者！」極度な靜寂を求める心の一面には、高々と斯う叫ばれる。「さうだ！　ほんとうに確かりしろ、我心！」彼は感激して淚をこぼす。益々努める。彼の心は苦しむ。いよ〳〵苦しんで突き通るべき種々のものにぶつかる。

其故、彼はどのやうな苦痛――外面的にも内面的にも――が現はれやうが、それに負けて引き下る自分を豫想し得ない。從つて彼は何事も諦め切れない。失敗した人が、どうせ駄目な事は第三者の目から見れば明白なのに、「新規蒔なほし」に遣り出す心持はよく分る。ネロが、短劍を胸に擬してまでも自分が今斯うやつて死なゝければならないことを諦められなかつた心持を思ふと、浩は、男らしくないとか卑怯だとか云ふ事を通り越して、犇々と自分に直接な共鳴を感じるのであつた。其故、庸之助が又上京し、Sへ勤めやうとする事は彼に充分同情出來た。

「それに、彼の人は、何も自分自身を見捨てる理由はないのだ。どうぞうまく、まとまれば好いがなあ……。」

浩は、庸之助の體を、高く〳〵兩手に捧げて、ドン〳〵と大きな廣い公平な道を歩いて行きたいやうな心持がした。けれども、庸之助が働かなければならない普通の世間では、庸之助の父親は「罪人」――浩は、「罪人」と云ふ時、例へば「彼奴は一度牢へ入つて來たんだとさ。」と云ふ時、一種異つた表情を大低の人は現はすことを、認めて居る。――で、庸之助のやうな「罪人の息子。」は自分等の仲間に入れて置かれないやうに考へられて居る。

多勢子供達が遊んで居る。「鬼ごつこするから、おゝ――いで。鬼ごつこするからおゝ――いで！」歌ひながら、手を組み合つて、仲間を集めて居るところへ、弱い音なしい子が來かゝつて、入れて欲しさうな顔をする。歌つて居た子達がそれと見ると、急に丸くなつて「ねつきりはつきり、これつきり、あとから來る者入れないぞ。」と叫びながらまとまつて仕舞ふ。除けものにされた子供は、そんな仲間を憎まない丈心が善くなるか、それ等を向ふに廻して勝つ丈、惡くも強くもなるかしなければならないやうになつて來る。

庸之助の現在の位置は、さうではあるまいかと、浩は思つた。大きな會社とか商店とか云ふ、希望者の多いところでは、彼一人斷はると云ふことに何の痛痒も感じないのだ。世間多數の人々を對手に仕て行くには、對手になる人が一寸でも不安や不愉快に思ふものを、假令それがどんなに些細なことでも、保持して行くことは、會社とし商店として不得策なことは、彼にもよく分つて居る。「取締りの人は、彼

を辯護し、或は賞揚して置たかもしれない。けれども突然彼が辭した理由を説明すれば、萬事は定まつて仕舞ふ。ほんとにもう何も云ふ事はないと云ふほど、きつぱり定まつて仕舞ふのである。」彼は、妙に悲しいやうな、大きな愛情と大きな反感が縺れた心持に打たれたのであつた。

其れから二度程、各自違つた會社や商店から、庸之助に就ての問合はせが來た。それが若い者の仲間に知れ渡ると、まるで彼が生きて居ると云ふ事からが、既に自分等に對して潛越であるやうな、冷笑や罵詈が、彼の名に向つて浴せかけられたのである。

浩は、非常に不安であつた。此の東京の中に、次第に悲境に沈みつゝある？　自分の親しい友達が居る、自分の目から遁れて居ると思ふ丈で、非常に心が平らかではなくなつた。始終心の隅に、彼の名と姿が種々な想像を加へられて重く横はつて居たのである。

往來は混んで居た。今出た許りの――行きの電車に追ひ付かうとして駈け出した浩は、とある本屋の傍まで來かゝると、つい今まで自分の直ぐのところで鈴を鳴らして居た夕刊賣りが、急に周章てた様子で身をよけたのに、フト注意を引かれた。足が鈍つた。思はず振返つた。そして何かゝら遁れるやうに兩手で人波を掻き分け〳〵、急いで行く後姿――どの賣子もする通りに、社の名が染め拔きになつて居る印袢纏を着て、籠を斜にかけた後姿――を眺めた。浩は、彼の驚きの原因を求めやうとして周圍を見廻した。が、せわしい夕暮時に、何の特徴もない賣子に、注意を引かれたのは、自分一人限りだと解ると、一層彼の若者の擧動があやしまれた。暫く立ちどまつて居た彼は、やがて我ながら好奇心の強いの

に、少し驚ろかされ氣味になつて、又歩き出さうとした。實際五六歩足を運びながらも、何故だか心が引かれた。何だか自然と足が止まつて、無意識に見返つた時！　ほんとうに其瞬間、チラッと見えて、隠れた彼の若者の顔が、ほんの一瞥をくれた丈ではあつたが、彼には見覺えがあつた。忘られない顔であつた。

「杵築君だ‼

浩は、張り切つて居た弦が切れたやうな勢で馳け出した、今あの顔が見えたと思つた處へ來た時、彼の姿はもう其處には見えなかつた。

人溜りの裡を彼は捜した。が、見えない。見つからない。人に聞かうにも何となし氣が臆した。彼は力抜けのした様子で、立ち澱んで居ると、さつきからその様子を見て居た年寄が、

「今の夕刊賣りかね？　そんならホラ、其處の角を曲つて行きましたよ。」と敎へてくれた。

東京の大通のかげには、よく思ひがけない程狹く、ごちや〳〵と穢い通りがある。其の通りも其の一種で、細く暗い道一杯に、饐た臭ひが漂つて居た。ぼんやりした明りにすかして見ると、一ヶ處窪んだ、何處かの裏口らしい處に、彼方を向いた一つの影が立つて居る。

「あれだ！

又逭げられては大變だと云ふ虞れで、心が一杯になつた浩は、恥も外聞も忘れて、四這ひになる程體をかゞめ、どんなに晝見たら穢いか分らない道の片側にぴつたり身を引きそばめて、息を殺して一歩、一歩〳〵動いて行つた。變則な緊張で彼は殆ど不愉快なほど、奇妙に興奮して居た。視點がはち切れさうな鼓動と一緒に近づいたり遠のいたりするやうにも感じられた。

そして、終に手が屆きさうな近まで來た時、浩は一飛びに飛んで、庸之助の着物の端を、何處と云ふ見さへもなく掴んだ。驚愕の衝動が、彼の手の裡に感じられた。此の時、そのまゝ其處に座り込んで仕舞ひ度い程の安心と、憎しみに近い程の、强い〳〵愛情とで、浩の胸は震へた。片手で着物を捉へながら、彼は庸之助の手を捜した。そして握ると同時に「痩せたなあ！」と云ふ思ひが、彼の心を貫いて走り、涙が一雫ポタリと、瞼から溢れた。同時に彼の緊張し切つた感情が、少しは緩められた。が、「何と云つたら好いのか！」彼には言葉が分らない。同じやうに體を堅くしながら、無言のまゝ二人は立つて居た。都會の雑音が、彼等の頭上に渦卷き返つて居る。黒い犬が二人を嗅いで通り過ぎた。

（九）

果して浩が豫想し、案じて居た通りの事が、痛ましい事實となつて、庸之助の上に現はれて居た。或意味に於ては、庸之助は、浩の思つて居たよりも、もう一層下つたところまで行つて居たのである。

彼はもうすつかり夕刊賣子になつて居た。言葉から態度から、特有な見榮まで、もうすつかり自分の物にして居るのを見て、浩は言葉に云へない感にうたれた。庸之助は、半ば愚弄と侮蔑の意味であり、半ばは友情から、浩の事を「坊つちやん、坊つちやん。」と呼んだ。浩は、冷汗を掻いた。

「坊つちやんお前はいゝ男だね。だか利口ぢやあないよ。俺みたいな人間に、こびりついて友達だなんぞと云つて居ると世間並みな出世は出來やしねえ。何にしろ俺は、懲役人の息子だからねフヽヽ。生かして置かれるんだけでも勿體ないんだらうさ。

彼は、浩が一生懸命になつて、力をつけやうが、勵まさうが、始めから耳をかさうともしなかつた。

「努力も忍耐も結構だらうさ、が俺の事ぢやあねえよ。浮き上らう〳〵とする頭を、ちよいと出ると押し込み〳〵されちやあ、どんな强情な奴だつて、往生するほか無いぢやあないかい？　もう少し年をとると、お前も俺の心持が解つて來る。利口なやうでもお前の學問は本の上だ。可愛がられた者の利口だ、なあ坊つちやん。」

庸之助の總ては、浩に一種の壓迫を感じさせた。たつた二つほか年の違はないなどゝ云ふことは、二人の間では、もう問題でなくなつたらしい。浩は、彼がほんの僅かの間に、こんなに心が變るほどの種種な經驗を得て來たのかと思ふと、善い惡いなどは拔きにして、各自の種々な生活と云ふことが、强く感じられた。庸之助に會つたとき、浩はきつと陰氣な沈んだ心持になつた。彼に同情はして居ても、彼の職業を與へるなどゝ云ふことは自分の力では出來ない。彼から云へば、「俺のやうな者は、理想なんかより、飯一杯の方へ頭が下る」と云ふ通り、自分の思つて居てどうにもならない同情などは、迷惑ではあらう共、何の足しにもならないのは、浩にだつて解つて居た。けれども浩としては、それならばと云つて、さつさと引き返せない友愛がある。時々、仲間の者などゝ、妙な手眞似や符牒で、自分を前へ置きながら、自分の惡口らしい事を云つて居る庸之助を見ると、浩は、非常に不愉快になつて、もう二度と來まいと思ふ。自分の未練さや、執拗さが物笑ひの種にされると思ふと堪らなくなつた。けれども又彼の居る傍を通ると、つい立ちどまつて一言でも二言でも話して行かなければ氣がすまないものが、其の次までに心に湧き出して來る。そして、庸之助が斯うなつて來れば來るほど、彼のうけた餘り非實際

的だつた道徳教育――彼をして抽象的な善の理想ばかり餘り多く持たせ、一人の人間として生存して居る間に必然的に起つて來る、善とは云はれない事件に關して、惡の中から善の方へ自分及び他の周圍を見なほす氣持を持つて居ないやうにさせた教育――によつて、一旦善の理想が破れると、直ちに世界中自分まで引きくるめて「惡ばかり」のものにして仕舞つた心持が、いとほしく感じられた。彼は眞正直な人間である。又或點から云へば非常に單純でもある。善惡がピッタリ貼りついて居る世の中を、善と惡を半々に持つた人間が、働いて居るのだとは思へないのだらうと云ふことは、浩にも分つた。善は天で惡は地獄と庸之助には思はれて居る――善を餘り有難く見すぎ、惡を餘り墮しめすぎて居た。「彼那奴がなんだい！」と見ぬ敵を輕んじて居たところが、いざ立ち合つて見れば、自分の知つて居る術よりも遙かに巧妙な術を持つて居る。どうしやうと思ふ間もなく、音なしく降參して仕舞ふ……」浩はどうしても庸之助を憎めなかつた。彼が、今までの生活をすべて忘れやうとして居る努力、或時には裝ふて居る事がはつきり分る粗暴などを見ると、浩は、彼の衷心の苦痛を考へて涙組んだ。互の境遇が變ると、互の間を結びつける友愛が深ければ深い程、辛いものだと浩はしみ〴〵感じて居たのであつた。

浩が文學を、懸命にして居ることは、K商店の年寄り株にとつて不安の種であつた。少しでも成功しさうに見えることは、餘計心配をまさせた。文學者と云ふ妙な者に、自分等の施した種々な恩義を忘れて成りはしないだらうかと云ふこと、仲間の「とかく心の動き易い若い者達」が、つられて、「妙な目をして考へ込んだり。」「譯の分らない獨り言を書きつけて、夢中になつたり。」するやうになりはしないかと云ふことが問題になつた。で、年寄の取締りは、「そんな年中貧乏して、洋行出來る望みもない文學と

やらは止せ〳〵」と折々云つた。けれども、文學と云ふことも、どう云ふことなのか、餘りはつきりは解らない――只見やうとせないでも、自然と目に入るほど、其處此處で攻撃されて居る遊蕩文學と云ふことほか知れて居無い――で云ひながらでも彼等の顏には、幾分臆病な表情と、「俺達の云ふ事だから聞け。」と云ふ、持前の押しつけがましさが漂つて居た。

其故、結局浩は矢張り從來の通り、書ける丈書き、讀めるだけ讀む態度を、急に改める必要も起らなかつた。それに、此頃盛に頭を擡げて來る成金に、刺戟せられて我も〳〵と未來の大金持を夢想して居る他の若い者は、賴まれても浩のやうに古本漁りをしたり、ウン〳〵云つて二枚三枚賞め手もないものを書かうと、思ふ者さへなかつたのである。

或晚、高瀨へ行つた歸途、浩は庸之助の所へよつた。まだ割に早かつたのだけれども、彼の籠は、浩が來て間もなく空になつて仕舞つた。

「もうお前も歸るだらう？」

庸之助は、銅貨のたまつた籠の底を、ヂャラ〳〵云はせながら、浩に聞いた。

「うん、歸る。」

「俺の家へ來て見ないか？　此處から直きだぜ」

「さうだなあ……。行つても好いけど、もう今夜はおそいや、又今度に仕よう！　ね？」

「駄目だよ、今度つて、そんなにいつも早く俺の體が空かねえよ。來て見なよ、直ぐだからさ、いやかい？　さうぢやなからう、來いつてばよ。」

庸之助もしきりにすゝめるし、浩も一度位彼の居るところを見るのも惡くはないと思つた。で、浩は無邪氣に彼と並んで歩き出した。廣い通りを曲つては、先に庸之助を捉へたやうな裏道へ入り、又表通りに出ては、二人はかなり遠い歩いた。

「じきだつて、かなり遠いぢやあないか？

「そりやさうさ。坊つちやんの考へることたあ、何でも違ふよ。

庸之助は、ニヤ〳〵快ささうな微笑を浮べて、チラッと浩の顔を見た。そして又默つて何を云つても返事をしないで歩きつゞけた。裏通りで、解らないが、恐らく町名が異つたらうと思ふ頃、庸之助は人の家の間の、もつと〳〵穢くせまい小道に伴れ込んだ。浩はそろ〳〵何處へ行くのだか、斯うやつて庸之助に引き廻されて居るのがいやになつた。馬鹿々々しい心持がして、輕く物好きに動かされた事を、我ながら不愉快に思つて居ると、少しも歩調を緩めないで歩いて居た庸之助は、とある一軒の長屋のやうな小家の前に、ピッタリ足を止めた。暗いなかに、垂れたやうな軒の下に、たてつけの惡さうなぼろ格子が半分ほど隙いて見える

庸之助は、格子に手をかけて、ガタピシ云はせると、其の物音で、障子をあけて中から出て來たのは、年頃ははつきり分らないが、何にしろ廿代の女であつた。きつと赤坊を裸身で抱いた、みすぼらしい宿の女房でも出るだらうと豫想して居た浩は、つい「オヤ〳〵」と思つた。ぞんざいな髮形をして、荒い着物の上に細い紐のやうなものを卷いて居る。變だなあと思つて居ると、女は「オヤ、今晩は。えらいお見かぎりだつたねえ……」と云つて、「まあお上りなさいよ。」と庸之助を瞰いた。この瞬間、浩はハッ

と或る事を思ひ付いた。庸之助に對して、彼はむせ返るやうな憎しみを感じると同時に、又一方强い好奇心が動かされた。彼は一寸庸之助の方を見た。そしてその平氣な顏を見ると、屈辱と憤怒と羞恥が一かたまりになつて、彼の胸の裡で爆發した。浩は「僕は歸る。」と叫ぶや否や、一目散に勝手を知らない道をかけ出した。一歩足を出した時、彼は自分の手を捉えた者のあるのを感じた。が無意識で拳骨を振り廻した。何か柔かいものがぶつかつたやうな氣がした。

彼は無我夢中で明るい通りに出るまで馳けた。そして、明るい街燈が兩側を照らす道を、安心して、のびやかに歩いて居る澤山の人を見たとき、浩は居たゝまれないやうな恥かしさに迫られた。

店へ歸つてからも、浩は落着けなかつた。床に入つて、目を瞑ると、彼は庸之助が惡魔のやうな形相をして自分に向つて來るやうな幻を見た。友情も何も踏みにじつて仕舞ふほど庸之助が憎く、又恐ろしかつた。

「世の中だ。試みられた。」と彼は心の裡でつぶやいた。

「あんなに試みられなければならない自分か？

浩の目前には、高瀨の一部屋の樣子がフト現はれた。平和な部屋、花、額、澤山の笑顏、輕い足音。皆がうれしさうに喋り、微笑みいつくしみ合つて居る……。浩は、堪らなく情ないやうな、悲しいやうな感情に苦しめられた。譯の分らない憂鬱が、心の隅から隅まで擴かつて來た。浩は夜着をかぶつたなかで、オイ／＼と子供のやうに聲をあげて泣いた。

（十）

限られた日數と金の絹く間に、彼れも此れもと、孝之進は毎日〳〵、まとまりなくせわしい日を送つた。M家の金の事もあるので、出來る丈早く歸國したいと心は焦りながら、今夜浩の世話になつて居るK商店を訪ねて、おそくも明日の夜行で立ちたいと、彼が決心したのは、豫定より五日も後れて居た。

平常、高瀨などでも浩の事は賞めこそすれ、惡いなどゝは爪の先ほども云つた事がないので、孝之進は心私かにKの取締りからも、同樣な賞讃を期待して出かけて行つた。應接間に通されて、取締りに面會した。

「浩さんもなか〳〵よく盡して居てくれるので、私共もめつけものだと思つて喜んで居ります。」

最初は、普通、若い者に下される通りな、賞め言葉が續いた。「正直だとか、品行が正しいとか云ふのは、俺の子なら、何も驚くことではない。」と孝之進は思つた。一體彼は、昔から家老と云ふ代々の家柄は、假令自分の代でその職にはつかなくなつたとしても、何處か平の士とは違つたところが無ければならないと思つて居た。が、貧乏な時でも、病氣な時でも、其れは別に奇蹟を現はす程の力もないらしく見えたまゝ今日まで過ぎて來たのだ。けれども、浩を賞めぬ者のないと云ふ事。「それ其處だ！　そこが爭はれぬものだて。」と彼は思つたのである。孝之進は、「いゝえそんな事は、一寸もありません。」と云ふ返事を聞き度いばかりに「其れでも何か注意すべき事があれば」聞かして欲しいと折返して頼んだ。そして、全く彼の心を動顚させる事實として、浩が文學を勉強して居る事、庸之助とつき合つて居

る事を聞かされたのであつた。孝之進は、取締りの云ふ事は一々尤だと思つた。此の順で行けば鰻上りに出世して、近い内には社會に樞要な位置を得る人物——直接政府の官省から、招待狀などの來るやうな者——に成れるだらうと思つて居た彼の希望は、根柢から覆がへつて仕舞つたやうに感じた。彼の目の前に、はてもないガラン洞の口がいきなり開いた。體中の力が、毛穴から一時に拔けて仕舞つたやうで、孝之進は、暫く何とも云へなかつた。段々心が落付いて來るにつれて、自分の愛して居るものが、自分の苦勞も知らずに勝手氣儘に振舞つて居るのを見る失望が、やがては憎いと云ふやうな感情に變じて來た。その非常に複雜な激情に血を湧き立たせながら、彼は浩を自分のところへ呼んで貰つた。「戲作者。遠島。罪人の息子。此奴め！」斷片的に、單語が頭の中に浮いたり沈んだりした。

暫く睨みつけてから、孝之進は、浩に

「勘當する！　二度と顏を見せるな！」

と、ぶつけるやうな聲で云つた。非常に興奮して居る孝之進に口添へをして、取締りは、彼の憤りの理由を説明した。

「杵築にお前が親しくして居ることを云つたものでね。」その時、取締りの顏には、「云はないでも俺はちやんと知つて居る。」と云ふ監督者でなければ分らないやうな滿足した、幾分誇らしげな表情が現はれた。そして、孝之進の憤りが餘り激しいので、「こうまで怒らうとは思はなかつたが。」と云ふ風に彼の方を眺めた。浩は一言も辯解もせず、反駁もしなかつた。彼には、とりまとめ得ない程、動搖して居る老父の感情を、此上掻き亂すに忍びなかつたのである。それに、いくら辯解しても、互に理解し合へな

い或物が横はつて居る事をも、彼は考へたのである。

取締りが席を脱してから、孝之進は浩に繰返し〳〵其の心得違ひを諭した。彼は、苟も家老の家に生れたものが、罪人の息子――夕刊賣と親しくし、つまらない小説などに凝つて居ることは恥辱だと思へ。もう決して致しませんと誓言しろと云つて涙をこぼした。浩は、口では強い言葉を出しながら、何處かで哀願して居るやうな父親の姿を見ると、辛い思ひで胸が一杯になつて來た。

「阿父さんの考へて被居つしやるほど、文學と云ふものは賤しいものではありません。どうぞ心配しないで下さい！

「それではやめないと云ふのか？

浩は迷つた。「止めないのは勿論の事ではある。が、父親にさう云つたらどの位、假令考へ違ひであつても、悲しむか分らない。それなら、止めますと云ふか？」彼の本心が承諾しなかつた。一時逃れの胡麻化しをすることは、互のために眞の意味で何にもならぬ。自分を偽ることは堪へられない。斯う云ふときに、「止めます。」と云ひ切る人の例は澤山浩も知つて居た。

けれども……。浩はキッパリと、

「止められません！」と云つた。

「止められん？

「えゝ止められません阿父さん！　貴方の心持はよく解ります。けれども……けれども書くことも、讀むことも止めて仕舞つたら、何に勵まされて、辛いことや苦しいことを堪へて行くんでせう？　ねえ阿

父さん！　貴方も辛いだらうが、僕だつて決して樂ぢやあないんです！

浩はボロ〳〵と涙をこぼした。父親に對しての愛情と、藝術的良心が、一致しない奔流となつて、彼の體中に渦卷いた。

息子の決然とした態度に、孝之進の心は、たぢろぎ、よろめいた。大きな〳〵絕望が、眞暗な谷底まで、一氣に彼を蹴落したのである。說明の付かない涙が、止度もなくこぼれた。親子二人が、卓子を挾んで、男泣きに泣いて居るとき、すぐ傍の若い者達の部屋では、幾度ともなく、笑聲が崩れては響いた。浩は、無言のまゝ、强い緊張で、後頭から頸筋にかけての筋肉が、重く强直して仕舞つたやうな心持で居た。

「二度と顏を見ぬ。」

孝之進は、歸りしなに又繰返した。そしてトボ〳〵と歸途に就いた。浩は夜道を獨りやるに忍びないので、幾度送つて行くと云つても、孝之進はきかなかつた。

「貴樣のやうな奴に送られんでもよい！」

けれども、彼がK商店の門を出て停留場まで來る間に、振返つて見ると、一つの人影が、幾らかの間隔を置いて自分について來るのを發見した。浩だと云ふことはすぐ分つた。けれども孝之進は知らない振をして、直き來た電車に乘つて仕舞つた。が、いざ自分がのらうとした時、浩の影がお辭儀をしたらしく見えたことが、非常に孝之進の心を搔き亂した。かけて戾つて、叱り過ぎたと云ひたいやうな心持が强く起つた。が、さうする丈の勇氣が、彼にはなかつた。

「可哀さうな阿父さん！　ほんとに可哀さうな阿父さん！　貴方の心持は分つて居ますよく！　けれども、貴方の思つて被居つしやる偉い人には、私はならないでせう！

大きい音を立てながら、馳け去る電車のかげを追ひながら浩はつぶやいた。

居眠つて居るやうな姿で、思ひ沈んだまゝ孝之進は小石川のはてまで、運ばれて行つた。停留場の直ぐ傍から、家までの道路は、瓦斯だか、水道だかの工事で、其處此處掘返されて居た。低く、暗く灯つて居るランプの明りなどでは、視力の弱つて居る孝之進に、平らな地面と、泥や砂利などのゴタ／＼盛上つて居るところとの見境へが、はつきり解らう筈がない。まして、心が疲れ、望みを失つたやうになつて居る今、その混雜した路を、巧く通り拔けることは、非常に困難なことである。孝之進は、丁度盲人の通りに、上半身を心持後へそらせ、杖がはりに持つて居る洋傘で、前方を探り／＼たどつて行つた。ところへ、後から追ひついた一臺の自轉車が、彼に突かゝりさうに近よつてから、耳元で威すやうに激しくベルを鳴らしたてた。餘り急だつたので、孝之進は少し周章てた。そして避けやうと一歩傍へ踏み出した途端、彼の齒の下駄はフト、おそろしく堅く、でこぼこな何かの塊りにふみかけた。平均を失つた體と一緒に、足の下の塊りもゆすれる。益々調子の取れなくなつた孝之進の體は、二三度前後に、大きく搖れると、ハッと思ふ間もなく仰向きのまゝ、たゝきつけられたやうに倒れて仕舞つたのである。その瞬間孝之進は、後頭部と腰が痲痺するやうな心持がした。ガラ／＼として眞黑になつた心の前で、丁度覗き眼鏡の種紙が、カタリと云つてかへる通りに、今まで自分の前一杯にあつた、幅の廣い何物かが、微かにカタリ……と音を立てゝ、屆かない向ふにかへつたやうに感じた。

（十一）

退院してからお咲の工合も餘りよくない上に、孝之進まで、彼の夜轉んだのが元で、何處となく體を惡くして仕舞つたことは、彼等にとつてかへす〴〵もの痛手であつた。殆ど敷き通しにしてあるお咲の床の傍に、もう一つ床を並べて、何と云ふことはなし只眠つてばかり居る孝之進の樣子に家中は、私かに眉を褻めた。漸々お咲を、それも血の出るやうな思ひをして、やつと出した許りだのに直ぐ又お代りに出られては、到底やり切れなかつたのである。

翌日、其の事を電話で知らされた時には、浩も半分病人のやうであつた。昨夜の睡眠不足、精神過勞に加へて、二三日前からの風邪で、體中に熱つぽい、けだるさが、蔓つて居た。電車に乘つて居る間中彼は鈍痛を感じる頭のしんで、考へに沈みつゞけて居た。

浩が行つた時、孝之進は二階で眠つて居た。仰向けに、ユサリともせず寢て居る彼の、口の周圍や目のあたりに、氣のせいかもしれないが、昨夜までは無かつた皺がふへて居るやうに見えて、浩の心はかるく騷した。足音を忍ばせて、傍にマジ〳〵と横はつて居るお咲の枕元に座つて頭を下げると、彼女はいきなり、

「何故お父さんを怒らせなんかしたの？　貴方は！……。御覽なさいよ！」

と咎めるやうに囁やいた。沈默して居る彼を捕へて、半ば絶望的な感情から起る、執拗な意地惡さで、お咲は長いこと、彼を責めたり、憤つたりした。

かなりよく眠つて居た孝之進は、聞えないやうで妙に耳につく彼女の話聲に、うすうすと眠りからさめた。が、起き立ての子供のやうに、意識の統一の着かない彼は、呆然として居ると、一人の若い者が裾の方に來てお辭儀をした。半分目を瞑つて、後頭部の鈍痛を味ふやうに感じて居た彼は、

「誰れだ？」

とはつきり云つた積りで聲をかけた。けれども、浩の耳には、其處、此方に散らばつて居る一言一言を拾ひ集めて云つたやうに、

「だ、れ、だ？」とほか聞えなかつた。情けない心持が、サアッと體中に流れた。

「阿父さん？　工合はどんなです？　頭が痛みますか？

どんよりして居た孝之進の顏が一時、明るくなつて、又元の陰氣さに戻つた。大笑ひになりさうな嬉しさを感じて擡げた頭を、又元の通り枕に落しながら、孝之進は

「阿父さん？　あゝ浩、お前だつたかい！

「歸れ歸れ！

と云ひすてゝ、寢がへりを打つた。お咲の詰問するやうな眼差しが鋭く浩を射た。彼は、妙に縺れ合つて、どれが、どの色とも分らない感情が込み上げて來るのを感じた。恥かしいのでも、恐ろしいのでもない。まして憎らしいのではないけれども、心の平調が亂れた。落着きが、一時自分から去つて仕舞つたやうな氣がした。涙組みながら、だまつて座つて居た彼は、やがて「お大切になさい。」と云つて立ちあがつた。

下へ降りて來て見ると、長火鉢の前で、何か土鍋で煮て居た年寄は、默つて立つて居る浩を、見上げ

ながら、「時を見て、又ゆるりと御話しなさるがいゝよ。若い時は、誰でもねえ……。」と、慰めるとも追懐するともつかない表情を浮べた。

其の後、浩は一日に一度位づゝきつと父親の見舞ひに來た。が、二階には行かないで、持つて來た果物だの菓子だのを年寄や、又時としてはお咲に賴んで歸つた。孝之進は、浩が來たらしい聲が下から聞えて來ると、耳を澄ませて、何事も洩らさず聞きとるに努力して居た。「もうそろ／＼來さうなものだ。」と思つて居ると、格子の鈴が鳴る。歸るらしい挨拶の聞えるときや、一日心待ちに待つて來られない時などには、譯の分らない淋しさが湧いてきい／＼した。けれども、彼はたゞの一度も浩の事を口に出しては訊かなかつたし、來て居るのが解つても、上れと云はなかつた。「其處が武士の意地」なのであるらしかつた。其の癖、浩が持つて來た果物などを食べるとき、お咲が一緒に泣き出して仕舞ふやうな淚をこぼした。

浩は、父親に「歸れ」と云はれた息子として、自分に妙な同情や臆測が加へられて居るのを感じて、彼はこそばゆいやうな氣がした。が、彼は其那事を氣にして、怒つたり笑つたりしては居られなかつた。どうかして、藥代だけは自分の力ですませ度いと、彼は心をなやまして居たのである。國へ送る分だけを、取つて置けば濟むとも思つたけれども、母親の事を考へると、それもならない氣がした。又十圓かと思ふと、浩は苦笑しながらも淚がこぼれた。

自分一人斯うして病人で居るさへ、氣が引けて、氣が引けて堪らないお咲は、逗留したまゝ、又父親に床につかれたことは、年寄達に對して、身も世もあられない思ひがした。病氣も幾分かぶり返し氣味

で、神經質になつて居る彼女は、あれやこれや思ひつゞけると、このまゝ駆け出して、何處かへ體ごとぶつかりたい程氣が焦立つた。

「何をどうしたか分らないけれど、此那に弱る程、此の年の阿父さんをいぢめなくたつて好ささうなものだのに‥‥。そりやあ、轉んだからと云ふことだつてあるけれど、只一寸つまづいた位で、どうして此れ程こたへるものか、彼れが惡い、ほんとうに親不孝だつたら有りやあしない！」お咲は口惜し涙をこぼした。捗取つて癒つてくれない、自分自身の體に對しての怨みと、浩及び、無形な何物かに對しての腹立たしさに、彼女はブル／＼した。此頃のやうに、苦勞が一倍多かつたり、病氣が惡くなつて來ると、恢復期に彼女の心に起つたやうな、優しい潤ひのある心持は、悉皆どうかなつて仕舞つて、不安な焦躁と、倦怠が心一杯に擴がつた。餘り丈夫さうにピン／＼して居る者を見ると、「少許とは病氣もするが好い。」と云ふ氣かして、浩などに對する腹立たしさも、後で考へて見れば、彼の健康に對しての嫉妬が混つて居たのだと、我ながら恥かしいやうな心持になることもあつた。

「阿父さんが又お醫者にかゝつて居る‥‥。

幾何かづゝ遣り／＼して、仕舞ひにはどうしたら好いかと思ふ醫者への拂ひなどを考へ出すと、今日こそは、ちやんと順序を立てゝ考へませうと始めてこそ思つて居ても、段々種々なことで頭が亂れて、きつと泣くのが落ちであつた。

けれども、孝之進は、始めの樣子に似げなく少し工合がよくなるとドン／＼なほつて行つた。又無理でもなほらせずには居られなくもあつたのだけれど、兎にも角にも、醫者が、疲れが一時に出たのと、

リヨウマチがついたのと轉んだのと一緒になつたのだと云つた診斷が、眞個らしくあつた。皆が氣にやんで居た中風のやうにも成らずに濟んだことが、何よりであつた。床を離れて、二三日してから孝之進は足試しに、電車に乘らずに行ける高瀨まで出かけて見た。足の方は何でもなかつたが、妙な一つの現象を發見した。それは彼が高瀨の主婦に乞はれるまゝに、お咲の所番地を書かうとした時である。「——區——町——」孝之進は、すかすやうな容子で、几帳面な字を書き出した。この時、フト彼は浩の事を思ひ出した。彼の目が三白なことが頭に浮んだ。三白の子は昔なら、生かして置けないと云つたものだと思ふと、不意に手頸の力がぬけて書いて居た字の下に、細く太い汚點をつけた。考へる方に妙に體中の力が吸ひ取られて、手の方がだるいやうになると一緒に、ガクンと骨が脫れたやうに、感じたのである。孝之進は、思はずハッとした。が別にどう仕やうもない。何も思はないやうにして、書きあげては仕舞つたものゝ底の底まで氣が滅入つた。彼は其處いら中、ガタ〳〵になつて、死んで行く自分の姿をまのあたり見せつけられたやうで、非常に厭な氣持がした。

一二度外出をしてから、孝之進は早速歸り仕度をした。そして漸々汽車賃ほか遺らない中から、藥代を拂はうとして、さつと浩が濟ませたに違ひない受取りを出されたとき、彼は思はずも溜息を吐いた。心の裡では何處までも自分をいたはつてくれる息子に對しての感謝で一杯になつて居たが、彼の裝ひ得る最大限の平然さを以て、「さうか」と云つたまゝ、さつさと受取を懷へ押し込んでしまつた。翌朝彼は起きぬけに歸國の途に着いた。

（十二）

國へかへると直ぐ、孝之進はM家の金の談判を始めた。けれどもなか〳〵埒が明かない。東京の商業學校を卒業して來て、西洋風の机に向ひ、西洋風な帳面と字で、一家の經濟を切り廻して居る若い主婦を始め、主人まで、出來る丈孝之進をはぐらかしにかゝつて居るやうに見えた。主人は何ぞと云ふと、「時世と云ふものは面白いもんですね、何にしろ貴方がこう云ふ用事で家へ來なさるんだから……。」と云つた。これが孝之進の氣にグッと觸つた。二三度は此の言葉を聞くと、そこ〳〵に座を立つて仕舞つたが、相手の策略が段々飮み込めると、孝之進も其の手には乘らなかつた。が、何にしろ一寸した事まで東京の高瀨へ問ひ合はせては返事を待つて仕なければならないやうな事が起つて來るので、手間ばかりかゝつて、一向進まない。お咲の方からは、それとなし、金の催促の手紙を寄こすので、孝之進は、到頭門先にある桐の大木を賣ることにした。これは、曾つてお咲の嫁入りの時、簞笥でも作らうなど〻云はれた事もあつたもので、穢ない茅屋根を被ひ隱すやうにして、每年紫の品の好い花が一杯に咲いた。松だの杉だののばかり多い村中で、孝之進の家の目標しのやうになつて居たのを、今伐り倒すことは、不如意な暮し向きを公然發表するやうで氣も引けた。けれども背に腹はかへられぬところから、孝之進はかねて見知り越しの材木屋を呼んで價踏みをさせた。商賣となれば、遠慮はない。材木屋は種々な難くせをつけて、一抱へもある桐を、二十圓で買つて仕舞つた。

久し振りで東京へ行つたことだから、息子の事、娘の事をあれこれ聞くのを、樂しみにして居たお

くは、浩の事を云ひ出すと、「あんな馬鹿の事なんぞ訊くな。」と云はれるのが心外であつた。そして其ばかりではなく、東京の事を訊かれるのを厭つて居る様子が彼女に不審を起させた。心配になつた。で三晩かゝつて孝之進に見つからないやうに心を配りながら、お咲のところへ手紙を出した。太い、にぢんだ平假名ばかりで、ところ／＼へ涙のにじみを作りながら、「わたくしのしんぱいおすいもじくだされたく候」と繰返し／＼書いてやつたのである。返事は浩から直ぐに來た。三間もある手紙をおらくは嬉し泣きに泣きながら讀み終つた。息子の親切な言葉が彼女の心を和げて、何も本を讀んだりものを書いたりすることなら、おぢいさんも、そんなに怒りなさらないでもよささうなものだにと思つた。彼女にとつては、息子が庸之助と親しくして居るのは、後生のために大變好い事だとほか思へなかつた。が若いうちから孝之進に絶對的な權利を認めて居るおらくは、「女には分らない男同志の事」に口を出して何か云はうなどゝは、さら／＼思はなかつた。只、一日も早く孝之進の怒りのとけるやうに、如來樣にお縋り申すほかなかつたのであつた。それに、孝之進も歸つてから、どうも工合がよくなくて、腰についたリョーマチだと云ふ痛みが次第に募つて、朝起きたばかりには、サアと云つて立てない程になつた。物忘れも激しくなつた。前にも増して陰氣になつて、一日中おらくに物も云はない事さへある。彼女は、おぢいさんも信心がないから斯うなのだと思つて、折々は少しお說教でも伺つたらと勸めた。孝之進自身も、此頃のやうに心が淋しくて、苦しい事ばかりあると、さう思はぬでもないが、どんな時にでもジッと齒を喰ひしばつて堪らへて來たのを、今更佛いぢりで終つて仕舞ひ度くはなかつた。それにもう歸る頃は殆どとけて居た、浩に對しての憤りを、今も持ち續けて行かうとする、辛い意地から、一

居心が穏やかでない事を、彼は自分でも知つて居るので、此ればかりは佛の力でも紛れさうに思はれなかつた。けれどもおらくは、裏へなど長く出て居て、何心なく奥へ行つて見ると、何か涙をこぼしながら一生懸命に見て居た孝之進が、周章てゝ持つたものをかくしながら、空咳をするのなどを屢々發見した。浩の手紙を見て居なさるなと彼女は悟つても、それについては一言も云はなかつた。そして只涙をこぼした。猫の額ほどの菜園の土を掘りながら、今頃は又おぢいさんが讀んで居なさるところだと思ふと、おらくは出來る丈長く戸外に居た。時には用事がなくても孝之進の心を汲んで彼女は外へ出た。ブラブラと菜園を見廻つたり、納屋の傍に寄りかゝつてお念佛をしたりしながら、彼女自身も何だか嬉しいやうな心持を感じて居たのである。

父親から、どうやら金を送つてくれたので、お咲は隨分助かつた。有難いと思つた。が、病氣はどうしても惡い。此のまゝ進んで行けば、又入院するほかなりかねないので、年寄達は氣を揉み出した。お咲自身も氣が氣でないと同時に、永病人に有勝ちな、我まゝや邪推が出て來て、病み倦きた者と、看病疲のした者との間には兎角、不調和な空氣が漲りたがつた。浩はどうかして、一週間でも十日でも海岸へなり姉を遣つて見たいと思つた。けれどもそれと云ふのも直ぐ金の入用な話で、彼の腕では及びもつかない事である。それかと云つて、誰かゝら出して貰つて、ハラ〱しながらする養生などは、結局何の役にも立たない。彼は、此頃しきりに金と云ふ問題に苦しめられる自分の頭をいとほしむやうな心持になつた。勿論彼とても、金を全然卑しむべきものだとは思つて居ない。けれども、自分の勞力に相當するより以上の報酬を夢想して見たりすることはいやであつた。どんなに困つても、友達から借りることとな

どは出來ない質である。よく新聞などにある詐欺に、かける人間も又かゝる人間も、望むところは只一つなのだと思ふと、浩はお互に可愛いところがあると云ふやうな氣持になつたりした。

此頃ではもうお咲も、浩に厭な顔ばかりを見せて居る元氣もなくなつた。一人でも親身に自分のことを心配してくれる人が有難く思はれた。年寄達や夫だつていざとなればどうだか分らないと云ふやうな心持もしたし、段々譯を聞いて見れば、彼の夜のことも、浩ばかり惡いわけでもない。仕舞ひには、「お父さんの考へるやうな出世は、今の世の中で出來やう筈はないわ。大學を出た立派な人だつて始めは、隨分廉くて働くんだつて云ふもの。浩さんなんかたつた十九で十五圓ぢや年から云つたつてねえ。それに學問の仕やうから違ふんですもの……。」

などと暗に彼に力をつけたりした。彼は自分と父親の間を周圍のものが種々な風に考へて居ると云ふことに驚かされた。年寄は年寄達で、彼等が若かつた時代に見聞きした通りの事件に近いものとして推察して居るし、お咲はお咲で、父親が彼の出世の、のろいのを怒つて居ると思つて居る。彼は、傍から種々云はれて、仕舞ひには、眞個に自分が考へ、望んで居ることは何なのか分らないやうに成つて仕舞ふ、若い者達が無理でなく思はれた。今の場合とは違ふかもしれないが、一生の職業を定めるときなどに、あれが好い、これが好いと餘り智慧をつけられ過ぎた結果、戸惑つて方々喰ひかぢりのまゝ一生を過して仕舞ふ人などさへある。「各自は、各自の進むべき道は只一本ほか持たない。其れを一旦見出したら決して迷はずに進め、どし〳〵進め。岩があつたら踏え越え、川があつたら歩渉れ。倒れるなら、行けるところまで行つてから倒れろ！」彼は、一人の若者が、勇ましく兩手を擧げ、足音を踏みとゞろか

ぜ、胸を張つて、嶮しい山路、荒凉たる原野を、眞直に、眞直に、どこまでも、どこまでも突き進んで行く姿を想像して涙をこぼした。勇ましく力を張り切らせて暮して行かうと思ひながら、理智で云へば卑小な感情に假定一時的ではあつても殆ど心全體うちのめされたやうになることのある自分を思ふと、（彼は昔の學者やその他の偉かつた人のやうに感情を殺すことはのぞまない。人間の感ずべきあらゆる情緒、情操を尊重して居る。眞の人間とならうには、其等のあらゆるものに共鳴し、あるゆるものゝなかゝら、何ものかを發見して行くべきだとは思つて居る。が、時々ほんとに小つぼけなこと、假令へば自分の仲間達が、自分に無理解な冷評を加へる時など、超然として居るつもりでも、内心はガタ／＼することがあると、それを堪へやうとする虚榮心で、一層心が苦しむ。憎んぢやあいけないと思つても憎む。憤つちやあいけないと思つても怒る。或程度までは、人間の本性として許すべき種々な感情も、度を越すと、浩には自分自身にとつては卑小に感じられるのであつた。）雨が降つても、暴風が荒れ廻つても、雲のかげには常に燦然と輝いて居る太陽が、尊く思はれた。自分等が斯うやつて齟齬して、喧嘩をして見たり、箇人々々に何の怨みもないものを、大きな鐵砲玉で殺し合つて見たりして居る上には、太陽が昨日も今日も同じに輝き渡つて居る。彼は何事をも肯定して居る。憎まない。すべての人間に同樣の微笑を向けて居る。浩は、「總て好い……。」と云ふ言葉を具體化したら斯う云ふものになると思つた。「太陽のやうな心を、ちよんびりでも持つて居たらなあ！」としみ／＼思ふ。と彼は祈りたい心持になる。さう云ふとき彼は何か自分を愛撫し、激勵し、叱咤して下さる「氣」があることを感じた。太陽そのものでもなく、今までの澤山人格化された神と云ふ名稱で呼ばれるものでもない。只「氣」である。音も

なく、薫香もなく、まして形は無く、只感じ得る者のみが感じる「氣」なのである。彼は其の「氣」の靈感の前には飽くまでも謙讓であり得た。涙をこぼしながら、どうぞ自分が、眞個の一人の人間として善くなりますやうにと祈つた。そしてどんな苦しいときでも、男らしく辛棒して、遣れる最上を致しますと心の裡に囁くと、疲れた心も奮ひ立つた。進軍の角笛が、高く、高く鳴り響く。心も體も、しやんとして働ける。

浩は元來、佛教も基督教も信じては居ない。無宗教者であるとも云へる。けれども、彼の衷心の宗教心は非常に強い。強い丈、それを全然滿足させ得るものを彼の考へでは見出せなかつた。けれども何時とはなしに、彼の感激を得るやうになつてから、强ひて自分を何々信者として期待しなくなつた。充分自分を慰め、勵まし、同時に心から悔ひ改めさせるものが、あればそれでよいと思つた。人々が一定の宗教に入るのも、此の感激を得るためではないのだらうか？　彼は、彼にとつて絶對な感激の本源を認めて安心出來たのである。

（十三）

浩は此頃になつて、しきりに庸之助と自分との關係を考へるやうな心持になつて居た。それは勿論、彼の晩あゝ云ふことがあつたのが原因になつては居るが、父親を見たり、姉を見たりして、各自の生活の型と云ふことを感じて來たのにもよるのである。

浩は、普通に云はれる親友と云ふのは、大嫌ひである。互に知つて居たところで、何にもならないこ

とまで打ち明け合ふ。遠慮なく打ちあけ合ふと云ふことは大切な、其個に行けば嬉しいことではあるが、それが義務のやうになつて來ると、浩には堪らない。そして、相談し、進み合つて行くのならまだ好いけれども、彼の男の事に就いて、自分は他の誰よりも委しい事情を知つて居ると云ふことが、假令漠然として居ても感じられて來ると、惡い。親友と云ふものは、斯くあるべきものと、定義を下されて、教育されて來たのだから、兎角その定義として擧げられてある條件を缺くまいとする。互に親友がつて居るのは大嫌ひであつた。其故、庸之助に對して、一度も彼は親友だと云つたりしたことも、思つたことさへもなかつた。が、「此の頃の自分の心持を考へて見ると、少し安心出來ない節々があつた。庸之助の生活――彼自身の境遇から來る、必然的な生活條件を持つて、彼にほか解せない、絕對的な彼の生活――と云ふものを、考へて居ながら、考へないと同じやうなことを、感じては居なかつたかと云ふことなのである。何だか、今まで自分が、彼を他動的に、彼の生活の型から脫しさせやうと焦つて居たのではなかつたかなどとも思つた。はつきり、彼の苦勞の形式と、自分の苦勞の形式とは違つたものでよい。たゞ互に苦しい思ひをして居るのだと云ふことを認めて、堪へる心を勵まし合つて行けば好いと云ふことを、感じて居ればよいのだが。それが疑はしい。きつと自分は、庸之助の種々なことが、自分の理想から見ると、餘りかけ離れたものゝやうに思つて居たのだ。」浩は、彼自身が折々感じて居る、迷惑な同情を、庸之助にもかけて居たやうな心持がした。庸之助の前へ出ると、自分の人格全部試みられて居るやうな不安を感じて居たことも考へられた。そして、或時は、庸之助は、自分の試みの爲に現はれて來た者ではないのかと思つたりしたことも、すまない氣がしたのである。何も特別な事は要らない。

只自然に、正直であれば好いのだと思ふと、かなり久しく會はなかつた彼にも、餘計會ひたかつた。けれども、二三日前から、お咲の歸國の話が出て居るので、心に思ひながら、故意出かけて行く暇がなかつたのである。

退院してから、お咲は餘り工合がよくないので、同じなら入費のかゝらない、又氣苦勞のない國元で、ゆつくり養生した方が好いと云ふのである。好意づくの發案ではあるが、浩は只單純に其丈のことゝは感じられなかつた。元より、考へなく口には出せなかつたが、養生に歸國と云ふ名義が、永久の歸國の端緒となりはしまいかと案じられた。お咲が離別と云ふことをどの位怖がつて居るかと云ふことは、浩によく分つて居る。嫁に來る時、黑光りのする懷劍を、ビッタリ膝元にさしつけて、孝之進が、「歸されるやうな事を仕出來したら、これで死骸になつて來い。自分で死なれなかつたら、何時でも俺が殺してやる！」と、睨みつけた時には、もうほんとうに身の毛のよだつほど怖ろしかつた、とお咲はよく話し話しして居た。そして、父親の氣性を知つて居るお咲は、それが決して嘘ではないと思つたので、斯うして今日まで、只諦め一つで堪へて來たのも、一つはその耳底について離れない、こゑのためでもある。荷物の中にも持つては來たが、其の懷劍は、おらくの注意で又取りかへされた。さう云ふものを持つて居ると、魔がさすと云ふのである。そして、もう一年も前に何處へか賣られて仕舞つたこと丈は、お咲は知らなかつた。どんな處に居ても、不幸から離れられない自分だと、思つて居るお咲は一寸も、今の生活からのがれたくはなかつた。出戻りとか云ふ名を冠せられることが、恐ろしかつたのである。病氣になつた始めから、只その一事をどの位氣に惱んで居るかを知つて居る浩は、餘計心配した。けれども若し、

自分が云ひ出した許りに、さうまでは思つて居なかつた年寄達に、ほんにさうだなど丶思ひ出されることがあつてはいけない、矢張り彼は口を噤んで居るほかなかつた。

話はかなり進行した。それにつれて、咲二も體が弱いから、丁度早生れなのを幸ひ、來年の四月頃まで、一緒に田舍で、呑氣にさせて置いた方が好からうと云ふことになつた。

子供に別れて、獨り歸國することには、氣ののらなかつたお咲も、息子を連れてと云ふのに心を動かされた。その上、今通つて居る學校は、名高いには違ひないが、好い家の子ばかり行くので、何かの振合――假令へば、何やかやの寄附だとやら、云ふことだけでも、身にあまることだのに、ない〳〵には隨分御機嫌伺ひが行はれて居るので――月謝ばかりで濟むものではない。それこれもあるので、退かせたいと思はないでもなかつたので、大變好い機だとも思つた。久し振りで、のび〳〵と眠る丈も眠て見たいなど丶も感じて、行かうと思つたり、又思ひなほしたりして、決定するまでには隨分暇がか丶つたのである。

誰に相談しても、「自分で行つた方がよいと思ふならば。」と云ふ位なので、彼女は、自分で自分の氣持を知るに苦しんだりした。

孝之進は其の事に異議はなかつた。が、丁度その時、M家の事に就いて、又一つ新らしい事件が起つて、その奔走にせわしかつたので、都合の返事もつい、のび〳〵になつて居た。事件と云ふのは、今度村民がM家を相手取つて、訴訟を起したのである。耕地整理を口實にして、M家の先代が――今年は八十に手の屆く老人で隱居をして居る――官有地の拂下げを請願して、成功した幾段歩かの田畑を、着服

して仕舞つたと云ふのである。折々、物議の種と成らないこともなかつたのだけれども、村役場や、小學校などに少なからず寄附したりして居たので、そのまゝになつて居たのを、M老人と個人的な衝突をした者が、腹立ち紛れにと云ふやうな事が起因であつた。一體M老人は總てに遣り手すぎた。一代で兎に角にあれだけの資産を堅めたかげには、多大の犧牲が拂はれて居る。威光に恐れて、すくんでは居るものの、いざとなれば反旗を翻す連中が隨分居るので、事件は益々擴大して仕舞つたのである。利も入れず、高瀬の金を借りばなしにして居ることまで、彼等の攻擊材料になつて、訴訟の一部として取り扱つたなら、都合よく運ぶと云はれて、孝之進は、原告側の主腦者に、自分が委任された事全部を、又まかせることにしたのである。それこれでお咲の歸國は、次第にのびて居た。が、さあ明日行くと云ふときになつて、年寄達もお咲も、其の他周圍の多くの者が、或る一つのことを感じ出した。それは最初此の話が出た時に、浩が得たと、全く等しいものであつた。けれども皆だまつて居た。ほんとうに皆だまつて居た。「早くよくなつてお歸り」とか、「今度會ふときには、さぞ達者らしくなつて居るだらう。」とか云ひながらも、變な心持がして居た。浩はその中に立つて、自分の周圍に、「云つちやあいけないんだらう？ね？」と云ふ囁きが飛び交ふて居るやうに感じた。それにも拘らず永年の習慣で、人達は、非常に自然らしい技巧で、手際よく表面を、圓滑にして居た。

　出發の日は陰氣な、いやにドンヨリした天氣であつた。浩が午後七時の列車で立つ姉達を送りに停車場へかけつけたときは、もうよほど時間が迫つたので、何事も落付いて話す餘裕がなかつた。もう何年も旅と云ふ聲さへ聞かなかつたお咲は、息子の手をしつかり握りながら、かなりまご〳〵して、傍の者

の云ふことなどは、よくも耳に止まらぬらしかつた。天井も床も一緒くたに掻き廻すやうな騒々しさに、彼女は全く上氣せ上つて居た。けれども、心の底にはいつでも涙がこぼれさうな悲しさがあつた。無けなしの懐から、空氣枕だの菓子などを買つて來た浩に對しても、疲れて居ながら、わざ〳〵送つて來てくれた良人に對しても、彼女は、もうお別れだと云ふ心持をしみ〳〵と感じた。「私はもう死にゝ歸るのかもしれない。」と云ふやうに、皆の顔を眺めて居るお咲を見ると、見送りに來た者も、妙に滅入つた心持になつて、只歸國するものを送ると云ふより以上に、何か重たいものが、のしかゝつて來る氣がした。恭二などが、種々お咲に優しい言葉をかけたり、お咲を勞はつたりして居るのを見ても、浩は眞個に、もう歸るとか歸らないかと云ふことを、問題にもならなく仕て仕舞ふ豫感が、此の別れ際に彼女に各自の愛情を注がせて居るのではないかと云ふことさへ考へた。そして、强ひて皆が、安心さうに、全快し歸京することなどを話して居るのを見ると、幾分腹立たしいやうな心持がした。あらゆる豫感、豫覺と云ふものを、かなり强く信じて居る浩は、せめて自分丈でも、こぼしたい涙をこぼし切つて仕舞ひ度かつた。がそれも出來ない。普通の通りに、別れの言葉をのべて、注意を與へ、殆ど無意識に出る程口について居る、よろしくを加へた。無事な中でも、最も無難な行程を選んで、總てがそれは〳〵穏やかな様子で濟んで仕舞つた。窓からのり出して居るお咲の顔が、列車の動搖につれて搖すれながら、名殘惜しさうに停車場の方を見送つて居た。

此の夕方も、庸之助は平常の通り、——交叉點で夕刊を賣つて居た。

「アー夕刊は一錢！　報知やまとの夕刊は一錢！

今止まつたばかりの電車の窓々に氣を配りながら、彼は叫んで、鈴を出來る丈勢よく鳴らした。

「夕刊は一錢、アー報知やまとの……

車掌臺に近い一つの窓から、一時に二本の手が銅貨を差し出すのを見つけた庸之助は、大急ぎでかけよつて、後ればせに來た一人の仲間を、腕で突飛ばしながら新聞を渡した。妙に魚臭い二つの錢を籠の底へ投げ込むと、彼は一寸手を突込んで掻き廻しながら、

「チエツ、これつちかい！

と、いま／＼しさうに舌打ちをした。もう小一時間立つて居る割に今夜はたまらない。氣が揉めた。一枚でも多く賣らなければ、明日の食に困る彼は、勢ひ、一生懸命に成らずに居られなかつた。動き出した電車を追つかける彼の腰の周圍では、六つも一つなぎにした鈴が、ジヤラン、ヂヤランと耳の痛い程、響き渡つた。電車が混むにつれて、買ひても多くなつて來る。庸之助は平常の通り醜い程興奮して、後から／＼と止まる車臺の間を、鼠のやうに馳け廻つて、自分と同じ側に居る十四程の夕刊賣りには、一枚でも賣らせない算段をした。耳と眼を病的に働かせて、どんな小聲の呼かけでも、奥の方に出せずに居る手でも見落すまいとして居たのである。自働車が通り荷車が動いて居る間に、彼は危險などゝ云ふことは、念頭にも置かなかつた。ところが、丁度彼が人を滿載して動けずに居る車臺の下で、今新聞を渡した時である。次の車のどこかで夕刊を呼ぶ聲が聞えた。

「オイ、夕刊賣りは居ないのか？

彼はまつしぐらに馳け出さうとした、途端、一臺の俥が行く手を遮ぎつた。ハッと思ふ間に、車夫の氣轉で衝突は免かれた。けれども、客はもう他の賣り子に取られて仕舞つた。

「畜生！　氣をつけやがれ！」

俥夫が罵倒するにつれて、「間抜けな野郎だなあ。」と笑つた乘つて居る男の大きな腹が、庸之助の目の前で、戰を挑むやうに、膨れたり凋んだりした。

氣が立つて居た庸之助は、此のかさね〴〵の侮辱にムッとした。

「何だと？　今何んてつた！　畜生もう一ぺん繰返して見やがれ！

と叫ぶや否や、突然棍棒を俥夫ぐるみ、力一杯突き飛ばした。

ヨロ〳〵となつて、危く踏み堪へ俥夫は、又二言三言惡口を吐いた。客も「何が出來るものか！」と云ふやうに、負けずに愚弄するのを見ると、庸之助の病的な憤怒が絶頂に達した。激情で盲目になつた彼は、もう口で喧嘩をして居る餘裕が無くなつた。握りかためた兩手の拳固が、二人の男の頬桁に、噛みつくやうに飛んで行つた。生活に疲れて居た庸之助の頭は、全く常軌を逸して仕舞つた。眞黒になつて、手あたり次第擲つたり蹴つたりしたのである。忽ち人が黒山のやうになる。或者が交番へ走る。巡査が來たッ！　と云ふ聲が群集の中から起ると、今まで同等な敵として、庸之助を、同じ位夢中になつて撲つたり、突飛ばしたりして居た俥夫は、サッと手を引いた。鑑札を調べる時、「おまわり」は彼等にどの位勢力を持つて居るかと云ふことをよく知つて居たのである。

で、攻撃の態度を變へて、只管防禦して居るやうに、庸之助の降らす拳固を、腕で支へたり、「まあ、

まあ、」と云ひながら後じさりをしたりした。で、巡査が來たときは、さも「惡い奴」らしく、庸之助が鎮めにかゝる俥夫を狂氣のやうに撲つて居たのである。

「コラ〳〵、一體何事ぢや？

佩劍を、特にガチャ〳〵云はせて、近よりざま、振上げた庸之助の手を掴んだ。俥夫は汗を拭き〳〵、出來る丈上手に辯明仕始めた。

「私がへい、此のお客さんをのつけて‥‥

片手で指さしながら、振向くともう其處には、さつきまで居た筈の、客の影も形もない。

「オヤ、居ねえや‥‥

見物人が、崩れるやうに笑ひどよめいた。俥夫が喧嘩して居るうちに、客は只乘りをして逃げて仕舞つたのであつた。

到頭直ぐ傍の交番へ引かれて、軒先に燈つて居る赤い小さい電燈を見た瞬間、何處かへ行つて居た庸之助の正氣が、フーッと戻つて來た。

「俺は一體何をしたのだ？　馬鹿な！

庸之助は、もうジッとして居られない程の心持になつた。彼が口癖のやうに云ひ〳〵した、「良心の呵責」が一どきに込み上つて來たのである。

巡査は酒を飲んで居るかと訊ねた。飲んだと答へはしたものゝ、實際は飲んで居なかつた。けれどもどうにかして、此んな下らない、恥かしい自分の位置の辯護となる理由を探したかつたのである。傍に

居た年寄が、酒の上の事だからとしきりに、庇つてやつた。そして「お互に若いときと云ふものは、兎角氣が荒いものでなあ。」などゝ、巡査に巧く勸めた。一寸見物の手前、訓戒めいた事を喋つて、其儘、巡査は庸之助を許してやつたのであつた。

町は益々賑やかに、華やかになつて來た。敷石道を、水を流したやうに輝やかせて居る種々の電燈。明滅するイルミネーション。樂隊。警笛。動きに動いて居る辻に立つて庸之助は、呆然として居た。只開けて居る丈の彼の目の前を、幾人もの通行人、電車が通り過ぎた。そして、或る一人の若者が、自分の顏をこするやうにして通りかゝつた時、庸之助は思はずハッとして反動的に面をそむけた。

「浩だッ！」サアッと瀧の樣な冷汗が、體中から滲み出すのを感じた。彼は恐る〳〵頭を回らして眼の隅から、今行き過ぎ樣とする若者の後姿を窺つた。如何にもよく似て居る。そつくり其儘である。けれども浩ではなかつた。若し彼なら、是程近くに居る自分を見ないで通り過ぎることは、絶對にないからである。さう思ふと、何とも云へない安心が庸之助の心に湧き上つた。そして、今まで氣付かなかつた秋の夜風が、ひや〳〵と氣味惡く濡れた肌にしみ渡つた。彼はホッとして、額を拭きに手を上げた時、其時、其の瞬間！　漸々落付いた彼の頭に、電光の樣に閃いたものがある。其は浩が、常に云ひ〳〵した「強く生きろ！」と云ふ言葉であつた。

「強く生きろ！　強く生きろ!!

庸之助は、今日まで斯那にも惡く〳〵と進んで來たにも拘らず、未だ自分を惡く成り切らせない何物かゞ在る事を感じた。彼の言葉を思ひ出した瞬間、如何程內心の或物が動搖したどらう。彼は居ても立つても居られなく成つた。「斯うしては居られない。如何にか仕なければならない。」彼の目前には、體中

に日光を輝かせて、勇ましく働いて居る浩が、兩手をあげて自分をさし招いて居るのがまざ〳〵と見えた。「斯うしては居られない！」彼はもう、目にも屆かない、暗い深い谷底へと、ずる〳〵轉落する自分を見離すことは出來ない心持になつた。どうにかせずにはすまされない心持――。庸之助は其が「希望」であることを覺つたのであつた。

「希望！

父親の入獄以來、自分には絶對に關係ないと思つて居た「希望」。

「あゝ！　俺にはまだ希望があつたのだ!!　希望が！」庸之助は强張つて居た心が、端からトロ〳〵と融けて來るのを感じた。名狀仕難い涙がこぼれ出したのである。

（十四）

庸之助にとつては、どうしても偶然とは思へない此のことのために、一旦影を隱して居た彼の「善の理想」が又頭を擡げ出したのである。

「俺は一生これで終る人間ではない！」とは、勿論只思つた丈で仕舞ふかもしれないが、庸之助には心强かつた。どうしても總てが天の配劑だと云ふ氣がして急に明るい廣い、道が開けたのを感じたのである。

天が自分に幸すると思ふと、光輝ある考へになつて來た彼は、又立志傳中の一人として自分を豫想し、努力し始めた。彼は全く熱中して、善い自分を現はすことに心ごと打ちこんで掛つたのである。丁度、先彼が、猫を被つて、世間體を胡麻化して居る者達を、アッと云はせて遣る程、何處までも惡太くなれと覺悟した時の通りの、强い熱心をもつて、今度はまるで反對の方へ進み始めたのである。

此の變化は、浩との友情を、復元の純なものにした。「坊つちやん、坊つちやん」と馬鹿にして居た浩――勿論庸之助は浩の言葉に動かされた事も、一度二度ではなかつた。けれども强ひて尊び、互に打ちとけ合はうとはしなかつた。一人の人間に對してゞも特別な情誼を持つて居ることは、自分が惡太くなり抜くに妨げとなると、感じて居たのである。――の事も、無理しない感情で考へることが出來た。死刑囚がいざ殺されると云ふ時になつて、頸に繩を卷かれても、彼の心には何か生に對しての希望がある。假令漠然とはして居ても何か今此處で斷たれつきりの生命ではないことを感じて居る。それでなければジッと繩を卷かれて居られるものではあるまいなどゝ、曾て浩が語つたときには、未練だとか、膽が小さいとか、嘲笑つたけれども、此頃はさうでもあらうと云ふ氣がして來た。そして、浩はいゝ友達であつたと云ふことも感じて來たのである。

　思ひがけない庸之助から、葉書を貰つた時、浩は快い驚きにうたれた。どうぞ暇だつたら話しに來て呉れなどと、見なれた字で書かれてあるのを見ると、彼はそのまゝ、うつちやつて置けない心持がした。まるで總ての態度が一變した彼を見たばかりには、浩は自分が信じられない程の嬉しさで一杯になつた。妙な隔たりのない、先通りの友情が恢復したことは、二人にとつて眞個に喜ばしいことであつた。

「實は僕も氣が氣でないやうだつたよ。」

と云つたとき、今の安心でのび〱とした心から、涙が滲み出るのを浩は感じさへした程であつた。

　二人の立ち話しは以前にも增して屢々になり、又互のためになつた。二人の住むまるで異つた生活から得た種々の話材が、各自を益し合つたのである。

　一度心が善を求めて來出すと、庸之助は此の日常の自分の生活が堪らなく呪はしくなつて來た。到る

ところに醜いものがある。卑劣な感情がある。互に惡い深みへ〳〵と誘ひ合つて落ちて行かうとするやうな周圍の狀態を見ると、庸之助は浩が羨しくなつた。下等な爭論や憎しみのない世界へ住みたい。此の世間は穢れて居るといふ、彼の意見が又心を占領し、あくまで奮鬪して社會の改良者となるべき未來を想像したのであつた。

お咲は國へ歸ると、もうすつかり氣がのび〳〵と成つた。境遇の變化が非常に彼女の心を慰めて、毎日毎日思ひ出の中に、讀ごととけ込んだやうな日ばかりが續いたのである。

子供時代の思ひ出――貧しい、父親のこわいなかで、矢のやうに早く通り過ぎて仕舞ひはしたものゝ、流石に今回想すれば、自然と涙の出るやうな追憶が、眺める一本の樹木、一條の小川から湧き返つて來るのである。

垣根の「うつぎ」の芽を摘んでは、胡桃あへにして食べたこと、川へ雜魚を掬ひに行つて、下駄や鍋を流して仕舞つたこと。赤坊だつた浩を守りしながら、つい遊びほゝけて、何處へか置去りに仕て仕舞つたこと。お咲は目の前に、小さい〳〵桃割――いつも根がつよくしまりすぎて、結ひたてには、頭が下らないやうな氣のしい〳〵した――に結つて、黄色い着物を着せられて居た自分が、泣きながら彼方の木の根から、此方の木の根へと、紐ごと寢かせて置いた筈の浩を搜して歩いて居る姿が、まざ〳〵と浮み上つた。そして思ひがけない、櫻の木の下に、大きな目をあけて、拳をしやぶつて居る浩を見つけたとき！ 今でさへも、「あゝ嬉しかつたなあ」と思ふほど、恐らく一生の中に二度とはあるまい嬉しさであつた。

孝之進は近所へ出かけ、おらくは裏の菜園の手入れをして居る。家中が、物音一つ仕ない靜けさであ

る。手ふさげに、解きものをしながらお咲は異個に安心した心持になつて居た。咲二をねかしつけるときよく唄つた唄が何となく口を洩れる位、彼女は心の「しん」が樂しんで居たのである。昔お江戸が繁盛の時分、流行つた數ゝ唄を、伯母さんからおらくが教はつたものだ。お咲を始め、死んだ澤山が、此の唄でねせつけられたのである。それを又彼女が咲二を眠らせるに唄ふ。家庭的な思ひ出の深いものであつた。十ある歌詞を彼女はたつた三つ、それも飛び〳〵にほか覺えて居なかつた。

五つとの――よの――え。
猪うたんと勘平が――勘平が――
ねらひすました二つだま
放さうかいな――のな。

七つとの――よの――え。
生酔のふりよした由良之助――由良之助――
主人の逮夜に蛸肴
はさまうかいな――のな。

十うとの――よの――え。
とうとかたきを討ち納め――討ち納め――

主人の墓所にめい〳〵と手向けうかいな──のな。

お咲は何心なく、手を延してさつきまで直ぐ傍に寢ころんで居た咲二に觸らうとした。けれども、何時の間にか居なくなつて居る。彼女一人の影坊師が、煤けた障子に寫つて居る。

「オヤ、又居ない！　一體まあ何處へ……

彼女は、フト或ることを思ひ出した。そして急に陰氣な表情を浮べながら、其處から草履を引つかけて、外に出て行つた。

裏へ廻つて見ると、柿の木と納屋との間に挾まつた咲二の、小さい後姿が見える。彼女は拔き足をして近よつた。咲二は、人さし指を釘のやうに曲げて、納屋の外壁をほじくつては、爪の間につまつて來る、赤茶色の泥を食べて居るのである。さも美味さうに、ピシヤ〳〵舌なめずりをして居るのを見ると、お咲は、頭から冷水を浴びせられたやうな氣がした。周圍を見廻して、まあ見て居る者のなかつただけ、何より有難かつたと思ひながら、もう足音を隱さうともせずに、息子のそばによつて行つた。

彼は、思ひがけず母に來られて、少しは喫驚したらしかつた。が、もうすつかり彼女の愛に信頼して居るやうに、泣きゃ、逃げかくれもせず、仰向いてお咲の眼の中をながめた。

彼女は、周章てゝオド〳〵しながら、息子の手をグン〳〵引つぱつて家へ連れ込んだ。障子のあらひざらひをしめ切つてから、

「如何うしてそんな事をするの？　咲ちゃん！

と、始めて口を切つた。

「何故共那ものを食べるの？　お菓子をあげるからお止めと、あれほど云つたぢやあないの？　何が美味しいんだらうねえ。

　咲二が壁土をたべる癖の起つたのは、何時ごろからだか誰も、はつきり知るものはなかつた。が、兎も角もお咲が見つけたのだけでも、今度で四度目である。一番最初には、茶の間の隅で、何だかしきりに食べて居る彼の口のまわりが、泥だらけになつて居るのから、氣のつき出したことであつた。

　何だか並みでないところのある息子を、どうぞ一人前に成人出來るやうにと、全力を盡して居るお咲は、どんなに情けないか分らなかつた。恥かしくて、人にも聞かされない。行燈の油をなめるものがあつたと云ふ話を思ひ出すと、たまらなかつたのである。

「何と云ふ情けないことだらうねえ。咲ちゃん！　お前はどうして母さんが、こんなにいけないと云ふのに聞き分けないの？（お咲は急に聲をひそめて、彼の耳の邊で囁いた。）壁を食べるなんて云ふのは、お乞食だつてしませんよ。どうぞ止めて頂戴、ね？母さん斯うやつてたのむわ。」お咲は泣きながら、咲二の前に跪づいて、兩手を合はせた。けれども彼はけろんとして居た。お咲は突つかゝつて來る悲しみを、押へ切れないで、塵くさい咲二の足につかまつて泣き伏して仕舞つた。それでも咲二は、涙を浮べさへしない。只ぼんやりと、近くの停車場から聞えて來る汽笛の音に聞き惚れて居た。

　浩は、只一度、小石川からまた聞きに姉の様子を聞いたぎりなので、心もとなく思つて居ただけで、

咲二が壁土を食べる癖などを知らう筈はなかつた。父親の工合も餘りよくないところへ、お咲親子が行つたので、おらくが、どの位家計の遣りくりに心をなやまして居るかゝ思ひやられた。小石川へ行つて僅かでも、お咲親子がこちらに居れば當然かゝるべき費用の幾分かを、國許へ送つて貰はうかとも思つたが、それも云ひ出しかねて、彼は血の出るやうな儉約を始めた。出來る丈水を浴びて、湯に行かないこと。本や紙を殆ど絕對に買はないこと。時々はほんとうに涙をこぼしながら、彼は精々切り詰めた生活をした。それでも、一月の末に現はれて來るものは、極く〳〵僅かであつた。息子から來る、三圓六十三錢など〻云ふ爲替を見て、孝之進始めお咲まで口が利けないやうな、心持にうたれることもあつた。孝之進はもう憎いどころではなかつた。心の裡では有難いとも、忝けない可愛いとも思つたが、一旦「勘當した。」と明言したことに對して、彼は自分の方から一本の手紙も出すことは出來ない。遣りたくて、ムズ〳〵しても意地が承知しなかつたのである。そのかはり、浩からの便りは、假令一片の端書でも、彼は目で讀むと云ふより、寧ろ心全體で含味(がんみ)すると云ふ程であつた。紙の表から裏まで、繰返し〳〵とつくりと見る。考へる。批評して「なか〳〵生意氣なことを書き居るわい。」と思ふと、我ながらまごつく涙が矢鱈にこぼれる。そして何とも云ひもしないのを、「年をとると、とかく目が霞む、目が霞む」と、自分に辯解して居たのであつた。

　浩の方でも、此頃になつては父親がどんな心持で居るかと云ふのを、すつかりさとつて居た。孝之進あてにした手紙でも、爲替でも、皆滯りなく受取られるのを思ふと、嬉しいながら、妙に賴りない心持がした。どうにかして、もう僅か許りらしい餘生を、せめて樂にでも送らせて上げ度いと、しみ〳〵感

じた。けれども、自分の最善を盡したより以上のことを、望むことは到底出來ない。特別な報酬を得る目的て、夜業などをすることさへあつた。

(十五)

どんなに案じやうが歎げかうが、咲二の奇癖はつのつて行くばかりである。度々になるうちには、自然と他人にも見つかつて、噂が噂を産んだ。そして、平常孝之進が、幾分尊大なところから、餘り好意を持つて居ない者などは、畜生のやうだなどゝまで云つた。お咲にとつては、それが何より辛かつた。子供の行末のために、解けない呪咀が懸けられるやうな氣がした。又時には眞個に、誰か呪釘でも打つて居るのではあるまいかと、人知れず鎭守の森やお稻荷さんの樹木などを一々見て廻つたりさへした。が、勿論そんな筈はない。咲二が可哀さうなのと、惡口を默つて堪へて居なければならない口惜しさに、お咲はジッとして居られない程に心をなやました。心配し拔いた揚句、皆は到頭「かげの禁厭」――むしの禁厭――をさせる事にした。禁厭使ひの婆は七十を越して、腰が二重になつて居る。白い着物に、はげちよろけの緋の袴、死んだやうな髮をお下げにして居る、此上なく厭な彼女の姿は咲二を異常に恐れさせた。

「お祖母ちやんの、鐘から出て來たお化けだよーッ！　僕いや、母さん！　僕こわいよーッ！」(咲二は、おらくが一日に度々鳴らす佛壇の鐘の音を、此上なく厭がつて居た。そして實際、彼の異様な神經は、その音響から自分の想像して居る化物の姿を見るやうでもあつた。)

始めて禁厭をするとき、彼は、手足をじたばたさせ、氣違ひのやうになつて抵抗した。が、何にしろ家中の大人がかゝつて彼をへ押つける。その中に、いかな時でも自分の嫌ひなことを曾つてしたことのない母親——お咲——の混つて居るのを見ると、彼は爭ふ力もないほどがつかりもし、恐ろしくもなつた。殺されさうな聲で泣き叫びながら藻掻くと、情ないやら、腹立たしいやらで、ごつちやになつた孝之進が、

「誰もこわいことはせぬ。靜かにしないか！　馬鹿な奴ぢや！」

と叱りつけながら、帶際をとつて、彼の膝元に引き据ゑやうとして、一生懸命に力を入れた。

水をたゝえた鉢、硯と筆、杉箸、手拭などが用意され、一かたまりになつてごた〳〵して居る咲二や老人達の前で、禁厭使ひは故意とらしく落着いて咲二の靜まるのを待つて居た。

「强いかげが居ると、私の顏を見たゞけで、なあ貴女もうさう云ふ風にあばれるでな。かげがいやがるもんと見えますなあ。

「おぢいさんの病氣もかげのせいかもしれませんなあ、御いくつになんなさいます？　え？　六十六かいな。そんならかげ六十と云ふて居るからもう六年前にかげは消えた筈ですがなあ。

長い間泣き放題にさせられて、幾分か疲れたとき、咲二は無理遣りに、禁厭女の前に座らされた。皆の注目の焦點になつて老婆はいよ〳〵勿體ぶつた。彼女は一同に辭儀をしてから杉箸を割り、一本をとつて水の面に何か書いた。天照皇大神宮を中央に十五體の神の名を書く筈なのだけれども「もう年を取ると何でも面倒になるし、字は忘れるし。御免なさりませよ。」と心の裡で辯解して何か解らないも

のを、ごちよ〳〵と書くように手を動かした。咲二の手をその水で洗はせ、すつかり拭いてから、右の掌に六つ字を重ねて眞黒に書きつけた。
「ホラこうするとかげが出ますぞ。指の先からでも足の先からでも、顔からでも、頭からでも、白い細いかげが、さわ〳〵さわ〳〵と這ひ出しますぞ。」
何だか思ひ込んだような調子で云ふ禁厭使の聲が、泣くのをやめて、好奇心と恐怖の半ばした心持で居た咲二の心を聲つた。「指や顔からむしが出る！」彼は又たまらなく氣味を惡がつた。そして云はれる通りに指の先を見て居た。さうすると、全く、陽炎のような蟲が上げた指の爪の間からフラフラフラ〳〵と立ち上つた。
「出た！　出ましたよ、まあ！」
大人達も幾分意外だと云ふやうな顔で、咲二の指の先をながめた。
「術、術でありますよ。術と云ふものは、恐ろしい利益のあるもんでなあ。ほれね、出ますだろ？　なかなかふんだんに出ますわなあ。
咲二は息もつけなかつた。婆が鬼のやうに見えた。こわくて〳〵、濟むや否や轉びさうになつて、逃げ出したまゝ、永いこと家へ入らなかつた。戸棚をあけたら、さつきの婆が飛び出して來さうな氣がしたのである。
其の日一日咲二はどうにかなつて仕舞つたやうに音なしかつた。壁土を食べるのも見つけられなかつた。それ故、家の者達はもう利いたのだと思つた。うす〳〵馬鹿にして居たのが勿體なかつたとさへ思

はせた。どうにかして、自分の壽命を縮めてもいゝから、咲二を人並みにしたいと腐心して居るお咲は、天にも昇る心地がした。これでなほつてくれゝば、何と云ふ有難いことだかと、あの穢なく、幾らかくさくもあるらしい婆が神樣より尊く思へた。ヤレ〳〵と心から思つた。そしてその晩は、傍に寢て居る咲二が魘されて、泣き出すのも知らずに熟睡した。自分の體の工合まで、はつきりと引き立つたやうにまで感じられたのである。

二日三日と禁厭がされるうちに、咲二は此の一日に一度の攻め苦は、到底不可抗的のものであると、觀念した。禁厭が始るごとに、彼は一種の輕い幻覺狀態に陷り出した。が、誰も知らなかつた。十の指の先からは、集めたら、どの位になるか分らないほど、澤山の「かげ」が、さわ〳〵、さわ〳〵と出た。

四日目の日は、眩ゆい程好いお天氣であつた。今日でお仕舞ひと云ふので、總てが念入りに行はれた。

いつもの通り、十の指の先から、かげが湧き出した。けれども、どうした事か！ 今日は今までよりも倍も倍も澤山のかげが、透き通る細い蚯蚓のような形をして、ほんとうにさわ〳〵、さわ〳〵と音まで立てるほど、同じようにまがりくねつて後から〳〵と湧いて來るのを、咲二は見た。恐れで心が寒くなつた。處へ、「ホラ！御覧なされ。今日は頭の地からも出て來ますわな。ホラ！」と云ふ禁厭使ひの聲を聞くと同時に、咲二は自分の體の中から、千も萬もの細い〳〵糸が、絕え間なくスル〳〵、スル〳〵と引き出されて居るような感じを得た。彼は體の「なかみ」がスーッと空つぽになつたと思つた。そのとき、咲二の目の前には眞白で大きく太つた、目も口も鼻もないものが、ニヨキッと現はれてブク〳〵、

ブク〳〵と際限もなく大きくなつて行つた。彼は殆ど無意識に「かげが出る。かげが出る‥‥母さん。」とつぶやいた。彼の眼は開いたなり、もう何も見えなかつた。張りつめ〳〵て居た彼の神經は、最後の恐怖に堪えられないで、到頭絶れて仕舞つたのであつた。

（十六）

只癒して遣り度い許りで何事もした家中の者は、皆失望し、やがては絶望した。魂が拔けたやうになつて陰氣にジッとしたまゝ、折々爪の間を見ては、「かげが出る‥‥かげが出る、母さん！」とつぶやく咲二の姿をながめると、お咲は狂氣のやうに歎いた。

「俺は始めから、あんな禁厭のやうなまやかしものは役に立たんと云つて居つたのだか‥‥。」

うつかり、孝之進が洩した斯う云ふ言葉の端から、今まで嘗て一度もなかつた淺間しい、親子喧嘩などまで屢々起つた。

「御自分だつて一緒になつて、泣いてこわがる咲二を押へつけたり叱つたりなさつたのに、今になると私許り攻めるなんて、餘りですわ。誰だつた皆惡かつたのよ。父さんだつて彼の時は、癒るかもしれないとお思ひなすつたんでせう？　私だつて――私だつて、只よくして、よくして遣りたいばつかりだつたんだわ。」お咲は聲を上げて泣き伏した。

見て居る孝之進の目にも、思はず涙が浮んだ。「泣いたつて始まらん。」と思ひながら、云ふまゝにならない涙が容赦なくこぼれ落ちた。

「まあまあお前、さうお泣きでないよ。ね、決して誰を恨むものぢやあ、ありません。皆前世からの因緣事なのだからね。あゝあゝさうだとも、皆因緣ごとだよ。もう斯うなつた上は、只よく諦めることが肝要だよ、ね、お咲。一旦きつぱり諦めがついてさへ仕舞へば、どんなことでもさうは苦勞にならないものさ。ねお諦め、さ泣くのをやめてね。

おらくは、泣き沈んで居る娘の肩を、震える手で優しく撫でながら、無意識の裡に珠數を爪繰つた。

斯う云ふ氣の毒な場面が、一日に幾度となく繰返された。お咲は、東京の良人のところへ何と詫びを云つてやつて好いか分らなかつた。良人に濟まないのは元より、お咲は息子に對しても、何と云つてあやまつて好いか分らないことをしたと云ふ苦しみに攻めぬかれた。「どうぞ勘忍して頂戴、咲ちやん！」朝起きると、夜寢る迄時をかまはず、彼女は息子の前にお辭儀をしては、涙をこぼした。そして、自分があんなに癒してやらうと思つた誠意から、ほんとうに只一つの眞心から、斯う云ふ結果を引き起したと云ふことが、一層彼女の苦勞を增させたのである。

「これと云ふのも私共が貧乏なばつかりに起つたことだ。立派なお醫者樣にかけられる身分なら、誰が大事の獨り息子を、禁厭つて貰ひなどするものか！貧乏だと思つて皆が、虐じめるからこんなことになつて仕舞つたんぢやあないか！

精神過勞が、彼女の病氣を惡い方へ／＼と進め、終日發熱したまゝで過ぎるやうになると、感情は益益興奮して、ヒステリー的になつた。咲二の事を云ひ出すと、誰彼の見境ひなく、「貴方もあれをいぢめて下さつたんでせう」とか「おかげさまで、あれも到頭氣違ひになりましたよ！」などゝ云つては、

喧嘩を持ちかけた。

　咲二が變になつて、三日とならないうちに、お咲はまるで見違えるほど、窶れた。不眠症にかゝつて、眠りの足りない青い顏に、目玉ばかり光らせて居る彼女の頭は、次第に平調を破つて來た。幾千もの豆太鼓を耳の裡で鳴らして居るやうで、人の聲が一重何か距てた彼方に聞え、石炭殼を一杯つめたやうに感じる頭を、一寸でもゆすると、ガサ〳〵と一つ一つになつた澤山のものが、彼方の隅から此方の隅まで、ドドドドーッところがり廻る氣持がした。五つか六つの子のやうに、オイオイ泣くかと思ふと、直ぐ止めてきよんとしながら、咲二と並んで、呑氣さうに空をながめて居たりした。

　其朝は、おそろしい上天氣であつた。深い朝露――霜にはまだ成らない、あの澤山な露――てキラ〳〵光り輝やいて居る、屋根から木立から落葉まで、殆ど一睡もしなかつたお咲の心には、餘り刺戟が强過ぎた。彼女は呆然瞳をせばめて、霧のかゝつた彼方を眺めて居ると、不意に何處からか咲二が來て、耳元で「かげが！かげが！！」と叫んだ。彼は平常になく腰を折る程に力を入れて、歌ふやうに調子を取つて怒鳴つたのである。お咲は、バッと氣がはつきりした。そして咲二の顏を見、聲を聞いたとき、彼女の心の裡には、彼の日の記憶――咲二が昏倒したときの場面――が、スル〳〵、スル〳〵と繰擴げられた。名狀仕難い感情の大浪が、ドブーンと吼りを立てゝ打ちかゝつて來た、其の刹那、彼女は急にお腹の下の方から、眞赤に燃えさかつて居る火の玉が、グングン、グングンとこみ上げて來るのを感じた。熱い！　熱い！　體が焦げさうだ！　苦しい。火の玉が上つて來るに連れて、體中が、千切れ〳〵に裂けて仕舞ひさうだ。息がつまる。あ！　胸の下まで來た！　中頃まで……。お咲は苦しまぎれに夢中になつて、その恐ろしい

火の玉を吐き出さうとした。胸をかきさばいたり、喉に指を突込んでかき廻したりした。體中であばれ廻つた。が、玉はずん〳〵上つて來る。グングン、グングン火を燃やしながら上つて來る。あゝ苦しい、あ！　死にさうだ！　お咲は兩手で口中を掻き廻したが、到頭火の玉が喉までこみあげて仕舞つた。息がつまる！體中燃え立つ！……。お咲は氣が違つて仕舞つたのである。

咲二の事、次でお咲の容態を一時に知らされた浩は、どうしてもほんとにされなかつた。それほど僅かの日數の間に人一人が氣違ひになると云ふことは信じられなかつた。彼は小石川へ聞きに行つた。其處にも亦浩の得たと全く同樣な驚愕と憂慮が漲つて居た。突然に起つて來た餘り不幸過ぎる事件は、皆の心に疑念を起させて、もう一度こちらから、孝之進に訊き正しのやうな手紙を發送させたのである。

出來るだけ委しく〳〵と、なほ〳〵がきの付いた手紙を受取つたとき、孝之進はお咲を入れて置く部屋の準備にせわしかつた。家族以外の者さへ見ると、荒れ騷ぐ彼女を、一番奥の一間に監禁しようとして居たのである。部屋中の器物を皆持ち出して、踏臺を彼方此方持ち運びながら、彼は釘、鋲などゝ、どんな小さいものでも、凡そ表面の突起となつて居る物と云ふ物を拔き取つた。武器になりさうなもの——若しかすれば彼女自身に向つて振ふかもしれない——を、細心な注意を用ひて、取りのぞいた。

お咲を其處に入れて、四枚の仕切りになつて居る板戶の前に、自分の床を持つて來て番をする積りなのである。戶には裡の見える一尺ほどの無双が付いて居た。老人の力で、其等の仕事を三日もかゝつて仕上げると、孝之進はさり氣なく、娘をその部屋に連れ入んだ。そして彼方から明けないやうに、板戶に心張棒をかつたとき、愛する者の棺に釘をうつ時の通りの哀愁が、彼の心を押し包んだ。

「鹿俺がで番をするかな。」

戯談のやうに軽く云はうとしながら、口を動かすと、さも悲しみ疲れて居るらしい重い、弱々しい聲が洩れた。咲二を縁で遊ばせて居たおらくは、悲しさうに頭を振つて珠數を揉んだ。

東京へ返事を遣るに就いても、彼は隨分頭を惱ました。浩へ手紙を出すには此上好い機會はない。ついいそがしいのにとりまぎれたやうにしてやれば……。孝之進は散々、迷ひ拔いた末到頭最初の思ひつきを決行した。極めて何でもない心持で居る積りでありながら、「浩殿」と書くときに、妙な感じが心に起つた。筆が思ふやうに動かないで、稍々劃の不明な幾行もの字の終りに、「浩」と云ふのばかり丁寧に念を入れて書かれたやうに見えて居た。

秋も段々末に成つて來た。肌寒い或る晩、机に向て居る浩の目には、窓前の空地にたつた一本ある櫻の若木が丁度眺められた。青く動かない空の前に、黒く浮いて居る葉が、折々風の渡る毎に、微かな音をカサ〳〵と立て、今散らうとする小さい朽葉が、名殘を惜しむやうに、クル〳〵、クル〳〵と細い葉柄一本に支へた體中で、舞つて居るのなどが見えた。

鉛筆を握つたまゝ、ぼんやりと葉の運動を見て居た浩は、其時フト、頭の傍の電燈の方から、何か小さいものが、丁度塵のやうに落ちて來たのを見つけた。古手帳のやゝ黄ばんだ紙の上に、音でない程かすかな音――何か落ちると云ふ事の素早い聯想ばかりで感じられるやうな――を立てゝ來たのは、一匹の小さな〳〵蟲であつた。

體全體の長さが、鯨尺の一分にも足りない。針の元位の頭に、漸々これが眼かしらんと思はれるものが二つついて居る。見れば見る程、小さいながら、調つた、美くしいと云ふに近い程の體形をして居る。けれども、どうかしてもうすつかり衰へ切つて、三對あつたらしい脚も、二本は中途から折れて、胴の傍に短かく根元がついて居る。總てが、實にこまかく、きやしやにまとまつて居る。まるで生きて居られるのさへ疑はれる程である。が、羽根が見えない。紙の上に目を摺り込むやうにして見ると、蟲は仰向けになつて、落ちて來たらしい。細い體に敷かれて、半透明な羽根が僅かばかり覗いた居た。

暫くの間、蟲は脚一つ動かさず、非常に靜かにして居たが、やがて急に、眞中の一對の脚を高く振りかざしながら、極く狹い範圍——拇指を押しつけた位——の中を、頭を中心にしてぐる／＼、ぐる／＼と動き廻つた。

實にかすかな、小さい運動ではあるが、蟲にとつては大變に辛いらしい。細い體中を强張らせ、殆ど藻搔くやうに動く。浩は少し喫驚した。そして、多大の興味を以て觀て居るうちに、更に驚くべきことを發見したのである。此の名も知れない一匹の小蟲は、二つに裂けて見える胴體の最終部から、目にも見えないやうな卵を生みつけて居たのである。

毛筋ほどの脚を延ばし切り、體を燭の柄のやうに反らせ、此小蟲にとつては、恐らく無上の苦痛を堪へながら、完全に責任を果さうと努力して居るらしい樣子を見ると、浩は一種の嚴肅な感動にうたれた。

暫く靜かにして居た蟲は、又急に痙攣的に體中を震はすと、少し位置をかへて鎭まる。見れば薄茶色

の、ペン先で作つた點程の卵が、其處に遺つて居る。今にも捨てられて仕舞ふかもしれない一片の古紙の上に、小蟲は全精力をそゝぎ盡して仕舞ふほどの努力をもつて、大切な子孫を遺さうとして居るのである。直ぐ捨てられるかもしれない紙の上に……。浩は、「大自然の意志」が、餘り歴然と今自分の、此の目前に示されて居るやうで正視するに堪へない心持になつた。悲壯な、又恐ろしい有樣である。小蟲も、もうじき死ぬのだらう。卵も直ぐ紙ぐるみ、何のこともなく捨てられないとは、決して云へない。けれども、今斯うして小蟲は、其等の一つも考へず、自然の命ずるがまゝに、勇ましい從順さで、任務を果さうとして居る。

言葉に纏まらない雜多の感情が、あとから〱と彼の心に迫つて來た。浩は何だか、此の一匹の小蟲の前に――或時は彼等の存在することにさへ頓着なく過して仕舞ひ勝な此の小蟲の前に――自づと頭の下る心持がしたのである。

各自の子孫に對して持つ精神過程は、總ての生物が全く同一なのだ――假令へ自意識のあるないの差はあつても――と思ふと、浩はあらゆる其の時の親と云ふものがいとほしいやうに感ぜられた。「親馬鹿」になる筈だと思はれた。ならずには居られないやうに、命ぜられて居るのだと、或點までは云へる。浩は何だか妙な心持がした。善種學を人間が考へる根本の心持が、痛切に感じられると同時に、どうせ結局は生活の敗殘者とならなければならないやうに見える、體力にも智力にも適者となる素質のとぼしい人までが、自分自身漸々よろめき〱歩きながらも親と云ふ位置に殆ど無意識に立つて居る心持が可哀さうになつた。

總てが大自然の意志である。日が輝やき、月が沈むのと何の差もなく、人が死に、生れ、苦しみするのを自然は見て居る。が、決してさうであるのが無慈悲なのではない。求め索ねて得やうとすれば、自然はそれを肯定して居ると同時に、あるがまゝ、なるがまゝにまかせた心で、安穩にして居たとて、何の咎めも與へないのだ。偉いものだ。素晴らしいものだと彼は、つく〴〵感じたのであつた。

國元の父親から來た手紙を見た時、浩は、小蟲を見た時に感じたと全く同じな、一種の心持、全く說明の許されない一種の感にうたれたのである。悲しいと云ふより恐ろしかつた。涙をこぼせる程度の總ての狀態ではなかつた。まだやつと七つの咲二が、恐れ〳〵て居る禁厭を、觀念した心持で掛けられる樣子。お咲の狂亂した姿、おらくの念佛、父親が、不快なときに立てるあの陰欝な足音……。

不幸の底に沈んだ二組の親子の有樣が、彼の目に活きて動いた。何とも云へず痛ましいことだ。極端な悲しみが、彼の涙を凍てつかせて、肉體的の痛みを、眉と眉の間に感じた程であつた。

「誰がこれを起す原因となつたのか?

誰が咎められるのか?

浩は、うめくやうにつぶやいた。

「姉さんは、阿母さんに愛された。此上もなく可愛がられた。咲二は家中の者に心配されたのだ……。

「それつきりか?

彼ば、何か訊ねるやうに狹い廊下の白壁を見廻した。五燭の電氣に照らされて、ぼやけた彼方の方か

ら、「それつきりか？　それつきりか？」と云ふ合唱が迫つて來るやうな氣がした。が、それつきりである、まつたく。彼は、おらくが只の一度もお咲をきびしく叱つたのを見たことがないと同様に、叱られて居る咲二を見たことがない。

「只愛情があつただけで？

浩は寒い心持になつて、歯を喰ひしばつた。

「只愛情があつただけでー

彼のたよりない紙片の上にまで、卵を遺させた、「大自然の意志」が、二組のこの親と子を、靜かに眺めて居るのを、浩は感じたのである。

彼の母親は、まだ十六だつたお咲を、可愛いばかりに、恭二が若く、又近親であると云ふことをも考へずに嫁入らせた。其の時、もう既に、咲二が總ての點に不幸な子として現はるべき胚種が、下されて居たのである。けれども、誰もその事は考へずに、咲二が變則な精神作用を持つて出て來たことを、偶然のやうに、又有り得べからざることのやうに、驚き、且悲しんだのであつた。

お咲は、咲二を人の物笑ひにさせたくなかつた。どうぞ立派な人、せめては人並みに丈させたい許りに、禁厭にすがつた。命より大切な子を、とんだことにした心痛の餘り自分まで物狂ほしくなる。「自然は彼女等に、母親の愛情――その子のためには、何物をも顧みない熱情――を餘りに強く與へてくれすぎた。」浩は堪らない心持がした。二人の狂人を今日出すまでには、もう幾年も前から、目にこそ見えね準備されて居たのである。

彼は全く辛かつた。不幸すぎた。

「けれども、俺は立ちどまることは出來ない！　飽くまで進まなければならないのだ。勇ましく、しつかりと、お前は男だ!!

淚が、いくら抑へやうとしてもこぼれた。遣る丈は、岩にかぢりついても遣り通さずには居られない彼の心が、勵ましてあり、苦しみであつた。

自分の前途に於て、出會はなければならないどんな運命も、臆病に廻避しようとは思はぬ。けれども……。

自分に期待されて居る――家を繼ぐべき者として、その事は當然なことゝして、他の周圍からは考へられて居る――を思ふと、浩はこわくなつて仕舞つた。何處まで責任を持てば好いのか？

（十七）

自分等の極く僅かな家族の中から、二人まで發狂者を出したことは、浩に或る深い疑惑を起させたのである。幾代か前の祖先で、氣の違つた人は無かつたらうかと云ふことが、非常に考へられ不安でならなかつた。父親には、病的な精神缺陥が無いと云ふだけでは、恐ろしく微妙な遺傳の證明にはならぬ。澤山生れた同胞達が、皆早死にをしたのも、共那ことが原因になつて居るのではあるまいかとも考へられる。浩は眞個に恐ろしかつた。

「若し萬一さう云ふことがあれば、どうすれば好い？　俺は不安だ！　考へると堪らない！

けれども、浩は働かなければならない。其の日の來るまで、彼の仕事を仕つゞけて行かなければならないのである。今此處で臆測して見たところで、解らう筈の事でない、その萬一の遺傳が現はれるかもしれぬ日を怖れて、それまでの、どの位かの時間を空費することは彼には出來なかつた。又、一方から云へば、萬一遺傳されて居るかもしれぬと同樣の萬一さで、自分が除外例の者となつて居るかもしれない。きつとさうでないとは、誰が斷言出來よう？　其程どちらも萬一のことなら、出來る丈明るい方面を見て進むべきであるのは、考へとしては解つて居る。けれども、氣が狂つて仕舞つた自分の姿を想像すると、鎭まつた筈の心も兎角亂された。苦しくならずに居られなかつたのである。

今まで無意識に過ぎて居た種々の精神作用――例へば人なみより強いと思はれる想像力が突拍子もない幻影を見ること、ゴム風船を危かしくてふくらがせないやうな心持――が、皆病的ではないのかと案じられ始める。今にも微細な頭の機關が、コトリと調子を脱して仕舞ひはすまいかと思はれたりして、暫くの間浩は、非常に神經過敏にされて居た。夜も、急に不安に襲はれて飛び起きたり、眠られないやうなことさへあつたけれども、日常の、厭でも應でも頭腦を秩序立てさせる事務が、何時とはなし自然に其等のことを恢復させた。

日を經るまゝに、かなり冷靜に考へられて來るやうになると、或程度まで、精神的の訓練を積んで居れば、多少の遺傳的精神缺陷も、補つて行けるものであることが解つて來た。

「生れた以上は、生きて居る以上は、その間丈を雄々しく過さねばならぬ。辛からうが、悲しからうが俺は堪へる！

浩は、此頃屢々彼の「氣」を感じた。感激の涙に洗はれては、彼の心が引き立てられた。そして、眞個に自分の運命を知つて、立派に遣る丈のことは遣りとげた男として、自分のことを想ふと、すべての苦痛を堪へるに充分な勇氣が強く内心に燃え立つたのである。

それから四五日立つた或晩、浩は外出した次手に、庸之助に會ふ積りで――交叉點へ行つて見た。何時も居る邊へ行つて見たが姿がない。彼方此方探しても見當らないうちに、時間もおそくなりして、其の時は已を得ず歸つて來たものゝ、彼は妙に心配であつた。病氣なのぢやあるまいかと思つて見たり、何か電車の間違があつたのではないかとまで思つた。けれども、訊いてみる處もなく、自分の暇もないので、思ひながら二三日費して、或晩又行つて見た。その時はもう、見えないどころではなく、株でも讓られたらしい一人の老人が、

「アタ刊、アタ刊！

と小さく叫びながら、淋しげに動きもせず鈴を鳴らして居た。

失望しながら浩はその爺に訊いて見たが、解らない。

「お前さん、今時の若い者が……クフン、クフン、いつまで夕刊賣りをして居ますかい。大方どこぞの職工にでもなつたでせうよ。

喘息だと見えて、喉をゼイ〳〵云はせながら、氣のなささうに答へると、爺さんは又不機嫌らしく、

「アタ刊、アタ刊！

と力なく叫びながら鈴を鳴らし始めた。賑やかな街の眞中に、寒さに震えながら立ち竦んだやうにして

居る爺さんは、まるで、瀕死の鷲が、目を瞑り汚れた羽毛をけば立てゝ、一本脚で立つて居るやうに見えた。

浩は手持不沙汰にその様子をながめながら、考へた。

「職工になることは有り得べきことである。それもいゝ。けれども、自分に無斷で姿を隱す必要が何處にあるだらう？」

何か嬉しくない事件でも起つたのだらうと云ふことが、推察された。がどうも仕方がない。爺さんに禮を云つて歩きながらも、浩は氣が氣でないやうな心持がした。若し誰も知らない處で病つて、そのまま死んでゞも仕舞つたらと思ふと、自づと涙組まれた。雨が降る晩などは、濡れそぼけて行倒れになつて居る庸之助を夢にまで見ながら、又先のやうに、思ひがけない機會が、思ひがけないところで彼に引き合はせてくれることを、心願ひにして居たのである。

けれども、庸之助と、浩との間には、その時既に偶然の機會も力の及ばない距離が出來て居た。二度目に浩が、索ねて行つた時分には、彼は北海道の鯡場行きの人足の一人となつて、親分に連れられ、他の仲間と一緒に、もう雪の降つた北のはづれへ旅立つて仕舞つた後であつたのである。

彼の日「天の配劑によつて」自分の心の中に希望を見出した庸之助は、今まで自分から進んで同化しやうとして居た周圍に、急に反感を持ち、恥辱と憎しみを感じ始めたのであつた。（庸之助は、俥夫と喧嘩をしたことから、交番に引かれたことまで、すべて天の配劑であると信じ、彼の事件の代名詞として天の配劑を用ひた。）善くならう〳〵として居る庸之助にとつて、厭はしい、醜惡なことゝほか感じられな

い總てのことが、彼の周圍に渦卷いて居る。あらゆる下等な誘惑が、互の拒まうともせぬ間に漲り渡つて居る。

庸之助は此間に在つて、獨り自分の所領を守るべく努力したのである。けれどもそれは非常に困難なことであつた。彼等——庸之助から云へば「下劣な奴等」——の群は、今まで音なしく仲間になつて居るやうに見せかけて、急に寢返りを打つた庸之助に對して、小面憎い感を免かれない。

「フン、貴樣がさう出りや、此方も又出やうがあらあ」と云ふ反感が皆の心を占領して、庸之助が、眞面目になればなる程、總がゝりの迫害が募つて來た。一度、全身をあげて、彼等の仲間の一員となつて居た庸之助の內心には、假令へ如何程抑壓して居ようとも、どんな欲求があり、誘惑があるかと云ふことは、彼等にはよく解つて居る。斯うすれば、斯う感じると云ふことを、千も萬も承知で居ながら、チクリチクリと苛なんでは、苦しむ彼を嘲り者にして居たのである。

けれども庸之助は、ブル〳〵しながらも辛棒をした。さう云ふ裡にあつても、搖がない自分を保つことが、眞實の修養なのだと云ふのが、彼の確信であつた。

ところが或晚、ショボ〳〵雨の降るときであつた。

妙に骨を刺す風と、身にしみ入る雨水の冷たさで、體中かぢかむ程になつて、腹を減らしながら庸之助は、歸りたくもない合宿所へ戾つて來た。

油障紙を明けると、濁つた灯の光りに照らされて、脫ぎ散らした草鞋や下駄で一杯になつて居る土間を越して、多勢が車座になつて、酒を飲んで居るのが見えた。

「悪い時に歸つて來た！

庸之助は、つとめて皆の注意を引かないやうに、隅の方で足を拭くと、そこ〳〵に膳に向つた。態ざで好い加減冷へて居る彼は、冷たい飯を食べると、齒の根が合はない程になつた。頭の下の方が、强直して來るやうな氣さへして、ポッとする酒の香ひが、しみ〴〵とこたへた。絶對に禁酒してから、まだ一ト月とはならない彼の味覺は、はつきりその快い醉祭の味を覺えて居る。が、唆にもそんな氣振りは見せなかつた。彼等に知られるのが厭で、裝ふた無頓着さが、彼の態度を忽ち、ぎごちなくした。

カチ〳〵な干物をほごして居ると、今まで何も知らないやうにして居た仲間の一人が、

「オイ、一杯よからう？

と突然猪口をさしつけた。多勢の醉つた聲が、呑め〳〵とわめいた。

「いやいらない。

「まあそんなに意地を張らなくつたつていゝやな！

「飲みてえつて、顔に書いてあらあ！　ハヽヽヽ！

「ハヽヽヽヽ偉いよ！

面白さうに嘲笑ふ者達を、庸之助は鋭く睨み返した。

「何で飲むもんかい！

彼は、鼻について堪らない酒の薫りを强ひてまぎらせながら、さつさと飯をしまつた。そして隅の方へよつて、揉みくちやになつて放つてある新聞を見始めた。けれども、實は見る振りをしたのである。

字をたどりながら、彼の頭は、酒の香ひと、味と、どうしたらこれに勝てるかと云ふことで一杯になつて居たのである。皆が、自分の心の奥を見透して居るのが知れゝば知れる程、庸之助はさうでないらしく見せたかつた。今飲む酒は、單に自分を酒に負けた丈に止めて置かないことを知つて居る彼は、どんなにしても辛棒仕通さなければならなかつたのである。

「けれども又何と云ふ高い香ひだらう！

鼻を通り喉を過ぎ、胸の邊で吸ひ込んだ香ひのかたまりが、熱くなつて動き廻つた。ムズ／＼不安が心を亂す。負けてはならぬぞ。負けては大變だぞ！　と思へば思ふほど、無性に飲みたくなる。チラリと仲間の方を偸み見ながら、彼はゴクリと喉を鳴らした。

それが不幸にも、彼等の目に止まつた。

「へ！　あの面（つら）！

「こわがつて居やがらあ！

賤しい笑ひ聲がどよめいた。猪口や徳利がガチャ／＼鳴つた。

「まだ降參しねえんかい？　わるく强情だなあ。

「怨めしいやうな面あしてやがるわ！

「こゝまでお出で、甘酒進上だへゝゝゝゝ

「どうせ飲むんぢやあねえか？　その面あ何だい！

「喉から手が出さうだあな、馬鹿！

「かまうない!!」
庸之助は怒鳴つた。
けれども、もう危いと彼は直覺した。もう危ない。わざと目の前に出された猪口の中で、黄色く光つて居る液體に向つて、制御し切れない勢で、心がころげて行くのを感じた。丁度止め度を失つた車輪が、急傾斜な坂道をころがり出した通りに。
庸之助は居ても立つても居られない心持になつて、居ずまひをなほした時。よろ〳〵する一人が猪口と德利を持つて彼の前に進んで來た。
突出した兩手のなかで、猪口の縁と、德利の口がカチ〳〵とぶつかり合ふ。コクン、コクン酒が猪口に流れ出す! 庸之助は我にもあらず突立ち上つた。顏をのめり出させて、凝視する眼が、貪婪に輝やいて酒の表面に吸ひ寄せられて居た。極度の緊張と激昂とで、庸之助は傍でガヤ〳〵騷ぐ物音などは、耳にも入らなかつたのである。
「飮め!」
彼はボタ〳〵雫をたらしながら、庸之助の口の邊へ猪口をさしつけた。痛い程高い、高い香りがギーンと頭へ響く。
「飮めつたら!」
「!!」

庸之助は、いきなり相手の體に突掛かゝつた。そして徳利に手をかけるや否や、滿身の力をこめて、撲りつけた。徳利に觸れた瞬間彼の衷心には、破れかぶれな、一つそ一息に煽つてやれと云ふやうな思ひが猛然と湧いて居た。けれども次の瞬間、彼の手が無意識に振り上つて、堅い手應へを感じた刹那、飽くことを知らぬ殘忍性、氣の違ふ憎しみが、暴風のやうに彼の心に卷き起つたのである。

皆の立ち騷ぐ音に混つて、上ずつた庸之助の叫び聲が物凄く響いた。器物の壞れる音。叫び。揺れる灯かげに、よろばひながら動く澤山の人かげ。

庸之助は、益々狂暴になつた。手にさわるものを、ひつかんでは投げつけ、投げ倒し、阿修羅のやうに荒れ廻つた彼は、何か一つのものを力一杯撲りつけたとき、酒にまじつて、生暖かい、咽せるやうな生臭いものが、顏にとびかゝつて來たのを感じた。

「血?!

彼は、思はずたゆたつて、よろけた。

「血! 人殺! 人殺?!

彼は身震ひを一つすると一緒に、前後も見ずに裸足のまゝ、戸外へ飛び出して仕舞つた。

霧雨のする闇路を、庸之助は一散に馳けた。

それから彼が、飯場の人足となるまでの事などは勿論、浩はこの騷ぎさへも知らなかつた。

苗字もなく、生きて居るのさへうんざりした者達の集つて居る、暗い罪惡にまみれて居る世界では、

そのやうな事は何でもない。三面記事にさへ、載せきれない「彼等のいがみ合ひ」の一つとして、世の中の上澄みは、相變らず、手奇麗に上品に、僅かの動搖さへも感じずに、總てが、しつくり落付いて居たのである。

（十八）

其れから暫く立つての或る日、浩は父親が卒倒したと云ふ知らせを受けた。

後から〱と押しよせて來る不幸な出來ごと――自分の若さと健康、希望を持つて勵んで居る者にさへ、堪へがたく思はせる程の悲しい事件――がどの位父親の老いた、疲れ切つて直ぐ缺けさうにもろくなつた心に打擊を與へたかと云ふことは、思ひ遣るに充分であつた。めき〱と衰へて行くらしい樣子を考へると、全くゾッとした。今若し彼に萬一のことがあつたら一家はどうなるか？　自分の腕で老母とお咲親子を扶養して行かれないのは、こわい程明白なことである。それかと云つて、何處に、何と云つて縋りつけるか？

浩は其等の限りない事に考へ及ぶと、只小さい、力弱い自分ばかりが悔まれるのである。自分の年はどうも仕樣がないのだとは思ひながら、せめて三十近くにもなつて居たら、どの位總てが工合よく行つたか分らないのにと云ふ心持さへした。

けれども、其等は只思ふ丈のことで、彼は矢張りK商店の事務机の前に、勤勉でなければならなかつたのである。それが彼の最上である。が、浩が要求する最上の標準に比べて、現在自分が實現すること

を許されて居る最上は、何と云ふ低い、小量のものであつたらう！ どんな人にとつても、眞個に世の中は只樂しいものではない。光輝あるものではない。辛い。時には獨り、全くの獨りで奮闘するに堪へられないやうになる。

「けれどもお前は男だ！ しつかりしろ!!

浩は、無音無形の、彼の守りに勵まされては、涙をのみこみ、足を踏みしめて、彼の道を進まうと努力して居たのである。

孝之進の健康は、浩の想像したよりも惡かつた。彼はもうすつかり、永年の積り積つた苦勞に打ち負かされて仕舞つたのである。

お咲の部屋の、無双窓の下に敷いた床から離れることは、殆ど出來ないやうになつた孝之進は、急に七十を越したやうに見える。すべての精神活動が鈍つて、只まじ〳〵と一日中を送つて居る彼の仕事と云へば、折々、枕の下に隱して置く浩からの手紙——勿論時には、擴げたまゝ、布團の上に忘れて置くこともあるが——を偸み讀みすることゝ、大きな大きな鼾をかいて、眠ることゝであつた。眠つて居る間に見た夢と、現在の事實とが混同して、目が覺めた許りには、妙に調和のとれない心持になどなつた。

M家の金のことなどは、もう思ひ出しても見なかつた。考へて、氣を揉んでも、體の自由は利かず、どうせなるやうにほかならぬと云ふ心持もした。何も彼も氣がなくなつた。自分の命に對しても、彼は愛情も惜しみも感じないやうになつて仕舞つたのである。

今も孝之進は、人氣ないのを幸、例の通り手紙をとり出した。そして、昨日讀まなかつた分から、一通とり出した。それは浩が、おらくあてに書きながら、孝之進にもよめるやうに、いつもの大きな字で、父親の體を案じて居ること、自分の力の弱いことを氣の毒に思ふことを述べたものであつた。一字、一字に浩の衷心から湧き出した優しい慰撫が漲つて居る。心の裡で、出來る丈くさしながら讀んで行つても、孝之進の目にはしきりに涙が浮んだ。

頭をガクン／＼させながら、「もつともだ／＼。」と呟やいては涙をこぼして居た孝之進は、フト今までひそまり返つて物音一つしなかつた隣室で、お咲の身じろぐ音を聞きつけると、急に氣がついて、こごんだ體を引き起しながら、彼方此方を見廻した。猫の子にさへも、泣顏などは見せたくなかつた彼は、好い鹽梅に、誰も居ず、又來もしなかつたのに少しホッとした心持になつた。自分で自分を胡麻化す空咳を、二つ三つした。そして何心なく振向いて見ると、思ひがけず無双の間から、瞳が二つ、キラ／＼と自分を見て居るのに、すつかり驚ろかされた。お咲が此方を覗いて居たのである。

日光にあたらないのと、病氣とで、暗い中から僅か見える彼女の顏は凄い美くしさがあつた。全く瞬きをしないやうな光つた二つの目は氣味惡い。

先刻からの樣子を見て居たな！　と直覺的に思ひながら、孝之進は少し狼狽した口調で云つた。

「どうした？　呼ぶか？

（用事のときには、おらくを呼ぶことになつて居た。）

「阿父さん。咲二は？　何して居るの、呼んで頂戴な？

孝之進は、一寸顏を曇らせた。そして片手で手紙を枕の下に突込みながら、片手を振り〳〵なるたけお咲の方は見ないやうにして

「うんよし〳〵。彼方へ行つて居れ。」

と優しい聲音で云つた。

「又うんよしなの？　阿父さん！　どうして咲二にさう會はせて下さらないの？　え？　ね、どうぞ！　ほんとに一寸で好いんだから、一目で好いのよ。

「あゝよし、よし、待つて居いで、今に會はせてやる。今に……。な、いくらでも會はせてやる。

「今に、今につて、私もう何度おたのみするんだか知れやしないぢやあないの？　ひどいわ餘んまり！

急激に發作して、發狂したお咲は、此頃になつては、次第に精神が鎭まるにつれて、一日の中には、かなり度々正氣に戻るやうになつて來た。

フト夢からさめたやうに氣が付いた瞬間、彼女は暫く自分がどこにどうして居るのやら、まるで解らなかつた。けれども、次第に正氣で居る時間が長くなり、いつとはなく、殆ど正調に復した頭腦になつて來ると、自分の今までのことが、ちぐはぐながら思ひやることが出來た。

さうなつて來ると、お咲には、其の無一物な暗い、陰氣な一部屋の生活が全く堪らないものに感じられて來た。息子が戀しくなつて來た。彼の命にかけていとほしい咲二の顏を一目でも見たい。

「阿母さん！

と云ふ呼び聲に饑えて居る。

お咲は今まで何度兩親に賴んだか分らない。哀訴し、涙をこぼしても、まだ病氣が本復しないと思つて居る彼等はどうしても、咲二を會はせない。それどころか却つて、彼女の目にふれないやうにと、心を配つて居る。「氣違ひが、自分で氣違ひだと知つて居れば、ほんとうの氣違ひではないのだ。」と云ふことは確かではあるが、お咲に對しては、慘めすぎる。

會はされなければ、會はされないだけ、お咲の愛情は益々熱度を加へて行くとともに、病的になつて來たのであつた。

「咲ちやんや！

愛すべき息子の名を思つた丈で、彼女の目前には、瞬く間に、彼の全體が浮み上つた。

彼が抱かれた時の膝の重み。腕のからみついた感じ。ほこりまびれに、乾き切つた髪の毛の臭ひや、彼特有の柿の通りな肌のにほひなどが、苦しい程の愛情を、そゝり立てた。

一寸でも咲二の聲が聞えると、饑えきつた動物の通り、喘いだり、息をつめたりして耳をすませた上、壁に耳をぴつたり貼りつけてまで、僅かの餘韻も聞き逃すまいとする。

閉(しま)つて居る無双窓を、差して居るピンの先で、蚯蚓の這ふ程僅かづゝ、時間をかまはずこぢあけて、顔中に縦の赤い縞の出來るのもかまはずに、息子の椅子を、偸み見ようとする。

戸をこぢつて居るとき、唇をかみしめ、かみしめ、外を覗いて居るとき、彼女の心の中には、丁度囚人が、爪の間にかくせる程の鑢で、鐵窓のボールトを磨り切らうとして居るときの通りの、寸分異はない熱心さ——常識で判斷出來ない忍耐と、努力、想像の許されない程の巧妙な手段を發見すること——

を以て、全身の精力を傾注することを惜しまなかつたのである。勿論惜しい惜しくないは、問題にもならなかつたのである。
其故、自分の鍾愛の者に、自由に接近し愛撫し得る、位置にあるもの總てに、彼女は病的な嫉妬を感じた。激情が心を荒れ廻つて、誰かれの區別なく罵つた。
「どうしても會はせないの？　どうしても？
血が燃え上るやうな憤怒で、彼女は夢中になつた。戸を兩手や體でガタ〳〵と揺つたり、蹴つたりした。散々荒れ廻つた末、疲れ切つて暫く呆然として居る彼女の心が、又落付いて來ると、前と同樣な苦惱が、お咲の心を掻き亂し、悶えさせたのである。
お咲は泣きながら、無双から差し込む、日光の黄色い中に跳ね廻つて居る塵の群を見ながら考へた。
「私はどうすれば好いのだらう？　一生此の中で暮さなければならないのか、一生！　一生この中で？
彼女は恐ろしさに震へた。
「云ふことはとりあげられず、咲二にも會はれず、口もきかれず、此の苦しい思ひをつゞけながら、何のために、生きて居なけりやあいけないのか？
咲ちやん、お前は母さんがこんなにも思つて居るのが解る？　可愛いお前を見す〳〵人にとられて、母さんはどうして生きて居られよう！　たつた一人で、幾日も幾日も、一年も二年も死ぬまで氣違ひだと思はれて生きて居るなんて！」
お咲の目前には、此上なく恐ろしい、悲しい、身の毛のよだつやうな幻が現はれた。生きながら半身

土埋めにされて、野鳥や獸に肉を喰はれて、泣き喚めいて居る者。足の先から血が通はなくなり、死に腐つて來る。けれどもまだ氣は確かなまゝ、藻掻き、泣き叫び、逃げようとしても、どうにもならないむごたらしい死様を、自分もしなければならないのだと、彼女は、思つた。

「生き身を、此んな處にとぢ込められ、正氣なものを氣違ひあつかひにされてどうして生きて居られよう。この苦しい恐ろしさをいつまで堪へなけりやあならないのか、あー　こわい！　ほんとうにこわい！　咲ちやんや!!　お前！

彼女は子供のやうに、大きな聲をあげて泣きながら、名狀仕がたい恐怖に、怯えた。此の暗い部屋！此の情けない苦惱！　これから先、どの位つゞくか分らない、ながあい〳〵一生!!　恐るべき時間が無限に、彼女の前に擴がつて居るのを感じた。そして考へた。

「どんなに長いか判らない一生‥‥。一生の間‥‥?

不意に或る一つの非常にはつきりした考へが、彼女を馳け出させさうな勢で浮み上つた。

「死ね!!　私は‥‥。」

大聲で叫んで、體ごと跳ね上つたやうにお咲は感じた。けれども實際には、却つて、傷ついた獸のやうに、冷たく臭い疊の上に、彼女は息もつかず突伏して居たのであつた。

何かの形と字を、木版摺りにした、氣鎮めの禁厭の紙が、彼女の亂れた髪を見下すやうに、鴨居にヒラヒラして居た。

おらくは、平常の通り、お咲の食事の給仕をして居た。玉子をかけた一膳の御飯を、いつまでもかゝつて、舐めるように食べて居る娘の前に、彼女は、ぼんやりと、座つて居た。引きつめた髮が、めつきり薄くなつたのや、淡い日差しが、淋しく漂つて居る頸元などを目に寫るがまゝに見て居たおらくは、フト、お咲の懷から、何か繩のようなものが、三寸ほど下つて居るのを見つけた。

「オヤ！　何だらう？」

それとなく、氣をつけて見てゐたおらくは、暫くすると、殆ど氣付かないほど、顏色をかへた。彼女は、

「まあ髮が大層こわれたなあ……」

と云ひながら立ち上つた。そして極めて自然にお咲の後へ廻つて、片手が髮に觸るや否や、電光のような速さで、もう一方の手が、下つて居た紐のようなもの丶端をつかんだ。

「アッ！」お咲は低い驚きの聲をあげた。そして、それを渡すまいとして、母の手にすがつた。が、おらくは全體の力をこめて、紐を手の裡に手繰り込んだ。

二人は、全く無言で、奪ひ合つた。黑い一かたまりが、彼方にゆれ、此方に倒れしながら、部屋中を動き廻つた。暫くして、動くのが止んだ。お咲の啜泣きが起つた。到頭紐は、おらくの手にとられたのであつた。

おらくは、息を切らせ、手を震はせながら、そのかなり長い妙なものを明らかに見た。それは、思はず彼女が、「あゝ如來樣、南無阿彌陀佛！」と叫んだほど、驚くべきものだつた。お咲の下に着て居る單衣

の衿と、片方の袵が裂かれて、かたい〳〵三組の縄に縛られて居たのである。「あゝすんでの事であつた。」彼女は何とも云へない安心に心を撫でられるように感じた。そして泣き伏して居る、娘の肩をやさしくたゝきながら、

「こんな事は、決して考へてはなりませんぞ。よくなる時には、だまつて居ても、如來様がなほして下さる。早まつたことは、決しておしでないよ。あゝほんに……。

とつぶやいて、頬に貼りついた、髮を掻きあげてやつた。お咲の啜泣きに混つて、孝之進の寢言が、高く聞えてゐた。

お咲の最初の試みは、斯様にして失敗した。けれども、この失敗したと云ふことが、一層彼女の死に對する狂的な渇仰を燃え立たせたのである。

「死ねば何にも判らなくなる。

それ丈が非常に彼女の、闘ひつかれた心を誘惑したのであつた。彼女は、一日中「どうしたら死ねるか?」と云ふ事を考へて居た。

「どうしたら死ねる?

天井や戸や窓を見廻した。けれども、人一人を死なすには、其等は餘り偏平な形すぎる。終に彼女は自分の體までしらべ始めた。

「どうにかして、死ねないものだらうか?

彼方此方觸つて居た手先が、フト髮に觸つた。

其のひやゝかに、滑つこい感じが、第一に彼女の注意を引いた。次いで其の量、其の……長さ―に思ひ至つたとき。

彼女は滿足らしい微笑を洩した。そして、さつさと手早く、何の躊躇もなく、櫛を拔いた。ピンをとつた。背中に散つた髮を、一まとめにして、指の先でくる〳〵と縒りをかけた。それからその端を持つて、一杯に頸に卷きつけた。彼女は目を半眼にして、そろ〳〵、そろ〳〵と力を入れて、締め始めた。

愉快な輕い壓……。稍それよりも重苦しい壓……少し强い壓……かなり强い……壓。

お咲は顏が赤く、熱くなつてきたのを感じた。

頭の方へ皆血が上つて、顏中の血管が一本あまさず一杯パン〳〵になつたやうで、强張る心持がする。耳がガン〳〵云ふ。息がつまつて來た。心臟が破れさうに鼓動する、目が堅くなる……。

お咲は半夢中で、ゼイ〳〵しながら、手に力をこめた。

「もう一息！

と、思つた瞬間。

「阿母さん!!

咲二の――夢寐にも忘られない咲二の聲が彼女の耳元で叫んだ。

「阿母さん!!

ハットして手がゆるむと同時に、甘い、すが〳〵しい空氣が、鼻や口から一時に流れ込んだ。思はず大きな、深い溜息が出た。けれども、熱火照つて霞んだ彼女の眼に寫るものは、相も變らぬ暗い四方

と、落ちた髮道具、細く消え入りさうな自分の膝ばかりであつた。

彼女はこれから後、幾度も〱種々な方法で、自殺を企てた。が、いざと云ふ際にいつも失敗した。彼女の裡にあつて、まだ彼女を死なせたくない何物かゞ、眞個のもう一息と云ふときに、強い力で彼女の心を引き戻したのである。

咲二の叫び聲となり、良人の顔となり、或時は、

「もう少し辛棒すれば、きつと幸になる！きつとなるに違ひない！

と云ふ、はつきりとした感じとなつて、彼女を又、ふら〱と生の境域に誘ひ込んだ。

斯うして彼女は病的な死の渴仰と、生に對する衷心の絶ち切れない執着とに苛まれたのである。堪へられない焦躁と煩悶が心一杯に漲り渡つた。極度の精神過勞で、全く統一力を失つたお咲は、部屋の隅の柱に、ゴツン〱と大きな音を立てゝ頭をぶつつけながら、あてどもなく呟き通した。

「どうしたら死ねるだらう？　どうしたら……

彼女の窶れ切つた顔には、痴呆性の表情がそろ〱と被ひかゝり始めたのであつた。

目に見えぬ隅々から、初冬が擴がり出した都會で、浩の生活は相變らず辛かつた。寒さが、日一日と加はつて來る故郷の僻村で、生と死との間に彷徨して、苦しみ惱んで居る三つの魂。病み疲れ、なすことを知らぬ老父、姉、甥。總ては不幸である。浩は、僅かに生え遺つた樹木も、一本一本と枯死して行く生活の廢墟に獨り立つやうな心持がする。

「只獨り立てる者!!

浩は無限の感に打たれた。淋しい。辛い。けれども、悲壯な歡喜が彼の心を奮ひ立たせたのである。目もはるかな荒寥たる曠野の土は、ひろびろと窮りない天空の下に、開拓、建設の鍬が、勇ましく雄雄しく振はれることを待つて居るやうに感じられた。

「鍬をとれ！　勇ましく！　我が若者よ!!

偉大な手が、やさしく彼の肩をたゝきながら囁いた。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御明記を乞ふ

世界民人の憧憬膽仰の中心たる藝術國！開明の先驅者にして人文精華の源泉絢爛花を欺くパリーを建設せるラテン民族、先づ西歐文化の本體を窺はんとせば實に之を佛蘭西に求めざるべからず。

最新版

佛國研究

菊判洋裝美本
紙數五百頁全一册
正價金壹圓
送料金八錢

專門大家分擔執筆
精緻透徹大論文

今日の佛蘭西 編輯同人
佛國の陸軍 陸軍步兵少佐 高塚彊
佛國の海軍 海軍中佐 日高謹爾
佛國の政治 外務書記官 松田道一
佛國の經濟 豐崎善之助
佛國の外交 慶應義塾大學教授 林毅陸
佛國現代の文學 慶應義塾大學教授 廣瀨哲士
佛國の美術彫刻 有島生馬
佛國の哲學 慶應義塾大學教授 前田長太
佛國の國民性 慶應義塾大學教授 太宰施門
佛國の演劇 慶應義塾大學教授 小山内薫
佛國商工業 東京高等商業學校教授 石川文吾
佛國史觀 帝大教授文學博士 箕作元八
佛國の教育 文學博士 谷本富

好評嘖々たる本篇の姉妹篇

五版 **獨逸研究** 菊判五百頁 正價金壹圓 送料八錢
再版 **支那研究** 菊判五百頁 正價壹圓 送料八錢
再版 **露國研究** 菊判五百頁 正價壹圓 送料八錢
再版 **米國研究** 菊判五百頁 正價壹圓 送料八錢

東京市神田區三河町一ノ一九
同文館雜誌部
電話本局一五三九 振替東京三一六七

（中付六の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

無韻
長詩

人魚の嘆き

谷崎潤一郎

むかし〱、まだ愛親覺羅氏の王朝が、六月の牡丹のやうに榮え耀いて居た時分、支那の大都の南京に孟世燾と云ふ、うら若い貴公子が住んで居ました。此の貴公子の父なる人は、一と頃北京の朝廷に仕へて、乾隆の帝(みかど)のおん覺えめでたく、人の羨むやうな手柄を著はす代りには、人から擯斥されるやうな巨萬の富をも拵へて、一人息子の世燾が幼い折に、此の世を去つてしまひました。すると間もなく、貴公子の母なる人も父の跡を追うたので、取り殘された孤兒の世燾は、自然と山のやうな金銀財寶を、獨り占めにする身の上となつたのです。

年が若くて、金があつて、おまけに由緒ある家門の譽を受け續いだ彼は、もう其れだけでも充分仕合はせな人間でした。然るに仕合はせは其れのみならず、世にも珍しい美貌と才智とが、此の貴公子の顏と心とに惠まれて居たのです。

彼の持つて居る夥しい貲財や、秀麗な眉目や、明敏な頭腦や、其れ等の特長の一つを取つて比べても、南京中の青年のうちで、彼の仕合はせに匹敵する者は居ませんでした。彼を相手に豪奢な遊びを競ひ合ひ、敎坊の美妓を奪ひ合ひ、詩文の優劣を爭ふ男は、誰も彼も悉く打ち負かされてしまひました。さうして南京に有りと有らゆる、煙花城中の婦女の願ひは、たとへ一と月半月なりと、あの美しい貴公子を自分の情人にする事でした。

世燾は、斯う云ふ境遇に身を委ねて、漸く總角の除れた頃から、いつとはなしに遊里の酒を飲み初め、其の時分の言葉で云ふ、二十二三の歳までには、凡そ世の中の放蕩と云ふ放蕩、贅澤と云ふ贅澤の限りを仕盡してしまひました。そのせゐか近頃は、頭が何となくぼんやりして、何處へ行つても面白くないので、終日邸に籠居したまゝ、うつらうつらと無聊な月日を送つて居ます。

「どうだい君、此の頃はめつきり元氣が衰へたやうだが、ちと町の方へ遊びに出たらいゝぢやないか。まだ君なんぞは、道樂に飽きる年でもないやうだぜ。」

惡友の誰彼が、斯う云つて誘ひに來ると、いつも貴公子は慵げな瞼を据えて、高慢らしくせゝら笑つて答へるのです。

「うん、……己だつてまだ道樂に飽きては居ない。しかし遊びに出たところで、何が面白い事があるんだい。己にはもう、有りふれた町の女や酒の味が、すつかり鼻に着いて居るんだ。ほんとうに愉快な事がありさへすれば、己はいつでもお供をするが、……」

貴公子の眼から見ると、年が年中同じやうな色里の女に溺れて、千遍一律の放蕩を謳歌して居る惡友

どもの生活が、寧ろ不憫に思はれる事さへありました。若しも女に溺れるならば、普通以上の女でありたい。若し放蕩を謳歌するなら、常に新しい放蕩でありたい。貴公子の心の底には、斯う云ふ慾望が燃えて居るのに、其の慾望を滿足させる恰好な目標が見當らないので、よんどころなく彼は閑散な時を過して居るのでした。

しかし、世襲の財産は無盡藏でも、彼の壽命は元より限りがありますから、さういつ迄も美しい「うら若さ」を保つ譯には行きません。貴公子も折々其れを考へると、急に歡樂が欲しくなつて、ぐづぐづしては居られないやうな氣分に襲はれる事があります。何とかして今のうちに、現在自分の持つて居る「うら若さ」の消えやらぬ間に、もう一遍たるんだ生活を引き摔つて、冷えかゝつた胸の奥に熱湯のやうな感情を沸騰させたい。連夜の宴樂、連日の讌戯に浸りながら、猶倦むことを知らなかつた二三年前の昂奮した心持ちに、どうかして今一度到達したい。などゝ焦つては見るのですが、別段今日になつて、彼を有頂天にさせるやうな、香辣な刺戟もなければ斬新な方法もないのです。もはや歡樂の絶頂を極め、癡狂の數々を經驗し盡した彼に取つて、もう其れ以上の變つた遊びが、此の世に存在する筈はありませんでした。

そこで貴公子は仕方なしに、自分の家の酒庫にある、珍しい酒を殘らず卓上へ持ち來らせ、又町中の敎坊に、四方の國々から寄り集まつた美女の內で、殊更才色のめでたい者を七人ばかり擇び出させ、其れを自分の妾に直して、各々七つの綉房に住まはせました。酒の方では、先づ第一が甜くて強い山西の潞安酒、淡くて柔かい常州の恵泉酒、其の外蘇州の福珍酒だの、湖州の烏程潯酒だの、北方の葡萄酒、

馬奶酒、梨酒、棗酒から、南方の椰漿酒、樹汁酒、蜜酒の類に至るまで、四百餘州に名高い佳醴芳醇は、朝な夕なの食膳に交る交る盃へ注がれて、貴公子の脣を濕ほしました。しかし此れ等の酒の味も、以前に度び度び飲み馴れて居る貴公子の舌には、其れ程新奇に感ずる筈がありません。飲めば醉ひ、醉へば愉快になるものゝ、何となく物足りない心地がして、昔のやうに神思飄颻たる感興は、一向胸に湧いて來ないのです。

「どうして内の御前さまは、毎日あんなに欝ぎ込んで、退屈らしい顏つきばかりなすつて居らつしやるのだらう。」

七人の妾たちは、互ひに斯う云つて訝りながら、有らん限りの秘術をつくして、貴公子の御機嫌を取り結びます。紅々と云ふ、第一の妾は聲が自慢で、隙さへあれば愛玩の胡琴を鳴らしつゝ、婉轉として玉のやうな喉嚨を弄び、鶯々と云ふ、第二の妾は秀句が上手で、機に臨み折に觸れては面白おかしい話題を捕へ、小禽のやうな絳舌蜜嘴をぺらぺらと囀らせる。肌の白いのを得意として居る、第三の妾の芬娘は、動ともすると醉に乘じて、神々しい二の腕の賦肉を誇り、愛嬌を賣り物にする第四の妾の錦雲は、いつも豐頰に腮窩を刻んで、さもにこやかにほゝ笑みながら、柘榴の如き齒列びを示し、第五、第六、第七の妾たちも、それ〲己れの長所を恃んで、頻りに主人の寵幸を爭ふのです。けれども貴公子は、此の女たちの孰れに對しても、格別强い執着を抱く樣子がありません。世間普通の眼から見ると、彼等は絕世の美人に違ひありませんが、驕慢な貴公子を相手にしては、やはり酒の味と同じやうに、折角の嬌態が今更珍しくも美しくも見えないのです。斯う云ふ風で、次ぎから次ぎへと絕えず芳烈な刺戟

を求め、永劫の歡喜、永劫の恍惚に、心身を蕩しませようと云ふ貴公子の願ひは、なか〳〵一と通りの酒や女の力を以て、遂げられる譯がないのでした。

「金はいくらでも出しやるから、もつと變つた酒はないか。もつと美しい女は居ないか。」

貴公子の邸へ出入する商人共は、常に斯う云ふ注文を受けて居ながら、未だ嘗て彼の賞讚を博する程の、立派な品を齎した者は居ませんでした。中にはまた、物好きな貴公子の噂を聞いて、金が欲しさに諸所方々の國々から、えたいの知れないまやかし物を、はるばると賣り附けに來る奸商があります。

「御前さま、此れは私が西安の老舗の庫から見つけ出した、千年も前の酒でございます。何でも此れは唐の昔に、張皇后がお嗜みになつたと云ふ、有名な鵁腦酒だと申します。又此の方は、同じく唐の順宗皇帝がお好みになつた、龍膏酒ださうでございます。嘘だと思し召すならば、よく酒壺の古色を御覽下さいまし。千年前の封印が、此の通り立派に殘つて居ります。」

こんな工合に持ちかけるのを、人の惡い貴公子は、默々として聞き終つてから、さて徐ろに皮肉を云ひました。

「いや、お前の能辯には感心するが、己を欺さうと云ふ了見なら、もう少し物識りになるがいゝ。其の酒壺は江南の南定窯と云ふ奴で、南宋以前にはなかつた代物だ。唐の名酒が宋の陶器に封じてあるのは滑稽過ぎる。」

斯う云はれると商人は一言もなく、冷汗を搔いて引き退つてしまひます。實際、陶器に限らず、衣服でも寶石でも繪畫でも刀劍でも、あらゆる美術工藝に關する貴公子の鑑識は、氣味の惡いくらゐ該博で、

支那中の考古學者と骨董家とが集まつても、到底彼の足元にすら及ばない事は確かでした。

女を賣りに來る輩も、うるさい程多勢あつて、めい〳〵勝手な手前味噌を列べ立てます。

『御前さま、今度と云ふ今度こそ、素晴らしい玉が見つかりました。生れは杭州の商家の娘で、名前を花麗春と云ふ、十六になる兒でございますが、器量は元より藝が達者で詩が上手で、先づあれ程の優物は、四百餘州に二人とはございますまい。まあ欺されたと思し召して、本人を御覽になつては如何でございませう。』

こんな話を聞かされると、毎々彼等に乘せられて居ながら、つい〳〵貴公子は心を動かして、一應其の兒を檢分しないと氣が濟みません。

『それでは會つて見たいから、早速呼んで來るがいゝ。』――多くの場合、彼は兎も角も斯う云ふ返辭を與へるのです。

しかし、人買ひの手につれられて、貴公子の邸へ目見えに上る美人連は、餘程厚顏な生れつきでない限り、大概赤耻を掻かされて、泣く泣く逃げて歸るのが普通でした。なぜと云ふのに、其の人買ひと美人とは、最初に先づ、豪奢を極めた邸內の廳堂へ請ぜられ、長い間待たされた後、今度は更に鏡のやうな花斑石の舖甎を踏んで、遠い廊下を幾回りして、遂に奧殿の內房へ案內されます。見ると其處では今や盛大な宴樂が催され、或る者は柱に凭れて簫笛を吹き、或る者は闌屏に倚つて琵琶を彈じ、多勢の男女が蹁躚と入り交りつゝ、手に手に酒琖を捧げながら、雲鑼を打ち月鼓を鳴らして、放歌亂舞の限りを盡して居るのです。もう其れだけで、好い加減膽を奪はれてしまひますが、而も主人の貴公子は、いつ

も必ず一段高い睡房の帳の陰に、錦繍の花毯の上へ身を横へて、さも大儀さうな欠伸をしながら、眼前の騒ぎを餘所にうつらうつらと、銀の煙管で阿片を吸うて居りました。

「成る程、四百餘州に二人とない美人と云ふのは、此の兒の事かな。……」

貴公子はやをら身を起して、睡さうな眼でぢろりぢろりと二人を視詰めます。さうかと思ふと、直ぐに鼻先でせゝら笑つて、

「……だがしかし、四百餘州と云ふ所は、己の内より餘程女が居ないと見える。お前も人買ひの商賣にするなら、後學の爲めに己の妾を見てやつてくれ。」

斯く云ふ主人の聲に應じて、例の七人の寵姫たちは、さながら馴らされた鳩のやうに、忽ち繡簾の隙間から、ぞろぞろと其處へ姿を現はすのです。思ひ思ひ羅綾を纏ひ、思ひ思ひの搔頭を翳した各々の寵姫の背後には、いづれも雙鬟の美少年が、左右に二人づゝ扈從しながら、始終柄の長い絳紗の團扇で、彼等の紅臉に微風の漣を送つて居ます。彼等は七人の女王の如く、光り耀く驕笑を浮べて、貴公子の周圍に佇立したまゝ、互ひに顏を見合はせて、いつ迄でも默つて居ます。默つて居れば默つて居る程、彼等の美貌は一と際鮮やかに照り渡り、いかほど慾に眼の晦んだ人買ひでも、思はず知らず恍惚とせずには居られません。暫く茫然として、讃嘆の瞬きを續けた後、漸く我に復つた人買ひは、顧みて自分の賣り物の哀れさ醜さに心付くと、挨拶もそこそこに、這ふ這ふの體で邸を逃げ出してしまひます。其の後ろ影を見送りながら、主人の貴公子は張り合ひのない顏つきをして、がつかりしたやうに、再び臥ころんでしまふたのでした。

やがて、其の年の夏が暮れ、秋が老けて、十月朝の祭も終り、孔夫子の聖誕も過ぎてしまひましたが、彼の頭に巣喰つて居る倦怠と幽欝とは、依然として晴れる機會がありません。「うら若さ」を頼みにして居る貴公子も、いよ／＼來年は二十五歳になるかと思へば、房々とした鬢髮の色つやまでが、だんだん衰へて來るやうに感ぜられます。氣分が塞げば塞ぐほど、心が淋しくなればなるほど、享樂に憧れ、昂奮を求める胸中のもどかしさは益々募つて、旨くもない酒を飲んだり、可愛くもない女を嬲つたり、十日も二十日も長夜の宴を押し通して、沸き返るやうな馬鹿騷ぎを催したり、いろいろ試して見ますけれど、さつぱり利き目はありませんでした。それで結局は、あの獏と云ふ獸のやうに、阿片を吸つて夢を喰つて、荒唐無稽な妄想の雲に圍繞されつゝ、終日ぼんやりと、手足を伸ばして居るより外はなかつたのです。

貴公子の眉の曇りは晴れやらぬまゝに、とうたう其の年が明けて、のどかな迎春の季節となりました。此の時分、大清の王化は洽く支那の全土に行き渡り、上に英明の天子を戴いた十八省の人民は、鼓腹撃壤の泰平に醉うて、世間が何となく、陽氣に浮き立つて居ましたから、正月の南京の町々は近來にない賑やかさです。ちやうど一月の十三日――所謂上燈の日から十八日の落燈の日まで、六日の間を燈夜と唱へて、毎年戸々の家々では夜な夜な門前に燈籠を點じ、官廳や富豪の邸宅などは、樓上高く縮緬の幔幕を張り綵燈を掲げて、酒宴を設け絲竹を催します。又、市中目貫きの大通りには、恰も日本で大坂の夏の町筋

を見るやうに、往來の片側から向う側の軒先へ、木綿の布を掩ひ渡して燈棚を造り、其れに紅白取り取りの燈籠をぶら下げます。さうして街上到る所に寄り集うた若者は、法華の信者がお會式の万燈を擔ぐやうに、龍燈馬燈獅子燈などを打ち振り打ち振り、銅鑼を鳴らし金羅を叩いて練り歩くのです。しかし、此のお祭りの最中にも、例の貴公子の顏つきばかりは相變らず沈み勝ちで、少しも冴え冴えとする樣子がありません。

上燈の晩から二三日過ぎた、或る日の夕方のことでした。貴公子は眺望のいゝ南面の露臺に出て、欄に凭れながら、いつもの通り銀の煙管で阿片をすぱすぱと吸つて居ました。ちやうど其處からは、市街の雜沓が手に取るやうに瞰おろされ、今しも一齊に明りを入れた幾百千の燈籠は、白銀のやうな夕靄の中にぎらぎらと流れて、たそがれの舖面を鱗のやうに光らせて居ます。とある廣小路の四つ角には、急拵への戲臺が出來て、旗を掲げ幟を飜し、けばけばしい扮裝をした二人の俳優が、奏樂の音につれながら數番の做戲を演じて居ます。長い間戶外の空氣に遠ざつて、宮殿の奥に蟄居して居た貴公子の眼には、ふと、此れ等の光景が、一種異樣な、云はゞ珍しい外國の都に來たやうな、奇妙な感じを起させたのでありませう、――それとも又、阿片の煙に醉ひしれて、途方もない幻覺を摑んだのでもありませう、彼はいつの間にか手に持つて居た煙管を置いて、露臺の欄杆に頰杖をついたまゝ、見るとはなしに巷の騷ぎを視詰めて居るのです。折柄其處へ通りかゝつた參々伍々の群集は、いづれもおどけた假裝行列の隊を組んで、恰も貴公子の憂愁を慰めるやうに、一と際高く足拍子を踏み歡呼の聲を放ちました。續いて後から、さま〴〵な魚鳥の形に擬へた燈籠を翳しながら、所謂行燈の一圑がやつて來ます。

其の時、貴公子の視線は、一つの不思議な人影の上に注がれて、長い間熱心に、其れを追ひかけて居るやうでした。其の男は、頭に天鵞絨の帽子を冠り、身に猩々緋の羅紗の外套を纏ひ、足には眞黑な皮の靴を穿いて、一匹の驢馬に轎を曳かせて來るのです。さうして、折角の靴も帽子も外套も、長途の旅に綻びたものか、ところどころ穴が明いたり、色が褪せたりして居ます。彼の前には、數十人の行燈の人人が、五六間もあらうと云ふ大きい眼ざましい龍燈を擔ぎながら、數十挺の蠟燭を燃やして、えいやえいやと進んで行きますが、此の龍燈の一群と、其の男とは何の關係もないらしく、彼は時々立ち止まつて、さもさも疲勞したやうな溜息を洩らしつゝ、往來の喧囂を眺めて居ます。初めのうちは、假裝行列の隊伍に後れた一人のやうに見えましたけれど、だんだん貴公子の邸の傍へ近づくに隨ひ、驢馬や轎車を從へて居る風體が、どうも其れとは受け取れません。且其の男は、啻に服裝ばかりでなく、皮膚や毛髮や瞳の色まで、全く普通の人間と類を異にして居るのでした。

「……あれは多分、西洋の人種に違ひあるまい。恐らく南洋の島國から漂泊して來た、阿蘭陀人か何かであらう。」

貴公子はさう思ひました。尤も、其の時は南京の町に、折々歐人の姿を見かける時代でしたが、斯う云ふ祭の最中に、而も行列の人波に揉まれながら、素晴らしく眼に立つ風俗をして、くたびれた足を引き擦つて、乞食の如くさまようて居る其の男の擧動には、どうしても不審を打たずには居られません。さうして猶更不思議な事には、ちやうど露臺の眞下へ來かゝると、彼は突然歩みを止めて、例のびろうどの帽子を脱いで、恭しく樓上の貴公子に挨拶をするのです。

見ると、その男は、驢馬に曳かせた車の方を指さしながら、貴公子に向つて、何か頻りにしやべつて居ます。

「此の車の轎の中には、南洋の水底に住む、珍しい生物が這入つて居ます。私はあなたの噂を聞いて、遠い熱帶の濱邊から、人魚を生け捕つて來た者です。」

表の騒ぎが激しい爲めに、はつきりとは聞き取れませんが、彼は覺束ない支那語を操つて、斯う云ふ意味を語つて居るのでした。

何となく耳馴れない、おかしな訛りのある西人の唇から、『人魚』と云ふ言葉を聞いた時、貴公子は自分の胸が、我知らずときめくやうに感じました。彼は勿論、生れてから一遍も人魚と云ふ者を見た事はありません。けれども、今圖らずも南洋の旅人の口から、『人魚』と云ふ支那語が、一種特有な Umlaut を以て發音されると、其れに一段の神秘な色が籠つて居るやうに思はれたのです。

「これ、これ、誰か表へ行つて、彼處に立つて居る紅毛の異人を、急いで邸へ呼び入れてくれ。」

貴公子は例になくあはたゞしい口吻で、近侍の狡童に云ひつけました。

程なく、驢馬は貴公子の邸内深く引き込まれ、第一の大門を入り、第二の儀門を潜り、後庭の樹林泉石の間を繞つて、晝を欺く紅燈の光を湛へた、内廳の石階のほとりに据ゑられました。貴公子はいつものやうに、七人の寵姫を身邊に侍らせながら、廊下の端近く倚子を進めると、其れを見た異人は再び恭しく地に跪き、支那流の作法に依つて稽首の禮を行うた後、又もあやしい發音で、たどたどしく語り始めるのです。

「私が此の人魚を獲たのは、廣東の港から幾百海里を隔てゝ居る、蘭領の珊瑚島の附近でした。或る日私は、其處へ眞珠を採りに行つて、思ひがけなく眞珠よりももつと貴い、美しい人魚を得たのです。人は眞珠を戀することは出來ませんが、いかなる人でも人魚を見たら、彼の女を戀せずには居られません。眞珠には冷やかな光澤があるばかりです。しかし人魚は妖麗な姿の内に、熱い涙と暖かい心臟と神秘な智慧とを藏して居ます。人魚の涙は眞珠の色より幾十倍も淨らかです。人魚の心臟は珊瑚の玉より幾百倍も赤うございます。人魚の智慧は、印度の魔法使ひよりも不思議な術を心得て居ます。人間の測り知られぬ通力を持ちながら、彼女はたま〳〵背德の惡性を具へて居る爲めに、人間よりも卑しい魚類に墮されました。さうして靑い靑い海の底を游ぎながら、常に陸上の樂土に憧れ、人間の世界を慕うて、休む暇なく嘆き悶えて居るのです。其の證據には、人は誰でも彼の美しい人魚の顏に、幽鬱な憂の影を認める事が出來ませう。……」

斯う云つた時、異人は不自由な人魚の身の上を憐むが如く、自分も亦うら悲しげな表情を浮べました。

貴公子は人魚を見せられる前に、先づ其の異人の容貌に心を動かされたやうでした。彼は今迄、西洋人と云ふものを未開の種族と信じて居たのに、此の、乞食のやうな蠻夷の顏を、つく〴〵と眺めれば眺める程、其處に氣高い威力が潛んで居て、何となく自分を壓さへつけるやうに覺えたのです。其の異人の持つて居る綠の瞳は、さながら熱帶の紺碧の海のやうに、彼の魂を底知れぬ深みへ誘ひ入れます。又、その異人の秀いでた眉と、廣い額と、純白な皮膚の色とは、美貌を以て任じて居る貴公子の物よりも、遙かに優雅で、端正で、而も複雜な暗い明るい情緖の表現に富んで居るのです。

「一體お前は、誰から私の噂を聞いて、はるばる南京へやつて來たのだ。」

異人が物語る人魚の話を、暫く恍惚として聽き入つた後、貴公子は斯う尋ねました。

「私はつい此の間、媽港の街をさまようて居る際に、或る知り合ひの貿易商から、始めて其れを聞いたのです。若し其の以前に知れて居たなら、恐らくあなたはもつと早く、私の人魚を御覽になる事が出來たでせう。私は此の珍しい賣り物を携へて、凡そ半年ばかりの間、亞細亞の國々の港と云ふ港を遍歴しましたが、何處の商人も、何處の貴族も、決して此れを購はうとはしませんでした。或る者は値段が餘り高過ぎると云つて、臀込みをします。なぜと云ふのに、人魚の代價は亞拉比亞の金剛石七十箇、交趾支那の紅寶石八十箇、其れに安南の孔雀九十羽と、暹羅の象牙百本でなければ、取り易へる譯に行かないのです。又或る者は、人魚の戀が恐ろしさに、竦毛を慄つて逃げてしまひます。なぜと云ふのに、昔から人間が人魚に戀をしかけられれば、一人として命を全うする者はなく、いつとはなしに怪しい魅力の罠に陷り、身も魂も吸ひ取られて、何處へ行つたか人の知らぬ間に、幽靈の如く此の世から姿を消してしまふのです。ですから、金と命とを惜しがる人は、容易に私の賣り物へ手を着ける事が出來ません。私は折角、稀世の珍品を手に入れながら、誰にも相手にされないで、長い間徒勞な時と徒勞な旅とを續けました。若しも媽港の商人から、あなたの噂を聞かなかつたら、もう少うしで私は大事な商品を、持ち腐れにする所でした。其の商人の話に依ると、私の人魚を買ひ得る人は、南京の貴公子より外にはない。其の人は今、歡樂の爲めに巨萬の富と若い命とを抛たうとして、抛つに足る歡樂のないのを恨んで居る。其の人はもう、地上の美味と美色とに飽きて、現實を離れた、奇しく怪しい幻の美を求めて居る。

其の人こそは必ず人魚を買ふであらうと、彼は私に教へたのです。」

異人は相手が、自分の品物を買ふか買はぬかと云ふ事に就いて、少しも危惧を感じて居ないやうでした。彼は貴公子の心を見拔いて居るやうな、確信のある言葉を以て語つたのです。而もさう云ふ彼の態度は、相手に何等の反感を與へなかつたのみならず、寧ろ止み難い焦憬の念をさへ起させました。貴公子は、彼の說明を聽かされて居るうちに、此の男から必ず人魚を購ふべく、命令されて居るやうな氣になりました。自分が此の男から人魚を買ふのは、豫定の運命であるかのやうに覺えました。

「其の商人の云つた事は眞實だ。私はお前が、媽港の人から聞いた通りの人間だ。お前が私を搜したやうに、私もお前を搜して居た。お前が私を信ずるやうに、私もお前を信じて居る。私はお前の賣り物を一應檢分する迄もなく、お前が先云うた代價で、今直ぐ人魚を買ひ取つて上げる。」

貴公子の此の言葉は、彼自身ですらハッキリと意識しない内に、胸の底から込み上げて來て、思はず彼の唇に上つたのです。さうして見る間に、約束通りの金剛石と紅寶石と孔雀と象牙とが、或は五庫の匱の中から、或は苑囿の檻の中から、庭前へ持ち運ばれて、石階の下に堆く積まれました。異人は今更、貴公子の富の力に驚いたやうな素振もなく、靜かに其れ等の貨物の數を調べた後、車上の轎の布簾を揭げて、其處に淋しく鎖されて居た、囚はれの身の人魚の姿を示しました。

彼の女は、うつくしい玻璃製の水甕の裡に幽閉せられて、鱗を生やした下半部を、蛇體のやうにうねうねとガラスの壁へ吸ひ着かせながら、今しも突然、人間の住む明るみへ曝されたのを恥づるが如く、項を乳房の上に伏せて、腕を背後の腰の邊に組んだまゝ、さも切なげに据わつて居るのでした。ちやう

ど人間と同じくらゐな身の丈を持つ彼の女の體を、一杯に浸した甕の高さは、四五尺程もあるでせう。中には玲瓏とした海の潮が滿々と充たされて、人魚の喘ぐ度毎に、無數の泡が水晶の珠玉の如く、彼の女の口から縷々として沸々として水面へ立ち昇ります。その水甕が四五人の奴婢に舁がれて、車の上から階上の内廳の床に据ゑられると、室内を照らす幾十燈の燭臺の光は、忽ち彼の女の露はな肉體に焦點を凝らせて、いやが上にも淸く滑かな人魚の肌に、さながら火炎の燃ゆるやうに、一層眩く鮮やかに輝きました。

「私は此れ迄、心私かに自分の博い學識と見聞とを誇つて居た。昔から嘗て地上に在つたものなら、如何に貴い生き物でも、如何に珍らしい寶物でも、私が知らないと云ふ事はなかつた。しかし私はまだ此れ程美しい物が、水の底に生きて居ようとは、夢にも想像した事がない。私が阿片に醉つて居る時、いつも眼の前へ織り出される幻覺の世界にさへも、此の幽婉な人魚に優る怪物は住んで居ない。恐らく私は、人魚の値段が今支拂つた代價の倍額であらうとも、きつとお前から其の賣り物を買ひ取つたゞらう。……」

斯う云つたゞけでは、まだ貴公子は自分の胸に溢れて居る無限の讃嘆と驚愕とを、充分に云ひ表はす事が出來ませんでした。なぜと云ふのに、彼は今、自分の前に運び出された冷艶にして悽愴な、水中の妖魔を見るや否や、一瞬間に體中の神經が凍り付くやうな、强い、激しい、名狀し難い魂の顫震を覺えたからです。さうして、いつ迄もいつ迄も、死んだやうに總身を硬張らせて佇立したまゝ、燦爛たる水甕の光を凝視して居るうちに、訝しくも彼の瞳には、感激の涙が忍びやかに滲み出て來ました。彼は久

し振りで、長らく望んで居た昂奮に襲はれたのです。有頂天の歡喜に蘇生ることが出來たのです。彼はもう昨日までの、張り合ひのない、退屈な月日を聊つ人間ではなくなりました。彼は再び、豐かな刺戟に鞭撻たれつゝ生の歩みを進めて行ける、心境に置かれたのでした。

「……私は地上の人間に生れる事が、此の世の中での一番仕合はせな運命だと思つて居た。けれども大洋の水の底に、斯く迄微妙な生き物の住む不思議な世界があるならば、私は寧ろ人間よりも人魚の種屬に墮落したい。あの瑰麗な鱗の衣を腰に纒うて、此のやうな海の美女と、永劫の戀を樂みたい。――此の美女の凉しい眸や、濃い黑髮や、雪白の肌に比べると、私の座右に仕へて居る七人の妾たちは、まあ何と云ふ醜い、卑しい姿を持つて居るのだらう。何と云ふ平凡な、古臭い容子をして居るのだらう。」

さう云つた時、人魚は何と思つたか、ゆらりと尾鰭を振り動かして、俯向けて居た顏を擡げながら、貴公子の姿をしげ〳〵と見守りました。

博學な貴公子の鑑識は、書畫骨董や工藝品ばかりでなく、支那に古くから傳はつて居る觀相術にも精通して居ましたが、彼は今漸く人魚の容貌を眺めて、其の骨相を案ずるのに、到底自分の習ひ覺えた學問の範圍では、判斷する事が出來ないやうな稀有な特長を發見しました。彼の女は成る程、繪に畫いた人魚のやうに、魚の下半身と人間の上半身とを持つて居るには違ひありません。けれども其の上半身の人間の部分、――骨組みだの、肉附きだの、顏だちだの、其れ等の局所を一々詳細に注意すると、日常自分たちが見馴れて居る地上の人間の體とは、全く調子を異にして居るのです。彼が修得した觀相術の智識は、其處に應用の餘地がない程、彼の女の輪廓は普通の女と趣を變へて居るのです。たとへば彼の

女の、極度に妖婉な瞳の色と形とは、彼が知つて居る人相學の如何なる種類にも適合しません。その瞳は、ガラス張りの器に盛られた清冽な水を透して、恰も燐のやうに青く大きく輝いて居ます。どうかすると、眼球全體が、水中に水の凝固した結晶體かと疑はれるほど、淡藍色に澄み切つて居ながら、底の方には甘い涼しい潤ほひを含んで、深い深い魂の奥から、絶えず「永遠」を視詰めて居るやうな、崇厳な光を潜ませて居ます。其處には人間の如何なる瞳よりも、幽玄にして杳遠な暈影が漂ひ、朗麗にして哀切な曜映がきらめいて居ます。それから又、彼の女の眉と鼻の形狀は、一層氣高い、一層異常な、「美」を構成して居るやうに感ぜられました。それ等の眉や鼻は、支那の人相學で貴ばれる新月眉とか、柳葉眉とか、伏犀鼻とか、胡羊鼻とか云ふ物とは、何處かしら様子が違つて居ます。けれども其處には習慣的な「美」を超絶した、人間よりも神に近い美しさがあるのです。因襲的な「圓滿」を通り越した、生滅者に對する不滅の圓滿があるのです。さうして彼の女が長い項をものうげに動かす時、暗緑色の髮の毛は海藻のやうに顫へ悶えて　柔かい波の底を搖ぎさまよひ、或ひは渾沌とした雲霧の如く彼の女の額に降りかゝり、或ひは絢爛な孔雀の尾の如く上方へ延び擴がります。彼の女の持つて居る「圓滿」は、啻に彼の女の容貌の上にあるばかりでなく、人間の形を成して居る肉體の總べての部分に認める事が出來ました。頸から肩、肩から胸へ續いて行く曲線の優雅な起伏、模範的な均整を持つ兩腕のしなやかさ、豐潤なやうで程よく引き緊まつた筋肉の、伸縮し彎屈する度毎に、魚類の敏捷と、獸類の健康と、女神の嬌態とが、奇怪極まる調和を作つて、五彩の虹の交錯したやうな幻惑を起させます。就中、最も貴公子の眼を驚かし、最も貴公子の心を蕩かしたものは、實に此の女の純白な、一點の濁りもない、皓潔無

垢な皮膚の色でした。白いと云ふ形容詞では、とても說明し難いほど眞白な、肌の光澤でした。其れは餘りに白過ぎる爲めに、白いと云ふより「照り輝く」と云つた方が適當なくらゐで、全體の皮膚の表面が、朧のやうに光つて居るのです。何か、彼の女の骨の中に發光體が隱されて居て、皎々たる月の光に似たものを、肉の裏から放射するのではあるまいかと、訝しまれる程の白さなのです。而も近づいて熟視すれば、此の靈妙な皮膚の上には、微かな無數の白毫のむく毛が、毿々と生えて旋螺を描き、其の末端にさながら魚の卵のやうな、眼に見えぬ程の小いさな泡が、一つ一つに銀色の玉を結んで、寶石を鏤めた輕羅の如く、彼の女の總身を掩うて居ます。

『貴公子よ、あなたは私の豫期以上に、人魚の價値を認めて下さいました。あなたのお蔭で、私は充分な報酬を得、一朝にして巨萬の富を手に入れる事が出來ました。私は人魚を賣つた代りに、此れ等の東洋の寶物を車に積んで、再び廣東の港へ歸る積りです。さうして其處から汽船に乘つて、遠い西洋の故鄕へ戾ります。私の國では、ちやうどあなたが人魚を珍重なさるやうに、此れ等の寶物を珍重する人が澤山あるのです。――私が最後の願ひとして、どうぞ人魚に別れの接吻を與へさせて下さい。』

斯う云ひながら、異人が水甕の緣に寄り添ふと、水中に水銀の躍るが如く、人魚はする〳〵と上半身を表面へ露出して、兩手に異人の項を抱へたまゝ、頰を擦り寄せて暫く潸然と淚を流す樣子です。其の淚は、睫毛の端から頤へ傳はり、滴々とこぼれ落ちる間に、麝香のやうな馥郁たる薰りを、部屋の四方へ放ちました。

『お前は人魚が惜しくはないか。あれだけの値で私に賣つたのを、今更後悔しては居ないか。お前の國

の人たちは、なぜ人魚より寳石の方を珍重するのだらう。お前はどうして、此の人魚を自分の國へ持つて歸らうとしないのだらう。」

貴公子は、利慾の爲めに美しい物を犧牲に供して顧みない、卑しい商人根性を嘲るやうな句調で云ひました。

『成る程あなたがさう仰つしやるのは御尤もです。しかし西洋の國々では、人魚はそんなに珍しい物ではありません。私の國は歐羅巴の北の方の、阿蘭陀と云ふ所ですが、私の生れた町の傍を流れて居るライン河の川上は、昔から人魚が住むと云ふ話を、子供の時分に聞いた事がありました。彼の女は時とすると、人間のやうな下半身を持ち、或ひは鳥のやうな兩足を具へて、地中海の波の底にも大陸の山林水澤の間にも、折々形を現して人間を惑はす事があるのです。私の國の詩人や繪師は、絶えず彼の女の神秘を歌ひ、姿態を描いて、人魚の媚笑のいかになまめかしく、人魚の魅力のいかに恐ろしいかを、我れ我れに敎へて居ます。それ故歐羅巴では、人魚ならぬ人間までも、ひたすら彼の女の艶容を學んで、多くの女が孰れも人魚と同じやうな、白い肌と、青い瞳と、均整な肢體の幾分づゝを具備して居ます。若し貴公子が其れをお疑ひなさるなら、試みに私の顏と皮膚の色とを御覽なさい。取るに足らない私のやうな男でも、西洋に生れた者は、必ず何處かに、此の人魚と共通な優雅と品威とを持つて居るでせう。」

貴公子は異人の言葉を、否定する事が出來ませんでした。いかにも彼の云ふ通り、人魚と彼とは、容貌のうちに相似た特質のあることを、疾うから貴公子は心付いて居たのでした。讃嘆の程度こそ違へ、彼は人魚に魅せられたやうに、此の異人の人相にも少からず感興を唆られて居たのです。其の男には人

魚のやうな、圓滿と纖妍とがない迄も、やがて其處へ到達し得る可能性が含まれて居るのです。其の男は、支那の國土に住んで居る、黄色い肌と、淺い顏とを持つた人間に比較して、寧ろ人魚の種屬に近い生き物らしく思はれました。

小いさな汽船で、世界中の大洋を乘り廻す西洋人は兎も角も、其の頃まで地の表面を「時間」と等しく無限な物と信じて居た東洋の人間には、千里二千里の土地を行くのが、殆んど百年二百年の時を生きるのと同じやうに、難事であると考へられて居たのでした。まして亞細亞の大國に育つた貴公子は、流石に好奇心の強い性癖を持ちながら、遙かな西の空にある歐羅巴と云ふ所を、鬼か蛇の棲む蠻界のやうに想像して、ついぞ此れ迄海外へ出て見ようなどゝ思つた事はなかつたのです。然るに今、生れて始めて、しみ／＼と西洋人の風貌に接し、其の鄕國の模樣を聽いて、どうして其の儘默つて居る事が出來ませう。

「私は西洋と云ふところを、そんなに貴い麗はしい土地だとは知らなかつた。お前の國の男たちが、悉くお前のやうな高尚な輪廓を持ち、お前の國の女たちが、悉く人魚のやうな白皙い皮膚を持つて居るなら、歐羅巴は何と云ふ淨い、慕はしい天國であらう。どうぞ私を人魚と一緒に、お前の國へ連れて行つてくれ。さうして其處に住んで居る、優越な種屬の仲間入りをさせてくれ。私はもう支那の國に用はないのだ。南京の貴公子として世を終るより、お前の國の賤民となつて死にたいのだ。どうぞ私の頼みを聽いて、お前の乘る船へ伴つてくれ。」

貴公子は熱心のあまり、異人の足下に跪いて外套の裾を捕へながら、氣が狂つたやうに說き立てました。すると異人は、薄氣味の惡い微笑を洩らして、貴公子の言葉を遮つて云ふのに、

「いや〳〵私は、寧ろあなたが南京に留まつて、出來るだけ長く、出來るだけ深く、哀れな人魚を愛してやる事を、あなたの爲めに望みます。たとへ歐羅巴の人間が、いか程美しい肌と顔とを持つて居ても、彼等は恐らく、此の水甕の人魚以上にあなたを滿足させる事は出來ますまい。此の人魚には、歐羅巴人の理想とする凡べての崇高と、凡べての端麗とが具體化されて居るのです。あなたは此處に、此の生き物の妖冶な姿に、歐羅巴人の詩と繪畫との精髓を御覽になる事が出來るのです。此の人魚こそは歐羅巴人の肉體が、あなたの官能を樂しませ、あなたの靈魂を醉はせ得る、「美」の絕頂を示して居ります。あなたは彼の女の本國へ行つても、此れ以上の美を求めることは出來ないでせう。……」

其の時、異人は何と思つたか、眉宇の間に悲しげな表情を浮べて、嗟嘆するやうな調子になつて、急に話頭を轉じました。

「さうして私はくれ〴〵も、あなたの幸福と長壽とを祈ります。私はあなたが、既に彼の女を戀して居る事を知つて居るのです。人魚の戀を樂しむ者には早く禍が來ると云ふ、私の國の傳説を、あなたが實際に打ち破つて下さる事を祈るのです。私は人魚の代償として、あなたの大切な命までも戴かうとは思ひません。若しも私が、再び亞細亞の大陸を訪問する日のあつた時、幸ひあなたにお目に懸れたら、其の折にこそ私はあなたをお連れ申して上げませう。……けれども其れは、……けれども其れは、……私はあなたがお氣の毒でならないやうな氣がします。」

云ふかと思ふと、異人は又も慇懃な稽首の禮を施して、人魚の代りに山の如く積み上げた寶物の車を、以前の驢馬に曳かせながら、庭前の闇へ姿を消してしまひました。

貴公子の邸は、人魚が買はれてから俄かにひつそりと靜かになりました。七人の妾は自分たちの綉房に入れられたり、主人の前へ召し出される機會を失ひ、夜な夜な樓上樓下を騷がせた歌舞宴樂の響きも止んで、宮殿に召し使はれる人々は皆溜息をつくばかりです。

「あの異人は何といふ忌ま忌ましい、胡亂な男だらう。さうして何と云ふ奇體な魔物を賣り付けて行つたのだらう。今に何かしら間違ひがなければいゝが。」

彼等は互ひに相顧みて囁き合ひました。誰一人も、水甕の据ゑてある内房の帳を明けて、人魚の傍へ近寄る者は居ませんでした。

近寄る者は主人の貴公子ばかりなのです。ガラスの境界一枚を隔てゝ、水の中に喘ぐ人魚と、水の外に悶ゑる人間とは、終日、默々と差し向ひながら、一人は水の外に出られぬ運命を嘆き、一人は水の中に這入られぬ不自由を怨んで、さびしくあぢきなく時を逐つて行くのでした。折々、貴公子は遣る瀨なげにガラスの壁の周圍を廻つて、せめては彼の女に半身なりとも、甕の外へ肌を曝してくれるやうに頼みます。しかし人魚は、貴公子が近寄れば近寄るほど、ますます固く肩を屈めて、さながら物に怖ぢたやうに水底へひれ伏してしまひます。夜になると、彼の女の眼から落つる涙は、成る程異人の云つたやうに眞珠色の光明を放つて、暗黑な室内に螢の如く瑩々と輝きます。その青白いあかるい雫が、點々とこぼれて水中を浮動する時、さらでも天姣な彼の女の肢體は、大空の星に包まれた嫦娥のやうに淨く氣

高く、夜陰の鬼火に照らされた幽霊のやうに悽く咒はしく、惻々として貴公子の心に迫りました。

或の晩の事でした。貴公子はあまりの切なさ悲しさに、熱燗の紹興酒を玉琖に注いで、腸を燒く强い液體の、滿身に行き渡るのを樂しんで居ると、其の時まで水中に海鼠(なまこ)の如く縮まつて居た人魚は、暖かい酒の薫りを戀ひ慕ふのか、俄かにふわりと表面へ浮かび上つて、兩腕を長く甕の外へ差し出すのです。貴公子が試みに、手に持つた酒を彼の女の口元へ寄せるや否や、彼の女は思はず我を忘れて眞紅の舌を吐きながら、海綿のやうな唇を杯の縁に吸ひ着かせたまゝ、唯一と息に飲み干してしまひました。さうして、たとへばあの、ビアヅレエの描いた、"The Dancer's Reward" と云ふ畫題の中にあるサロメのやうな、悽慘な苦笑ひを見せて、頻りに喉を鳴らしつゝ、次ぎの一杯を促すのです。

「それ程お前が酒を好むなら、私はいくらでも飲ませてやる。冷かな海の潮に漬つて居るお前の血管に、激しい醉が燃え上つたら、定めしお前は一層美しくなるであらう。一層人間らしい親しみと愛らしさとを示してくれるだらう。お前を私に賣つて行つた和蘭人の話に依ると、お前は人間の測り知られぬ神通力を具へて居ると云ふではないか。お前には背徳の惡性があると云ふではないか。私はお前の神通力を見せて貰ひたいのだ。お前の惡性に觸れたいのだ。お前がほんたうに不思議な魔法を知つて居るなら、せめては今宵一と夜なりとも人間の姿に變つてくれ。お前が實際放肆な情慾を持つて居るなら、どうぞ其のやうに泣いて居ないで、私の戀を聽き入れてくれ。」

貴公子が斯う云ひながら、杯の代りに自分の唇を持つて行くと、縹渺たる人魚の眉目は鏡に息のかゝつたやうに忽ち曇つて、

『貴公子よ、どうぞ私を赦して下さい。私を憐んで赦して下さい。』

と、突然明瞭な人間の言語を發しました。

『……私は今、あなたが恵んで下すつた一杯の酒の力を借りて、漸う人間の言葉を語る通力を恢復しました。――私の故郷は、和蘭人の話したやうに、歐羅巴の地中海にあるのです。あなたが此の後、西洋へ入らつしやることがあるとしたら、必ず南歐の伊太利と云ふ、美しいうちにも殊に美しい、繪のやうな景色の國をお訪ねなさるでせう。その折若し、船に乘つてメッシナの海峽を過ぎ、ナポリの港の沖合をお通りになる事があつたら、其の邊こそ我れ我れ人魚の一族が、古くから棲息して居る處なのです。昔は船人が其の近海を航すると、世にも妙なる人魚の歌が何處からともなく響いて來て、いつの間にやら彼等を底知れぬ水の深みへ誘ひ入れたと申します。――私は斯くもなつかしい自分の住み家を持ちながら、ちやうど去年の四月の末、暖かい春の潮に乘せられて、ついうかうかと南洋の島國まで迷うて來たのです。さうして、とある濱邊の椰子の葉陰に鰭を休めて居る際に、口惜しくも人間の獲物となつて、亞細亞の國々の市場と云ふ市場に、恥かしい肌を曝しました。貴公子よ、どうぞ私を憐んで、一刻も早く私の體を、廣々とした自由な海へ放して下さい。たとへ私が如何程の神通力を具へて居ても、窮屈な水甕の中に捕はれて居ては、どうする事も出來ないのです。私の命と、私の美貌とは、次第々々に衰へて行くばかりなのです。あなたが是非共人魚の魔法を御覧になりたいと思ふなら、どうぞ私を戀ひしい故郷へ歸して下さい。』

『お前がそのやうに南歐の海を慕ふのは、きつとお前に戀人があるからだらう。地中海の波の底に、同

じ人魚の形を持つた美しい男が、夜通お前を待ち憧れて居るのだらう。さうでなければ、お前はそんなに私を厭ふ筈がない。情なくも私の戀を振り捨てゝ、故郷へ歸る道理がない。』

　貴公子が恨みの言葉を述べる間、人魚は殊勝げに瞑目して首をうなだれ、耳を傾けて居ましたが、やがてしなやかな兩手を伸ばしつゝ、シッカリと貴公子の肩を捕へました。

『あゝ、あなたのやうな世に珍らしい貴やかな若人を、私がどうして忌み嫌ふ事が出來ませう。どうして私が、あなたを戀せずに居られるやうな、無情な心を持つて居るでせう。私があなたに焦れて居る證據には、どうぞ私の胸の動悸を聞いて下さい。』

　人魚はひらりと尾を飜して、水甕の緣へ背を托したかと思ふ間もなく、上半身を弓の如く仰向きに反らせながら、滴々の雫の落ちる長髮を床に引き擦り、樹に垂れ下る猿のやうに下から貴公子の項を抱へました。すると不思議や、人魚の肌に觸れて居る貴公子の襟頸は、さながら氷をあてられたやうな寒さを覺えて、見る見るうちに其處が凍えて痺れて行くのです。人魚の彼を抱き緊める力が、強くなれば強くなる程、雪白の皮膚に含まれた冷冰の氣は、貴公子の骨に沁み入り髓を徹して、紹興酒の醉に熱した總身を、忽ち無感覺にさせてしまひます。其のつめたさに堪へかねて　あはや貴公子が凍死しようとする一刹那、人魚は彼の手頸を抑へて、其れを徐ろに彼の女の心臟の上に置きました。

『私の體は魚のやうに冷かでも、私の心臟は人間のやうに暖かなのです。此れが私の、あなたを戀ひして居る證據です。』

　彼の女が斯う云つた時、ふと貴公子の掌は、一塊の雪の中に、炎々と燃えて居る火のやうな熱を感じ

ました。ちやうど人魚の左の胸を撫でゝ居た彼の指先は、その肋骨の下に躍く心臟の活氣を受けて、危く働きを止めようとした體中の血管は、再び生き生きとした循環を起させました。

「私の心臟は斯く迄熱く、私の情熱は斯く迄激しく湧いて居ながら、私の皮膚は絶ゆる隙間なく、忌まはしい寒氣に戰いて居ます。さうしてたま〳〵、麗しい人間の姿を眺めても、人魚に生れた淺ましさには、宿業の報いに依つて、其の人を愛する事を永劫に禁ぜられて居るのです。私がいか程あなたを慕ひ憧れても、神に呪はれて海中の魚族に墮ちた身の上では、ただ煩惱の炎に狂ひ、妄想の奴隷となつて、悶え苦しむばかりなのです。貴公子よ、どうぞ私を大洋の住み家へ歸して、此の切なさと恥かしさから逃がして下さい。青いつめたい波の底に隱れてしまへば、私は自分の運命の、哀さ辛さを忘れる事が出來るでせう。此の願さへ聽き屆けて下さるなら、私は最後の御恩報じに、あなたの前で神通力を現はして見せませう。」

「おゝ、どうぞお前の神通力を示してくれ。其の代りには、私はどんな願ひでも聽いて上げよう。」

と、うつかり貴公子が口をすべらせると、人魚はさもさも嬉しげに、兩手を合はせて幾度か伏し拜みながら、

「貴公子よ、それでは私はもうお別れをいたします。私が今、魔法を使つて姿を變へてしまつたら、あなたは嘸かし其れをお悔みなさるでせう。若しもあなたが、もう一遍人魚を見たいと思ふたら、歐洲行きの汽船に乘つて、船が南洋の赤道直下を過ぎる時、月のよい晩に甲板の上から、人知れず私を海へ放して下さい。私はきつと、波の間に再び人魚の姿を示して、あなたに御禮を申しませう。」

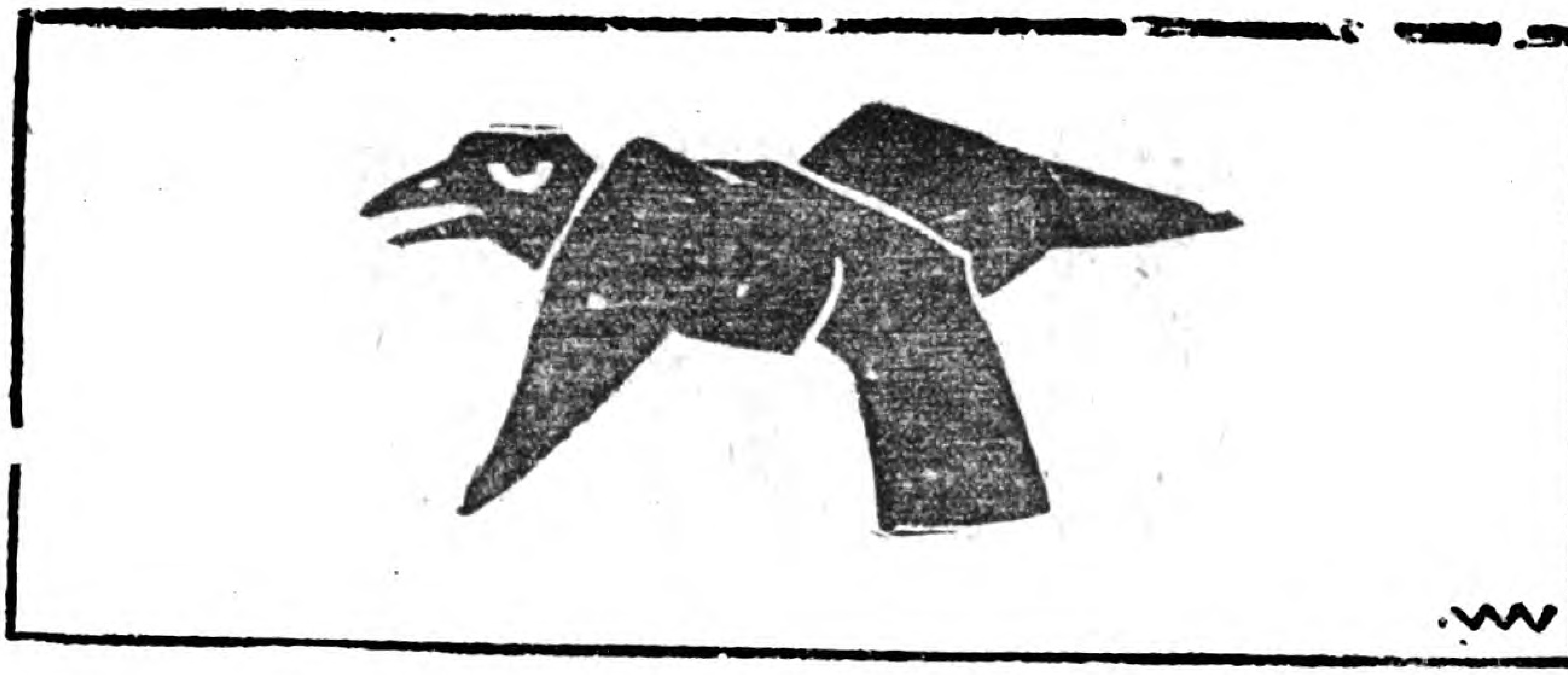
云ふかと思ふと、人魚の體は海月のやうに淡くなつて、やがて氷の溶けるが如く消え失せた跡に、二三尺の、小いさな海蛇が、水甕の中を浮きつ沈みつ、緑青色の背を光らせ游いで居ました。

人魚の教へに従つて、貴公子が香港からイギリス行きの汽船に搭じたのは、その年の春の初めでした。或る夜、船がシンガポールの港を發して、赤道直下を走つて居る時、甲板に冴える月明を浴びながら、人氣のない舷に歩み寄つた貴公子は、そつと懐から小型なガラスの壜を出して、中に封じてある海蛇を摘み上げました。蛇は別れを惜しむが如く、二三度貴公子の手頸に絡み着きましたが、程なく彼の指先を離れると、油のやうな静かな海上を、暫らくすると滑つて行きます。さうして、月の光を砕いて居る黄金の漣波を分けて、細鱗を閃めかせつゝうねつて居るうちに、いつしか水中へ影を沒してしまひました。

それから物の五六分過ぎた時分でした。渺茫とした遥かな沖合の、最も眩く、最も鋭く反射して居る水の表面へ、銀の飛沫をざんぶと立てゝ、飛びの魚の跳ねるやうに、身を飜した精悍な生き物がありました。天上の玉兎の海に墮ちたかと疑はれるまで、皎々と輝く妖嬈な姿態に驚かされて、貴公子が其の方を振り向いた瞬間に、人魚はもはや全身の半ば以上を煙波に埋め、双手を高く翳しながら、「あゝ」と咳呦一聲して、くるくると水中に渦を巻きつゝ沈んで行きました。

船は、貴公子の胸の奥に一縷の望を載せたまゝ、戀ひしいなつかしい歐羅巴の方へ、人魚の故郷の地中海の方へ、次第次第に航路を進めて居るのでした。

（大正五、十二月作）



世を恐れて

正宗白鳥

御即位式の間際で町々が奉祝の準備に騷いでゐる時分であつた。鳴海鐵男はわざ〳〵遠方から運送屋を賴んで來て、移轉先を家主へも隣近所へも明ら様には知らさないで、半歳ばかり住んでゐた飯倉の家から出拔けに郊外の世田ヶ谷へ引越した。

新宅は玉川電車の線路を少し外れたところにある新築の二階家で、せゝこましかつた舊宅に比べると、日當りはよし靜かではあるし、眺めの廣いことは云ふまでもなかつた。黄ろい稻は刈られてゐる、赤い芋は掘られてゐる、白い大根は直ぐ側の小溝で洗はれてゐる。田舍の冴えた秋景色は居ながらに目に觸れて、長い間一歩も都會から踏出したことのなかつた鳴海は、忘れてゐた新鮮な空氣の味ひを久振りで思出したやうな氣がした。が、彼れが急に郊外へ轉居したのは衞生のためや趣味のためからではなかつた。多少さういふ考

へも念頭にないではなかつたが、先づ切迫詰つて行衛を晦まさうとしたのであつた。どうせ早晩東京で稼ぎ口を捜さなければならぬといふ氣遣ひから、遠い田舍へは行かれなかつたので、暫くの間此處に潜んで人目を避けやうとしたのであつた。

お京を連れて慌たゞしく空家捜しに出た時には、右とも左とも方角を定めないで來合せた電車に飛乘つた。そして、見るともなく目に觸れた玉川電車の遊覧案内の廣告によつて咄嗟に行先を定めたのであつた。

「廣告文の世田ヶ谷といふ文字が神様のお告げのやうにおれの頭にピリッと來たよ。だから今度の家はいゝに違ひない」と、鳴海は空家の見つかり次第、住み工合のよしあしなどはよくも檢べないで、直ぐに手金を打つて契約した。

「神様のお告げだなんて、あなたが迷信家見たいなことを云ふから可笑しい」と、お京は變に感じてゐた。が、間取りや出入りの便不便や、井戸の遠い近いなど、すべてどうでもいゝといつたやうに、彼女はぼんやり秋の日に青褪めた顔を曝らしながら、男の云ふなりにまかせてゐた。

移轉後二三日は表札を出さなかつたが、警察に注意されたので止むを得ず、蒲鉾板に麗々しく浦上と變名を書いて出した。家主へも御用聞へも、その出鱈目の名前を通用させてゐたのだつた。

お京はがらくた道具を手まめに仕末して、障子の張替えや拭掃除を一通り濟ませると、枕と搔卷を出してぐつたりした身體を横へた。庭の掃除や使ひ歩きは大抵男にまかせて、自分は滅多に戸外に姿を見せなかつた。湯屋へは遲くなつて出掛るし、水汲みも夜明け前にした。御用聞との應對をも成べくは男

にさせた。

で、この新宅は二階の障子は開いてゐても、階下の障子は何時も閉ぢられてゐた。鳴海はよく窓の閾に肱を掛けて、退屈さうな顏して野面を眺めてゐた。日に一二度は懐手してぶら〳〵近くの畦路を散歩した。たまには寢ころんでゐる女を誘出さうとすることもあつたが、お京は何時も煩さゝうに拒絶した。

「あなたよつて成べく出歩かない方がいゝんですよ。田舍へ越して來たからつて、さうひよい〳〵外へ出てゐちや何時見つけられないとも限りませんからね」と、男の呑氣さうなのに齒痒い思ひをすることもあつた。

「お前のやうにびく〳〵してゐちや一日も生きてゐられりやしないよ。取越苦勞をして壽命を縮めるよりは、運まかせで遊んでられるだけ遊んでることにするさ。いくらやきもきしたつて人間死ぬる時には死ぬるし、助かる時には打遣つてゐても助かるんだから、用心もいゝ加減にしとくんだね」

鳴海は口ではさう云つてゐたが、心の中ではともすると、不安の念に責苛まれてゐた。女よりも却つて危險を感ずるの度が强いくらゐであつた。女は骨組の逞ましい目差しの鋭い眉の秀でたいかにも手頼りになりさうな男姿を側で見てゐると、憂鬱な氣持も餘程和らげられて、その手に縋つてゐやうなら、たとへ死の影が迫つて來ても、怖がるには及ばないと安んずるところがあつたが、男の方では、精根の疲れを現はしてゐる女の顏を見るたびに、自分の負擔い重みが加はるやうに感ずるばかりで、慰められるところがなかつた。

彼れは表通りへ買物に出た時とか、野道を散歩してゐる時とかに、ふと往き來の人の顏を見違へてぎよつとすることがあつた。一度疾走してゐる電車の窓から此方を見詰めてゐた男の顏をちらと見て小山かと吃驚して、それからは電車の音のしてゐる時には、決して表通りへ踏出さないことにした。訪問客はないし、郵便も來ないし、氣の紛れることは何もないので、稍々もすると心が一點に凝固まり勝ちであつた。

凝固まつた焦點には何時も憤怒に血走つてゐる小山の形相が根強く彫られてゐた。……御大典の特赦のために小山の刑期も短縮されるだらうとはかねて思つてゐたのだつたが、かう早目に出獄しやうとは思つてゐなかつたので、彼れが獄衣を脱いで故郷へ歸つてからは血眼になつて鳴海の行衞を搜してゐるといふことを、ある知人からひそかに注意された時には、鳴海は今更のやうに驚いて身の處置に迷つた。證人として小山のために不爲な申立てをした上に、彼れの服役中にその情婦のお京と思ひがけなく惡縁を結んだ鳴海は、四五年後の今日ををり〳〵恐れてゐながらも、その中どうかなるだらうと、眞劍に自分の量見を定めたことはなかつた。小山は獄中で死ぬるかも知れないし、無事に娑婆へ出て來ても長い苦役に疲れて昔の恨みなどは忘れてゐるかも知れないし、たとへ一時は氣まづい思ひをさせたつて此方から避けてさへゐれば、さして無法な眞似はしないだらうと、鳴海は蟲のいゝことを考へてゐた。それに、東京で仕事を得たのを幸ひに、昨年僅かな家財田畝を棄賣りにして田舍を引拂つて來て故郷のものには居所さへ知らさないくらゐにしてゐるのだから、小山に會ふ機會はなくなつてゐると、強ひて安心の根を固めたつもりでゐた。

ところが、知人の注意によると、小山の荒い氣象は些とも以前に異らなかつた。そして、鳴海の證言を一刻も忘れずにゐるところへ、お京との關係を聞いたので、恨みの火に油を注いだやうに、復讐の念が燃え上つてゐるらしかつた。……些細な口論から刄物三昧して、友人に重傷を負はせたほどの狂暴な小山が復讐に血を湧かしてゐることを思ふと、惡鬼か餓虎に見込まれたやうで、鳴海は手向ふ力も逃出す知慧も萎けてしまうのであつた。

「あなたは何處まで行つてゐたんです。あんまり歸りが遲いから、どうかしたのかと私は氣が氣ぢやなかつたんですよ」と、お京は時としては男の腹ごなしの散歩時間の長引くのにさへ神經を惱ますことがあつた。

「おれは病氣でもないのに何もしないで家にばかりぢつとしてるのは苦しいよ。近所の同じ所ばかり散歩するのも厭いちやつたから」と、言譯して、鳴海は松蔭神社とか豪德寺とか、遠くに見える森の方へ足を運んで、偶然さういふ名所古蹟の境内へ入つたことを話した。大名や公爵などの寄進の石燈籠が並んでゐたことや、水戸の浪士に殺された井伊掃頭守のお墓を見つけたことなどを、さも珍らしさうに話したり、寺の紅葉の色づいたことを知らせて、「もう四五日したら見頃になるだらうから、一度見物に行かうぢやないか」と勸めたりした。

男がさういふ風流がつた口を利くのが、お京には可笑しくもあり不思議でもあつたが、退屈な二人の間に新しい話の種の出來るのは、何にかゝはらず、氣保養になつた。

「私は二年でも三年でも此處にゐたつて構ひませんの。淋しかつたり窮屈したりするくらゐ、これまでの恐ろしい苦勞を思出したら何でもないんですからね。あなたが心變りがさへしなければ、一生この家にゐて此處で死んだつて些つとも殘惜しかあないと思つてるんです」

頭の亂れてゐるお京もある夜機嫌のいゝ顏して、快よげに云つた。

「當分は此處もいゝが、さう長くはゐられまいよ。第一おれの財産はもう幾らも殘つてやしないぜ。飯倉にゐる間にぽつり〳〵費つた金だつて隨分の嵩だからなあ。おれもこれで些たあ藝能があるつもりだから、もつと氣の利いた仕事を搜して、今日の暮しには困らないくらゐの稼ぎはしなければならんのだ。田舍でこそけちをつけられて八方塞がりになつてゐたつて、なに、東京ぢや一つ頭をのし上げて故郷(くに)の奴等を見返してやらなきや蟲が收まらないや」

「そんなことはどちらでもいゝぢやないの」お京は男が金のことを云ひ仕事のことを云出すと、何時も不興げに聞流した。「私飯倉では詰らない贅澤をして無駄なお錢(あし)を費つて、本當に濟みませんでしたわね。だけどこの後は決して一文でも粗末にはしないから、あなたもお金のことは口に出さないやうにして下さい。後生だから。……私達は今そんなことを云つてる場合ぢやないぢやありませんか」

「贅澤も出來る間はしなきや嘘さ。おれもまだ三十を越したばかりだから、自働車で箱根へ湯治に行けるやうな運が向いて來ないとも限らないぜ。お前も氣を長くして待つとりなさいよ」

男は腹の中の貧しさを紛らすために、金のかゝらない言葉の上で頻りに贅澤な口を利いて、ひとりでお調子に乘つたりしてゐたが、お京はさういふ世の中を今は待設けてはゐなかつた。

「自働車や湯治をあなたはそんなに美しく思つてゐて?。世間の人に會はないで、二人でかうして睦じく暮らしてゐられるのを何よりもの幸福とあなたは思つてゐないんですか。私を悦しがらせるために、さういふ夢見たいなことを云つてゐらつしやるのか知れないけど、それなら私の心の中をあなたは些とも案じてゐないのね。去年のことを考へて御覽なさい。一昨年のことを考へて御覽なさい。あなたは私の無理を聞いて生きる死ぬるの境から助けて下すつたんぢやありませんか。兄妹にさへ見放されて皆んなに爪はじきされてゐた私を、何もかも承知の上で可愛がつて下すつたんぢやありませんか。私ゆゑに職を失敗つたり今の今も命がけの思ひをしてゐらつしやるんだもの。本當に勿體ないと思つてるんです。何で榮耀榮華なんかを望むものですか。死ぬる時にはあなたの側であなたに手を握られて息を引取れば、こんな仕合せなことはないと私は心からさう思つてゐますの」

女が一圖に謙遜して、哀れつぽい目付を向けて男の愛を求めてゐるのを見ると、鳴海も不憫に感じて一度棄てゝゐる慾や得を永久に顧みない氣になつたが、しかし此方から浮かり女の涙に誘はれてしほほとして世をはかなんだやうなことを云はうものなら、女の心が留度なく崩れて手のつけられぬやうになるのが恐ろしかつた。兩手に縋りついたり、身體を膝に投げかけたりして、啜泣きをはじめた果てには眞青になつて氣絶しさうになるのが御極りで、その介抱をさゝれるのが鳴海には堪へがたい災難であつた。

小山の出獄した消息を耳に入れてからの御京は、いくらか精神に異狀を起したのではないかと鳴海はそりくく疑つてゐたが、殊に女の昔語りを聞いてゐると奇怪至極の感じに打たれた。去年のことを考へ

ろとか、「一昨年何處でどうしたことを思出して御覽なさい」とか云つて、自分達二人で經驗して來たことを女が思出し〳〵話してゐるのが、事によると鳴海の耳にはまるで他人の夢物語のやうに聞えて自分の記憶にある事實とはあまりに違ひ過ぎてゐた。過去と云つても去年とか一昨年とか、つい此間のことでありながら、かうも二人の記憶が懸け離れてゐるとすると、女の頭が狂つてゐなければ自分の頭が狂つてゐるのではないかと疑はれた。

「お隣りの太田の主婦さんに留守を頼んで、帝劇を見に行つた歸りに、日比谷公園の入口の池の側を歩いてると、後から來てどしんと私に突當つてゐながら、默つて行掛けた男をあなたは覺えてゐなくつて？。あなたが怒鳴りつけても、その男は口を利かないでぢつと立つて私達を見てゐたでせう。あの男はあなたがゐなければ私を殺す筈だつたのです。刃物なんか持つてゐなくたつて、私くらゐな脆弱い女の命を取るのは何でもないんですからね。あの時もあなたの側にゐたればこそ慘い目に會はされないで濟んだのです」

女はさう云つて感謝したが、鳴海は帝劇の歸りに公園の近所で、珈琲を一杯飮んで、直ぐに電車に乘つて無事に歸宅したとしか覺えてゐなかつた。でも、露骨に女の言葉を打壞して機嫌を害ねるのを憚つて、

「さういふことがあつたかね」と曖昧な返事をした。

「あつたかねどころぢやないわ。あなたはさういふ大切な事を忘れてどうするんです。だから呑氣過ぎると云ふんですよ」

「お前はその男に恨まれる理由があつたのかい。狂人でもなければ見ず知らずの通りがゝりの人間を殺すつてことはある譯はないがね」

「どしんと突當つた時私は轉がりさうだつたから、力一杯あなたの手に縋りついて、その男の顏はよく見なかつたの。見覺えのあるやうなないやうな顏だつたけど、突當つた時の勢ほひは確かに怪我ぢやない、ちやんと企らんでやつたのに違ひありません。撫でられても打たれても、その手先の勢ほひで私には先方の腹の中が直ぐに讀めるんですもの」

「恐ろしい神通力だね」鳴海は笑はれもしなかつた。「おれは日比谷の事は覺えてゐないが、帝劇の芝居は面白かつたからよく覺えてるよ。幸四郎の由良の助は旨かつたね。宗十郎の判官樣も上手だつた。おれが一つ喧嘩場の師直と判官との掛合ひの臺詞の眞似をして聞かせてやろか」

これも氣晴しだと思つて、鳴海は「鮒だ〳〵鮒ざむれえだ」と云ふ一くさりの臺詞を役者氣取りで少し聲を張つて云ふと、お京は笑ひ〳〵男の口許を見詰めてゐた。そして、臺詞が切れると、

「芝居なんて嘘で固めてるんだわね。よくあんな物をお金を出してたび〳〵見に行つたりしたのだらう。私餘程の馬鹿だつたわね。あなた御自身はさう思ひなさらないの」

と、眞顏で訊いた。

「嘘ばかりではないよ。判官樣が切腹して由良の助が仇討に苦勞したのは實際あつたことぢやないか。たとへ嘘だつて藝が旨くつて面白ければいゝぢやないか。七段目で勘平さんは三十になるやならずに、と、お輕が愁歎した時には、お前も泣いてゐたぢやないか」

「だから馬鹿だつたわ私は。忠臣藏だつて千代萩だつて、これまで私の見たどの芝居を思出しても、よくあんなことに泣いたり笑つたりしたと思ひますよ。噓にしろ眞實にしろ、皆んな他人のことぢやありませんか。眞實の政岡が私の目の前でお主に忠義をして自害しやうとも、私は涙一雫こぼしてやりやしない。私は自分で泣きたいことが有餘るほどあるのに、何で他人のためなんかに泣いて溜るものですか。物數奇に他人のためなんかに泣いたと思ふと、大切な涙を粗末にしたやうで私口惜しいやうですわ。……妹が大病に罹つて、掛りつけのお醫者が十に八九までは助かる見込みがないと云つてゐた時に外のお醫者を呼びに行くのを口實にして、あなたの所へこつそり忍んで行つたことをあなたは覺えてゐなすつて?。妹にさへ私は隨分無慈悲だつた、けれどそれも仕方がないの。妹は今は丈夫になつて、人のいゝ御亭主を持つて高慢ちきな顏して面白さうに暮してゐるけれど、たゞの一度だつて私を庇つて呉れたことあることか。姉さんは不心得だつて、あれの知つたか振りの意見が三文の足しにもなつたことか。どうせ私達の心配があいつ等のために一分でも輕くなるんぢやないから、兄妹なんか無くつていゝと思つてるんですよ。私がこんなに世の中を恐ろしいと思つてるのに、妹なんかは奥樣氣取りでしやあしやあして何も感じないで生きてゐるんだと思ふと、小癪に觸るんです」.

お京は妹の大病の際にも、身寄りの者が騷いでゐても、自分だけはうまく言拔けして男にのみ付纒つてゐたことをむしろ快げに話して、いゝ氣味だつた〳〵。あの時夜の目も寢ないで介抱してゐたものなら、今になつてさぞ忌々しかつたであらうと、頻りに憎て口を利いてゐたが、鳴海の記憶ではお京の妹の大病に罹つたことは誰れからも聞いたこともないやうに思はれた。姉と異つて身體の頑丈に出來上つ

てゐる妹は、たまに風邪をひいて一日二日臥せるくらゐなもので、病氣らしい病氣に罹つたことはない筈だつたがと、空々しい受應へをしてゐたが、お京が小山のことで傍の者には想像も及ばないやうな慘忍な振舞ひを話出すと、それをこの女の妄想としてのみ笑つてゐる譯には行かなかつた。妄想らしい話が彼れの心にも喰入つて、以前普通の交際をしてゐた時に小山をちつとも知り得なかつた自分の魯鈍さが憐まれた。お前の云ふことは本當かい、小山もおれ達が可成り長く交際してゐた相當に敎育のある人間だからねと、せめて一分の疑ひを殘して訊くと、

「あなたはどうかしてるんですわ。眞實(ほんとう)のことを云ふと信用しないでけろりとしてるんですもの。小山が白井さんに斬付けたのも、お酒の上の言合ひが不意の原因ぢやありません。自分ぢや口に出さないで外の事にかこつけて怒つたんでせうけれど、小山は私の事を根に持つてゐたのです。白井さんに私が親切にし過ぎると云つて、一晩夜中過ぎまでも私を壁の側に突立つてゐさせたりしたんですもの。足は棒のやうになるし、寒くつてがた〳〵震えるし、私死んだ方がいゝと思つたのだけれど、だけど、小山は寢たふりして此方を見てるらしいんですもの。あの怖い目で番をしてられると思ふととても逃げやうたつて逃げられやしません」

「そんな話ははじめて聞くんだよ。白井に親切をしたといつて、どんなことをしたのだい」

鳴海は何氣なく訊ねたつもりだつたが、お京は怪訝(けげん)な顏して、

「小山がそんな風に訊きましたよ。……奇體だわね。世田ヶ谷へ移つてからはあなたは、次第に小山に似て來るやうなんですの。お前は白井にかうしたがあれはどういふつもりだと、小山はそれから拷問を

はじめるんです。あなたにまで拷問されちや、私全く立つ瀬がありませんわ。」

「おれが小山のやうに亂暴だつたり、お前を虐めるつもりだつたりしたら、何もこんな所へ逃げて來りやしないぜ」

鳴海は無間な言譯をしたが、白井と小山と自分との三人が、大勢の女の中でこの女一人のためにそれぞれに災難を受けたとは信じられなかつた。白井は選擧運動に關する反目が動機となつて小山の怒りを買つたのだと思はれてゐて、鳴海自身もそのつもりで法廷に立つて、小山のために不利な證言を爲たのであつたが、お京の云つたやうな秘密な事情が小山の怒りを强めてゐたのだらうか。さう思へば、あの時の小山の憤怒の形相には、選擧の軋轢からとのみは受取れないやうな無念らしい影があつた。

「煩さくなつちやつた」

お京は記憶の底から、あるひは鮮明にあるひは漠然と目の前に群がり出る知人の顏やら役者の舞臺顏やらの煩さい刺戟に神經が疲れて堪へられなくなつて、「他人のことなんかどうでもいゝわね」と云つて鳴海の膝に身體を投げかけた。

さうされると、鳴海はこの頃の癖で、半ば退屈醒ましの戯れから、女の額を撫で眉を撫で玩具見たいにすることがあつた。そして、女がいゝ氣持で眠付くと、その輕い身體をそつと昇上げて寢床の中へ持運んだ。……女の方でもそれを待設けるやうになつてゐたが、撫でられるだけで世の中の記憶を忘れて安らかな眠りの呼べない時には、狂人染みた眞似して男を困らせて、男の介抱を無理强ひに求めた。

刄物などいぢつて狂人染みた眞似をした後では、女は心の惡汁を洗落したやうな快い氣持になるのだつたが、そのかはりに鳴海は洗落した女の惡汁を自分の胃の腑へ注込まれるやうな厭な氣持がするのだつた。で、此處に永く潜んでゐて、女のお守りになつてゐるよりは、どんな卑しい仕事でもした方がましだ。小山にぶつ付かつて負けるか勝ちかの極りをつけて、世間を廣く住めるやうにしやうかと屢々さう思つたが、この女に付纒はれてゐては、再び都會などへ出ることも出來さうでなかつた。女一人を打遣らかして逃げるにしても、旨い方法はどう頭を絞つても工夫されなかつた。

なに、小山も出會つたら口でこそ酷いことも云ふだらうが、まさかおれを切りも突きもしないだらうと獨り言のやうに云つて慰めても、女の奴、目でも口でもそれを否定してゐて、鳴海の心に力を添へることはなかつた。

飯倉にゐた間には、たとへ探偵見たいな目で家の中を覘かれるのは厭でも、隣りの太田の主婦の景氣のいゝ話聲を聞かされるのが氣晴らしになつたが、此處では隣りとも一寸掛離れてゐるので、日常の挨拶をする機會もなかつた。そこで、鳴海は御用聞の聲をも珍らしがつて、聲を聞きつけると二階からでも下りて來て、用事以外に二言三言の無駄口を利いて、氣晴らしにしてゐたが、お京はそのたびに男の餘計なお喋舌を非難した。

「まさか小山が御用聞になつて來りやすまいし、お前はそんな些細なことまで心配してゐなくつてもいいよ。おれはいくら世間の信用を無くしてゐたからつて、三人や五人はたまに遊びにも來て呉れるし、僕の社で缺員が出來たら君を紹介しやうなんて、頼もしいことを云つて呉れるものもあつたのだが、こ

の頃は變つた聲を一つ聞いたことがないんだからね」
「他人が遊びに來るのがあなたにはそんなに悦しいことなんですかね。素性の知れない巫山戯た話をし合つて何處が面白いんでせう。口先であなたを煽てる人があつたつて、腹の中ではあなたを見下げてるのが私には見え透いてゐるんだから、私傍にゐて口惜しいと思つたことがあつたのに、あなたは些とも氣がつかないでいゝ氣になつてゐるんだから。……變つた聲が聞きたいと云つて、私がこれほど隱立てしないで何でもお話してゐるし、あなたの仰有ることは身を入れて聞いて上げてゐるのに、それで滿足してゐられないのですか。奇體だわね。私の噓いつはりのない一心籠めた話が詰らなくつて、酒屋の御用聞の猫撫聲や、八百屋の小僧の金切聲が氣晴らしになるなんて」
「奇體といへば奇體だが、おれは以前は遊び仲間の多かつた人間だから、胴間聲でも金切聲でも、種々雜多な聲を聞いて日を送つて來たのだもの。お前の聲ばかり聞いてると滅入つてしまうよ。色だつて一色だけ見てゐちや飽くぢやないか」
鳴海が洒落れたつもりで、さう云つて笑ふと、お京も氣輕に笑つた。
「私の聲がそんなに滅入つてるか知らん。自分の聲を聞きたくなつたから、私の聲の眞似をして聞かせて下さいな。あなたは役者の聲色なんかゞ上手な人なんだから。……ねえ、いゝでせう。誰れも立聞きしてる人はないし、安心ですよ」
「そんな狂人染みた眞似は出來るものか。お前だつておれの聲色は遣へまい」
「遣へればやつて見ますとも。だけど私は無器用だから駄目よ。私のをやつて御覽なさい。狂人染みた

つてい丶ぢやないの。何時殺されるか死ねるか知れない人間が利口さうな顔してゐたつてはじまらないぢやありませんか」

なにを馬鹿げたことをと思つてゐながら、鳴海は女に邪氣(あどけ)なく求められると、不思議に女の聲色でも遣つて聞かせたくなつた。外の女の聲などは薄ぼんやりとしてしまつて、お京の聲のみは木地のまゝで口を衝いて出さうになつた。

「何を考へて入らつしやるの。あなたは卑怯ね。もうかうなつたんだから仕方がないぢやありませんか」

最初誘惑に負けた後でお京に叱付けられた時の女の言葉が思出された。

「こんな口の煩い田舎になんか愚圖々々してゐないで、東京の方へ行きませうよ。私どんな貧乏な思ひをしても構ひませんから、隣近所に氣がねしないで知らない人の中で暮らしたう御座んすよ」

家財を賣拂ふ決心をした前にお京のしみ〴〵と云つた言葉が思出された。

「でも随分いゝ値で賣れましたわね。これだけあれば東京へ行つたつて當分心丈夫ですよ。あなたも東京では月給取りにおなんなさるんだし」

金高を數へて二人でほく〴〵喜んでゐた時に、お調子に乗つて云つた女の言葉が思出された。

「今月の歌舞伎座へは雁次郎といふ大阪の千兩役者が來て大變な人氣なんですつて。お隣りのお主婦(かみ)さんが昨日見て來たつて自慢さうに吹聴してゐましたよ。裃姿で出ても濡事師になつても、とても東京の役者なんかは敵はないと云つてゐましたよ」

二人がいゝ氣になつて、暇さへあれば芝居だの寄席だの食物屋などへ足を運んで、田舍の泥を落しかけてゐた時分に、女が役者の藝風などを批評した言葉も思出された。

こんなお京の言葉に引かれ〳〵て、一年二年取留めた考へもなくつて過して來たことを思出してゐると、今此處で鳴海の耳に入れてゐる女の聲はまるで調子が違つてゐた。お調子に乘つたはしやいだ聲でおれを釣つて、帝劇だの歌舞伎座だのと陽氣な處へおれを連れて行つたお京は、今度はこの滅入つた聲でおれを何處へ連れて行かうとするのだらう?。

「あなた何を考へてるの。下らない取越苦勞なんかお止しなさいよ」と、鳴海は以前口癖になつてゐた女の聲色を眞似て、「おれは少し默つてゐると、お前はよくかう云つておれを冷かしてゐたぜ。何を見ても聞いても元氣のいゝ聲で評判を立つて、おれがけなすと怒つてゐたぢやないか。兄妹に虐められたの苦勞したのとこの頃になつて云つてゐるけれど、さうでもなかつたやうだぜ。おれは小山や白井なんかの尻馬に乘つて付元氣で亂暴なことはして來たが、毎日の生活のことも物見遊山の樂しみなんかも些とも知らずに通つてゐたのに、お前の入智慧でおれの頭が變つたやうにいろんなことを覺えて來たのだ。だからお前のこの頃云つてゐることはどうも腑に落ちないよ。……若しも今小山に會つたら、ヤア君どうしたと、笑顏で牢屋の話でもするかも知れないが、若しさうだつたら、拔身の槍で追驅けられてるやうな氣で、こんな所へ隱れてゐてビク〳〵してるのは馬鹿げたことだからね」

「私がいくら口を酸つぱくして云つても、あなたには小山の本性がよく得心出來ないのか知らん。油斷しないで入らしやい。今に分る折があるでせう。……私小山に手籠め同樣にされて難儀してゐた時に兄

に沒義道に叱られた口惜しさは今でも覺えてゐるんです。あなたが私が世間の誰れにも虐められてやしなかつたなんて云つて、私の長い苦勞を知らない顏をして入らつしやるのが、私は悄いやうな氣がしますよ。娘の時から氣まゝなことをして浮々遊んでばかりゐて歲を取つた女のやうにあなたにさへ思はれるのが私は口惜しい」

さう云ひながら、狂人染みた聲を立てゝ泣出されると、鳴海は仕樣事なさに、女の脊を撫でさすつて言譯した。お前は不幸な女だ。お互ひに不仕合な人間だと云つて慰めると、女はそれで滿足して、自分の過去を不幸な色で塗立てゝ、そのまぼろしを、うつとりした目で男の顏を見ながら話した。……小山の寢衣の綻びを縫つた後で針を取忘れてゐたら、その針が小山の橫腹を突差したといつて、意地惡く取られて、その返報にお京の腰をぶつ〳〵針でつゝき廻はされたので、腰のまはりが血みどろになつて膨上つたと、今でも傷痕が殘つてゐるやうに云つたりした。

「だから、此處にぢつとしてゐませう。あなたが私以外の人の聲に瞞かされて東京の方へでも行かうものなら、あなたは破滅するんですよ。御大典でいろんな催ほしがあつてイルミネーションが點いてゐたりして東京は大變な人出で賑かだなんて、酒屋のお用聞め、うまいこと云つてあなたを唆かしてゐたけれど、用心してゐらつしやいよ。日本中の人間が一ところに寄集つて騷いでゐたつて、私達の心配事には何の足しにもならないんです」

「それはさうさ」

鳴海は據なく跋を合せてゐたが、滅入つた女の聲のみを朝となく晩となく、これから一生聞かされる

といふ豫想からむしろ恐怖を感じさゝれた。「お金の減るのがそんなに氣にかゝるのなら、食べる物がなくなつた時には、私の手でも足でも切つてお食んなさいな。暗いお墓の中へ一人で入つて行くよりはあなたに喰つて貰つた方がいゝやうに私は思つてるんですよ」と、ある日女がまことしやかに云つたことがあつたが、實際この女の執念深い滅入つた聲から遁れるためには、女の頭から足まで一寸の肉片も殘らぬやうに喰嚙りでもしなければならないやうに思はれ出した。

晩秋の寒い雨がしよぼ〱降つて、犬の遠吠えのみが陰氣に聞えて、人間らしい聲の少しも聞えて來ない夜などには、健やかな體格をしてゐる鳴海も、五體が見る〱萎びて行くやうな氣がした。そして眞心の話だと云つてゐるお京の人間離れのした果てしのない話聲を聞くにも堪へられず、默つてゐるのにも堪へられなくなると、二階の火鉢の側でひとりうろ覺えの役者の聲色をつかつたり、馬鹿、畜生などゝ、あるひは猥雜な言葉をわれ知らず亂發したりしてゐた。……自分の聲を自分で聞いてゐても、女の一色の聲のみに捲込まれてゐるよりはいくらか頭が輕くなるやうだつた。

「御免なさい」と、早くから鎖してゐる表の戸を叩いて聲を掛けられた時には、鳴海は二階を彼方此方歩みながら、夢見たやうなことを考へては手を振り顔を動かしてゐたところであつた。思ひがけのない人の聲に驚いて耳を澄ましたが、降頻る雨の音にその人聲は一しほ無氣味に響いた。戸を叩かれてゐるのは自分の家に違ひはなかつた。……誰れも此處へは來る筈がないのにと、變事を待設けて恐れを抱きながらも、久振の人聲の懷かしさに二階を驅けて下りた。見ると、先つきから機嫌よく針仕事をしてゐたお京は、きよと〱して階子段の下に立つてゐた。

一家を間違へたんですよ、屹度。聞いたことのない聲なんですもの。……誰れもゐない振りして返事をしないでゐらつしやい」と、嚴かに命令した。

戸叩く力が一層强く響いた。……「御免なさい」と、聲も高くなつたので、鳴海は記憶に潛んでゐる人聲をあれかこれかと索つてゐたが、やがて、戸口に立つてゐた男は根が盡きたと見えて、何かぶつぶつ云ひながら其處を離れて行つた。

「まあよかつた。戸を毀して入つて來りやしないかと思つてゐたのに」と、お京は安心したが、鳴海はますます腑に落ちなかつた。

「おれの居所を知つてゐる者はない筈だ。名前まで變へてゐるんぢやないか」と、後から隨いて行つてどんな男だかそつと見て來ようかと玄關を下りて戸口へ身を寄せたが、最早あたりに人のゐる氣色はしないで、秋雨はますます氣を腐らせるやうな音を立てゝゐた。

「打遣つてお置きなさいな、行つちやつて仕合せぢやありませんか」女は却つて事もなげに云つて「あなたは何を思出してそんな心配さうな顏してるんです。小山の聲ぢやなかつたんですのに」

「おれは世間の者に爪はぢきされて來たけれど、刑事上の罪は犯さなかつた筈だと、これまでさう思つてゐたやうだけれど、さうでないかも知れない。白井の手先に使はれて脅迫もしたり賄賂の行使もしたかも知れない。お前はおれが警察に注意されてるやうな噂を聞いたことはないか。會社は職務の怠慢で免職になつたのだが、おれに不正のことがあつたかも知れないぜ。小山に見つけられる先に警察の手が廻らないとも限らない。第一浦上といふ變名まで使つてるんだから怪まれる筈だよ。……お前はさう思

はないか」

鳴海は茶の間へ入つて、針箱の側に胡座を掻いて腕組みして考込んだ。お京は男の例にない素振りを見て呆氣に取られて暫く口を噤んでゐたが、男が同じ事を重ねて訊ねるので、

「あなただつて皆んなに憎まれてるらしいんだからさうかも知れませんね。小山や白井さんがひどい目に會つたのに、あなたばかりが何時までも無事でゐられやしませんよ」と、深い考へもなしに答へた。

男の身の上を自分とは異つた運をもつた別種の人間として、過去も未來も無傷な泰平無事な人とするよりも、極印のついた刑狀持として見る方がたのもしかつた。

「お前のためにおれはかうなつたのだ。小山が監獄を出ておれ達を捜してるといふことも嘘だか本當だか分りやしないのに、お前が獨り極めでさう思はせたのだ。おれは親類の奴からさう人非人扱ひをされてゐなかつたかも知れないのに、お前に毎日毎晩入智慧されたために、無理無體にさう思ふやうになつて來たのだ。……だから、おれは明日の日にも故郷へ歸つて、親類や昔馴染に會つてよく聞いて來たいよ。おれのこれまでにして來たことをよく聞いて來たいよ」

「ぢや勝手になさい。あなたが私の云ふことをさう疑ぐり出したのなら、留めたつた仕方がないんですもの。だけど、あなたの親類や知合ひの誰れが喜んであなたに會つて眞實の話をして呉れると思つてゐらつしやるの。その場かぎりのお座なりを聞かされるだけぢやありませんか。そして、あなたを見つけたら酷い目に合はせてやらうと思つて待つてる者があるのに、あなたは氣がつかないんですか」

女にたしなめられると、鳴海は最早抗ふ力を失つてゐた。嘘を吐けと云はうとしても、この女の思つ

てゐるやうに自分も思はないではゐられなかつた。いろ〳〵な人に交はつて來た自分の過去の記憶も、お京の頭を借らなければ正確に思出されないほどに、自分の智慧はしどろもどろになつてゐた。

「あなたは惡漢に勾引かされやうとしてゐた私を助けて下さつたのです」と、芝居染みたことを云はれても何となくそんな氣がするやうに「木村さんは私とあなたとの間を裂かうとして、いろんなことを云つて焚きつけるんです」と云はれゝばそのまゝに信じなければならかつた。田舍にゐた時分のやうに最早女の色香には迷つてゐないのに、女の目に映つてゐるやうにのみ世間の樣が見え出した。

夜は階下の座敷に枕を並べた。……過去の記憶にも昏濁な忘想のみを描いてゐ、未來の成行にも悲慘な豫想のみを描いてゐながら、世の恐れから密閉された部屋に、二人枕を並べてゐると、故鄕にゐた時や飯倉にゐた時には窺ひ知られなかつた不可思議な氣持が二人の心に感ぜられた。今夜のやうに雨の降頻る時には、殊にさういふ感じが强かつた。

「どうでもいゝぢやないの。他所のことは皆んな他人のことだから」

口癖のやうにかう云つてゐたお京は、世の中でたつた一人の人間として寵愛を寄せつ寄せられつしてゐる鳴海をさへ、あるがまゝの男姿としては見ないで、魔物か神か、人外の者と居並んでゐるやうに思つてゐたりした。

「御免なさい」と、昨夕のと同じ聲で二三度呼掛けられて、二人が目を醒ました時には、寢床のまはり

も最早明るくなつてゐた。何時の間にか雨も上つてゐて、雨戸の隙間には冴えた光が差してゐた。
「煩い奴だわね……私が出て見ますからよ御座んすよ」と、不斷物怯えするお京は、案外に動じないで表の客に返事をして、手早く衣服を着て亂れた髮を解付けながら出て行つた。
「鳴海さんは此方に入らつしやるんですか」と、外では戸が開くのを待ちかねて訊ねたが、その聲はお京の耳にがんと響いて、彼女を立竦ませた。戸の掛金に手を掛けたまゝ暫く開けかねてゐると、鳴海はそつと上り口に近よつて、異狀な者を待設けてゐるやうに女に目配せした。と、お京は眉を蹙めながら手眞似をして男を奥へ追拂つて、半ば無意識に掛金を外して、細目に戸を引開けた。
「此處にゐたのかい」雨後の麗かな朝日を浴びて戸口に蹲んでゐたお京の兄は、訝かしさうに女の窶れた顏を見上げた。
入れとも云はず戸口には女が立塞がつてゐるので、兄は女の肩越しに家の中をちらと覘いたゞけで話「は此處でしたつていゝんだ。一寸云つて置けばいゝんだから」と、小聲で云つて、戸外へ出るやうにと女を誘つて、口よりも目付で强請した。
「どんな用事があるんです？」お京は無愛想に云つたが、でも、閾の外へ出ない譯には行かなかつた。兄の後に隨いて眩しい光に目を顰めながら泥濘の中を歩いたが、力のない足は今にも倒れさうにひよろひよろした。
「何處まで行くんです？」話すことがあるのなら早く云つて下さいな」お京は遠くまで兄に牽かれて行くのが不安心だつたので、さう云つて踏留つて家の方を顧みた。ふと二階を見上げると、鳴海は窓に凭

れてひそかに二人の後を見入つてゐた。

「ぢや此處で休むか」と、兄は小溝の緣に蹲んだが、足場が惡くて落着けなかつたので、「往來で立話をするのも變だが、近所に休み茶屋でもないのかい」

「私はこの邊のことは些とも知らないの。兄さんなんかの思つてゐるやうに私は浮氣でこんな所へ來てゐるんぢやないんですからね」

口の內の囁きでも鳴海に聞かれてゐるやうでお京は後が顧みられた。そして、鳴海の目の屆かぬ所へ兄に牽かれて行くのを氣遣つて、泥濘るんだ小溝の緣に蹲んで動かなかつた。

「轉居の知らせがないから、捜すのにどのくらゐ骨が折れたか知れないぜ。何が怖くつておれにまで逃げ隱れするのだい」

兄は自分がをり〳〵無心に出掛けるのを恐れて、お京が行衞を晦ましたやうに見做してゐた。小山に關係してゐやうとも鳴海に付纏つてゐやうとも、どんな男にかゝり合つて自墮落な眞似をしてゐやうとも、妹の不身持を非難するのは、たゞの表面の世間態に過ぎなくつて、自分の不足勝ちな生活に時々息を吐かせて呉れゝば、それで得心してゐたので、逃げかくれする二人の心根は合點が行かなかつた。

「おれはお前の身を賣らうと思つてやしないから安心しろ。鳴海とはまだ一緒にゐるのかい。昨夕表札を見た時には、お前があの男に別れて外の男と新奇に家を持つたのかと思つて心配してゐたのに、さうぢやなかつたのだね」と、兄は氣輕に云つた。その目には媚を含んでゐた。

「兄さんは私達を捜出して何の利益になるんです?。生きてゐない人間と思つてゐたらいゝぢやない

の。折角自分達の勝手で遁げてるものをわざ〳〵捜出して、虐めて厭な思ひをさせて、それが何になるんです？」

「誰れが虐めるものか。血を別けた兄妹ぢやないか。お前はおれの妹だぜ。兄が妹の居所も知らなければ、どんな日を暮らしてるかも知らないで打遣つとくつてことがあるものか」

「ぢや打遣つとかないでどうするの？。兄さんの氣に入らなければ故郷へでも連れて行かうと思つてるんですか」

このまゝ兄の手に攫まへられやうなら、雜作なしに兄の好きなところへ自分の身體が持つて行かれさうにお京は思つてゐた。地べたに居据はつて動くまいとしても、力のありさうな兄などの手が觸れゝば風船球のやうにふは〳〵と自分の身體は宙に浮きさうな氣がした。そして、二階から見入つてゐる鳴海の目をのみ手頼りにしてゐた。

「お前達が相變らず氣樂に暮らしてゐるんなら、おれはお前達の邪魔をすりやしない。だけど薄情な眞似はするなよ。實は鳴海に文句を云ひたいのだが、彼奴に會ふと自然荒立つた口も利かにやならんから今日は會はずに歸るつもりだがね。おれは青山の吉川の家に今月中は泊つてゐるんだから、鳴海にさう云つといて呉れ」

この兄といふ男は妹をいたぶりながらも、鳴海をば何時も憚つてゐた。無法者らしく振舞つて來た鳴海の過去の所行の記憶や、腕つ節の强さうな面魂を思浮べてゐると、迂潤に打突かつて行かれなかつた。で、謎をかけてねだるのにも兄としての威光を見せるのにも、何時も妹を間に立てるのだつたが、お京

を通して兄を見てゐる鳴海には、また兄といふこの男が自分などには手におえない人間として映つてゐた。

鳴海は小溝の縁に蹲んでゐる二人の後姿や横顔を目を凝して見入つてゐたが、二人の間には刻々に爭ひが昂じてゐるやうに思はれた。寢衣に羽織だけ引掛けたゞけで寒さうにしてゐるお京は、勝誇つてゐる顔付した兄の前に身を縮めて萎れてゐた。女が兄に酷い處分を受けてゐるのも可愛相だが、それよりもこんな所で人に知られずに安閑としてゐる自分の今日が、兄に嗅付けられたゝめに一撃ちで碎かれたのが忌々しかつた。……そこに蹲んでゐる兄の周圍には、小山とか白井とか自分の過去に係合ひのあつたいろんな世間の人の影が動いてゐるやうに思はれた。

神樣のお告げに導かれたやうな氣で此處へ移つて、用心の上にも用心してゐたのに、さういふ人々の影法師が恨みと怒りをもつて押寄せて來出しては敵はない。一刻も躊躇しないでまた新しい所へ逃出さなければならないと、誰れかゞ自分の耳許に口を寄せて、小さい聲だがしかし嚴かに命令してゐるやうな氣がした。そして、その聲音はお京のによく似通つてゐた。

暫く蹲んでゐた兄はふと立上つた。お京もよろ〳〵と立上つた。何か話しながら二三歩歩いてゐる間に二人の姿は家の蔭に隱れて見えなくなつたので、鳴海は女が兄に脅かされて此處を棄てゝ行つたのかと、驚くよりも夢見るやうな氣でぼんやり小溝の縁を見下してゐた。二人のゐた跟には人通りもなくつて、たゞ明るい日が寂閑と光つてゐた。移つて來た當時に色づきかけてゐた向ひの森の木の葉は落葉して、收穫時の過ぎた田や畝は、見渡すかぎり淋しい冬の色を帶びてゐた。

郊外の景色にも彼れは飽果てゝゐた。森があつて小祠があつて、遠山が幽かに聳えて、百姓が通つてゐて小鳥が飛んでゐる郊外の景色は、二階から見渡すたびに散步の節を牽くたびに、彼れの目を疲らせ彼れの頭をいら〳〵させるために、そこに存在してゐるやうに思はれ出した。お京が若しもこのまゝゐなくなつたらと、今から一人身輕になつたつもりでゐやうとして、過去の記憶も目前の景色をも心靜かに浮べて見たが、靑褪めた顏したお京の聲は耳許にこびりついて離れなかつた。そして、女から日夜絕えず頭の底へ吹込まれたやうに、自分達二人は人並外れたことばかりして來て、周圍の人々から恨みと憎しみのみ受けて來たやうに思はれてならなかつた。さう思ふまいとしても、昨日までの記憶は女に承認されない限りはあやふやで、自分だけの智慧では何一つ確實にならなかつた。疑ひの起らない過去の事實は一つもなかつた。鳴海々々といふ文字を空に描いては消し描いては消しして考へてゐると、その文字が自分のことで、自分がその文字で現はされてゐるといふことすら次第に疑はしくなつた。

鳴海は雨戶のまだ鎖されてゐる階下へ下りて、敷きつ放しのまゝで溫みのまだ殘つてゐる寢床の中へ潜ぐり込んだ。そして目を瞑つてもう暫く眠入らうとしてゐたが、知らぬ間にお京は勝手口から上つて來て枕許に首伏してゐた。

「兄さんを旨い工合に騙して返しましたよ。二度と叩起されたりする氣遣ひはありませんよ」と云つてお京は苦しさうに息を切らしてゐた。

「いつもの通りに無心を云ひに來たのです。自分の家の者や妹なんかが災難に會つた話をして私達から

お金を取らうとしたつてその手に乘つて溜るものですか。あの人は油斷すると暴力を用ひさうな氣がして怖いから、二度と來ないやうにと思つて、あなたが些し氣がふれてゝ訪ねて來る人に亂暴なことをして困つてる、兄さんの顏でも見たらそれこそ刄物を振廻はさいとも限らないと云つて脅してやつたんですよ。さうすると兄さんも命が惜しいと見えてビク〳〵してゐましたよ。それでこんな靜かな所へ引越したのかなんて獨り合點をしてるんだから可笑しいぢやないの」

二階から見てゐた樣子では、そんないゝ加減なことを云つて兄を言ひくるめてゐたらしくはなかつたがと、鳴海は自分の目を疑ひながら、

「何だつてそんなことを云つたのだい。おれが氣がふれたと兄に云へば、兄の口から世間に直ぐに擴がるぢやないか。おれは明日の日から皆んなに狂人扱ひされるぢやないか」

「だつて構はないぢやありませんか。他人は他人ですもの」

「お前は他人のことをおれに變に思はせるし、おれのことを他人に變に思はせるやうにしてばかりゐてそれで滿足してゐるのか」

「私が意氣地がないから狂人染みたことばかり考へると、あなたはよく云つてゐなすつたけれど、あなたの方がもつと意氣地がないのね。夢見たいなことを云つてふは〳〵してる世間の人達に何と云はれてゐやうと何でもないぢやないの。明日の日他人に殺されやうともお仕置に合はうとも、私達二人はお互ひの心一つで泣いたり笑つたりしてゐれば、それで仕合はせぢやありませんか」

「お前こそ夢見たやうなことを云つてるんだ」

と、鳴海は平生になく腹立たしい聲を上げて、女を捻伏せてその頭を打碎きたいやうな氣になつた「おれは何時までもお前の嘘にかぶれてゐては破滅だ」

「なにが嘘です？。あなたはまだ本當のことが分らないんですか。あなたは私を棄てゝ一人で故郷へ歸つたら面白い日が送れると思つてるのか知れないけれど、それこそあなたの身の破滅になるんです。白井を小山に斬らせたのも小山を監獄へやつたのもあなたゞと思はれてゐるのに‥‥それがあなたには分らないんですか」

お京は男の身體に纏はりついて、氣たゝましくさう云つた。鳴海は女を捻伏せる先に自分の方で捻伏せられたやうに感じた。そして自分の心に濁つた記憶を溢らせたこの女の息の根を絶たない限りは、嘘とまことの差別はます〳〵見分けがつかなくなりさうだつた。「小山よりはお前が怖いよ」と、女をも夜具をも跳ねのけて飛上つたが、その樣は本當に氣の觸れた人間のやうにお京の目には見えた。この人一人と賴みにしてゐた男は、魂のうつろな身體のみ巨大な生物としてお京の目には見え出した。で、「この人はその力でどんな危いことをするかも知れない。この人に殺されたくない」といふ一心から、外のことは何んにも考へる暇もなく、慌てゝ表へ飛出して、先つきに兄に隨いて行つた道からひた走りに電車の音のしてゐる方へ走つた。

青山の吉川の家。兄が泊つてゐるといふその家を訪ねて、お京は夢中で轉がり込んだ。血相變へて足には男の下駄を穿いてゐるので、家の者を驚かした。

「どうしたのだ」兄は呆氣に取られながら、「鳴海がどうかしたのか」

「氣が變になつたらしいんです。私怖くつて側へ寄りつけないから、兄さんが行つて見て下さい」

「おれも一人ぢや困るね」と云つて、兄は吉川の主人にも手助けを賴んだ。

不斷知らん顏をしてゐやがつて、こんな事で世話を燒かしやがると零しながらも、兄は多少の興味を覺えてゐた。そして、三人連れで直ぐに出掛けることにした。

電車の中で、兄はお京に向つて鳴海の氣が觸れた原因やら經過やらを訊ねたが、お京には筋道の立つた話は出來なかつた。それどころか、鳴海の氣が觸れたといふこともあやふやになり出して、自分が浮つかり兄などを連れて來たことが不安心になり出した。

「田舍へ來ると氣がせい〳〵しますね」と吉川は電車の窓から珍らしさうに冬枯の野を眺めてゐた。

「さうですとも。だが僕は、昨夕は雨の中をやつて來るし、今朝は寒かつたし、三度目の今度は狂人の介抱に行くんだから、あんまり氣保養にもなりませんよ」

兄はさう云つて、兎に角今日直ぐにでもあの家を片付けて、故鄕へ二人を連れて行くことにすると、吉川に語してゐたが、兄の獨り極めの計畫を側で聞いてゐると、お京は氣が氣でなかつた。で、電車を下りると、二人の悠長な話聲など耳にも入れないで、足を早めて自分の家まで來るや否や、二人を打遣らかしといて勝手口から驅込んだ。見ると、寢床は片付けられて緣側の雨戶も二三枚開いて明るい日が部屋の中へ流込んでゐたが、鳴海の姿はそこには見付からなかつた。二階にもゐなかつた。

お京が家の中をまご〳〵してゐる間に、無斷で踏込んだ兄は表の戶をも開殘された緣側の雨戶をも悉く開けて、「新しいいゝ家だね。先の家よりや餘程いゝ」と云つて、先づ彼方此方の部屋の中を見廻した。

そして、鳴海がゐないと聞くと、便所から押入まで捜して、家の周圍をも吉川と二人で見廻した。りの家へ行つて、譯を話して訊ねたりした。

「も少し待つてゐて、いよ／＼歸つて來なければ、警察へでも屆けるんだね」

兄はさう云つて、座敷の眞中に胡座を掻いて、吉川と二人で煙草を吸ひながら、鳴海の人となりを説明してゐた。

「さう云へば昔からあの男のやり口は少し變でしたよ。地道な世渡りの出來ない性分でしたよ。役場へ勤めてゐても半歳とは續かないし、牧畜をやりかけても計畫だけでお仕舞ひにするし、政治運動に關係し出すと、あの通り味噌をつけるし、財産を二束三文に賣飛ばして東京へ出る時からどうも正氣の沙汰ぢやないと思つてゐたのです。私だつてあの男のためにや隨分迷惑をしてゐるんでさ。あの男のためにいろんなことで側杖を喰つてゐたんですからね。お京がかうなるについちや私が後から差金を引いてるやうに思はれて、小山の奴にも隨分恨みを云はれてるんですから」

お京は二人の荒男が座敷の眞中に頑張つてゐるのを見てゐると、自分達の閑寂な別天地の無殘に荒らされてゐるやうなので悲しかつたが、兄に差圖されると、命令のまゝに動いて湯を沸したりお茶を入れたりした。「何かお茶受を買つといでよ」と云はれると、長火鉢の引出しから小錢を浚出した驅け出した。一歩も家から踏出すのを厭うて、日常の買物さへ鳴海を煩はしてゐたのに、他の者に强ひられると斥けることが出來なかつた。

この頃歩き馴れてゐる畦道を當てもなく歩き廻つて、足を泥だらけにして歸つて來た鳴海は、沓脱ぎ

に並んだ二人の下駄を見たり家の中の話聲が耳に觸れるとぎよつとして、思はず上り口に立縮んだ。そして、話に耳を澄ましてゐたが、そこにはお京の滅入つた聲はしないで、元氣のいゝ男の聲に快活な笑聲さへ交つてゐた。話の中には覺えのある他人の名前が頻りに云はれてゐた。……自分の身に害を加へに來た奴とは思はれぬほどに自分の耳に親しみのある聲が響いてゐた。

で、鳴海はわれ知らず、汚れた足のまゝに出抜けに入つて行つて、意外な二人の客に笑顏を見せた。二人の側に腰を卸した。

「今日は君をお迎へに來たんだよ。これから一緒に出掛けやうぢやないか。彼方では皆んなが君を待つてるんだよ」と、兄の奴挨拶もしないで馴々しく云つた。

「僕を待つてるんだつて」

鳴海は相手の言葉が腑に落ちなかつたので訊返した。親しい口を利かうとしても、二人の目付に此方を警戒してゐる樣子が見えてゐるので、鳴海自身も油斷は出來なかつた。

「ねえ君いゝだらう」と、兄は子供を綏すやうに相手の肩に手を觸れて、「故郷(くに)では瀨田君やおゆきさんはじめ町の者が停車場に揃つて君を歡迎するんだぜ」

「君達は僕を愚弄しに來たのかい」

鳴海は兄の手を突退けやうとしたが、その意氣込みに目をつけた二人は左右から力を合せて、狂出しさうな彼れの身體を捻伏せた。待設けられてゐたやうな激しい力を彼れは持つてはゐなかつた。

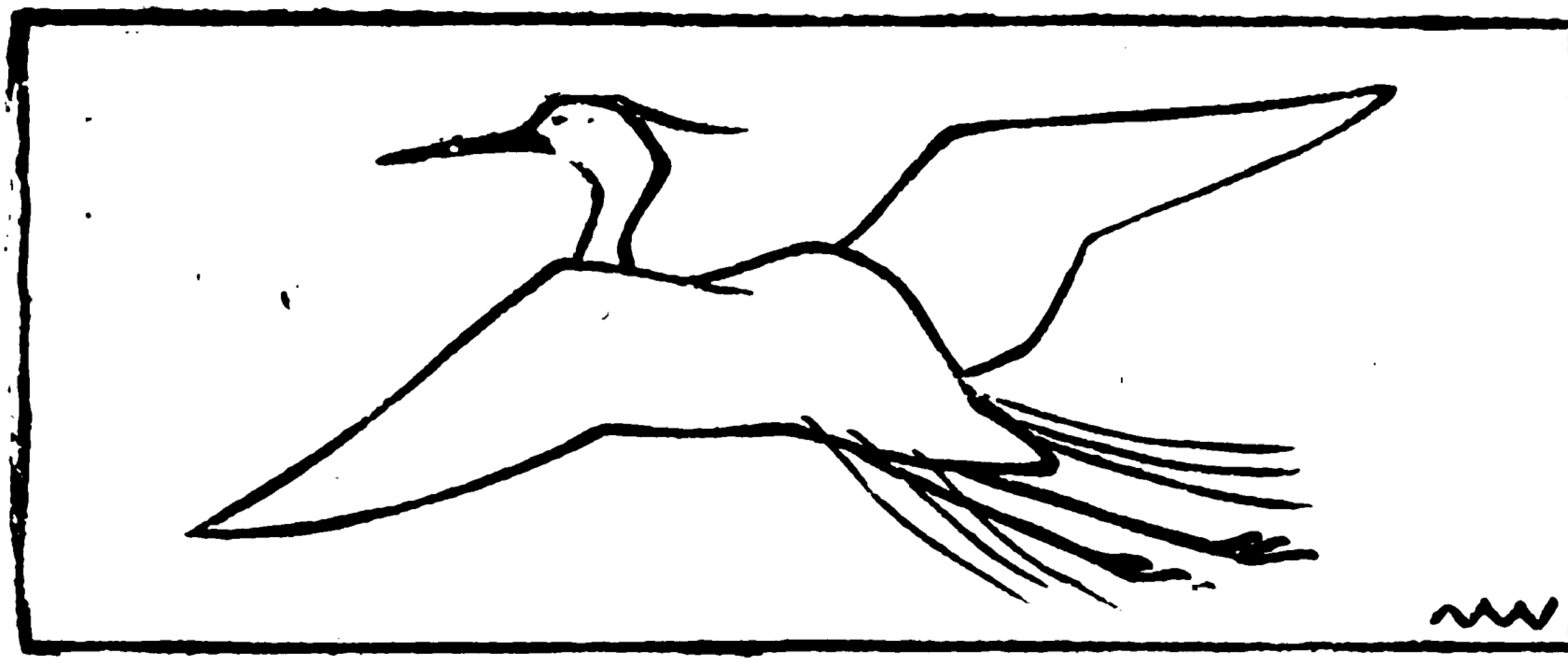
跳起きやうとして起きられなかつた鳴海は、兄の手に逆らはうとする大それた考へを直ぐに止めて、

素直に命令に從ふから手を離して呉れよと歎願した。

「僕はこれまで惡いことばかりして來たのだらうから、君達にも謝まるよ。故郷の者が揃つて停車場へ出迎へるといふのは、さうして皆んなして僕を取摑まへて懲らうと思つてるんだらうが、腹の癒えるやうにどんな制裁でも加へて呉れたまへ。僕は甘んじて受けるよ」

やうやく手を離されたので、鳴海は亂れた衣服を直して二人の前にしほ〳〵と座つた。お前は誰れを殺したではないかといはれても、何某を欺いて苦めたではないかと云はれても申開きの術はないやうに思つてゐた。夢のやうな自分の過去を呪ふより外に仕方がないやうに思はれた。

電車通りの駄菓子屋から茶受けを買つて歸つたお京は、襖の蔭からこは〳〵覗いて、あの人は本當に氣が狂つたのだと驚いてゐた。そして、二人を呼んで來たことをどれほど心丈夫に思つたか知れなかつた。



日本武尊

武者小路實篤

人物

日本武尊

熊襲建兄弟

出雲建

倭姫命

橘姫

美夜受姫（みやずひめ）

吉備武彦

相武國造

間者（獵師）

その他、武士數名、樵夫、船頭數名等

第一幕

第一場

（筑紫のある館の一室、尊は今女裝しをはつて、小さき鏡に自分の姿を見てゐられる、わきにゐる三四人のものを顧みられて）

尊。どうだ。之で女に見へるか。

甲。（笑ひながら）まるで女としか見へません。

尊。どうだ熊襲建兄弟が俺を見て心を動かすだらうか。

甲。大丈夫で御座いませう。

尊。それならそろ〳〵出かけるかな。

乙。まだ少しお早いで御座いませう。

尊。まだ早いか。どうだ皆、俺の化けやうはうまいだらう。まづい處があつたら知らしてくれ。

丙。誰が見ても本當の女とか思へません。本當にお美しくゐらつしやいます。

尊。隨分大きな女もあるものと思ふだらう。だが運さへよければ、今夜こそあいつ達を殺してやる。俺の胸も今夜のことを思ふと動悸がする。

甲。あまりおいそぎになりませんやうに。

尊。大丈夫だ。俺はあんまりゆつくりしすぎはしないかとそれが心配だ。

甲。何しろおちついて、い〻時がくる迄お待ちにならなければいけません。

章、あゝ、おちつけるだけおいちついてやる。剣は何處にある。

乙。こゝに御座ます。

（章剣をうけとり玉ひ）

章。切れあぢはいゝだらうな。

丙。はい。十分に研いでおきました。

（章剣をぬいて見玉ふ）

章。よく切れさうだ。之で二人をさし殺してやるか。あいつ達は自分程強いものはないと自惚れてゐる。俺を女だと思つて油斷する。俺はあいつ等の機嫌をとつてやる。何處までもうぶな娘子に見せてやる。そしてあいつに近づいてやる。俺にはどうもうまくゆくとしか思へない。

甲。それはきつとうまく參るで御座いませう。

章。俺はまだ自分の力がどの位ゐあるか知らない。今夜は俺の力だめしだ。そろ／＼出かけるか。どうもおちついてはゐられない。

丁。私などがこんなことを申し上げるのは失禮で御座いますが、今晩のことは思ひおとゞまりになつて戴きたく思ひます。

章。それはまたなぜだ。そしてなぜ今まで默つてゐたのだ。

丁。どなたか他の方がおとめ下さるだらうと思つてをりましたのです。私はあなた樣がお一人、敵のなかにいらつしやることが心配でなりません。

尊。心配なことはない。安心してゐろ。お前は俺が女裝してゐるので弱くなつたやうに思つてゐるのだらう。この腕を御らん。俺は少し强すぎるのだ。兄上を俺があやまつてころしたのも俺の力が强すぎたからだ。

丁。それでも熊襲建兄弟の力はまた特別だと申します。牛などは平氣でなぐり殺すと申します。

尊。そんなこと位が俺に出來ないと思つてゐるのか。お前は俺のことを思つて云つてくれるのだから怒りはしない。だがこんないゝ機會は又と來ないぞ。安全ばかりをのぞんでゐて、ぐずぐずしてゐれば相手にさとられてしまふ。多勢に無勢だ。さうなつてはいくら俺が强くつてもどうすることも出來ない。父上は俺が過ちにしろ兄を殺したのでこの地によこされたのだ。たつたお前達五人をつれさして父上は俺が人並はづれた手柄をすることを望んでゐらつしやるのだ。さもなければ死んで歸れとおつしやつてゐらつしやるのだ。父上は兄上を愛してゐらつした。自分の女を兄上に横どりされても父上はそれをお許しになつてゐたのだ。父上は俺の顏を見ると兄上の死をお考へになるのだ。それで俺をこゝによこされたのだ。一通りの手柄では父上をおよろこばしすることは出來ない。俺は今晩二人を殺して、父上にお詫びしやうと思つてゐるのだ。俺が死んでも父上は別に惜しいとは思はれはしまい。

甲。そんなことは御座いません。父上も母上も、倭姫の命もあなたのことを御心配なさつて私にくれぐれもおたのみになりました。

尊。この俺を心から愛してゐて下さるのはあの倭姫の叔さまだけだ。だがそんなことはどうでもいゝ。

俺は今日こそ俺の力がどの位ゐ役に立つものか、皆に示したいのだ。俺の持つて生れた力は兄上を殺す爲ではないのだ。父上の云ふことをきかないものを平げる爲に與へられたのだ。俺はそれを今夜顯はして見せるのだ。安心するがいゝ。重ねて口答へすると承知しないぞ。俺のことは俺がよく知つてゐる安心してゐるがいゝ。俺はもうぢつとしてゐられなくなつた。もういゝ時分だらう。そろ〳〵出かけるとしやう。

丁。私はどうも心配でなりません。どうかまげてお思ひとゞまつて戴きたう御座います。

尊。安心しろ。今夜のやうな時は二度とは來ない。この俺を見ろ。女としか思へないぢやないか。だから安心しろ。それではいつてくる。

丁。それではどうしてもいらつしやいますか。

尊。ゆく。今晩は面白いぞ。皆安心してゐろ。俺がどんな人間かと云ふことは明日日がまだ上らない前にお前達は知ることが出來るだらう。お前達は俺を見くびつてゐる。俺はお前達にはまだ俺の本當の力を見せたことはない。樂しみに待つてゐろ。それでは一寸行つてくる。（退場）

（皆ついてゆく）　　幕

第二場

（熊襲建の館、酒宴の終りに近く。建兄弟、上座にならんで熊の皮の上にあぐらかいてゐる。筋肉たくましいけれどあまり卑しからず）

兄。今迄こゝに居た女はどこの女だ。

腰元。今日、お祝のお手つだひに參りましたのです。お氣に召しましたか。

兄。よんで來い酒をやるから。

腰元。はい。(退場)

弟。兄さん。その女と云ふのはあの背の高い、色の白い、肉づきのいゝ女ですか。

兄。さうだ。

弟。兄さんもあの女にお氣があつたのですか。

兄。お前も氣がついてゐたか。

弟。うつむいて許りゐて、よく顏は見へませんでしたが、立派な身體した女もあればあるものと思ひました。

兄。お前はあの顏を見なかつたのか、道理でお前は默つてゐると思つた。

弟。そんなに美しいのですか。

兄。まあ、あの位の女は見たことがないと云つていゝだらう。利口さうな目をしてゐる。生々した顏をしてゐる。恥かしさうにして、しくぢり許りしてゐたが、人を恐れないおちつきを見せてゐた。今日の祝もあの女が來なかつたら半分の値もなかつたらう。俺はあの女によつておれ達の世襲を得られると思ふのだ。俺のさがしてゐた女はあの女だ。

弟。あなたはすぐ人をお信じになります。どんな人間かわからない內は手をお出しにならない方がよろ

しいと思ひます。

兄　その忠告はお前自身にも半分返すことにしよう。アハヽヽ。

弟。アハヽヽ。まあ人のことだと大事をとれとすゝめられますが、自分のことはさうはゆきません。しかし兄さんよりは私の方が用心がいゝでせう。

兄。どうか。それは信じられない。ともかくあの女を見ろ。わるい心を持つた女は俺達二人を見ればふるへ上らなければならない。あの女は正しい心をもつものだけがもつてゐるおちつきをもつてゐる。それに子供らしいうぶな顔をしてゐる。

弟。それはまあ、私達二人がゐればどんな奴が來たつてこわいことはありませんがね。

兄。さうともお前と俺とが一緒にかうやつて、仲よくやつてゆけば世の中にこわいものはない。さあ酒を一杯やらう。誰か酒をつげ。

他の腰元。はい。(酌をする)

弟。ありがたう。それならお返しします。

兄。今日の天氣は特別によかつた。酒もよかつた。あの女がやつて來た。

弟。本當に立派な女ですね。

(女装せる尊、つれられて二人の前に坐り、だまつてお辭儀し玉ふ。少し微笑まれる)

兄。今日は御苦勞だつた。齡はいくつだ。

尊。十六で御座います。

兄。十六か。恥かしいことはない、こつちにおいで。

尊。はい。（恥かしさうにされる）

兄、俺は氣が短かいから遠慮なく、こつちへ來い。

尊。はい。（にぢりより玉ふ）

兄。どうだ美しい娘だらう。

弟。本當に美しい娘で御座いますね。

兄。さあ、酌をしろ。お前は人間の内で一番偉いものゝ酌をするのだぞ。

尊。はい。（酌をしつゝ手をわざとふるはされる）

兄。こわいか。

尊。それでもあなたはこのお手で今迄にいろ／＼の方をお殺しになつたので御座いませう。

兄。殺した。俺の云ふことをきかない奴は皆殺した。一人のこらず殺した。しかし俺の云ふことをきいた奴は殺しはしない。

尊。隨分今迄にあぶない目におあひになりましたでしやうね。

兄。あつたとも。だが俺の力は俺を救つた。俺の弟と俺より強い奴は世の中にはゐないのだ。この世の中では何よりも強くなければならないのだ。

尊。女もですか。

兄。女だつて強くなければいけない。身體を鍛えなければいけない、どんなことが起らないとも限らな

いからな。その時弱い奴はいくらどんなにもがいたつて死ぬより仕方がないのだ。
韋。強いものは弱いものを殺してもいゝので御座いますか。
兄。いゝとも、手向ふ奴はな。さう云ふ奴は殺すより仕方がない。
韋。お酒をおつぎしませうか。
兄。ついでくれ。一杯ついでくれ。
韋。（弟の方に）あなたにもおつぎしませうか。
弟。ついでくれ。一杯ついでくれ。
兄。お前ものまないか。
韋。それでは戴きます。
兄。その杯を俺にくれ。
韋。はい。
兄。女は一番強いものゝ云ふことをきくのがいゝのだ。皆、こゝはいゝからさがつて酒をのむなり、御馳走食ふなりするがいゝ。
女達。はい。（皆退場）
韋。あなたとあなたとどちらがお強いの。
兄。同じことだ。
弟。それは兄さんの方が少しお強いでせう。

兄。そんなことはない、同じことだ。

尊。お酒は。

兄。酒は俺の方が強いかも知れないな。だが食べることはお前の方がたべるだらう。

弟。さうかも知れませんね。

尊。私。お二人があんまりのんだり、食つたりなさるのでおどろきましたわ。いくらなんでも、もうお上れになれないでせう。

兄。まだいくらだつてのめる。まだ正氣は失なはない。俺は正氣を失なふ程は酒はのまないのだ。俺は強いから敵がゐる。いつ敵が來ないとは限らない。倭の奴は俺達を殺さうとねらつてゐるさうだ。あんな奴はこわくはないが、油斷は出來ない。

尊。随分偉くなると心配ですね。

兄。まあ、さうだ。だがいつのまにか偉くなつてしまうのだから仕方がない。つい生命（いのち）のやりとりをする、その度に勝つ、だん／＼誰も敵たう奴がゐなくなる。俺と弟とはさうしてこゝでは一番になつたのだ。

尊。倭の國をこつちからお討ちになつたらどうなのですか。

兄。まだ時が早い。それに人數がたりないな。

弟。さうです、もう四五年は待たなければならないでせう。

兄。四五年、お前は二三年とこなひだ云つたぢやないか。

尊。そんな話はやめませう。
兄。さうだな。そんな話は面白くはない。お前は何か舞ひが出來るだらう。
尊。出來ません。
兄。そんなことはないだらう。何かやつて御らん。
尊。何も出來ません。もう一杯お酌いたしませう。
兄。あゝついでくれ。さあ是非舞つてくれ。
尊。とてもそんなことは私には出來ません。
弟。出來ないはづはない。たゞ手や足を動かせばいゝのだ。どうせ兄さんはお前が舞が上手だとは思つてはゐない。たゞお前の手や足がうごくのが見たいのだ。やつてごらん。
尊。それならあんまり御辭退するのも失禮ですから。ですけれども何も私は存じませんのです。(尊立つて出駄羅目に舞ふ)
兄。(時々居眠る)面白い舞だな。さあ酒を一杯やらう。
尊。ありがたう御座います。
兄。あゝねむくなつた、どれねるかな。(兄尊の膝を枕にしてねる)
弟。お前の今のおどりは何處のおどりだ。
尊。出駄羅目で御座います。

弟。出歐羅目にしては調子がとれてゐたな。尤もその調子はわれ〳〵の舞の調子とは少しちがうやうだが、お前の舞は倭の奴の舞とよく似てゐる處がある。お前は何處のものだ。
尊。となり村のものでございます。私の若い時に私の家に倭の方があそびに來たことがよく御座いました。もしかしたらその倭の人の舞を子供心に覺えてをりましたかも知れません。
弟。兄さんはよくねてゐるか。
尊。よくおねむりになりました。
弟。それなら兄さんは其處へおいておいてお前はさがるといゝ。
尊。それでもこのまゝにいたしておきましては。
弟。かまわない。あとは他の奴がいゝやうにするから。お前はさがつて早くねるといゝ。
尊。ありがたう御座います。

（尊、懐中から劍をとり出し玉ひ、不意に兄の方を一刀でさし殺し玉ふ）

弟。氣でも狂つたのか。（尊の手をつかまへる）

（尊それをふりはなし、一刀で弟の胸をさし、押えつけ玉ふ）

弟。待つてくれ。云ひたいことがある。
尊。今になつて生命が惜しいのか。
弟。お前は誰だ。
尊。俺は大八島の天皇の皇子倭男具那王と云ふものだ。お前達兄弟が父上の云ふことをきかないから殺

しに來たのだ。何か用があるのか。

弟。私はあなたのやうな强い方にあつたことはない。私は今迄いろ〳〵の男に逢つたが私達兄弟より强いものはなかつた。私達は人間の内で一番强いものと思つてゐた。しかし今あなたにあふとまるで子供のやうだ。あなたは一通の方ではない。私はあなたに日本武尊と云ふ御名をさし上げる。どうか臣下にして下さい。

尊。俺はお前を殺すことを命じられてゐるのだ。臣下にすることを命ぜられてはゐない。

弟。私は命を助けて下さればきつといゝあなたの臣下になります。

尊。俺は臣下は持ちすぎてゐる。（さし殺す）。あはゝゝ。いくぢのない奴だ。どれ之から手向ふ奴を片端から殺してやらう。（血刀をさげて退場）

第三場

（肥河の岸、尊、出雲建と登場）

出雲建。いゝ景色でせう。

尊。本當にいゝ景色だな。今日は少し暑いな。水に入つて見やうか。

出雲建。入つてもよろしいね。

尊。この川はさう流れは急ではないでせうな。

出雲建。あなたはおよげるのでせう。

尊。あんまりうまくはないが、向ふ岸へ行つて歸つて、歸つて行つて、又行つて歸る位ゐなことはなんでもない。
出雲建。それなら中々およげますね。
尊。まあ、あなた位はおよげるでせう。
出雲建。私はおよぎにかけては、私にまさるものにあつたことはありません。
尊。それなら劍の切りあひはどうです。
出雲建。切りあひでも私はまけたことはありません。
尊。さうですか。私もおよぎでも切りあひでも誰にもまけたことのない人間ですがね。
出雲建。それなら一つどつちがかつかやつて見ませうか。
尊。やつてもよろしい。
出雲建。それならどつちが早く向ふ岸へ行つて歸つてくるか、やつて見ませう。
尊。よろしい。やりませう。あなたがまけたら、あなたは今日から私を兄としなければいけませんよ。そのかはり私がまけたらあなたを兄としてうやまいます。
出雲建。よろしい。やりませう。
尊。それならおよぎでも、劍をとつても、兩方ともまけたものが本當のまけですよ。片方でまけても片方で勝てばあいこにしませう。
出雲建。よろしい。

（二人裸になり川にとびこむ。暫くして尊、岸にはい上られる。）

尊。あいつはまだあんな處でもがいてゐる。あいつは今度はきつと劍で切り合はうと云ふだらう。今の内に、この劍の形をした棒切をあいつの劍とかへておいてやらう。あいつがぬけないでよわつてゐる内に殺してやらう。（出雲建の劍をとりかへる）馬鹿な奴だ。氣がつかないにちがひない。（着物を着）隨分おそいのですね。しかしいゝ氣持でした。

（尊、出雲建をひきずり上げられる）

尊。どうです。もう、私の方が兄さんと云つてもいゝでせう。

出雲建。それはいけません。それでは約束がちがひます。さあ今度は劍で勝負をしませう。

尊。もうよした方がいゝでせう。どうせあなたは負けるにきまつてゐるのですから。

出雲建。いや／＼。およぎにまけても劍をとつては負けません。

尊。だめですよ。私は劍をつかうことはおよぐことよりうまいのですから、しない前に降參する方がよろしい。

出雲建。あなたは今背の高いのを利用しておよぐかはりに走けたから勝てたのです。しかし劍をとつては何しろ私の方が經驗があります。決して負けやしません。

尊。それならやりますか。

出雲建。やります。

尊。それならやりませう。そして一寸でもさきに傷がついた方がまけです。

出雲建。よろしい。私はあなたのその美しい皮膚から血をながして見せますよ。よろしいか。

尊。よろしいとも、何處からでも血を流して下さい。

出雲建。それならばやりませう。

尊。よろしいか。一二三、で劍をぬくのですよ。合圖の前に劍をぬくのは卑怯ですよ。

出雲建。よろしい。

尊。一二三。

（出雲建。劍がぬけないでよわつてゐるひまに尊、出雲建を一つきに突き殺し玉ふ）

尊。（死骸を見て）八雲立つ。出雲建が、はける太刀、見かけ許りで、中身なきぞ哀れ。はゝゝゝ。（沿

（尊退場）幕

第二幕

第一場

（尊、倭姫の家の一室。尊おちつかぬ樣子で室を歩いてゐられる。倭姫登場）

倭姫。よく來てくれた。こなひだは大層な働きをしてよく無事で歸つて來られた。

尊。姨樣、私は今日は勝つて歸つた御報告に上つたので御座いません。之からまた東の夷を討ちにゆく爲にお別に上つたのです。

倭姫。 又戰にゆくのかい。

尊。 えゝ、さうです。父上は之からすぐ戰にゆけとおつしやいました。私は無事に八木建を亡ぼし、又出雲の出雲建を亡ぼし、之で安心だと思つて國に歸つて來たのです。私は父上が私の無事に歸つたのを聞いてさぞ喜んで下さると思ひました。しかし父上は私があまり易々と大敵を亡ぼしたことをお喜びにはならないのです。よくやつた。無事でよかつた。お前は我が子として恥かしくない感心な奴だやとはおつしやつて下さいましたが、本當によろこんでは下さいませんでした。せめて姨上の半分でもよろこんで下さつたら、私はどんなに嬉しかつたでせう。私は得意になつて、大きな手柄をしたつもりで歸つて來たのです。父上のおほめ言葉や、およろこびなさる樣をいろ／＼空想して歸つて來ました。處が父上はその十分の一もよろこんでは下さらず、ほめても下さいません。感心な奴だやとおつしやつても、それが心の底から出るお言葉とは思へないのです。

倭姫。 それはそなたがあまり得意になるといけないと思はれた親心であらう。あまり腹をたてないがいい。

尊。 しかしせめて無事で歸つたことをよろこんで下さつてもいゝと思ひます。

倭姫。 そなたが、あまり强すぎるので、

尊。 私もさう思ふのです。父上は私を恐れてゐらつしやる。熊襲や、出雲建や、東夷どもよりも私を恐れてゐられるのです。私にはそれがわかります。私は死んでくれればよかつたのです。さうすれば父上も泣いては下さつたでせう。さもなければ私はひどい傷でもしたらいゝのでせう。さうすれば父上

も兄弟も私の苦心を察してくれて、私の手柄を少しは認めてくれたでせう。處が私は身に一つの傷もうけず。たゞ一うちに殺してしまつたのです。私は何處まで力があるか、父上にも兄弟にもわからないのです。熊襲建の弟の方は私に日本武尊と云ふ名を死にぎわにくれて、天が下にあなた程强いものはないと云つてくれました。その話を父上や兄弟の居る前でしましたら、皆何とも云へないいやな顔をしました。私は自分の口からそんなことを云つたのが恥かしくつて、穴に入りたいやうな氣がしました。そして一人で泣きました。姨様より他に私と一緒によろこんで下さるものはないのです。

倭姫。もう一人あるはずだが。

尊。橘姫ですか。あれは勿論よろこんでくれました。あれは本當に可愛い丶奴です。姨様によろしくと申しました。ですが私はその後誰にも自分の武功は語らないやうに注意してゐます。たゞ橘姫にだけは自分の力を樹りますが。姨上、私は今度東の夷を討つことになりました。もしかしたら之がおわかれではないかと思ふのです。

倭姫。なぜ、そんな氣のよわいことを云ふのです。

尊。氣がよわいのではありません。皆がそれを望んでゐるのです。父上を始め。

倭姫　そんなことが。

尊。いゝえ。それは本當です。私は父上が十分に臣下をも下されずに、戰ひにゆけとおつしやる意味がよくわかりました。父上は勝つてこいとはおつしやいません。死んでこいとおつしやつてゐらつしやるのです。口ではまさかそんなことはおつしやいません。しかし今度あまり大きな仕事をして歸つて來

ましたら。私は何か恐ろしいことが起りさうな氣がするのです。

[illegible]。そんなもの丶考へ方はしないがい丶。父上だつてそなたのことは兼ねてから賞めてゐらつしやる。わしの子ではあるが見上げた子だ。他の子を替合はせてもあの子の價値(ねうち)の半分にもならないとおつしやつてゐらつした。たゞそなたがあまりに大きい手柄をなんでもなく平氣でやつてのけるので、父を父とも思はなくなりはしないかと恐れてゐられるのであらう。氣をまわさないがい丶。そして大きな手柄をしてくるがい丶。

尊。私はもう、戰はいやなので御座います。私は都で平和にくらしたく思ひます。橘姫もそれを望んでゐるのです。私は父上にもそのことを申し上げたのです。私は戰ひに行くより都にゐて、平和にくらしてゐたい、今度は誰か他の人をつかはして下さい。しかし父上は私より他にこの大任を果すものはない。早速ゆけ、なんなら橘姫をつれてゆけとおつしやいました。私は生命(いのち)のやりとりがあまり好きではないのです。熊襲建兄弟を殺した時も、あまりい丶氣持はしませんでした。私は熊襲建兄弟を嫌つてはゐませんでした。一目見た時も、聞きしにまさつた勇士だ、話せる男だと思ひました。ひどいこともしたでせう、しかし面白い處のある男と思ひました。殺した時私は勝利の喜びよりも、喜びによつてゐる時に殺したことをすまなく思ひました。あまりい丶氣持はしませんでした。すぐあとで自分の手柄を思つた時には心が勇みました。だが今だに思ひ出すと、氣の毒な氣がします。私は彼等を心からは憎めません。逢つて見ると皆人のい丶奴です。殺す程のことはないと思ひます。それにあの死の怖と云ふ奴を私はよろこびません。私は都にゐて、橘姫と花を見たり、歌をつくつたり、鳥や獸お

いかけたりして、靜かな樂しみに醉ひたいと思ひます。私はこんなに強く生れなかつたら、もつと安らかに生きてゆかれたでせう。

倭姫。だがそなたは安らかな一生を恐れ、持つてゐる力を一生出すなと云はれたら矢張り我慢が出來ないでせう。そなたの内に燃えてゐる若さは、いくら苦しくも戰ひをのぞんでゐるのでせう。そなたの血は花にようだけでは滿足が出來ないでせう。戰ひにゐらつしやい。そして大きな手柄をしてゐらつしやい。

尊。私は私の内に燃えてゐる火を恐れます。私は一寸の怒りで兄さんを殺したことがあります。あの時も兄さんを殺す氣ではなかつたのです。兄さんが父上の命をきかずに美しい女を自分のものにし、他の女をかはりに父上に捧げたことを、私は皆と笑つたのです。父上とも笑ひました。兄さんとも笑ひました。しかし兄さんはあまりに意氣地がなくつて父上が兄上と和解なさらうとなさつてゐるのを何處までも疑つて、逃げやうとするその卑怯がむら〳〵と腹が立ちました。私は兄さんを一つきつくと兄さんは二三間もとばされて石に頭をぶつけて死んでしまつたのです。私はそれでもその時兄さんを氣の毒だとは思へませんでした。思へたのは怒が靜まつた時です。あのことがあつてから父上は私の死をのぞんでゐられるのです。私は亂暴一方のものではありません。たゞ卑怯が嫌ひです、だまされるのが嫌ひです。父上が涙をながして、本氣になつてお前より他、東夷を征罰出來るものはない。氣の毒だが行つてくれた、のむ、お前許りに苦勞をさせて本當に氣の毒だがと云つて下されば、私だつて男です。火や水のなかを恐れずにゆきます。御心配下さいますな。私が自分の身をすてゝも御心をやすめますと異心か

ら云ひます。ですけど私を殺さうと思つて甘言をもつて瞞されては私だつていゝ氣持はしませんん。嫉樣だからこんなことを云ふのです。私の心を察して下さい。

倭姬。それはお前のひがみと云ふものだよ。お父さんが皆のゐる前で、そんな女らしいことが云へるものかね。又そんなことを云つたら皆がなほお前をねたむにちがひないよ。妾は兄さんの心は知つてゐる。そなたの思ふやうな氣の小さい方ではない。そなたは氣をまわしすぎる。それはひがみと云ふものだよ。男らしくない。妾が保證するから戰爭へ行つて大きな手柄をしておいで、それに父上からあのそなたの好きな素盞嗚の尊が八岐の大蛇を退治て、その尻尾からとり出された叢雲の劍を、そなたが行つたら秘密にわたしてくれと云ふお使もあつた程だから。

尊。それは本當ですか。

倭姬。本當とも。

尊。あの劍を、あの叢雲の劍を私にやれとおつしやつたのですか、父上が。

倭姬。さうだよ。だけど皆に云つてはいけないよ。秘密に渡せとおつしやつたのだから。今持つて來て上げるよ。(退場)

(尊涙ぐまれ歩きまわる倭姬登場)

倭姬。さあ、之が叢雲の劍だよ。だが跪いて父上におわびしなければ上げられませんよ。

(尊跪つかれる)

尊。父上。本當にすみませんでした。私はなんと云ふ賤しいひがみをする男で御座いませう。お許し下

さい。私は必ず東夷(あづまえびす)を退治ます。私は死んでもかまひません。この寶劍を下さる程私を愛してゐて下さるのを知つた以上は何もいりません。命もいりません。

倭姫。それでよろしい。それならはこの劍をおさしなさい。之をもつてお戰ひなさい。

(尊、劍を戴き、ぬいて見る)

尊。姨様。ありがたう御座います。私は之で喜んで、ありがた涙を目にためて戰場にゆけるやうになりました。今度の戰にも必ず勝ちます。そして無事で歸つて來ます。

倭姫。本當に油斷をしないでね、身體を大事にしてね。そして勝つて歸つてきておくれ。

尊。えゝ。勝つて歸つて來ます。それなら之で失禮します。

倭姫。橘姫によろしくね。

尊。橘姫もどんなによろこぶでせう。

(二人退場。まもなく倭姫登場、侍女ついて來)

侍女。あの寶劍をだまつて尊におあげになりましてもおよろしいのでございますか。

倭姫。安心おし、お兄さんがお怒りになつたら妾の首でもよろこんであげるよ。あの日本武尊があんまり可哀さうだからね。だけど兄さんだつてそんなわけのわからないことはおつしやりはしないよ。愛してはゐらつしやるのだから。たゞはたがなか〳〵面倒なのだよ。何しろいろ〳〵の御兄弟や、女の人がゐるのだからね。日本武尊を猜んでゐる人も澤山ゐるのだからね。何しろあの子も之から大變だよ。いつまでも赤坊ぢやゐられないよ。(退場)幕。

第二場

（旅の宿、橘姫の一人ゐる處に尊登場）

橘姫。どうでした。姨様は御元氣でゐらつしやいましたか。

尊。あゝ、元氣でゐらしつしたよ。

橘姫。あなたは大變よろこんでゐらつしやるやうね。何をそんなに喜んでゐらつしやるの。何かいゝお話でも御座いましたの。

尊。あゝ、いゝ話があつた。この上なくいゝ話があつた。

橘姫。奇麗な女の方でもゐらつしたの。

尊。奇麗な女はこゝにゐるよ。

橘姫。冗談ではありませんわ。本當のことをおつしやつて下さい。

尊。この俺の持つてゐるものが何んだか知つてゐるか。

橘姫。大變立派なふくろで御座いますね。いゝ刀を下さいましたの。

尊。いゝ刀と云つただけでは話にならない。この刀は誰が持つてゐた刀か知つてゐるか。

橘姫。存じませんわ。

尊。この刀は、俺の一番好きな、俺の一番尊敬してゐる方の手にふれた刀だ。

橘姫。そんなにこの刀がおうれしいの。妾よりもこの刀の方がおうれしいの。

尊。どつちと云つていゝかわからないよ。この刀こそ、お前も子供の時から聞いてゐるたらうが、叢雲の御劍なのだ。父上が内證で俺に下さつたのだ。このひねくれた、ひがみ根性の强いこの俺に下さつたのだ。

橘姬。之があの御劍で御座いますの。

尊。さうだ。之が素盞嗚命が八俣大蛇を退治て得られた刀だ。そして天照大神に捧げられた刀だ。神武天皇もこの刀をお用ひになつた。その刀を下さつたのだ。これでゞどの位ゐ父上が俺を愛してゐて下さるかゞわかるだらう。俺は死んでもいゝと思つてゐる。

橘姬。本當に、ありがたい御心ですわね。

尊。それなのに俺は父上を疑つたのだ。私を憎んでゐらつしやると思つたのだ。殺さうと思つてゐらつしやると思つたのだ。お前もよく云ふやうに俺はひがみが强すぎる。自惚が强すぎるので誰からも猜まれてゐるやうな氣がするのだ。しかし父上の心を疑つたのはわるかつた。俺はもうよろこんで父上の御命じになる處は何處でもゆく。父上は俺でなければ出來ないことを知つてゐらつしやるので、愛してはゐらつしやるのだが、戰におつかはしになるのだ。そして俺がいろ〳〵のものに猜まれるのを恐れて俺にわざとつれなくされるのだ。姨樣はそのことをよく話して下さつた。それで俺にも合點がいつた。もう誰にも不平は云はない、俺は俺でなければ出來ない仕事をするのだ。そして俺にはこの劍とお前がゐる。俺程、仕幸なものが何處に居やう。俺は今度の戰にも易々と勝つて見せる。俺はもう嬉しくつて仕方がないのだ。道々涙が出て困つた。お前にこの話を聞せたらどんなによろこんでくれ

るかと、それ許り考て走つて來た。

橘姫。本當にありがたう御座います。妾も涙が出ましたわ。本當に勿體ないわ。妾もあなたの爲によろこんで死にますわ、ですから妾許りを愛して頂戴ね。

尊。俺がお前をどの位ゐ愛してゐるか、それは天下の人が知つてゐる。皆、澤山の女を自分のものにして得意でゐるのに俺一人、お前だけを可愛がるので、皆笑つてゐる。俺をあまい人間だと云つてゐるしかし笑ふ奴は笑ふがいゝ。俺はお前を愛してゐるのだから。

橘姫。本當に妾もそれでどんなに喜んでをりますでせう。ですけど、あなただつてあてにはなりませんわ。それで妾、心配してゐましたの。其處へあなたがあまりよろこんで歸つてゐらつしたので妾はすぐ氣をまわしましたの。

尊。馬鹿な奴だ、しかしこんな嬉しいことはないだらう。

橘姫。本當に。

尊。御劍を拜見さしてやらう。俺もまだよくは拜見しないのだ。(うや／＼しく袋から出し、柄をにぎり)この柄は曾つて素盞嗚の尊の御手にも、天照大神の御手にも、神武天皇の御手にもふれたのだ。そしてこの俺の手にもふれるのだ。この握り心地のよさはお前の腕のやうだ。(ぬき一心に見)見ろ、この刀のぬく處には雲がむらがると云はれてゐるのだ。この刀を見ては、俺は俺の仕事をやり通さなければおかない勇氣が燃える。(ふつて見せ)どうだこの俺はこの刀をもつのに適した人間とは思はないか。この刀こそ俺の爲につくられたやうな刀ではないか。

橘姫。そんなことをおつしやると罰があたりますよ。

尊。こわがることはない。今の時にこの俺が生れたのは神のおぼしめしだ。そしてこの劍を再びこの世に生かすことの出來る爲にこの俺が生れたのだ。見ろ、この劍を持つ俺の姿を。

橘姫。さ、もうおしまひなさつて下さいまし、勿體ない氣がいたします。

尊。（劍をしまはれながら）俺はこの劍とお前を持つてゐる。

橘姫。どうぞそんな比較はおよし下さい。

尊。あはゝゝ。怖がることはない。後ちの世までもこの劍とこの俺とお前は大和の國のほこりになるであらう。

橘姫。どうかそんな大きなことをおつしやらないで下さい。妾は自分の小さいのが目について困りますから。自分の價のないことがあまりよく見へますから。ですけど、妾お役に立つ時がくれば命でもよろこんで捧げますわ。

尊。俺の爲には生きてゐてくれゝればいゝ。死んでくれないでもいゝ。この劍をお前にあづけておく。俺は之から吉備武彦に逢つてあいつを喜ばしてやる。そして戰の相談をする。

橘姫。いつこゝをおたちになるの。

尊。明日の朝立たう。それではその劍をたしかにあづけておくよ。

橘姫。えゝ大事におあづかりしてゐますわ。姨樣は本當にいゝ方ね。

（尊退場、橘姫寶劍をだきながら見送る）幕

第三場

（美夜受姫の家の庭）

橘姫。お早やう御座います。

尊。お早やう。

橘姫。今朝おたちになりますか。

尊。今朝起つ。

橘姫。あの方をつれていらつしやるのですか。

尊。誰を。

橘姫。おとぼけになつたつて妾ちやんと存じてをります。妾は昨夜一睡もいたしません。

尊。道理でお前の顔色はよくないと思つた。

橘姫。つれていらつしやるの。

尊。つれてはゆかない。

橘姫。本當。

尊。嘘は云はない。

橘姫。嘘はきつとおつしやらない？

尊。云はない。

橘姫。あの方と何の話をしてゐらつしたの。
尊。あの方とは。
橘姫。こゝの娘の方と。
尊。美夜受姫のことか。
橘姫。さうで御座います。まさか妾の思つてゐることをまちがひとはおつしやりますまいね。
尊。怒るなら怒つてくれ。ぶつならぶつてくれ。お前の思つてゐることはまちがひぢやない。
橘姫。矢張り本當で御座いましたのね。
尊。戰爭にはつれてはゆかない。だが妻にもつ約束はした。
橘姫。妾なんかどうなつてもよろしいのね。
尊。俺はお前を愛してゐる。
橘姫。ですが、妾一人を愛してゐらつしやるのではないのですね。妾の傲や、妾の樂しみはすつかりこわれました。妾はもう生きてゐるのがいやになりました。あなた許りはと思つたのです。妾は自分だけを愛して戴けると思つたのは蟲のいゝ自惚だつたのですね。あなたもたゞの男の方なれば、妾もただの女でしたのね。
尊。許してくれ。俺はお前を愛してゐる。しかし美夜受姫を愛しないわけにはゆかなかつた。あの娘は子供だ。あの娘と話してゐると、戰爭のことも何にもかも忘れて、子供になつたやうな氣がするのだあの娘はお前を尊敬してゐる。お前を姉さんのやうに思つてゐる。

橘姫。それで妾にあの人を妹のやうに思へとおつしやるの。

章。思へなければ思へないでいゝ。腹を立てるなら腹を立てるがいゝ。泣くなら泣くがいゝ。俺は美夜受姫の姿を見たら愛しないではゐられなかつたのだ。お前を一目見て愛しないではゐられなかつたやうなものだ。

橘姫。妾は世界に一人の女ではなかつたのですわね。あなたにとつて。

章。この世には秋も春もある。お前は秋で、あれは春だ。お前は橘であれば櫻だ。お前がなんと云つても、その俺の考をまげることは出來ない。自分でもどうすることも出來なかつたのだ。

橘姫。あなたは今迄、嘘をついてゐらつしたのね。妾許りを愛してゐらつしやるつて。

章。嘘ぢやない。あの娘を見るまでは。

橘姫。あの方の何處がお氣に入つたの。あの方はお美しいかも知れませんわ。ですけどあの方は妾の半分もあなたのことを思つてはゐらつしやらなくつてよ、きつと。

章。それはお前の方が美しいだらう。そして賢いだらう。お前の方が心から俺を愛してゐてくれるだらう。俺はそれをよく知つてゐる。あの女を見た時ですら、俺はお前とあの女を比較してお前があれより美しく賢いのを知つて私かに喜んでゐた。しかしあの娘も捨てがたい處がある。豐かな丸味のある娘の身體つきは、俺の心をそゝつた。あの無邪氣な人のいゝ微笑が、俺の今迄知らなかつた。微笑を知らしてくれた。俺はそれに手向ふことが出來なかつたのだ。

橘姫。妾はそれを無理とは申しますまい。父上の血をついでゐらつしやるあなたに、一人の女を守れと

申すのは、申す方が無理でせう。ですけど妾は本當に心細いのです。生きてゐるのがいやになりました。妾はあなた見たやうな方を一人で占領してゐることをどんなに神樣に感謝しましたでせう。そして今日のやうな日の來ないやうに祈りましたらう。その妾の心も察して戴きたく思ひますわ。

尊。わるかつた。お前の心はよくわかる。俺もお前の爲には他の女を見むきもしないでよさうと思つてゐたのだ。お前がよろこんでゐる樣を見ると。しかし俺は昨日はどうかしてゐた。お前のことは忘れはしなかつた。俺はすべての男の人の眞似をするのはいやだつた。しかし俺は美夜受姫を見ると、どうすることも出來なかつたのだ。許してくれ。

橘姫。許すも許さないも御座いませんわ。それはあなた御勝手ですわ。妾には何にも申せませんわ。美夜受姫はそれは奇麗な方ですからお愛しになるのも無理とは申しませんわ。妾はもう國に歸ります。あの方を戰におつれ遊ばせ。

尊。橘姫！　それは本氣でさう云ふのか。お前は本氣で國に歸りたいのか。俺のそばにゐるのがいやなのか。そんなことはあるまい。そんなことを云ふのは恥ぢるがいゝ。俺は美夜受姫を戰爭につれて行つても足手まどいになるだけだと云ふことを知つてゐる。お前はそれを知つて俺を苦しめやうと思つてゐるのだな。美夜受姫は太平な御代の弄具だ。天叢雲の劍を持つことの出來る女ではない。お前は俺のそばにゐて俺の相談相手になつてくれなければいけない。お前がわきにゐてくれなければ俺がどんなによわるか、お前は知つてゐるぢやないか。俺が無理を云つて臣下に不平を抱かせる時、お前はいつも臣下をなだめてくれ、そして俺の威嚴の落ちないやうにしてくれてゐる。俺はそれを感心して

ゐるのだ。美夜受姫にはそんなことはとても出來ない。美夜受姫をつれて行けば臣下は益々不平を抱く許りだらう。たわむれること切り知らない美しい女を戰場につれて行けば結果がどうなるか、お前だつて知つてゐるだらう。俺はお前を片腕のやうに思つてゐる。あの天叢雲の劍をお前にあづけておけばこそ俺は安心してゐるのだ。怒らないでくれ、橘姫。お前の心は俺がよく知つてゐる。俺の心も知つて許してくれ。そして戰場について來てくれ。

橘姫。あの方はつれてゐらつしやらないのですね。

尊。つれて行かない。だからお前は來てくれるだらう。

橘姫。それなら行きます。御一緒に戰場で死にたうございますわ。

尊。それならすぐ立つことにしやう。用意をするやうに武彦等にさう云つてくれ。

橘姫。はい。（退場）

尊。あゝ。俺はこんなによわつたことはない。美夜受姫の奴は又來たな。女と云ふ奴本當にしまつによわる奴だ。だが可愛いゝ奴だ。憎みたくも憎めない。

（美夜受姫登場）

美夜受姫。お早やう御座います。

尊。お早やう。

美夜受姫。いつあなたはお起きになつたの。妾。ちつとも存じませんでしたわ。橘姫にお逢ひになつて。

尊。逢つた。

美夜受姫。怒つてゐらつして。

尊。あゝ怒つてゐた。本當に閉口した。

美夜受姫。今朝矢張りおたちになるの。

尊。たつ。

美夜受姫。本當？

尊。あゝ。

美夜受姫。妾のためにもう一日泊つて下さいな。

尊。そんなことはゆかない。

美夜受姫。それなら妾を戰爭につれて行つて下さつて。

尊。戰爭は面白い處ではないよ。

美夜受姫。それでも橘姫をつれていらつしやるのでせう。

尊。あいつは男まさりの奴だから。

美夜受姫。妾だつてまけませんわ。あなたのおそばならどんな處でもついてゆきますわ。

尊。お前をつれてゆくわけにはゆかない。お前はこゝで待つてゐなければいけない。俺はすぐ歸つて來てやる。

美夜受姫。妾をどうしてもつれて行つて下さらなければいやですわ。いつ歸つてゐらつしやるかわから

ないのに、こゝで待つてゐるのはいやですわ。
韋。そんな無理なことを云ふものぢやない。
美夜受姫。だつて夫のあとをついてゆくのがわるいわけはないでせう。妾、お邪魔なんかしなくつてよ
あなたのお顔さへ見てゐればいゝのですから。
韋。お前は矢張りこゝにゐて待つてゐてくれなければ困るのだ。
美夜受姫。それならもう二三日泊つて行つて頂戴ね。ようございましよ。
韋。そんな無理なことを云ふものぢやない。
美夜受姫。それなら妾にはもう用がおありにならないのね。妾をうれしがらせて、妾を弄あそんで、そ
して妾をおすてになるお心算なのね。妾はどうしてもついてゆきますからよろしいわ。
韋。そんな駄々つ兒のやうなことを云ふものぢやない。お前はこゝに待つてゐなければいけない。きつ
と歸りによる。命さへあれば、
美夜受姫。それがあてになりませんわ。それに妾もう、あなたとわかれては生きてゐる氣がしませんわ
是非つれて行つて頂戴、いゝでしよ。妾、之でもさう臆病ぢやありませんわ。あなたの足手まといに
はなりません。
韋。それはいけない。お前はまだ若い。
美夜受姫。それでも、妾、あなたと別れては生きてゐる氣がしませんもの。あなたに今捨てられたら妾
一生すてられるやうな氣がしますわ。

尊。俺の云ふことを信用おし。俺はそんな嘘をついたり、氣休めを云ふやうな男ぢやない。俺の一度云つたことを取消すやうな男ぢやない。一度つれてゆかないと云つたらつれてはゆかない。今朝立つと云つた上は今朝立つ。いくらお前が泣いても笑つても俺は自分の云つたことを變へることは出來ない。

美夜受姫。それなら妾がこんなに申してもおきゝ入れはないのですね。

尊。きかない。そのかはり、歸りによつて都につれて歸る。

美夜受姫。本當？　あなたは嘘はつかない方ね。

尊。嘘はつかない。

美夜受姫。妾はあなたを疑ひはしません。しかしあなたは女に化けて熊襲建をお殺しになり、出雲建をぬけない劍でおだましになつてお殺しになつたのでしよ。妾もあなたにだまされて殺されさうな氣がしますわ。

尊。馬鹿。お前は敵ぢやない。荒くれ男ぢやない。お前はこの上なく可愛いゝ奴だ。こんな奴を忘れたくも忘れることは出來ない。嘘つきたくも嘘つくことは出來ない。お前をこゝに殘しても、お前のことはたへず思ひ出すだらう。昨夜の喜びは一生忘れたくも忘られはしない。

美夜受姫。それならば妾。そのお言葉を信用しますわ。ですから歸りにきつとよつて頂戴ね。

尊。それは必ずよる。

美夜受姫。それでその時は本當に妾を妻として都につれて行つて下さいますわね。

章。きつとつれて行つてやる。お前もそれ迄他の男のことを思つてはいけないよ。俺のことだけ思つておいで。

美夜受姫。それは思つてゐますわ。いくらあなたが、橘姫と御一緒にゐらつしやるのだと思つても。女はつまりませんわね。妾、こんなによく云ふことをきゝましたからね。あなたも一つ云ふことを聞いて頂戴な。それさへ聞いて下されば妾本當にあなたに愛して戴いてゐると思つて安心しますわ。

章。なんだ。

美夜受姫。きつと聞いて下さいますか。

章。きけることなら聞いてやる。

美夜受姫。聞けることではつまりませんわ。

章。聞けないことは聞けないおぢやないか。早く云へ。

美夜受姫。妾の爲に聞けないことを無理に聞いて下さつたつていゝと思ひますわ。さう無理なことおやないのですから。

章。なんだ。云へ。

美夜受姫。聞いて下さつて。

章。云へ。

美夜受姫。聞いてやるとおつしやい。さうすれば申しますわ。

章。今に橘姫がくる、云ひたいことがあれば早く云へ。

美夜受姫。橘姫がそんなにお怖いの。
尊。うるさいからだ。早く云へばいゝぢやないか。
美夜受姫。妾云ひますわ。ですが云つた以上は聞いて戴かなければいやよ。
尊。なんだ。
美夜受姫。今晩一晩、妾の處に來て下さい。さうすれば明日妾、元氣におわかれします。きつと何にも苦情は申さず、笑ひ顔でおわかれします。
尊。それはいけない。皆にもう今朝たつ命令を下した。その命令をお前一人の爲にやぶることは出來ない。俺の命令はいくら俺でも取り消すことは出來ないのだ。お前は知らないが、大將軍だから何んでも我儘を通しいゝと云ふことはない。大將軍はなほさら皆の意志に隨はなければならないのだ。皆に不平を起されたらいくら俺でもどうすることも出來ないのだ。
美夜受姫。それだつて一晩位は。それにもし之で二度とお目にかゝれないのかも知れませんもの、どうぞ一晩だけはね。さもなければ妾が可哀さうよ。
尊。そんなことを云ふものぢやない。俺だつてお前の傍をはなれたくはない。しかし仕方がないのだ。そのかはり一日でも早く歸つて來てやる。
美夜受姫。妾、本當に悲しくなりました。
尊。お前はどうしてさう、わからずやなのだ。そんなことは云ふものぢやない。御覧、橘姫が武彦をつれて來た。

美夜受姫。皆、立つ用意をしてゐますのね。いよいよもう御別れなの。妾、どうしたらいゝのでせう。

（尊の胸に泣きふす）

（橘姫、武彦登場。尊、美夜受姫を無理にはなす）

橘姫。御出立の用意が出來ました。

尊。さうか。武彦。皆の用意はいゝか。

武彦。はい、皆尊のお立ちを待つてをります。

尊。それならすぐ行く。

美夜受姫。矢張りすぐお立ちになるの。

尊。すぐ立つ。

美夜受姫。妾は御一緒に行つてはいけませんか。

尊。いけない。

美夜受姫。（橘姫にすがりつくやうに泣きながら）あなたから妾をつれて行つて下さるやうにおたのみして下さい。

橘姫。戰爭は面白いものでは御座いません。

美夜受姫。妾を妹にしてつれて行つて下さいまし。

橘姫。妾の力ではどうすることも出來ません。

美夜受姫。どうぞお願ひですから。

尊。美夜受姫、そんな子供らしい態を見せてはいけない、一度つれてゆけないと云つた以上はどんなことをしてもつれてはゆかない。もし之以上つれて云つてくれと云つたら俺にも覺悟があるぞ。

美夜受姫。どんなお覺悟があるの。お殺しになるならお殺し下さい。

（沈默、美夜受姫發作的に泣く）

尊。泣くのはよせ、俺の門立ちに泣くのはよせ。

橘姫。ね。お泣きになるのをおよし遊ばせ。

（美夜受姫一層泣く）

尊。橘姫！　ほつたらかしておけ。武彦．それならすぐ出立の用意をすることにしやう。俺もこんなによわつたことはない。女にはもうこり〲した。野山でも歩いたら胸がすくだらう。さあ行かう。

（美夜受姫、更に泣く）

美夜受姫。あなたは妾をおすてになるおつもりなのね。

尊。歸りにはきつとよるよ。泣くものぢやない。

（尊、美夜受姫を慰めやうとして橘姫と顔をあはせ、何げなく退場しやうとする。武彦、橘姫それに從ふ。美夜受姫泣きながら一人はなれてあとをつかうとする。）幕。

第三幕

第一場

（山道、樵夫木を切つてゐる。相武の國造の侍、 入登場）

侍。おい。

樵夫。へい。何の御用です。

侍。お前にいゝ話をきかせてやる。

樵夫。何で御座います。

侍。お前が俺の云ふ通りにすると褒美を殿様から下さるのだ。

樵夫。どんなことをいたせばいゝのですか。

侍。わけないことだ。お前があの沼の方を見てぼんやり立つてゐるのだ。そして唾を目につけて泣いてゐるやうな顔をしてゐるのだ。

樵夫。へい、妙なことをいたすのですね。

侍。すると今に殿様がこゝに一人の立派な若者をつれてお通りになる。そしてお前を御覧になり、お前は何を泣いてゐるとおつしやる。その時お前は誠らしくあの沼の主（ぬし）に私の娘が喰はれましたと云ふのだ。又やられたかと殿様はおつしやるだらう。その時、本當にあの主には困ります、どうすることも出來ませんからと云ふのだ。するときつと一緒にゐる若者が主（ぬし）とはどんな主だと云ふやうなことを聞くだらう。その時長さが五尋あつて太さがこの位ゐある龍だと云へ。きつと殿様がうまく相槌をおうちになるだらうから、何處までもすまして、本當らしく饒舌るのだ。いゝか、それがうまくいつたら

褒美をやる。だが出來損なつたらお前の首をもらうぞ。

樵夫。畏まりました。ですが何の爲にそんなことをなさるのです。

侍。それは一緒にゐる若者を殺す爲なのだ。その若者と云ふ奴は恐ろしく强いのだ、又恐ろしく亂暴な男なのだ。自分の兄をつかみ殺して四つにへしおつて菰につゝんで投げすてたと云ふやうな男なのだ。だから用心しないといけない。

樵夫。恐ろしい男もあつたものですね。何處のものなのです。

侍。都の者なのだ、見かけは立派で美しい顏してゐるが、心は恐ろしい男なのだ。それで實は京のある貴い方から、殿様に密使があつて、うまくかたづけてくれたら褒美は望にまかせると云ふ御話があつたのだ。殿様も褒美も褒美だが、自分のお世話になつた方からのおたのみなので、どうかして殺したく思つてゐらつしやるのだ。しかし何しろ恐ろしい男で、どんな强い奴も其の男には叶はないのださうだ。それであの沼におびきよせて、風かみから火をつけて燒き殺さうと云ふお考なのだ。もう用意は出來てゐるのだ。殿様からも沼の主のお話を其男にしてあるのだ。しかしお前の口と殿様の口とちがうといけないから、お前にうまくやるやうにたのむのだ。承知だらうな。

樵夫。そんな惡ものが燒かれるのはなによりすきです。きつとうまくやります。そして燒かれる樣をこゝで見てやりませう。

侍。それならたのんだぞ。すぐお見へになるから。

樵夫。承知しました。

（侍。退場。樵夫、木を切るのをやめ、し切りと國造なぞのくるのを待つてゐる。來るかと見に行つたり、泣き眞似の稽古したりしてゐる。急に何か見つけたやうに、あはてゝ侍に云はれたやうに泣き眞似をしてゐる。尊、國造と登場）

尊。隨分風が吹くな。

國造。左樣で御座います。

尊。冬枯の景色は面白いな。

國造。左樣で御座います。

尊。沼はまだ遠いかな。

國造。あすこまでゆけば見へます。

尊。あすこで誰か泣いてゐるやうだな。

國造。あゝ、あれは正直ものゝ樵夫です。何を泣いてゐるので御座いませう、これ、これ、お前は何を泣いてゐるのだ。

樵夫。あゝ、お殿樣で御座いますか。失禮な處をお見せしました。

國造。何を泣いてゐるのだ。

樵夫。またあの沼の主が出まして今度は私の娘を喰べてしまひました。

國造。又か。それはさぞ力をおとしたらう。

樵夫。はい、もう生きてゐる氣はいたしません。どうかして娘の敵を討つてやりたいと思つてゐますが何しろあの主にあつてはどうすることも出來ません。

國造。それはさうだ。あんな主は人間の力ではどうすることも出來ない。素盞嗚尊のやうな方でなければどうすることも出來ないのだから。

尊。お前の娘があの沼の主にやられたのか。

樵夫。へい。

尊。それはさぞ力をおとしただらう。お前はその主を見たことはあるのか。

樵夫。御座います。一度御座います。あんまり恐ろしいので腰をぬかしました。何しろ長さが五尋もあり、太さがこの位も御座いますのですから。

尊。誰も退治るものはないのか。

樵夫。とても〳〵あの沼までさへ誰もゆくものは御座いません。あの沼に近づけば主の祟があると云ふ話で御座いますから。

尊。お前の娘はいくつだつた。

樵夫。十五になりました處です。

尊。いつ喰はれたのだ。

樵夫。一昨日で御ざいます。

尊。それは氣の毒なことをした。もう四五日早くその話を聞いたら俺が退治てそんな目には逢はせないでやつたのに。

樵夫。それはとても駄目なことで御座います。

尊。いや〳〵、俺はその主を退治て、皆に安眠を得さしてやる。

國造。それだけはおやめになる方がいゝと思ひます。あなたのやうな貴いお身體で。

尊。いや〳〵、俺はもう決心した。罪のない人間をとつて喰ふと云ふ主は生かしてはおけない。俺の耳にその話が入つた以上、俺はそれを退治て見せる。

國造。しかし相手が相手ですから、いくら天が下に敵のないあなたのお力でも、之許りはおやめになつた方がいゝだらうと存じます。

尊。あの沼だな。主がゐると云ふのは。

樵夫。左樣で御座います。

尊。それならお前達はこゝで待つてゐろ。俺は一人であの沼の處にゆく。

國造。それはどうぞ、おやめなさつて下さいまし、御大事なお身體に萬一のことが御座いましたら。

尊。安心するがいゝ。俺の身體には何か知らない力がのりうつつてゐる。その力は俺を今殺すやうなことはしない。俺は今迄だつて無理を通して來た。皆がとめることを俺は平氣でやつて來た。俺はあんな小ぽけな沼の主におどろいたと云はれることは好まない。又罪のない人間にあだするものを見のがすわけにはゆかない。俺にはお前達のとても感じられない神がついてゐられる。俺はまだ死ぬ人間ではない。安心してゐるがいゝ。

國造。それでも、素盞鳴尊のやうな神樣ならいざ知らず、いくらお强よいと云つても。

尊。俺は人間だと云ふのだらう。だが俺を守護してゐるものは人間ぢやない。もう止めるな。俺はゆく

國造。それならば萬一のことが御座いましても。
尊。安心するがいゝ。あの沼にゆくのはこゝをゆけばいゝのか。
樵夫。左様で御座います。
尊。それなら一寸行つてくる。（退場）
（國造と樵夫見合はせる。國造樵夫に褒美をやる）
樵夫。ありがたう御座います。自惚の強い方で御座いますね。
國造。あゝ云ふ男は自惚れさすにかぎる。自分の生命がもうすぐなくなるのを知らないで勇んでゆく。敵は沼にゐるのではなく、こゝにゐるのを知らないのだ。あれを燒き殺すのも、もうぢきだ。
樵夫。馬鹿な男で御座いますね。そんな龍が本當に居たら、退治るつもりでゐるのでせうか。
國造。それは退治る心算だらう。あれは素盞嗚尊をもつて自分を任じてゐるのだ。龍を退治て後世に名をのこして見せるつもりでゐるのだ。後世のもの笑はれになることを知らないのだ。足の早い男だ。もうぢき沼につくだらう。少しも足がふるへてゐない。あれの自惚は何處まで大きいかわからない。今に燒き殺されることを知らないのだ。あはゝゝゝ。
（以前の侍登場）
侍。殿様、うまくおやりになりましたね。
國造。どうだうまいだらう。もう袋の鼠だ。風の向きもいゝ。草は枯れてゐる。手はづはもういゝだらうな。

侍。もうちやんと用意が出來てゐます。あなたの命令のおりるのを待つてゐます。

國造。よし、俺もゆく。あれが沼に立つて眞拔な顏をしてゐるのを見たらすぐゆく。

侍。あすこにゆきますね。隨分强さうな方ですね。

國造。恐ろしい者が生れたものだね。だが智慧が足りない上に、自惚が强いのがあれの身の破滅なのだ。

侍。よくあの方を一人、さそひお出しになりましたね。他の奴はどうしてゐるのです。

國造。沼の主を退治ると云へば皆とめるにちがひない。それであれは皆に內證で庭に出て裏口からそつと出て來たのだ。それがあれの不運な處だ。

侍。本當にうまくおやりになりましたね。

國造。之で俺も出世が出來ると云ふものだ。その時はお前を重く用ひてやるぞ。

侍。ありがたう御座います。

國造。この頃は雨が少しも降らなかつた。今日の爲に降らなかつたやうなものだ。

侍。本當で御座います、草は十分に乾いてゐます。風はおあつらひ向に吹いてゐます。

國造。倭一の猛く强き人は今月今日燒け死ぬのだ。俺は日本一の智慧者になる。俺は熊曾建や、出雲建とはわけがちがう。

侍。お喜びを申します。

國造。もう喜んでもらつても早やすぎるとは思はないぞ。あれは沼の處に行つた。俺もそろ〳〵味方の

居る庭に行かう。そしてあれを燒き殺してやる。今晩は勝ち戰のお祝ひだ。あの橘姫にねやのとぎでもさしてやるか。

侍。それも御心のまゝで御座いませう。

國造。そんなら行かう。

（國造、侍、早足で退場）

樵夫。あの男はまぬけな顔して沼を見てゐる。自分の燒かれることを知らないのだ。可哀さうと云へば可哀さうだが、自業自得と云へば自業自得だ。あはゝゝ沼の水を棒でかきまぜてゐるな。石を沼にたたきこんでゐるな。あはゝゝ、馬鹿な男だ。もう殿樣は野原のなかに入つて行つたらう。この風に、あの原に火をつけられたらたまるまい。眞黑こげになつてしまふだらう。あの男は何も知らずに沼許り見てゐる。隨分馬鹿ものだな。石の上に腰かけてだまされたとも知らず沼を見つめてゐる。あつ。いよ／＼火をつけたな。おゝよく燃える。よく燃える。それなのにあの男は何も知らずにまだ沼を見てゐるな。氣がついたと見へるな。立ち上つたぞ。あの男は逃げずに火の方を睨んでゐるな。睨むより逃げればいゝのに。だがもうかうなつては助かりやうはない。あゝもう煙で何にもかも見へなくなつた。可愛さうにあの男はまる燒になつた。あんまり自惚れたのでこんな目にあふのだ。皆よろこんでゐるな。風上にゐるので安心して手をうつてよろこんでゐる。この位ゐ危險のない戰はないな。おや、不意に風の方向がかはつたぞ。さあ大變だ。皆逃げる、逃げる、だがおいつくまい。とう／＼皆烟にまかれたぞ。どれ皆にこのことを知らしてやらう。（退場）

（まもなく橘姫、武彦、他に三四人登場）

武彦。山火事で御座います。

橘姫。本當にひどい山火事ですね。それにしても尊は何處にゐらつしやるのだらう。

武彦。本當に何處にゐらつしたのでせう。

橘姫。國造と一緒に庭にお出になつた切り歸つてゐらつしやらないのだ。國造も。あの國造はあまりおべつかつかひで妾は氣になつてゐた。もしものことがあつたらどうしやう。

武彦。大丈夫で御座いませう。他の方とはちがひますから。

橘姫。あの御劍を內證でお持ちになつた處を見ると何か退治にでもゐらつしたのではないか知らん。あゝ妾はあの山火事が氣になり出した。もしあの山火事のある處に獵でもなさつてゐらつしたら。

武彦。まさかそんなことは御座いますまい。

橘姫。妾は胸騷きがして來た。大丈夫だらうね。

武彦。大丈夫で御座いませう。

橘姫。それにしてもひどい山火事だね。

武彦。何しろこの日照りつゞきに、この風ではたまりません。

橘姫。本當だね。尊にこの火の海をお見せしたら、美しいのにおよろこびになるだらう。何處にゐらつしやるのだ。誰か早くさがして來ておくれ。このありさまを見せて上げたいから。早くさがして來ておくれ、さがして來たものには褒美を上げるよ。この曲玉を一つあげるよ。早くさがして來ておく

れ。この火の消えない内に。早く、早く、妾は心配になつた。

二三人の人。畏まりました。

橘姫。大丈夫でせうね。あつ。あすこから尊がゐらつしやる。妾は生きかへつた。（狂喜し合圖する）

（尊、いそいで登場。默つて橘姫を抱く）

橘姫。何處にゐらつしやいました。その御風は。

尊。あの火の內から來た。

橘姫。あの火の內から。

尊。さうだ。

橘姫。あの火の內から、それでよく。

尊。さうだ。あの火の內から來た。自分でも生きてゐるのが不思議なのだ。なぜ燒け死なゝかつたか、自分でも不思議なのだ。國造の奴が俺をだまして沼におびきよせて、俺の油斷を見すまして風上に火をつけたのだ。火は俺の方に向つて風に吹きたてられて俺を一のみにしやうとして來た。見ろ。俺の髮の毛は燒け、俺の眉毛さへ燒けた。息がつまつてまさに俺は倒れやうとした。だが俺はとても自分でも想像が出來ない程早くこの刀で近かくにある草をなぎた。火が近づくことが出來ないやうに。だがそれがなにゝなる、火はます／＼俺に近づいて來た。俺はこゝで死ぬのだなと思つた。だが俺は戰ふだけ戰つてやらうと思つた。人間に向つてゞはなく、火に向つて。

橘姫。それでどうなさりました。

尊。自分でもわけがわからなかつた。たゞ死力をつくして草を切つた。その時だ。その瞬間だ。俺が火に一なめされさうになつたその瞬間に、風は方向を變じた。今迄こつちに向つて來た火は、恰かもこの俺を殺すのを恐れるやうに、この刀に手向ふことを恐れるやうに不意に逃げ出した。俺はあまりに不思議なので暫くの間ぼんやりしてゐた。今迄俺を殺さうと思つてゐた者はまたゝく暇に烟にまき込まれ、火になめられた。國造も必ず死んだにちがひない。俺はその有様を見てぼんやりしてゐた。俺は自分の着物に燒けこげが出來、處々に燒けどをしたのも氣がつかずに、この思ひもよらない出來事の前におのゝいた。俺は跪いた。俺の目は涙にぬれた。俺を助けてくれたものは誰だ。俺に手向ふものを殺したものは誰だ。俺は何と云ふことなしに恐ろしくなつた。俺はこんなへんな氣になつたことはない。あまりに不思議だ。

橘姫。本當によう御座いましたね。

尊。いゝと云ふだけではもの足りない。言葉には顯はせない感じだ。こんなことはこんな思ひもよらないことで生命が助かつたものより他の人にはわからない感じだ。嬉しいのか、恐ろしいのか、わけがわからない。身震ひしていゝのか、喜び勇んでいゝのかわからない。俺は一たいに運のよすぎる男だ、だが今度のことは考へたゞけでも恐ろしい。俺を敵の術におとし入れて、敵を亡ぼさしたものは誰だ。

橘姫。この天叢雲の劍の御威光ですね、きつと。

尊。さうかも知れない。だがさう簡單に云つてしまうのも畏ろしい。さ。館に歸らう。そして今日生命

をひろつたことを神に感謝しやう。

橘姫。本當によう御座いましたわね。

尊。俺は恐ろしいよ。

橘姫。あなたにはきつと何かついてゐるのですよ。

尊。俺もそんな氣もする。しかしそれを信じるのも、信じないのも恐ろしい。

橘姫。燒けどは痛くは御座いませんか。

尊。ぴり〳〵する。だが反つて心地がいゝ。さあ。行かう。皆よろこんでくれ。

橘姫。本當によう御座いましたね、妾は本當に心配いたしましたわ。もしあなたが燒け死んだら、妾は今時分どうしてゐるでせう。（皆を顧み）よかつたね、本當に。

武彦。本當によう御座いました。不思議なことも御座いますものですね。

橘姫。本當だね。妾、本當に嬉しいよ。

（皆退場）幕。

第二場

（海岸。砂丘。船頭數人立つて海を見る。荒模様）

船頭一。矢張り、この荒に舟を出すのかね。

船頭二。出すのださうだよ。どんなことをしても船を出せとおつしやつたさうだ。

船頭三。もの好きにも程があるな。海のことはこつちに任せるがいゝのだ。
船頭一。さうとも、こんな日に出たら碌なことはない。己れは女をかゝへてだまつて坐つてゐればいゝのだが、こつちこそ迷惑だ。
船頭二。何にもこんな日に好んで舟を出さないでもよささうなものだ。あの雲を見ろよ。今にもつと荒れるぞ。
船頭三。まあ無理にも舟を出して見たけりや、出して見るもいゝさ。後悔するのは目に見へてゐる。
船頭四。(艫をもつて出てくる)早くしろよ。御機嫌がわるいぞ。
船頭一。この荒に舟を出さうとは物好きぢやないか。どうせ碌なことはない。
船頭四。今文句は云ふなよ。陸ぢやとても叶はねーからな。文句があれば舟にのつてからにしろよ。船にのればこつちの世界だからな。(砂丘を下りてゆく)
船頭三。あいつの云ふ通りさ。船にのつてこつちの云ふことを聞かなけりや。船をどうすることも出來ないからな。陸の上では威張らしておくさ。
船頭一。それがいゝ。
船頭五。(登場)もう用意はいゝかね。用意がよけりやさう云つてくるぞ。
船頭四。(上つて來ながら)もういつでもいゝよ。
(船頭五退場)
船頭二。陸ではこつちの云ふことを聞かなけりや、海の上で云ふことを聞かして見せる。こつちが舟を

出さないがいゝと云ふのを無理に出せと云ふのだから、出てからどんな目にあつたつてこつちの知つたことぢやねー。

船頭四。いくら强いか知らねーが、あんまり大きなことは云はねーがいゝのだ。

船頭一。さうとも〳〵。

（尊、橘姫、武彦その他船頭五について登場。砂丘に立ちどまり）

橘姫。随分荒れてをりますね。

尊。この位は荒れなければ海も面白くはない。

橘姫。妾はなんだか氣になりますわ。

尊。安心してゐろ。俺には何かゞ味方してゐる。俺には無理と云ふことはない。何んでも俺の云ふことを聞かないものはない。海だつて俺の云ふことは聞く、安心するがいゝ。俺が九州から歸る時にはもつとひどい荒だつた。だが舟を無理に出すと同時に海は靜まつた。それは不思議な位ゐだつた。その時はたゞ天候が不意に變つたとしか思はなかつた。しかし今思へばそれは俺が舟にのつたからだ。

橘姫。あなたは本當にこの頃どうかなさりましたわ。妾は心配でなりませんわ。今迄は畏れると云ふことを知つてゐらつしたが、この頃は少し自分の力を信じ過ぎてゐらつしやいます。海をお畏れあそばせ、さもなければ海は怒ります。

尊。海を恐れて見ろ、海はつけ上るぞ。なんでも押えつけないとつけ上るものだ。力のあるものに力のないものは從ふのがあたりまへだ。俺は神の子だ。父も俺のことを神人だとおつしやつた。この頃そ

のお言葉がはつ切り感じられる。今迄はたゞおだてる爲におつしやつたのだと思つたが。安心するがいゝ、怖がることはない。見ろ、風も少しやんだやうぢやないか。

（風強く吹く）

橘姫。そら御らん遊ばせ。風は強くなりました。

尊。お前が心に恐れを持つので、風の神がつけ上るのだ。

橘姫。そんなことをおつしやるものではありません。あなたは風の神樣に助けられたのではありませんか。妾はあれから毎日風の神樣にお禮を申してをります。

尊。だから風の神はつけ上つたのだ。俺を助けたのは、風の神を支配する方が俺を助けて下さつたのだ風の神はその方の臣下にすぎない。

橘姫。妾はあなたのその御心が恐ろしくつて仕方がありません。今にあなたはその御心の爲に命を失なう時がおありになりさうです。あなたは皆に恐れられてゐらつしやるのです。謙遜つてゐらつしやらないと思はない敵が出來ます。

尊。安心しろ。俺の敵は俺に亡ぼされる爲に假りにつくられた幻影だ。この世中で恐ろしい顔をしてゐるのは皆幻影だ。それにこの俺がぶつかつて見れば皆消えてゆく。この海だつて見かけは恐ろしさうな顔してゐる。だが恐れないものにはその恐ろしさは假面にすぎない。さあ、安心するがいゝ。この劍がある。この俺がゐる。この俺がこの荒を恐れたとあつては俺の恥になつても名譽にならない。敵は俺の力がどの位ゐつよく、俺を守護してゐる神の力がどの位ゐつよゐかを知らなければならない。さ

うすればこの刄を汚さずに世の中は泰平になると云ふものだ。さあ舟にのれ。お前は恐ろしいか。もしものことがあれば二人一緒に死ぬのぢやないか。お前はそれを望んでゐたはづだ。

橘姫。あなたに、あなたのなさらなければならないお務がなかつたら。妾はよろこんで舟にのりますわ。

尊。さあ、俺はのる。皆遠慮なく、のるがいゝ。この荒にこの海をのつされば俺の胸も少しはすくだらう。（砂丘をおりてゆく）

（船頭顔を見合せ、少し嘲笑しながらおりてゆく）幕。

第三場

舟の上

船頭の頭。何か御用で御座いますか。

尊。どうしたのだ。舟は少しも進まないぢやないか。皆何をさわいでゐるのだ。

船頭の頭。海神の怒にふれたと皆申してをります。いくら漕いでも漕いでも舟は進まないのださうで御座います。

尊。この位の荒に、舟が進まないと云ふことはない。皆が力を惜んでゐるのだらう。この俺を馬鹿にしてゐるのだ。

船頭の頭。そんなことは決して御座いません。皆も一生懸命で漕いでゐるので御座います。が、一歩も

舟が進まないのださうで御座います。よく話に聞いてをりましたが、之は海神の仕業ではないかと思ひます。

韋。そんなはづはない。皆の力の出し方がたりないのだ。俺はよく知つてゐるぞ。いくらごまかしても駄目だぞ。

船頭の頭。いゝえ、決してそんなことは御座いません。皆だつてこんな荒にこゝにぢつとしてゐたくはありません。皆力限り漕いでをります。少しでも早く陸につきたがつてをります。皆も生命は惜しいので御座いますから。

韋。皆は俺が自惚れてゐる。海の上でひどい目にあはしてやると噂してゐると云ふことを耳にはさんだぞ。俺はその噂を本當にはしなかつた。お前を信用してゐたから。處がさつきから見てゐるのに誰も本氣で漕いではゐない。俺はそれをちやんと知つてゐる。

船頭の頭。恐れ入りました。しかしそれは安全な間だけで御座いました。皆力をぬいてゐても舟が沈むやうな恐れもない間だけで御座りました。今は皆力のある限りで漕いでをります。皆自分の生命が惜しいので御座いますから。

韋。それなのに舟は一歩も出ないのか。恐ろしく力のない奴どもだな。

船頭の頭。皆それで不思議に思つてゐるので御座います。之はきつと何か海神の仕業にちがひないと思ふので御座います。

韋。俺はさうは思はないぞ。海神ならば俺を守護していゝはづだ。之はお前達の仕業だ。この俺を猜ん

でゐるものが。お前達をそゝのかしたのか。お前達の内に俺に亡ぼされたものに心をよせてゐるものがあるにちがひない。海は荒れてゐるにはちがひない。しかして位の荒れは人間の力で勝てないことはない。

船頭の頭。決して手前どもはあなた樣を猜むの恨むのと云ふことは御座いません。

尊。それならそれでいゝ。力限りやつて見ろ。酒手は必ずやるぞ。

船頭の頭。出來るだけはやつてをりますが。なほ力を入れてやるやうに申しつけませう。(退場)

(荒は段々つよくなる。舟は少しも進まない)

橘姬。あなたはあんなことをおつしやつて船頭をお怒らしになつてはいけませんわ。陸の上ではともかく、海の上では船頭の云ふことをお聞きにならなければなりませんわ。船頭をなだめて怒らさないやうになさらないといけませんわ。

尊。だが腹が立つよ。あいつ達はこの荒を幸にして舟を一歩も進めさゝないで俺から酒手を餘計とらうと思つてゐるのだ。それ許りならいゝ。あいつ達は恐ろしいたくらみをしてゐるのだ。

橘姬。あなたはどうしてさうおひがみになるの。あなたは自惚が强するぎるのがいけないのですよ。あなたは今度戰に出る時から、へんにひがんでゐらしやいました。倭姬の姨さまがなだめて下さつたのであなたはやつと自分のひがんでゐたことがおわかりになつたのですが、一體あなたの御兄弟はお疑ひ深いのね。

尊。さうかも知れない。俺は人を信じすぎる。しかし同時に疑ひすぎる。しかし誰が海神の怒りだと云ふ

ことを認めるものか。お前は耳がわるいから聞えないが。
橘姫。あなたの御耳こそ特別よ。
韋。俺の特別なのは耳許りではない。だがお前の耳のわるいのを俺は嬉しく思ふよ。
橘姫。舟は少しも進みませんわ。
韋。進むものか。進まないやうにしてゐるのだ。
橘姫。誰がです。
韋。あいつ達に云はせば海神だらう。だが俺に云はせばあいつ達、弱者の復讐だ。お前は安心してゐろ何を船頭が云つても聞かないふりしてゐろ。俺があいつ達を殺さうと思へばすぐでも殺せる。
橘姫。何をおつしやるのです。皆な殺したら舟はどうなるおつもり。そんなわからないことをおつしやるものではありません。
韋。お前は何も知らないのだ。
橘姫。あなたの御顔色は今迄、見たことがないやうに變つて來ましたわ。あなたのお身體はふるへてゐますわ。あなは何をそんなに怒つてゐらつしやるのです。妾は今までにあなたがそんなに怒つてゐらつしやるのを見たことはありません。
韋。あいつ等が卑怯だからだ。あいつ等は自分の力で俺をどうすることも出來ないので、海神の名を借りてお前を殺さうと思つてゐるのだ。
橘姫。そんなことが。妾はあの人達に惡意をもたれるわけはありません。

尊。だが、あいつ等はお前をなきものにしやうと思つてゐるのだ。見ろ、舟が少しも進まないぢやないか。それはあいつ等の仕業なのだ。それをあいつ等は海神の仕業にしてゐる。

橘姫。そんなことはありません。この荒では舟の進ないのはあたりまへですわ。舟があとへもどりされないのが不思議な位ゐですわ。あの人達は一心になつて漕いでゐるのですわ。

尊。さうぢやない。それは今死にもの狂ひになつてゐるかも知れない。だが皆の呪ひはこの俺をとりまいてゐるのだ。そして俺のわきにゐる、一番かよわいものを犧牲にしやうとしてゐるのだ。お前には聞へないか。あいつ等はこの荒を海神の祟りだと云つてゐるのだ。そしてその海神がこの舟にゐる。一人の人間をほしがつてゐると云ふのだ。その一人が海神のものになる迄は一歩もこの舟は進まない。そして海底の藻くづになると云ふのだ。

橘姫。その一人が妾だと云ふのですか。

尊。さうだ。他に海神のほしがりさうな美しい女はゐない。彼等はさう云つてさわいでゐるのだ。しかし誰もこの俺がこわくつて云ひ出すことは出來ないのだ。

橘姫。本當に海神は妾をほしがつてゐるのでせうか。そして妾が海に飛び込まなければこの舟は沈むのでせうか。

尊。あいつ等はさう云つてゐるのだ。

橘姫。それは本當でせうか。

尊。本當のことがあるものか。

橘姫。ですけれど、もしそれが本當でしたら。

章。俺は海神を恐れはしない。たゞ俺の恐れるのは海神を恐れすぎるものだ。あいつ等は今にこの荒を海神のせいにしてしまうだらう。そして自分でもさう思ひ込むだらう。そして一生懸命になつて漕ぐと海神がなほ怒ると思ふだらう。その結果、あいつ等は自ら好んで海神の犧牲になるのだ。

橘姫。そして舟は沈沒しますの。船が沈沒すればあなたも助かりませんわ。

章。それはお前の望む處ぢやないか。

橘姫。ですけど妾は自分一人が飛び込んで皆が助かるものなら。

章。默れ、お前は海へ飛び込んではいけない。ぢつとしてゐろ。舟が沈むまではお前は俺のわきをはなれてはいけない。（橘姫をかき抱く）

（船頭の頭、及び船頭二三人章の前にくる）

章。どうした。まだ舟は進まないぢやないか。

船頭の頭。へい、もうとても舟は進みません。皆、一心に漕いではをりますが、少しも進みません。そのくせあとにもどされもしません。舟は波へ釘づけにされたやうに少しも進みません。これはどうしてもたゞ事ではないと存じます。このまゝでをりますれば舟の沈沒はまぬかれないと存じます。

章。さうか。それもいゝだらう。沈沒するなら沈沒するもいゝだらう。力限りやつて見て駄目なものならあきらめるより仕方がない。（皆沈默）

橘姫。お前さん達に聞きたいことがあるが。遠慮なく返事しておくれ。

尊。お前默つてゐろ。
橘姬。いゝえ／＼妾はだまつてはゐられません。お前さん達はこの荒を海神の仕業と思つてゐるのでせう。
船頭の頭。どうもさうとしか思へませんので。
橘姬。さうだらうね。妾もさう思ひますよ。それでその海神が妾を見込んでこの荒を起し妾を奪ひとらうと思つてゐらつしやるのだとお前さん達は思つてゐるのだらう。妾は海神に見込まれる程美しいものではないがね。妾さへ海へ入ればこの舟は助かると思つてゐるのだらう。遠慮なくさう云つておくれ。妾、一人で、お前さん方がたすかるなら妾にも覺悟があるからね。
尊。何を云ふのだ、橘姬。俺はお前を殺させはしないぞ。誰がなんと云つても。
橘姬。ですけど、妾はどうせ死ぬものなら。美しく死にたいと思ひますわ。妾は今日のやうな日のくるのを待つてゐましたわ。妾は美夜受姬とはちがひます。父上と倭媛の御許しを得て、あなたのお身體の爲について來たものです。こゝで生命に未練を起して皆さんを殺したら妾は何の顏があつてあなたの父上や倭姬にお目にかゝれませう。妾は今日の日の爲におともして來たのですわ。どうか、あなたも、皆の爲に妾が海に身を投げるのを許して下さい。さもないときつと恐ろしいことが起ります。
尊。お前の心はわかつてゐるが、俺はお前を失ないたくはない。俺が無理を通したのだ。罪があれば俺にあるのだ。お前にはない。お前を死なすわけにはゆかない。
橘姬。ですけどかうなつた以上は、もう妾が死ぬより他にあなた達が助かる道はありませんわ。ね。武

彥。お前は妾の云ふことが本當だと云ふことを知つてゐてくれるね。どうか。尊が今後あまり無理をなさらないやうに、諸神を崇められるやうに骨折つておくれ。妾は生きてゐたくないのだよ。(立ち上る)

尊。橘姫! お前は生きてゐなければいけない。お前は死んでいけない。

橘姫。いゝえ、妾の心はもうかわりませんわ。あなたはまだ〳〵いろ〳〵のことをなさらなければなりませんわ。どうか、御身體を大事に、そして、無理をなさらないやうに。妾のことは時々思ひ出して下さい。美夜受姫によろしく。妾はあの方を愛してゐます。

尊。橘姫! 舟が沈むまでは俺と一緒にゐてくれ。こゝから動いてはいけない。さあ船頭、力限り、もう一度やつて見てくれ。たのむ。俺が頭をさげてたのむ。

(船頭數人近づく。橘姫尊のわきに坐はる)

船頭一。舟に水が入り出しました。

船頭二。櫓が流されました。

船頭三。舵がもうきかなくなりました。

船頭の内より。海神の怒りだ。海神の怒りだ。海神が女をほしがつてゐるのだ。

(橘姫立ち上る)

橘姫。海神が妾をほしがつてゐるのかい。

(皆沈默)

尊。うそだ。そんなことはない。誰がさう云つた。もう一度云つて見ろ。
船頭の内より。海神が女をほしがつてゐるのだ。
尊。誰だ、云つた奴は出ろ。
船頭の内より。このまゝでは船がしづむぞ。船がしづむぞ。海神に女をやらなければ船がしづむぞ。
尊。船がしづんでも俺は海神に橘姫はやらないぞ。
橘姫。皆さん安心なさつて下さい。妾は海神に身を捧げますから。
尊。俺が許さないぞ。
橘姫。ですけど妾は死にますわ。皆さんの爲に。（舟べりへ行く）
（尊それを拒はうとされる。今迄沈默せる武彥それをとめる）
尊。橘姫！
橘姫。皆さん。どうぞ尊のことをおたのみしますよ。（身を投げる）
尊。（その瞬間に）俺は橘姫を殺すことは出來ない。（舟べりにゆき、男なきに泣かれる）
武彥。（立ち上る）皆何をぐずぐずしてゐるのだ。橘姫はお前達の爲に身をなげられたのだぞ。死にもの狂ひで舟をこげ、橘姫の精神がこの舟にのりうつてゐるぞ、海神をもうこわがることはないぞ。舟をこげ、力限りこげ、死にもの狂ひにこげ。
船頭の頭。さうだ。お前達は死にもの狂ひにはたらけ、死んだつてかまわない氣でやれ、姫君はわし達の爲に貴い身をなげて下さつたのだぞ。さあこげ、力限りこげ、死もの狂ひでこげ。ぐずぐずするも

のは海にはねとばすぞ。
船頭一。さうだ。生命(いのち)はもういらないぞ。死んでもやるぞ。
船頭二。さうとも死んでもやる。
（船頭逃退場）
章。橘姫！　お前にはもうあへないのか。橘姫！　お前は何處へ行つた。橘姫！　俺は一生お前のことは忘れないぞ。許してくれ、橘姫。俺はお前を殺したくはなかつた。俺はどうしたらいゝのだ。
（舟うごき出す）
頭頭の頭。船がうごき出した。船がうごき出した。（幕）

第三幕

第一場

（假りの陣屋・正面に章お一人、兩わきに燈。時々遠くで人々の喜びさわぐ聲聞へる。武彥登場）

武彥。いよ〳〵明朝は御歸國になりますか。
章。あゝ、もう用はすんだから一日も早く都に歸りたいと思つてゐる。
武彥。立派に敵をのこらずお退治なつたのですから、さぞ御本望でゐらつしやいませう。
章。あまり本望にも思はない。まだ之からさき、何處まで行つたつて限りがない。もう詔(みことのり)だけははた

したから歸らうと思ふのだ。あまり兵をいためずに、戰はずして勝つたことをせめての手柄と思つてゐる。

武彦。その御言葉には恐れ入ります。あなたの御手柄にくらべては、素盞嗚尊も。

尊。もうそのことを云ふな。俺はあの方たちに自分の手柄を比較したいとは思はない。俺のしたことは俺の手柄ではない。皆の手柄だ。運の仕業だ。俺は道具につかはれてゐるのにすぎない。

武彦。そんなことを、おつしやるものでは御座いません。そんなことをおつしやると私達は何と申していゝのかわかりません。

尊。俺ももとはいろ／＼自分の手柄話をするのがすきだつた。又聞くのをよろこぶ奴がゐた。しかしもう手柄話もあきて來た。俺は都に歸つて少し休みたくなつた。

武彦。美夜受姫はあなたのお歸りを待つてゐらしつしやるでせう。そしてあなたの無事なお顏を御らんになつたらさぞお喜びになるでせう。

尊。それは美夜受姫は待つてゐてくれるだらう。だが俺は今、こゝに橘姫がゐないのが恨みなのだ。お前たちも少しはあいつのことを思ひ出してやつてくれ。

武彦。どうして忘れましていゝもので御座いませう。今でも皆、橘姫のことを話すと死んでもいゝ、死んでも惜しくはないと皆申して、一段と勇氣が加はります。

尊。それをきいて俺も本望に思ふ。あいつの死もそれで無駄ではなかつた。だが俺はいくら考へてもあいつを死なしたのは心殘りだ。今あいつがゐてくれたらどんなによろこんだらうと思ふ。都に歸つて

も、あいつの父や母にあふ事を思ふと、足がにぶる。人間は皆死なゝければならないのだ。愛するものもこの世にひきとめることは出來ない。俺はこの頃よくそのことを考へた。すると俺のして來た仕事も、何の爲かわからなくなるのだ。武彥、お前にはわかるか。わかるならきかせてくれ。

武彥。私にもわかりません。私も妻を失なつたことが御座います。子供を失なつたことも御座います。その當座は見るもの聞くもの、なき者を思ひ出させないものは一つも御座いませんでした。何とも云へない、とり返しのつかない、悲しい思ひをいたしました。

尊。お前もそれを知つてゐるか。

武彥。ですが月日がたちますと、いつとはなく忘れます。腹の底から笑へるやうになつて參ります。

尊。それはさうだらう。俺もさう思ふ。だが橘姫は今、どうしてゐる。よみの國に行つたのか。もうこの世のことも、俺のことも自分自身のことも忘れて思ひ出さないのか。

武彥。どうもさうとしか思へません。

尊。もう俺はあいつにあやまることも、あいつをよろこばすことも出來ないのだ。さう思ふと心のこりなことだらけだ。どうしていゝかわからなくなる。あいつが生きてゐたらさぞよろこんでくれるだらうと思ふ時、一番淋しいのだ。戰ひから無事で歸つて來た時。あいつの喜びを思ふと、俺はあいつを生かしたくなる。もう一度よろこばしたくなる。あの相武の國造に燒かれかけた時のあいつの心配助かつて無事にあいつにあつた時のあいつの喜び、俺はそれを思ふと、どうしても生かしてやりたくなる。

武彦。御尤で御座います。

尊。だがこの俺でさへどうすることも出來ないのだね。生きてゐるものを殺すことは出來る。死んだものは生かせない。武彦。このことをどう思ふ。人間は一度死んだら生きられないのだ。だが一度生きたものはいつか死なゝければならないのだ。ほつたらかしておいても生きてゐるものは死ぬ。しかしいくら悲しんでももがいても、死んだものは生きない。俺はこのことをよく知つた。だからこの頃はあまり人を殺さずに、戰に勝つことにした。和解の出來る限り和解したのだ。生きてゐるものはなるべく生かしておいてやれ、俺はそれを橘姫の死によつて知つたのだ。俺は不意に齡をとつたらう。俺は不意に夜見の國の戶をたゝかうとしたことも、二三度はあつた。だが俺は生きなければならないのだ。俺は之から本當に生きやうに思つてゐるのだ。俺はこの俺の心をあいつに、どうかして知らしてやりたいと思ふ。あいつが知つたらさぞ喜んでくれると思ふからだ。だがそんなことは出來ないのだ。人間に出來ないことを俺はしやうとは思はないぞ。武彦、今になるとお前はお前の妻や子が生きてゐてくれたらとはもう思はないか。本當のことを云つてくれ。

武彦。生きてゐる時は五月蠅とも思ひました。叱りもしました。しかし今生き返つてくれたらどんなに嬉しいだらうとは思ひます。すぐその喜びになれてはしまひませうが。

尊。さうだらう。本當に生き返つてくれたらと思ふ。俺が今の心さへもつてゐれば、あんな目に逢はさないですむと思ふとなほ心殘りだ。だがそれも仕方がない。武彦。それならもう休むといゝ。明日は早いからな。皆はさぞよろんでゐるだらう。

武彦。よろこんで、さわいでゐます。おうるさいでせう。もうねろと申しませうか。
章。罪のない奴だ。さわがしておいてやれ。
武彦。はい。(退場) 幕

第二場

(第二幕第三場と同じ場、章、美夜受姫と登場)

姫。いつ都にいらつしやるの。
章。明日でも歸らうかと思つてゐる。
姫。まだおよろしいでは御座いませんか。
章。それでも都では俺の歸るのを待つてゐるだらうから。
姫。それでも都にお歸りになつたらきつと妾のことはお忘れになりますわ。
章。そんなことはない。
姫。あなたは御位におつきになるの。
章。どうか知らない。俺の手柄は俺を最上の位にのせるだらうが、俺には大勢の兄弟がある。八十人許り兄弟がある、互に顔を知らないのさへある。その間にはいろ〳〵の面倒がある。俺は父上の御心にまかせるつもりだ。
姫。それでもあなたのやうな立派な方は他にはないのでしよ。

尊。俺は自分ではさう思つてゐるが、皆はどう思つてゐるか知らない。俺は御位をつぎたいとは思はない。皆に猜まれたくない。それよりもお前と平和にくらしたい。

姫。だけどあなたは他の方の臣下にはなれない方よ。あなたは平和にくらしたいとおつしやつてゐらつしても、あなたのお力はそれをお許しにはなりませんわ。

尊。さうかも知れない。俺はこゝにもうぢつとしてゐるのにあきて來た。何か力を出すことでもしないと、生きてゐる氣がしなくなつた。俺は都に歸つたら毎日獵りでもするのだ。そして人間にあだをする惡い獸でも殺してやる。

姫。都にそんなにお歸りになりたいの。

尊。歸りたくもある。

姫。妾は御一緒にはゆけませんの。

尊。お前は都に行つてから、迎へをよこす。

姫。あなたの凱旋のお祝には妾はあづかれませんの。橘姫が生きてゐらつしたら皆さんにどの位ゐお賞められになつたでせう。妾は橘姫とは比べものになりませんわね。

尊。橘姫のことは云ふのをよしてくれ。あれは俺が殺したやうなものだ。あいつが今生きてゐてくれたら俺はどんなに嬉しかつたらうと思ふよ。

姫。あの方は御仕幸な方ですわ。あなたにそんなにまで思つて戴けるのですものね。皆神様のやうにあがめてをりますわ。そして妾とはまるで人間がちがうやうに皆、あなたまで思つてゐらつしやるのね。

妾だつたら死ねないと思つてゐらつしやるの。妾つれて行つて下さつたら、橘姫だけをお殺しはしませんでしたわ。

韋。死んだものにたいしてそんな考をもつものぢやない。お前は少し向ふへ行つてゐてくれ。俺は一人でそこらを歩いてくるから。

姫。妾もつれて行つて頂戴ね。これでもうすぐお別れになるのですから。

韋。すぐよびによこす。

姫。きつとですね。

韋。きつとだ。

姫。妾なんだが心配ですわ。

韋。心配なことはない。もし心配なら俺の心がかわらないやうに、あの御劒をおいて行つてもいゝ。

姫。それは本當ですか。

韋。本當だ。

姫。それなら妾、安心しますわ。あの御劍はあなたの命の恩人ですから妾は大事にしまつておきますわあなただと思つて大事に抱いてゐますわ。あの劍で草をなぎた時のお話を妾はあの劍を見る度に思ひ出しますわ。あの劍を草なぎの劍と妾は一人で名づけてをりますの。

韋。そんなことを云ふものではない。あの劍の名は素盞嗚命の御武德を記念する爲に叢雲の劍と云ふ名がついてゐるのだから。

姫。それでも妾は一番大事な方を救つて下さつて劍ですから、草なぎの劍と申しますわ。
尊。お前一人でさう思つてゐるならいゝ。誰にもそのことは云つてはいけない。たゞさへ俺は嫉まれてゐるのだ。俺は恐ろしい人間で、傲慢な、人間を人間と思はれない人間に思はれてゐるのだ。だから俺は皆に呪はれてゐるのだ。俺がもし御位にでもついたらどんな恐ろしいことが起りはしないかと思つてゐる奴もゐるのだ。今迄は俺は必要な人間だつた。だから恐れられてゐても、俺にさからうものはなかつた。まして俺を殺さうと思ふものはなかつた。だが之からは用心しなければならない。そのことは橘姫がよく云つてゐた。
姫。あなたはすぐあの方のことを思ひ出されるのね。妾がやつと忘れてゐると。
尊。お前は橘姫に嫉妬を起してゐるのか。お前も橘姫を尊敬しなければいけないぞ。
姫。それは尊敬はしてゐますわ。ですけど妾をあなたが本當に愛してゐて下さらないと妾は心細いのですもの。
尊。愛してゐる。愛してゐるからこそ、こゝにまだぐず〳〵してゐるのだ。俺のやうに生れたものが、三日もとぢこもつて何處へも出かけないと云ふことは今迄だゝの一度もなかつた。俺の内にある力は俺を野山をかけさゝないではおかない。(間)あすこに見へる山はなんだ。
姫。あれは伊服岐山(いよきやま)で御座います。
尊。さうか。俺は之からあの山に登つてくる。
姫。それはおよし遊ばせ。

章。なぜだ。
姫。あの山にはいろ〳〵恐ろしいものがをります。
章。恐ろしいものとは。
姫。恐ろしい山の神樣がゐらつしやるさうです。
章。さうか。俺はまだ山の神樣を見たことはない。噂ばかり聞いてゐるが、そんな噂をするのは臆病ものだけだらう。
姫。それに毒蛇だとか、猪だとかゞゐるさうです。
章。毒蛇だつて用心さへしてゐれば恐れる必要はない。猪は出てくれる方が面白い。俺は少し手や足に力を入れなかつた。なんだか身體がだらけて氣持がわるい。一つあの山へ行つて猪でもつかまへてやるか。
姫。およし遊ばせ獵師や樵夫でさへあの山にはゆきません。ゆけばきつと神罰があるのださうで御座います。
章。弱い奴はそんなことを云ふのだ。この世に人間の行つていけない土地はないはずだ。人間のことを思はない神は神ではない。そんなものは恐れることはない。お前を戰爭につれて行つたら、さぞ毎日毎日心配して俺を戰場に出さないやうにしたらうな。
姫。本當ですわ。妾がゆけば荒れ模樣の時お舟になんかのせませんわ。
章。そして強い敵が出たら、逃げろと云ふだらう。俺は今迄、自分の思ふ通りにして來たから勝利を得

られたのだ。忠告許りきいてゐたら何にも出來なかつたらう。それ許りではない十六の時に熊襲に殺されてゐたらう。

姫。あなた程運のいゝ方は御座いませんね。だまされゝばだまされるで得をなさるのね。

尊。あの時のことを思ふと實際今生きてゐるのが不思議なのだ。だが俺だつて運のいゝ許りではない。それ相應の犧牲もはらつてゐる。

姫。それはさうですわね。あなたの生命よりも大事な方を失なつたのですものね。妾は橘姫が死んで下さればいゝのにと思つてゐましたわ。あんまりあなたが橘姫許りお大事になさるから。

尊。橘姫はお前によろしく云つて死んだ。

姫。お氣の毒に思ひますわ。ですがあんまり立派な死に樣をなさつたので。

尊。お前は何處まで賤しいのだ。

姫。本當に妾は賤しい人間ですわ。こんな賤しい人間になつたのもあなたのことを思ひすぎるからよ。

尊。女と云ふものはなぜさう賤しいのだ。

姫。男の方はあつさりしてゐらつしやるわね。中でもあなたは。あなたはこの前の時よりづつとお將になつて、齡をおとりになつてよ。お顏が時々おくもりになりますわ。

尊。お前は戰場をなんだと思つてゐるのだ。うまいものを食つて、家のなかにあたゝかくねながら、遊び半分に戰爭をしてゐると思つてゐるのだらう。

姫。妾はそんなに馬鹿に見へて。妾、あなたが戰つてゐらつしやるのだと思つて毎日、お祈りをしてゐ

ましたわ。

尊。俺が無事に一日も早く歸るやうにかつ一人で、橘姫をつれないで。

姫。まさか妾、橘姫をいのり殺しはしませんわ。たゞ妾は一日でも二日でもいゝからあなたを妾一人のものにしたいと思ひましたわ。

尊。そして思ふ通りになつたらう。

姫。いゝえ。ちつとも思ふ通りになりませんわ。あなたは何か考へて許りゐらつしやるわ。あの方のこと許り考へてゐらつしやるのでせう。

（この時間者あらはれ二人の話をぬすみ聞きする）

尊。そんなことはない。俺は今後のこと許り考へてゐる。俺の仕事は之からだ。今まではたゞ道を切りひらいた許りだ。之から俺はこの國をどうしやうかと思つてゐる。

姫。御位におつきになつてから。

尊。御位につくかどうかわかるものか。

姫。それでも陛下はあなたのお立ちの時、なんとおつしやたか妾ちやんと覺えてゐますわ。「天下は我位なるも汝の位なり」とおつしやつたのでしよ。

尊。お前はその言葉を誰からきいた。

姫。父上からきゝましたわ。

尊。わかつた。それでこの俺を愛してゐるふりしてゐるのだな。

姫。そんなことはありませんわ。
尊。どうだか。俺が御位につかなかつたらお前はがつかりするだらう。
姫。それがわるくつて。自分の一番大事な方が、一番偉い方になるのを喜ばない女があるでせうか。
尊。お前は虚榮心の固り見たやうな奴だ。
姫。どうせ妾、橘姫ぢやありませんわ。
尊。俺はあの山にゆく。お前のわきにゐると人間が小さくなる。
姫。どうせさうよ。よろしいわ。あの山へでも登つて海でも御覽になつて一人であの方のことでもお考になるといゝわ。
尊。默れ。お前は俺の云ふことをきかなければいけない。お前は遊ぶこと切り知らないからいけない。
姫。どうせ妾はさうよ。
尊。本當にお前には困つてしまふ。俺はお前のわきにゐると考へたいことが何にも考へられない。俺はどうしてもあの山にゆく。
姫。それならお行きあそばせ。身體をお大事にね。あぶないことをなさつてはいやよ。
尊。大丈夫だよ。それなら行つてくるよ。
姫。お待ちあそばせ。草なぎの劍を持つて參りますから。
尊。又そんなことを云ふ。
姫。誰も聞いてはゐませんからよろしいわ。

尊。それなら行つてくるよ。

姫。それなら叢雲の御劍をもつて參りますわ。

尊。いらない。あんな處に行くのにそんなものはゐらない。

姫。それでも妾。心配ですわ。

尊。臆病もの！　お前のやうに心配してゐては切りがないぞ。一體人間は何處にゐるのが一番安全か、そんなことはわかるものではない。家にゐれば安全だと思ふのもまちがひだ　山へ行けばあぶないと云ふのもまちがひだ。どつちが安全でどつちが不安だか人間にはわかるものか。したいことをすればいゝのだ。行きたい處に行けばいゝのだ。

姫。それなら行つてゐらつしやいまし。なるべく早くお歸り下さい。

尊。日がくれる迄には歸つてくる。

姫。きつとね。

尊。あゝ。それなら行つてくる。

姫。行つてゐらつしやい。早く歸つてゐらつしやらないと怒つてよ。

（尊ゆきかけふり返り）

尊。俺に怒れるのはお前許りだ。又俺が怒られて腹が立たないのはお前許りだ。

（姫、微笑む。尊時々見返られる、姫布をふる。姫、尊のあとを見送れるだけ見送り家の方へ入る。間者出て來て、尊のあとを追ふ。）

幕。

第三場

（山の上、尊登つて來られ）

尊。久しぶりで疲れた。少し休むかな。（岩に腰かけられる）いゝ見はらした。（立ち上り）胸がせい／＼して來た。俺のして來たことも、俺が今後しなければならないことも皆夢のやうなものだ。だが内に力がわいてゐる以上はしなければならないことはするぞ。生きてゐる間は、俺でなければ出來ないことをするぞ。野や山よ覺へておけ、俺は生きてゐる間は俺だけのことをするからな。俺のやうな人間が生れたことをこの世の傲りにしてやるぞ。俺は負けたことはない。俺の力はどのくらゐあるか、誰も知らないのだ。俺は日本武尊だ。そしてその名は一生汚されはしない。俺の内にわく力は俺の名を汚さない許りか、俺の敵を征服しつくさないではおかない。俺を誰にも優る人間にしないではおかないぞ。俺の内にわく力にはこの俺さへ抵抗することは出來ないのだ。こんな景色を見ると、怒鳴りたくなる。歩きたくなる俺はお前達の支配者だぞ。おゝ橘姫、橘姫、橘姫よ。お前は俺がさう云ふのをいやがつてゐたな。お前の云ふ通り俺だつて人間だ、神ではない。不可能なこと許りだらう。だがこの内からわく力をお前は知らないのだ。この力こそ俺をかけつて何事でも平氣でさしたのだ。そしてその力は曾つて俺を裏切つたことはない。橘姫！ さうだ。この力こそ俺を裏切つてお前を殺したのだつたね。許してくれ。俺はあれから謹んでゐるぞ。だが俺の内の力はやゝもするとその謹みを破りたがる。そしてこの俺に俺はこの世の支配者だぞと一人ごとさせたくする。どうも俺はさう云ひたい慾望に勝

つわけにはゆかない。お前はそれを謹めと云つた。美夜受姫はそれをたきつけやうとする。だが俺でなくつて誰が、この世の支配者だ。この山野は誰のものになりたがつてゐる。之等を支配出來る力を内にもつものはこの俺許りではないか、お前はさうは思はないか。

（猪あらはれる、尊、崖から蹴おとす）

尊。もう一度姿を見せたら生かしてはおかないぞ。俺の心は殺戟になりかけてゐる。謹もうとは思つてゐるが。俺の内にわく力の强さはこの俺さへ克つことは出來ない。

（問者獵師になつてあらはれる）

獵師。猪は何處にゆきました。

尊。お前か、猪を逐つて來たのは。

獵師。いえ、どうして猪を逐ふ處ではありません。あれはこの山の神樣です。

尊。あんな山の神樣があるものか、あの猪はこの崖から蹴とばした。

獵師。えつ。あの猪をばお蹴とばしになつたのですか、亂暴なことをなさいましたね。

尊。蹴とばされるのがわるいのだ。もつと强くなれないやうな神なら俺の處へ來ないがいゝのだ。

獵師。それにしてもあなたはお强い方で御座いますね。

尊。あたりまいだ。俺は弱ければ猪を見れば逃げ出す許りだ。

獵師。足げになさつたとおつしやるのは御冗談でせう。

尊。なぜだ。

獵師。それでもあなたの息は少しも切れてはをりません。
尊。お前は土龍を蹴飛ばすと息が切れるか。
獵師。御冗談を。
尊。俺が猪を蹴とばして息の切れないのもそれと同じことだ。あんな猪のひよつこなんか。
獵師。あはゝ猪のひよつこですか。どうもあなたのお話を伺つてゐるとこわくなります。
(獵師、腰にぶらさげてゐる、酒を甘さうにのむ)
尊。酒か。
獵師。へい。
尊。珍らしいものをもつてゐるな。
獵師。酒ばかりは手ばなせませんので。
尊。俺にも少しのませないか。
獵師。とてもお口にはあひますまい。
尊。いや、どんな酒でもかまはない。さつきから何かのむものがあるといゝと思つてゐたのだ。
獵師。あゝ。あすこにさつきの猪がゐてこつちを見てゐます。
尊。どこだ。
獵師。あすこの木の下にゐます。
尊。あれは石だ。

（獵師尊が注意をほかに奪はれてゐる内に持つてゐる猪をそのまゝ酒の内に入れる）

獵師。石ぢやありませんよ。

尊。石にきまつてゐる。

獵師。あなたのお目はおわるいのですか。

尊。お前の目の方がわるいのだらう。

獵師。それならあれが猪でしたらあなたの持つてゐらつしやる劍を下さい

尊。やつていゝ。あの木の下にぢつとしてゐるものだらう。

獵師。さうです。あんな石があるものですか。

尊。よし、もしあれが石だつたらお前のこの酒を皆もらうぞ。

獵師。あげますとも、あれは猪にきまつてゐます。

尊。よし、それなら俺はこの石をあの石にぶつけて見る。

獵師。あすこまで石がとゞくものですか。

尊。あすこ位ゐ、石がとゞかないでどうする。

獵師。およしなさい、もし神様だと。

（尊石をなげられる）

尊。それ見ろ、あの石にあたつて石は粉微塵になつたがあの石は動かない。

獵師。まけました。たしかにまけました。あなたはなんと云ふ偉いお方なのです。獵師の私よりなほ目

がおよろしいのですね。それにあすこまで石がとゞくさへ人間わざではありませんのに、たゞ一度に
あれにおあてになるとは。

尊。生れつきと、修業だ。さあ、その酒をよこせ。

獵師。捧げます。何處か清水の出る處へ持つて行つて清めて參りませう。

尊。それには及ばない。戰場では泥水でも平氣にのむこの俺だ。安心するがいゝ。

獵師。さうですか。それでは失禮ですが。

（尊、受けとり一息にのみつくされる）

尊。少し口あたりがへんだつたが、こんなにうまく酒をのんだことはないぞ。戰場でも。

獵師。ありがたいお言葉で恐れ入ります。

尊。この酒はこゝらの酒ではあるまい。お前もこゝらのものではあるまい。

獵師。はい。私は他から流れて參りましたものです。酒は妹がある貴い方のお手つだひに行つて戴いて
まゐりましたもので御座います。

尊。さうだらう。きつとこの酒は都から來たものにちがひない。少し癖があるが、都のことを思ひ出した。父上のお顔が目に見へるやうに思つた。

獵師。あなたはまるで神のやうな方ですね。ですが用心なさらないといけません。この山の神様は嫉み深い神でゐらつしやいますから。

尊。俺は神は恐れない。神は人間を恐れる必要はないから、神にとつては人間はあまりに小さすぎるか

ら。人間はどうせすぐ死ぬものだから。神は人間のことは氣にしない。俺の恐れるのは人間だ。人間の嫉だ。

獵師。あなたは誰かに嫉まれてゐらつしやるのですか。

尊。俺は澤山の兄弟を持つてゐる。皆で八十人許りゐる。その內で二三人は俺の生きてゐるのを喜ばない奴がゐる。

獵師。あなたはそれを恐れてゐらつしやいますか。

尊。眞正面に來てくれゝばこわくはない。だがどんな人間にも油斷がある。どんなに力ある人間でも、力のない人間に殺されることもある。

獵師。失禮なことを伺ひますがあなたは日本武尊ではゐらつしやいませんか。

尊。お前はどうして日本武尊と云ふ名前を知つてゐるのだ。

獵師。誰でも日本武尊と云ふ名を知らないものが御座いませう。尾張の國造の處にゐらつしやると云ふことは國中にひゞいてをります。あなたは日本武尊でゐらつしやいませう。

尊。さうだ。俺は日本武尊だ。お前は始めからそれを知つてゐたのか。

獵師。石をお投になるのを拜見した時にさうではないかと存じました。あなたが日本武尊でゐらつしやいますか。それでは猪を蹴とばされたのも石をおあてになつたのもあたりまいのことゝ存じます。あなたは熊襲兄弟を女裝してお殺しになつたさうですね。熊襲の兄弟は本當に强ございましたか。

尊。さう强いとは思はなかつた。だが熊襲より强い男にも別に逢はなかつた。

獵師。あなたは謀事（はかりごと）で人をお殺しになりましたことも御座いませう。
尊。それはある。しかし俺は俺よりも強い男をだまし討ちにする必要はなかつた。出雲建を殺した時なぞは中身のない刀をわたして中身のないのを知らずに拔かうとして拔けないうちに殺してやつた。しかしそれは若さのした惡戲だ。可笑しいとしか思へなかつた。
獵師。あなたは熊襲や出雲建が自分の殺されることを知らずにいろ〳〵呑氣なことを話してをりました時、どんなお心持でゐらつしやいました。
尊。いろ〳〵のことを聞きたがるね。あの時分は若かつた。名譽心と、皆をおどかすことに心を奪はれてゐた。だからうまくやつて皆にその時の話しをする時のこと許り考てゐた。その他のことは別に考へてはゐなかつた。あの時分のうまくやつた時の喜びはとても二度とは味はへない。子供らしかつた今だつたら和解することが出來たらう。俺は今度の戰爭で和解する、敵をとき伏せる喜びを感じた。今思へば熊襲建も出雲建も殺すのは惜しい人物だつた。得やすからざるいゝ處があつた。熊襲建の弟の方は俺に切りつけられて、もう死を目の前に見ながら正氣を失なはずに、まだ子供氣の失はない俺の偉い處を認めてくれた。又出雲建は人のいゝ奴だつた。心さへ打ちあければ向ふでもわるいことはしさうもない男だつた。お前は顏色がよくない。ふるへてゐる。何處かわるいのぢやないか。
獵師。いゝえ、一寸山の毒氣にあてられたゞけで御座います。
尊。さうか。身體を大事にしろ、藥を持つてゐるかも知れない。
獵師。毒けしの藥をもつておいでゞすか。

尊。いや持つてくるのを忘れた。大したことはないのか。

猿師。私は大したことは御座いませんが、あなた様は。

尊。俺か、俺のことは安心するがいゝ。この位の山にはあてられはしない。

猿師。今度の戰さで面白い人物にお逢ひになりましたか。

尊。あまり逢はなかつた。俺の名でおどろいて皆俺に媚びを呈するので、心の底の見へない奴が多かつた。だがなるべくは說き伏せることにした。もう人を殺すことにもあきたからな。

猿師。橘姬の御入水は、

尊。橘姬のことをお前は知つてゐるのか。あれを失なつてから俺は人の生命が大事だと云ふことを本當に知つたのだ。あいつは惜しいことをした。とり返しのつかぬことをした。俺が一寸强がつた許りにあいつを犧牲にしてしまつた。あいつのことを思ふと俺はつい涙をこぼす。あいつは俺に涙の味を敎へたのだ。他人を勝手に殺しておいてこんなことを云ふのも可笑しなことだがな。お前の身體はますますふるへてゐるな。早く山をおりたらいゝだらう。

猿師。あなたの御足はどうも御座いませんか。

尊。さう云はれると俺の足も少し重いやうだ。お前の足もさうか。

猿師。おなかの工合はどうも御座いませんか。

尊。さう云へば少しへんだ。なんだか少し痛いやうだ。あたり前の奴ならこの位痛めばくたばつてゐるかも知れない。

猟師。お額に汗が浮んでゐます。
尊。お前の額にも汗が出てゐるぞ。矢張りさつきの猪はたゞの猪ではなかつたかな。
猟師。少しでも早く山をおりませう。
尊。おりやう。
(尊立ち上り歩かうとし、よろ〳〵と倒れかゝる)
猟師。おあぶなう御座います。
(尊を助ける)
尊。お前は都にゐたことがあるな。お前はたゞの猟師ではないな。
(猟師、逃げやうとする。尊追はうとし、一たふれる)
尊。まて、お前にきゝたいことがある。
猟師。(逃げながら)何んで御座いますか。
尊。お前は俺に毒をのませたのだな。(間)だが逃げないでもいゝ、俺にはもうお前を殺す力はないからな。又あつても殺さうとは思ない。俺の最後のことづてをたのまなければならないからな。それにお前は誰かにたのまれたに過ぎないのだから。俺はお前を許してやる。もう許してやる資格もないが。云つてくれ。誰だ俺に毒をのませろと云つた奴は。夷の奴か。
猟師。さうでは御座いません。
尊。都の奴だな。(間)(ある恐怖にうたれ、するどく)父上か。

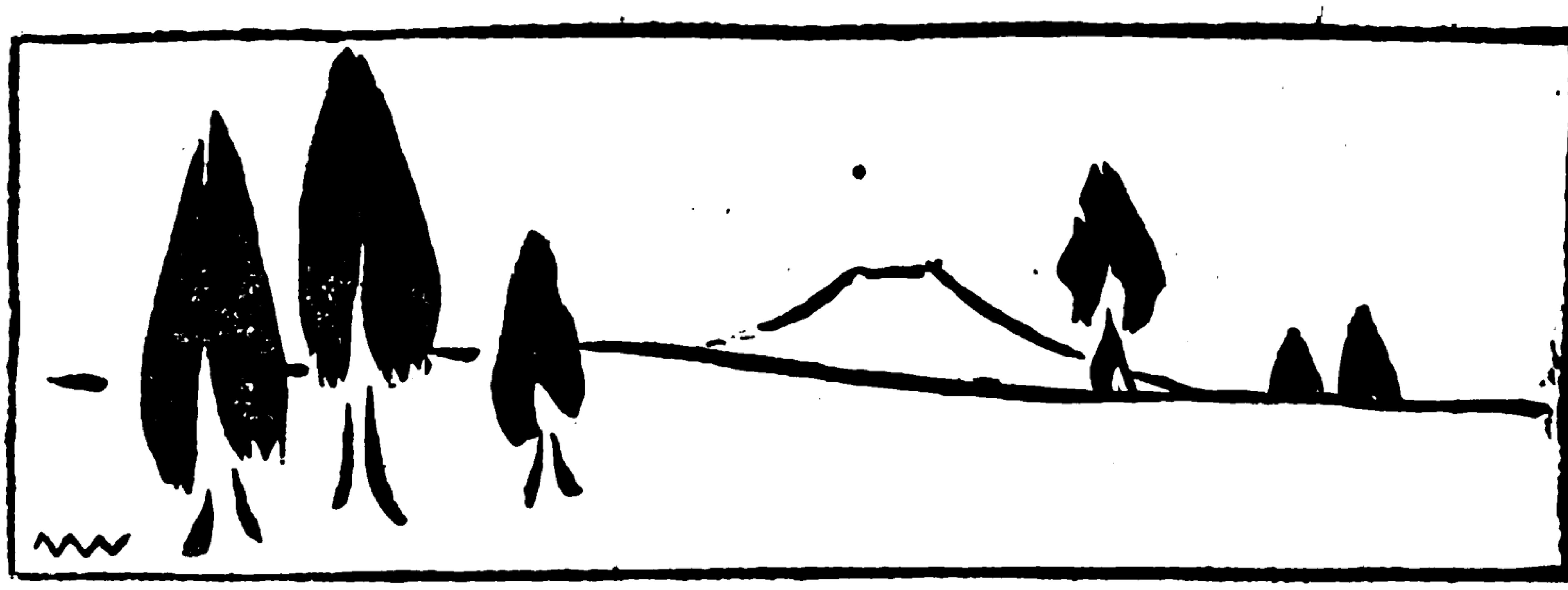
獵師。父上はあなたのお歸りを待つてゐらつしやいます。早く御位をお讓りになりたいとおつしやつて。

尊。それさへ聞けば、それでいゝ。俺は死にたくはないが、俺のしたいことは之からだから。だが見苦しい死にざまはしない。俺の死ぬのを見とゞけてゆけ、俺の死にかたはお前の一生にとつて無意味ではあるまいから。もつとこつちへこい。

獵師。どうぞお許し下さい。私は心から後悔してをります。わるいことをいたしました。

尊。もうすぎたことだ。お前は道具につかはれたのだ。俺はもう用がすんだのでこの世から去らなければならないのかも知れぬ、そんなことはお前の知つたことぢやない。叢雲の劍はこの國造の娘の美夜受姫にあづけてある。あいつが俺のことを思つてゐてくれる間御劍はあいつにあづけておくやうにしてくれ。それから俺は倭國のことを常に思つてゐることを知つてゝくれ。父上を愛してゐた。倭姫のことはつねに思つてゐた。俺はこの山の神の怒りにふれて死んだことにしてくれ。俺はかるはづみのことが多かつたが、心は賤しいものではなかつたとつたへてくれ。俺は内から出る力を押え切れずに我儘もし、威張もしたらう、だが腹の底は惡い人間ではなかつたと傳へてくれ。(尊不意に美しい御聲で唱はれる) 命の全けむ人は、疊菰平群の山の、隱白檮が葉を髻華に挿せ、その子。(間) 愛しけやし、吾家の方よ、雲起ち來も。(間、苦しさをむりにこらへられ) 乙女の、床の邊に、吾が置きし、劍の大刀はや。(何かなほ云はんとされてばつたり倒れ玉ふ)

獵師。(傍により) 尊、尊、日本武尊！ あゝもう息がたへてしまはれた。自分は取返しのつかないことをした。こんな方とは知らなかつた。日本武尊、日本武尊。(死體をだき起さうとする) (幕)(一六、一一、一五―一二、三)



船中

水上瀧太郎

甲板に薄日を浴びながら今日も亦ぼんやりと海を眺めて居た。

夏の日の航海にも稀にしか日光を見ないと云ふ此の航海は、横濱を出た翌日から空も水も銀鉛色に鈍く曇つて朝から晩迄濕つぽい風の吹く日ばかり續いたが、今朝は珍しく東の空に雲切れがして、ほのかながらも秋らしく澄んだ空から斜にもれる日光に、海面も心もち蒼く輝いて來た。

出立の前の日に友だちの一人が無聊の航海中に讀めと云つて呉れたC教授の「新宗教の創造」を、今日こそは讀んでしまはふと思つて、日向に持出した安樂椅子に樂々と寢そべりながら、一二頁進んだが、又しても氣が乘らないので其の本を胸の上に置いたまゝ、愈々親しさを增して來た海原を眺めて居た。

どうしたものか船に來てからは、すべての事に對して根氣が無くなつてしまつた。見送りに來てくれた人には、それぞれ禮狀を出さなくてはならない、そ

れも彼地に着いてからは忙しくなるであらうから船中で書くがいゝ、と何から何迄自分の爲に心配してくれる母は、こんな細かい注意迄も度々繰返した。新橋の停車場にも横濱の波止場にも想ひも掛けぬ多勢の見送りがあつた。それは自分を見送つてくれた人であるか、自分の父や母に對する世間の禮儀として來た人であるか、それは知らない。中には曾て名前を聞いた事も無い人さへ居た。その人々に一々禮狀を出さなければならないと云はれたのであつたが、未だその仕事にも手をつけて居ない。「新宗敎の創造」は横濱を出た日から讀み始めた。僅に三十頁足らずの小册子だから本來ならば一時間もかゝれば讀み了る筈なのに、さて頁を開いてみると、如何しても一行を終へて次の行に移つて行く氣がしないのであつた。それが決してつまらないからではない、日本の官僚政治が神道をひろめ、武士道を打ち建てるのに苦心してゐる、それを指して新宗敎の創造と云ふらしく、まだ半分きり讀んで居ないからはつきりとはわからないが、隨分思ひ切つて書いてある。若しこれを日本人が書いたとしたら、近時殊に數を増して來た流行の功利的愛國論者から或は批難されるやうな事がないとも限らない。充分好奇の興味を引く力を持つてゐる筈だが、どうしても今の自分には文字を讀む努力が出て來ない。日に二三度は、今日こそ讀んでしまはふと思つて手に取るのであるが、直に又いやになつて、既に第一頁を開いてから日を經ても、未だに半分きり進行しないのである。

同船の客は皆無聊をかこちつゞけて居る。あけても暮ても雲と水の他には見るものも無い船の旅では、たまたま船の腹をかすめて飛ぶ一羽の鳥さへ、すべての人を甲板に馳け出させる程の力を持つて居る。喫煙室や甲板で催まれる種々の遊技も、次ぎから次ぎと倦かれてしまふと、後は所在なさに足並み揃へ

て甲板を歩き廻るより詮方が無い。從つて一日も早く目的の陸地に着く事ばかり望んでゐるのであつた。
けれども自分は此の人達とは全く違ふ心持を持つて居た。
自分は、父母の家を離れ、今迄身を置いた周圍の一切に別れて海に浮んでから、初めて此の年月古い人情のしがらみにとらへられ、思ひ切つて手足を動かす事を知らず、自分以外の人の爲に顧み勝に暮して居た姿が、客觀的に目に見えて來た。生れた家の爲に自分は意識しながらも、又は無意識にも、どれだけ自由を束縛されて居たか、全く服從しないにしても父母の名は自分の背に重壓を置いて居た。兄弟姉妹、それから數ある親類も亦自分にとつては桎梏ではなかつたらうか。一言しやべるにも一歩歩くにも父を思ひ母を思ふ事を忘れなかつた。その癖自分をいつくしむ事には極めて臆病だつた。
その昨日に遠ざかつて、今は自分を圍むものは此の見る限りの海原の他に何物もないと思ふと、ついぞ知らなかつた廣々とした長閑な世界が認められて來た。
それなのに自分はひどく疲勞してゐた。すべての煩累と別れたと同時に、すべてに張合ひが無くなつた。此の日頃自分の屢々陷つた過去の事將來の事など考へては、感傷的ななげきにひたる、そんな氣持もなくなつた。何を考へる力も無く、何をしやうと云ふ慾望も無く、たゞ心持よくぼんやりと、大洋の波濤のうねるまにまに搖られてゐる日の一日も長からん事が望まれるばかりである。毎日甲板の椅子に寢て、海と空を眺め暮し度い。
自分は性來海が好きだ。春夏秋冬を問はず暇さへあれば相模の海邊の家に水を見て暮すのを好んだ。殊に季節のうつりかはりの海の面にも著しく現はれる頃は、肉體にもそのうつりかはりのしみじみ感じ

られる爲であらうか、その日その日の波の色と共に自分の心もうつろひ行く心地がした。白けた冬の海の色も次第に蒼く輝きを増して、ゆたかに潮の湧きかへる春さきを、終日砂山の日あたりに寢て眺め暮した事も度々あつた。南風が吹き初めて、沖には兎波が踊り、水平線迄一色に眞靑に晴れ渡つた上に、まばゆく照りかへす强烈な日光を浴びて、水中に砂上に遊び疲れた長い夏も幾年かつゞいた。その夏も終りに近く、避暑地の人も大方は都に歸つて、再び水は冷く澄み渡り、水底の貝殼の眞白に透いて見える頃も忘れられぬ。海月の漂ふ海面に北風の吹き渡る曉、夜の間に流れついた海藻に荒れた磯の、冷い砂を踏む心地のなんとも云へぬうら悲しさに淚ぐまれる事もあつた。自分の心は靜な海にも、暴風の海にも、目に見る海にも、耳に聞く海にも、すべてに自分の感慨を寄せて友だちのやうになついて居た。

その爲でもあらうか船に來てからも自分は些かも無聊を感じなかつた。今迄見た海は、必ず陸地に限られた人里近い海だつたのに、今自分を圍んで起伏する海は、大なる圓を描いて空に連る水平線以外に何物にも限られぬ海である。そこに自分の知らなかつた新しい海の歡喜が自分を捕へてゐたにちがひない。

暫時の間、自分は珍しく透通つて見える海面を見て居たが、何時の間にか又空には暗い雲の影がはびこり、風も冷くなつて來た。それでも身體を動かすのが億劫なので、なほそのまゝ横になつて居た。

空然、コツコツと甲板を踏む足音が聞えたと思ふと、黑い服を着た牧師の姿が目の前に現はれた。

「Good Morning」

といつものやうに英語で挨拶しながら近づいて來た。

「御勉强ですか。—— The Invention of A new Religion ——。貴方は宗教書物をお讀みなさるか」

云ひながら自分が胸の上に置いた本を取上げた。

「宗教は僧侶のつくりしものなりと論じたるヴォルテア其他十八世紀の哲學者は皮相淺薄なりとて後代の學者の嘲笑するところとなりにき。然れども彼等の見解にも亦一理ある事なかりしか。吾人は目前に横はる事實を見落す事なきか。近世の日本は此點に關して好適例を示すものなり。日本人は一般に宗教心なき國民なりと云はる。彼等自身も亦然か云へり。近世日本文明の先覺福澤は曰く、余は宗教心を缺く、曾て一の宗教を信じたる事無し——」

どう云ふつもりなのか牧師は一度英文のまゝ聲高く讀み上げた後、かう飜譯して頗る滿足さうにうなづいた。

「これはいかん。福澤氏は成程明治の先覺には違ひないが、彼の人は所謂拜金宗の人だから此の場合の例として引くのは誤つて居る」

牧師はいかにも福澤氏を憎む調子でかう云つたが、フトつかつかと向ふに歩いて行つた。そのまゝ部屋にでも歸つてしまふのかと思つたら、さうではなくて、彼も籐椅子を引張つた戻つて來るのであつた。今度は自分に近々と席を占めたので、寢て居るのも失禮と思つて自分も起上つた。

「こゝに云ふ日本の新宗教なるものは、勿論自發的に起りしものにあらず —— 二十世紀の日本の忠義愛國宗は全く新しきものなりか。ハハア New Religion と云ふのは さう云ふ意味でいふのですか。これは面白さうだ」

と云つたが、その實牧師はつまらなさうに本をふせた。彼はそれが純粹の宗教の本ではなかつたので、期待がはづれた樣子であつた。

「一體如何なる事が書いてありますか」

彼は思ひついたやうに尋ねた。何か會話の緒口が欲いためである事は確かだつた。

「イエ、私もまだ半分きり讀んでゐませんのですが、今迄のところでは此の新宗教は全然役人のこしらへたものだと云ふらしいのです」

自分は會話の爲めの會話、殊にそのために無理に話材をこしらへて話しかけられるのは堪えられない。それにその時あまり口をきゝ度くなかつたので、成るべく手輕に切拔け度いと思ふのだつたが、先方は如何にも興味を覺えると云ふ樣子を示して、

「役人が宗教をつくつたと云ふと如何なる意味でせうか」

「ほんとにまだすつかり讀んで居ないからわからないんですが、日本にも西洋の民主思想が流れ込んで來たので、役人達がどうかして此の潮流を防がうとするに日も足りないなんて云つて居ます」

「ハハアそそんな事を云つてゐますか。それで」

「それから、日本の歷史家だつて實は信じてはゐないんだけれど、うつかりするとどんな間違を出すか分らないから口をつぶつてゐるんだと突込んで居ます。役人はその權力を以て此の宗教を打建てるのに忙しいと同時に、之に反對する者を懲罰するのに忙しい。その癖此の國程尊き人をいぢめた國は無い、島流しになつた尊き人も、殺された尊き人もあるなどゝ怪しからん事を云つて居ます。武士道なんても

のは千九百年以前の字引には何處にも見當らないと書いて居ます」

「では全く宗教書物ではないのですな」

「エヽ、基督教に關する本ではありません」

「貴方は宗教書物はお讀みなさらんか」

「私ですか。私も無信仰者の一人でせう」

自分は一語一語に仰山にうなづいて相槌を打たれるのが氣になつてしかたがない。なんとかして話が途絶えてくれゝばいゝと思つて居た。さうして自分ながら少ししやべり過ぎたと思ふいやな氣持から口をつぐむと、何時の間にかうす氣味の惡い雲の影のはびこつた海の果に目をそらした。

「無信仰」

牧師は自分の横顔に向つて吐息をするやうにつぶやいて、一人でうなづいた。

なんとなく其處に二人の間に調子の合はない氣分が重くなつた。自分はあまりすげない態度をとつた事に對して些かは悔ゐても居たが、ひけ目を見せないために强情に水平線を見詰めて居た。水鳥が低く水をかすめて飛んで居る。

「いやな雲が出たな」

彼は暫時して、取つてつけたやうにつぶやきながら立上つて、船端の欄干に身を寄せかけると、心配さうに雲行きを眺めた。直ぐと今度は姿勢を正して大またに歩き出した。狹い甲板の上を一定の步調で進んで行き、行き盡すとクルリと廻轉して以前の位置迄戾る。幾度も單調な運動を續けるのである。

牧師は默々として規律正しい散歩を續けて居る。すぐれて背の高い彼は猫背であつた。その首を前の方に突出して、牧師らしい姿勢をつくつてコツコツと步き續けて居る。

空も海も見る間に暗くなつてしまつて、風も少し加つたらしく、波頭が白く亂れて來た。それを背景にして、無言で同一運動を繰返して居る牧師の黑い姿を自分は見守つて居た。

突然彼はピタリと足を揃へて立止つた、と思ふと兩手を大きく開いて五六遍深呼吸をした。

「アヽア」

滿足さうに呼吸づいて、又自分の傍の椅子に來て掛けた。膝の上に額をのせて、うつむいたまゝ動かない。何か默禱して居るのかと思つて、自分はそのかがまつた背中、うす汚れた襟（カラア）から突き出た不器用に頑丈な首筋を、見馴れないものゝやうに見詰めた。

「貴方は無信仰と云はれたですね」

牧師は落着いて同じ言葉を繰返した。

「エヽ云ひました」

簡短な答へをするつもりで云つたが、あまり智慧のなさ過ぎた返事だつたのを直ぐと後悔して、苦笑しながらつけ足した。

「そりやア今日でも時には何か絕對の力を信じてそれに縋り度いと思ふ感情の起る事もありますが、その對象が神と云ふ觀念を形づくる事は殆んどありません。ですから私は今日敎會に集る人の口から聞かされる信仰は持つて居ません」

「けれども人は信仰なくしては生きられるものではないです。貴方にしても基督敎の神以外に何か信仰を持つて居られるでせう」
「神でなければ佛ですか」
「イヤ佛とも限らない。たとへば聖經の敎へでも、一般の道德でも、何かおのれを托する信仰がなければならない」
「さう云ふ手近にある對象にはどうしても宗敎的感情は起りません」
「それは貴方が神を信じて居られないからだ。信ずる者の目は神の姿を見、信ずる者の耳は神の聲を聞く」
牧師は俄に嚴かな口調になつて、會堂に集る信者に說く時の態度で自分の方に愈々近寄つて來るのであつた。
「現に私さへも一時は神の存在を疑つたのでした。しかしそれは私の信仰が足りなかつたので、眞に神を信ずる者に取つては神の存在は問題にはならないです。その人々は既に神と共に在るのですから」
一句一句會得させやうと力を込めて句切り句切り云ふのである。自分には牧師の云ふ事が今迄とは全く別の方向にむかつて行くのが感じられた。
牧師はぢつと空を仰いで目を閉じた。
「しかし貴方にしても神を求められる日が來るに違ひない。長き生涯の中には必ずその日が來るに違ひない」

あまたたびうなづいて云つた。

「サアどう云つたらおわかりになるか。ひとつ私自身の經驗をお話しして上げやう」

「又始まりますかね」

不意に異つた聲が聞えて、くつたくなささうに笑つた。ジァルトの商人大島さんは、はち切れさうな酒肥りの顏を笑ひに崩して立つて居た。

牧師は自分の爲めに特に身の上話を例にして求神の念を起させやうと考へて居た穗尖を折られたので、一寸不快な顏をして大島さんを見上げたが、强ひて笑顏をつくつて挨拶した。

「どうです山川さん、僕なんかは同室のよしみで毎晩寢しなにお說敎を聞かされる。一人坊主はいけないつてますが、いかさまほんとでさ」

今日は朝から飲んだらしく見える。

「イエ大變面白いお話しを伺つてゐます。これから牧師さんの信仰についての經驗談が始まるところです」

自分は氣の毒になつて、牧師のためにとりなさうとした。

「どうです、ゆつくり願ひませうか」

と世辭心から促すと、牧師は果して勢ひを得て大きくうなづいた。

「話せば長いです。私の生れたのは山間の貧しい村里でした。私は今こそ御覽の通り壯健ですが、幼少の折は極めて虛弱だつたのです。そのために早く神を求むる心が起きたとすれば、私に取つてはそれも

至大の幸福だつたかもしれません」

今更神の下僕たる身の幸福を主に感謝する樣を形に示して、彼は一瞬間目を閉じた。

「成程ね」

大島さんはつまらなさうにつぶやいたが、今度は、

「寒い寒い」

と仰山に身震ひして見せて、そのまゝ喫煙室の扉を押して内に這入つてしまつた。

「私は今でもその時の心持を忘れんですが、私の家の前には瀬の早い川が流れて居ました。そしてたつた一枚の板橋が渡してあるばかりでした。私はそれを渡るのが怖くて怖くてしかたがなかつた。若し此のまゝ水に落ちたら如何なるだらうと思ふと、そのやうな時には何時でも、神樣！私の身を守つて下さい、と知らず知らず禱るのでした」

そのかみを追想しながら、自分自身限りなき滿足を感じるらしく、次第に熱して來る語氣で續けるのである。

その間に他の船客も來て後に立つて默つて聽いて居た。

牧師は聽衆の殖えたため益々調子づいて、

「つまり私はその頃既に神に縋らなければ居られなかつたのですね。しかし勿論神と云つても、はつきりした考へがあつたわけではないが、間もなく小學校に通ふ頃に、私共の村に傳道に來た牧師さんがあつて、私はその牧師さんの子と同級だつた。度々その家に遊びに行く、するうちに基督敎の神と云ふは

つきりした對象が出來て來た。私は直ぐに洗禮を受けました。其の時分の事だから、私の村などでは切支丹と云つて非常に嫌つたものでした。牧師さんの子は學校でも耶蘇の子だと云つて、私の他にはあまり遊んでやる者もなかつた程です。であるから私は家の者には決して口外しなかつたが、かくすより現はるゝは無しで、或日お母さんが私を呼んで、お前は切支丹になつたさうだがそれは眞實か、と恐い顔して訊ねるのです。私はイヤそんな事はありませんと、口の先き迄出かゝつたが人を詐るのは罪であると考へて、お母さんの前にひれ伏し、實は私は洗禮まで受けた、しかし基督教は決してお母さんの思はるゝやうな惡いものではない、どうかお母さんも信者になつて下さいと云つて泣きました」

大島さんが敎へたのであらうか、喫煙室にゐたらしい連中がゾロゾロ出て來て彌兒馬らしい笑顔で牧師の話を取卷いた。非番の船員の顔もその間にまじつて居る。談話者は一巡聽衆を眺め廻して、更に一段大きくうなづいた。

「その晩私はお父さんに非道く叱られたです。私のお父さんと云ふ人は、いつこくな人だつたから、私の襟首をつかんでからに、性根を入れかへてやると云つて折檻された。私は打たれながらも、神樣！どうぞ私のお父さんの心を和らげて、私と同じやうに貴方を信じる人として下され、と禱つて居つたです」

話が全く身の上話に落て行つて問答を强ひられるわづらはしさのなくなつたため、自分は冷靜に牧師の態度を眺める事が出來た。

自分で自分の談話に一々うなづく彼の黃色い顔や、抑揚をつけた職業的な話し振りや、厦々厚い唇か

ら唾を飛ばす事などを不快に思つた。一見してその容貌や態度で、その人となりの如何を問はず、嫌ひな人がある、牧師はその部類に屬して居ると自分は考へた。

聽衆の中には椅子を運んで來て、悠々と落着いてしまつたのもあつた。なんとなく嘲笑を浮べた顔を此方に向けて、自分に對して意味あり氣に目くばせする人もあつた。

「恰度私が十四の年でした。大阪の或る牧師さんが村に來て傳道をされた事があつた。その時村の牧師さんの家で集會のあつた折、大阪の牧師さんの云はれるには、自分の監督して居る寄宿舍で受付を一人求めて居る、若し來る者があるならその人の勉强の出來るやうにはからつてやりもしやうと云はれたです、私は直ぐにも、私を連れて行つて下さいと云はうとしたが、待て、私は兎に角親の許可を得なければならんと考へて、その日家に歸ると兩親の前に自分の希望を殘らず打ちあけました。私は大阪に行つて勉强して牧師さんになり度いと云ふと、お父さんは又非常に立腹されて散々に私は叱り飛ばされた。しかし一旦思ひ立つたからには如何にしても決行しなくてはならんと思つて、その晩は夜中寢もやらず神樣に禱つたです。神樣！私は大阪に行つて學問して、一生涯貴方のために働かうと思ひます。しかしお父さんは許しません。私は如何すればよいのですか。私は一心に禱りました。すると、お前は正しき道のために飽迄も盡さんければならんと、私の心は答へるのです。それが神樣のお聲のやうに思はれた。私は或日お父さんが畑に行かれた留守にお母さんに迫つて、どうしても大阪に行かして下さいと泣きながらお願ひした。お母さんは勿論いけないと云はれたですが、あまり私が熱心だつたので、遂にはそれではお前の勝手にしろ、私はお父さんに對しては濟まないけれど、知らぬふりをして居てやるから大阪

へ走れ、それには愚圖々々して居つて故障が起るといけないから、一層今夜にも行つてしまへ、と云ふのです。そしてお母さんは私のために汽車賃をくれました。私は嬉しくて嬉しくてたまらなかつたが、人に氣取られてはならんと思つて、ふだんと變らぬ樣子で牧師さんの家やなにかにそれとなく別れを告げに行きました。お父さんは夕方歸つて來ても、先の日の事があるので私に對しては不機嫌で居られる。濟まない事だとは思つても何喰はぬ顏して夜を待ちました。新しい草鞋を寢床の下にかくして床に入りはしたが、もうお父さんにもお母さんにも暫時は逢へないと思ふと涙が止度なく流れて來た。そのうちに皆が寢靜まつたので、私はそつと身支度して思ひ切つて家を忍び出ました。その晩はいゝ月夜で、今も忘れないが、前の川瀬の音が雨のやうに聞えた。私は板橋を渡ると、越えて行く山路の方に急いだ。峠の上にのぼつた時、ふりかへつて見ると、月を碎いて流れる川ばかりはつきりと見えて、私の家は森のかげにかくれて見えない。私は其處に座つてしまつた。お父さんお母さんにお詫をし、又神樣にお禱りをした後で、今度は坂道を一散に馳け下りました」

牧師は語りながら自分の聲に醉つて居た。感慨に堪えぬらしく、夜逃げの顚末を終ると、又も聽衆の顏をヅラリと見廻して、うなづいた。

「それから大阪に行つてその牧師さんを尋ね、その寄宿舍で働きながら勉強したです」

「それでおうちの方は如何なりました」

人々の背後から氣のいゝ船長がニコニコした首を出して訊ねた。

「船長、貴方も聽いて居られたですか」

彼は得意さうに笑顔になつて、

「家の方は手紙で散々詫をしました。遂にお父さんも我を折つて、では許すから偉い人間になる迄は家に歸つて來るなと云ふて來たです」

牧師は又ひとわたり、聽衆を見廻したが、今度は誰も相槌を打たなかつたので、物足りなさうだつたが思ひかへしてうなづいた。

「その後私は或る西洋人に知られて、その人から學資を出して貰つて同志社にはいりました。私が自分の弱い性質と戰つて之に打ち勝ち、又神の存在を疑つて然る後に眞の信仰に入つたのも、此の同志社時代です」

と更に冐頭をかへて滔々と始まりさうに思はれた時、自分の隣りに腰掛けて居た一人が時計を出してパチンと云はせた。牧師は話の腰を折られてムヅムヅする唇をなめて默つたが、

「何時です」

と釣込れて訊ねるのであつた。

「もう直き正午です」

とその人は答へた。

「ひとつ其の神の存在に疑ひを起されたかんじんのところを伺はうぢやありませんか」

と聽衆の一人が後の方から聲を掛けた。

「では簡短にやりませう」

牧師は又大にうなづいた。

「前にも云つた通り、私は身體が虚弱だつたが、そればかりでなく精神も弱かつた。私はお父さんが非常な酒のみだつたゝめか、どうも酒が飲みたくてたまらない。そして時々は人にかくれて飲みましたが又良心の苛責と云ふものは非常でした。で私は幾度も神に禱り、おのれを責めて、遂に此の慾望を征服しました。その他さまざまの慾望が起る、それを悉皆退けたですが最も力强く私を苦しめたのは性慾でした」

云ふ時牧師は顏を赤らめて伏目になつたが、思ひ切つて勇しく面をあげると、一同を見廻した。その時何時來て居たのか人々の間に女客が二人手を組合つて寄添ひながら傾聽して居たのにフト氣が付くと牧師は今の言葉に眞赤になつてしまつた。うつむいて膝頭を頑丈な手でこすつて居る。

「それでどうしました」

意地の惡い笑顏をしながら訊ねた人があつた。牧師はドギマギしながら、

「それも亦苦鬪の結果漸くに退けたです」

と低い聲で答へた。一同は思はず顏を見合せて聲をもらして笑つた。

「サア續きを願ひませう」

と又さつきの聲が促したので、牧師は赤く染めた顏を上げると、例よりも大きくうなづいた。

「その頃の同志社と云ふものは、新島先生のなくなられた後で、非常に紊亂して居つたです。或者は公然と一同の前に立つて、余は神の存在を否定すると宣言する、或者は神若しあらば我罪を罰せよと叫んで

酒を飲む、あらゆる亂行が行はれた時代でした。私の信仰も何時か揺いでゐる、私には果して神が在るかどうかわからなくなつて來た。こんな疑ひを起してはいかん、惡魔(サタン)の誘惑に負けてはならんと思つて一心に禱らうとしても、心が亂れて居て禱れないのです。私は食事も出來ない程苦悶して日夜此の疑ひを打ち消さんがために闘つたが、いかん」

牧師は興に乘じて身振りまでして物語るのであつたが、折柄ヅウンと頭の底迄も響く正午の食事を報じる鉦が鳴り渡つた。

「アヽお正午(ひる)だ」

とつぶやきながら、直ぐと聽衆は崩れはじめた。

「アヽ、一寸待つて下さい。もう直ぐですから」

彼はつゝしみを忘れて高く叫んだ。すると中には笑ひながら行つてしまつたのもあつたが、又踵をかへして來て聞くのもあつた。

「しかし私は遂に神様のお聲を直接に聞いたのです」

牧師はその場合最も興味をつなぎさうな言葉を擇んだらしかつたが、なんとなく白けきつた事はどうする事も出來なかつた。

「或日私は又此の疑念に襲はれて靜座しては居られない程苦しくなつて來たので、野原を指して馳け出した。恰度秋の事で空は青く晴れ、草むらには野萩が咲き亂れ、晝日中でも蟲が微かに啼いて居ました。私は其處に眞つしぐらに馳りつけると、いきなり原の眞中に倒れてしまつたです。底迄も澄み渡つ

た大空を仰いで、力の續く限り禱りました、これが最後だと思つて居つた。若し神樣が眞にゐらつしやるならば、私の此の苦痛を救つて下さるに違ひない。若しかくまでに禱つても、此の苦痛がうすらがないならば、神樣は此の世にはゐらつしやらないのだと考へたのでした。私は必死になつて禱つた。一時間二時間三時間、たぶん其の位は禱りつゞけたでせう。突然何處かにさわやかな聲がして、汝等心に憂ふる事勿れ、神を信じまたわれを信ずべし」

牧師は一段と聲を壯重にして神の聲を繰返した。

「汝等心に憂ふる事勿れ、神を信じまたわれを信ずべし。約翰傳第十四章の第一句を、私はありありと此の耳に聞いたのです。同時になんとも云はれない清々しい心持になつて、今迄の胸の悶えは夢のやうになくなりました。たゞ神樣を信じなければならない、すべを主にお任せして只管信じなければならぬ。私は此處に眞の信仰を得たのであります。そしてそれからと云ふものは、私の信仰は微塵も搖いだ事がありません」

かう云つて一層力强く自らうなづいた。あまりに長い冒頭から想像した此の苦悶時代の告白が、意外に簡短に終つてしまつたので、人々の間にはなほ後が續くのかどうかを疑ふ沈默が殘つた。

「それでおしまひですか」

テキサスに行く靑年が邪氣の無い眞面目で訊ねたのを、なんと云ふ事なしに傍の人は皆笑つた。牧師も釣込れて一緒になつて笑つたが、直ぐと不快な顏になつて、答へもしなかつた。

「ぢやア御飯に行きませうか」

誰かと促したまでもなく、人々は散りちりに別れて食堂の方に歩き出した。

「山川さん、お食事です」

食卓ボイオが喫煙室から顔を出して催促した。

「今行く」

自分は云ひながら立上つた。

「どうも大變面白いお話でした。如何です、食事にいらつしやいませんか」

と誘つたが、牧師は默然として動かうともしなかつた。たゞ一寸笑顔をして又大きくうなづいた。

海は眞暗に雨雲に包まれて、水の色が凄くなつて來た。數を増した海鳥の群はけたゝましく啼きつれて船の周圍を飛び廻る。

自分が人々の後を追つて食堂の方に階段を下りて行く時、何處かで、

「今夜は暴風だぞ」

と船員の聲高に語り合つて居るのが聞えた。

船はその夜から嵐の海を悲しげに警笛を鳴しつゝ進んだ。

二日三日、濃霧は船室の窓の外迄ヒシヒシと押迫つて、舷側を打つ波濤の音はすさまじく聞えながら目に見えるものは、霧の中に降りしきる雨の風に碎けるほの白さと、愈々高まる波頭の甲板にうちあげる重吹ばかりであつた。

自分は初めて船に乗るのだから、きつと船酔に苦しむ事と覺悟して居たのが、此の暴風の日の間にも少しもひるむ事無く、人影の少ない食卓にもかゝはらず、卓上の皿やグラスが、はげしく船體の傾くため、器物の滑り落ち毀れないやうに框を張り廻したにもかゝはらず、アレと云ふ間も無く床に落ちて冴えた響を立てゝ砕けるのが、なんとも云へないいゝ氣持だつた。

自分は子供の頃疳癪が起ると茶椀や皿を叩きつけて滅茶々々に砕くのがおきまりだつた。後になつては自分の爲た事の普通はづれてゐたのが羞しくなつて涙ぐまれもしたけれども、其の瞬間に於ては大概のムシヤクシヤは、二三枚の皿の白く散る響で、さつぱりと消えてしまふのであつた。流石に心が大人びてからは、さういふ亂暴な快感を味ふ事もなくなつたが、時には苛々した氣持の堪え難く思はれる時二三十枚の大皿を手當り次第に粉微塵にしたら此の上もない嬉しい事だらうと想像する事もあつた。それが殆んど二度三度の食事の時に、彼方の食卓でも此方の食卓でも、何かしらころがり落ちてはチヤチヤランと鳴り響く、その度にいゝ音樂を聽く時の息の詰るやうな快感に襲はれると共に、子供の時分の事迄思ひ出してしめやかな氣持にもなつた。

波濤は甲板を洗ふ程だつたから船の動搖はもとよりはげしかつた。大きなうねりの上にゆらゆらと乗り上げたかと思ふと、今度は又深く水底迄も沈めて揺り下す、その度に人々は互に顔を見合せて不安の色を漂はせたが、自分はそれさへかゝはりのない心地で過した。恐らくは若し波浪のために船の沈沒する場合に際しても、落着いて、船員のうたふ「神の身近に」の悲痛な歌の節をしみじみ懐しく聽き得るらしく思はれた。

自分は喫煙室の長椅子に寢ころんでは、霧のために晝間も暗澹とした船室の寺院の中の壯嚴に似た靜さを樂んだ。多くの人が船醉に臥床を離れないので、何時もはうるさい程賑はふその室も、たまたまチラホラ人影のはいつて來る事はあつても直ぐに又引込んでしまふため、煙草の煙も漂はず森閑としてゐたのであつた。自分は緊張した氣分で「新宗敎の創造」を苦もなく讀了し、引續いて同じく鞄の中に入れて來た「投資の目的としての保險」と云ふ數字づくめの本さへ一息に讀んでしまつた。

そのすさまじくも心地よかつた暴風雨も次第に凪いで、名殘りの風は帆柱につれなく鳴つてはゐるが雨はもう遠くに去つて、白浪の鮮かに碎けて散る大洋の霧はあけはなれてゆく。自分は日に幾度となく濡れた甲板に立つてはちきれるやうに吹きつける風の中で變化の多い暴風の後の海を見て暮した。それは幾重の波の止度もなく高く重吹をあげて、斜めに傾いた船の甲板を洗ひ越すはげしかつた風雨の最中よりも、かへつて凄い景色だつた。深くはびこつた濃霧は吹き拂はれ、雲もちぎれちぎれに遠く消えて行くのであるが、廣い空の處々に暗くかたまつた黑雲は、なほ海面に重く影を落し、何處の海岸を洗つたのか波の上には夥しい芥が流れてゐる。飢えかつえた海鳥の群は、忙しく羽ばたきしては船の廻りを啼きつれて飛び廻る。たまたま日ざしの落る時、カツキリと明暗を限る海の色の雲のかげになつたところは紫黑色にどんよりと重く、日光を受けた部分は透通つて靑く、何れも毒々しく底知れぬ恐怖の色に目に迫る。かゝる時海邊の民の慘しく波に嵐に惱む姿を、物語や古い油繪に見聞きして幼時の頭に深く刻まれてゐた記憶もまざまざと蘇つて來る。燈臺守の親子の哀れな話はナショナル、リイダアにあつたのだつたと思ふ。自分は欄干につかまつて海面を覗きながら、暴風の名殘りのむごたらしい景色の中に

も自分の感情を浮べて居た。

今日は喫煙室の片隅に獨骨牌をやつてゐると、向ふの隅では紐育に雜貨店を持つて居ると云ふ田邊老人が例の如く船醫を相手に烏鷺をたゝかはして居る。時々船の動搖がはげしいと、磐面が崩れさうになつて白と黑とが痙攣したやうに震へるけれど、入り亂れる程の事はないのである。二人は全く無言だ。バチリバチリと置かれる石の響が細く澄んで聞える。

フト入口の扉があいて、大嶋さんを眞先きに四五人一かたまりになつて這入つて來た。

「サアサア、いゝ物をお目にかけます」

と大嶋さんは一枚の紙片を、手を高くあげて振りかざしながら、少しは酒氣もあるらしいのが喜色滿面で叫ぶのである。

「何か號外でも出ましたな」

田邊老人はバチリと石を置きながら振り向いてお愛想を云つた。

「號外も號外、大號外です。坊主の正體は此の一枚の紙つきれですつかりわかつた。彼奴は大嘘つきですよ」

彼は何時でも牧師を坊主と呼んで居た。その手にした紙片を中央の卓の上に置くと、側の椅子に腰を下して自慢さうにあたりを見廻した。

後からやつて來た船員や船客で珍しく賑かになつたゝめ、田邊老人も打止めて、人々と共に大嶋さんを圍んだ。自分も面白づくに其處に行つて肩越しに覗くと、人々は何か橫文で刷つたものを爭つて讀ん

てゐる。

「マア讀んでごらんなさい。今迄坊主の云つてた事は悉皆出たらめだつた事がわかるから」

大嶋さんは赤い鼻のさきを動かしながら落着き拂つたもので、人々に說明を與へて居る。

「あの先生も僕も横濱を出た日から同じ室に入れられたでせう。その晩から喧嘩でさ。僕がウイスキイの瓶をあけて寢しなに一杯やらうと思ふと、坊主め、此處で酒を飮まれちや困るつて云ふんだね。僕は飮まうと飮むまいと自分の勝手だ、君に干渉される事はないと云つて、癪に障つたから大に引掛けてやつた」

ムクムク肥つた手で大に引掛けた眞似をした。

「その晩ですよ」

人々にまじつて居た事務長もツイ誘はれてニコニコして云つた。

「牧師さんがやつて來られて、どうか私の室をかへてくれ、酒飮みと一緒は御免だと云はれるのです」

「どうりで不意に室を出て行つたと思つたら、そんな事を云ひに行つたんですね。それでどうしました」

「私はどうも他に空いた室はないから我慢して下さいと云つたのですが、なかなか承知されないのです。一日二日の航海ではない十四五日の長い間だと云ひ張られる。それでも實際他に室はないのですから拜むやうにして納得させましたがね、イヤ困りましたよ」

事務長は職として客の噂をしては濟まないと思ふ氣もあるらしく、聲をひそめて云つた。

「ハヽヽひどい奴だ」

大嶋さんは愉快さうに笑つた。

「それから毎日お説教が始まつたものです。第一に酒の害を説く、耶蘇の功德を講釋するね、散々です。僕ア云つてやつたさ。酒を飲んで君に迷惑をかけるやうな事があつたら、いくらでもお詫する。しかし一人で飲んで一人でいゝ氣持になつて居るばかりで、一度だつて管を卷いた事も無い。酒が惡いつてなア酒に飲まれるからいけないんだ、精神さへしつかりしてりやア惡い事はちつとも無い。ねえさう云つた理屈ぢやアありませんか」

「さうですとも」

「ところが坊主に云はせると、惡いものはあく迄退けなくちやアいけない、有毒な性質のものは何と限らず此の世からなくさなくちやアならない。だから酒が害をなす場合が想像出來るなら斷然禁酒しろとかう云ひまさ」

「そりやア極端だ。ナアニ貴方度を過しさへしなけりやア決して毒ぢやありませんよ」

と船醫（ドクトル）は相槌を打つた。

「イヤそりやアマアいゝさ。僕はそんな事はなんとも思はない。耶蘇の立場として船に乘つて西洋に行く途中でも人に禁酒をすゝめる、こりやア君、熱心がなくちや出來ないことさ。だがあの坊主はそれをダシに使つて自慢するからいやなんだ。二言目には、私が此度洋行するやうになりましたのは自分から希望したのではなく、信者が牧師さんに歐米を視察して來て貰つて、話を伺つたら、吾々平素職業にあ

くせくしてゐて到底西洋を見る機會のない者も、精神上得る處が多いに違ひないと云つて、皆で金を出し合つて旅費をつくつてくれたと云ふんでせう、なる程こいつはありさうな話さ」

「その話は私も聞きましたよ」

「僕も聞いた」

などゝ退屈まぎれに大嶋さんを取巻いて居る連中の誰彼が、同じ言葉をもらした。

「その通り皆さんに自慢したものだ。ところがどうです、それが眞赤な嘘なんだから。今朝食堂で、あの一番の室にゐる夫婦者の毛唐と顔を合せると、いきなり此の紙つきれを出して、牧師がこれを見せて寄附してくれと頻に云ふが、此頃はブリッヂで負け續けてゐるから金は一文も無いと返事をしたつて云ふのさ。先生毎晩私と船長を相手に鬪つて居るもんだから、そんな笑談を云つたんですよ。そこで私はその紙つきれを讀んで見ると、教會の信者が據金して洋行させて、精神上の利益を得るなんて目的ぢやなくて、大阪の教會會堂建築費が足りないんで、英米に金を集めに行くつて事がチャアンと印刷してあるぢやないか。物質的の利益さ」

「なる程此處に書いてある」

田邊老人は叮嚀にその寄附金勸誘の主意書を讀み返してゐる。

「一體なんのつもりでそんな見え透いた嘘をついたものでせう」

「自分が第一に神樣の罰が當らうつてものでさ」

「それにあの牧師さんは御婦人にばかり親切ぢやありませんか」

「これは驚いた」

ひとかたまりになつて其處にゐない者の噂をするのは時にとつての慰みであつた。いかにもカリホルニアに行きさうな人の形造つた船中の社交界も陸上のそれと變りはない。

「さう云へばさうですな。あの寫眞結婚の人としよつちゆう讃美歌を合唱したり、なかなか牧師さんも味をやりますよ」

「そりやアまだいゝさ。四番の竇女と口をきくのもあの坊主丈でさあね」

大島さんはあくまでも毒々しく攻撃の火の手をあげる。

「ヘエこりア初耳だ。なんですか、室にでも尋ねて行きますか」

「行きますとも。それがいゝや、チヤント聖書を持つて出掛けるからね」

一時に皆笑ひ出した。更に又惡口が笑談と入りまじつて室内をあかるく賑やかにした。

人々にまじつてゐる中に自分は何とも云へない不快さに襲はれて來た。僅かに二三日ではあつたけれど暴風雨の間に持つたやうな落着いた平安な氣分はこわされてしまつた。自分とても牧師の粗野な態度や偏狭な性質を好んではゐなかつたけれど、かく多人數が一團になつて、どうでもいゝ事を兎や角云ひ罵るのを見て居ると、弱い者いぢめを見せつけられる不快さが堪えられない。常に自分の心の底にわだかまつてゐる人間厭忌性が頭を持上げて來た。

自分はなほも罵り騷ぐ人々の間を拔けて、甲板に出た。そこでのぼせた頭を風に吹かせて居た。

牧師が女客に親切過ると云ふのは夙くに問題になつてゐたが、竇女云々は初耳であつた。その女と云

ふのは若い亞米利加の女で、船員の語によれば、香港から來たのだが手荷物も何もなく、衣服も一枚着たきりである。その言葉に從へば加奈陀のヴイクトリアに夫が待つてゐる、荷物は初め他の船で行くつもりだつたので積込んでしまつたところ都合が惡くなつて、身體丈遅れたと云ふのである。所持金も無いらしいのに酒も飲めば煙草も吸ふので、酒場（バア）の拂ひも出來ないで困つてゐると云ふ話も聞いた。

自分が船に乘つた翌日の夜であつた。甲板に出て一人で欄干にもたれてゐるところにその女がやつて來て、肩もすれすれに並んで立つた。暫時は默つて海を見下してゐたが、直ぐニコニコした顏をして話しかけて來た。思ひつきり肥つた赤ら顏の不別嬪だつた。ひどく早口にしやべるので、自分には大概聞き取れなかつたが、それでも何處に行くのか、何しに行くのかなどゝ云ふきまりきつた簡短な問答はしてのけた。よく見ると女の顏はたゞ美しくないばかりではなく、自分の最も嫌な猫に似た顏であつた。それで頰骨の出た顏の形や目尻にいやらしい皺の寄るのを見て居ると不愉快になつたが、それればかりでなく腋に汗臭いにほひが絕えず肥滿した肉體から迫つて來る。どうかして機を見てはづさうと考へてゐるところに三等運轉士（サアドメエト）が通りかゝつて、腋に意味ありげな笑顏を殘して行つた。

その晩前のやうな話を三等運轉士から聞いたのである。成程着のみ着のまゝでは臭ふ筈だと思つた。女は大概船室に引籠つて居た。勿論食堂になんか一度も出て來た事が無い。たゞ夜になると、人氣の無い甲板の椅子に坐つて、煙草をふかしてゐた。自分は屢々波の音のみ鮮かに響く暗闇の甲板に、一點の煙草の火を認めて哀れに思つたが、あの猫の顏と汗の臭ひは忘れる事が出來なかつた。

その女の事なのである。まさか若い西洋の女の室に男の方から押掛けるとは思はれないけれど、あの

第六感を缺く牧師の事だから、なんとも云へないかもしれない。彼がその慾情を征服するのに最も困難を感じたと云つて赤面した時の樣子を思ひ出すと、思はずほゝ笑まれた。

「How do you do?」

恰度その時牧師は階段口から顔を出して呼びかけた。

「しばらくお見えになりませんでしたね」

コツコツと一流の足取りで近寄つて來る彼に向つて自分は云つた。

「大分波も靜になつたやうですね。私は意氣地のない話ですが、全く弱つたです。船に乘つた最初の二三日も少し頭が重かつたが、その後船にも馴れたから、もう大丈夫と思つてゐたら今度の暴風で頭も上らない程惱みました」

「それはお氣の毒でしたね。しかしもう御氣分もいゝんでせう」

「Thank you」

と云つたが牧師は急に沈鬱な顔つきをして、

「しかし私は貴方方に對しても恥かしいです。一昨日は日曜だつたのに、私の意氣地のないため日曜に集會をする事が出來ませんでした。私は私の信仰の足りない事を恥じ、神につかへる事のうすいのを歎きました」

彼は又しても調子づいて來たが、その時喫煙室の窓の戸のあく音がしたので、口をつくんでしまつた。

「牧師さんも山川さんも來て下さい。今、緊急動議が起きたのですから」
テキサス行きの青年が其處から首を出して呼んだ。
「何ですか、緊急動議と云ふのは。行つて見やうではありませんか」
牧師は人の集るところでは必ずその中心にならなければ承知しない性質だつた。彼はその欲求に驅られて、自分を促し立てゝ室内に這入つた。
煙草の煙にうす暗くなつた室の中には殆んど船客のすべてが集り、重だつた船員の四五人もまじつて皆改つた顏つきで椅子に席を占めてゐた。
「サア、此處におかけなさい。實は今、大島さんの發起で、明日か明後日運動會をやらうと云ふ事になつたのです」
田邊老人は待ち構へてゐて口を切つた。
「つまり此の長い航海中一つの艦に乘り合せたと云ふのも何かの御緣だと思ふ(ママ)です。で吾々がお互に愉快に暮して、間も無く無事に目的地に着く、それは結構な事だが、着くと同時に折角おちかづきになつた方々ともお別れしなければならないので、なにかその前に別れの會とでも云ふやうなものを催し、併せて船員諸氏の勞にも些か報ゐたくと思ふのです。で何かと云ふよりも一同(みんな)で遊べる事がいゝから、晝は運動會をやり夜は演藝會を催しボォイの中の器用な連中に芝居でもやつて貰はふと云ふやうなわけです」
老人は年長者として此の一組の人を代表した落着きを見せて、平生から念の入つた本來の調子を更に

強めて述べるのであつた。
「つまるところ諸君の御賛成を得て、多少の御出金を乞ひ、それを萬事の入費にあて度いと云ふのであります、勿論御賛成下さる事とは存じますが、イヤまた船中の運動會も愉快ですからな」
老人は時代から世話に砕けて最後を結んだ。
「どうです山川さん、ひとつ大にやらうぢやないか」
大島さんは威勢よく云つて、又引掛ける眞似をした。
「エヽ萬事よろしく願ひませう」
自分はさう云つて、片隅の空椅子を求めて腰を下した。牧師は先刻から中央の大島さんの傍に席を占めて、一々うなづきながら聞いてゐた。
「いかがでせう、牧師さんにも是非賛成して頂き度いのですが」
田邊老人は殊更ニコニコして云ふのであつた。
「ではなんですか、運動會を催し、又後では何か演劇やうの事でもありますのですか」
「左様です、つまり一同樂しみを共にし度いと云ふのが主意なのでして」
「運動會はいゝですな」
牧師は例の如くグツト大きくうなづいた。
「ですが一體その費用はどの位かゝりますか」
「サアそれが第一の問題ですが、先づむづかしい事は云はないで、集つた丈使ふ事にしやうと云ふので

す」

「使ふと云つて如何なる事に使ふのでありますか」

牧師は如何にも考へ深さうに、ねつちりと質してかゝる。

「何もそんな面倒な事を云はなくたつていゝぢやないか。たかゞ一弗か二弗の頭割りなんだ。君なんか洋行までさせてくれる信者を持つてる人ぢやないか」

大島さんは話をかきわけて口を出した。牧師のしんねりした態度に癇癪を起してゐるのは様子に現はれて居た。牧師も大島さんの言葉にムッとして、相手を睨んだ。

「第一賞品がいらァね。煙草とか半巾とか、又は現金でいゝさ」

大島さんは構はずにたゝみ掛けてしやべらうとする。

「賞品なしではいかんものでせうか」

牧師はかう云ふ時わざとらしく力を籠めて云つて、その顏を稍々仰向けにして昂然とした。

「ハヽヽ、馬鹿な事を。賞品の無い運動會があるもんか。ナニ君。賞品を賭けるつたつて、たかゞなぐさみぢやないか。何も弊害は無いさ」

「イヤ實際そのしるしばかりの物でも何か賞品らしい物がありますとはづみが違ひますものでして」

田邊老人はとりなし顏になだめて、愛想笑ひをした。牧師は默つてうなづいた。

「イヤ誤解なさらんやうに願ひます。私はたゞ成べく手輕にやり度いと思つたので—

「勿論手輕さ。此の海の上で何が手輕でなくて出來るものか。賞品たつて實は名まへばかりのやうなも

のなんだよ」

大島さんは又續ける。

「それから君、芝居をやる連中、いろいろ働いてくれる連中の慰勞會の爲めにも若干入るし景氣をつけるには是非とも麥酒位なくちや氣の毒だよ」ボォイの中には器用な藝人も多いし、それに三等の女客の中にも二三人三味線のひけるのがゐるさうだ。どうしてもあの連中には下腹に毛の無い姐さんもまじつてるんだからね」

「私は御免かうむりませう」

大島さんが興に乘つてしやべつてゐる横から突然牧師は叫んで立上つた。人々の視線は驚きに輝いて彼の一身にそゝがれた。

自分は先刻からのなりゆきを無關心に眺めて居たが、些細な事に角目立ち、それも如何なる事に反對したいのか、つかまへどころもない程愚かしい牧師の態度を小面憎くも思つてゐた。

「御免かうむる。何故御免かうむるんだ。理由を聞かうぢやないか」

大島さんも氣色ばんでなじるのであつた。

「理由は簡短です。私はさう云ふ催しを好かんてす」

「嫌ひだつて云ふんならしかたが無い。けれども、折角この船の人全體の氣を揃へて遊ばうつて云ふのに、君一人いやだつて云ふのも變ぢやないか。賞品を賭けるのがいけないつて云ふのか、芝居をするのがいけないつて云ふのか、一體わけがわからないぢやないか。僕はむづかしい事に云ひ度くない。たゞ

君がさう云ふ態度を取ると云ふのは、御職掌柄にも似合はないと思ふんだ。喰べず嫌ひはいけないよ。君が卑しむ事がどんなものかも知つて置かなくちやいけない。悉皆（みんな）君、人生の事實なんだ」

　大島さんはいかにも堂々たる議論をしてゐるつもりらしく見えるのであつたが、人生と云ふやうな言葉を使ふ柄ではないので、なんとなくおかしかつた。

「イヤ私は人生の不潔な方面は見あきたです」

　牧師も亦一大問題の討議をしてゐる態度で熱心に云ひ張るのであつた。

「不潔。何が不潔なんだ。運動會をやるのが何處が惡いんだ」

「イヤ誤解してはいけません。私は運動會を不潔だとは云はんです」

「ぢやァ何がいけないんだ」

「私はその全體のやりかたが、貴方のおつしやる通りだと、面白くないと思ふのです。素性もわからぬ女に三味線をひかしたりなどして、一體芝居はあまりいゝ催しとは思ひません。殊に酒を飲まなければ樂しめんと云ふ理屈は無いですな」

「何故芝居が惡いんだね。それこそ理屈がないぢやないか。それに今聞けば君は素性もわからない女とかなんとか云つたが、そりやァ他人（ひと）に對して失敬ぢやないか。一體全體變に窮屈な事を云つて、耶蘇でない者を見ると、無闇に罪の子だとかなんとか云ふんだらう。僕ァよくは知らないが、耶蘇教は人を愛する教へだつて云ふんぢやないか」

「左様です。しかし罪のある者清からざるものを憎む事は、私をして云はしむれば、基督教徒の特權で

ある。あくまでも惡きものを排斥する。かくしておのれを淸く、世を淸く保つ事が、又吾々の義務である」

牧師は全く說敎をする時の調子で、ギゴチないヂエスチユアを用ゐながら云ひ切つた。

「しかし牧師さん」

田邊老人は、大島さんが憤然として何か云はうとして訥つた時、柔く聲が掛けた。

「成程惡い事を退けると云ふのは結構だが、何もその慰みに芝居をやると云ふのが惡い事とは思へないし、又少し位お酒を出しても別段罪惡呼ばりするにも當らないかと、マア吾々は思ひますが」

「そりやアさうですとも。一體私共は無學で耶蘇の方の事はわからないんだが、人間には樂しみつて事がありますさアね」

一人がたまりかねて口を出すと、又二三人同じやうな事を云ふので、

「ハヽヽ、牧師さん大分包圍攻擊を受けますな。どうです皆さんのおつしやる事だから贊成なさつては」

と船長迄も笑談めかして云ふのであつた。

「そいつはいけない。何も無理に贊成して貰ふには當らないんだ」

大島さんは船長の言葉をひつたくつて、

「たとへ吾々は樂みを共にしやうつて云ふんで一應皆に相談しただけの事で、何もわからない人間迄無理に贊成させやうつて云ふんがやないんだから」

「イヤ私も遺憾です。折角諸君の計畫された事も、不幸にして目的をあやまつて居るので賛成出來ません」

「何が目的をあやまつてるんだ。自分のわからずやを棚にあげて」

「わからずやですと。貴方は人を侮辱なさるか」

牧師は一度坐つたのが、又勢ひよく立ち上つた。

「目的をあやまつて居るではありませんか。諸君。樂みを共にしやうと思はるゝなら、他にいくらでも高尚な娛樂がありませう。一堂に會して淸い談話を交換するとか、又は誰人かに有益な話をして貰ふとか」

「馬鹿なッ。君の他にお說敎なんかしたがる人間はゐやアしない。そんなに說敎が好きな癖に、一昨日の日曜はサアヴイスがなかつたんだね」

「お默りなさい」

牧師は眞赤になつて怒鳴つた。

「惡口もいゝ加減になさらんか」

「イヤ君、さう怒るものぢやないよ」

大島さんはかへつてわざとらしく落着いて聲までもをだやかに、

「僕はたゞほんとの事を云つた丈なんだ。それに又たとへ惡口だつたにしてもだね、怒るつて事はないさ。耶蘇は右の頰つぺたを打たれても怒らないで、左の頰つぺたを敵に向けるつて云ふんぢやないか。

こいつア此間の晩君に聞かされたんだから確かだ。その時僕が云つたさ。そんなべら棒な事があるもんか、そんなら君にもそれ丈の悟りがあるかつて云つたら、君は勿論だと云つたぢやないか。あれはほんとなんだらう」

大島さんは意地の悪い笑ひを浮べながら、たゝみかけて問ひかける。牧師は怒をかくす事が出來ないで庻い額に筋を走らせて突立つてゐたが、此の時グツト落着きを見せて、稍〻震へを帯びた聲で云つた。

「勿論です。吾々は如何なる迫害をも忍んで受けなければなりません」

「それがほんとなら今僕が、いきなり君の横つ面を張り飛したらどうだね。それでも君は怒らないか」

大島さんは牧師の目の前に顔つき出して云つた。

「怒らんです」

「きつとか」

大島さんは突然叫んで拳を振上げた。ハツト思つた瞬間に、船長が危うくその手を押へた。

「どうしたんです大島さん、そりやア亂暴過る」

田邊老人もその他の人も、彼を抱きかゝへて、なじるのかなだめるのか、さゝやき聞かせる、牧師はあつけにとられてキヨトンとして居た。

「ナニ放して下さい〳〵構ふものか。當人が承知なんだ、一番試してみなくちやア」

「そりやアいけない。牧師さんも亦大概になさりやアいゝのに」

「イヤ私はあく迄も屈せんです」

「それがおだやかでない」

老人はオドオドして手ばかり振つて居た。

「サア兎に角貴方はお室の方に」

事務長が人をかきわけて出て、牧師の手を取つて引張つた。引張られるまゝに牧師は喫煙室の外に出たが直ぐに其の姿は事務長と並んで船室に導く階段口に沈んで行つた。

後は又ひとしきり牧師を罵る嘲笑が何時盡るともわからずに、皆の口からほとばしり出るのであつた。

自分は芝居のはねた心地で立上ると、又甲板の潮風に吹かれに出た。

荒狂つた風雨のあとも殘り無く晴れた。そらぞらしく凪ぎ渡つた海面に、日光も光り輝いた日の午後から、甲板の上で運動會は催された。

世話好きの四等運轉士と物馴れた賄方を相手に、大島さんはシャツ一枚になつて準備をした。廣島山口あたりから、遙々亞米利加の野に働いてゐる見た事もない男の妻となりに行く寫眞結婚の女達も、穴藏のやうな船室から出て來て、火夫やボオイにまじつて、旗拾ひに綱引に笑ひ興じた。勝つた者は一段高いところにひかへた田邊老人の手から、それぞれ賞品を受け取つた。

かゝる船中の小社會の長閑な集りの中にも、牧師だけは見えなかつた。時折、今日は人氣の無い上甲板を聖書を手にしながら、何か禱るやうにつぶやきながら、コツコツと規則正しい歩調を取つて往きか

「サアニ君は馬だ馬だ。その身體だもの、馬には持つて來いだよ」

云ひながら無理やりに自分の上着を脫がしてしまつた。

自分は人々の笑聲の中で目かくしをされて、小柄な船長をおぶつた。ひとつ思ひ切つて誰でも構はずぶつかつてやらうなどゝ、酒機嫌は心地よくそゝのかすのであつた。

合圖の笛と同時に向ふ見ずに馳け出した。何かに突當る迄行くに限ると思つた。滅茶々々に馳けた。乘手の船長が耳を引張つたので、方向を轉じて、又眞一文字に引かへした。途中で、誰だかわからないが二三人と、いやつて云ふ程ぶつかつた。相手は倒れたやうだつた。ガムシャラに決勝點に飛び込んだ。

「一等々々」

船長は目かくしを解いてくれながら、田邊老人の手から受け取つた敷島の箱を高く振り廻した。

「どうです。だから君は馬には持つて來いだつて云つたんだ」

大島さんはハアハア息を切らしながら目かくしを取つた。

「サア祝盃々々」

自分は自分でもおかしいと思ふ程はしやぎ切つて、又人々とうちつれて酒に走つた。

その夕ぐれ、海は疲れたる人々の心にやはらかに暮れて行つた。

暗い海を吾々の船は舳に一點の灯を高く揭げて進んだ。その船室の內部では、華かに燈火をつらねて後部の廣い三等室に設けられた舞臺を前に、人々は笑ひさゞめいて居た。

××丸演藝會御中とうす墨の滲んだペラペラの引幕の奥から、浮氣な三味線のもれて來るのも、折柄なれば單純なしめやかさを添へて居た。

忠臣藏七段目をしくんだ茶番が濟むと、今度は何の芝居ともわからない斬つつ張つつの一幕が、始めから無邪氣に喝采の機會を待ち構へてゐる見物の拍手に値ひした。橋袂に傘の雫を切つて待ち伏せして居た百日かつらの男が、向ふから來る俠客らしいのを呼び止めると、うぬア何處其處の誰それだなと、俠客がせき込んで云つた。なんだかちつとも見當のつかないものだつたが、柔道の手を使つた猛烈な立廻りのあまり熱心なおかしさに、誰も彼も腹を抱へて笑つた。

少し酒氣を帶びた船員の足下の危ない劍舞に次いで、暇さへあれば讀書してゐる食卓のボオイが、琵琶をかゝへて出て來た。彼は洗ひざらしの浴衣に借物らしい短い袴をはいて、羞しさうに一禮した。蒼白い血色の黑い顏を仰向けに目をつぶると、震へを帶びた聲でうたひ始めた。

その父は彼が母の胎內に在る間に行衞をくらました。その母は產後の病で死んでしまつた。ボオイは生れながらに父母を知らなかつた。年老いた祖母の手にはぐゝまれ、祖母の亡くなつた後は、人々のなさけで育てられた。

「陸に上つてもつまりません。歸る家もありませんから」

乘合ひの客に問はれるまゝ、彼は重い口で答へるのであつた。そのボオイにかくし藝があらうとは思はなかつた。自分は琵琶は好まないのだが、孤兒の聲は細く悲しく、その琵琶の聲も哀れなので、聽いてゐるうちにも親の無い子の生ひ立ちを思ふしめやかな心であつた。

それが終ると又落語材料の茶番があるのであつたが、聾の酔も覚め果て、なんとなく心ものうく、身體はだるく、睡氣さへ催して來たので、一人ひそかに酒場を志して席をはづした。

月の無い夜の海をつゝむ空のあちこちに、細かい星屑のちらめくのを仰ぎ見ながら船橋を上る時、欄干に置いた手の平に冷々と夜露が感じられた。

酒場の戸はしまつて居た。酒場ボオイも、今夜は茶番の手助けでもしてゐるのだらうと思つて、呼鈴を押すのは思ひ上つた。

遙かなる空を見詰めてゐると、星あかりに心が引かれて行く。自分は左舷の欄干に寄つて、海の上の此の秋の一夜を云ふばかりなくなつかしいものに思つて佇んだ。

今立去つた船室から、かすかに夜風の持つて來る三味線にまじる鉦の音の、とぼけた拍子を耳してゐると相模あたりの海邊の村にかゝる夜を寂しく過した日の事なども思ひ出されて來た。夏の間の繁昌もあわたゞしく過ぎて行けば、避暑地の町は土の底から悲しさが湧いて來るやうにひつそりする。夜毎夜毎鎮守の森で村の若衆の秋祭の囃子の稽古が始まり、鄙びた笛太鼓が冷やかに澄んだ空氣を通して聞えて來る。海邊の好きな身にも其頃の底の知れない寂寥には俄に都戀しさがはげしくなつて、突然東京の家に歸つてしまふ事もあつた。

フトそんな氣持に想ひ浸つた自分は、それから引きつゞいて、海の向ふの遙かなる故郷の家の事なども想はれて來た。今は父が夜毎の寢酒の時間である。著しく量も減じ、直ぐに酔ひの現はれるやうになつた父の盃を持つ手は、僂麻窒斯の惱みで震へてゐるであらう。側には母が田舍に住む兄や姉の許にこ

まごました手紙を書いてゐるに違ひない。弟妹達は明日のリイダアの下調べも終つて、自分達の部屋に枕を並べて眠つたであらう。自分には慈愛深き父母であり、優しい妹であつた。我家にゐた時その人々につれなく、父の言葉には屢〻背き、母をして自分の爲に心を配はして涙ぐませた不孝の子であり、弟妹にはついぞ優しい言葉ひとつ掛けた事も無い氣むづかしい兄だつた事も、しみじみ悔まれて來た。かうして外國に出てしまつたら二度と家には歸るまいと時々は考へもした、そんな心をかりそめにも持つては濟まないと思ふと、愈々心弱くなつて、欄干に置いた自分の手の甲に額をつけて目を閉じた。此の頃の身に知らなかつた柔かななつかしさが自分を捕へて、海も空もすべてその心地の中にとけて流れ入るやうな氣がした。

暫時、其處にそのまゝ、舷側(ふなばた)に來ては碎けて引く波の音に聞くともなしに聞き入つた。

フトかすかに人の足音がした。自分は思ひも掛けなかつたので驚いて振りかへつたが、それは空耳だつたのか、あたりには誰人の姿も見えない。波の音にまじつて、それよりもつと微かに茶番の囃子が聞えて來るばかりである、けれどもなんとなく心が亂れて動悸がして來た。

又暫時耳を澄して居ると、たしかに其處いらに人の氣配がする。どうしたのか其の時の自分には何か思ひも掛けない不祥な事が身近に起りつゝあるやうに感じられた。

自分は足音を忍んで喫煙室の窓の下に忍び寄つて、内前(なか)の氣配をうかがつたが、其處には誰もゐないらしい。ひそかに扉をあけて覗いても果して誰もゐなかつたが、その時少し聲高に何かさゝやき合つてゐる人聲と、右舷の甲板を歩く足音とが耳に近く迫つて來た。どうしても何か重大事が、自分の目の前

に起りかけてゐるらしく思はれてしかたがなかつた。自分は自分の心を失つたものゝやうに、その物音に誘はれて喫煙室を横切ると、反對の側の窓の細目にあいてゐる透間から外を覗いた。

星空をうけてうすら蒼い水あかりの漂つてゐる甲板に、腕を組んでゐるのか肩と肩とを抱き合つてゐるのか、二人の人の一つになつた黒い姿が、此方に背をむけて動くともなく動いてゐた。と思つた瞬間に、その一人は彼の着のみ着のまゝの亞米利加の女だとわかつた。しかし相手に誰だらう。自分は好奇心に捕へられてしまつた。息を殺して見てゐると、人影は靜に、自分の位置から見える限りを遠ざかつて舳の方に行つてしまつた。それでも自分は再び其處に、自分の身を寄せた窓の前を通る二人を豫期して動かずに忍んでゐた。

間も無く又話聲が聞えて來た。それは女の早口な英語で、何かさゝやいてゐるのらしい。つゞいて前と同じ姿勢ではあるが、今度は此方に向つて引かへして來た二人が目にはいつた。男は牧師だ。うす暗がりではあるけれども、丈高い彼の特有の足取りが自分を驚かした。

牧師は肥つた女の肩を抱いてゐる。一歩一歩と運ぶのも、身を寄せかけた女の重さを支へる爲によろめくので、忍ぶ足音もあたりの靜寂な丈高く自分の耳を打つた。

自分は其場のなりゆきから、如何に次の瞬間が描き出されるかを注視しやうとする熱心と、人の秘事を透見するのは卑しい事だと自分を責める氣持と入りまじつた混亂の中にあつた。自分が此處に透見してゐると云ふ事が、見つかりはしないだらうかと云ふ掛念もあつた。俄に自分の身をかくし度くなつた。それでもその場を立去るのには、あまりに好奇心が强かつたため、そつと窓際から顔を引込めると、室

の片隅の長椅子に腰掛けて、様子をうかゞはふとする根性が又自分を誘つた。うす暗がりを手探りで長椅子のところ迄たどつた時、その側に置かれた人造石の卓子に指先きがつめたく觸れた。その上に灰皿があつた。それに氣がつかずに、一度差し延べた手を引かうとした手首にかけて床の上に音高く落してしまつた。

銀製の物の音の石造の卓に觸れて響いた時、自分はそれを押へ止めやうとしてあわてた拍子に椅子の脚を蹴飛ばした。いきなり喫煙室の扉をあけると、直ぐとつゞきの階段口から船室の廊下に馳け下りた。誰も其處に居なかつたのでホツトした。ひどい動悸だ。自分はわざと平氣を裝つて大またに歩いて自分の部屋に歸つた。

惡事の露顯したやうな胸のときめきと爲す可らざる事をしたために受ける恥辱の念とに惑亂してゐた。胸は高く波打ち、足はかすかに震へてゐた。

暗がりの室内の椅子の上に仰向けに寢ころんで、なほ聞き耳を立てゝ居た。甲板の二人はどうしたらうと思ふと氣がゝりだつた。まづい事をした後悔、逃げ出さなくてもよかつたと思ふ後悔がこんがらかつてしまつた。透見をした自分の下劣な姿がありありと見えた。

その時、廊下をあわてゝ逃げて行くやうに過ぎ去る足音がして、彼の女の部屋と思はれるあたりで、戶に觸れる鍵の音が聞えた。直ぐに又その戶のしまる音がした。さうしてひつそりした。

圓窓の外に近い波の音が又韻律的に聞えて來た。

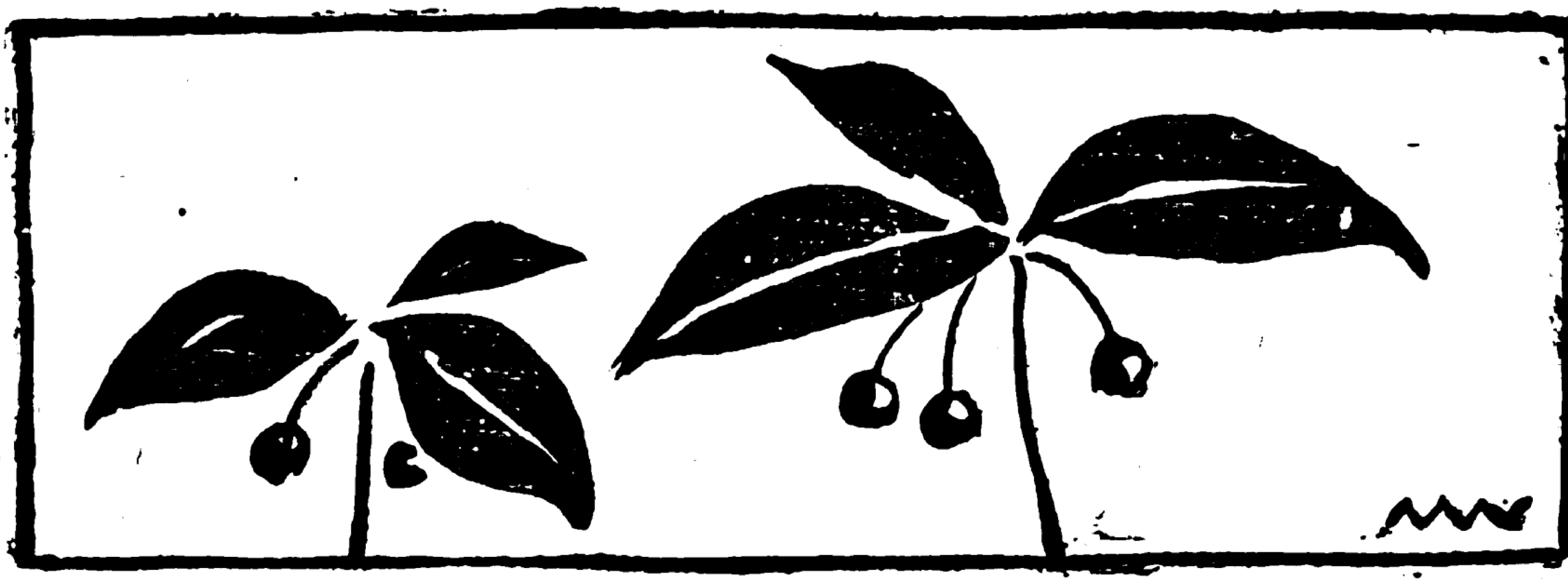
フトその玻璃戶を透して、冷々とした秋の空に夜更けて數を增した星屑の輝くのが見えた。(大正元年

起稿――中止――三年八月續稿、同月二十三日稿了）

附記。此の一編を發表するのは自分にとつてかなり考へものだつた。大正元年の暮から二年の春にかけて亞米利加の學校町の下宿の二階で學業の忙しかつた間に八分まで書いた。しかし中途でいやになつてやめてしまつた。三年八月紐育のハドソンに近い宿の暑苦しい一室で英吉利に渡る準備の爲め旅鞄を整理した時その他にも夥しくあつた書きかけの原稿の大半は破いて川に流してしまつたが此の一編はそのまゝ手もとに殘したばかりでなく不思議にも稿を續ける氣になつた。しかし稿了の後又いやになつて鞄の底に投げ込んだまゝ五年の秋歸朝した迄くすぶつてゐた。

自分は此の二三年初めて藝術の作品の價値がわかつたやうな氣がする。さうして自分の書いたものゝ下らなかつた事を恥ぢた。偉大なる作家の作品を讀めば讀む程自分に愛想がつきた。自分が何も書かなくなつたのはそれからである。

今度歸つて來ても自分は當分何も書かないつもりだつた。ところが親友澤木梢氏が「三田文學」の編輯主任になつていろ〱計畫してゐて自分にも是非加勢しろと云ふのであつた。友だちの爲ならと思ふ自分の性狀はどうしてもいやと云はせない。しかし何も書きたくないので即ち此の五六年の間に書きちらしたもので偶然破棄されなかつた原稿數百枚を鞄の底から取出して全部澤木氏の手に任せる事にした。五年十二月の「三田文學」から連載しはじめた「海上日記」もその中の一編である。「船中」もその中の一編である。「中央公論」に寄稿するやうに依賴された時自分は今全く何も書けない、書きためたものは悉皆意に滿たない、さうしてそれはみんな「三田文學」に送る約束になつてゐるからとても駄目だと思つて頂きたいと述べた。ところが此の話を聞いた澤木氏はかへつて自分に寄稿應諾を勸めた。即ち此の一編は同氏の厚意で「三田文學」から貰つたものである。久しぶりで讀み返して自分ながらまづいと思つた。一言にして云へば下らないのである。訂正する氣もないので今度はたゞ淸書したゞけだ。餘計な事だけれども自分の氣が濟まないからこれだけの事を書き足した。――大正五年十二月九日――水上瀧太郎。



禮拜

田山花袋

一

秋の彼岸の三千禮には、順番で今年は何うしても出なければならなかつた。一日一千禮の佛名を唱へるとしても三日かゝる。朝の八時から夕の五時近くまで。ちよつと午飯の時間休むだけで、あとは立ち通しでゐなければならないのである。

「丸で足が棒のやうになるからね。成るたけは誰れかに讓りたいが、さうも行かんかね」からAといふ三十五六の僧が言つた。

「だつて、君は去年も何の彼のと言つて休んだんだから、今年は免かべからざる次第だね。」

Gといふ僧が笑ひながら言つた。

「何しろ、あれをやると、一週間位體にたゝるからね。膝の節が旨く曲らないやうな氣がするからね」經驗があるので、誰も彼も皆なかう言つて笑つた。

「それに、今年はAさんに出て、心をやつて貰はないと困る。」

Gが言ふと、
「Kさんは何うした。」
「Kさんは東京に行かなければなりませんから。」
「東京行か？　東京行の方が好いな。自働車でも飛ばして、のんきに遊んでゐても誰も知らないからな。」
こんなことを言つたが、Aは仕方がなしにそれを引受けることにした。大きな寺の事務室、其處にAは住んでゐた。近くにある自分の寺から通つて來ても好いのだが、面倒臭いので、宿直旁Aは其處に起臥することにした。六疊の一間、それにつゞいて三疊の副室がある。六疊の方には圍爐裏の上に鐵瓶がかけてあつて、茶器が布巾に蔽はれたまゝ其處に置いてある。いつでも客が來ると茶が出せるやうになつてゐる。その傍に机がある。それに書類やら本やら雜誌やら新聞やらが藏つてゐる。Aは其處で一山に關する煩雜な事務を取つた。
Aとその一室との間には今では密接な空氣と氣分とが醸されてゐた。Aは其處に二三年起臥した。飯時分になると、下男が持つて來る精進物の食事、油揚か、大根か、さうでなければ汁か、それを菜に、Aはぼそぼそと夕の酒のあとの食事を濟した。そして醉つて汚れた蒲團の中に丸くなつて寢た。日は明けて暮れた。月は年と經つた。女のゐない生活はみじめなものだが、又一方甚だ簡單なものであつた。同僚が二三人寄ると、「何うだ、薪水の勞を取るものがもう出來ても好さゝうなものだがな」とか、「明るい顏をした奴が一人傍にゐると朝起きた時でも氣分が違ふんだがなア」とか、「もう好加減に、持つても

好い時節が來さうなもんだが」とか言つて皆なして笑つた。異性といふものに緣の遠いかういふ人達には、女は美しい樂しい何とも想像の出來ない快樂の對照のやうに誰にも思はれた。處々で目に觸れる派手な色彩、見たゞけで却つて此方が辛くなるやうな光景、見物人の多く入り込む山だけに、一層さういふ刺戟と印象とが多かつた。Aもよくその室で女のことを思つた。それも、普通の人のやうにはつきりと攫んだ一人の女の印象ではなく、多くの女の美しさと派手やかさと色彩とを一緒に集めたやうなものであつた。東京に行つた時の人知れない歡樂も、長い間その記憶から離れやうとはしなかつた。

一山の幹部では、此頃さういふ話が持上つてゐた。妻帶の話、――表面は行ひすましてゐても何うしても一人持たなければならないといふ話、妻を公然持たないがために却つて種々な非難が多いといふ話、それは數年前から始まつてゐることであるが、元老達がやかましいので、持上つては消え、消えてはまた持上つた。今の中、幹部を動かさないと、その人達も老人になつて了ふ。老人になつて了へば、今まで堅固に行ひ濟した折角の名譽を打壞してもつまらないと言ふので、ついふいになつて了ふ。『今の中、何うしても幹部に持たせる算段をしなければいけない。』から若い連中は先に立つて騷いだ。幹部は幹部で、『時勢が違ふのだ。昔とは時勢が違ふのだ。何處の宗派でも、今は妻帶は公然の事實になつてゐる。公然と妻帶しないから、我々に對するいろ〳〵な世間の非難が起るのだ。女に關した事件以外には、我々は世間に對して攻擊される何物もない。元老連が因循して、かねないでも好い世間をかねてゐるからいけないのだ。我々が率先して、妻帶しやう。有効に妻帶しやう。でなくては若い者が可哀相だ。我々が嘗めて來た苦痛を若い者に再び嘗めさせるのは忍びない』からS院や、G院や、K院が先に立つて

動いて、一山の憲法の大改革をして、揃つて一緒に妻帶しやうと言ふ話がそこゝから洩れてきこえた。

「大分、面白い形勢になつて來たぢやないか。」

「まだ、何だかわからないよ。G院にしろ、S院にしろ、いざと言ふと、腰が弱いからな。元老から何か言はれると、すぐへこたれて了ふからな。」

「さうでもなささうだぜ、今度は――。」

AやGやKなどの若い組は、こんなことを言つて笑つた。

二

明後日から秋の彼岸の三千禮が始まらうとする晩、Aは突然一通の電報を受取つた。封を切つてそれを見たAは、急にそは〳〵し出した。ゐても立つてもゐられないやうな氣がした。机の上の時計を見たが、生憎留つてゐるので、わざ〳〵立つて廊下にかけてある大きな時計を見に行つた。

七時二十分だ。

最終の列車、山に着く最終の列車は九時だ。何うしたら好からうと思つた。また女が何うしてさう急に思ひ立つて出て來たらうと思つた。くに――と書いてあるから、あの女に相違ない。「秋にでもなつたら、見物にやつて來ないか」かう言ふと、「行くわ、屹度行くわ。忘れてはいけませんよ」と言つた。しかしまさか出て來るとは思はなかつた。かういふ電報を突然打つて寄さうとは思はなかつた。來るなら來るで、前に手紙でも寄して置けば好いのに……。かう思つて見たが、今になつて何うすることも出來なかつた。

しかしこの一山の内で、多い人目の中で、何うしてAは女、殊にさうした女と一緒に歩いたり何かすることが出來るであらうか。何處に行つても、大抵は知つた顏である。すぐわかる。すぐ知れる。そればかりではない、そんなことをすると、折角面白い形勢になつてゐる妻帶說もすぐ打壞される。『見ろ、あのざまを』と言はれる。それに、第一、自分の身からして考へて見ても、あの女と一緒に、この山内や町なんか歩かれない。夜でも歩かれない。

Aは當惑した。いつそ默つて知らん顏をしてゐやうかとも思つて見た。しかし、女はやつて來るに相違ない。今夜來なくも、明日の朝はやつて來る。『Aといふ人はゐますか』かう言つて來られては、一層大變である。それに、Aにはその電報の來たことが嬉しくないことはない。このまゝ逢はずに返して了ふのも惜しいやうな氣がする。秘密の歡樂、さういふものも強い力でかれに迫つて來る。

Aはうろうろしてゐたが、その次の瞬間には、ふと好い考が浮んだ。『さうだ、さうだ』と思つた。向ふから來る終列車と三四分間を置いて、W町に行く下りの終列車が出る筈だ。それに乘つて、跡へ引返す。W町は知つてゐる顏が多いから、I町なりK町なりで下りる。……そこには旅館もあれば、料理屋もある。何うにでもなる。かれはほつとして呼吸をついた。つゞいて、今度は何ういふ口實で一日内を明けるやうに話さうかといふ心配が出て來た。何と言つて、これから暇を貰つて出かけやうか。さうだ、W町にあの用で行けば行かれる用がある。それに、捨てがたい私用が出來たやうに話す。『さうだ、さうだ』かう思つてゐる中にも、時間の經つことを氣にしたかれは、急いで法衣を引かけて、其處を出かけた。法衣が第一氣にかゝつた。法衣の上に被布を着たが、この扮裝で、この帽子を冠つては、何うしても

僧侶である。女と一緒に話したり歩いたりしてはすぐ人目を惹くに相違ない。Aは今更ながら不自由な不便な不自然な自分達の生活を思つた。しかし何うすることも出來なかつた。普通の人の着る着物などをAは持つてゐなかつた。

S院に寄つて、その話をした。早速承知して呉れた。別に怪んでゐるやうな様子もなかつた。Aは安心した。しかし丁度そこで二三人幹部が寄つて酒を飮んでゐたので、そのわる留を振切ることが出來ないで、時間がまた少し經つた。かれは停車場へ行く前にもう一軒寄らなければならない處があつた。頻りに留るのを、遲くなりますからと言つて、振解くやうにして、漸くにかれは出て來た。

Aは急いで、闇の中の、石のごろ〳〵する道を杉森の方へと下つた。

杉森の中に灯がぽつつり一つ見えた。それはかれが常に金の融通などをして貰ふ土方の親方が住んでゐる家だ。急いでかれはその表口から入つて行つた。

上さんが出て來た。

「親方ゐるかね。」

「まア、お上んなさいまし――。」

「大急ぎで、頼みたいことがあるんだ。上つちやゐられないから。」

上さんが引込むと、親方がすぐ出て來た。

「まア、お上んなさい」といふのを强ひて押へて、急用で、終列車でW町まで行かなければならないが、銀行が駄目だから、三十圓ばかりちよつと融通して呉れないか、歸つて來たらすぐ返すからと頼んだ。

親方はすぐ承知して呉れた。Aは金に堅く、町にもかなりの信用があつた。

引込んで行つた親方は、すぐ金を持つて來てAに渡した。

Aは禮を言つて其處を出た。これでもう安心だ。女に逢ふことも出來る。思ふまゝのことをすることも出來る。時間もまだ四十分以上ある。金も今借りた他に、さらひ廻して持つて來た金が十圓と少しある。女の爲めに——女の見物でもするといふ時の準備の觀覽券も持つて來てゐる。で、Aはすつかり安心して、電車の通る橋の方へと靜かに下りて行つた。

「しかし、突然やつて來るとは不思議だ。大勢してやつて來たんぢやないかしら……いや、そんなことはあるまい。殊に終列車だ。一人で來たに相違ない。それにしても、思ひもかけないことがあるものだ」こんなことを思つて、Aは獨りで莞爾した。

空には遲く月が昇つて、それがきら／＼と谷の水に碎けてゐた。いつも見る景色だが、今夜は殊に美しく樂しくかれには思はれた。自分の同僚達がそんなことは夢にも知らずに冷めたく布團にくるまつて寢てゐる姿なども眼の前に浮んだ。かれは微笑した。

電車の停留場で、少し待ちかけたが、向ふから車が來たので、電車で、もしも人に逢つてはと思つて、かれはすぐそれを呼留めて乘つた。

（三）

遊覽者の絶えずやつて來る町は、まだ賑やかに灯にかゞやいてゐた。土産物を賣る店、繪葉書を賣る店、その間に雜つてゐる大きな旅館では、番頭や女中が一々聲を立てゝ通る客を呼び立てゝゐた。少し行つたところにある料理店には、藝者が褄を取つて、艶かしい姿をして入つて行つた。大蒲焼、御料理

と書いた丸い軒燈が見えたり、明るい格子戸の中で料理番がせつせと料理を拵えてゐるのが見えたりした。ある料理屋では三味線の音が賑かにした。

いくらか下りになつてゐる町の通は、停車場に向つて靡くかれの心を滿足させるほどの早さを車に持たせることが出來た。車は逸早く走つた。

月は明るく山裾の町にその光を放つてゐる。澄んだ鮮やかな美しい光を。一點の陰翳もない冴えた光を……。從つて一筋に靡き下つた町の家並は、濃い黑い影を地上にはつきりと落してゐる。やがて停車場の黑い杉森が近づいて來た。

着くや否、Aは車夫に賃錢を渡して、そのまゝ急いで停車場の中へ入つて行つた。Aは一番先に其處にかけてある時計に眼をやつた。

十分前である。

ほつと安心したが、つゞいてかれは停車場の構內を彼方此方を見廻した。見廻すのが怖いやうであるが、しかし其處に知つた顏のあるかないかを見廻はさずには置かれなかつた。幸ひにも其處にはAを知つてゐるものはなかつた。

ふと見ると、乘客は既にぞろぞろ切符を切つて貰つて、プラットフォムの方へと出て行つてゐる。Aは急いで、Booking office に行つて、K町までの切符を二枚買つた。

I町にしやうか、K町にしやうかとAは車の上で長い間考へて來た。I町なら、旅館にも料理屋にゝ知つてゐる家がある。向ふでは知らずに此方ばかりで知つてゐる家もある。それに町のさまにも明るい。

いつそＩ町にしやうか。それに近いにも近い……。しかしかれはすぐ思ひ返した。少し遠いが、丸で知らない縁故のない町の方が、かういふことをするには却つて好い。その方が興味がある。旅館や料理屋は何處にでもある。此の汽車のＫ町に着くのが、十時、まださう遲いと言ふほどもない。で、かれはＫ町に行くことにした。

すぐ切符を切らせやうとしたが、一枚の持主たるべきものがまだ來てゐないので、ちよつとかれは躊躇した。此處で上りの來るのを待つてゐても、間に合はないことはないと思つて見たが、兎に角自分だけ入つてゐやうと思つて、一枚切つて貰つて、プラツトフオムへと出た。此方側にゐる下りの汽車は、すでに完全に準備(したく)を整へて、上りが來たら、すぐ出るばかりになつてゐた。乘客の乘つてゐるのが車内の灯に明るく透いて見えた。

「しかし、好い鹽梅だツた。誰も知つたものがゐなくつて」

かうＡは思つた。

上りは容易にやつて來ない。時計は既に五分を經過した。

「下りは、上りが來ると、すぐ出るんでせうか。」

氣になり出したＡは訊いた。

「二三分間(あひだ)があります。」

「難有う。」

かう言つて、かれは矢張プラツトフオムに立つてゐた。

やがて夜の山氣を衝いて、上りのやつて來る氣勢がした。凄じい煤烟の音がする。つゞいて月の光に白く颺る烟が見える。大きな黑い汽車がやがて構内へと入つて來て、客車の中の大勢の乘客のチラチラと動いて行くのがかれの眼に映つた。

汽車の止ると共に、Aは急いで、殆ど驅けるやうにして、レールを渡つて、向ふ側に行つた。ぞろぞろと客は降りて來た。それをかれは一人一人見るやうにして進んで行つたが、丁度客車の中ほど位のところに來た時、「あゝ貴方」から聲をかけられて、振返ると、一つ手前の客車から、丸髷に結つた女が綺麗な白い顔を見せて、小さな信玄袋を持つて下車しやうとするところであつた。

何も言はずに、大勢の乘客の中を、わざと離れるやうにして、(上りの汽車の中にも知つてゐる人がゐるか知れなかつた)そのまゝ此方に歩いて來たが、レールを渡らうとする少し手前で、

「また、乘るんだよ。」

「まだ、汽車があるの。」

「いや、さうぢやないけれども、あとへ引返すんだよ。だつて、困るんだから、町ではすぐわかつちまうから。」

漸く女にも飲込めたらしく、

「さう?」

「まア、あとで詳しく話すから……あとについてお出で……」

「さうなの?」

レールを渡つて、上りの客の大勢出て行くところから少し離れた處に來た時、「兎に角、切符は貰つて置いたから、此の汽車に乘るんだ。」

女は狐につまゝれたやうな顏をしてゐたが、そのまゝAの言ふ通りに、下りの汽車の前に來て立つてゐた。Aはもう一枚の切符を改札に切つて貰つて、そのまゝ人目を遁れるやうにして、後部の方につけてある小さな二等客車の中へと入つた。あとから女がついて來た。

幸ひにも、遲い終列車の二等室には、誰も乘つてゐるものはなかつた。Aは女に席を與へてから、窓の處に顏を出して、誰も他に乘客が入つて來ないやうに、又は一刻も早く汽車が出て行くのを待つやうに、あたりに眼を配つて見てゐた。やがて口に當てられた助役の發車の汽笛は、かれにほつと呼吸をつかせた。

三

汽車が動き出してからは、Aは始めて女と話した。

「さうなの？　私、そんなぢやないと思つた。」

「だつて、本當に困るんだから……。そんなことが知れゝや、山でも一大事なんだから。氣の毒だけど、仕方がない。」

「私は好いけど、それぢや、貴方、御迷惑だつたのね。」

「いや、迷惑ぢやないけれどね。前に何とか手紙か何かで言つて吳れゝやよかつたんだ。あまりだしぬけだから。」

『急だつたわねえ、餘り……』かう言つて笑つて見せて、『でも、急に見物がしたくなつちやたんですもの』女は今日の午後、主人の姐さんと喧嘩をして、半日ふくれて、『構ふもんか、Nへでも行つて遊んで來てやれ。』かう思つて丸髷に結つて、『姐さん、一日二日出て來ますから』かう言つて何處へ行くとも言はずに出て來たことを思出した。Aと女とは一二年來逢つてゐた、Aが山の用で東京に出ると、いつでも二日や三日は屹度女の許に行つた。

Aも女も暫く默つた。

やがて女は、『何處まで行くの？ そして……』

『あとへ引返すのだよ。K町まで引返すのだよ。』

『K町ッて何方？』

『今、通つて來た處だよ、君が……』

『さう』と言つたが、女は失望したやうに、『ぢや、Nの見物は何うなつちやうの？ 見物は出來ない？』

『明日、また來て見物するやうにすれば好いさ。』

『さう？』

女には些つと腑に落ちぬらしかつた。

しかし汽車がI町近く行く時分には、女にもAの話がすつかりわかつてゐた。『考れや、それもさうだ。普通の人ぢやないんだから』などゝおかしく思つた。Aもいろいろな話をした。Aの被布姿と女の丸髷姿とは、誰れもゐない夜更の汽車の二等室に淋しく並んで見られた。Aは莞爾してゐた。『何うも矢張、

僕なんかの境遇では世間が煩さいもんだからね」かう申譯をするやうに言つた。

月が美しく車窓から照した。秋の晴れた夜は靜かで、過ぎて行く窓外のものは、すべて白い沈んだ霧に包まれて水か何ぞのやうに見えた。やがてI町の停車場が來た。

『さつき通つたとこね。』

『さう。』

かう輕くAは答へた。其處からも誰もかれ等の室に入つて來るものはなかつた。

Fの高原に來た時には、月は愈々廣く明るく車窓を照した。Aと女とは戀人同士か何かのやうにして並んで坐つてゐた。女は昔深く言ひ交して腕に入墨などしてそしてはかなく別れて行つた男のことなどを思ひ出してた。『何處にゐるだらう。臺灣か、それとも朝鮮か。相變らず浮氣をして女に騷がれてゐることだらう』などゝ思つた。普通ならば、男の方から手を出して、自由な口も利き、戯談の一つもするのであるけれども、――また誰も他に人のゐない客車の中では、何んなことでも仕やうと思へば出來ないことはないのであるけれども、まだ世馴れない、かうした女の經驗に乏しいAには、さういふことが出來ないばかりではなく、口を利くにもいくらか加減するやうなおどしさと愼しさとを持つてゐた。Aは唯かうした事實を不思議な心持で眺めた。

やがてK町の停車場が來た。

四

假令本當の戀人同士でなくとも、かうして夜更の停車場前の通を女と並んで歩くといふことは、Aに

は嬉しかつた。それに、誰も知つてゐる人のないK町に來たといふことも、かれに心安い感じを起させた。Aは女の手をソッと闇に握つた。

女はそのまゝにして、灯の多い方へ歩きながら、

「何處に行くの？」

「サア。」

「知つてるところはないの？」

「わざと知らない處に來たんだからね。」

「何處も知らないの？」

「町は知つてゐるけれど……旅館なんか泊つたことはない。」

かう言つたが、Aは言葉をついで、『それに、此處は町が遠い。本當の町のあるところまではまだ十五町ある。』

『困るわねえ。』

Aは停車場前をあちこちと見廻して、何處か好い處はないかと言ふやうな素振を見せた。

『停車場前なんか駄目ですよ。』

「さうかな。」

と言つて、『ぢや、町まで行かうかね。』

「町には、好い旅館はいくらもあるんでせう。」

「それはある。」

Aが何か考へてまだぐづぐづしてゐるので、『ぢや、さうしませうよ。』

で、其處にゐた車が二臺呼び寄せられた。

「何方へ？」

Aは何とか言はなければならない時期に達してゐるのを思つた。此時Aはふとかねて聞いてゐるS屋といふ料理屋兼帶の旅館のあることを思ひ出した。かうした場合には、普通の旅館よりも、料理屋兼帶の方が好いだらうと、突嗟の間に思附いたかれは、

「ぢや、S屋ッて言ふのがあるね。」

「石町の……」

「さうだ。」

『おい、S屋だとよ……』車夫は後れて寄つて來た他の一臺の車に言つた。

二臺の車はやがて揃つて駛り出した。女が先に、Aがその後について……。Aの眼には女の丸髷が闇の中に輕く微かに動いて行くのが見えた。Aの胸にはかうしためづらしい事實と、秘密と、いくらかの不安との底に、淡い得意な樂しい氣分の漲つて來るのを感じた。ふと、明後日から始まる三千禮のことなどが不調和に浮んで來た。

それに引替へて、女には、自分から思ひ立つて來たとは言へ、まだ他にもう一つの理由があつたとは言へ、わざわざ行つたN町から引返して、かういふ町に來たといふことが、いくらかつまらなくもあり

又さびしくもあつた。女は姐さんの返事も待たずにさつさと平氣で出て來たことを頭に繰返した。朋輩の玉子が心配して、『これからN町？　もう遲いわよ。明日になさいよ』かう心配して言つて呉れたことなども思ひ出されて來た。

しかし暗い田圃の中は、さう長い間ではなかつた。女はやがて明るい灯のチラチラ其前に近いて來るのを見た。やがて車は大きな賑やかな町へと入つて行つた。

町の家並の間をかなりに通つて來たと思ふ頃、大きな明るい二階屋の、ドンチヤン騷いでゐる室の此方に、松の生えた門の入口があつて、そこに車夫は勢好く車を引込んで行つた。

「入らつしやい。」

かう迎へる聲が賑やかに聞えた。

二人はやがてヤヽ離れた奥の一間に通された。かういふ旅館だけにそれと見て氣をきかしたのである。女はAに茶代の置き具合から女中の祝儀まで世話を燒いた。Aに取つては、山の中に儉約に暮したAに取つては、驚かるゝほど金に價値を置かない女の所謂振であつたが、さうかと言つて、Aは別にそれに口を挿まなかつた。かういふことは何うしても金のかゝることだと思つた。默つて女のするのに任せた。

いくらか毛の生えた丸い頭と、女の丸髷姿との障子に移つてゐるのが、中庭の栽込を隔てゝ、向ふの緣側から見えた。

其處でそれを見てゐた客は、出て來た女中を捉えて、

「えらいものを咬へ込んで來たね。何處の藝者だえ？」

笑ひながら小聲で囁くと、女中も低く口を押へるやうにして笑つて、『何處の藝者ですかねえ。』

「近所の人ぢやないかえ。これも」と客は頭を丸めて見せて、『フム……』

「東京から來たのか知れませんよ、女は？」

「これは」と又頭を丸めて見せて、「これはNかも知れないね。」

「さうよ、さうよ、乾度、下りで來たんだから。」

圖星といふやうに女中は言つた。

その女中が萬事A達の世話をした。果してNの山の僧であることも、女とAとの間にどれだけ距離があるといふことも、Aが何の位遊びに不馴れであるかといふことも、段々女中に飲み込めて來た。女中の眼に映つた女は好い藝者であつた。二十二三で、豊かな頬をしてゐて、小さいけれどダイアの指環などをはめてゐた。町の〆奴といふ藝者に似てゐて、それよりは數等上だなどゝ女中は思つた。例の通り膳が出て、酒肴が出て、Aの顔はぢき赧くなつた。やがて段々おとなしくしてゐなくなるAと、巧に男の心をひき寄せる女とを女中は見た。Nの山の僧で、女が東京の藝者であることは今ではすつかり明かになつた。後には女もAも平氣で東京の話やらNの話やらをした。

三味線が持つて來られて、『さア』などゝ言つて女が彈いて見せても、Aは『駄目だ、駄目だ、僕には駄目だ』と言つて一度もそれに唄を合はせなかつた。曾て東京で女が敎へたらしい唄を彈いても、女中の其處にゐる間は、Aはきまりがわるさうにして決して唄はなかつた。

やがて十二時が鳴つたので、いよ〳〵二人はやすむことになつた。女中はかう言ふことには馴れてゐるのであるが、Aが僧形であるといふことが不思議にちよつと女中の氣に懸つた。女は無論このAには惚れてはゐない。それはその態度でわかる。しかしこの僧形であるといふことが、普通の男でないと言ふことが、女中には可笑しく思へた。それに、Aは何方かと言へば、若い時は美僧であつたらうと思はれる顏の端麗さと色の白さとを持つてゐた。

あくる朝は遲くまで、二人は起きなかつた。立つ客は立ち、朝仕舞は一通り片附き、朝日影げが高く軒にさすやうになつても、それでもまだその一間はそのまゝになつてゐた。それがまた女中の氣に懸つた。

女中は朋輩の女中に其話をした。

『すかない。此人は？　燒いてるんだよ、まア――』

かう朋輩の女中は笑ひながら言つた。

『さうぢやないけどもさ……氣になるアね。もう十時だよ。』

『若い坊主？』

『若くけないけれど、ちよつとした品の好い坊主だよ。Nだよ。』

『さう?』笑つて、『そんなに岡焼なんかするもんぢやないよ、體に毒だよ』トントンと向ふに駈けて行つた。

漸く二人が起きたのは、もう十一時に近かつた。女中が入つて行つた時には、Aは白羽二重の下衣を着て、上に借衣をはをらうとしてゐた。

『もう、遅いかい。』

Aは蒲團のわきに置いてある小形の金時計をちよつと見て、『ホ、もう十一時だ! 朝寢をした。』火鉢を持つて行つた時には、女が蒼白い顔をして頻りに亂れた髪を梳いてゐた。

湯殿の前で、女が先に、つゞいてAが顔を洗ひに行つた時には、さつきの朋輩の女中までが、用事の手をとゞめて、向ふからのぞきに來て、番の女中と顔を合せて笑つた。しかしAはそんなことは少しも知らずに、頻りに丸い頭を水で洗つた。

朝飯と午飯とを一緒にした。さうにして、その一間では、また酒が始まつた。もう昨夜のやうなてれた座敷ではなかつた。女の望みで、町の藤八といふ婆さん藝者と、定子といふ二十一二の藝者とが聘ばれて、三味線の音が湧くやうにした。Aはかなりに酒が强かつた。頻りに女達に酌をして貰つて飲んだ。後には幅でNの山の話などをした。

昨夜もさう思つたが、女中はその女の三味線の旨いのに感心せずには居られなかつた。流石は東京だと思つた。藤八も、『何うしても東京では藝を磨くからね。それに粋なものを知つてゐるからね』などゝ言つた。一座は賑かに面白く騒いだ。

今朝起きた時に、Aが汽車の時間をきくから、急いで歸るのかしらと思つたら——今日は何うしても歸るのだらうと思つたら、そんな樣子もなしに、騷ぎの中に日は暮れて、また夜になつた。町の藝者達の歸つた時には、Aはしたゝかに醉つて、丸い頭を搔卷の上に見せていぎたなく眠つてゐた。

餘り酒を飮まない女は、Aの寢込んで起きないのに一方ならず困つたといふ風にしてゐた。度々起しても、醉つたAは容易に起きなかつた。それでも女中が行つた時には、Aは起きてゐた。二人はこんな話をしてゐた。

「困つたな、明日は早くから用があるんだから、今夜は何うしても歸つて行かなくちやならないんだが……」

「だから、さつきから起したのに起きないんですもの。」

「何時と何時だえ。Nへは?」

「もう、六時のが出ましたから、こんどは終列車だけです。」

から女中は言つた。

「おや、歸るかな……」こんなことを言つて、Aは時計を見たり何かしてぐづぐづしてゐたが、今となつては仕方がない、もう一夜此處に泊つて行かうかといふ腹らしかつた。女は又女で早く町に行きたいらしく、何となく泊るのがいやらしく、いくらかツンケンした口の利き方をしてゐた。しかし女中がその次に入つて來た時には、愈々泊るときまつたらしく、Aは元氣よく女中に戯談などを言ひかけた。女も仕方がないと思つたらしかつた。

で、二人は其夜も其處に泊つた。そしてあくる朝は、朝飯も食はずに、昨日からの勘定をすませて、Aだけ一人六時の一番で立つことにした。『何うしても、八時には用があるんだから…　僕がゐなくつちや困るんだから……』かう言つて、かれは急いで出かける支度をした。Aは今は一刻も早く、かうした境から遁れなければ、一身の破滅だとさへ思つてゐた。Aはそゝくさと其處を出た。女は長襦袢に伊達卷姿で、廊下のところまで送つて來てそして別れた。

五

Aの立つた後で、女はゆつくりとして、金盥に湯を貰つて、髮を撫でつけたり、髮の具合を大きな鏡に映して見たり、襟のところに長くかゝつて白粉をつけたりした。『大變に世話になつたから』と言つて別に一圓紙に包んで女にやつたりした。

やがて女中の運んで來る朝飯の膳に、女はおうと落着いて坐つた。女は藝者の話をしたり東京の話をしたりした。Aのゐる中とゐなくなつてからでは、女中に對する女の態度は丸で變つて落附いてゐた。

『さうですか、此處では祝儀といふものが藝者にないんですか。それでは何うしても時間でかせがなくつちやなりませんね。何うしても田舍ではさうなりますね。東京では時間なんか、何うでも好い位なもんですけども……』などゝ言つた。

それからK町とその附近の話なども聞いた。麻の主產地で日本でも名高い町だといふことを女中が話してきかせた時には、『さうですか、それぢや賑かな筈ですね。今朝聞えた汽笛は汽車のとは違ふと思つたら、それぢや、その麻の工場のですね。』

「えゝ、さうですの。」
「大きな工場ですか。」
「中々大きう御座いますよ。」
「おや、蚊帳なんかも出來るんですか。」
「蚊帳は何うですか？」
暫くして、話を更へて、
「近所に、見物するところはありませんか。」
「この町ですか。この町では、さア、別に東京の人が來て御見物になるやうなところも御座いませんね。山に入ると、Oだの、Kだのッて名高いお山や何かゞ御座いますけれど……」
「遠いんですか。」
「Oまで五里か六里……」
「おゝ、大變……」
から言つて女は笑つた。
女は玉子燒だの汁だのを菜に、朝飯の箸を取つてゐたが、急に、
「それはさうと、N町に、精銅所ッていふ處が御座いますか。」
「御座います。」
「町からぢきですか。」

「町からは三里位離れてをりますけれど、電車が御座いますから、わけは御座いません。」

「ぢや、お山の方とは違ふ方にあるのですね。」

「お山は町のすぐ傍ですけども、精銅所はTの湖やKの瀧のある方へ行く途中になつてをりますから。」

「あゝ、さうですか」ちよつと途切れて、「電車は汽車からすぐつゞいてゐるのですか。」

「すぐで御座います」女中はかう言つて「いづれ、御案内があるんでせうから。」

「え、先に歸つて待つてゐるッて言つて行きましたけれど……生憎、今日は手離されない用があるッて言ッてゐましたから。」

で、朝飯をすましてからも、猶ほゆつくりと落附いて、三番の汽車の來るまで待つて、車で女は停車場へと行つた。昨夜亂れた丸髷は、結立のやうに綺麗になつて、行かふ人々の眼を惹いた。

女はN町からT湖の方まで見物する費用を今朝Aから十分に貰つた。Aがわざわざ心にかけて持つて來たお宮の觀覽券も貰つた。女はいろいろなことを思ひ出した。山で僧達が妻帶する話が始つてゐることも聞けば、今日かれの勤める三千禮といふ儀式の話も聞いた。「それは大變ですね。朝から晩までざつと三日かゝるんですか。佛様の名を三千度……隨分大變ですね」などゝも言つた。女は其の儀式の行はれる大きな本堂の所在地なども聞いて、「ぢや、明日ソッと私もお參りしますからね。」

「だッて、困るよ、わかつちや――」

「わかるやうになんかしやしませんよ。大丈夫ですよ。」

「まア、來て吳れない方が好いね。」

「だッて、何うせ、見物に行くんですもの。」

見物の金にと言つて、Aが十圓札と五圓札とを出したのを、「あと、五圓を、も一枚頂戴」かう言つて女は貰つた。Aの財布はそれで大抵空になつてゐた。

女がN停車場から電車で、橋の傍の大きな名高い旅館の前に來て下りて、「入らしやい」と迎へられて入つて行つたのは、もうかれ是正午近かつた。晝の御飯を召上つてからと言はれたが、平生二三時頃に午飯を食ふ習慣をつけてゐて、まだお中が少しも減つてゐないので、そのまゝ一人でお宮の見物にと出かけた。

美しい谷川と朱塗の橋とが、長い間かの女を其處に佇立ませた。人々は皆なその姿とサッと開いた派手な蝙蝠傘とを振り返つて見て行つた。紅葉にはまだ早いが、山はいくらか薄く色附いて、奥深く白い雲のかゝつた碧い山の見えるのもめづらしかつた。女は靜かに大きな杉のこんもりと茂つたごろごろした石の舗しいある長い阪を一歩一歩登つて行つた。

黑い法衣を着た若い僧が二人づれで上から下りて來た。A院は何處かと餘程訊いて見やうと思つたけれど、思ひ返してよした。すれ違ふ時若い僧達は此方を見て何か噂しながら通つて行つた。

一人は美しい若い僧だつた。

阪を上り切ると、綺麗な水が流れてゐた。手で掬んでも飲みたいやうな水である。やがてG院と言ふ大きな瀟洒な寺が右に見え出して來た。

かう言ふお寺に、あゝいふAのやうな僧が住んでゐるのだと思ふと、女にはおかしく思へた。初めて

この山に來た身でありながら、さうした寺院の僧の生活を奥深く知つてゐる自分といふことも、不思議に思はれた。勿論、AはこのG院などよりは、ぐつと位置も低いし、年も若いのであらうけれど、昨夜の話に由ると、かういふ綺麗な寺に住んでゐる僧達も、矢張妻帶といふことに就いて大騒ぎをしてゐるのであつた。「女のことなんか、少しも知らない人達が住んでゐるんだ」かう思ふと、女は噴出したいやうな氣がした。

觀覽券取扱所といふ札が突當りの處にかゝつてゐるのが眼に附いたが、Aに訊いて知つてゐるし、それに觀覽券も特別のを持つてゐるので、其方には行かずに、綺麗な心持の好い掃除の行き届いた道を左へと取つた。

お宮參拜の人達がぞろぞろと向ふからやつて來た。

K院、S院などゝいふ寺がつゞいた。皆な立派な寺である。門なども大きなものである。花の時は見事であらうと思はれるやうな大きなしだれ櫻などが門の中にあつた。右側には綺麗な水が溝を成して流れてゐて、その上が芝の塲で、又その上が長い塀で、更にその上から大きな寺の庭らしい栽込の槇や椿が高く見えてゐた。

N院、I院、A院の前に來て、ぴたりと女の足は留つた。

「此處だ。」

女は微笑した。

それもかなりの寺であつた。S院、G院、K院などに比べては小さいけれど、その半分位しかないけ

れど、それでも黒塀の大きな門は兩方に開いて、舗石道は長く玄關へと通じてゐた。樹の多いいくらか黄葉した前庭には、小鳥が好い聲で囀つてゐた。

誰もゐないので、女は覗くやうにして見た。玄關の此方に室があつて、そこに小さな窓がある。……そこに明るく日が當つてゐる。……ふと昨夜Aの言つたことを女は思ひ出した。『妻帶が出來るやうになつたら、來て呉れるかえ？　本當かえ、本當にさうかえ？』からAは嬉しさうに言つた。女はおかしくなつて獨りで笑つた。好い寺ではあるけれど――かういふところにゐたらせいせいして好いだらうけれど、まだ坊さんの上さんになつて後生を願ふには早いと思つてまた笑つた。『寺で一日三味線でも彈いてゐたら、何うだらう？』などゝも思つた。愈々可笑しくなつた。

やがて路は曲つた。今度は一層廣々とした綺麗な通りで、大きな杉のこんもりと茂つた奥に、ピカピカ日に光る金碧の堂宇が見えた。

『あれがお宮！』

かうかの女は思つた。

ふとAの言つたことを思ひ出した。その金ピカのお宮の手前にある大きな門から入る筈である。そこから入ると、Aが三千禮といふ骨の折れる儀式をやつてゐる大きな本堂に行ける筈である。かう思つたが五六間歩いたかの女は、果して左に大きな門の高く聳えてゐるのを認めた。

參拜者が絕えずし出入してゐるので、かの女も平氣でその中に入つて行つた。Aの毎日ゐるところは、その右の方だと聞いてゐるので、『あそこいらかしらん』などゝ思つて、その向ふにある小さな杉の木立

のある黒塀の方を見た。そこからはAが終日女のことばかり考へて事務を執つてゐる室の窓が見えた。ふと左を見た女は、其處に大きな殿堂の巍然として聳えてゐるのを見た。氣が附くと、讀經の聲が洩くやうにその中からきこえて來てゐた。

香烟があたりに滿ちた。

參拜者の大勢入つて行く後について、かの女はずんずんその大きな殿堂の方へと行つた。讀經の聲は爽やかに鮮かに聞えて來た。法衣を着た僧達が其處にも此處にも歩いてゐた。

大勢の後について、堂宇の中に入つて行つたかの女の眼には、夥しい香烟の中に、蠟燭の灯やら金ピカの佛具やら燦爛とした須彌壇やらが一時は目も眩ゆいばかりにかゞやいてゐるのが映つた。そして十二三人近くの僧が、いづれも黄ばんだ法衣を着て、揃つて、佛名を念じて、その度毎に秩序よく禮拜の袖をひるがへしてゐるのを見た。

讀經、禮拜の揃つた聲は、崇嚴に、ひろい大きい穹窿に似た殿堂の中に一面にひろがつてきかれた。女は最初に賽錢箱の置いてある本尊に正面に向つた處に行つて、帶の間から小さい財布を出して、賽錢を投げて、そしてあたりの崇嚴な光景に打たれたといふやうにして、手を合せて長い間祈念した。この時には、A院の前で起したをかしいと思つた心持などは少しもなかつた。

僧達は佛名を一つ唱へると、それにつゞいて、長い節のついた聲で讀經して、そして揃つて禮拜した。それがいかにも整正な崇嚴な感じをあたりに漲らせた。

最初はAが何處にゐるかを女は認めることが出來なかつたが、暫くすると、その一番前の列の先頭に

ゐて、音頭を取るやうにしてゐるのがAであるのがやがてわかつた。女はAが大勢の僧達の中で殊に上位に位置してゐるのを得意なやうな心持で見た。

暫く女は其處に立つてゐた。さながらその崇厳な儀式に心を奪はれたやうに、又はその讀經の聲に魂をさそはれたやうにして……。しかし、暫くして再び歩き出したかの女は、今度はAの位置から此方の見える方に向つて靜かに歩を移して行つた。

Aは確かにかの女の衣の裾を見たに相違なかつた。Aはちらりと此方を見た。しかしその眼はすぐ本尊の方に移つて行つた。

禮拜が絶えず繰返された。

六

其處から出て、女は普通の參拜者と同じやうにして、そのお宮の見物をつゞけた。眼も眩するばかりの金碧、彫刻を鏤めた樓門、燦爛として金色のかゞやく拜殿、そこからそこへと靜かに女の姿は動いて行つた。女は殿堂から殿堂へと見物して行つた。

女が見物をすまして、長い坂から橋の袂へ出て、旅館へと歸つて來たのは、二時間ほど經つてからであつた。『あゝ疲れた！』から言つてかの女はぐつたりした。

A院の噂などを女は女中に聞いたりしてゐたが、ふと、『精銅所へは電話が通じるでせうか。』

『えゝ通じます。』

『精銅所にMさんと言ふ方がゐますね。』

『え、いらつしやいます。技術長か何かなすつてゐらつしやる方?』

『さうさう』かう言つたが、『ちよつと電話をかけたいんですがね。』

『かしこまりました。此方は何方さまで。』

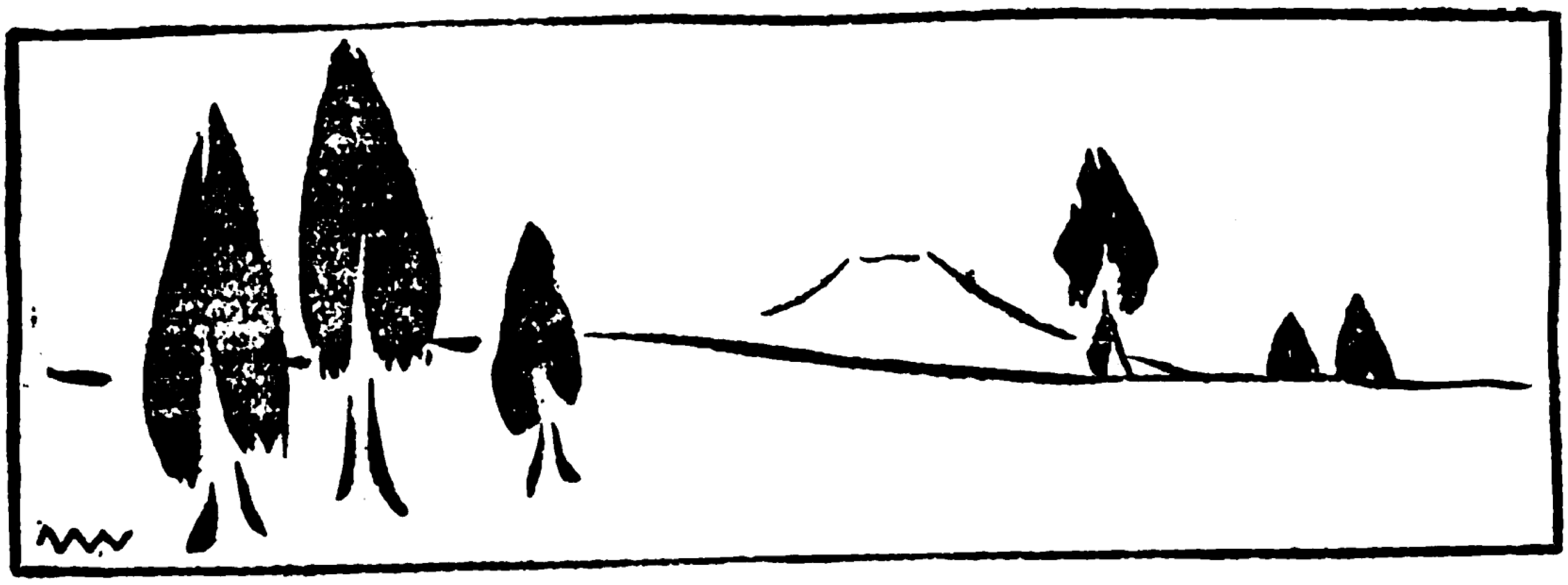
『くにと言へばわかるんですが。』

女中はすぐ飲込んだらしい顔をして出て行つたが、暫くして戻つて來て、『Mさんはちよつとお出かけになりましたさうですが、すぐ歸つて入らつしやるさうです。』

『さうですか。』女は女中の運んで來た午飯の箸を取りながら、湖の方へ行く路の距離だの、K瀧の附近だの、精銅所近所にも駕籠や車があるか何うかといふ話などを種々と訊いた。さう深い關係でもないけれど、行つたら必ず訪ねると豫ねて約束して置いた精銅所のMを訪ねて、女はこれからT湖の方を見物させて貰はうと思つた。都合によつたら、MとT湖附近に泊つても好いと思つた。で、午飯をすまして、少し休んで、それからもう一度電話をかけて貰ふと、好い鹽梅に、今度はゐて、Mが電話口に出たといふことであつた。かの女は急いで大きな階梯を下りて、店の隅のところにある電話室の中へと入つて行つた。

すぐMの馴れた聲を耳にした。かの女は、『わかつて? 私? わかるでせう。今、來たのよ……え、一人ですとも……お宮だけ見物したんですが……これから貴方の方へ行つて好う御座んすか、忙しい? 忙しいたつて、わざわざ來たんですもの、好いでせう。T湖へ一晩ぐらゐ……ぢや、ね、車で行きませ

うか。ええ？ええ？矢張電車の方が好い。……ぢや、精銅所前まで迎へに來てゐて下さるわねえ……。」



菊見

徳田秋聲

「今日は一つN——山のお墓へまゐつて、歸りに菊でも觀て來やう。」

第二番目の兄が言出したのは、午前にお葬式をすまして、午後から夜へかけて初七日の供養をするはづになつてゐる或日の午後であつた。

私は母の訃を得て、私に一日先だつて大阪からやつて來てゐた長兄と一緒に、次兄の家に來てから、今日でもう六日になつた。私たちは昨日初めて繩張を釋かれた、母の病死の家を訪ね、てそこで隔離所から解放されて來た姉たちや、母の死ぬまでゐた其の家の若い主人夫婦などに逢ふことができたのであつたが、來てから三四日のあひだ、私達三人の兄弟は、近年手をいれたばかりの次兄の家の座敷に鼎座して、葬式や初七日の打合せに來る甥や、弔みに來る人たちに逢ふほか、ちやうど偶然に溫泉宿で落合つたものか何ぞのやうに、毎日々々無駄話に體屈な時間を消してゐた。

私は時々公務で旅に出る序に東京へやつて來る次兄に逢ふ機會があつたが、長兄に逢ふのは十五年ぶりであつた。話好きの長兄は近頃その養女に産れた孫の噂をよく口にしたが、維新前後のことを何かと云ふと話し出す故老のやうに、崩壞した封建政治の最後の幕がおちた時分に、その少年時代が過された長兄は私たちの正直な祖父や、遊蕩兒であつた其の弟の事などを、それからそれへと思出しては話してゐた。

「昔しの侍は君臣の分と云ふ觀念が强かつたのだな。又それがなかつた日には、あの時分の制度はすぐ崩れてしまふ。己たちの父などもやつぱり御奉公といふことが、深く頭にしみ込んでゐたものとみえて、或時祖父が——もうその頃は少し耄碌してゐたものと思はれるが——ある日の夕暮、無腰で門の前の溝にかゝつた橋のうへへぼんやり立つてゐたのだ。するとそこへ父が歸つて來て、家へ入ると、いきなり武士たるものが無腰で表へ出るなどゝ云ふ、こんな情ないことはないと云つて、聲をあげて非常に泣いたものぢや。己は子供心にも、傍にゐられないくらゐだつた。祖父も爲方がないから、己が惡かつたといつて謝罪つてそれでやつと治つたことを覺えてゐる。

その祖父が死んだときには、その時分の法として檢視の士がやつて來る。多分家老か何かであつたと思ふが、それが君主の代表で少しばかりの供廻をつれて乘りこんで來ると、使者の室とか何とか云ふ部屋へ通して、それから死人の傍へ案内する。檢視がすむと父が、何のお役にもたゝないで死んで申譯がないと云ふ口上を述べる。疊のうへで死ぬのは、武士の本懷でないと云ふことになつてゐたのぢや。そこで檢視が、直ぐ書附を出して、父なら父へ知行相續と云ふことを言渡して引取るのぢや。作法がなかなか喧しいのぢや。」

「己たちの母が亡つたときが、ちやうど伏見鳥羽の戰爭前後であつたらうと思ふ、父はその時京都へ行つてをつた。母は産後の肥立がわるくて、どうも難しいと云ふことになつて、飛脚を京都へ立てると、父は家來に槍と挾箱をもたせて、夜どほしで歸つて來たのぢや。足がまたばかに速かつたもので、何でも二日ぐらゐで着いたやうに思ふ。母は父の顏を見ると、大變に泣いた。それで己の手をしつかり握つたまゝで目を落したのだが、父がその手を取つてくれたことをおぼえてをる。」

そんなやうな話が、際限なく長兄の口から出た。

「父の叔父にあたる作左衞門と云ふ人は、これはまた面白い人で、今でいふと才人肌のおそろしい享樂主義の人であつただけに、小說的な逸話が多い。

この人は參勤のをりなどには、人はみな刀劍とか書籍などを買つてくるのにも拘らず、自分は縞縮緬などを買つてくると云つた風の人で、遊蕩で爲方がなかつたが、辯才もあつた。或時人の妾を偸んで、それを葛籠のなかへ入れて町端まで連れ出すと、隣國へ逃げてしまつた。そこで或小藩の殿さまに取込んで經濟の才があつたところから、一藩の政治を改革して重く用ゐられたが、舊臣共から妬まれて、附狙はれたがため、先をこしてその相手を斬つて引揚げてしまつた。」

ディケーデントなその男の一代の逸話が、長兄の口によつて、芝居じみた不思議な浪漫を私の目の前に展げてくれた。

私たちは夜おそくまでそんな話に耽り倦んだ。次兄が近頃買込んだと云ふ畫幅なども見せられた。岸駒の蓬萊や、木庵の書などがその中にあつた。葬式や精進おとしがすむまでは、外出の憚られる私たち

三人は、座敷牢へでも押込められた人か何ぞのやうに、無聊な四五日を過しかねてゐた。私は時々夏以來手のつけられなかつた自分の仕事が氣にかゝつて來た。そしてそんな暢氣な話に聽ふけつてゐる間、私は時々苦しい焦燥を感じた。

一兩日前に、次兄の娶の實家から持込んでくれた幾鉢かの大輪の菊の花が、床脇と緣先の土間におかれて、淡紅色の花が、今朝は一層閑に亂れかゝつてゐた。庭の植込のなかに一際目に立つ錦木が、二三日の霜にめつきり濃さを增して、美しく澄わたつた秋晴の空に、蟲喰ひの啼聲の高く聞えるやうな日和が、毎日續いた。

城南にあるN――山へは、私は幼少のをり一度女の連中とつれだつて、秋の山遊びに行つた記憶があるだけであつた。私たちは幹の高い松の木蔭の美しい平地で、鬼ごつこをしたり、山の松林に分け入つて茸を搜したりした。中學時代にも、一度そこで運動會の催されたことが思出される。山を深く登ると、そこに魔所があつた。松林の奥ふかく茸を獲りすゝんで行く町の娘たちは、そこで仲間にはぐれて路を踏迷ふやうなことが多かつた。

「その茸を殘らず棄てよ。すれば私が道を敎へてやらう。」

白い髯を生した異樣の老人が、そこへ踏迷つて行つた少女の目の前に現はれた。そして素直に茸を棄てる少女を、舊の道へつれだすと、彼はそのまゝ姿を消した。そんな話が、私の耳にも殘つてゐた。

「ぢやぶら／＼歩いて行きませう。ちやうど天氣も可いし、散歩に渴えてゐますから。」私は言つた。

「なか／＼有るぞ。」次兄は言つた。

「どうして貴方、迚も歩いてなど行かれません。今お俥をさう申しつけました。」

長いあひだ年寄のお守をして、女の盛を過して來たやうな嫂は、もう五十に近い年になつても、まだ其の年寄の傍を離れることのできないやうな服從に習慣づけられて來た。其の有餘るやうな才が、良人の不在がちな家のなかを、箱をさしたやうに埋めて來た。子供のない彼女の寂しい心が、一二年前に迎へた養子夫婦に男の子ができてから、火が點れたやうな明さをもつて來た。年寄が老ぼけてからは、長く氷つてゐたやうな彼女の心が、初めてその自由を見出して來た。人の出入が多くなつて、世間との交渉が、彼女の單調な長い生涯に、生活の複雜さと興味とを添へて來た。

「東京へもどうか一度……。」

昨日も湯殿で、彼女が毎日私と一緒に入ることになつてゐる兄の背を流してゐるとき、私は物質上の自由に飽きたりてゐる彼女に言ひかけた。彼女が旅へ出たことを、私は一度も聞いたことがなかつた。芝居や寄席や料理屋などへも、足踏したことはなかつた。耳の遠い年寄に、彼女は何事をも相談しなければならなかつた。

「何うか一度行つて見たいと思つてをりますけれど、まだなか／＼でございます。」

彼女は答へた。彼女には生活の苦勞も歡樂もなかつた。惰い安全があるだけであつた

やがて女中が俥の來たことを知らせに來た。私たちは揃つて門を出た。

私たちの俥は幾箇かの町を通越すと、直に市の本通へ出て行つた。そして殆んど一直線に通つてゐる賑やかな其の大通を、西へ／＼と急いで行つた。その大通りを過ぎると、軈てＳ川に架つた大橋へ出て

來た。白けた廣い河原が、そこに現はれた。碧い水の色が冷く澄んでゐた。南の方に立駢んだ山の姿な寒さうにみえた。

俥はその橋を渡ると、道を左の方へ取つて寺町通へ差かゝつて行つた。寂しい廣いその通りに各宗の古刹が多く集つてゐた。長いあひだの風雨に晒された山門や、深い閑寂のなかに封された伽藍が、幾十となく嚴く聳え立つてゐた。暗い杉木立があつたり、竹藪があつたりした。臨濟や曹洞宗が多く私の目についた。

その通りは何處まで行つても盡きなかつた。山國のやうな蒼白い空氣が、日の目を見ないやうな森や古い建物のうへに彷徨つてゐた。私はいつかしら洋服の衿を立てゝ、首を悚めてゐた。

寺が盡きると、町端らしい人家がまた左右に現はれて來た。聯隊が別に新たらしく出來てから、それでも幾許か開けたらしく、安い飲食店や雜貨店が多く軒を並べてゐた。人家が疎らになると、蒼々した松山や、黄色い田圃が見えて來た。そして其のはづれの廣大な地面に、兵營の長い建物や、四角な建物が、ちらりほらりと見えはじめて來た。松並樹の兩側に低い門が幾町かの間隔をおいては幾箇となく立つてゐた。門のなかは、何處を見ても奇麗に手入れがされ、建物の窓の硝子に、秋の光線がちか〳〵と光つてゐた。それらの兵營の幾十かの建物が占めてゐる土地と空地とは、驚くべき廣さであつた。頽廢した寺院と、新興の兵舍との此の不思議な對照に、私は滑稽な興味を感じた。私がこゝへ來る途中汽車のなかで出逢つた新しい頭をもつた事業家の森屋の主人に言はせれば、この莫大な土地を占領してゐるそれらの古寺を殘らず潰して、代りに多くの煙突を打立てなければ、H―市の繁榮を望むことはでき

ゐのであつた。

兵營が盡きると、貧しい農家の藁屋が私たちの目に入つた。箕で穀物を篩つてゐる老婆や、流れで大根を洗つてゐる女があつたりした。此の邊へ散歩に出かけた中學生の姿も二人三人目についた。俥はそこから又右の方へ折れて行つた。鎭守の森を控えた往來の曲角に、「H―市墓地」と書いた大きな路標が立つてゐた。大藩の盛時を偲ばせるに足る廣大なN―山の墓地は、近頃市の所有に歸したものらしく思れた。

五六町も行くと、道の右側に七基の大きな墓石の立つてゐるのに目を惹かれた。島田一郎、杉本乙菊長連豪などと云ふ文字が、それに鏤りつけられてあつた。その埒に、多少の距離をおいて、神戶から代議士として選出さたことのある櫻井一久と云ふ人の大きな新しい墓標が聳えてゐた。

私たちは荒れ廢れて、がらんとした一つの休み茶屋の前に、俥からおろされた。野からは冬のやうな荒い風が吹きわたつて、外套を着ない私たちの皮膚は寒さに慄いてゐた。

「隨分ありますな。」

私は急いで火鉢の傍に寄りながら、莨に火をつけた。次兄が花や線香を注文してゐた。花のできるあひだ、私たちは出してくれた蒲團に腰かけて、暖かい番茶を啜つた。

「みんな若かつたんだな。」

長兄は手拭で水洟を拭きながら、七人組の暗殺者の墓石のある方を眺めてゐた。

「大抵二十二三の年輩だ。」次兄が言つた。

「惜しいことをしたもんぢやな。あの頃あの連中を教唆したものがあつたのぢや。H―などが何うも好くない奴であつたのぢやな。殺さんでも可かつたのぢや。」

長兄は感慨の深さうな聲で言つた。

四束ばかりの花ができると、車夫の一人がそれを持つて、墓地へ入つて行く私たちの後について來た。墓地は廣い土地の傾斜面を限りなく占めてゐた。私たちは松の木立の多いその傾斜面の間を登る一筋の坂路を、爪先あがりに歩いて行つた。右を向いても左を向いても、見渡すかぎり松の木立と墓石の排列であつた。維新前の年號が、多くそれらの墓石に刻まれてあつた。偶には明治年代のもあつた。

私たちは可成長い坂路を登つて行つたのち、やがて左の方へ折れて行つた。私は此の墓地を今まで一度も見たことがなかつた。

「好い墓地ですな。何萬坪あるでせう。」私は時々立どまつて、四邊を見わたした。

「こんな墓地は、どこへ行つてもありはせんわい。」長兄は笑ひながら言つた。

私たちは軈て、山茨や皂莢などの蔓り廣がつたなかを踏わけて、一ト傾斜上の小徑へ登つて行つた。そして四五町のあひだを其方此方搜してあるいてゐるうちに、私たちの先祖の藩主であつたY―男爵家の墓所の前へ來た。築地を繞らしたその墳域のなかに、見あげるやうな墓石が築きあげた土のうへ幾つも聳えてゐた。兄たちは墓石によつて、その人達を知ることが出來た。Y―男爵家と、その分家との經營にかゝる事業にたづさはつてゐる次兄は、十年ほど前に亡つた男爵の墓に花をあげたり、線香を燻べたりしてから、恭しく禮した。長兄も續いて、帽子を取つて恭しく禮拝した。墓石の前に佇んだ私も、

拗執な自分自身の理由で、默禮した。

近頃續いて亡つた、Y—家の分家の主人の墓域は、そこから二三町の距離にあつた。石造の柵で圍はれた、その墓域は、男爵家のそれから見ると、幾層倍の廣さだか知れなかつた。それが上と下とに區劃されて、石段を登つた高地の左に、Y—家の事業の創始者であつた主人の墓所が設へられてあつた。墓は今建造中であつた。高く盛られた土壤の背後に、三丈ばかりの角い塔婆が、聳え立つてゐた。つい近頃逝いたばかりの夫人の墓所がその左側に築かれてあつた。幾十本の卒塔婆が、土饅頭のうへに、規則正しく排列されてあつた。簀の子の屋根が、それを蔽ふてゐた。墓の四周には、色々の人たちから供へた常磐木が植ゑつけられた。中にはO—伯の寄贈にかゝるものもあつた。

「おそろしい立派なものぢやな。」長兄は禮拜をすますと、廣い墓域を見渡した。

「豐臣秀吉の墓地が、この位のものぢやらうか。」長兄は、さうも呟いた。

直に、私たちは出來あがつたばかりの石門から出た。門の外の傾斜面に、石材が夥しく積まれて、石工や人夫が名々その仕事に働いてゐた。石工の頭がそのなかゝら出て來て、恭しく次兄に挨拶した。

「山岡は來ないかい。」

次兄は別れぎわに頭に聲かけた。山岡と云ふのは、私たちの從姉妹の一人の子息であつた。彼は此の工事の技手として、石工のうへに働いてゐた。

「今日はお見えになりません。多分事務所の方にお出でございませう。」

私たちは初めとは別の道から降りて來た。兄たちは時々道傍の墓の前に立停つた。昔し知つて居た人

が、思ひがけないところで、土になつてゐたりした。その頃の人たちの消息や、噂が、それからそれへと話された。この人達の前にあつては、私はまだ／＼若かつた。

　Y I分家の主人の墓の臺座になる石が二箇、人夫達によつて運ばれるのに、私たちは途中であつた。二つの石から成立つた一間四方ばかりのその臺石は、上方あたりから取寄せたらしい、優れた質の御影であつた。人夫たちは景氣のいゝ掛聲をかけて、槓杆仕掛で、ぼつ／＼それを引揚げて行つた。

　それから二三丁ゆくと、人夫たちの掛聲がまた聞えて來た。墓の笠になるべき石が、運ばれるのであつた。

「素破らしいもんぢやな。」長兄はさう言つて、その傍に立どまつた。

「御本家のお墓から見ると、比較にならんほど立派なものぢやないか。」

　そこを離れてから、長兄は途々言つた。

「御分家のR―さんは、都て御本家を凌ぐことがお嫌ひであつたのぢや。」

「功績から見て爲るのだから……。」次兄はさう言つて、さつさつと道を急いだ。

「子孫が、祖先の墓を守ることができないといふやうなことになると、困りものなのぢや。誰か少し言ふと宜しいのぢやが、みんなまだお若いから萬事盛大にやるのも可からうわい。」

　私たちはやがて、墓地を辭した。そして茶屋で一と休みしてから、また寒い道を俥にゆられて歸つた。

　寺町まで來たとき、私たちの俥はふと右へ折れて、狹い通りを曲り辿つて行つた。去年一度私が見せてもらつたことのあるY―兩家の、新らしい別莊と庭園とが、そこに在つた。縱覽を許された菊を觀る

人たちが、門の脇に新しく作つた入口にごたごたしてゐるのが見受けられた。私たちは此處の別莊守をしてゐるI—氏の住居について、ちよつと聲をかけると、軈て庭の方へまはつて行つた。そして木立際の道をぬけると、綠色の天鵞絨を敷つめたやうな廣い芝生へ出て來た。高臺にあるその庭からは、うねり曲つて流れて川が、一ト目に見渡された。飛驒境の山脈が、遠く晴れた空に淡蒼く重りあつて、白い水がその裾から流れて來るやうに見えた。そしてその山と川との廣い自然の姿を背景として、庭園が作られてあつた。ずつと退つて、新しい大きな建物が、聳え立つてゐた。菊はその建物の右側にあたる一區劃の縄張のうちにあつた。一坪あまりに枝をひろげた見事な菊の大鉢が、幾つとなく駢んでゐた。一株から枝葉を打つた其の花は、莖の長さが夷かな傘形を形づくるほどに長短揃つてゐた。草木を驅使する菊作の手練がそこに現はれてゐた。別の一棟には、菊の王者とみえる大輪が、日月のごとく耀いてゐた。

「この菊作りは、他に求められない。月々三十づゝ貰つて、年中かゝつてゐるのだ。」次兄が話した。

やがて私たちはI—氏に案内されて、新築の別莊を見ることが出來た。三十疊ばかりの青疊に、塵も留めないやうな典雅な廣間が二階にあつた。そこの廊縁からは、遠い山の翠黛と、長い水の流れとが、一層の廣さと雄大さとをもつて、一ト目に見わたされた。

私たちは小室ごとの床の軸などを見てあるいた。下には閑寂な茶室があつたりした。やがて舊の座敷へ還つて、I—氏の夫人が侑めてくれる茶に咽喉を潤はした。床に木米の十六羅漢の托鉢がかゝつてゐた。長く京都に教鞭を執つてゐたI—氏自身の所有だと云ふのであつた。

「木米のこんな大きいものは、珍らしうございます。木米なら此他にも少し有つてゐますが……。」彼は言つて、手近にあつた木米の書お手本を見せてくれたりした。

私たちは、直にそこを出た。そして橋で聯ねられた本當の庭園の方へ渡つて行つた。四條派の畫にでもあるやうな、丸みと柔味とをもつた庭園の明媚な姿が、私たちの目を驚かした。私たちは遠くから引かれた水の湛えてゐる廣い池の汀の芝生をめぐつて、奥の方へ入つて行つた。岩組のあひだに幾曲折を見せて、池へ流れおちてる來水が、そこから出てゐた。

私たちは庭を横截つて、瀑の音の轟きわたる下の方へ、險しい路を降りて行つた。南畫風の景色が、到處に漂えられてあつた。私は深い林泉の際を縫つて、山を降りたり、溪間を辿つたりした。

「五百人やそこいらの園遊會ぢや、まるで寂しくて爲方がない。」次兄がそんなことを言つてゐた。今詣つて來た新らしい墓の下に眠つてゐる人の、最後の道樂として、この庭園に費さるべき二十萬圓の豫算が、まだ悉く使はれ切らずにあつた。

「御本家が生きてをられたら、嘸お悦びぢやらう。」長兄は嘆息するやうに見えた。

「これでも東京の庭園家に見せると、何だ彼だと非をつける。」次兄が言つた。

私たちは、しばらく丸い丘の上に寢ころんで、飽かず遠望を貪つてから、そこを出た。

遠くの木立には、もう夕靄が立迷ふてゐた。

歸つて來た三人は、湯からあがるとがつかり疲れてゐた。其晩私はよく眠つた。明日は早朝から葬式に立たなければならなかつた。

私は一日も早く解放される時の來るのを願つた。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區銀座三丁目	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮內立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝　間之町七條	大盛社

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金五圓四拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

廣告取次店

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、万年社、電通社、信賴社

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本鄕區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵劵代用　必ず一割增の事
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢（及送料共）
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正五年十二月二十五日印刷納本
大正六年一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話局下谷九一一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

特價金七拾五錢（郵稅金五錢）

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6.80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.
明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可

